静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第167集

森町円田丘陵の遺跡

第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

森町－2

古墳群形成前の円田丘陵

文殊堂遺跡
（第二東名No.113地点）

宇藤蓮台遺跡
（第二東名No.119地点）

フケ遺跡
（第二東名No.120地点）

林遺跡
（第二東名No.121～123地点）

2006

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

中日本高速道路株式会社 横浜支社

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第167集

森町円田丘陵の遺跡

第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

森町－2

古墳群形成前の円田丘陵

文殊堂遺跡
（第二東名No.113地点）

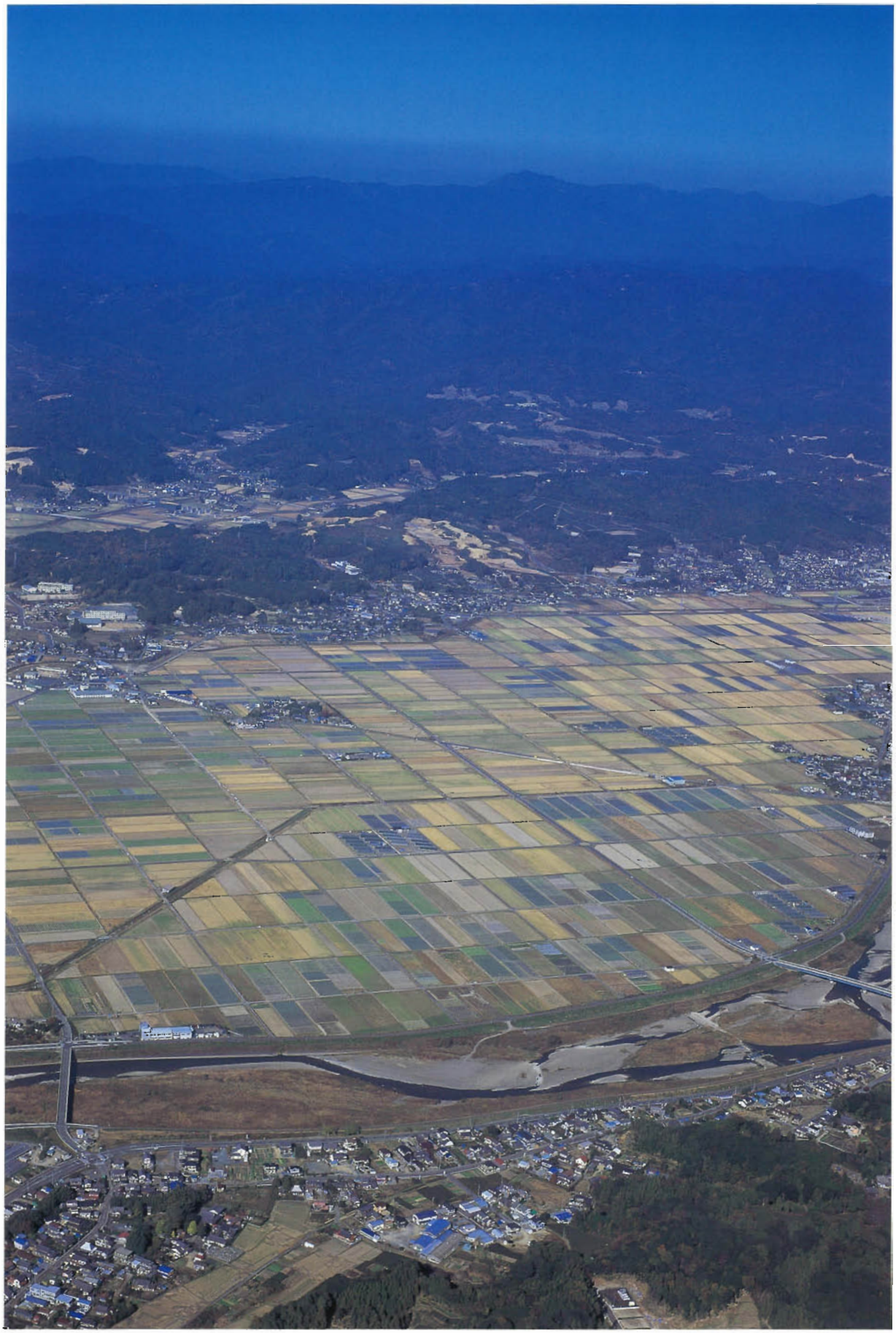
宇藤蓮台遺跡
（第二東名No.119地点）

フケ遺跡
（第二東名No.120地点）

林遺跡
（第二東名No.121～123地点）

2006

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所
中日本高速道路株式会社 横浜支社



太田川流域と円田丘陵（南東から）

巻頭図版 2

1　円田丘陵と太田川流域（北から）

2　円田丘陵の遺跡群（南東から）

文殊堂遺跡出土土器

巻頭図版 4

文殊堂遺跡 1 ・ 2 区の土器棺

文殊堂遺跡 3 区の土器棺

巻頭図版 6

フケ遺跡 3 ・ 4 区出土土器

フケ遺跡 3 ・ 4 区の土器棺

巻頭図版 8

文殊堂・フケ・林遺跡出土玉類・金属器

序

静岡県森町の天竜浜名湖鉄道円田駅の北側には、太田川流域と一宮川流域に挟まれた丘陵地が広がっていた。太田川流域に面した段丘上には集落や茶畑が広がり、その奥には、雑木林で占められた丘陵が展開していた。そこに、第二東名高速道路のパーキングエリアが計画され、広範囲にわたる発掘調査が実施されることになった。

かつてより、この丘陵上には古墳群の存在が知られ、鏡や金銅装馬具などが発見されていた。また、雑木林の中を分け入ると、所々に古墳を思わせる高まりや盗掘の痕跡をみることができた。それらは、多大な調査成果を期待させるのに十分なものであった。実際、文殊堂古墳群・宇藤蓮台古墳群・林古墳群では中期古墳15基と後期古墳５基を調査することになり、短甲などの注目される発見も含めて、有益な古墳群の調査資料を得るに至った。

さらに、古墳群が形成される前の弥生時代においても、この丘陵一帯が墓域として利用されていたことが判明した。やせた丘陵上の数ヶ所に分かれて、多くの土坑墓や土器棺墓による墓群が形成されていた。立地地形との関連も考慮されるが、方形周溝墓群が面的に展開する墓域とは様相を異にしている。その一方で、一般的に副葬品が少ない弥生時代の墓にあって、玉類や銅釧・鉄剣・鉄鏃といった副葬品の出土が認められており、遺構や土器のほかに、副葬品からの視点・分析も重視される。以上のように、古墳群形成前についても、当時の集団構造や地域的様相を探求する上で、重要な墓域の調査資料が得られたものと考える。

本書では、文殊堂遺跡・宇藤蓮台遺跡・フケ遺跡・林遺跡の調査報告書として、この古墳群形成前についての調査成果を報告する。ここに報告する調査成果が、様々な場面で大きな役割を果たすことを期待するものである。

現地調査および資料整理、本書の作成にあたり、中日本高速道路株式会社（旧日本道路公団）・静岡県教育委員会をはじめとする多くの関係諸機関各位にご援助、ご理解を得ている。この場をかりて深く感謝申しあげる次第である。また調査にご理解をいただいた地元の皆様、現地での発掘作業、地道な整理作業にあたられた方々に、この機会に厚くお礼申しあげたい。

平成18年３月

財団法人　静岡県埋蔵文化財調査研究所

所　長　斎藤　忠

例　言

1．本書は、静岡県森町円田・一宮に所在する下記の遺跡の発掘調査報告書である。なお、古墳群が重なる遺跡があるが、本書では古墳群形成前を対象として報告、古墳群形成以降は別書にて報告する。

文殊堂遺跡（第二東名No.113地点）：円田885他
宇藤蓮台遺跡（第二東名No.119地点）：円田953-2他
フケ遺跡（第二東名No.120地点）：円田1094-50他
林遺跡（第二東名No.121～123地点）：一宮4545-1他

2．第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書の作成は、地区（市町村）単位にて実施している。森地区では本書が2冊目であり、よって「第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書森町－2」とした。

3．調査は第二東名高速道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査として、中日本高速道路株式会社横浜支社（平成17年途中までは日本道路公団静岡建設局）の委託を受けて、静岡県教育委員会文化課の指導のもと、森町教育委員会の協力を得て、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が実施した。

4．現地調査・資料整理の期間と担当者は以下のとおりである。なお、調査体制は第2章に別記した。

文殊堂遺跡　確認調査：平成10年7月～8月　平野　徹、竹原一人、富樫孝志
本調査：平成11年4月～平成12年3月　篠原修二、西田光男、児玉　卓、溝口彰啓
平成12年4、平成13年2・3月　中村正宏、田村隆太郎

宇藤蓮台遺跡　確認調査：平成11年1月～2月　平野　徹、竹原一人
平成14年10月～11月　田村隆太郎
本調査：平成11年10月～12月　篠原修二、田村隆太郎
平成15年4月～6月　白鳥直樹、小木　充、河合　敦

フケ遺跡　確認調査：平成10年5月～6月　平野　徹、竹原一人
平成10年8月～9月　平野　徹、竹原一人、木崎道昭、梶葉良久
本調査：平成11年4月～6月　梶葉良久、佐藤　淳、丸杉俊一郎

林遺跡　確認調査：平成10年4月～5月　平野　徹、竹原一人、長尾一男、木崎道昭
平成10年9月～12月　平野　徹、竹原一人
本調査：平成11年6月～8月　長尾一男、佐藤　淳
平成12年2月～3月　篠原修二、児玉　卓
平成12年7月～平成13年2月　児玉　卓、柴田　睦、田村隆太郎

資料整理・報告書作成：平成13年4月～平成15年10月、平成16年2月～平成18年3月
田村　隆太郎

5．本書の執筆は、調査にあたった職員の所見をもとに、田村隆太郎が行った。

6．調査における助言・協力者は文末に、各調査で実施した委託事項および委託先は文中に記した。

7．現地の写真撮影は各調査担当者が実施した。航空写真の撮影は委託したものである。遺物の写真撮影は、当研究所写真室が実施した。

8．金属製遺物のクリーニング・保存処理は、当研究所保存処理室が実施した。

9．各調査の概要は、当研究所や他の刊行になる出版物で一部公表されているが、内容において本書と相違がある場合は本報告をもって訂正する。

10．本書の編集は、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所があたった。

11．発掘調査の資料は、すべて静岡県教育委員会が保管している。

凡　例

1．座標は、平面直角座標Ⅷ系を用いた国土座標、日本測地系（改正前）を使用している。

2．グリッドは、１の座標を用いて１辺10mの方眼を設定している。また、方位も１の座標による方位（座標北）を基準としている。

3．遺構の表記は、次のとおりである。

例）ＳＦ１５　（ＳＦ：遺構の種別　１５：遺跡内の遺構種類別とおし番号）

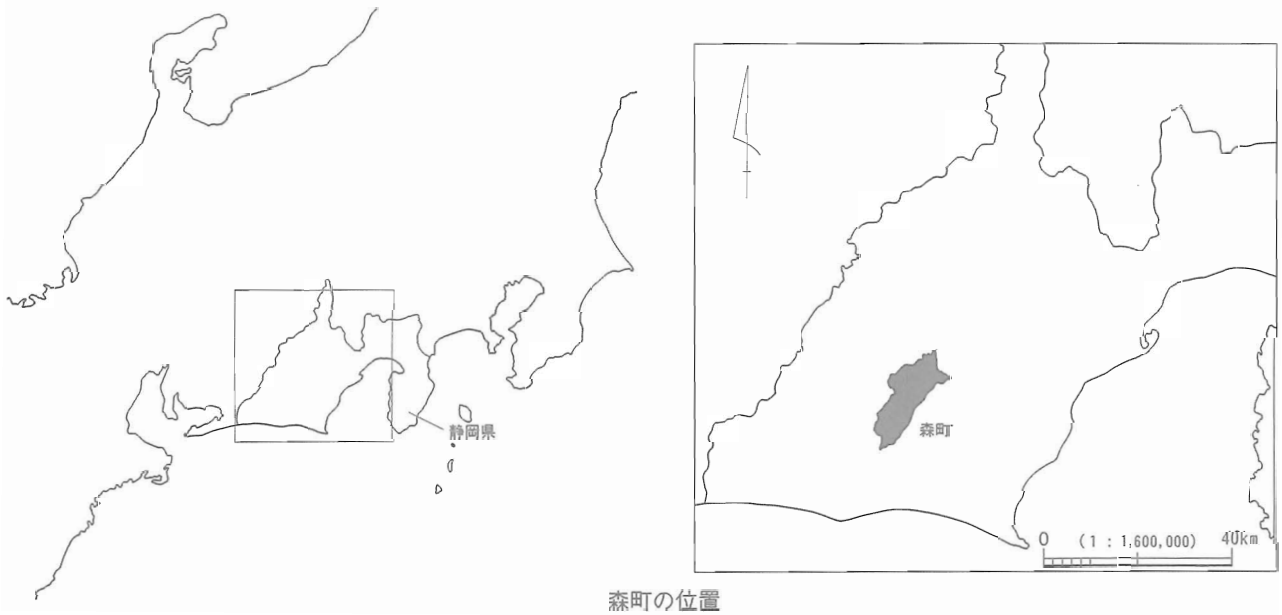
ＳＦ：土坑　　ＳＰ：小穴　　ＳＤ：溝　　ＳＸ：その他・不明遺構

4．遺構の分布によって、各遺跡の中を複数の遺構群（墓群）に分割している（○群）。さらに、区画溝を伴う墓群に対しては、○号周溝墓としている。いずれについても、番号は遺跡別のとおし番号を付している（遺構群：Ａ群～、周溝墓：１号～）。

5．遺物番号は、掲載遺物について種類・挿図の別に関わらず、遺跡ごとのとおし番号を付している。

6．観察表にある土色表記は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』（2000年版）に基づいている。

7．本書の図中に用いたスクリーントーンの使い分け等については、必要なものを各図の中で表記している。



森町の位置

目　次

巻頭図版／序／例言／凡例

第１章　調査に至る経緯 …… 1

第２章　調査の方法と経過 …… 2
第１節　調査の体制 …… 2
第２節　現地調査について …… 3
１．遺跡の範囲と調査区 …… 3
２．現地調査の方法と経過 …… 3
第３節　資料整理について …… 5

第３章　遺跡の位置と環境 …… 8
第１節　地理的環境 …… 8
第２節　歴史的環境 …… 8

第４章　文殊堂遺跡 …… 13
第１節　概要 …… 13
１．基本土層と検出地形 …… 13
２．調査区および遺構・遺物 …… 14
第２節　１区 …… 18
１．縄文時代の遺構 …… 19
２．Ａ群 …… 20
３．Ｂ群 …… 23
４．Ｃ群 …… 27
５．１区の出土遺物 …… 31
第３節　２区北部 …… 41
１．Ｄ・Ｅ群 …… 41
２．２区北部の出土遺物 …… 44
第４節　２区中央部 …… 45
１．Ｆ群 …… 46
２．Ｇ群 …… 50
３．２区中央部の出土遺物 …… 56
第５節　２区南部 …… 61
１．Ｈ群 …… 62
２．Ｉ群 …… 64
３．Ｊ群 …… 76
４．２区南部の出土遺物 …… 79
第６節　３区北部 …… 91
１．Ｋ・Ｌ・Ｍ群 …… 92
２．３区北部の出土遺物 …… 99
第７節　３区中央・南部 …… 104
１．Ｎ・Ｏ・Ｐ群（３区中央部） …… 104
２．Ｑ・Ｒ群（３区南部） …… 113
３．３区中央・南部の出土遺物 …… 119

第５章　宇藤蓮台遺跡 …… 131
第１節　概要 …… 131
第２節　出土遺物 …… 132

第６章　フケ遺跡 …… 133
第１節　概要 …… 133
１．基本土層と検出地形 …… 133
２．調査区および遺構・遺物 …… 133
第２節　３区 …… 135
１．H群 …… 135
２．Ｉ群 …… 146
３．３区の出土遺物 …… 151
第３節　４区 …… 160
１．Ｊ群 …… 161
２．K群 …… 165
３．Ｌ郡 …… 167
４．４区の出土遺物 …… 168
第４節　５区 …… 173
第７章　林遺跡 …… 175
第１節　概要 …… 175
１．基本土層と検出地形 …… 175
２．調査区および遺構・遺物 …… 177
第２節　１区 …… 178
１．A群 …… 178
２．B群 …… 182
第３節　２区 …… 184
１．C群 …… 184
２．２区の出土遺物 …… 186
第４節　３区 …… 187
１．D・E群 …… 187
２．３区の出土遺物 …… 194
第５節　４区 …… 195
１．F群 …… 195
２．G群 …… 203
３．４区の出土遺物 …… 205
第８章　まとめ …… 209
第１節　弥生時代における墓域の展開 …… 209
１．墓群の種類と時期 …… 209
２．墓域の形成過程 …… 214
第２節　弥生墓群の諸属性 …… 217
１．土坑墓について …… 217
２．土器棺墓について …… 221
３．供献土器による評価 …… 223
４．副葬品による評価 …… 225
第３節　結語 …… 231
参考文献
写真図版
抄　録

図版目次

巻頭図版

巻頭図版１　太田川流域と円田丘陵（南東から）
巻頭図版２　１　円田丘陵と太田川流域（北から）
　　２　円田丘陵の遺跡群（南東から）
巻頭図版３　文殊堂遺跡出土土器
巻頭図版４　文殊堂遺跡１・２区の土器棺
巻頭図版５　文殊堂遺跡３区の土器棺
巻頭図版６　フケ遺跡３・４区出土土器
巻頭図版７　フケ遺跡３・４区の土器棺
巻頭図版８　文殊堂・フケ・林遺跡出土玉類・金属器

写真図版

図版１　遺跡群遠景（北から）

文殊堂遺跡

図版２　１　遺跡群全景（南東から）
　　２　文殊堂遺跡全景（東から）
図版３　１　１区全景（南東から）
　　２　SF10（南から）
　　３　SF11（西から）
図版４　１　SF12（南西から）
　　２　SF01・SF02（南東から）
　　３　SF04～SF06（西から）
　　４　SF03（西から）
　　５　SF07（南東から）
図版５　１　SF08土器棺墓（北東から）
　　２　SF09土器棺墓（南東から）
　　３　B群：１号周溝墓（南西から）
　　４　SF13土器出土状況（南西から）
　　５　SD02土器出土状況（北から）
図版６　１　SF13（南から）
　　２　SF14（東から）
　　３　SF15（西から）
　　４　SF16（南から）
　　５　SF17（南西から）
　　６　SF18土器棺墓（東から）
図版７　１　C群：２号周溝墓（西から）
　　２　SD03土器出土状況１（東から）
　　３　SD03土器出土状況２（南から）
　　４　SF23土器出土状況（北から）
図版８　１　SF20～SF22（南西から）
　　２　SF23鉄剣出土状況（西から）
　　３　SF19（南西から）
　　４　SF23（南西から）
　　５　SF24（南西から）
　　６　SF25（北から）
図版９　１　１・２区全景（南から）
　　２　D群（南から）
　　３　SF26（南から）
　　４　SF27・SF28（南から）
　　５　SF30（南西から）
図版10　１　F群（北から）
　　２　G群（北から）
図版11　１　SF31（北西から）
　　２　SF32（北西から）
　　３　SF33・SX01（北から）
　　４　SF34（南から）
　　５　SF35（南西から）
　　６　SF37～SF39（南西から）
図版12　１　SF40（北から）
　　２　SF41（南西から）
　　３　SF43（西から）
　　４　SF42（南西から）
　　５　SF44（北西から）
　　６　SF45・SF46（北東から）
図版13　１　SF47（北西から）
　　２　SF48（北西から）
　　３　SF49土器棺墓（北西から）
　　４　SF50土器棺墓（北から）
　　５　SF51・SF52土器棺墓（北西から）
図版14　１　H・I・J群（南西から）
　　２　I群：３号周溝墓（北西から）
図版15　１　H・I・J群（北西から）
　　２　I群：３号周溝墓（西から）
図版16　１　SF54（南東から）
　　２　SF55（東から）
　　３　SF56（南東から）
　　４　SP04（南東から）
　　５　SD08（南東から）
　　６　SF57・SF58（南東から）
図版17　１　SD09（南東から）
　　２　SD09土器出土状況（東から）
　　３　SF62～SF64（東から）
　　４　SF60・SF61（西から）
　　５　SF65（北から）
図版18　１　SF66・SF67（北東から）
　　２　SF70（北東から）
　　３　SF66銅釧出土状況（北東から）
　　４　SF70鉄剣出土状況（東から）
図版19　１　SF59土器棺墓（南東から）
　　２　SF71土器棺墓（南西から）
　　３　SF72土器棺墓（南から）
　　４　SF73土器棺墓（北東から）
　　５　SF77・SD10・SD11（北東から）
　　６　SF77土器出土状況（北から）
図版20　１　SF77（南から）
　　２　SF80（南から）
　　３　SF78（西から）
　　４　SF79（南から）
　　５　J群：４号周溝墓（南西から）
図版21　１　３区全景（北西から）
　　２　K・L群：５・６号周溝墓（北西から）
図版22　１　K群：５号周溝墓（南西から）
　　２　SF82・SF83（北西から）
　　３　L群：６号周溝墓（南西から）
　　４　SF84（北東から）
　　５　SF88（南東から）
　　６　SF89（南東から）
図版23　１　SF85土器棺墓（南東から）
　　２　SF86土器棺墓（西から）
　　３　SF87土器棺墓（北から）
　　４　SF91土器棺墓（南から）
　　５　SF87土器棺墓（南から）
　　６　SF92土器棺墓（西から）
図版24　１　N群（西から）
　　２　SF97（南西から）
　　３　SF94（南から）
　　４　SF96（北西から）
　　５　O群：７号周溝墓（北西から）
図版25　１　SF102（西から）
　　２　SF103（北から）
　　３　SF107（南西から）
　　４　SF104土器棺墓（東から）

5　SF105土器棺墓（北から）
6　SF106土器棺墓（北西から）
図版26　1　Q群（北西から）
2　R群：8号周溝墓（北西から）
図版27　1　SF111（西から）
2　SF112（南東から）
3　SF109・SF110（東から）
4　SF113（北西から）
5　SF115土器棺墓（北東から）
6　SF116土器棺墓（北から）
図版28　出土土器1
図版29　出土土器2
図版30　出土土器3
図版31　出土土器4
図版32　出土土器5
図版33　出土土器6
図版34　出土土器7
図版35　出土土器8
図版36　出土土器9
図版37　出土土器10
図版38　出土土器11
図版39　出土土器12
図版40　出土土器13
図版41　出土土器14
図版42　出土土器15
図版43　出土土器16
図版44　出土土器17
出土石器1
図版45　出土石器2
出土玉類
出土金属器1
図版46　出土金属器2
宇藤蓮台遺跡
図版47　1　宇藤蓮台遺跡全景（北東から）
2　3区全景（南東から）
3　出土遺物
フケ遺跡
図版48　1　フケ遺跡全景（北から）
2　3区全景（北から）
図版49　1　H群：1号周溝墓（西から）
2　SF04土器出土状況（南から）
3　SF05土器出土状況（北から）
図版50　1　SD02・SD03（北から）
2　SD03土器出土状況（北から）
3　SD04土器出土状況（北から）
4　SF13土器出土状況（北から）
5　H群東半部（SF01～SF09）（東から）
図版51　1　SF13～SF15・SF18（東から）
2　SF13銅鏃出土状況（北から）
3　SF13（東から）
4　SF18土器棺墓（北西から）
5　SF19土器棺墓（南から）
6　SF20土器棺墓（西から）
7　SF20土器棺墓（南から）
図版52　1　4区全景（北東から）
2　4区全景（南東から）
図版53　1　J群：2号周溝墓（南東から）
2　SF31・SD10 土器出土状況1（北東から）
3　SF31・SD10 土器出土状況2（北から）
図版54　1　SF30検出状況（南東から）
2　SF30完掘状況（南東から）
3　SF29（北東から）
4　SF31（北東から）
5　SF33土器棺墓（南東から）
6　K・L群：3・4号周溝墓（北西から）
図版55　1　K・L群：3・4号周溝墓（南東から）
2　SD13土器出土状況1（南東から）
3　SD13土器出土状況2（南東から）
図版56　1　SF35検出状況（南東から）
2　SF35完掘状況（南東から）
3　5区全景（北から）
図版57　出土土器1
図版58　出土土器2
図版59　出土土器3
図版60　出土土器4
図版61　出土土器5
図版62　出土土器6
図版63　出土土器7
出土金属器
出土玉類
林遺跡
図版64　1　林遺跡全景（北から）
2　1区全景（南西から）
図版65　1　A群：1号周溝墓（南西から）
2　B群（西から）
図版66　1　SF01（南東から）
2　SF05（南西から）
3　SF06（南西から）
4　SF07～SF09（西から）
5　SF13（南から）
6　SF10・SF11（西から）
図版67　1　2区全景（北西から）
2　SF15（南西から）
3　SF17（南西から）
4　SF18・SF19（南西から）
5　SF20（南西から）
図版68　1　3区全景（南西から）
2　3区全景（俯瞰）
図版69　1　D・E群（俯瞰）
2　E群：2号周溝墓（俯瞰）
図版70　1　E群：2号周溝墓（北東から）
2　SD09土器出土状況（北から）
3　SF22（北西から）
4　SF24（北から）
5　SF25（東から）
図版71　1　SD08・SD09（北東から）
2　SF23（北から）
3　SF21（東から）
4　SF28（西から）
5　SF26・SF27（東から）
6　SD05（北から）
図版72　1　4区全景（北西から）
2　F群：3号周溝墓（南西から）
図版73　1　F群：3号周溝墓（南から）
2　SF29（南西から）
3　SF33～SF35、SD15・SD17（南東から）
図版74　1　SF30（南東から）
2　SF32（東から）
3　SF33（南東から）
4　SF34（南東から）
5　SF35（南から）
6　SF36土器棺墓（南東から）
図版75　1　G群：4号周溝墓（俯瞰）
2　SF39（北西から）
3　SF40（北西から）
図版76　出土遺物

挿図目次

第１図　遺跡の位置 …… 1
第２図　遺跡と第二東名工事範囲 …… 6
第３図　円田丘陵全体図（調査区・グリッド配置）…… 7
第４図　周辺の遺跡分布 …… 9
第５図　善千鳥遺跡の遺構 …… 11
第６図　フケ遺跡２区の遺構 …… 11
文殊堂遺跡
第７図　調査区全体図１ …… 15
第８図　調査区全体図２ …… 16
第９図　調査区全体図３ …… 17
第10図　１区 …… 18
第11図　SF12 …… 19
第12図　SF10・SF11 …… 19
第13図　SF01・SF02 …… 20
第14図　SF03～SF07 …… 21
第15図　SF08・SF09 …… 22
第16図　Ｂ群（１号周溝墓） …… 24
第17図　SF13～SF15 …… 25
第18図　SF16～SF18 …… 26
第19図　Ｃ群（２号周溝墓） …… 27
第20図　SD03・SD04遺物出土状況 …… 28
第21図　SF19・SF23 …… 29
第22図　SF20～SF22、SF24・SF25 …… 30
第23図　１区出土の縄文時代の遺物 …… 31
第24図　Ａ・Ｂ群出土土器１ …… 33
第25図　Ａ・Ｂ群出土土器２ …… 34
第26図　Ｃ群出土土器１ …… 34
第27図　Ｃ群出土土器２ …… 35
第28図　Ｃ群出土土器３ …… 36
第29図　SF08・SF09土器棺 …… 37
第30図　SF18土器棺 …… 38
第31図　Ｃ群出土玉類・鉄器 …… 39
第32図　２区北部：Ｄ群 …… 41
第33図　２区北部：Ｅ群 …… 42
第34図　SF26～SF28 …… 43
第35図　SF29・SF30 …… 44
第36図　Ｄ群出土土器 …… 44
第37図　２区中央部 …… 45
第38図　SF31・SF32、SF33・SX01、SF34 …… 47
第39図　SF35～SF40 …… 48
第40図　SF41・SF42・SX02 …… 49
第41図　SF43～SF46 …… 51
第42図　SF47・SF48 …… 52
第43図　SF49・SF50 …… 53
第44図　Ｇ群南東部、SF51・SF52 …… 55
第45図　Ｆ・Ｇ群出土土器 …… 56
第46図　SF49土器棺 …… 57
第47図　SF50土器棺 …… 58
第48図　SF51土器棺 …… 59
第49図　SF52土器棺 …… 60
第50図　Ｆ・Ｇ群出土玉類・金属器 …… 60
第51図　２区南部 …… 61
第52図　Ｈ群北部 …… 62
第53図　SF54～SF56 …… 63
第54図　Ｉ群（３号周溝墓） …… 65
第55図　SF57・SF58 …… 66
第56図　SF60～SF64 …… 67
第57図　SF65・SX04 …… 68
第58図　SF66～SF69 …… 70
第59図　SF70 …… 71
第60図　SF77 …… 72
第61図　SF59 …… 73
第62図　SF71 …… 74
第63図　SF72・SF73 …… 75
第64図　Ｊ群（４号周溝墓） …… 76
第65図　SF78～SF80・SX05 …… 78
第66図　２区南部出土土器１（Ｈ群・Ｊ群・SD09・SD10・SF77） …… 79
第67図　２区南部出土土器２（Ｉ群SF65ほか） …… 81
第68図　２区南部出土土器３（Ｉ群SF60～SF64、SF66～SF75） …… 82
第69図　２区南部出土土器４（Ｉ群遺構外） …… 83
第70図　SF59土器棺ほか …… 84
第71図　SF71土器棺 …… 85
第72図　SF73土器棺 …… 86
第73図　SF72土器棺 …… 87
第74図　２区南部出土石器 …… 87
第75図　２区南部出土玉類・金属器 …… 89
第76図　３区北部 …… 91
第77図　Ｋ群（５号周溝墓）・Ｌ群（６号周溝墓）１ 92
第78図　Ｋ群（５号周溝墓）・Ｌ群（６号周溝墓）２ 93
第79図　SF82・SF83 …… 94
第80図　SF84 …… 95
第81図　SF88～SF90 …… 95
第82図　SF85～SF87 …… 97
第83図　SF91・SF92 …… 98
第84図　Ｋ～Ｍ群出土土器 …… 99
第85図　SF85土器棺 …… 99
第86図　SF86土器棺 …… 100
第87図　SF87土器棺 …… 101
第88図　SF91土器棺 …… 102
第89図　SF92土器棺 …… 103
第90図　３区北部出土玉類 …… 103
第91図　３区中央部 …… 105
第92図　Ｎ～Ｏ群（７号周溝墓）１ …… 106
第93図　Ｎ～Ｏ群（７号周溝墓）２ …… 107
第94図　SF94 …… 108
第95図　SF95・SF96 …… 108
第96図　SF102・SF103 …… 109
第97図　SF107 …… 110
第98図　SF104・SF105 …… 111
第99図　SF106 …… 111
第100図　３区南部 …… 113
第101図　Ｒ群（８号周溝墓） …… 114
第102図　SF110～SF112 …… 116
第103図　SF113 …… 116
第104図　SF114 …… 117
第105図　SF115 …… 118
第106図　SF116 …… 118
第107図　Ｎ～Ｒ群出土土器１ …… 119
第108図　Ｎ～Ｒ群出土土器２ …… 120
第109図　SF104・SF105土器棺 …… 121
第110図　SF106土器棺 …… 122
第111図　SF115土器棺 …… 123
第112図　SF116土器棺 …… 124
第113図　３区中央部・南部出土石器・玉類・金属器 125
宇藤蓮台遺跡
第114図　調査区全体図 …… 131
第115図　出土弥生土器 …… 132
フケ遺跡
第116図　調査区（３～５区）全体図 …… 134
第117図　３区 …… 135

第118図 H群（1号周溝墓）1 …… 136
第119図 H群（1号周溝墓）2、H群土器出土状況1 137
第120図 H群土器出土状況2 …… 138
第121図 H群土器出土状況3 …… 139
第122図 SF03～SF05、SX01 …… 140
第123図 SF06～SF09 …… 141
第124図 SF10 …… 142
第125図 SF11 …… 142
第126図 SF13・SF14 …… 143
第127図 SF18・SF19 …… 144
第128図 I群 …… 147
第129図 SF21～SF25 …… 148
第130図 SF20 …… 149
第131図 SF26～SF28 …… 150
第132図 H・I群出土土器1 …… 151
第133図 H・I群出土土器2 …… 153
第134図 H・I群出土土器3 …… 154
第135図 H・I群出土土器4 …… 155
第136図 SF18土器棺 …… 156
第137図 SF19土器棺 …… 157
第138図 SF20土器棺、H・I群出土土器5 …… 158
第139図 H群出土玉類 …… 159
第140図 H群出土金属器 …… 159
第141図 4区 …… 160
第142図 J群（2号周溝墓） …… 161
第143図 SD10（SF31周辺）遺物出土状況 …… 162
第144図 SF29～SF31 …… 163
第145図 SF33・SF34 …… 164
第146図 K群（3号周溝墓）・L群（4号周溝墓）… 165
第147図 SF35 …… 166
第148図 J～L群出土土器1 …… 169
第149図 J～L群出土土器2 …… 170
第150図 SF33土器棺 …… 171
第151図 SF34土器棺 …… 172
第152図 4区出土土器 …… 172
第153図 J群出土玉類 …… 172
第154図 5区 …… 173
林遺跡
第155図 調査区全体図1 …… 175
第156図 調査区全体図2 …… 176
第157図 1区 …… 179
第158図 A群（1号周溝墓） …… 180
第159図 SF01～SF04 …… 181
第160図 SF05～SF14 …… 183
第161図 2区 …… 184
第162図 SF15～SF20 …… 185
第163図 C群出土土器 …… 186
第164図 2区出土石器 …… 186
第165図 3区 …… 188
第166図 E群（2号周溝墓）1 …… 189
第167図 E群（2号周溝墓）2 …… 190
第168図 SF21・SF22 …… 191
第169図 SF23～SF25 …… 192
第170図 SD10・SD11、SF26～SF28 …… 193
第171図 E群出土土器 …… 194
第172図 3区出土玉類 …… 194
第173図 4区北半部 …… 196
第174図 4区南半部 …… 197
第175図 F群（3号周溝墓）1 …… 198
第176図 F群（3号周溝墓）2 …… 199
第177図 SF29～SF31 …… 200
第178図 SF32～SF35 …… 201
第179図 SF36 …… 202
第180図 G群（4号周溝墓） …… 203
第181図 SF39・SF40 …… 204
第182図 F群出土土器1 …… 205
第183図 F群出土土器2 …… 206
第184図 SF36土器棺 …… 207
まとめ
第185図 円田丘陵の遺構分布（弥生時代～古墳時代前期の墓域） …… 210
第186図 墓域の形成過程 …… 215
第187図 墓壙と木棺型式 …… 217
第188図 土坑墓の規模 …… 218
第189図 円田丘陵の土器棺に用いられる大型壷の変遷 222
第190図 供献土器の組成 …… 224
第191図 主な副葬品の出土 …… 227
第192図 帯状銅剣と鉄剣の分布（主に弥生時代後期） 228
第193図 遠江における弥生青銅器の分布 …… 229
第194図 浜松市瓦屋西遺跡の円形周溝墓 …… 231

挿表目次

第1表 調査体制と調査実施内容（平成17年度まで）… 2
第2表 第二東名関連調査にかかわる円田丘陵の遺跡 6
第3表 周辺の遺跡一覧表 …… 9
文殊堂遺跡
第4表 遺物観察表（土器） …… 127
第5表 遺物観察表（石器） …… 129
第6表 遺物観察表（金属器） …… 129
第7表 遺物観察表（玉類） …… 130
宇藤蓮台遺跡
第8表 遺物観察表 …… 132
フケ遺跡
第9表 遺物観察表（土器） …… 173
第10表 遺物観察表（玉類） …… 174
第11表 遺物観察表（金属器） …… 174
林遺跡
第12表 遺物観察表（土器） …… 208
第13表 遺物観察表（石器） …… 208
第14表 遺物観察表（玉類） …… 208
まとめ
第15表 墓群一覧 …… 211
第16表 墓群形成時期の概要 …… 213
第17表 土器棺墓一覧 …… 221
第18表 玉類・金属器出土一覧 …… 225

写真目次

写真1 現地調査（遺構の検出と記録） …… 4
写真2 資料整理（土器の復元） …… 5

第１章　調査に至る経緯

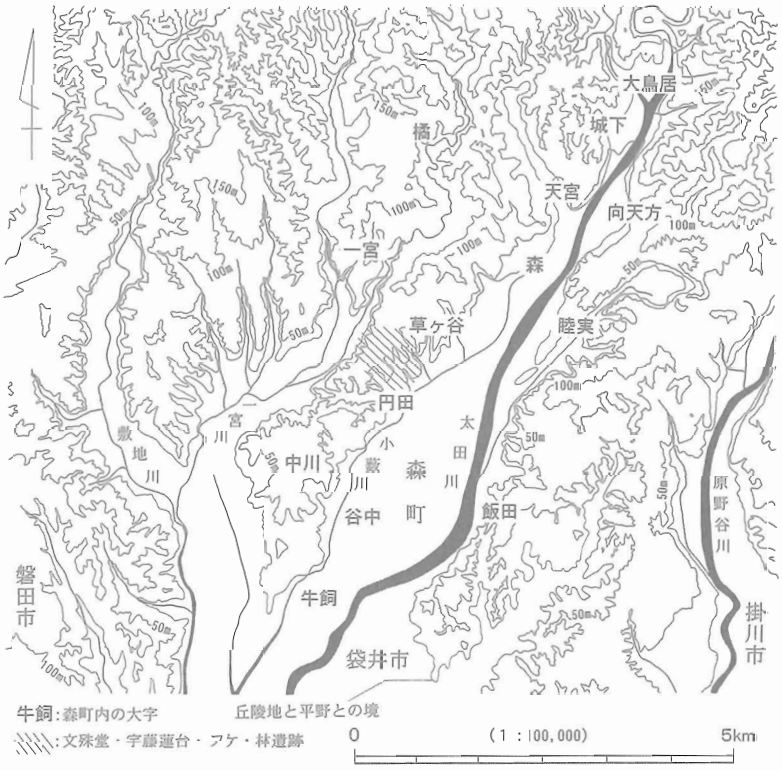
東名高速道路は昭和44年の開通以来、日本の大動脈の一部として大きな役割を果たしてきている。しかし、経済発展に伴って混雑が著しくなり、高速性・定時性を伴う交通需要に対応することが困難になると予測されるようになってきた。この問題に対する抜本対策として第二東名高速道路が計画、静岡県内においては、東西に貫く形で延長約170kmの路線が策定された。

この計画に伴い、静岡県教育委員会は日本道路公団から埋蔵文化財分布調査の手続きの依頼、埋蔵文化財包蔵地の所在の有無についての照会を受けた。埋蔵文化財の所在についての回答は、関係市町村教育委員会へ照会した結果を基に協議し、静岡県教育委員会が取りまとめて行った。調査対象となる地点は、周知の埋蔵文化財包蔵地を中心に県内130以上に及ぶこととなった。

その後、日本道路公団に第二東名建設の施行命令が出されたことに伴って、日本道路公団、静岡県土木部、静岡県教育委員会が埋蔵文化財調査の進め方等について協議した。また、発掘調査の実施については、日本道路公団が財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所（以下、財団法人を除いて記す）へ委託することが確認されている。平成８年度には埋蔵文化財調査の実施が具体化し、日本道路公団静岡建設局と静岡県教育委員会は、第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財の取扱いについての確認書を締結した。さらに、静岡県埋蔵文化財調査研究所を入れた三者は、第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査実施方法等を定めた協定書を締結した。この年度から、静岡県における第二東名建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査がはじまっている。なお、平成17年度の日本道路公団の民営化に伴って、日本道路公団静岡建設局による埋蔵文化財発掘調査の委託は、中日本高速道路株式会社横浜支社に引き継がれている。

森町域においても、同様に調査がはじまっている。町域には延長約７kmの路線およびパーキングエリア１ヶ所、インターチェンジ１ヶ所が設定されており、21の調査対象地の確認調査を実施、その結果、14地点に16の遺跡の存在が認められた。この結果に基づいて、各遺跡の発掘調査が行われている。全ての確認調査と16遺跡の現地発掘調査・資料整理は、静岡県教育委員会の指導のもとで、静岡県埋蔵文化財調査研究所が行っている。なお、上記の経緯についての詳細、森町域の確認調査の内容については、既に公表したものがある（静岡県埋蔵文化財調査研究所2004）。

円田丘陵では、パーキングエリアが設定されたこともあり、広い範囲に分布する複数の遺跡が調査対象となった。調査成果も、弥生墓群・古墳群・横穴群・古代～中世集落などと多岐にわたる。本書では、文殊堂遺跡・宇藤蓮台遺跡・フケ遺跡・林遺跡の古墳群が形成される以前、弥生時代の墓域を中心とした調査成果を報告する（第２章 第３節参照）。



第１図　遺跡の位置

第２章　調査の方法と経過

第１節　調査の体制

本書で報告する遺跡（以下、円田丘陵の遺跡群）の発掘調査は、第１表にある体制で実施した。実際には、第二東名建設事業に伴う掛川工区（金谷町・掛川市・森町・豊岡村域）の森町内（以下、森地区）の埋蔵文化財発掘調査（以下、本事業）として体制を組んでおり、第１表の体制はその一部にあたる。なお、森地区全体の体制については、既に記したものがある（静岡県埋蔵文化財調査研究所2004）。

第１表　調査体制と調査実施内容（平成17年度まで）

					平成10年度	平成11年度	平成12年度	平成13年度	平成14年度	平成15年度	平成16年度	平成17年度
調査体制	所長				斎藤　忠	斎藤　忠	斎藤　忠	斎藤　忠	斎藤　忠	斎藤　忠	斎藤　忠	斎藤　忠
	副所長					山下　晃	山下　晃	山下　晃	飯田英夫	飯田英夫	飯田英夫	
	総務部	常務理事兼総務部長			伊藤友雄	伊藤友雄	伊藤友雄	粂田徳幸	粂田徳幸	粂田徳幸	平松公夫	平松公夫
		次長								鎌田英巳	鎌田英巳	鈴木大二郎
		総務課長			杉木敏雄	杉木敏雄	杉木敏雄	本杉昭一	本杉昭一	鎌田英巳	鎌田英巳	鈴木大二郎
		担当	経理専門員		稲葉保幸	稲葉保幸	稲葉保幸	稲葉保幸	稲葉保幸	稲葉保幸	稲葉保幸	稲葉保幸
			総務係長		田中雅代							
			会計係長		杉田　智							
			副主任				鈴木秀幸	鈴木秀幸			中鉢京子	中鉢京子
			主事			鈴木秀幸			鈴木秋博	鈴木秋博		
	調査研究部	部長			石垣英夫	佐藤達雄	佐藤達雄	佐藤達雄	山本昇平	山本昇平	山本昇平	石川素久
		次長				佐野五十三	及川　司	栗野克巳 及川　司	栗野克巳 中嶋郁夫	栗野克巳 中嶋郁夫	栗野克巳 中嶋郁夫	栗野克巳 中嶋郁夫
		次長心得			佐野五十三							
		担当課長			遠藤喜和	及川　司	及川　司	及川　司	篠原修二	足立順司	中嶋郁夫	中嶋郁夫
		工区主任			平野　徹	篠原修二	加藤理文	加藤理文				
		主任調査研究員						長尾一男	松井文孝			
		調査研究員			竹原一人 長尾一男 富樫孝志 木崎道昭 梶葉良久	竹原一人 西田光男 長尾一男 深田雅一 佐原哲之 児玉　卓 梶葉良久 溝口彰啓 佐藤　淳 丸杉俊一郎 田村隆太郎	長尾一男 中村正宏 児玉　卓 横山智之 佐藤　淳 田村隆太郎	田村隆太郎	田村隆太郎	白鳥直樹 河合　敦 小木　充 田村隆太郎	田村隆太郎	田村隆太郎
		保存処理	室長					西尾太加二	西尾太加二	西尾太加二	西尾太加二	西尾太加二
			主任調査研究員			西尾太加二	西尾太加二					
実施内容	文殊堂古墳群・遺跡				確認調査	本調査	本調査					
	宇藤蓮台古墳群・遺跡				確認調査	本調査			確認調査	本調査		
	フケ遺跡				確認調査	本調査						
	林古墳群・遺跡				確認調査	本調査	本調査					
	資料整理・報告書作成							森地区全体を対象として実施				

第2節　現地調査について

1．遺跡の範囲と調査区

遺跡の所在と範囲　第二東名高速道路においては、森町の円田丘陵にパーキングエリアが設定された。そして、その工事範囲内には以下に述べるとおり、周知の埋蔵文化財をはじめとする多くの遺跡が所在している（第2図）。

南北にのびる西寄りの丘陵上には、林古墳群（遺跡）が立地する。その丘陵から南東に派生する尾根が3つあり、東から文殊堂古墳群（遺跡）、宇藤蓮台古墳群（遺跡）、フケ遺跡が立地している。さらに、文殊堂古墳群の立地する丘陵の斜面には、宇藤横穴群・天王ヶ谷横穴群が立地している。一方、文殊堂古墳群の南東や林古墳群の北西には、尾根先端部に形成された段丘が広がっており、北垣遺跡・弥勒平遺跡といった集落遺跡が立地している。

調査区の設定　発掘調査は、工事範囲内を対象としており、確認調査によって把握した上記各遺跡の有無と範囲に基づいて実施している。したがって、調査区（調査範囲）は工事範囲と遺跡範囲に規定される。文殊堂古墳群（遺跡）・宇藤蓮台古墳群（遺跡）・林古墳群（遺跡）・宇藤横穴群・天王ヶ谷横穴群・弥勒平遺跡については、遺跡の全域が工事範囲内に含まれており、基本的には、設定された調査区外に関連の遺構が存在することはない。一方、フケ遺跡は南東部、北垣遺跡は南半部が工事範囲外となり、調査区は遺跡範囲の一部に限定されている。

文殊堂遺跡・宇藤蓮台遺跡・フケ遺跡・林遺跡（以下、本遺跡群）では、尾根の幅が特に狭い部分があり、そこには遺構・遺物が認められない。さらに、フケ・宇藤蓮台遺跡では茶畑による削平、林遺跡では既存道路による削平・造成が認められる。各遺跡の広がりは、本来の地形、後世の丘陵崩落、人為的削平などによって分断されている場合がある。したがって、同一遺跡内においても、複数の互いに離れた調査区が設けられている場合がある。なお、フケ遺跡については、既に森町教育委員会によって調査・報告されている1・2区があり（森町教育委員会2004）、本書で報告するフケ遺跡の調査区は3～5区とする。

表紙などに記した「No.○○地点」については、確認調査前に付けられた第二東名建設に伴う埋蔵文化財発掘調査事業固有の番号である。詳細は別書にて既述しているが（静岡県埋蔵文化財調査研究所2004）、実際の遺跡の名称・内容と関連するものではない。

2．現地調査の方法と経過

現地調査の工程　現地調査は、基本的には遺跡・調査区ごとに行っているが、その順序などは諸条件によって整然としていない（例言参照）。一方、本書で報告する文殊堂遺跡・宇藤蓮台遺跡・フケ遺跡・林遺跡は、立地地形の特徴や検出遺構などが近似しているので、調査方法は概ね以下で述べる方法で統一されている。

準備～表土除去　伐採の終了など調査可能な状態であることを確認した上で、重機進入路等を設置し、作業員棟（テント）等の搬入・設置、器材などの準備を行った。その後、重機による表土除去、人力による表土除去を行った。重機による表土除去に際しては、遺構に影響のないように注意して実施した。とくに古墳の墳丘については、重機よりも人力による表土除去を中心とした。

遺構の確認　表土除去に引き続いて、堆積土・流土層などの掘削を人力で行い、遺構確認面の検出を

行った。ただし、本遺跡群は痩せ尾根に立地するため、大半においては表土を除去した段階で遺構確認面が検出された。また、表土除去および遺構確認面の検出に際しては、多くの抜根作業が伴った。

古墳群形成前と形成以降　文殊堂遺跡・宇藤蓮台遺跡・林遺跡では、古墳時代中・後期の古墳群とその他（古墳群形成前後）の遺構が重複している。現地調査においては、まず古墳群を含む古墳群形成以降の遺構に限って調査を行い、その後に古墳群形成前の遺構の調査を行った。すなわち、古墳群形成以降・古墳群形成前という2段階に分けて調査を実施したことになる。

古墳の墳丘（盛土）が存在する範囲では、古墳群形成以降の遺構は墳丘上で確認され、古墳群形成前の遺構は盛土を除去した下で確認される。しかし、墳丘外においては、両段階の遺構が同じ遺構検出面で確認された。可能な限り遺構の特徴（形状・覆土・切り合い関係など）から段階の別を判断したが、実際には異なる段階の遺構を同時に検出してしまうこともあった。したがって、各遺構がどの時期・段階であるかの正確な判断については、資料整理にて再検討を行った。

なお、本書では古墳群形成前の文殊堂遺跡・宇藤蓮台遺跡・フケ遺跡・林遺跡に限定して報告するため（次節参照）、以後は古墳群形成以降の内容を割愛する。

遺構の調査　発見された各遺構の調査は、平面プランを把握することからはじめた。その後、平面プランの主軸方向および主軸直行方向を基準とし、土層帯や部分的な掘り下げなどによって土層断面を観察し、検討・記録しながら遺構検出を進めた。さらに、土器棺や供献土器・副葬品などの検出・検討・記録も行いながら、各遺構の完掘状態の検出・記録までを行った。現地調査は、調査区全域の調査・記録作業が終了した後に撤収・撤去を行って終えた。

遺構調査に際しては、座標に合わせた10m方眼のグリッド（第3図）を全域に設定し、グリッド杭を委託にて設置した。遺構番号は、遺跡別・調査区別で遺構種類に関わらずに発見順に付した。ただし、本報告に際しては、遺跡別・遺構種類別に新たな遺構番号を付した。遺物については、遺構外出土遺物は層位およびグリッドなどの一定範囲ごと、遺構内出土遺物は遺構ごとに取り上げた。さらに原位置が復元でき、遺構の性格を反映していると判断できるような出土状態の遺物については、詳細に記録して取り上げた。また、土器棺墓・土坑墓などは、覆土下層を対象に篩いにかけて、微小遺物を探した。

記録の方法　現地の記録図面は、地形測量1/100、遺構図1/20、詳細図1/10を基本とし、主にグリッドに沿って作成した。遺構・景観等の現地記録写真の撮影は、6×7版（モノクロ）と35mm判（カラーリバーサル）を用い、作業工程撮影用に35mm判（カラーネガ）を使用した。また、全景写真撮影および測量においては、空中写真撮影および空中写真測量を委託にて利用した。なお、基準点測量およびグリッド杭打設、空中写真撮影・測量の委託先は、株式会社フジヤマ、株式会社イビソク、朝日航洋株式会社、アジア航測株式会社、中日本航空株式会社である（順不同）。

写真1　現地調査（遺構の検出と記録）

第３節　資料整理について

基礎整理　本事業においては、現地調査を優先するという方針であったため、多くの現地調査が終了した後に、各遺跡の資料整理を実施することになった。ただし、現地調査を実施しながらも行える、基礎的な整理作業（各種台帳作成、写真の整理・収納、図面の整理・収納、出土遺物の洗浄・注記、遺跡概要の整理など）もある（以下、基礎整理）。この基礎整理については、現地調査を実施している期間の整理作業として行った。

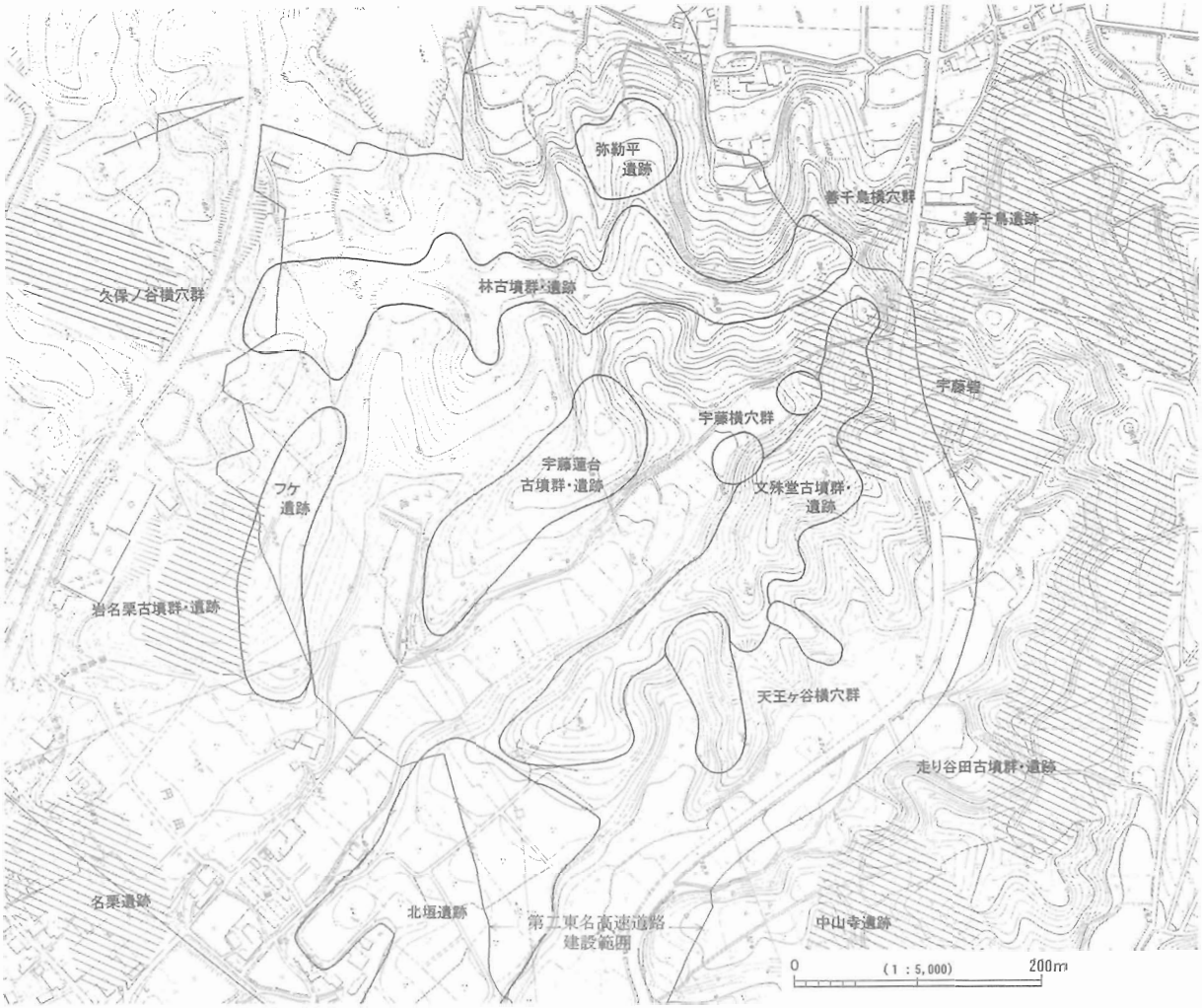
資料整理・報告書作成　本書に関係する資料整理を開始したのは、平成13年４月である。しばらくの間は出土土器の復元、とくに土器棺の復元に期間を要した。続いて、遺物の図化作業、各図面の編集・トレース作業、遺物の写真撮影、報告の執筆を行った。さらに、これらを編集して報告書を作成した。なお、金属製品のクリーニング・保存処理は当研究所保存処理室にて実施した。遺物写真は当研究所写真室が実施した。６×７判（白黒）を基本とし、必要に応じて６×７版（リバーサル）や４×５判も用いた。また、石器については、実測・トレース・石材鑑定・観察表作成を株式会社アルカに委託した。玉類の石材鑑定は、当研究所技術員の森嶋富士夫が行った。

本書で報告する遺跡の資料整理は、掛川工区内の他遺跡の資料整理・報告書作成作業、さらには他の現地調査の実施と重なりながら実施していった。したがって、資料整理の期間は平成17年度に至る長期なものとなったが、その間の作業進捗は極めて断続的であった。

報告の方法　円田丘陵の発掘調査は広範囲に及び、丘陵上の弥生時代の墓域・古墳群、丘陵斜面の横穴群、段丘上の集落といった様々な遺跡の展開が認められるに至った。遺跡は地形によって区分されるが、特に丘陵上の弥生の墓域や古墳群においては、遺跡間の関連性や類似性も認めることができる。報告書の作成に際しては、その点も重視する必要があると考えた。

本書においては、やせた尾根上に展開する文殊堂遺跡・宇藤蓮台遺跡・フケ遺跡・林遺跡について報告する。ただし、文殊堂遺跡・宇藤蓮台遺跡・林遺跡では、古墳時代中・後期の古墳群が重なっており、中近世に至る遺構・遺物も発見されているが、これらについては本書で報告しない。現地調査の方法と同様、古墳群形成前と古墳群形成以降に大別し、本書では前者についてのみ報告することとする。古墳群・古墳群形成以降の遺構・遺物については、別書で報告する（第２表）。

写真２　資料整理（土器の復元）

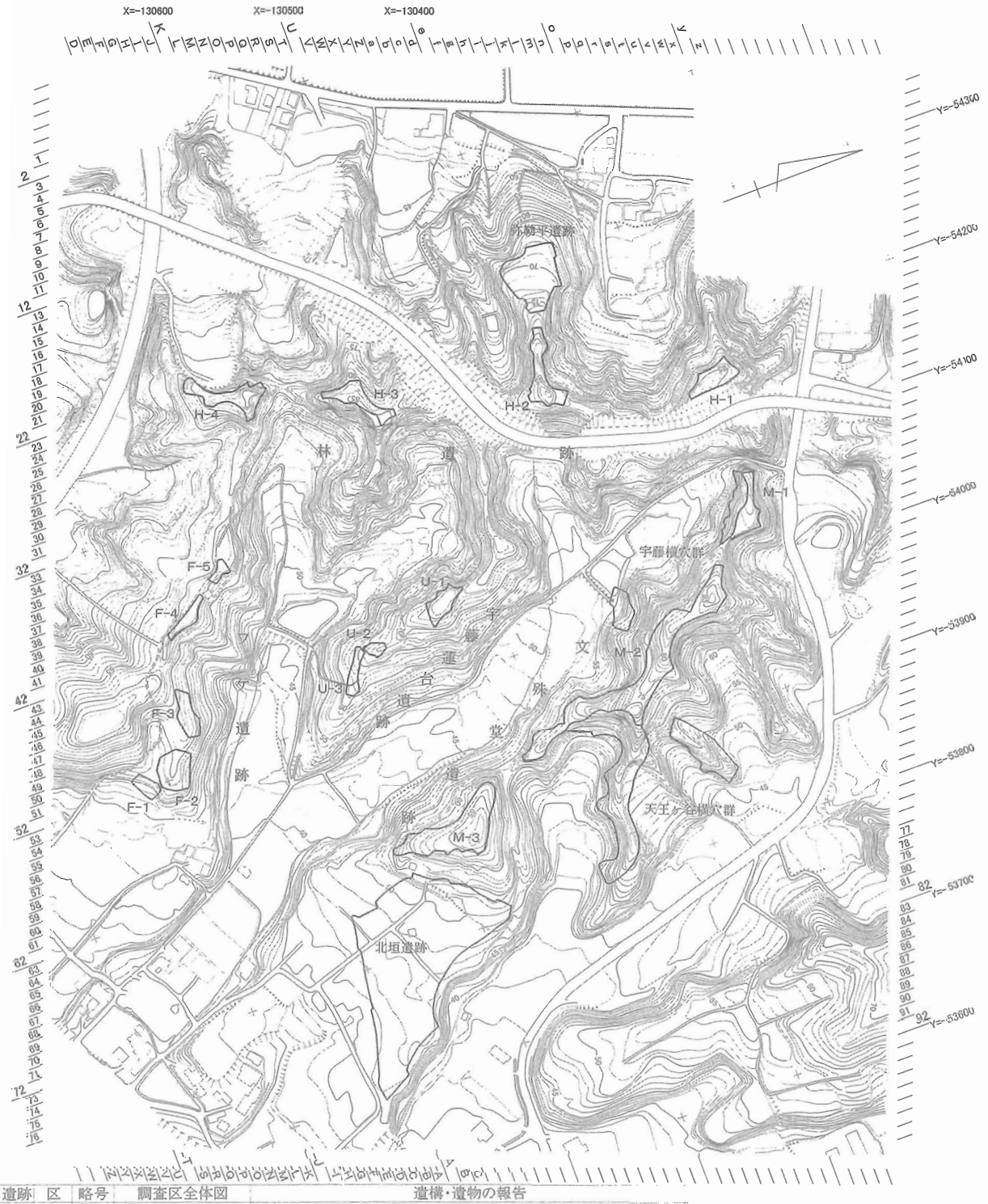


第２図　遺跡と第二東名工事範囲

第２表　第二東名関連調査にかかわる円田丘陵の遺跡

地点名	遺跡名	古墳群形成前の概要		古墳群形成以降の概要		今回の調査範囲	調査歴（今回の調査以外）
		縄文時代	弥生時代	古墳時代	中世以降		
No.113	文殊堂	落し穴	墓群	1～12号墳など	土坑墓道状遺構	遺跡範囲全域	鏡・馬具などの出土(森町史編さん委員会1998)
No.119	宇藤蓮台	－	土器の出土	1～3号墳	土坑墓など	遺跡範囲全域	－
No.120	フケ	－	墓群	－	－	遺跡範囲の一部（3～5区）	1・2区の調査(森町教育委員会2004)
No.121～123	林	－	墓群（～古墳時代前期）	1～5号墳	－	遺跡範囲全域	－
No.113	宇藤横穴群	－	－	横穴群	再利用	遺跡範囲全域	－
No.113	天王ヶ谷横穴群	－	－	横穴群	再利用	遺跡範囲全域	－
No.113	北垣	住居跡	住居跡など	住居跡・土坑など	建物跡・火葬墓など	遺跡範囲の一部	表採遺物あり(森町史編さん委員会1998)
No.123	弥勒平	土器の出土	住居跡	－	土器の出土	遺跡範囲全域	－

アミかけ範囲が、本書で報告する範囲である。



遺跡	区	略号	調査区全体図	遺構・遺物の報告	
文殊堂	1区	M-1	第7図(P15)	第4章	第2節(P18)
	2区	M-2	第7・8図(P15・16)		北部：第3節(P44)、中央部：第4節(P56)、南部：第5節(P79)
	3区	M-3	第9図(P17)		北部：第6節(P91)、中央・南部：第7節(P104)
宇藤連台	1区	U-1	第114図(P131)	第5章	第1節(P131)
	2区	U-2			
	3区	U-3			
フケ	3区	F-3	第116図(P134)	第6章	第2節(P135)
	4区	F-4			第3節(P160)
	5区	F-5			第4節(P173)
林	1区	H-1	第155図(P175)	第7章	第1節(P178)
	2区	H-2			第2節(P184)
	3区	H-3	第156図(P176)		第4節(P187)
	4区	H-4			第5節(P195)

※ F-1・2は森町教育委員会の調査（森町教育委員会2004）

※ 北垣遺跡、弥勒平遺跡、宇藤横穴群、天王ヶ谷横穴群については、第二東名建設に伴って調査しているが、第２表にあるとおり、本書では報告しない。

0 (1：5,000) 200m

第３図　円田丘陵全体図（調査区・グリッド配置）

第３章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

森町は、静岡県の西部に位置し、北の赤石山脈からのびる山地と南の磐田市・袋井市域へと広がる沖積平野との双方にまたがる。（第１図、第４図）

町の北東にある大日山から南東にかけて、太田川が流れている。太田川は比較的大きな河川であり、南の袋井・磐田市域で多くの河川と合流し、遠州灘へと流れていく。森町域においては、この河川によって北部の山地が削り取られ、南部に広い沖積平野が形成されている。一方、太田川の西側には、平行するように一宮川が流れている。太田川に比べて小さく、下流（袋井市域）で太田川に合流する河川であるが、これも同様に沖積平野を形成している。丘陵地帯については、太田川左岸に睦実・飯田の丘陵、太田川右岸・一宮川左岸に園田の丘陵、一宮川右岸に一宮の丘陵や磐田原台地があり、太田川流域・一宮川流域の沖積平野を囲むように、町の北側から南部へとのびている。

太田川と一宮川に挟まれた園田の丘陵は、南西へとのびる幅約１kmの丘陵地帯であり、大半はやせ尾根の丘陵と細長い小谷の連続で構成されている。この丘陵地帯の中央部に、本書で報告する文殊堂遺跡・宇藤蓮台遺跡・フケ遺跡・林遺跡（本遺跡群）が立地している。立地する丘陵地形は、園田の丘陵の中心筋となる南北に伸びる尾根と、そこから北西および南東に派生する多くの尾根で構成されている。北西に派生する尾根よりも、南東に派生する尾根の方が比較的長い。南北にのびる尾根に林遺跡、南東にのびる各尾根に、東から文殊堂遺跡・宇藤蓮台遺跡・フケ遺跡が立地する。本遺跡群の標高は、55～88mである。周囲の水田の標高は35～40m、文殊堂遺跡の丘陵南端に北垣遺跡が立地する段丘が広がるが、その段丘上面の標高は45m前後である。

なお、本遺跡群の立地する丘陵一帯は、天竜浜名湖鉄道円田駅の北側に位置し、大部分の大字が円田にあたる。本書では、園田の丘陵の中でも、この一帯を「円田丘陵」と称することとする。

第２節　歴史的環境

今回の円田丘陵の発掘調査では、縄文時代の落し穴、弥生時代の墓域、古墳時代中・後期の古墳群、中近世の墓や道が丘陵上で発見され、丘陵斜面では横穴群、段丘上では各時代の集落や中近世墓も発見されている。それらの中で、本書では丘陵上で調査された古墳群形成以前についての成果を報告することになっている（第２章 第３節）。したがって、本節では弥生時代以前を中心として本遺跡群周辺の歴史的環境について記述し、古墳時代以降についての記述は概要にとどめることとする。

(１) 旧石器時代・縄文時代

森町では、明確な旧石器時代の遺跡は知られていない。しかし、石器の出土は少数ある。フケ遺跡では、森町教育委員会の調査によって１区（第３図）からナイフ形石器が出土している（森町教育委員会2004）。今後、旧石器時代の遺跡の存在がより明確になる可能性もなくはない。

縄文時代についても、森町内で内容が明らかになっている遺跡は決して多くない。しかし、太田川上流域の鍛冶遺跡では縄文時代中期の住居跡が発見され、太田川左岸の谷部にある坂田北遺跡ではドング

第３表　周辺の遺跡一覧表

No.	遺跡名	No.	遺跡名	No.	遺跡名	No.	遺跡名
1	中芝原遺跡	13	西脇古窯	25	中屋敷遺跡	37	岩名栗古墳群
2	青木Ⅰ遺跡	14	陣屋峠古窯	26	弥勒平遺跡	38	大城戸遺跡
3	逆井京塚古墳	15	西脇1号墳	27	林古墳群・遺跡	39	久保ノ谷横穴群
4	鴨山遺跡	16	大門遺跡	28	宇藤横穴群	40	堤田古墳
5	鴨ノ前遺跡	17	円明寺古墳群	29	宇藤蓮台古墳群・遺跡	41	石仏ノ坪古墳
6	東平子遺跡	18	森山古窯	30	天王ヶ谷横穴群	42	東国古墳
7	西平子遺跡	19	金谷前古窯	31	文殊堂古墳群・遺跡	43	奥谷田Ⅰ遺跡
8	観音堂横穴群	20	菖蒲ヶ谷古墳群	32	フケ遺跡	44	井谷ノ谷古墳群
9	坂田北遺跡	21	菖蒲ヶ谷Ⅱ遺跡	33	北垣遺跡	45	井谷ノ谷遺跡
10	如仲庵遺跡	22	善千鳥遺跡	34	円田大門遺跡	46	片瀬城跡・遺跡
11	峯山台状墓	23	善千鳥横穴群	35	名栗遺跡		
12	蓮華寺古墳群	24	香勝寺遺跡	36	岩名栗遺跡		

※本文中にある遺跡を中心に掲載している。
※No.は第４図に対応。

第４図　周辺の遺跡分布

リなどの食物加工の作業場跡を想定させる遺構群が発見されている。本事業においても、太田川流域に面した段丘上に立地する北垣遺跡で、縄文時代の遺物と住居跡の存在が明らかとなっている。さらに、やせた丘陵上に立地する本遺跡群や片瀬遺跡では数基の落し穴が、網掛山遺跡では住居跡などが発見されている。

(2)弥生時代

森町内の弥生時代の遺跡は、大半が南部に位置し、山地で占められる北部にはほとんどない。また、その中でも低地の遺跡、水田・畑などの生産域の発見事例はなく、大半は丘陵上に立地する集落・墓の跡である。出土遺物および遺跡の時期は、中期中葉以降に集中する。

集落跡　太田川左岸の丘陵上には、東平子遺跡・西平子遺跡・青木Ⅰ遺跡・中芝原遺跡など、住居跡が認められた遺跡が分布している。いずれも、弥生時代後期を中心とする集落跡である。西平子遺跡では、建て替えを含めて20軒以上の住居跡が調査され、古墳時代前期に至る営みが把握されている（森町教育委員会1996)。太田川右岸では、奥谷田Ⅰ遺跡で住居跡が調査されているが、やせ尾根に立地する小集落の様相を示している（森町教育委員会1998)。また、一宮川右岸では、本事業によって調査された片瀬遺跡・網掛山遺跡で、丘陵上の弥生集落跡が把握されている。片瀬遺跡では中期後半～後期前半の住居跡が20軒以上発見され、有孔磨製石鏃の未成品30点程が束になって出土するなど、興味深い調査結果が得られている。

本遺跡群の周辺（円田丘陵周辺）では、本事業で調査した北垣遺跡や弥勒平遺跡で、弥生時代後期～古墳時代前期の可能性が高い住居跡が検出されている。しかし、遺跡の残存状況が悪く、詳細な様相は把握し難い。その他、名栗遺跡・円田大門遺跡・大城戸遺跡などが、本遺跡群周辺域の集落遺跡ではないかと推定されている。しかし、これらは未調査の遺跡である。

墓　域　墓域・墓の調査事例は、本遺跡群を含めて比較的多く存在する。埋葬施設としては、木棺墓・土坑墓（土壙）のほかに土器棺墓がある。埋葬施設が単独で発見されることもあるが、群を成す場合が多い。また、方形周溝墓や台状墓といった、一定範囲（墓・墓群）を区画したものも認められる。

中期であることが明確な事例は少なく、その大半は土器棺墓である（井谷ノ谷遺跡・善千鳥遺跡など)。土器棺墓は、単独的に存在する場合（奥谷田Ⅰ遺跡、鴨ノ前遺跡、善千鳥遺跡など）や数基の群を形成する場合（片瀬遺跡など）のほか、方形周溝墓などの周縁部に１基～数基が設けられる場合（峯山台状墓、フケ遺跡など）がある。この種の埋葬施設は、後期末～古墳時代初頭まで存続する。土器棺の身は壷の場合が多く、蓋には壷・甕・鉢などを用いる場合がある。副葬遺物はほとんどない。

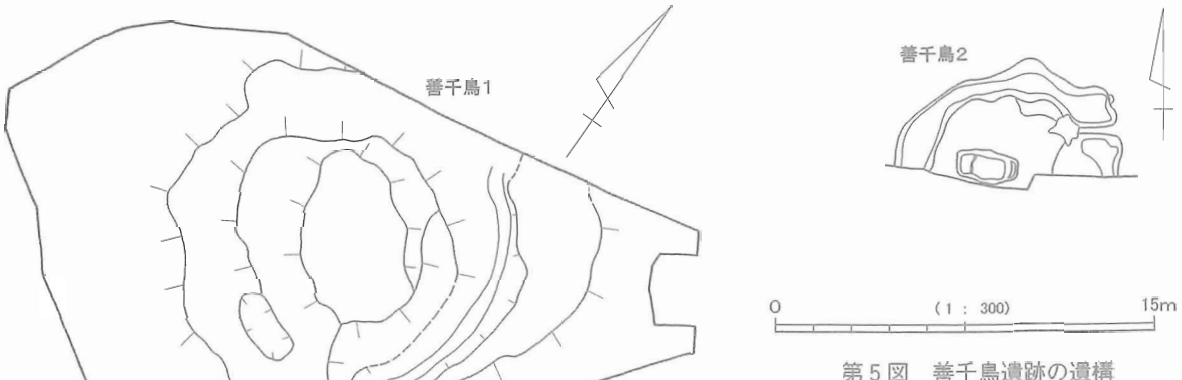
土坑墓についても、単独的なもの（奥谷田Ⅰ遺跡など）と群を成すもの（フケ遺跡など）がある。方形周溝墓や台状墓に伴う埋葬施設にもなる。方形周溝墓は、青木Ⅰ遺跡・鴨山遺跡・奥谷田Ⅰ遺跡・網掛山遺跡・片瀬遺跡で認められており、台状墓は、峯山台状墓・善千鳥遺跡・菖蒲ヶ谷Ⅱ遺跡で認められている。いずれも、丘陵上に立地する後期の墓であり、埋葬施設は未発見もしくは１基程度の場合が多い。ただし、峯山台状墓には土器棺墓１基を含む７基の埋葬施設が伴っている。なお、峯山台状墓の埋葬施設から鉄釧１点が出土、同じ太田川左岸丘陵上にある如仲庵遺跡では、土器棺墓３基と土坑墓１基が発見され、土坑墓から銅釧６点が出土している。

円田丘陵では、本遺跡群のほかに善千鳥遺跡・フケ遺跡２区で弥生墓群が調査されている。

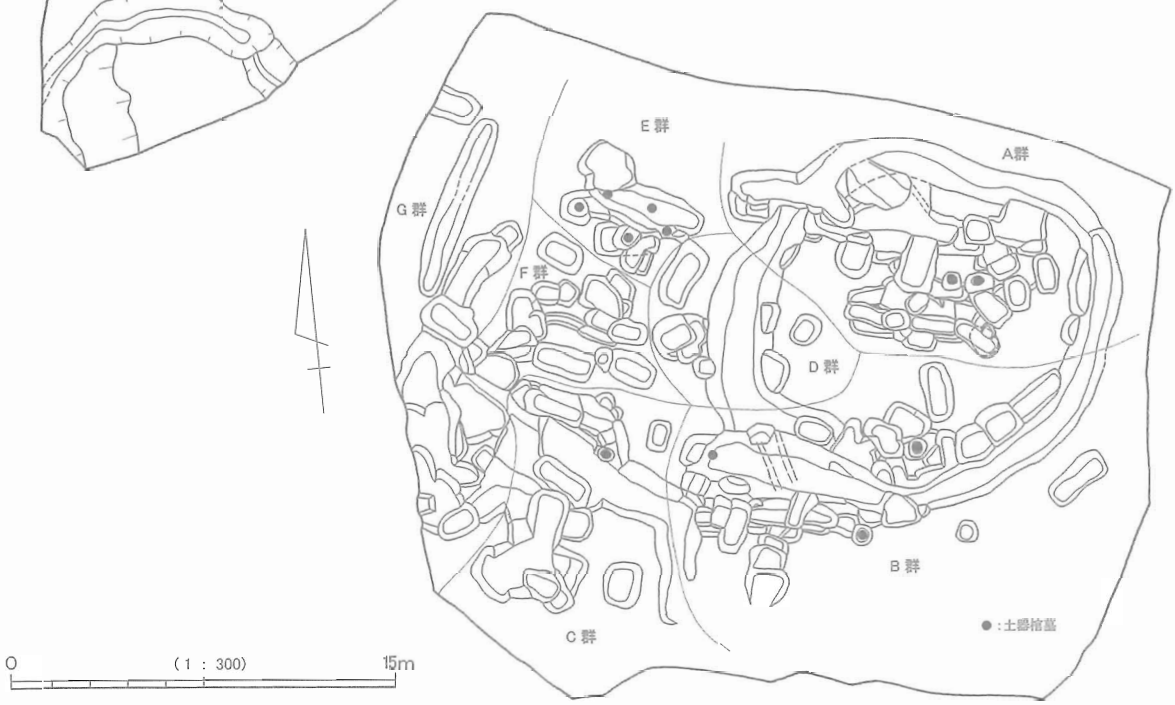
善千鳥遺跡では、台状墓（調査報告では低墳丘墓と呼称している）３基が発見・調査されている（森町教育委員会1988、森町史編さん委員会1998)。いずれの台状墓も、直径10m前後の不整円形で、周囲に溝を伴う。ただし、台状部の高まりの度合には大きな差があり、周溝墓に近いものもある。一方、古墳時代後期前半の土器も出土しており、本遺跡群と同様、台状墓の形状が古墳築造によって改変されて

いる可能性も考えられる。埋葬施設は、台状墓中央の土坑墓が１基、単独の土坑墓が１基、土器棺墓が２基検出されている。概ね弥生時代後期の遺構群であるが、土器棺墓の１基は中期中葉のものである。台状墓などよりも土器棺墓が先行する可能性が指摘されている。

フケ遺跡は、本書で報告する範囲の東側（１・２区）が森町教育委員会によって調査され、２区で弥生時代の墓群が発見されている（森町教育委員会2004）。土坑墓130基と土器棺墓11基が、重なり合いながら密集した状態で検出されている。多くの土器が出土したほか、銅釧３点が土坑墓から出土している。弥生時代中期後葉～後期後半に形成された墓群であるが、溝が10条ほど検出されており、ある段階で区画を伴っていた可能性が指摘できる。２区の範囲は、フケ遺跡の中でも太田川流域をのぞむ尾根先端に位置し、地形の上でも特徴的な場所である。そこに形成された墓群は、他の遺跡で多く認められる方形周溝墓群などとは異なり、多くの埋葬施設が密集するという特徴的な様相を示している。なお、土坑墓が少ない調査区の西縁部分では、尾根を横断するような区画溝が検出されており、方形周溝墓の存在が指摘できる。



第５図　善千鳥遺跡の遺構



第６図　フケ遺跡２区の遺構

(3) 古墳時代

森町の遺跡の中で、最も多いのが古墳時代の遺跡であり、その大半が古墳（群）・横穴群である。

集落跡　園田地域にある集落跡の調査は、先述の北垣遺跡・弥勒平遺跡があげられる程度である。ともに古墳時代前期の可能性がある住居跡が調査されているほか、北垣遺跡では竈を伴う住居跡が検出されている。また、弥生時代と同様、未調査の名栗遺跡などに集落跡があるのではと推定されている。

墓　域　園田地域における前期古墳の存在は明らかではない。本遺跡群のように、弥生時代の墓域が古墳時代前期にまで至る場合は考慮されるが、そこに古墳の存在は認められない。また、本事業で調査した中屋敷遺跡では、一辺20m弱の方形周溝が検出され、古墳時代前期の土器が出土している。ただし、大きな削平を受けており、古墳か周溝墓かについては検討を要する。

時期の明確な古墳の内、最も古いのは中期中葉の古墳である。本事業で調査した円田丘陵の古墳群（文殊堂古墳群・宇藤蓮台古墳群・林古墳群）のほか、井谷ノ谷古墳群・菖蒲ヶ谷古墳群の調査によって、中期中葉～後期前半の木棺直葬を埋葬施設とする古墳が多く認められている。奥谷田Ⅰ遺跡では、墳丘を伴わない木棺墓が発見されており、中期後半の土器群と鉄斧・刀子が出土している。

後期後半以降になると、代表的な埋葬施設として横穴式石室が普及し、その後、横穴式石室墳の築造・追葬が終末期まで続く。それらの中には、文殊堂古墳群や石仏ノ坪古墳のように金銅装馬具や装飾付大刀が出土したとされる古墳も含まれる。古墳の築造・追葬の終焉は、円明寺古墳群や蓮華寺古墳群などの調査によって8世紀前半であるとされている。

大半の古墳は中小規模の円墳であるが、前方後円墳が3基（堤田古墳・東国古墳・西脇1号墳）確認されている。いずれも墳長40m以下と小規模である。西脇1号墳では、後円部の横穴式石室が確認されている（静岡県教育委員会2001）。しかし、ほかに築造時期を示す遺物の出土はない。周辺環境や墳丘形態・規模などを考慮して、いずれも中期後半から後期の間に築造されたものと想定されている。

後期後半以降、古墳群とは別に横穴群も展開する。園田地域では善千鳥横穴群などが知られている。その構築・追葬の終焉時期は、概ね横穴式石室墳と同様であると考えられている。

生産地　古墳出土の須恵器には他地域から入手したものが多く含まれるが、森町にも須恵器を生産したであろう窯跡が知られている。森山古窯周辺では、終末期の須恵器や窯壁片が散布している。観音堂横穴6号横穴や円明寺3号墳、菖蒲ヶ谷8号墳から出土した須恵器の中に似た製品があり、これらに供給したことが指摘されている。

(4) 古代以降

古代以降の遺物が出土・採集されている遺跡は多いが、性格を明示できる遺跡は少ない。

北垣遺跡や中屋敷遺跡では、本事業によって掘立柱建物跡などが発見され、周囲から古代～中近世の遺物が多く出土している。また、香勝寺遺跡では15世紀頃の堀のほか、平安・鎌倉時代の遺構・遺物が発見されており、集落跡の可能性が指摘されている。岩名栗遺跡では集石墓や中世石塔の存在が知られ、北垣遺跡や文殊堂古墳群では中世墓が調査されている。さらに、本遺跡群より北西の丘陵地内には、窯跡が知られている。陣屋峠古窯では奈良時代の土器や多くの瓦、西脇古窯・金谷前古窯では山茶碗が採集されている。その他、大門遺跡から出土した7万枚以上の埋蔵銭が注目に値する。

文殊堂古墳群では、大きく長い南北方向の溝が検出されている。付近に小國神社への勅旨の道があるとされており、その関連遺構である可能性が指摘できる。小國神社は、奈良時代の記録（『続日本後紀』）にもある由緒ある一宮の神社であり、現在も崇敬の対象となっている。

第４章　文殊堂遺跡

第１節　概　要

１．基本土層と検出地形

基本土層　本遺跡の基本土層は、概ね以下のとおりに把握することができる。

Ⅰ：表土　　Ⅱ：古墳群形成以降の堆積・崩落・流土層

Ⅲ：古墳の盛土　　Ⅳ：古墳築造前の旧表土および堆積・崩落・流土層

Ⅴ：地山（主に丘陵の基盤層）

Ⅰ層は、褐色を基調とする土層である。人為的な撹乱はほとんどないが、根などの影響を多く受けている。Ⅱ層は、褐色～暗赤褐色の砂質土層である。堆積の少ないやせ尾根上であるため、大半においては確認できない。斜面部では、流土層として確認できる部分がある。Ⅲ層は、基本的には丘陵を掘削した土を盛ったものと判断できる。Ⅳ層には、まず黒～暗褐色の旧表土層があげられる。その他、褐色を基調とした堆積・崩落・流土層が認められる部分がある。Ⅴ層は、丘陵を構成する基盤層であり、明黄～赤褐色の砂質土層、黄色～灰色の砂層、白色の泥岩層、河原石による礫層がある。丘陵はこれらの層が互層となって構成されるが、断層の影響もあって単純化はできない。砂層もしくは砂質土層が検出された部分が多く、礫層が現れた部分は少ない。

Ⅲ・Ⅳ層の状況　いくつかの古墳の墳丘範囲内においては、古墳の盛土（Ⅲ層）が残り、その下に古墳築造前の旧表土や堆積土などの層（Ⅳ層）が残されていた。

１・５・６・８・９号墳では、盛土（Ⅲ層）の下に黒褐色の旧表土（Ⅳ層）の広がりが認められた。ただし、５・８・９号墳における盛土（Ⅲ層）直下の黒～暗褐色土層の広がりは、限定されていた。２・３・４・10・11・12号墳では、黒褐色土の旧表土はなかったが、Ⅴ層直上に暗褐色や褐色系の砂質土層の広がりが認められた。７号墳においては、Ⅲ・Ⅳ層が完全に流失していた。

以上のように、墳丘範囲におけるⅤ層直上層の状況には、古墳による差異がある。地形や環境による堆積の有無・度合の違いが考慮されるほか、墳丘築造前の整地による影響も考慮する必要がある。とくに、２・３・４・10・11・12号墳にみられたⅤ層直上層（暗褐色や褐色系の砂質土層）には、盛土もしくは整地層が含まれている可能性がある。

古墳の墳丘範囲外においても、次の場所でⅣ層が認められている。１区東半部では、黄褐色を基調とする砂質土の堆積が確認でき、その層から弥生土器や縄文土器片が出土した。６号墳の北側では、西に下る崩落部が検出され、褐色～暗赤褐色のⅣ層が認められた。さらに、６号墳の南側では、暗褐色～黒褐色砂質土層（Ⅳ層）の堆積が認められた。

地形の概要　文殊堂遺跡は、南南東にのびるやせた丘陵上に立地する。調査区は、丘陵頂上部を中心に丘陵斜面の上方までを含むが、幅は最大でも35m弱にしかならない。その中でも、比較的丘陵頂上部の広い部分と狭い部分が存在する。１区の北側は、林古墳群が立地する丘陵との交差部になるが、丘陵の幅は狭くなっている。また、１・２区間や２・３区間の部分も極端に狭くなっている。３区は、１・２区に比べて丘陵頂上部が広くなる。なお、３区の南側の一段下がったところには、北垣遺跡が立地する広い段丘上平坦面が広がっている。

検出地形と本来の地形　本書で報告・掲載する地形は、遺構検出面での地形であり、Ⅴ層上面を検出した状態の地形である（以下、検出地形）。厳密には、報告する諸遺構が形成された面（遺構面）による古墳群形成前の地形（以下、本来の地形）とは異なる。

第一に、遺構面が必ずしもⅤ層上面ではないという点が指摘できる。Ⅳ層を掘り下げていく途中で、土坑が発見されたり、土器棺の上部が現れたりすることが少なくなかった。すなわち、Ⅳ層上面もくしは中位に遺構面があった可能性が指摘できる。第二に、地割れ・崩落・流土の影響が大きい丘陵であり、本来の地形よりもやせ尾根の様相が強くなっている可能性が指摘できる。さらに、古墳の周溝や埋葬施設、中近世の墓や溝に伴う地形改変の存在は明らかである。ただし、各古墳が地形を利用して築造された小規模円墳であること、Ⅴ層直上にⅣ層に関連する黒～暗褐色土が認められる古墳が少なからずあること、墳丘範囲内の検出地形がさほど不自然ではないこと、盛土の下で検出された古墳群形成前の遺構の残存状況が比較的良好であることから、古墳構築に際して行われた整地による影響は、さほど大きくなかったと判断することができる。

以上のように、本書で報告・掲載する検出地形は、本来の地形もしくは遺構面の地形を正確に示したものではないことが指摘できるが、概ねの地形的特徴は残しているものと考えて問題ない。地形の詳細については、次節以降に図を含めて示す。

2．調査区および遺構・遺物

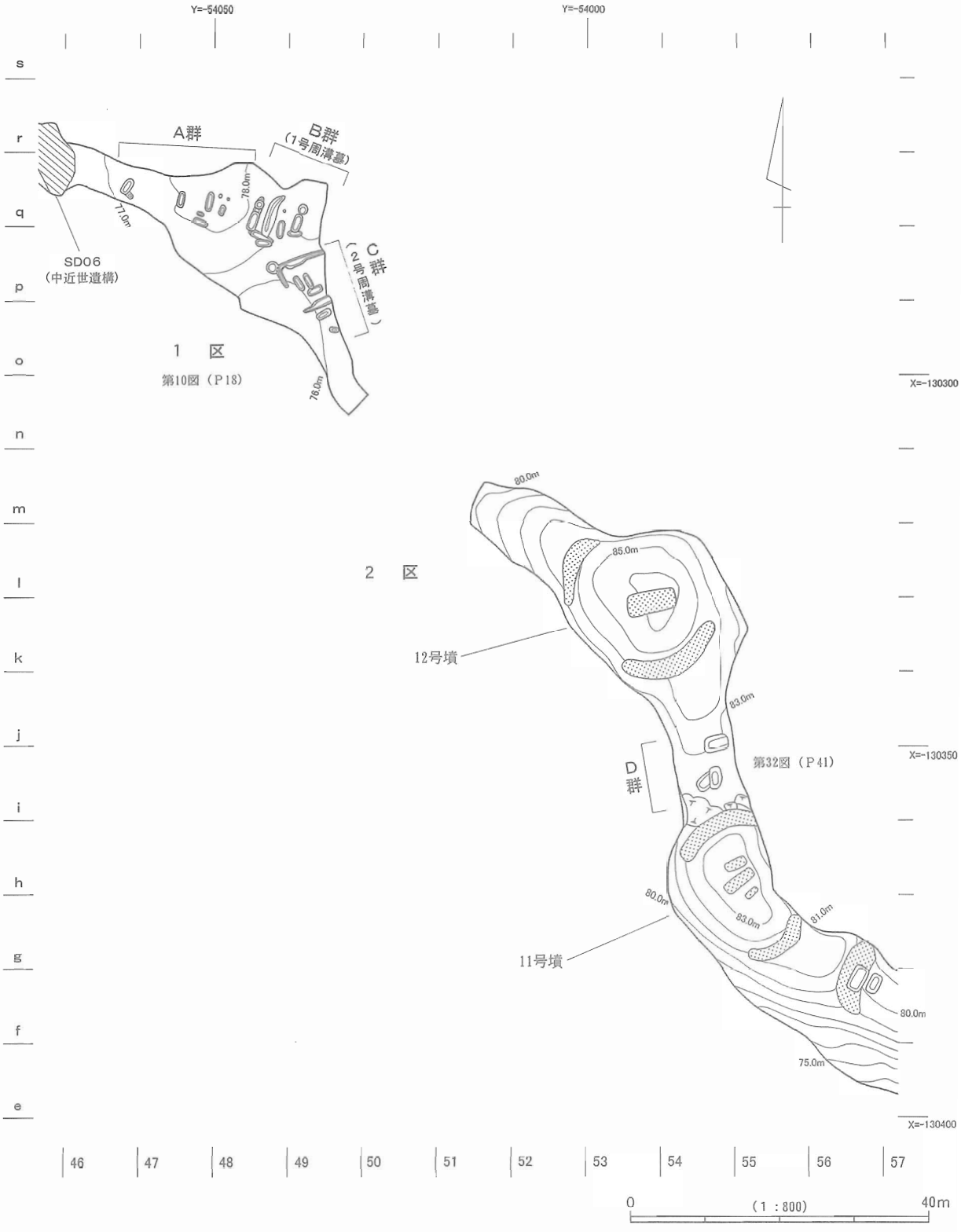
調査区・部　本遺跡については、今回が最初の正式な発掘調査である。また、今回の調査は遺跡の全域を対象としている。したがって、今回の調査以外に実施される調査、設定される調査区はない。調査区は、地形によって3つに分断されており、北から1区・2区・3区とする。さらに、2区は南北に長く、地形や遺構の分布によって、北部・中央部・南部に分けられる。また、3区についても、2区ほど明確ではないが、遺構分布や地形から北部と中央・南部とに分けることができる。

遺物の出土状況　出土遺物には、縄文時代の土器・石鏃、弥生時代の土器（土器棺を含む）・石器（石鏃）・玉類・金属製品がある。出土状況については、遺構外（Ⅰ～Ⅳ層）出土と遺構内出土に大別される。弥生土器については、土器棺を除くと墓群を対象とした供献土器が大半を占めることから、遺構外の出土であっても出土した場所が重視される。

なお、各遺物の出土遺構や出土位置については、実測図や観察表に記している。遺構外の出土位置の表記については、調査区やグリッド・遺構群などによるほか、古墳における位置関係で表記したものもある。「○号墳西部」は墳丘部分の西寄り部分、「○号墳周溝南部」は墳丘より南にある周溝範囲内、「○号墳北側」は古墳よりも北側（墳丘・周溝の範囲外）を示す。「○号墳盛土」は、原位置の特定が難しい状態で盛土（Ⅲ層）から出土したことを示す。

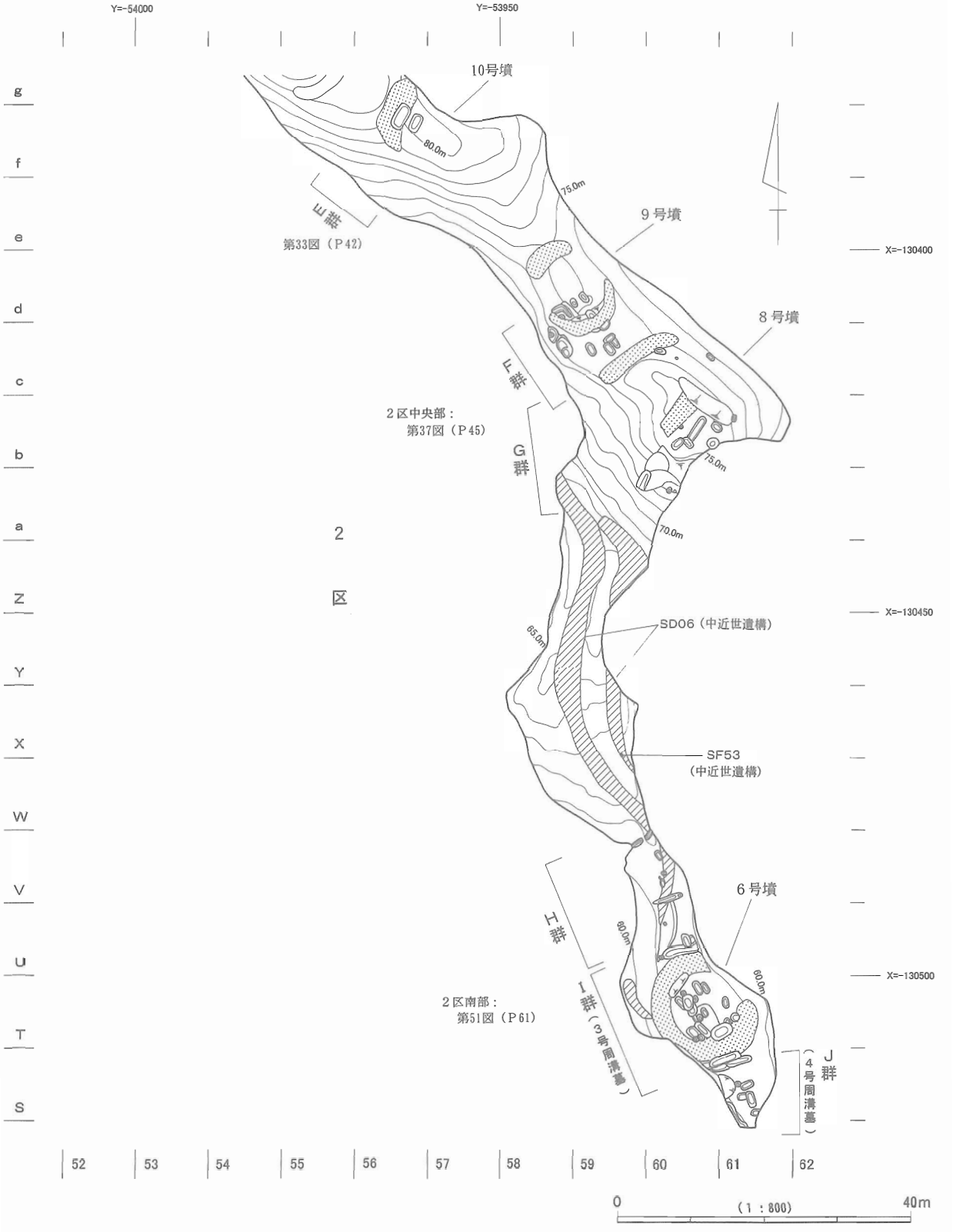
検出遺構の種類　Ⅴ層上面における検出遺構には、土坑（SF01～SF116）、小穴（SP01～SP09）、溝（SD01～SD25）、その他・不明遺構（SX01～SX06）がある。これら遺構の大半は、層位・遺構面や遺構の形状・出土遺物などから古墳群形成前の遺構であると判断でき、概ね弥生時代の墓域に関連する遺構で占められる。しかし、SF53・SF76・SF93・SF100・SF101・SF108・SD06・SD22・SD23は、明らかに古墳群形成以降の遺構である。また、SP01・SP02・SP05・SP09・SD05・SD06・SD07・SD08・SD19・SD20・SX06 は、弥生時代の墓域には少ない形状・特徴の遺構である。出土遺物などの明確な根拠はないが、墳丘範囲内にあることから、古墳築造に関連して形成された可能性も指摘できる。これら遺構の詳細については、古墳群形成以降の報告（別書）で述べることとする。

古墳群形成前の遺構の内、SF10～SF12は縄文時代の遺構（落し穴など）であるが、その他は弥生時代の墓域に関連した遺構である可能性が高い。その多くは土坑であり、土器棺墓・土坑墓といった埋葬施設で占められている（SF）。なお、土坑墓とした中には木棺墓が含まれている可能性が高い。しかし、



第7図　調査区全体図1

木棺の有無を確実視できる土坑が少ないため、本章では木棺墓を含めて土坑墓として扱う。この他、弥生時代の墓域を構成する遺構としては、埋葬施設の周辺施設である可能性が指摘できる遺構（SX）、墓群を区画するような溝（SD）がある。



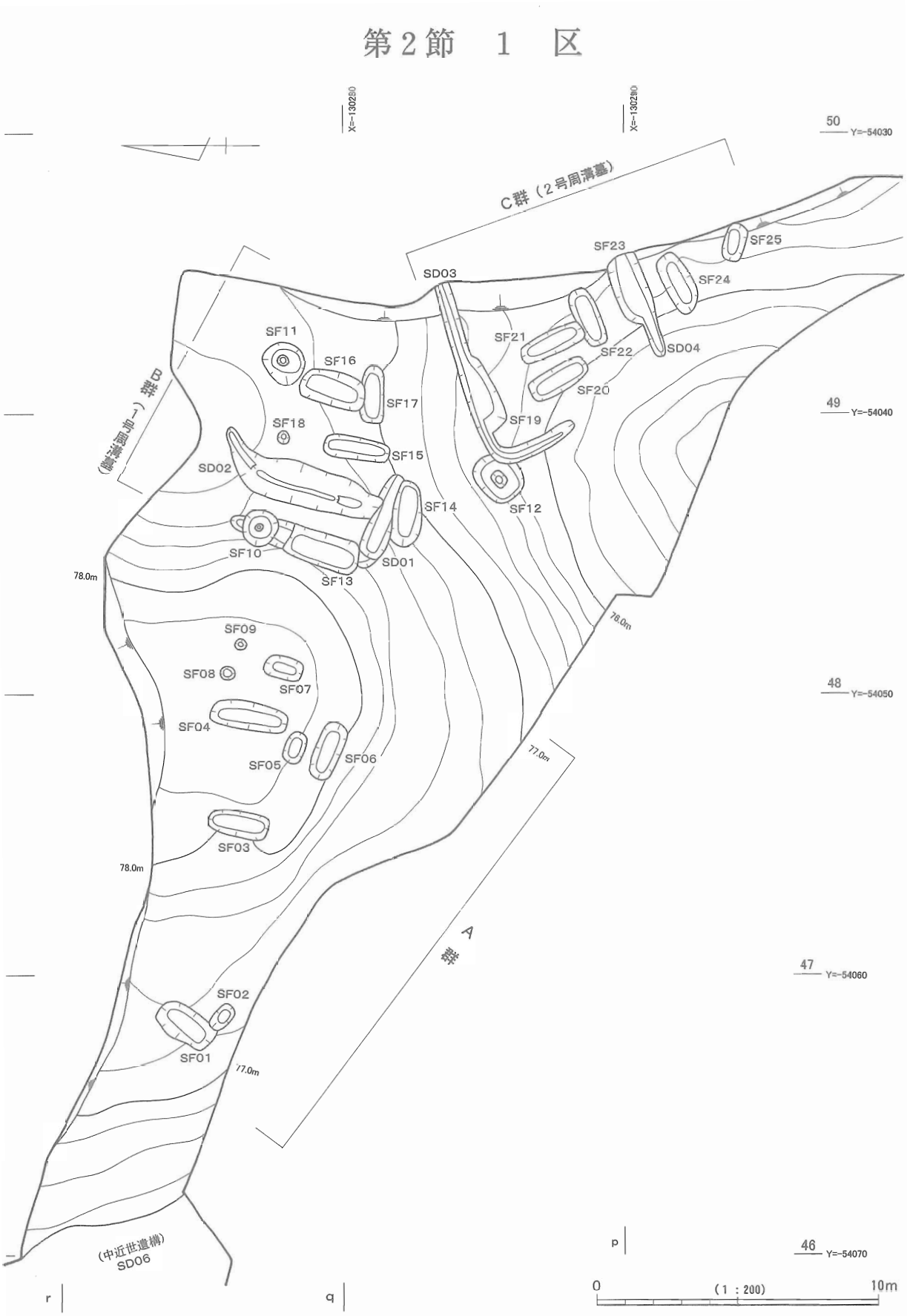
第8図　調査区全体図2

遺構群の把握　弥生時代の遺構は、尾根幅が広くなる場所に多く、数ヶ所に分かれて分布している。そして、微地形や遺構配置、区画と捉えられる溝の配置をみると、10～20mほどの範囲ごとに分けることができる。これを、A群～R群の遺構群として把握する。この遺構群は、あくまで遺構検出状況によって把握したものであり、墓域の形成過程や集団の差異を反映しているとは限らない。しかし、遺構の諸特徴が遺構群の別に対応する場合が多く、概ね墓群に対応するものとして推測することもできる。

周溝墓の把握　本遺跡には、区画の溝が認められる墓群が8ヶ所ある。溝を廻らせる周溝墓は、弥生時代の墓制として周辺地域に多く認められている。一方、周辺地域には台状墓とされているものもあり（第3章）、そこにも周溝が伴う場合がある。周溝墓と台状墓の違いは、周溝の有無ではなく、盛土の有無や立地地形に反映される高まりの度合いにあると考えられる。ただし、厳密な基準によって分けているものではなく、本遺跡においても双方を分けて称することは難しい（第8章）。本書においては、周溝を伴う墓群全てを周溝墓と呼称し、その一部を台状墓として区別することはしない。なお、検出状況では盛土を伴う弥生時代の墓の存在は認められていない。

第9図　調査区全体図3

第2節　1　区



第10図　1　区

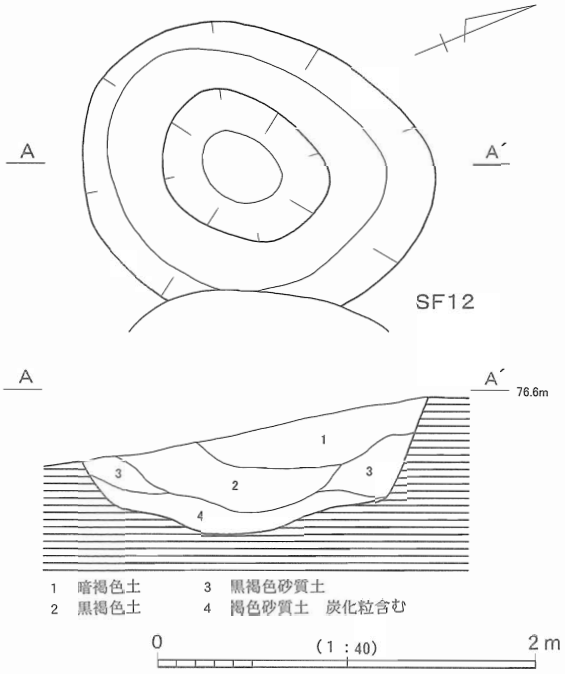
1．縄文時代の遺構

SF10・SF11（第12図）　ともに、直径1.4m前後、深さ1.4m強の円形土坑で、底面中央に直径0.4m弱、深さ0.4m前後の小穴を伴う。覆土は、SF10が黄褐色、SF11の上半が礫を含む暗黄褐色、下半が黒～暗褐色の砂質土である。いずれもしまりが強く炭化粒を含む。出土遺物はない。

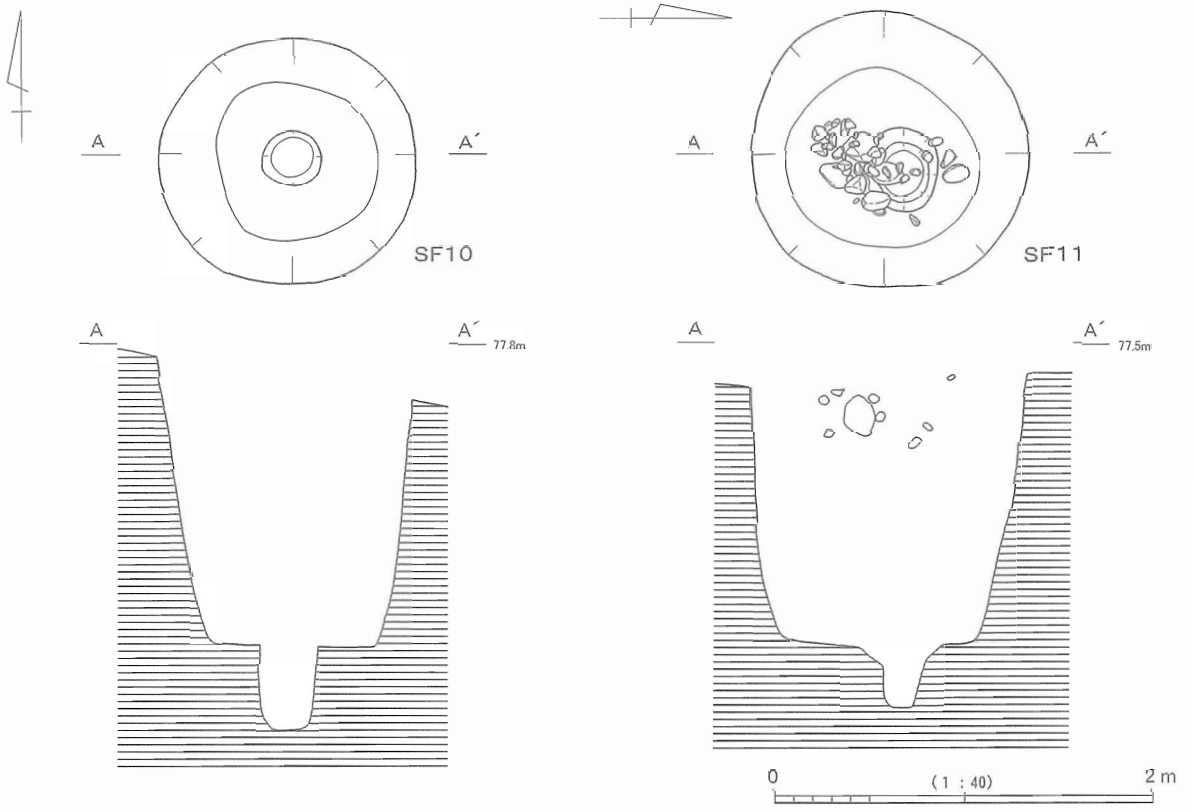
遺構の形状・覆土は、弥生時代の墓域の遺構とは異なる。周辺から縄文時代中期後半～末の遺物が出土していることから、SF10・SF11はその頃の落し穴であり、底の小穴は逆茂木の跡と判断できる。

SF12（第11図）　長軸約1.9mの楕円形、深さ約0.7mの土坑である。覆土下部の褐色砂質土層は、しまりが強く炭化粒を含む。出土遺物はない。

遺構の形状・覆土は、弥生時代の墓域の遺構とは異なる。覆土にSF10などとの共通点があることから、縄文時代の遺構の可能性が高いと判断できる。しかし、落し穴としては浅く、性格は不明である。



第11図　SF12

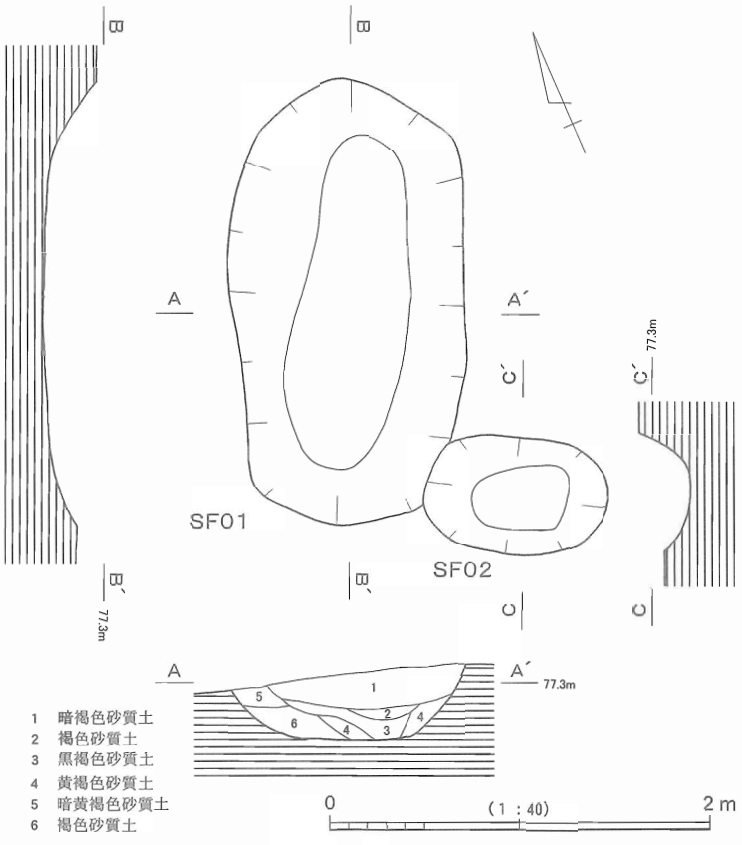


第12図　SF10・SF11

2．A　群

1区の中央～西部、東西約18mの範囲にある遺構群である。Ⅰ層直下にⅤ層（砂層）が現われ、その上面で土坑墓7基と土器棺墓2基が検出されている。

1区の中央部は周囲よりも高く、東西12m前後の方形台状部のような地形を呈する。そこに、土器棺墓2基（SF08・09）と大小の土坑墓5基（SF03～07）が、整然と配置された状態で検出されている。しかし、周囲と区画するような溝は検出されていない。一方、1区の西部は比較的緩やかに西に下る地形を呈し、そこに大小2基の土坑墓（SF01・02）が接した状態で検出されている。



第13図　SF01・SF02

(1)土坑墓

SF01・SF02（第13図）　西に下る緩斜面に立地する。ともに長楕円～長方形を呈し、深さは0.3～0.4mと浅い。しかし、規模はSF01が約1.2m×約2.4m、SF02が約0.6m×1.0m弱と異なる。また、両者は主軸を直行させている。なお、両者は接するが、浅い検出のために先後関係は判断できない。覆土は、SF01上層とSF02が暗褐色砂質土、SF01下層が黒褐色や黄褐色の砂質土である。木棺の痕跡はともに認められず、また出土遺物もない。

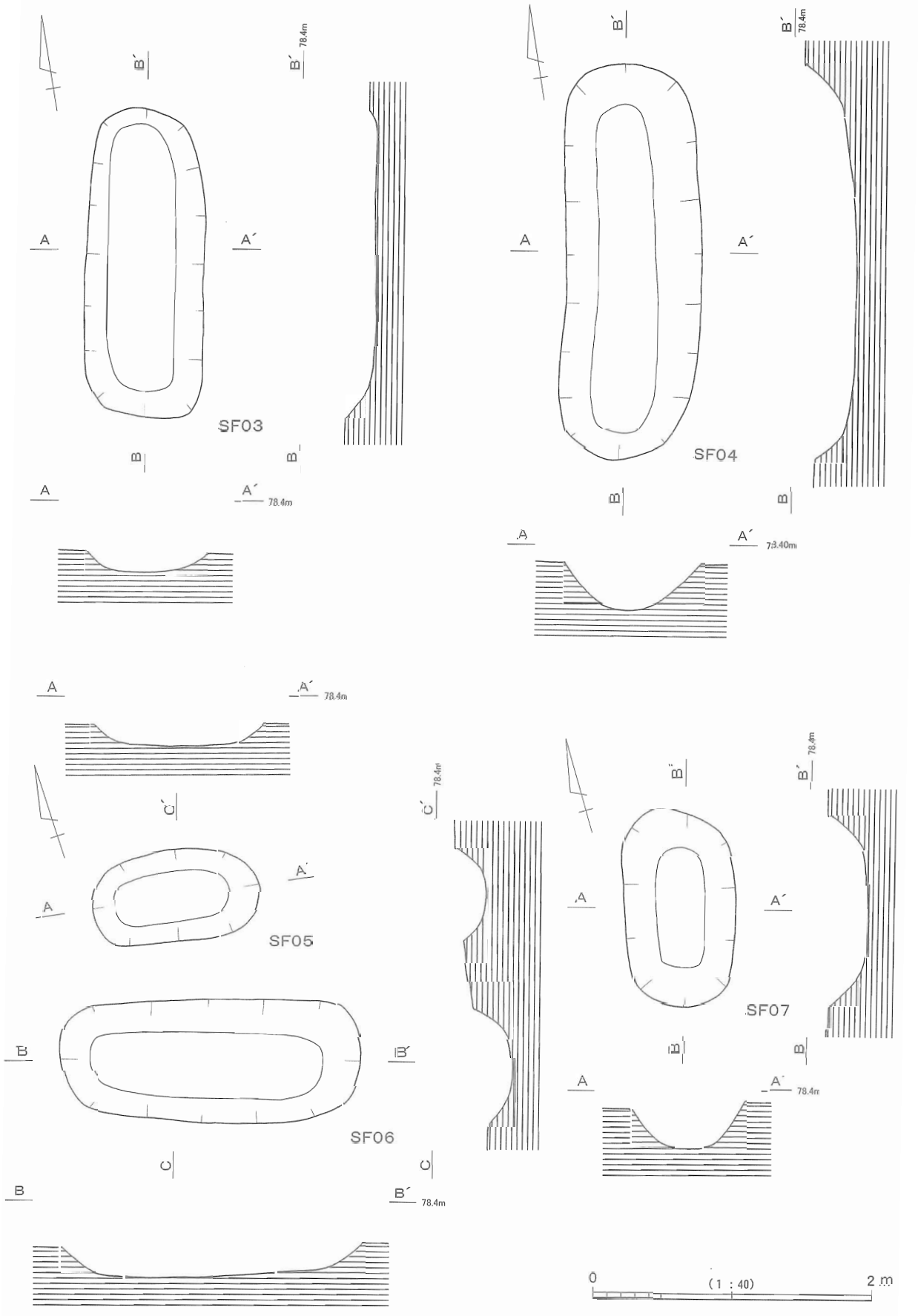
遺構の特徴や周辺域の出土遺物から、ともに弥生時代後期の土坑墓である可能性が高いと判断できる。

SF03・SF04・SF07（第14図）　この3基の土坑は、主軸を南北方向に近く丘陵筋に直行させ、方形台状部状の範囲に平行して並ぶ。SF04を中央とし、西にSF03、東にSF07が位置する。いずれも長楕円～長方形を呈し、深さは0.2～0.4mと浅い。平面規模はそれぞれ異なり、SF03は0.9m弱×約2.2m、SF04は1.0m弱×約2.8m、SF07は約0.8×1.4mである。覆土は、全て暗褐色砂質土であり、木棺などの痕跡は認められていない。SF04・SF07の覆土から、弥生土器の破片が出土している。

遺構の特徴および出土遺物などから、弥生時代後期の土坑墓である可能性が高いと判断できる。さらに、平行する主軸方向や大小差のある規模の特徴などに、被葬者の出自・性別・年齢などが反映されている可能性が指摘できる。

SF05・SF06（第14図）　2基の土坑は、台状部状の範囲の南部に位置する。主軸は東西方向に近くSF04などと直行させ、SF05が北、SF06が南に並ぶ。ともに長楕円～長方形を呈し、深さは0.2～0.3mと浅い。覆土は暗褐色砂質土層、木棺の痕跡は認められず、出土遺物はない。平面規模はSF05が0.7m弱×1.2m、SF06が0.9m弱×2.2m弱と両者で異なる。

遺構の特徴および周辺域の出土遺物から、弥生時代後期の土坑墓である可能性が高いと判断できる。さらに、SF03・SF04・SF07と同様に両土坑間の関連性が指摘できる一方、主軸を直行させるSF03・SF04・SF07との対照性も指摘できる。



第14図　SF03～SF07

(2) 土器棺墓

SF08（第15図）　台状部状の範囲の東部に位置する。土坑は最大径約0.5mの円形を呈する。深さは0.2m強を検出したが、本来はより深かったと推測できる。覆土は暗褐色砂質土である。この土坑の中央に土器棺が埋置されていた。

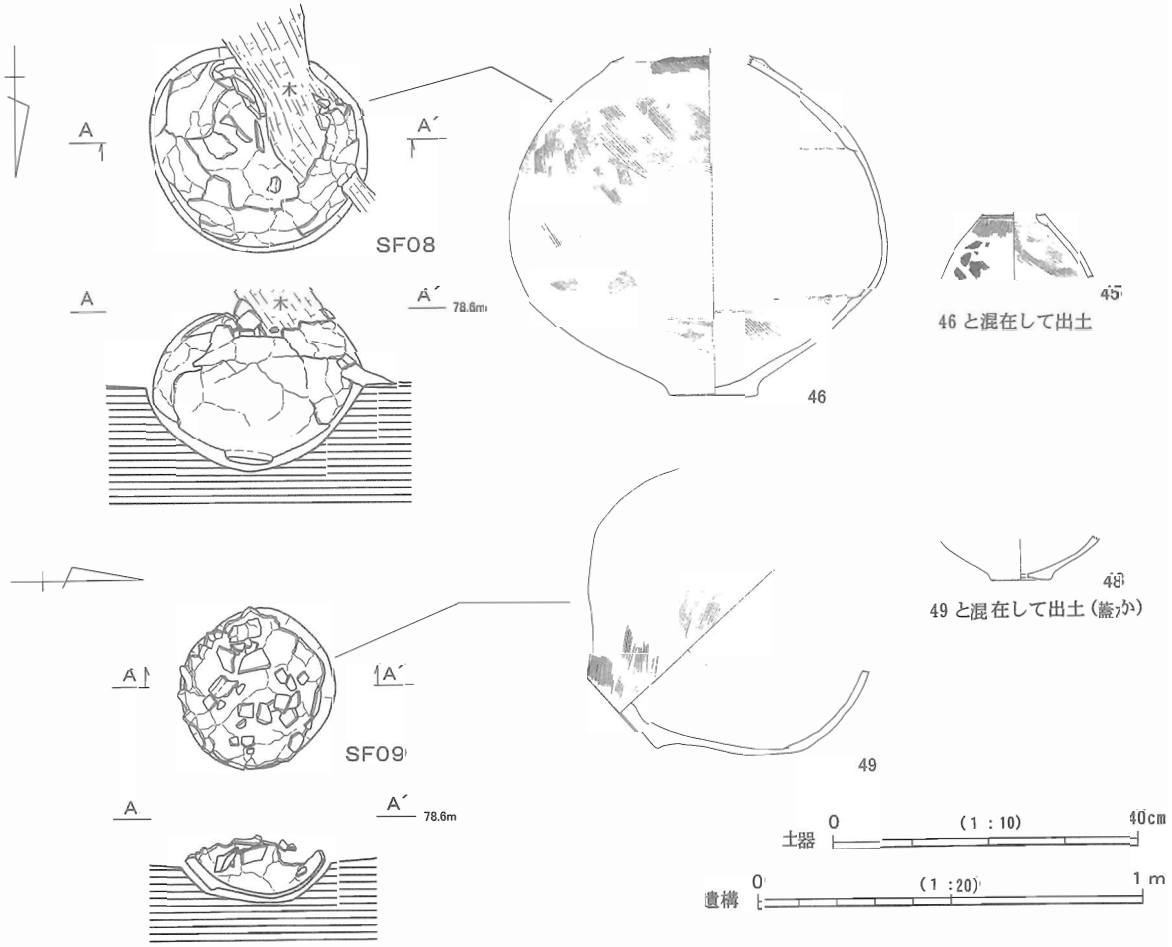
土器棺の身は、胴部最大径約0.5mの壷（第29図46）である。ほぼ正位に置かれていた。上部が木の根の影響もあって破壊されていたが、頸～口縁部は破片でも出土していない。頸部以上を欠いた状態で用いられたと考えられる。また、上部の破片群に混在して別個体の壷の胴部片（第29図45）が出土しているが、蓋であったものか、周囲の供献土器の破片が混入したものかは判断し難い。その他の出土遺物はなく、土器棺内には砂質土が流入していた。

土器棺の形態などから、弥生時代後期中葉～後半の土器棺墓である可能性が高いと判断できる。

SF09（第15図）　台状部状の範囲の東部、SF08の南東約1.2mに位置する。土坑は直径約0.4mの円形を呈する。深さは約0.1mを検出したが、本来はより深かったと推測できる。覆土は暗褐色砂質土である。この土坑の中央に土器棺が埋置されていた。

土器棺の身は、胴部最大径0.4m強の壷（第29図49）である。正位より北に傾けて置かれていた。上部の破壊が著しいものの、頸～口縁部にあたる部分は破片でも出土していない。頸部以上を欠いた状態で用いられたと考えられる。また、破壊された破片の中に、別個体の壷の底部片（第29図48）が混在して出土しており、これが蓋であった可能性がある。その他の出土遺物はなく、土器棺内には砂質土が流入していた。

土器棺の形態などから、弥生時代後期中葉～後半の土器棺墓である可能性が高いと判断できる。



第15図　SF08・SF09

３．Ｂ　群

１区の北東部、10m弱四方の範囲にある遺構群である。この範囲においては、表土（Ⅰ層）と砂層（Ⅴ層）との間に、黄褐色を基調とする砂質土層（Ⅳ層）が南に向かって厚く堆積しており、そこから弥生土器片が多く出土している（第24・25図）。遺構の検出はⅤ層上面で行ったが、Ⅳ層を掘削除去する途中で一部の遺構の存在が確認できたこと、さらにⅣ層出土遺物が遺構部分に集中していたことから、本来の遺構面はⅣ層の中にあった可能性が高いと判断できる。

既述の縄文時代の遺構（SF10・SF11）以外に、溝２条（SD01・SD02）と土坑６基（SF13～18）が検出されている。これらは、出土遺物から弥生時代後期後半を中心とする可能性が高く、SF18は土器棺墓であり、SF13～17は土坑墓の可能性が高い。溝は、四辺を廻ることはないが、本遺構群と周囲とを区画する位置にある。したがって、この遺構群が方形周溝墓である可能性を指摘することができる（１号周溝墓）。Ⅴ層上面の検出地形においては、決して良好な立地であるとはいえない。しかし、Ⅳ層中に本来の遺構面があるとすると、検出地形よりも傾斜が緩く平坦部の広い地形であったと想定できる。

(１) 溝

SD01・SD02（第16図）　SD01は、Ｂ群（１号周溝墓）の西側から南側へとL字にのびる溝である。西辺は幅約1.0m、深さ約0.6mであり、南半部でSF13と重なる（先後関係はSF13を参照）。屈折部で0.1mほど浅くなり、南辺では標高約76.8mまで深くなる。覆土は暗褐色などの砂質土層であり、弥生土器片が出土しているが、多くはSF13の部分からの出土である（第24図４～７）。

SD02は、SD01西辺の東側で平行してのびる溝である。ほぼ直線的であるが、北端部で西へと曲がる。幅約1.5m、深さ1.4m弱である。ただし、南北の両端部では幅1.0m以下、深さ1.0m程になる。断面は、SD01よりもＶ字に近い。覆土上層は暗褐色土を中心とし、下層には明褐色や黒褐色など様々な砂質土が認められる。上層を中心に、多くの弥生土器（第24図８～15）が出土している（図版５）。

遺構内の出土遺物などから、弥生時代後期後半頃の方形周溝墓の溝である可能性が評価できる。四辺に至る状態には検出できていないが、本来の遺構面が遺構検出面よりも上面であった可能性を考慮すると、検出状況よりも長くのびていた可能性が指摘できる。ただし、SD01とSD02とが同一周溝墓において並存したとするには無理がある。先後関係を明らかにすることはできないが、出土遺物にある程度の時期幅があることから、両遺構の時期が異なる可能性は考慮する必要がある。一方、SD01の南辺は土坑墓、西辺はＡ群の東側を区画する溝であった可能性も考えられる。

(２) 土坑墓

SF13・SF14（第17図）　SF13は、SD01西辺の南半部に重なる。約1.2m×2.8mの長方形を呈し、深さは約0.7mである（SD01西辺との底面の比高は0.1m以下）。主軸は南北に近く、SF15やＡ群のSF04などと平行する。土層によるSD01との先後関係の確認はできなかった。しかし、調査では先にSD13を発見し、後にSD01の存在にたどり着いている。この点を評価するならば、SD13が先にあったとは考え難い。木棺の痕跡は認められていない。供献土器の破片が出土したほか、底面近くから底部を欠いた小型壷（第24図４）が出土している。

SF14は、SD01南辺の南側に接する。1.0m弱×約2.3mの長楕円～長方形で、深さは0.5m弱である。主軸はほぼ東西で、SF13とは直行、SD01南辺やSF17と平行する。SD01との先後関係は、接する部分が少なく判断できない。覆土は暗褐色砂質土である。木棺の痕跡は認められず、出土遺物もない。

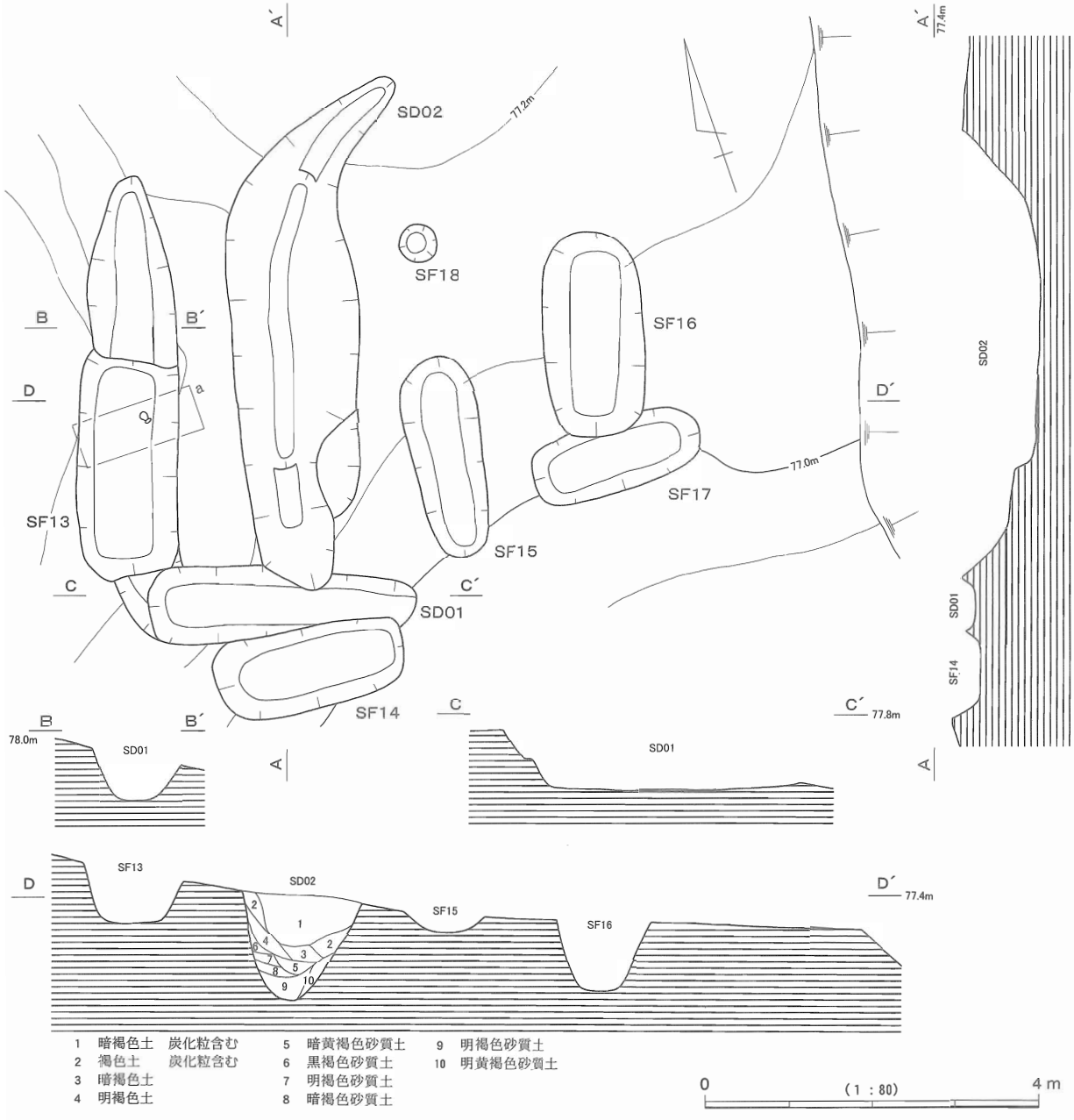
遺構の特徴や出土遺物から、ともに弥生時代後期中葉～後半の土坑墓の可能性が高いと判断できる。

SF15（第17図）　SD02のすぐ東に位置する。約0.9m×2.5m弱の長楕円～長方形であり、深さは約0.3mである。若干ではあるが南部が細くなる。主軸は南北に近く、SF13やSF16と平行になる。覆土は、暗褐色砂質土である。木棺の痕跡は認められず、出土遺物もない。

遺構の特徴や周辺域の遺物から、弥生時代後期後半頃の土坑墓である可能性が高いと判断できる。

SF16・SF17（第18図）　2基の土坑は、SF15の東側に位置し、互いに接した状態で検出されている。ただし、両者の先後関係については、接する部分が少ないために判断できていない。

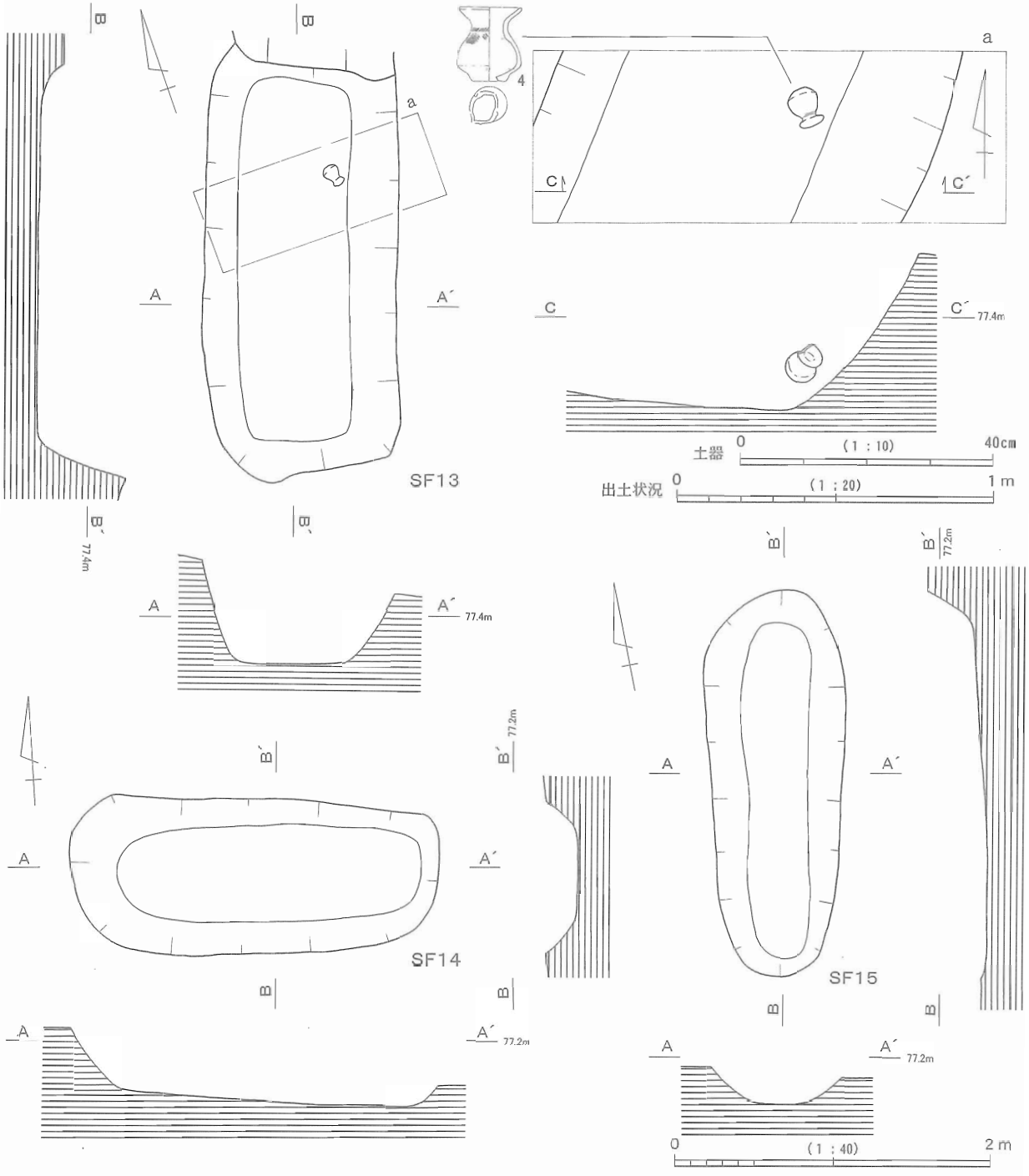
SF16は、約1.2m×2.5m弱の長方形であり、深さは約0.8m強である。周辺の土坑と比較すると、平面形に丸みが少なく、深さが際立っている。主軸は南北に近く、SF13やSF15に平行する。一方のSF17は、0.9m弱×約2.1mの長楕円～長方形であり、深さは0.2m強と浅い。主軸は東西に近く、SF16と直行、



第16図　B群（1号周溝墓）

SF14と平行する。SF16・SF17ともに、覆土は暗褐色砂質土であり、木棺の痕跡は認められていない。また、出土遺物もない。

遺構の特徴や周辺域の出土遺物から、ともに弥生時代後期後半頃の土坑墓である可能性が高いと判断できる。さらに、SF16は1号周溝墓の中心に位置することから、周溝墓形成の契機となった埋葬施設である可能性が指摘できる。形状・深さなどについても、周辺の土坑墓とは異なる性格・構造の埋葬施設であった可能性が指摘できる。



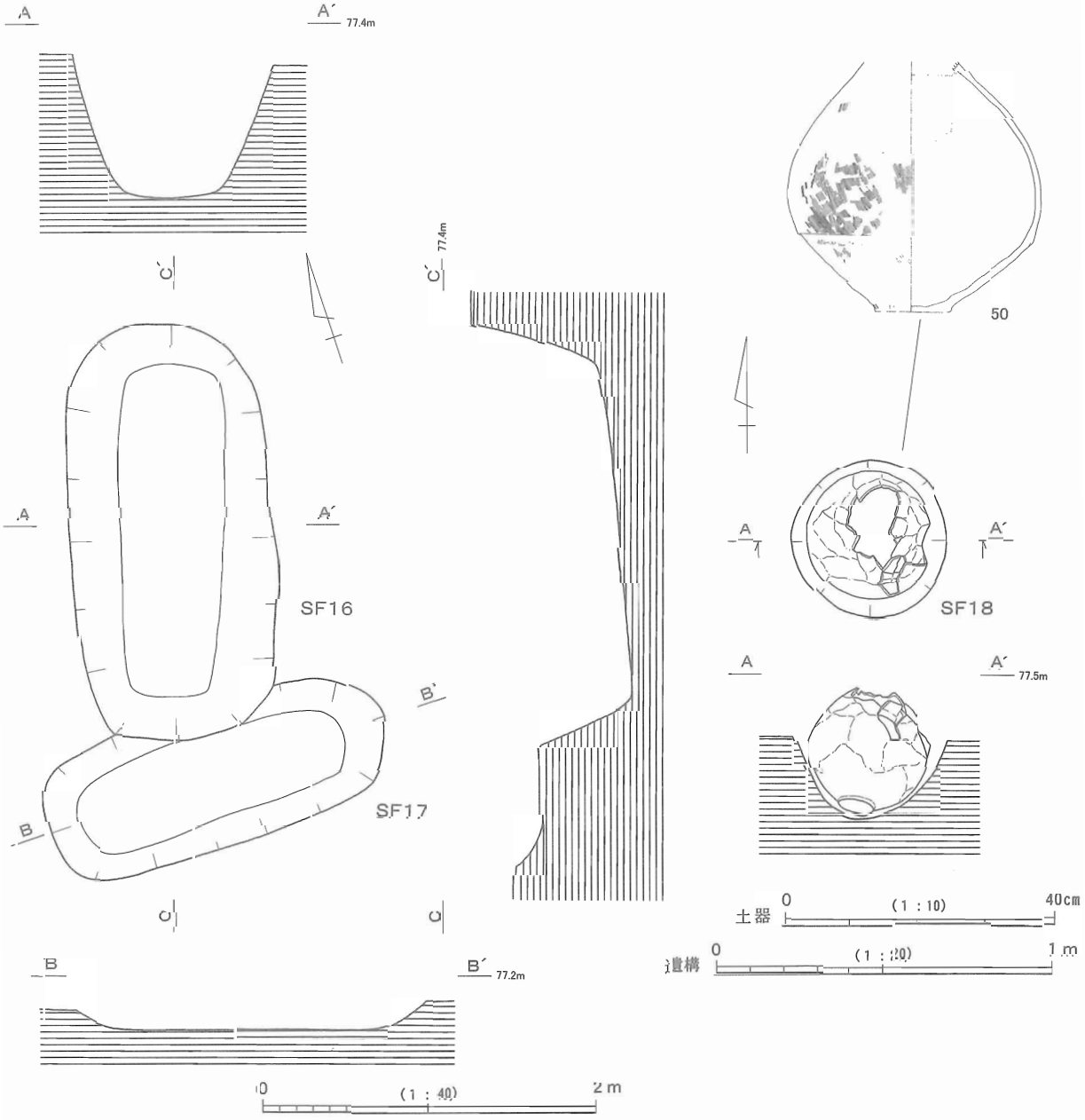
第17図　SF13～SF15

(3) 土器棺墓

SF18（第18図）　SF15の北、2号周溝墓台状部の北西寄りに位置する。土坑は、直径0.5m弱の円形を呈する。深さは約0.3mを検出したが、本来はより深かったと推測できる。覆土は暗褐色砂質土である。この土坑の中央に、土器棺が埋置されていた。

土器棺の身は、胴部最大径0.4m強の壷（第30図50）である。正位より若干北に傾けて置かれていた。上部の破壊が多少あるものの、頸～口縁部にあたる部分は破片でも出土していない。頸部以上を欠いた状態で用いられたと考えられる。また、他の個体の出土はなく、土器による蓋は認められない。土器棺内には砂質土が流入していた。

土器棺の形態から、弥生時代後期中葉～後半の土器棺墓である可能性が高いと判断できる。

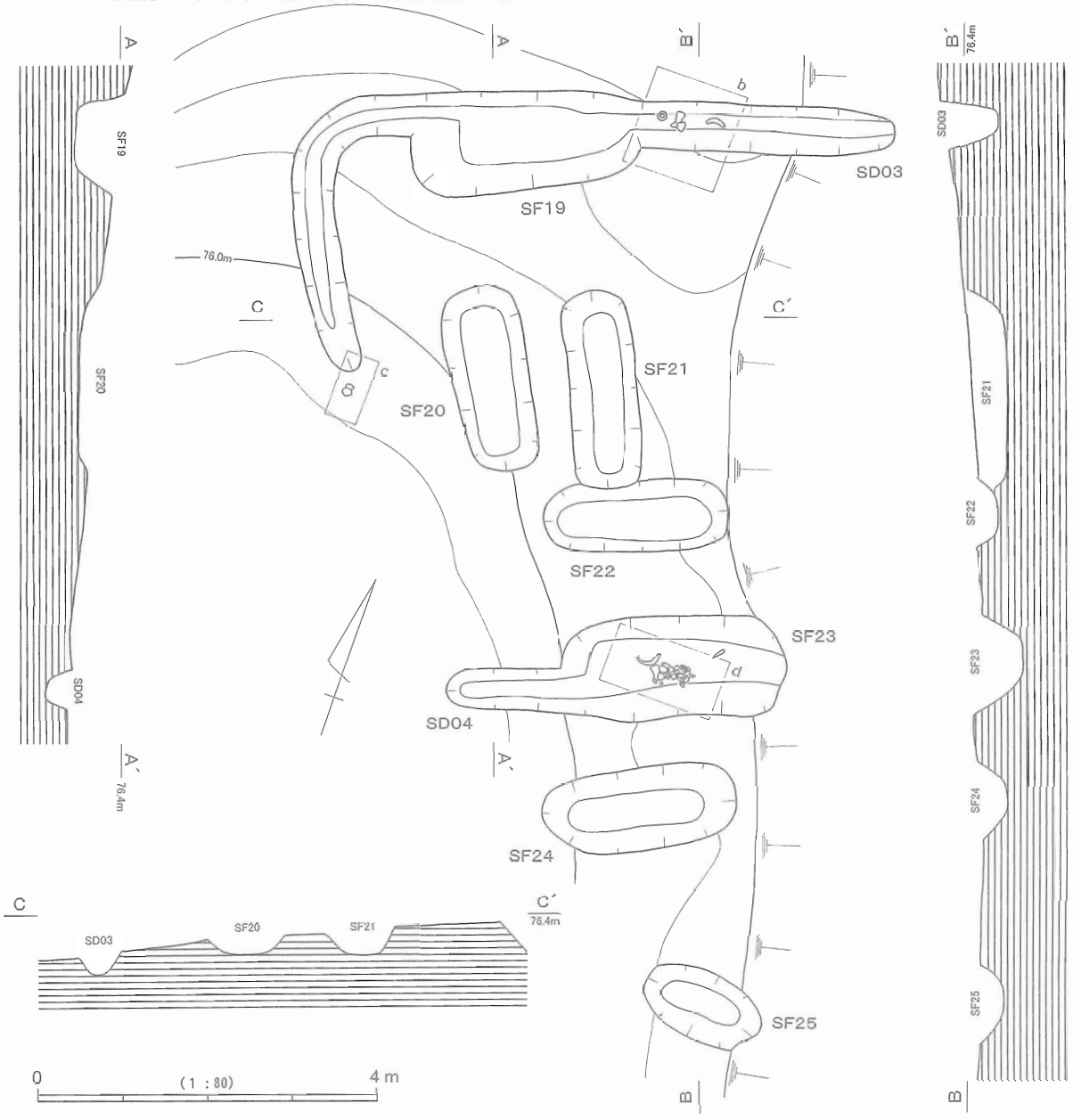


第18図　SF16～SF18

４．Ｃ　群

１区の南東部、南北12ｍの範囲にある遺構群である。この範囲においては、表土（Ⅰ層）と砂層（Ⅴ層）との間に、黄褐色を基調とする砂質土層（Ⅳ層）が南西に向かって厚く堆積しており、そこから弥生土器片が多く出土している（第28図）。遺構の検出はⅤ層上面で行ったが、Ｂ群と同様、本来の遺構面はⅣ層の中にあった可能性が高いと判断できる。

既述の縄文時代の遺構（SF12）以外に、溝２条（SD03・SD04）と土坑７基（SF19～25）が検出されている。溝の存在および出土遺物から、弥生時代後期中葉～後半の周溝墓１基が把握できる（２号周溝墓）。２号周溝墓は方形周溝墓であり、規模（南北の溝の中心間の距離）は約6.9ｍ、北西から南東にのびる尾根筋に沿って形成されている。台状部の高まりは想定し難い。SF19～25は土坑墓の可能性が高く、台状部・周溝部・外（南東）側に配置されている。土器棺墓はない。Ⅳ層中に本来の遺構面があるとすると、検出地形よりも平坦部の広い立地地形であったと想定できる。



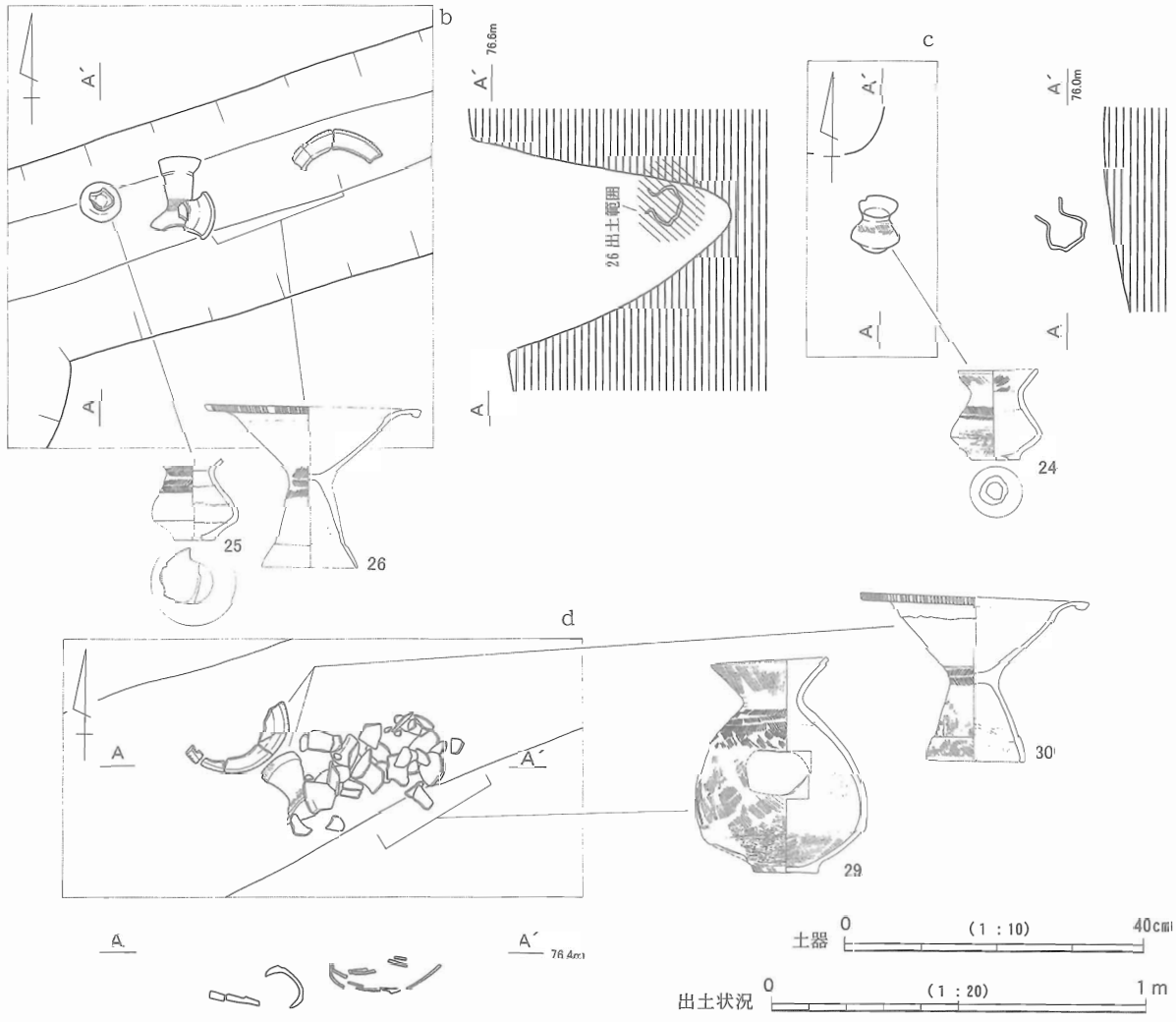
第19図　Ｃ群（２号周溝墓）

(1) 溝

SD03・SD04（第19・20図）　いずれも2号周溝墓の周溝であり、SD03は方形周溝墓の北辺から西辺のL字の溝にあたり、SD04は南辺の溝にあたる。周溝墓の東辺と西辺南半にあたる溝は、検出することができなかった。東辺については、崖になってしまっていたために検出できなかったのであり、本来は溝が存在した可能性がある。西辺南半部も、遺構面が検出面より上面であった可能性を考慮すると、本来は溝がのびていた可能性がある。ただし、SD03南西端およびSD04西端は立ち上がりをもって終わっており、完全には廻っていなかった可能性は評価しなければならない。

検出された周溝は、幅約0.5m強、深さ約0.6m以下であり、断面は逆台形～V字形を呈する。北辺ではSF19と、南辺ではSF23と重なる（先後関係はSF19・SF23を参照）。覆土は上層が暗褐色土であり、下層は砂質土である。弥生土器の出土は多く、SF19東側の下層では高坏（第26図26）と小型壺（第26図25）、SD03南西端では小型壺（第26図24）、SF23にあたる部分の上層では壺（第27図29）と高坏（第27図30）が出土している。2号周溝墓もしくは周溝墓に属する埋葬施設に伴う供献土器である可能性が高い。

出土土器などから、SD03・SD04を含む2号周溝墓の時期は弥生時代後期中葉～後半の可能性が高いと判断できる。



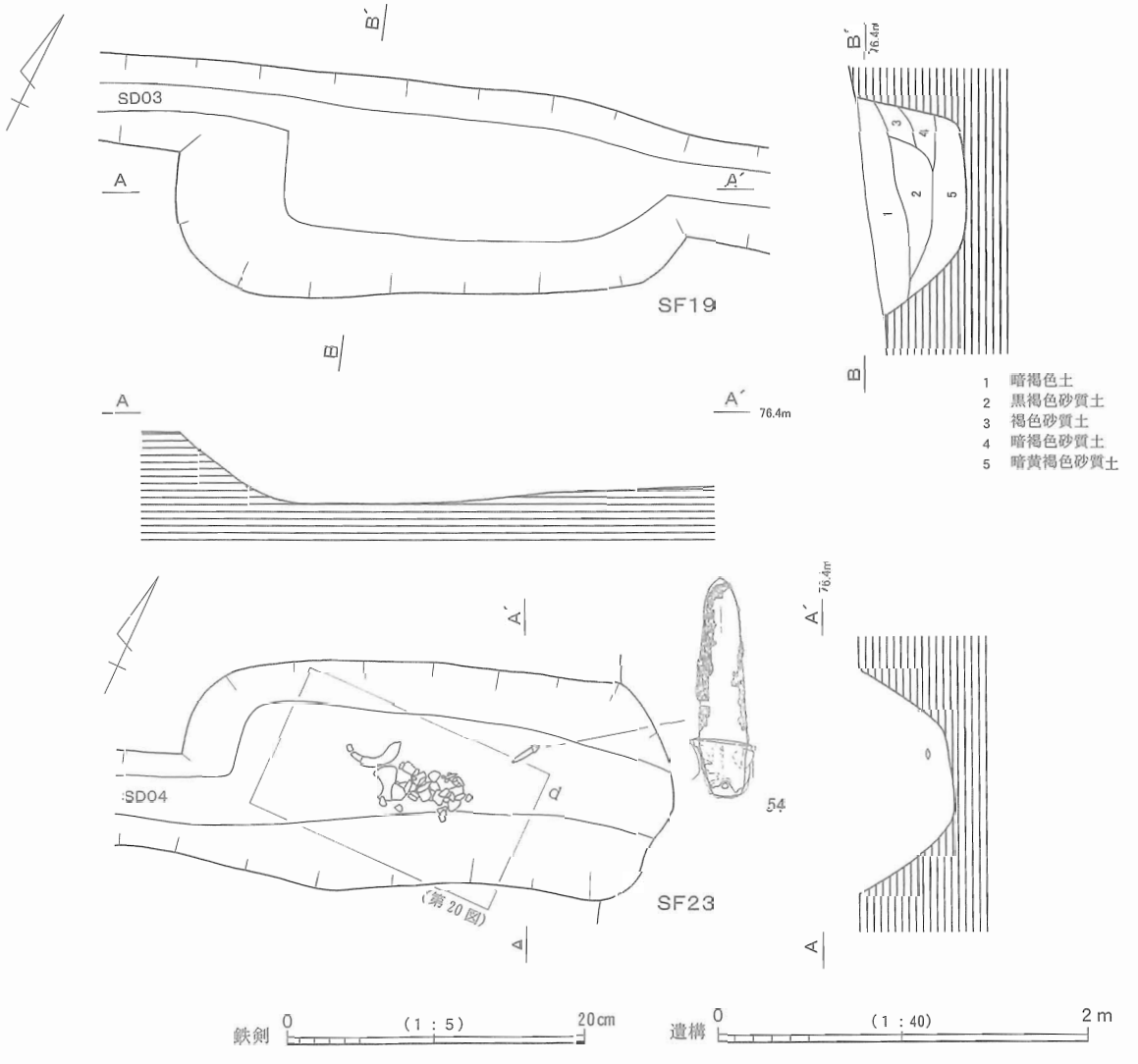
第20図　SD03・SD04遺物出土状況

(2) 土坑墓

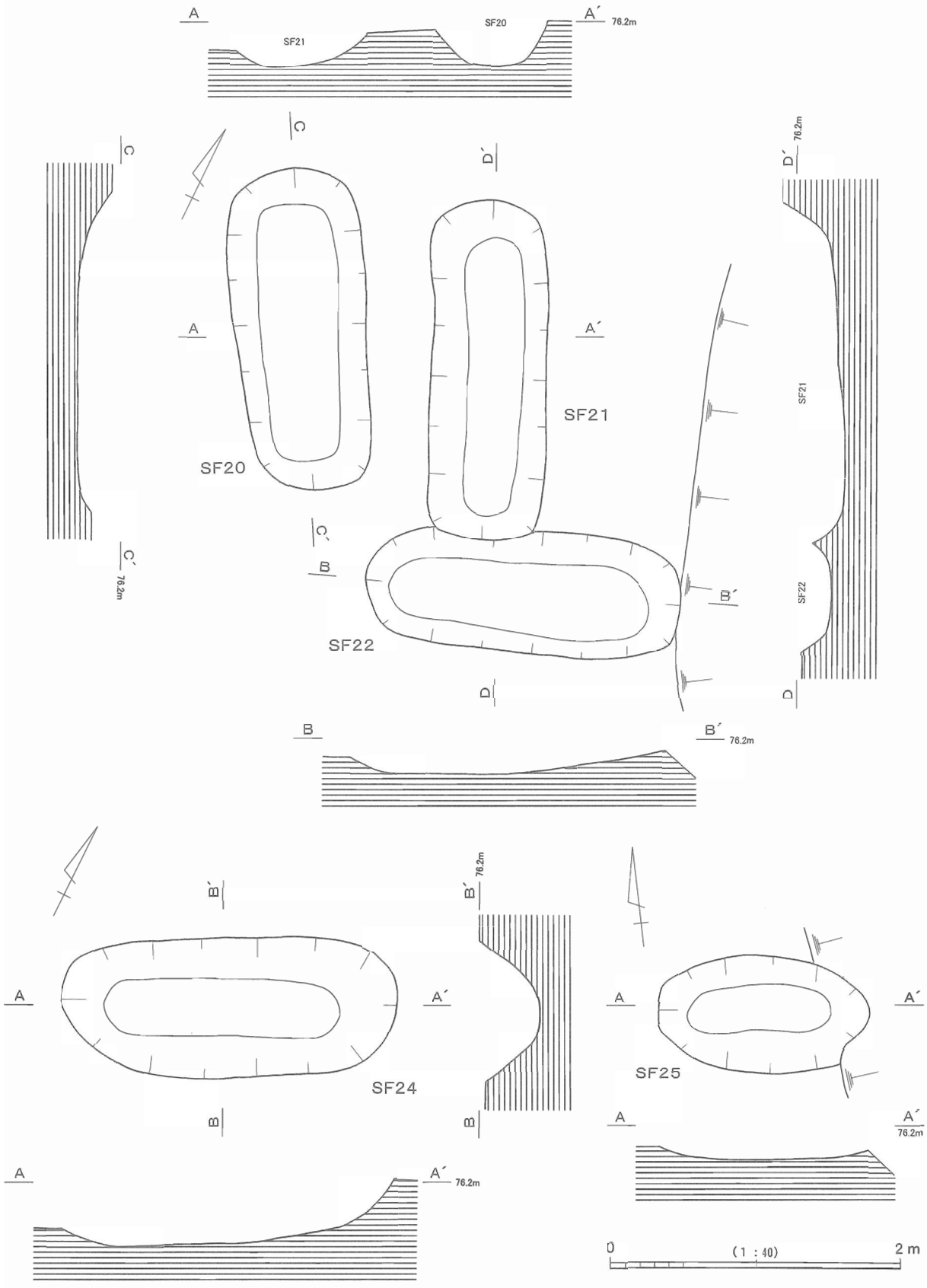
SF19・SF23（第21図）　SF19はSD03（2号周溝墓の北周溝）と、SF23はSD04（2号周溝墓の南周溝）と重なる。ともに、周溝に沿って設けられており、主軸は東西に近い。周溝墓の内側への張り出しを顕著にしている点が共通するほか、規模や形状についても類似している。深さはともに0.5～0.6mであり、底面における周溝との段差はない。なお、周溝との先後関係については、ともに土層観察による判断ができなかった。

SF19は1.2m強×2.7m強であり、東側は方形に近く、西に向かって幅が狭くなり、西端部では尖頭形に近い形状を呈する。覆土上層は暗褐色土、下層は砂質土である。木棺の痕跡は認められず、出土遺物もない。SF23は1.2m強×2.6m以上、東側は方形に近く、西に向かって幅が狭くなる。西端は崖で破壊されている。覆土はSF19と同様であり、木棺の痕跡も認められていない。上層から壷（第27図29）と高坏（第27図30）が出土しているほか、底面から約0.1m上で鉄剣（第31図54）が出土している。土器は墓上に置かれた供献土器、鉄剣は被葬者の傍らに置かれた副葬品であると判断できる。

出土遺物などから、ともに弥生時代後期中葉～後半の土坑墓の可能性が高いと判断できる。



第21図　SF19・SF23



第22図　SF20～SF22、SF24・SF25

SF20・SF21・SF22（第22図）　この３基は、２号周溝墓の台状部に位置する。台状部の中心にSF21、その東に平行してSF20が位置する。さらに、SF21の南側に接して、直行するSF22が位置する。主軸は、全て周溝墓の方向に沿っており、SF20・SF21は南北、SF22は東西に近い。SF21とSF22との先後関係については、浅い検出のために土層からの判断ができなかった。SF20は1.0m弱×2.3m弱、SF21は約0.8m×2.4m、SF22は0.9m弱×約2.2mの長楕円～長方形で、深さは0.2～0.4mと浅い。３基とも覆土は暗褐色土、木棺の痕跡は認められていない。出土遺物には、SF21のガラス小玉２点（第31図51・52）がある。

出土遺物などから、いずれも弥生時代後期中葉～後半の土坑墓の可能性が高いと判断できる。

SF24（第22図）　２号周溝墓の南側に位置する。1.0m弱×2.3m強の長楕円～長方形を呈し、深さは約0.4m強である。主軸は東西に近く、SF22などと平行する。覆土は暗褐色土、木棺の痕跡は認められなかった。高坏（第27図34）の破片が出土している。

出土遺物などから、弥生時代後期中葉～後半の土坑墓の可能性が高いと判断できる。

SF25（第22図）　２号周溝墓の南側、SF24の約2.4m南に位置する。0.8m強×1.5m弱の長楕円～長方形、深さは0.2m弱であり、SF19～SF24に比べて小さく浅い。主軸はほぼ東西であるが、２号周溝墓やSF24とは斜方向になる。覆土は暗褐色土、木棺の痕跡は認められなかった。弥生土器片が出土しているが、破片化した供献土器が流入したものと推測される。

出土遺物などから、弥生時代後期中葉～後半の土坑墓の可能性が高いと判断できる。

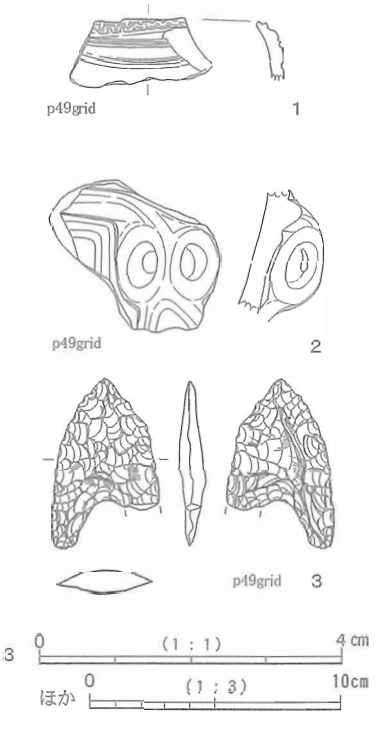
５．１区の出土遺物

(１) 縄文時代の遺物

本遺跡では、全体として縄文時代の遺物の出土が少ない。さらに、その出土は１区のｐ49グリッドに限られる。

１は、キャリパー形を呈する深鉢の口縁部である。口縁端部には上下交互に刻みが施され、その下部に竹管による弧状線文が認められる。地文は、摩滅のために観察できない。里木Ⅱ～Ⅲ式に比定される。２は、頸部にある把手の部分である。３は、黒曜石製の石鏃であり、抉入の強い凹基無茎鏃である。両面のほぼ全体に細かい調整が加えられており、整った形状を呈している。また、先端部を細くつくり出しており、全体に五角形に近い形状を呈する点が特徴的でもある（註１）。

２点の縄文土器は、いずれも中期後半～末葉に位置づけることができる。



第23図　１区出土の縄文時代の遺物

(2) 弥生土器

SF13出土土器（第24図）　4は、SF13下層から出土した小型壷である（第17図）。頸部は比較的太く、口縁部は大きく開く。表面の摩滅が著しいが、肩部の羽状刺突文や胴部上半の縄文が観察できる。なお、底部の欠損については、出土状況などを考慮するかぎり、故意にあけられた可能性が高いと判断できる。5・6はSF13の上層から出土した壷の破片であり、5の肩部には有段羽状刺突文が施されている。7は、SF13上層から出土した高坏の坏部片であり、比較的薄い折り返し口縁を伴う。5～7は小破片であり、SF13とは直接の関連のない供献土器が破片化して流入した可能性もある。

SF13との関連で評価できるのは4であり、弥生時代後期中葉～後半に位置づけることができる。5～7についても、弥生時代後期後半前後に位置づけて問題ない。

SD02出土土器（第24図）　8は壷の口縁部であり、口縁端部は折り返し、その下面に刺突が廻る。9も壷の口縁部である。ただし、他の壷の大半とは異なり、頸部の太い広口に近い形状を呈する。折り返し口縁の外面と内面に櫛刺突による斜格子文が施されている。10は有段羽状刺突文が施された壷の肩部、11・12は壷の底部である。

13・14は高坏の坏部である。ともに折り返し口縁を伴うものであるが、13に比べて14の方が厚い折り返しであり、14の口縁端部外面には刻みが施されている。15は、ほぼ完存した状態で出土した高坏である。折り返しの口縁端部や接合部を含めて、文様は全く施されていない。摩滅の著しいなかで、外面のハケ調整や坏部内面のミガキ調整をかろうじて観察することができる。脚部は低く、裾部の段が非常に不明瞭になっている。

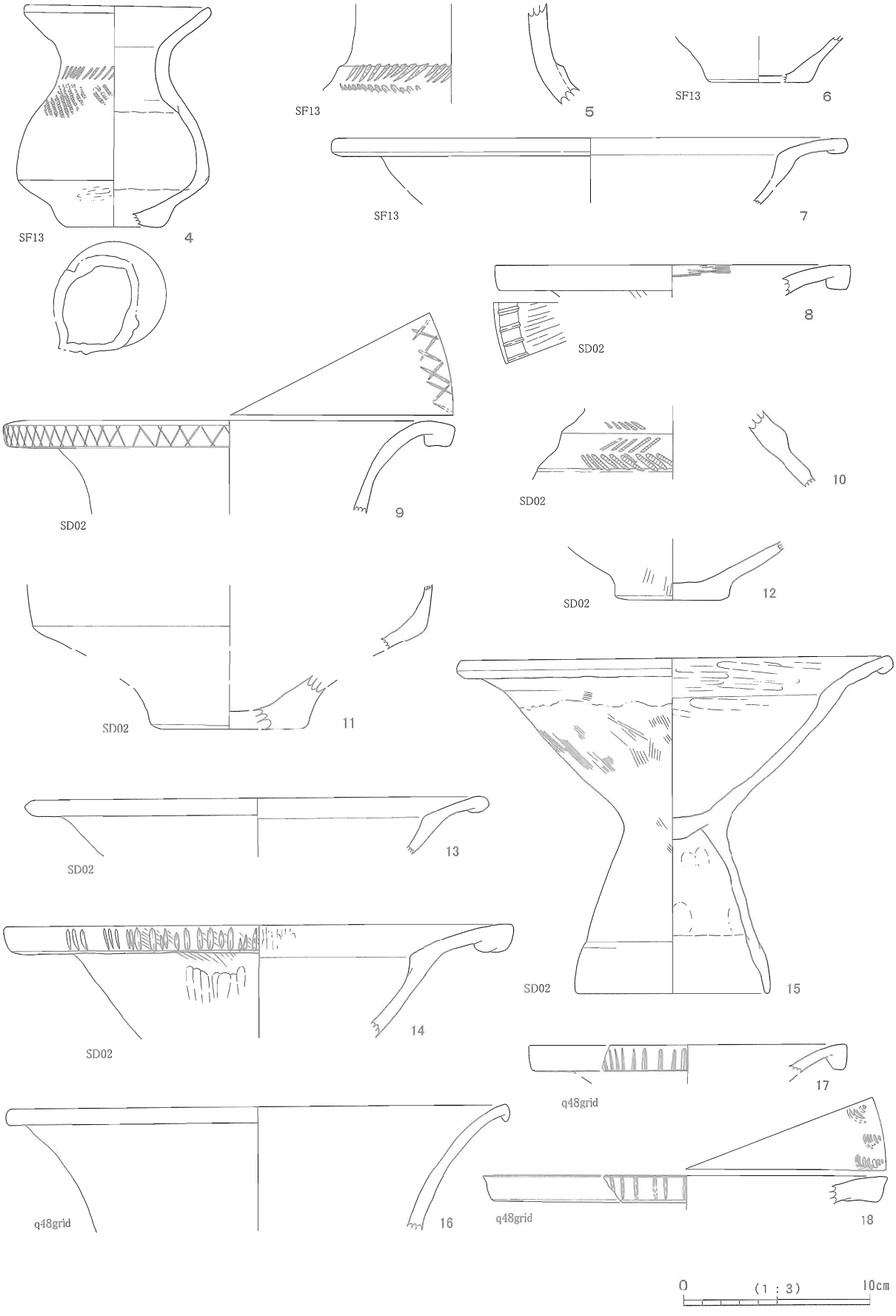
これらの多くは上層からの出土である。その中で、完存に近い15がSD02に伴う可能性の高い遺物として評価できる。弥生時代後期後半に位置づけることができる土器である。

A・B群遺構外出土土器（第24・25図）　16は甕の口縁部であるが、摩滅のために口縁端部の刻みや外面の調整は観察できなくなっている。17は壷の口縁部で、折り返した口縁端部の外面に刺突が廻る。18も折り返した口縁端部外面に刺突が廻る壷の口縁部であるが、さらに、内面に扇形文が廻っている。19は、口縁部が欠損している壷である。胴部上半に櫛描の横線文、その上下に2段ずつ廻る廉状文風の櫛刺突を観察することができる。いずれも煩雑な施文である。20・21は壷の頸～胴部である。小型壷である20の肩部には、2段の羽状刺突文が施されている。22は壷の底部である。23は鉢である。胴部は内湾しながら立ち上がり、屈折して外半する口縁部に至る。口縁端部には折り返しを伴う。

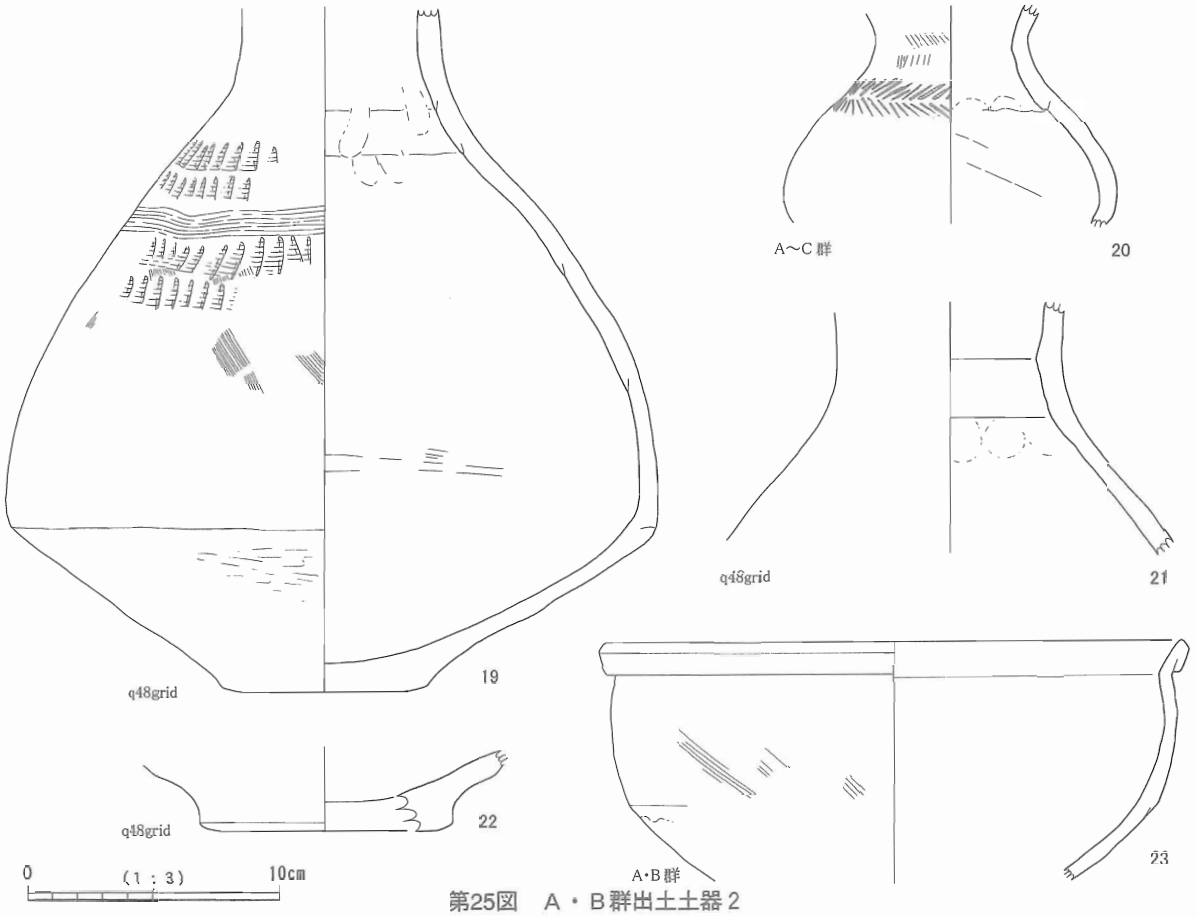
16だけは弥生時代中期に位置づけできる可能性が高いが、他は弥生時代後期中葉～後半に位置づけることができる。多数を占める後者の時期が、A・B群の形成と関連するものと評価できる。

SD03出土土器（第26図）　24・25は、頸部の比較的太い小型壷である。底部にある焼成後の打ち欠き・穿孔は、供献に伴って与えられたものと考えられる。一方、25は口縁部も欠損しているが、溝への転落などに伴って損壊した可能性もあり、その判断は難しい。24は2段、25は4段の羽状刺突文が肩部に施されており、24では下半部のミガキ調整が観察できるほか、口縁部内面には縄文が認められる。26は高坏であり、25の壷と一緒に出土している（第20図）。折り返しを伴う鍔状口縁であり、口縁端部外面に刺突が廻る。坏部と脚部との接合部には、3段の羽状刺突文が施されている。脚部は、下に向かって器壁が薄くなり、段より下（脚裾）は大きく外に開く。脚裾の段は、内面が屈折する程度、外面もわずかに形成されている程度である。

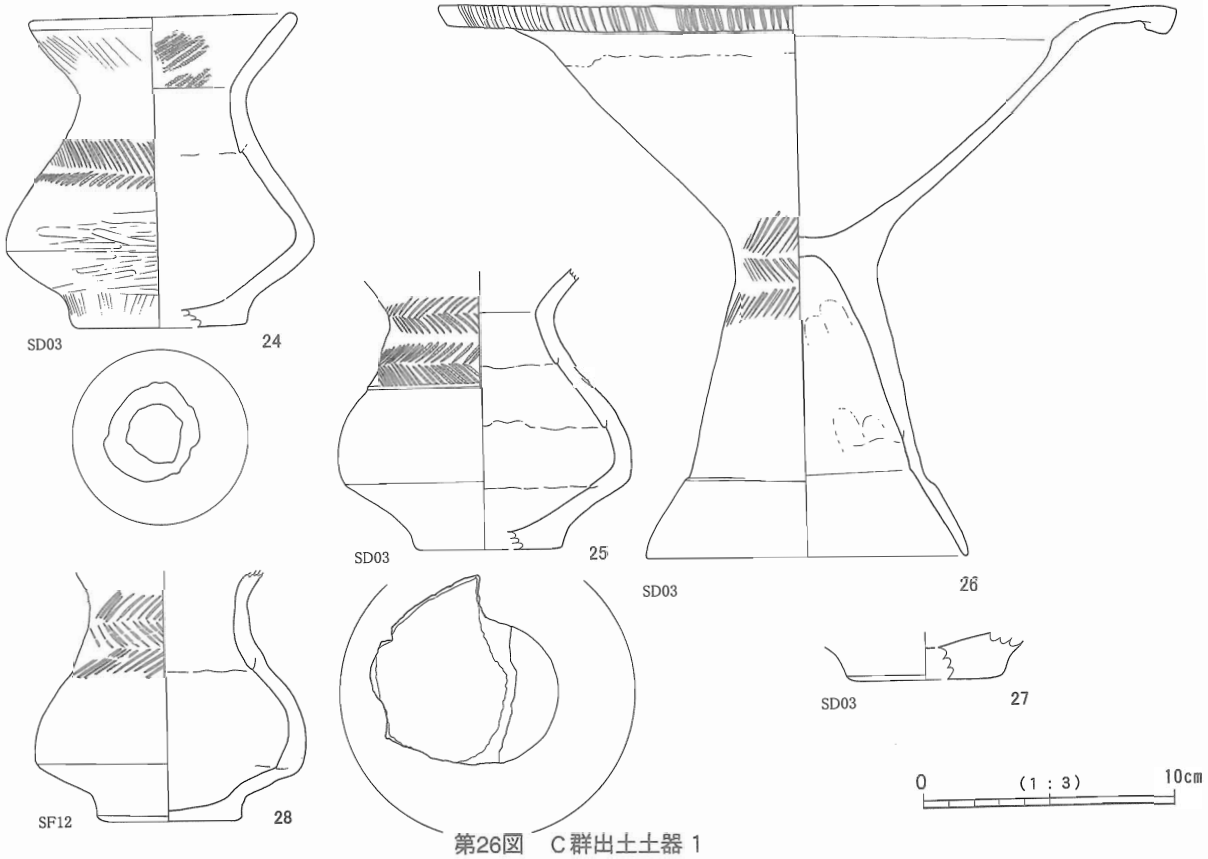
28はSF12からの出土であるが、SF12は遺構の特徴から縄文時代の遺構である可能性が高い。したがって、本来はSF12と重なるSD03を含む2号周溝墓に伴うものであったと考えたい。24・25と同様の頸部の太い小型壷であり、肩部に3段の羽状刺突文が施されている。ただし、欠損しているのは口縁部だけであり、底部の打ち欠き・穿孔はない。口縁部の欠損については、25と同様に判断が難しい。



第24図　A・B群出土土器1



第25図　A・B群出土土器2



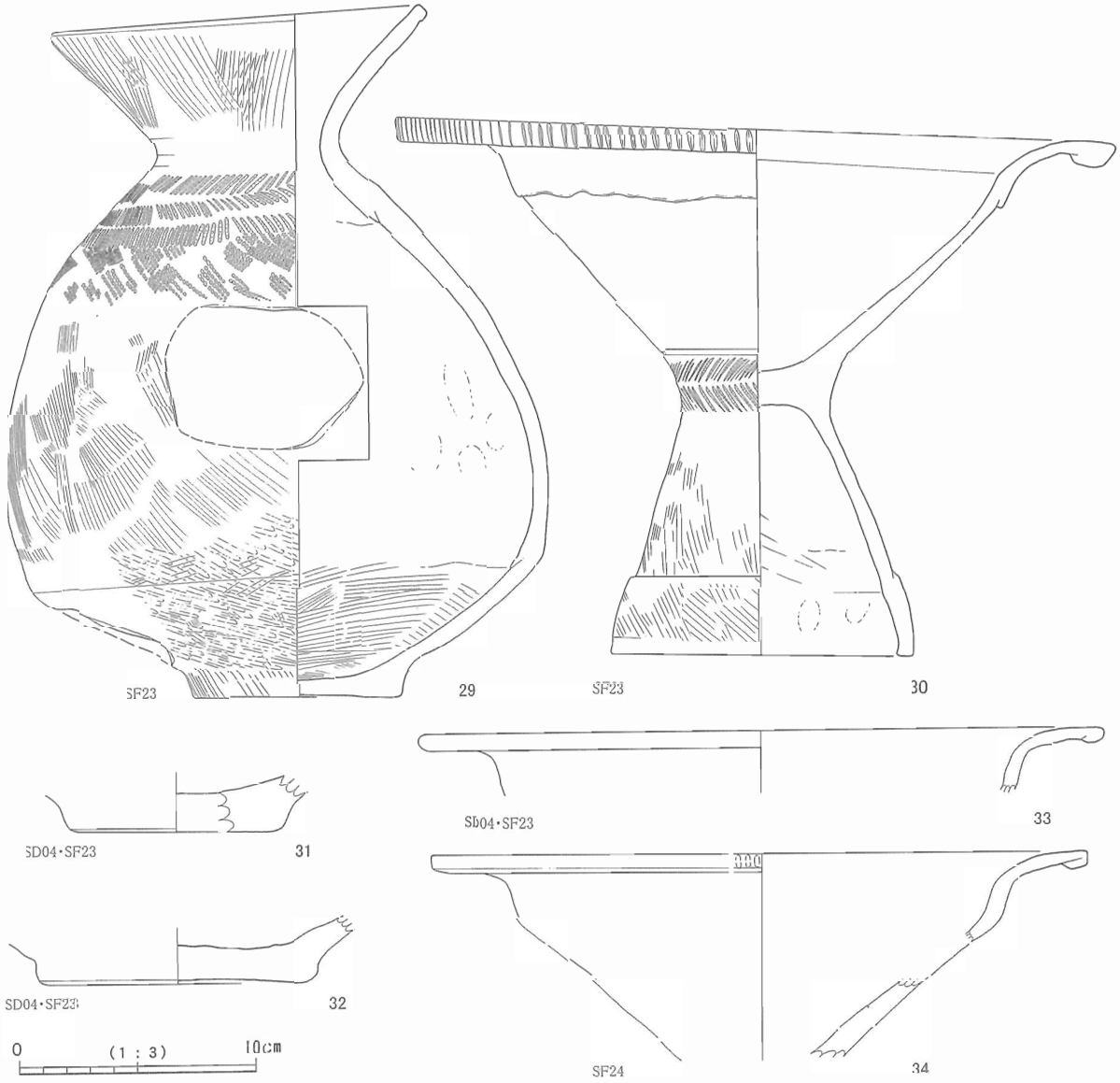
第26図　C群出土土器1

いずれもSD03を含む2号周溝墓に伴う可能性が高く、とくに25・26は、セットの状態で下層から出土していることから、遺構との関連を考える上ではより高い評価ができる。これらの土器は、弥生時代後期後半に位置づけることができる。

SF23・SD04・SF24出土土器（第27図）　29・30はSF23の上層から一緒に出土している。29は胴部に欠損のある壷である。胴部上半に縄文、肩部に3段の羽状刺突文が施され、その上部は、直立する頸部を介さずに直線的に開いて口縁部に至る。口縁部は単純口縁である。調整は、ハケ調整のほかに下部にのみ施されたミガキ調整が観察できる。30は鍔状口縁の高坏である。口縁部には折り返しが伴い、外面に刺突が廻る。坏部内面の屈折はそれほど明瞭ではないが、坏部外面の上部に接合部の段が明瞭に確認できる。接合部には、1条の沈線と2段の羽状刺突文が施されている。脚裾の段はわずかである。

31・32は壷の底部である。33・34は高坏の坏部である。薄い折り返し口縁を伴うが、摩滅が著しく、刺突などの有無は不明瞭である。口縁部と坏部との境は、屈折・突帯ではなく強い屈曲部を介している。

29については、胴部の施文および単純口縁であることから、弥生時代後期中葉に位置づけできる。その他を含めてみても、弥生時代後期中葉～後半の中に位置づけることができる。

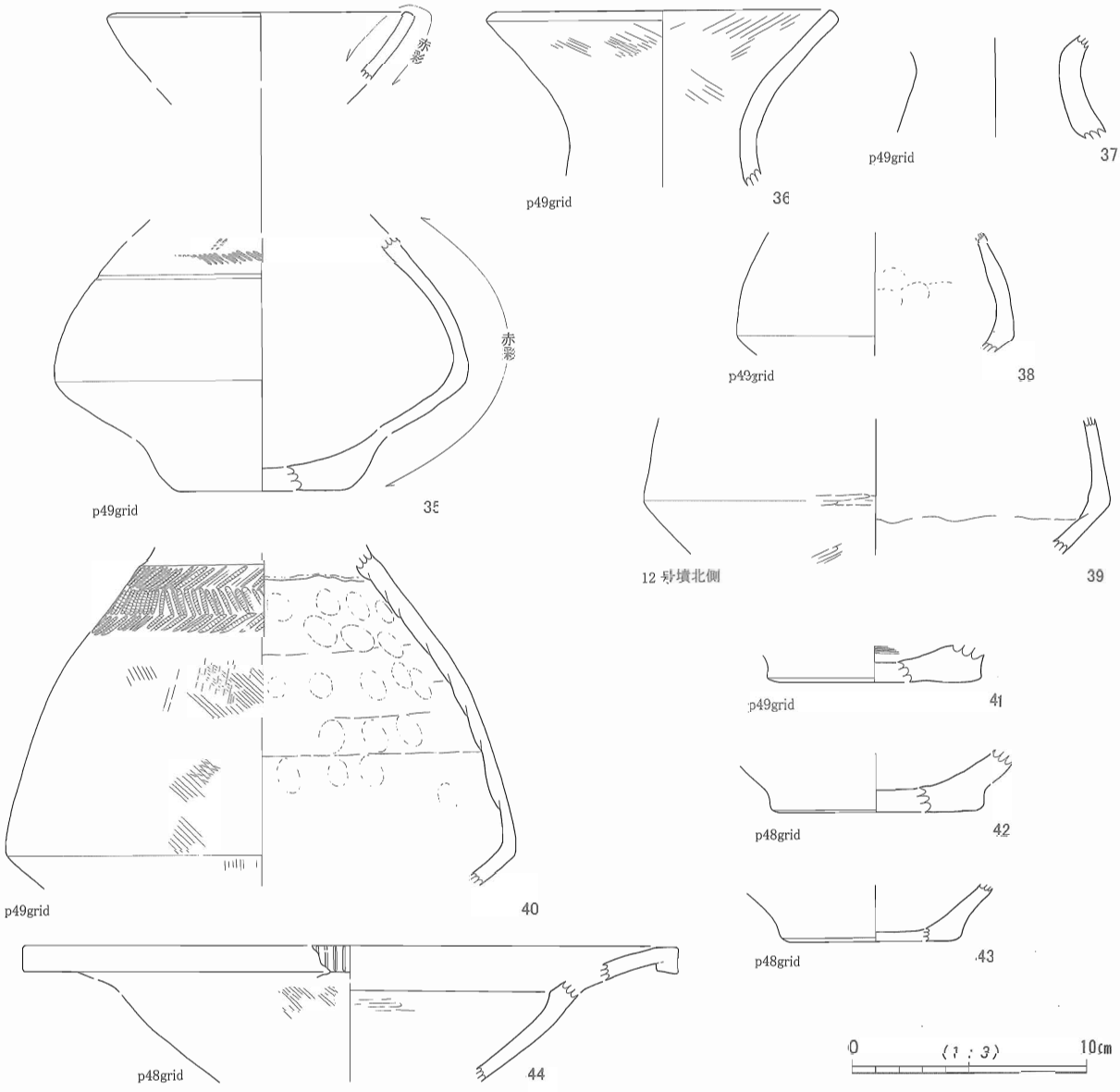


第27図　C群出土土器2

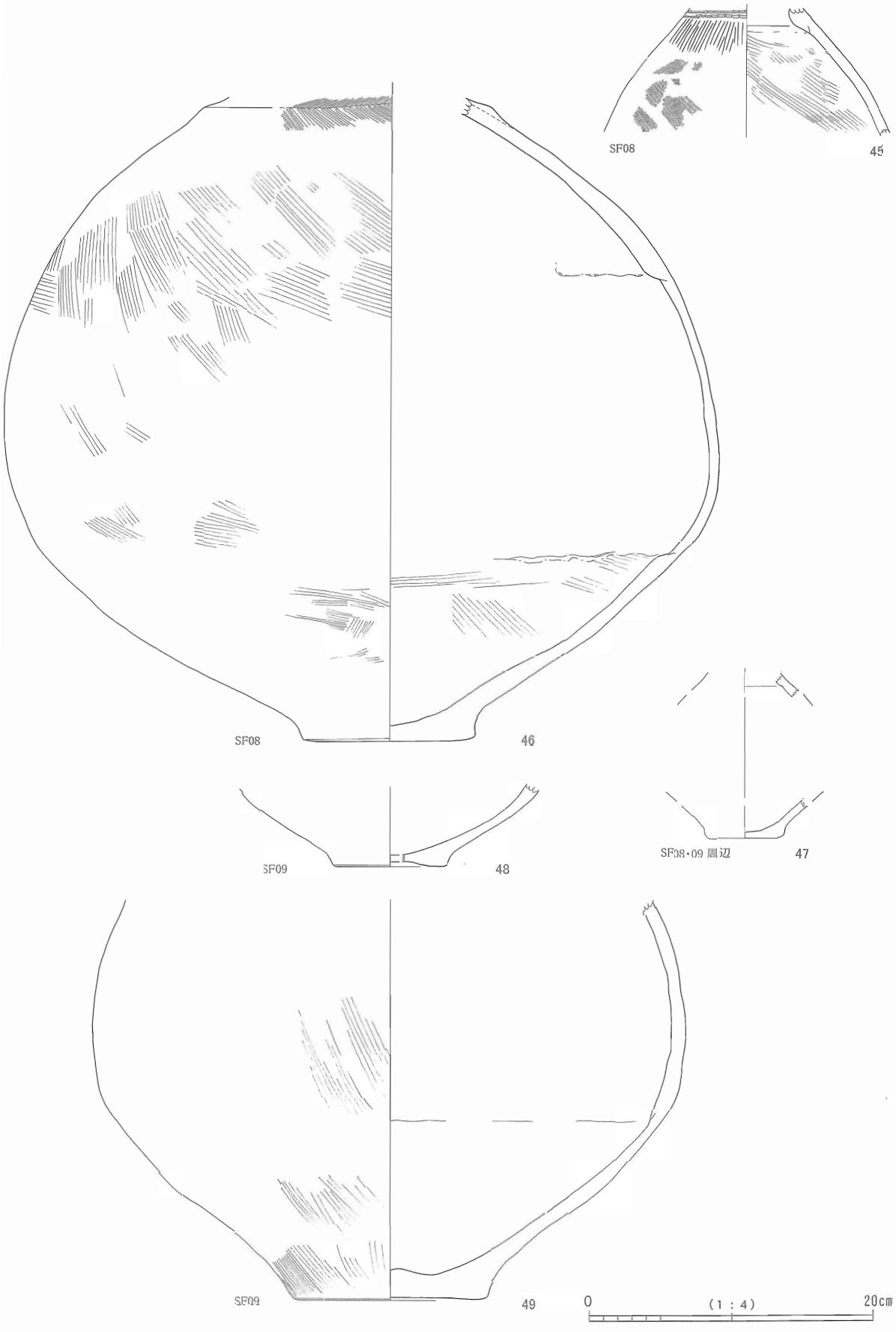
C群遺構外出土土器（第28図）　35は外面および口縁部内面に赤彩が施された壷であり、とくに上部が破片化している。口縁部は若干内湾する単純口縁である。肩部に2段以上の羽状刺突文と1条の横沈線が認められる。36は壷の頸～口縁部である。35と同じ単純口縁ではあるが、内湾することなく開く。37は壷の頸部、38・39は壷の胴部であり、中位下寄りの最大径部分に稜線を伴う。40も同様の壷の胴部であるが、3段の羽状刺突文が肩部に認められる。41～43は底部であるが、35を含めて上げ底状のものはない。44は高坏の坏部である。折り返し口縁の稜線や内面の屈折が他より明瞭である。ただし、内面のミガキ調整も観察し易く、摩滅の度合による影響が考慮される。口縁端部外面には刺突が廻る。

これらは、弥生時代後期の土器で占められている。36は比較的古い時期に位置づけできる可能性があるが、他は弥生時代後期中葉～後半の中に位置づけられるものが多い。

SF08土器棺（第29図）　45は、土器棺の上部で混在して出土した壷の胴部片である。土器棺の蓋であった可能性もあるが、他の供献土器の破片が流入した可能性も少なくない。肩部に2条の押圧横線文、その下に縦方向のハケ目が施され、さらに下部に縄文が施されている。弥生時代後期中葉前後に位置づ



第28図　C群出土土器3



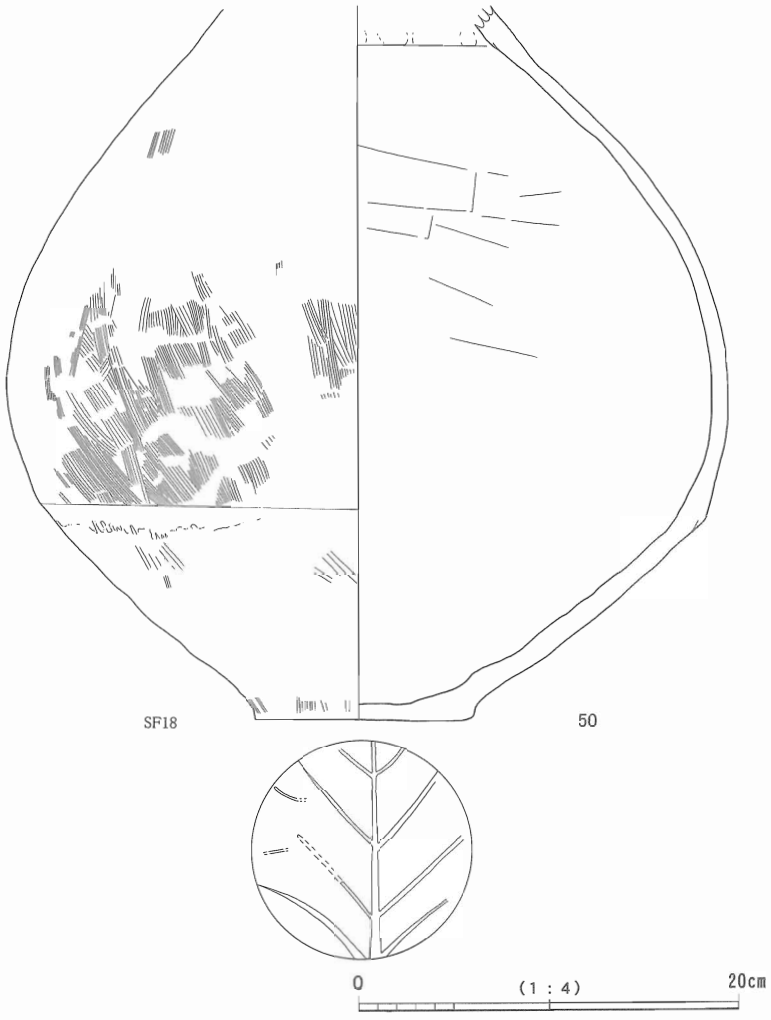
第29図　SF08・SF09土器棺

けできる。なお、SF08・SF09の周辺からは、土器棺以外に47などの土器片の出土が認められている。

46は、土器棺の身として用いられていた大型の壷である（第15図）。頸部以上を打ち欠いた状態で用いられていた。肩部には段が設けられ、２段の羽状刺突文が施されている。球形の胴部である。外面調整はハケ調整で占められており、ミガキ調整は認められない。文様や器形の特徴から、弥生時代後期後半頃に位置づけることができる。しかし、45との関係を評価するならば、より古い時期に位置づけなければならない。

SF09土器棺（第29図）　48は、土器棺の蓋として用いられていたであろう壷である（第15図）。破片化していたために詳細は判断できないが、上げ底状の底部～胴部下半のみで用いられたと推測できる。49は、土器棺の身として用いられていた大型壷である（第15図）。肩部以上もしくは頸部以上を打ち欠いた状態で用いられていた。SF08の身（46）と同様、胴部は球形を呈しており、外面調整はハケ調整で占められる。しかし、底部内面が盛り上がる点は異なり、器形も46に比べて整っている。文様による判断ができないが、48・49の器形の特徴から弥生時代後期中葉～後半に位置づけることができる。

SF18土器棺（第30図）　50は、土器棺の身として用いられていた大型の壷である（第18図）。頸部以上を打ち欠いた状態で用いられていた。弥生土器の壷には肩部に文様が施されることが多いが、この壷には文様が全く認められない。外面調整は、ハケ調整で占められている。胴部の形状は、SF08やSF09の土器棺の身（46・49）と同様に球形を呈しているが、比較的縦長であり、下部に稜線を伴う。底部裏面には木葉痕を残している。器形などの特徴から、弥生時代後期後半頃に位置づけることができる。



第30図　SF18土器棺

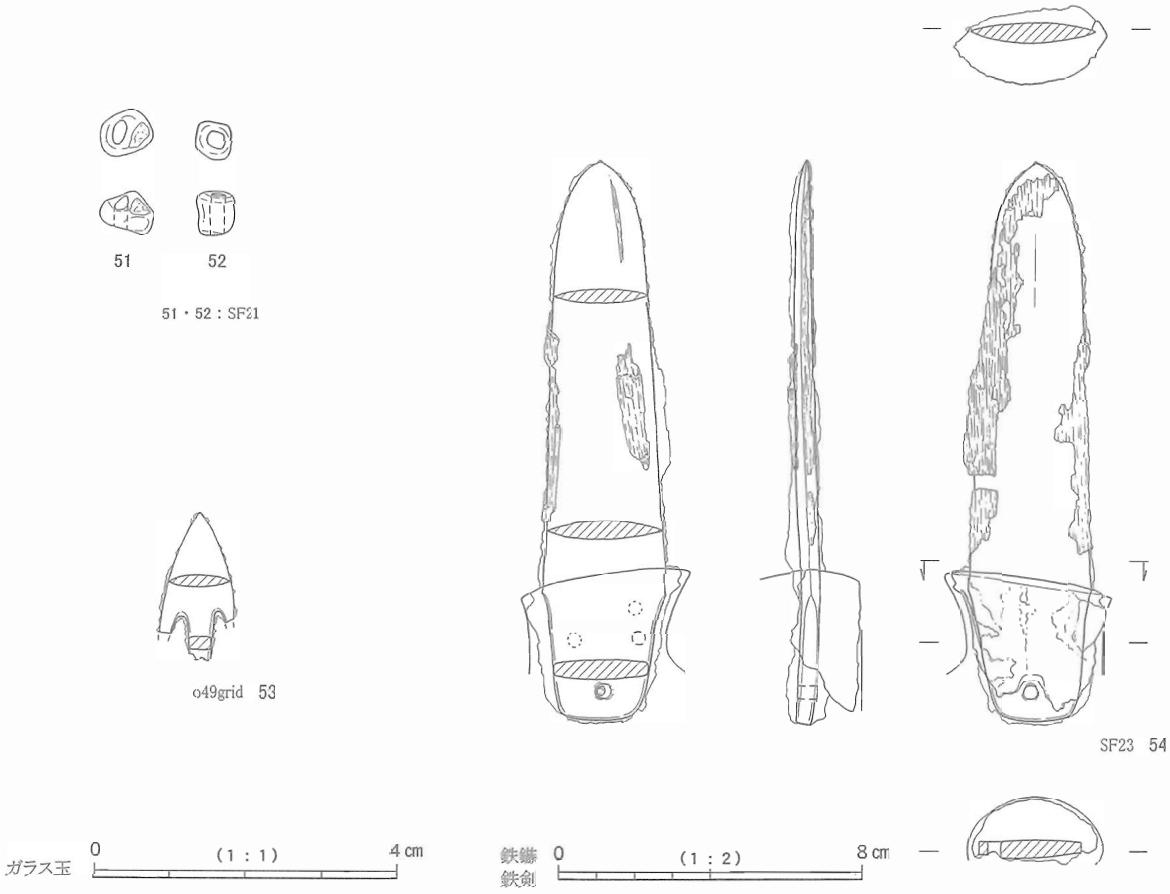
(3)玉　類

SF21出土ガラス小玉（第31図）　51・52は、SF21から出土したガラス小玉である。篩いによって発見されたため、覆土下層であること以上の詳細な出土位置は特定できない。いずれも本遺跡出土のガラス小玉の中では、大きい部類に入る。濃青色を呈し、形状は整っていない。また、不純物が抜け落ちた痕跡のような凹部が認められる。51には白色の粒が内包された状態で確認できる。両者を比較するならば、52の方が比較的整った細身の円筒形を呈しており、粒や凹部は少ない。一方、51の方が濃い色を呈している。

(4)金属器

C群遺構外出土鉄鏃（第31図）　53は、o49グリッドのⅣ層から出土した平根の鉄鏃である。鏃身は縦長の三角形を呈しており、欠損してはいるが、茎部および比較的長い逆刺を伴っていることがわかる。遺構内覆土に近い暗褐色土からの出土であり、周辺に分布する遺構に伴っていた遺物である可能性が高い。したがって、周辺に展開する遺構の時期と同様、弥生時代後期の鉄鏃である可能性を評価することができる。

SF23出土鉄剣（第31図）　54は、SF23から副葬された状態で出土した鉄剣である（第21図）。刃部は短く、切先に向かって細くなる形態を呈している。鎬はわずかにうかがえそうな部分もあるが、明確に観察できるものではない。茎部へは撫関をもって緩やかに至る。茎部には、確実な目釘孔が図の下寄り中央に1つある。この目釘孔には、目釘の残存を認めることもできる。



第31図　C群出土玉類・鉄器

この鉄剣には、鹿角製の把が装着されていたことがわかる。腐食や鉄錆のために決して良好な状態であるとはいえないが、片面を中心に鹿角製把の残存を認めることができる。残存状況および類例によって、本来は破線で図示したような形状をしていたものと考えられる。また、この把にも先述の目釘孔の位置に孔があったことがわかる。一方、把の及ばない刃部に限って木質が伴っていることから、木製の鞘も装着した状態で副葬されていたことがわかる。木質はほぼ同一方向の木目を示しているが、鞘の形状・構造までの復元は難しい。なお、鹿角製の把については、東日本に分布の中心があり、群馬・神奈川・千葉などでも出土が認められている。県内では、静岡市の登呂遺跡・長崎遺跡で出土が認められている。しかし、遠江では本例以外に確認されていない。分布の最西端の事例になる可能性が高い。

次に、目釘孔以外の孔のある可能性を示しておきたい。茎部の関寄りの左右に3ヶ所、孔の可能性を指摘できる場所がある。しかし、いずれも装具や錆のために確実な判断ができない。実線で示した1ヶ所は、X線写真で孔の可能性が指摘できるほか、実見でも凹みが認められる。一方、破線の2ヶ所については、X線写真では孔の可能性を指摘することができるものの、実見では装具や錆などで全くわからなくなっている。ここでは、孔の可能性があるものとして指摘しておきたい。ただし、これらの孔は刃部に位置しないことから、弥生時代の鉄剣によくみられる刃関双孔とは異なるものということになる。また、鹿角製把に対応する孔が認め難いことから、釘孔として使用されていたとは判断し難い。刃関双孔のある鉄剣として製作された後、何らかの理由で新たに茎部を削り出した結果、鉄剣は短くなり、刃関双孔は茎部に含まれることになり、そして、とくに孔としての活用はされなくなったという可能性を考えなければならないのかもしれない。なお、関より下に双孔がある鉄剣は、韓国下岱遺跡、長崎県門前遺跡、兵庫県西求女塚古墳に出土が認められている（註2）。

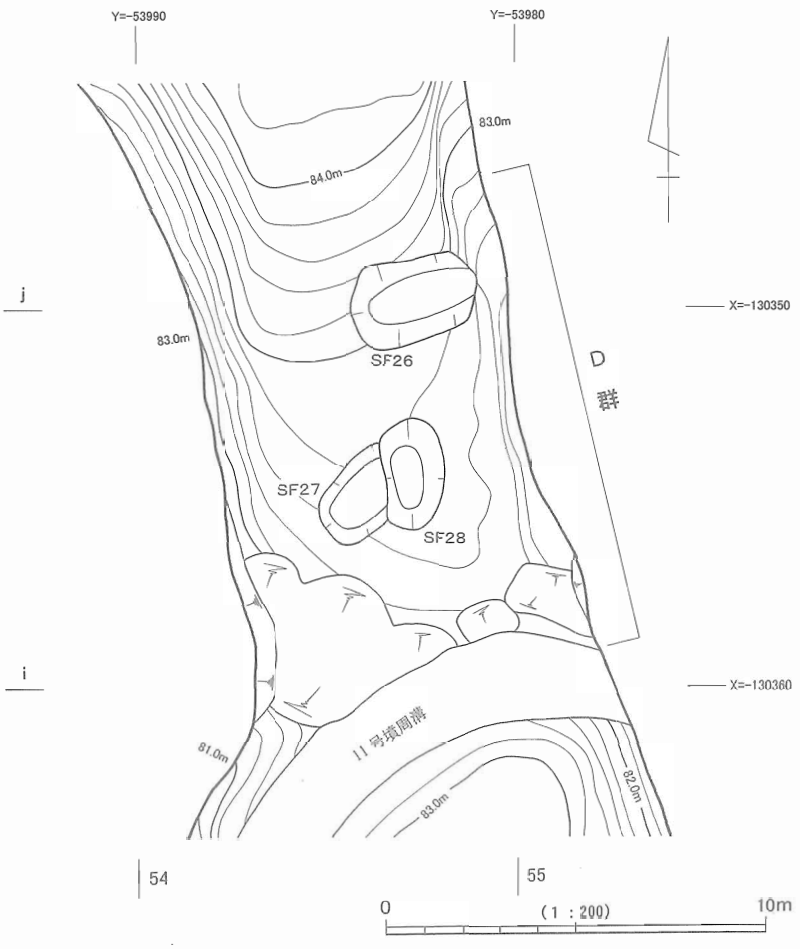
この鉄剣が副葬されていたSF23の上層からは、弥生時代後期中葉の土器が出土している。鉄剣についても、形状や把の特徴などから同様の時期に位置づけて問題ないと判断できる。

第3節　2区北部

1．D・E群

2区の北部は、古墳群形成以前の遺構が少ない範囲にあたる。そのような中でも、11号墳北側のi54グリッド周辺（D群）では3基（SF26～28）、10号墳北部と重なるf56グリッド周辺（E群）では2基（SF29・30）の土坑が発見されている。いずれも、Ⅳ層のないやせ尾根に立地しており、Ⅴ層（黄色砂層）上面で検出されている。

古墳群形成以前の遺物の出土もほとんどなく、遺構に伴って出土した遺物は皆無に等しい。



第32図　2区北部：D群

(1) 土坑墓

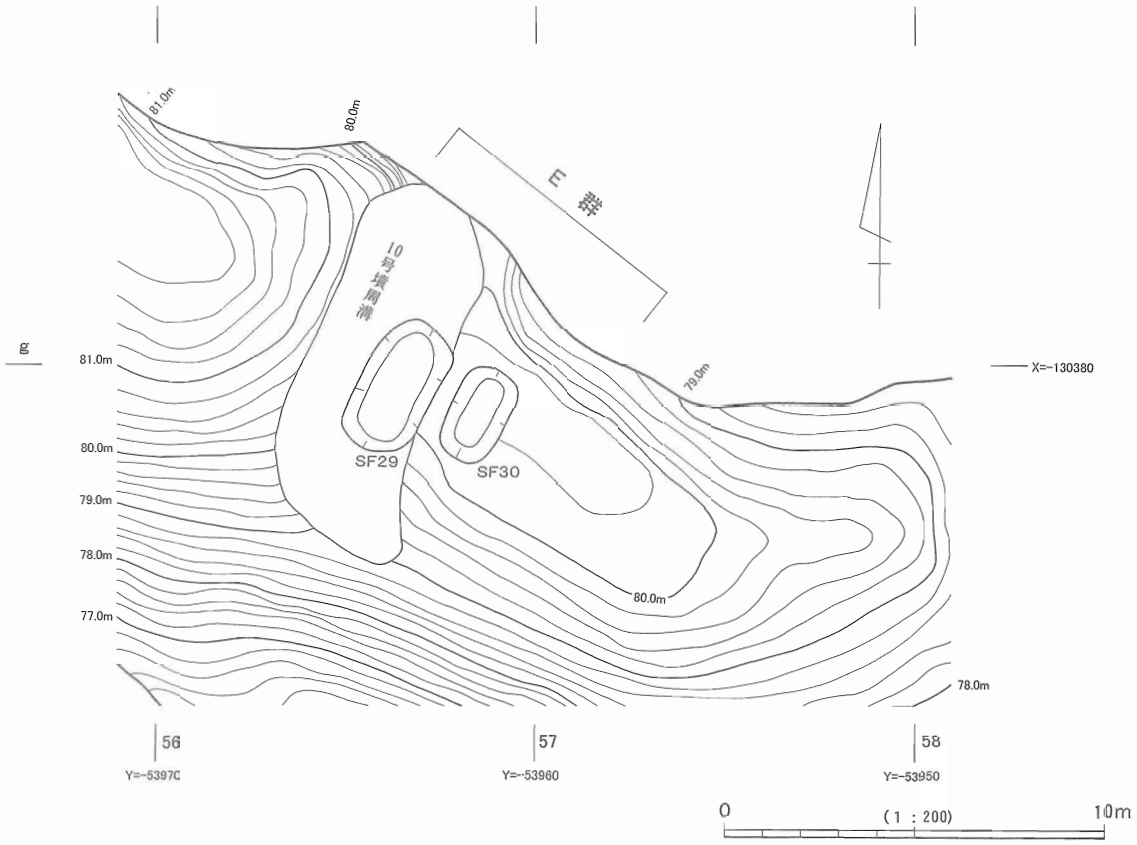
SF26（第34図）　11号墳北側のD群、その比較的平坦な範囲の北端に立地する。SF26の北側は、12号墳へと上がる斜面になる。

約2.2m×3.5m以上の長楕円～長方形で、深さは約0.8mである。東端部が崖のために失われてしまっている。主軸は丘陵筋に直行し、東西に近い。覆土上層は暗褐色土など、下層は様々な砂質土で占められており、中央部に黒褐色砂質土の深い落ち込みが認められる。しかし、木棺の痕跡は認められなかった。上層で須恵器片が出土しているが、流れ込みの可能性が高い。

遺構の時期を明確に示すことは難しいが、周囲からは弥生土器片も数点出土している。須恵器片の出土から古墳群と関連する土坑（墓）の可能性も考慮されるが、遺構の形状や覆土の特徴においては、弥生時代の土坑墓と大きく異なることはない。したがって、弥生時代の土坑墓である可能性もある。

SF27（第34図）　11号墳北側のD群、やせた尾根の比較的平坦な部分に立地する。約1.7m×2.5m以上の長楕円～長方形で、深さは約0.5mである。主軸は北東から南西への方向にあり、丘陵筋とも斜行する。北東端部がSF28と重なることによって失われているが、その先後関係について、土層観察から明確に判断することはできなかった。調査ではSF28を先に発見し、その検出の最中にSF27の存在が把握されている。この点を評価するならば、SF27の方が古い可能性が高いと判断できる。覆土は上層が暗褐色砂質土、下層が暗黄褐色砂質土である。木棺の痕跡は認められず、出土遺物もない。

遺構の時期を明確に示すことは難しいが、周囲からは弥生土器片も数点出土している。古墳群（11号



第33図　2区北部：E群

墳）と関連する土坑（墓）の可能性もあるが、遺構の形状や覆土の特徴においては、弥生時代の土坑墓とも大きく異なることがない。したがって、弥生時代の土坑墓である可能性もある。

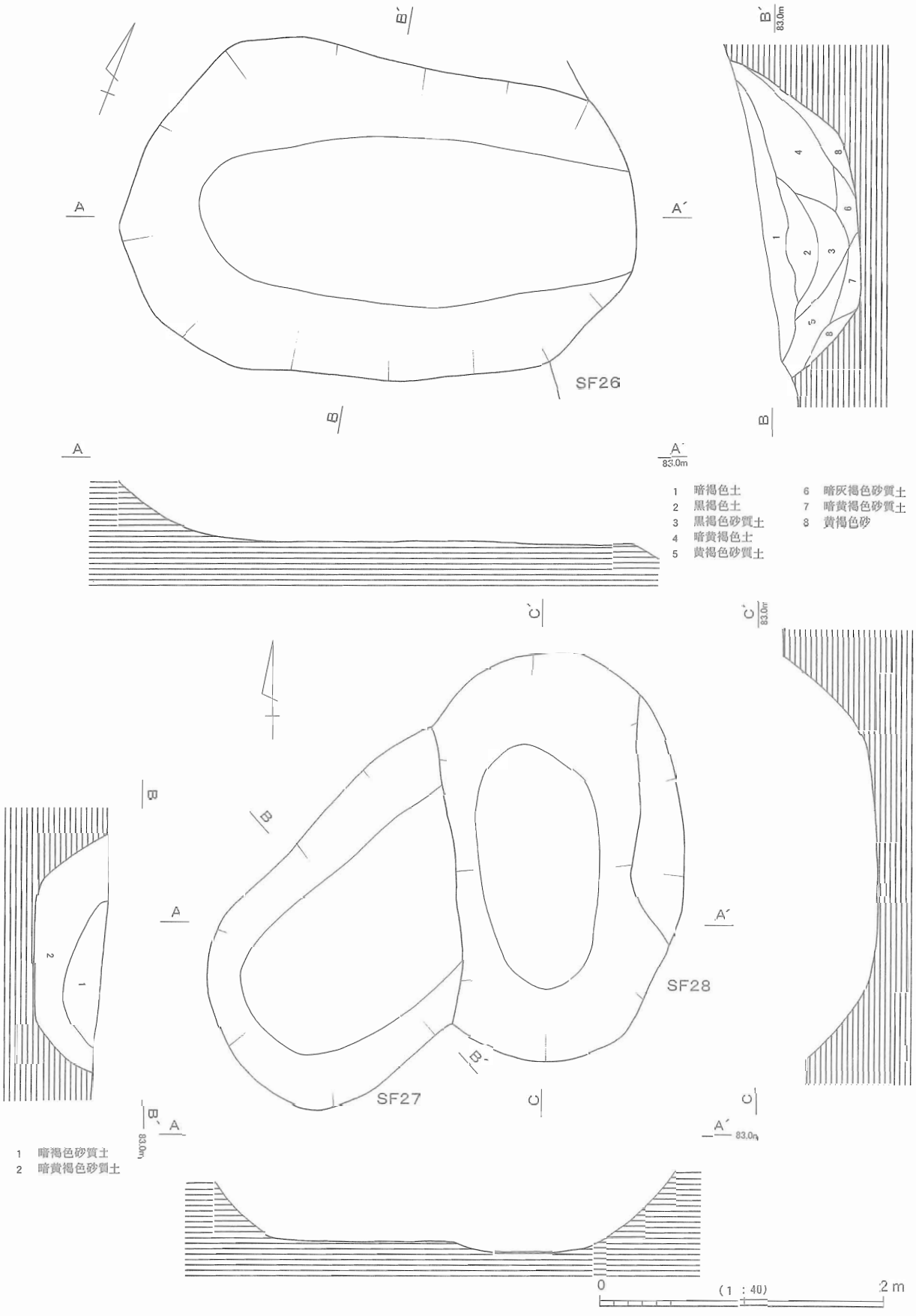
SF28（第34図）　11号墳北側のD群に位置し、やせた尾根の比較的平坦な部分に立地する。2m前後×約2.9mの長楕円～長方形で、深さは0.7m弱である。主軸は丘陵筋に平行し、南北に近い。西側縁部がSF28と重なるが、その先後関係について、土層観察から明確に判断することはできなかった。調査ではSF28を先に発見し、その検出の最中にSF27の存在が把握されている。この点を評価するならば、SF28の方が新しい可能性が高いと判断できる。覆土は上層が黒～暗褐色砂質土、下層が暗黄褐色砂質土である。木棺の痕跡は認められず、出土遺物もない。

遺構の時期を明確に示すことは難しいが、周囲からは弥生土器片も数点出土している。古墳群（11号墳）と関連する土坑（墓）の可能性もあるが、遺構の形状や覆土の特徴においては、弥生時代の土坑墓とも大きく異なることがない。したがって、弥生時代の土坑墓である可能性もある。

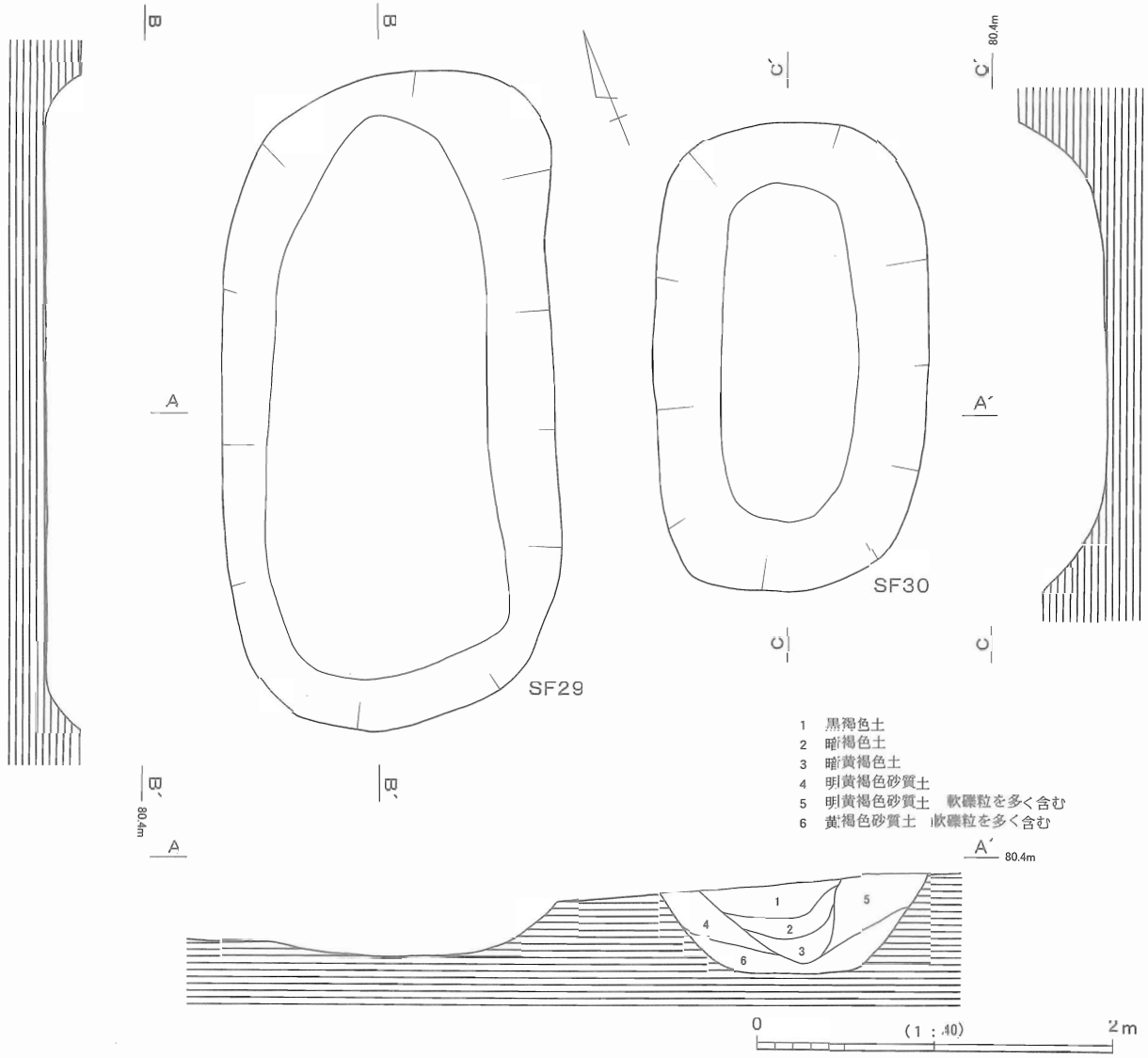
SF29（第35図）　E群の10号墳北側周溝内で検出された土坑である。2m前後×約3.6mの長楕円～長方形で、本来の深さは約0.8mであったと推定できる。主軸は丘陵筋に直行し、南北に近い。発見・検出状況および土層観察から、10号墳の周溝より古い可能性が高いと判断できている。覆土は上層が暗褐色砂質土、下層が暗黄褐色砂質土である。木棺の痕跡は認められず、出土遺物もない。

遺構の時期を明示することは難しいが、周囲からは弥生土器片も数点出土している。古墳群と関連する土坑（10号墳周溝内の施設・土坑墓など）の可能性もあるが、遺構の形状・覆土においては、弥生時代の土坑墓とも大きく異なることがない。したがって、弥生時代の土坑墓である可能性もある。

SF30（第35図）　E群の10号墳墳丘北部で検出された土坑である。1.6m弱×2.6m強の長楕円～長方形で、深さは約0.5mである。主軸は南北に近く、SF29と平行に並ぶ。覆土は、中央に黒褐色土などの



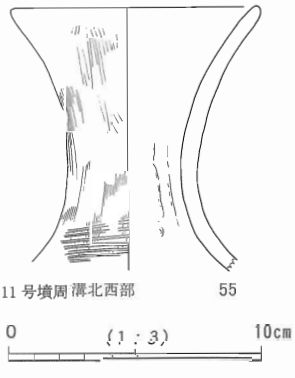
第34図　SF26～SF28



第35図　SF29・SF30

深い落ち込み、その周囲は黄褐色砂質土で占められる。木棺の痕跡は認められず、出土遺物もない。盛土のない部分で検出されたため、10号墳との先後関係も土層からは判断できなかった。ただし、遺構の形状や覆土は、他の古墳の盛土の下で発見された弥生時代の遺構と類似している。

周囲からは弥生土器片も数点出土している。厳密には特定できないが、遺構の形状・覆土や周辺の出土遺物から、弥生時代の土坑墓である可能性が高いと考えたい。



第36図　D群出土土器

2．2区北部の出土遺物

2区北部では、全般的に古墳群形成前の遺物の出土が少ない。図化できたものは、11号墳北西周溝から出土した第36図55だけである。細い頸部から徐々に開いて単純口縁に至る壺の破片である。肩部には櫛描横線文が、かろうじて観察できる。遺構には直接伴わないが、とくにD群の遺構との関連が評価できる。概ね、弥生時代中期後葉に位置づけることができる。

第4節　2区中央部

第37図　2区中央部

1．F　群

2区中央部の9号墳南東部から8号墳との間にかけての範囲、北西から南東にのびる丘陵筋に沿った約12mの範囲に集中する遺構群である。尾根上は比較的平坦である。9号墳墳丘部を中心に、黄色砂層（Ⅴ層）上の暗～黄褐色砂質土層（Ⅳ層）の堆積が確認できた。Ⅳ層上面でも遺構の存在を確認することができたことから、本来の遺構面はⅣ層中にあったと判断できる。しかし、全ての遺構を詳細に把握するため、Ⅴ層（黄色砂層）上面を遺構検出面として調査した。

丘陵上の平坦部に9基の土坑墓（SF31・32、SF34～40）が検出されている。それぞれが大きく重なることなく配置され、丘陵筋に平行か直行方向の主軸方向、比較的近似した規模など、整然とした印象を受ける。一方、西側斜面際にも土坑墓らしき遺構（SX01・SF33、SF41・42・SX02）が検出されているが、先の9基とは異なり不整形な形状が目立つ。土器棺墓や溝などはない。遺構内外の出土遺物や遺構の形状から、これらは弥生時代後期を主とする土坑墓群であると判断できる。なお、8号墳北側周溝の南西外れの斜面部で、弥生土器片が比較的多く出土している。8号墳周溝によって消滅してしまった弥生時代の遺構もあった可能性が考えられる。

(1) 土坑墓

SF31（第38図）　9号墳墳丘南東部の平坦部に位置する。1.0m強×1.7m弱の長楕円～長方形、深さは0.5m強である。壁面の中位に稜を成し、下部に比べて上部の壁が緩やかになっている。したがって、他よりも上部に対する底面積の割合が小さくなる。主軸は丘陵筋に平行する。覆土は上層が黒褐色土、下層が暗褐色砂質土である。木棺の痕跡は認められず、出土遺物もない。

遺構の特徴や周辺の遺物から、弥生時代後期前半～中葉の土坑墓である可能性が高いと判断できる。

SF32（第38図）　9号墳墳丘南東部の平坦部に位置する。0.9m弱×1.4m弱の長楕円～長方形、深さは0.5m強である。壁面の中位に稜を成し、下部に比べて上部の壁が緩やかになっている。したがって、他よりも上部に対する底面積の割合が小さくなる。主軸は丘陵筋と平行し、SF31と並ぶ。覆土は上層が黒褐色土、下層が暗褐色砂質土である。木棺の痕跡は認められず、出土遺物もない。

遺構の特徴や周辺の遺物から、弥生時代後期前半～中葉の土坑墓である可能性が高いと判断できる。

SF33・SX01（第38図）　SF32の西側の斜面際に位置する。SX01は、一辺2.5m以上の方形で、深さは0.4m弱である。丘陵筋に沿って設けられており、南東部は丘陵斜面および9号墳周溝によって失われている。壁面に沿った内側にはL字の溝を伴う。さらに、その内側にSF33が位置する。SF33は9号墳周溝によって南西部が大きく破壊されており、本来の規模・形状はわからない。検出範囲の最大幅は1.0m弱、SX01底面からの深さは0.3m弱である。覆土は、SX01上層が黒褐色土、下層および溝・SF33が暗褐色砂質土である。SX01とSF33の先後関係は判断できなかった。出土遺物はない。

SF33の覆土については、弥生時代後期の土坑墓とした周辺の遺構と異ならない。残存状況が悪く時期・性格の判断が難しいが、弥生時代の土坑墓の可能性もある。SX01は、さらに判断の難しい遺構である。SF33が弥生時代の土坑墓であるとするならば、それに付随した整地痕や施設跡の可能性も考えることができる。

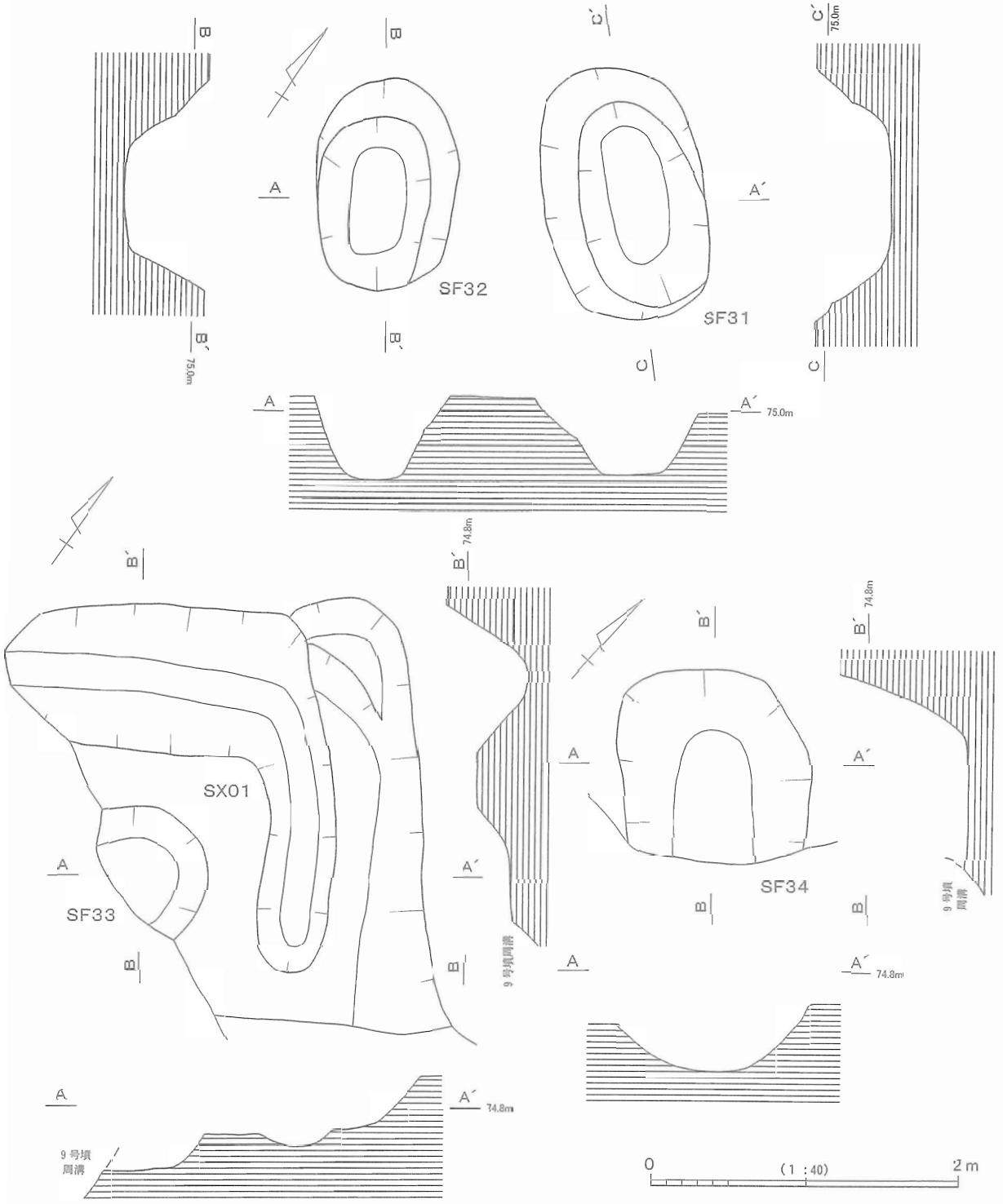
SF34（第38図）　9号墳墳丘南東縁に位置する。約1.2m×1.3m以上の長楕円～長方形であり、南東部は9号墳の周溝によって破壊されている。深さは0.8m強であり、比較的深い。主軸はSF31・SF32と同様、丘陵筋に平行する。覆土は上層が褐色砂質土、下層が暗黄褐色砂質土である。木棺の痕跡は認められていない。覆土から数点の弥生土器片が出土している。

遺構の特徴や出土遺物などから、弥生時代後期前半～中葉の土坑墓である可能性が高いと判断できる。

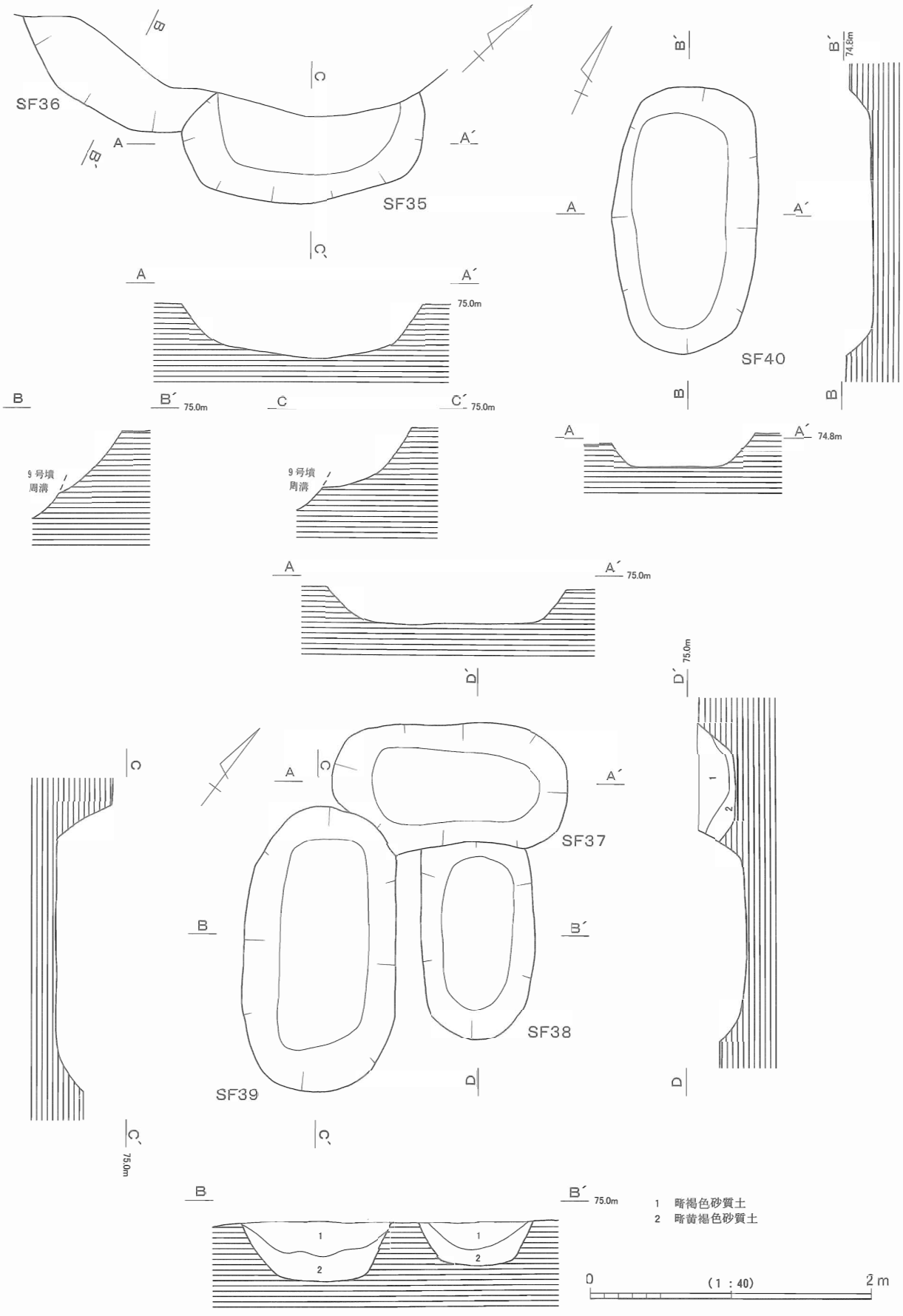
SF35・SF36（第39図）　SF35は9号墳南東側の平坦面に位置する。0.8m以上×1.7m強の長楕円～長方形で、深さは0.4m強である。北西部が9号墳周溝によって失われている。主軸は丘陵筋に直行する。覆土は暗褐色砂質土であり、木棺の痕跡は認められていない。上層から弥生土器片が出土している。

SF36はSF35の西側に位置する。9号墳周溝およびSF35によって大半が失われており、形状などの詳細はわからない。また、SF35との先後関係も、検出部分が少なかったために判断できなかった。

遺構の特徴や出土遺物などから、ともに弥生時代後期前半～中葉の土坑墓である可能性が高いと判断できる。



第38図　SF31・SF32、SF33・SX01、SF34



第39図　SF35～SF40

SF37～SF39（第39図）　9号墳南東側の平坦部に位置する。SF38とSF39が平行に並び、その北東にSF37が接する。主軸はSF37だけが丘陵筋に直行、他は平行する。いずれも長楕円～長方形で、SF37が1.0m弱×1.7m弱で深さ0.3m弱、SF38が約0.8m×1.4m以上で深さ0.4m弱、SF39が1.1m弱×2.3m弱で深さ0.5m弱である。いずれの覆土も上層が暗褐色砂質土、下層が暗黄褐色砂質土である。土層からの先後関係の判断はできなかった。木棺の痕跡も認められていない。各土坑の上層から弥生土器片が出土しているほか、SF37の上層からは銅鏃（第50図89）、SF38下層からはガラス小玉5点（第50図81～85）が出土している。ただし、詳細な出土位置は把握できなかった。

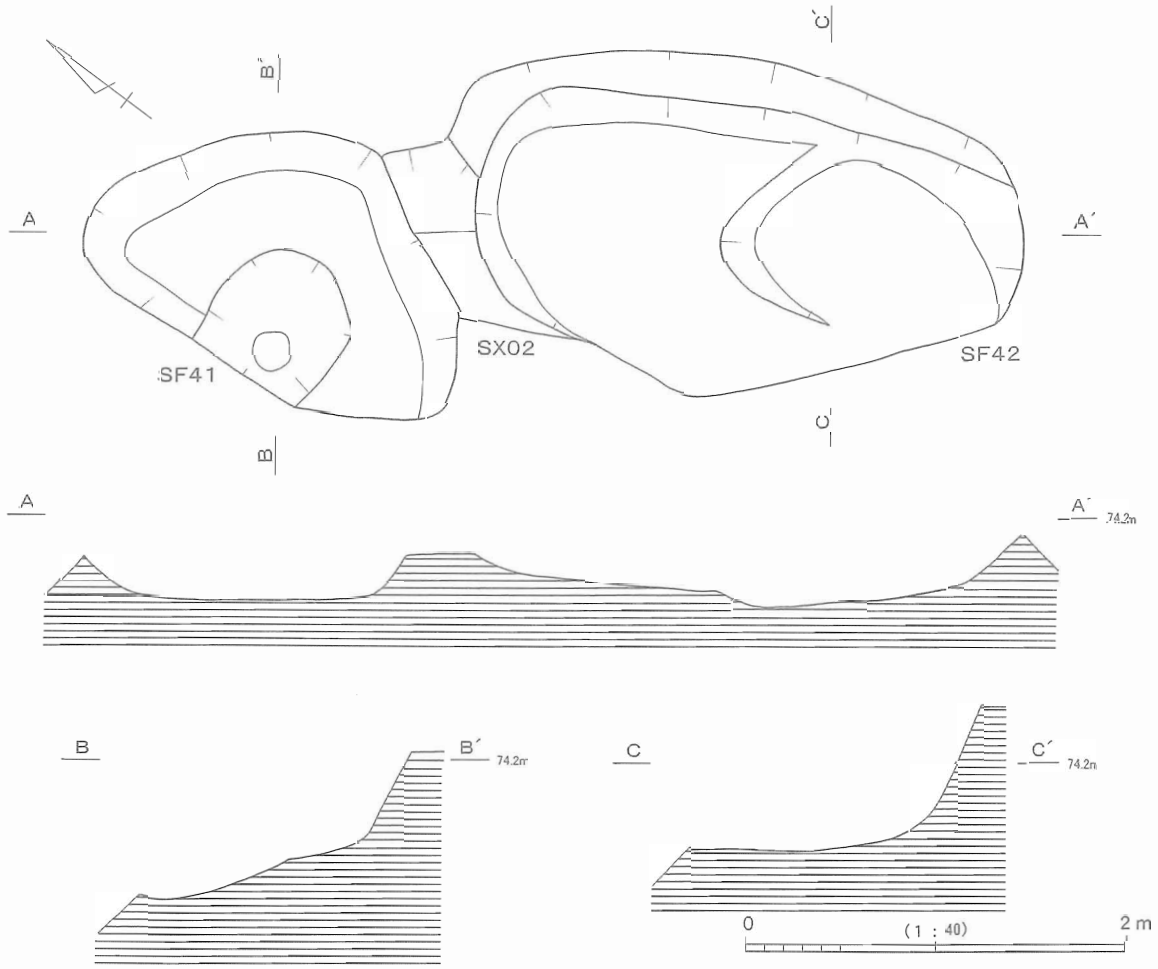
遺構の特徴や出土遺物から、いずれも弥生時代後期前半～中葉の土坑墓の可能性が高いと判断できる。

SF40（第39図）　SF39の北西に位置する。1.0m強×1.9m強の長楕円～長方形で、深さは約0.3m弱である。主軸は丘陵筋に平行する。覆土は暗褐色砂質土、木棺の痕跡は認められず、出土遺物もない。

遺構の特徴や周辺の遺物から、弥生時代後期前半～中葉の土坑墓である可能性が高いと判断できる。

SF41・SF42・SX02（第40図）　SF40の西側斜面地に位置する。SF41は、最大径2.0m前後の不整形で深さ0.4m強、中央付近に深さ0.2m弱の凹部がある。SF42は、1.8m以上×3.0m強の長楕円形で深さ0.6m強である。2基は丘陵筋に沿って縦に並ぶ。SX01は両土坑間にあり、深さ約0.2mである。覆土は、いずれも上層が暗褐色砂質土、下層が暗黄褐色砂質土である。木棺の痕跡や出土遺物はない。

SF41・SF42については、SF40などとは規模・形状が異なるが、覆土や周辺の出土遺物から弥生時代の土坑墓である可能性を指摘することもできる。一方、SX02については、SF41・SF42と関連する可能性も指摘できるが、性格は不明である。



第40図　SF41・SF42・SX02

2．G　群

2区中央部の8号墳墳丘と重なる範囲、北西から南東にのびる丘陵筋に沿った約18mの範囲に集中する遺構群である。北西側のF群よりも一段高い場所となる。黒～暗褐色土（Ⅳ層）の堆積もあったが、遺構検出面は灰～黄色砂層（Ⅴ層）上面とした。

丘陵上平坦部で土坑などが検出されているが、南斜面寄りに集中する。中央部は8号墳埋葬施設があった場所であり、古墳群形成以前の遺構が古墳築造に際しての整地や埋葬施設の構築によって消失した可能性はある。なお、SF45・46は弥生時代の土坑墓の可能性が高いが、SF48・49、SD05、SP01・02については、時期・性格の特定が難しい。

丘陵斜面においても、遺構の発見があった。北東斜面では弥生時代の土器棺墓2基（SF49・50）と土坑墓の可能性が高い遺構2基（SF43・44）が点在するように検出されている。一方、南西斜面では大きな斜面の造成跡（SX03）と、そこに配置された土器棺墓2基（SF51・52）が検出されている。

出土遺物からは、これらが弥生時代中後期を中心とする遺構群である可能性を指摘できる。なお、F群で述べたとおり、8号墳北側周溝の南西外れの斜面部で、弥生土器片が比較的多く出土している。8号墳周溝によって消滅してしまった弥生時代の遺構もあった可能性が考えられる。

(1) 土坑墓

SF43（第41図）　F群へと下る斜面の北東部に位置する。0.8m強×1.4m強の長楕円～長方形、深さは0.5m弱である。主軸は東西に近く、丘陵筋には斜行するが、等高線に平行している。覆土は概ね黒褐色土である。木棺の痕跡は認められず、出土遺物もない。

遺構の特徴や周辺の遺物から、弥生時代後期前半～中葉の土坑墓である可能性が高いと判断できる。なお、この遺構の主軸が丘陵筋に斜行する等高線に平行していることから、古墳群形成以前よりこの部分が溝状に凹んだ地形になっていた可能性を指摘することもできる。

SF44（第41図）　丘陵の北東側斜面に位置する。約0.7m×1.2m弱の長楕円～長方形、深さは0.4m強である。主軸は丘陵筋に平行する。覆土は黒褐色土であり、木棺の痕跡は認められない。弥生土器片が数点出土している。

遺構の特徴や出土遺物から、弥生時代後期前半～中葉の土坑墓である可能性が高いと判断できる。

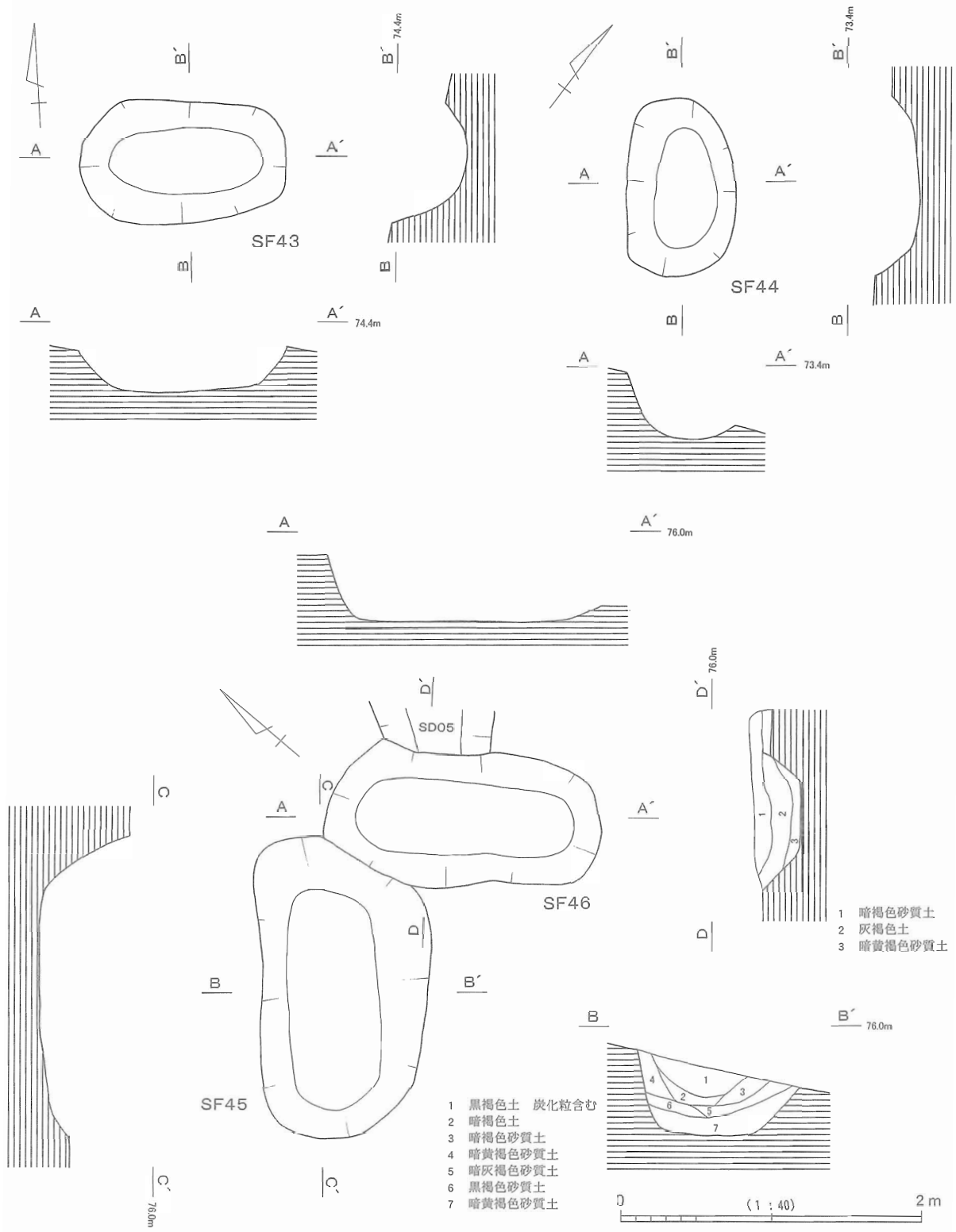
SF45・SF46（第41図）　8号墳墳丘部、丘陵上平坦面の南西端に位置する。SF45は約1.1m×2.0mの長楕円～長方形で深さ約0.4m、SF46は約0.9m×1.8mの長楕円～長方形で深さ0.4m強である。主軸はSF45が丘陵筋に平行、SF46が直行する。覆土は、ともに上層が黒褐色土や暗褐色砂質土、下層が暗黄褐色砂質土である。両者は接するが、土層による先後関係の判断はできなかった。木棺の痕跡は認められていない。両遺構ともに覆土から弥生土器片が数点出土しているほか、ガラス小玉（SF45：第50図86・87、SF46：第50図88）も出土している

遺構の特徴や出土遺物から、弥生時代後期前半～中葉の土坑墓である可能性が高いと判断できる。

(2) 不明土坑

SF47・SF48（第42図）　8号墳墳丘部にあたる丘陵上平坦面の南東端に位置する。SF47は約1.3m×1.7mで深さ0.8m弱、SF46は約1.3×1.5mで深さ約0.9mである。ともに、平面楕円形、断面箱形を呈し、覆土などの特徴も共通する。上層は黒～暗褐色土、下層は灰～黄褐色砂質土で占められ、先述のSF43～46（弥生時代の土坑墓）よりもしまりが強い。SF48の上層から弥生土器片が出土している。

遺構の形状や覆土は、弥生時代の土坑墓の可能性が高いSF45などとは異なる。むしろ、覆土のしまり



第41図 SF43～SF46

は縄文時代の落し穴であるSF10などと類似する。ただし、周囲を含めて縄文時代の遺物の出土は認められず、遺構の形状についても、落し穴としては浅いなど、縄文時代の遺構であるとは断定できない。SF45とは形状・構造が異なる弥生時代の土坑墓である可能性も否定できない。

(3) 土器棺墓および関連遺構

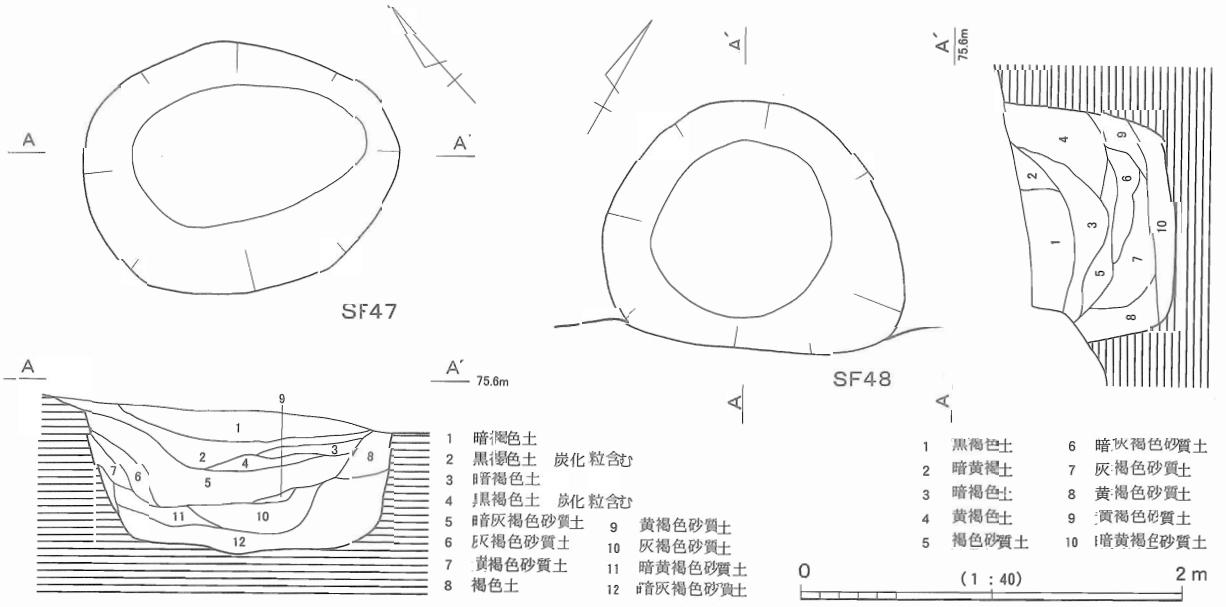
SF49（第43図）　丘陵の北東側斜面に位置する。土坑は約0.4m×0.6mの楕円形を呈する。深さは0.2mに満たないが、本来はより深かったと推測できる。覆土は黒～暗褐色砂質土である。土坑内の北西寄りに土器棺が埋置されていた。

土器棺の身は、胴部最大径約0.45mの壷（第46図74）である。ほぼ正位に置かれていた。上部は流土などによって押しつぶされていた。ただし、頸～口縁部にあたる部分は破片でも出土していない。頸部以上を欠いた状態で用いられたと考えられる。なお、蓋の可能性がある別個体の出土は認められていない。土器棺内には砂質土が流入しており、副葬品などの出土もなかった。

土器棺の形態などから、弥生時代後期前半の土器棺墓である可能性が高いと判断できる。

SF50（第43図）　丘陵の東側斜面に位置する。土坑は約0.7m×1.0mの長楕円～長方形を呈する。長軸は等高線に平行、南北に近い。深さは0.4m強であるが、本来はより深かったと推測できる。覆土は黒～暗褐色砂質土である。土器棺は土坑のほぼ全体にわたるように埋置されていた。

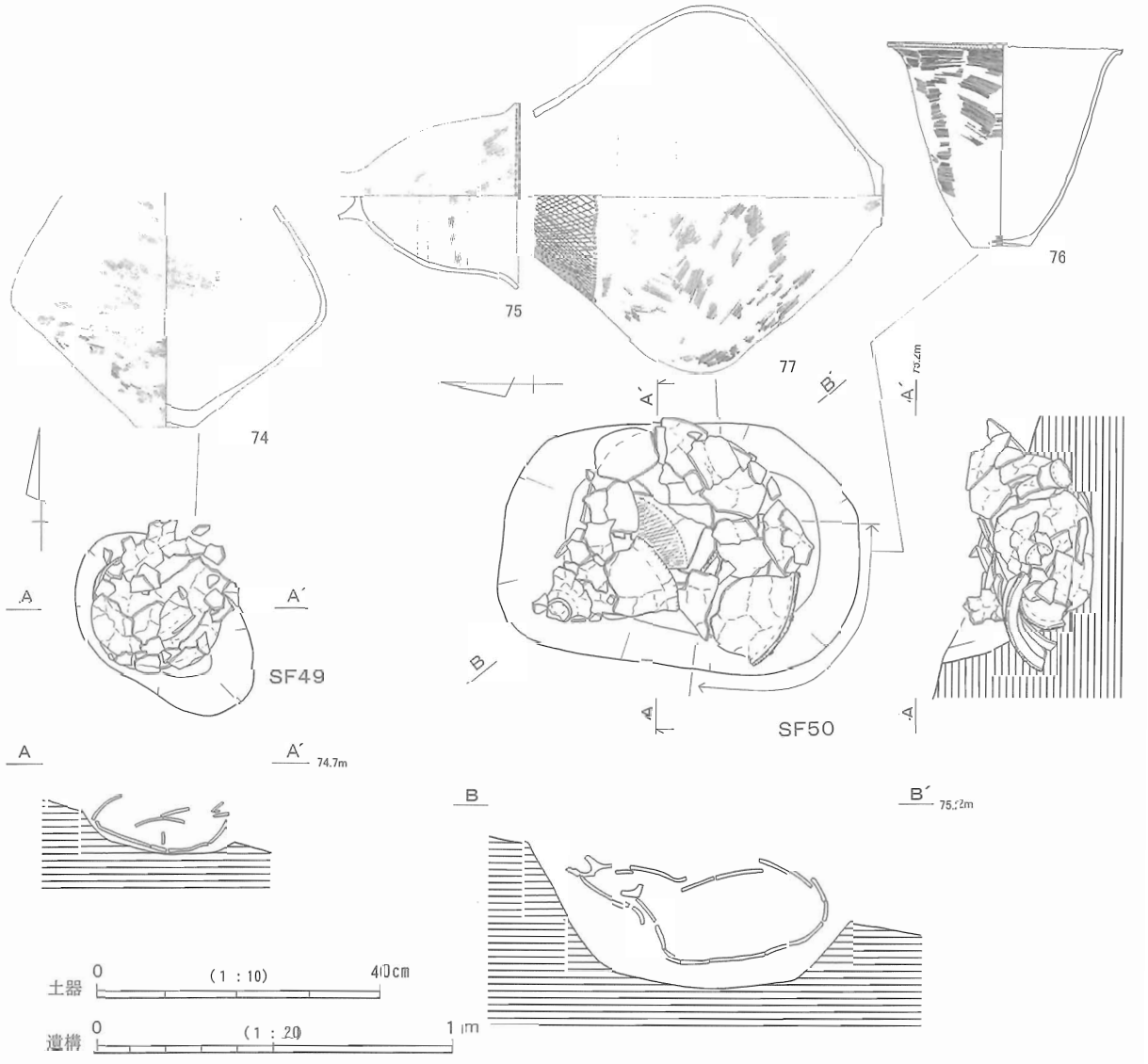
土器棺は、土圧の影響がうかがえるものの、比較的良好に残存していた。身は、胴部最大径0.5m強の壷（第47図77）であり、口縁部側を北西に向けて横位に置かれていた。頸部以上を欠いた状態で土器棺の身としていた。蓋は、口径約0.25mの台付甕（第47図75）であり、身と合わせ口にした状態で検出することができた。台部の欠損は、後世の崩落・流土の影響による可能性もあり，本来から欠損していたかは判断し難い。身と蓋の主軸はほぼ一直線上にあり、蓋の台部側がやや上方を向いていた可能性があるが、概ね横位に倒した状態で設置されたと復元することができる。土器棺内には砂質土が流入しており、土器片以外の出土遺物はなかった。



第42図　SF47・SF48

以上の身と蓋のほかに、口径0.3m強の平底の甕（第47図76）も用いられていた。この甕は、身（壷）の南東側（斜面上方）にまとまっていた。土坑の長軸上南端に底部片、その西側に口縁～胴部片が検出されている。底部片は、底を南に向けていた。口縁～胴部片は、縦方向に割れた数枚の破片が重なった状態になっていた。全て外面を上にしていたが、上の破片は口縁を南、下の破片は口縁を逆の北に向けていた。以上のように、土圧・流土の影響を考慮したとしても、身や蓋などと同様に扱われたとするには不自然な出土状態である。破片の状態で用いられ、故意に上記のような配置に置かれた可能性が指摘できる。さらに、接合作業の結果、ほぼ完形の状態に復元することができていることから、破片になったものを持ち込んだのではなく、土器棺墓に持ち込むにあたって割った可能性が評価できる。一方、復元した身（壷）をみると、とくに下半部には欠落部・穴を認めることができない。したかって、土器棺の穴を塞ぐ目的で置かれたものとは考え難い。むしろ、この土器にみられるような破砕行為は、供献土器や副葬品に多く認めることができる。なお、身と蓋の位置が土坑の主軸から外れている点について、この土器片を置く場所を確保したためとみることもできる。

土器棺などの出土土器から、弥生時代中期後葉の土器棺墓である可能性が高いと判断できる。



第43図　SF49・SF50

SX03（第44図）　8号墳墳丘部の南西側斜面に位置する。丘陵斜面の一部を削り込んだ遺構であり、その中につくられた平坦面に2基の土器棺墓（SF51・SF52）を伴う。東西幅約6.0m、比高約3.2mの範囲に検出することができたが、上端・下端および南東端部は流失している。

西縁部には、幅約1.3mの溝が伴っている。流土との関連も指摘できるが、通路もしくは排水施設であったという可能性も否定はできない。一方、東寄りには約1.4m×2.5mの半楕円形のテラス状平坦部が伴い、そこに2基の土器棺墓（SF51・SF52）が東西に並んで検出された。土器棺墓のために設けられた平坦部であると考えられるが、この土器棺の残存状況から、平坦部の南側（斜面下方）が崩落・流土の影響を強く受けていることが指摘できる。なお、SX03は平坦部よりも下へと及んでおり、より下方に消失してしまった施設があった可能性も考慮することができる。

2基の土器棺墓（SF51・SF52）と関連する遺構であり、弥生時代後期中葉前後の墓域関連遺構である可能性が高いと判断できる。

SF51（第44図）　SX03平坦部の東寄りに位置する。土坑は、最大径約0.5mの円形を呈する。深さは0.1m強であり、非常に浅い検出であった。

埋置された土器棺については、良好な状態では検出できなかった。身は、最大径0.5m弱の壷（第48図78）が用いられていたが、破壊・流失が著しいこともあって、胴部片だけの出土であった。本遺跡群の他の土器棺を参照するならば、頸部以上を欠いた状態で用いられた可能性が指摘できる。また、土器棺の身の底部が欠損している例も少数ながら存在する（文殊堂遺跡SF92、フケ遺跡SF34）。しかし、あくまで類推の域を出ないものであり、いずれの判断も慎重になる必要がある。蓋の有無や埋置姿勢についても、同様に判断し難い。土器棺内には砂質土が流入しており、その他の遺物の出土はなかった。

土器棺の形態などから、弥生時代後期中葉頃の土器棺墓である可能性が高いと判断できる。隣に位置するSF52とは身（大型壷）の器形が大きく異なり、SF51の身の方が古い特徴を伴う。しかし、大きな時期差として評価できるかはわからない。

SF52（第44図）　SX03平坦部の西寄りに位置する。土坑は、最大径0.7m強の円形であり、深さは0.3m強である。この中央に土器棺が埋置されていた。上部を中心に土圧や流土の影響を受けているが、比較的良好に残存している。

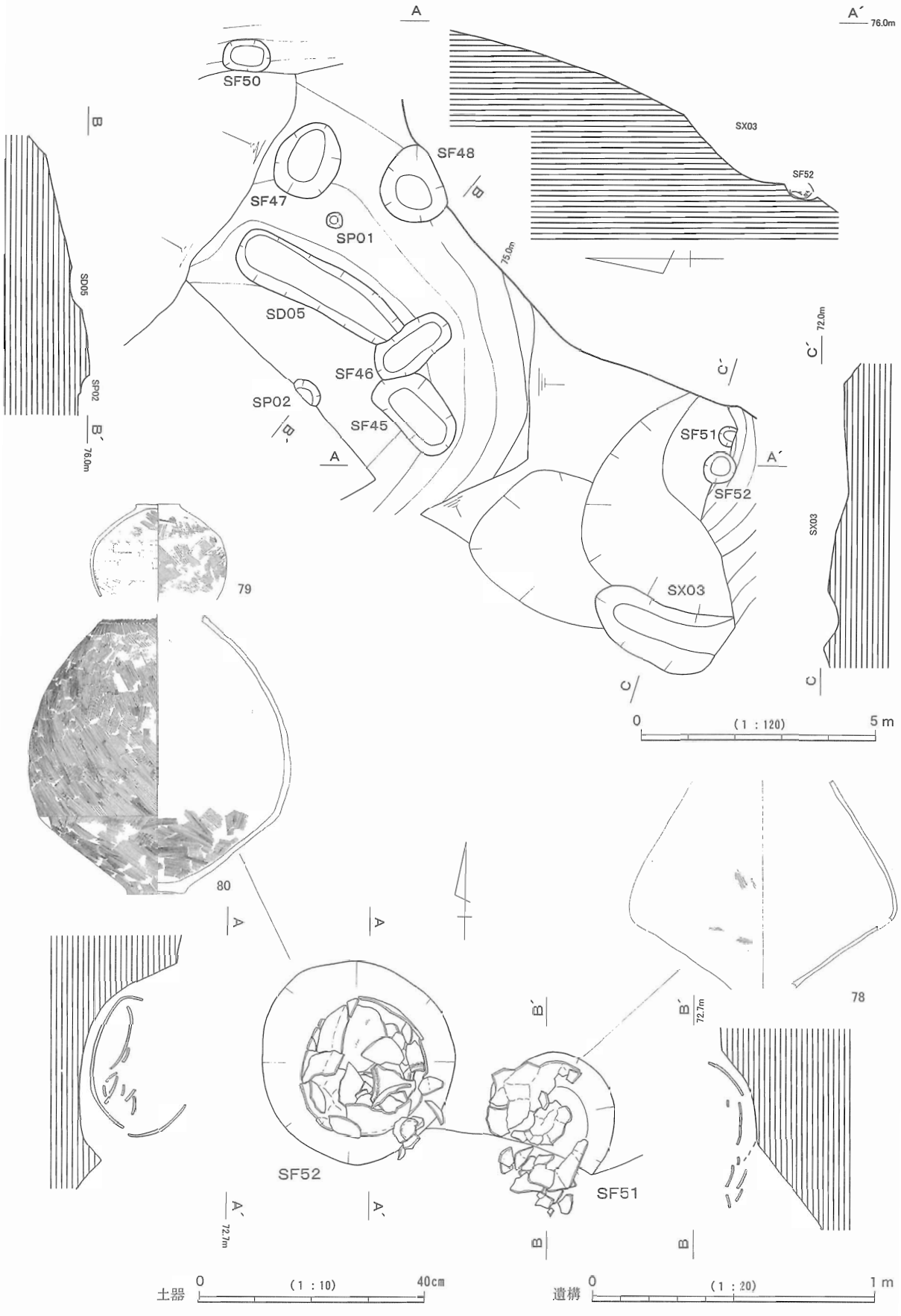
土器棺の身は、最大径0.5m弱の壷（第49図80）である。出土状況などから、頸部以上を欠いた状態で用いられたことがわかる。埋置姿勢は正位に近く、頸部（上）側を若干北東に傾けた状態で置かれていた。蓋は、最大径0.2m強の壷（第49図79）である。出土状況から、上半部を欠いた状態で用いられていたことがわかる。また、流土・陥没などの影響を受けてはいるが、底部を上にして蓋としていたことが、出土状況から判断することができる。

土器棺の形態などから、弥生時代後期中葉～後半の土器棺墓である可能性が高いと判断できる。

(4) その他

SD05・SP01・SP02（第44図）　いずれも、8号墳墳丘部にあたる丘陵上平坦面の南東部に位置する。SD05は長さ3.8m以上、幅約1.0m、深さは0.2m弱の溝状を呈する。SP01は最大径0.4m弱、深さ0.1m弱の小穴である。SP02は最大径約0.7m、深さ1.0m強の小穴であり、北西部が8号墳埋葬施設によって失われている。いずれも覆土は暗灰褐色砂質土であり、出土遺物はない。

これらは、形状・配置などから積極的に弥生時代の墓域に伴うとは判断できない。覆土も弥生時代の墓域の遺構とは異なっており、古墳築造に伴う整地痕などである可能性も考慮することができる。

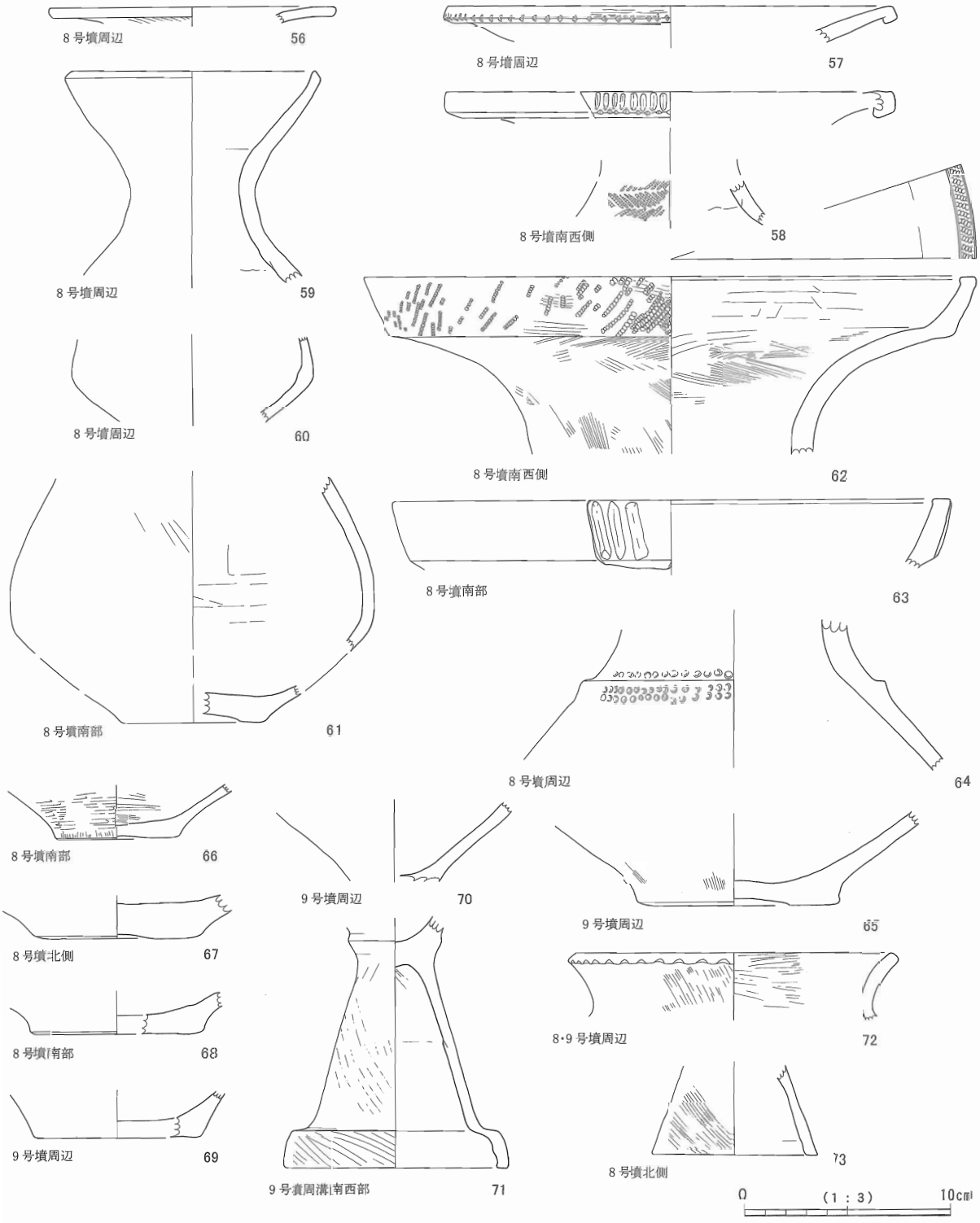


第44図　G群南東部、SF51・SF52

3．2区中央部の出土遺物

(1) 弥生土器

遺構外出土土器（第45図）　56～69は壷の破片である。口縁部には単純口縁、折り返し口縁、受口状口縁がある。単純口縁には、大きく外反する56と外反しない59が認められる。59の頸～肩部の文様は、



第45図　F・G群出土土器

摩滅のためか観察することができない。折り返し口縁の57・58は、ともに大きく外反する口縁部であり、折り返した端部外面に刻み・刺突が廻る。58の肩部には、3段の羽状刺突文が施されている。

受口状口縁には、縄文を施した62と棒状浮文を施した63がある。ともに8号墳南部から出土した大型の壷であり、土器棺（SF51・SF52）に関連した土器片である可能性もある。64・65も大型の壷に復元することができる。64の肩部には断面三角形の突帯が廻り、その上下には竹管文が施されている。65は、上げ底状の底部である。61も上げ底状の底部であるが、平底の底部（68など）の出土もある。

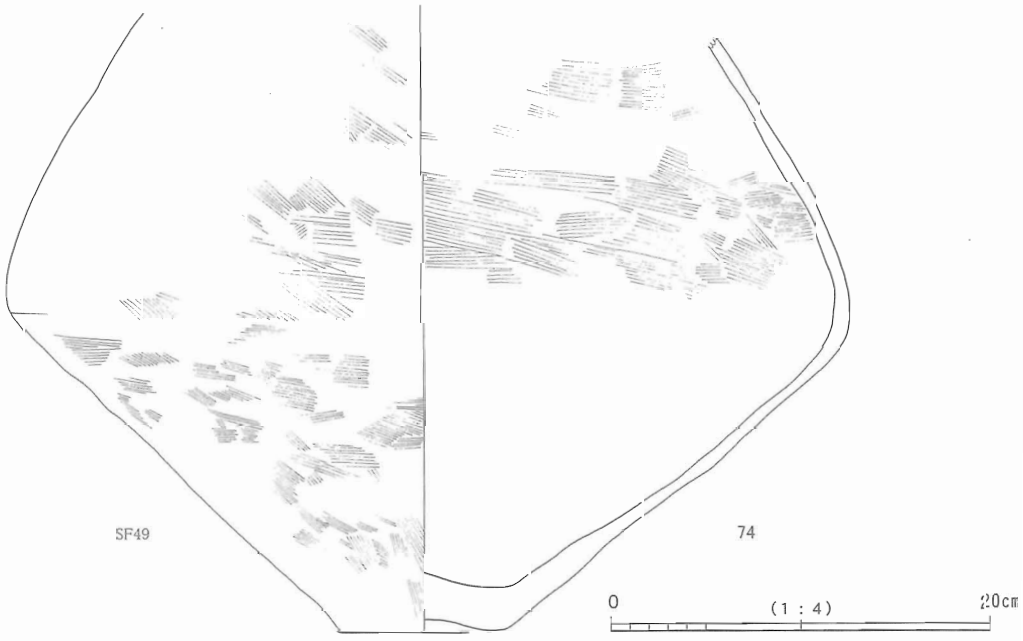
70は高坏の坏底部、71は脚部である。71の接合部には、断面三角形の突帯が1条廻る。脚裾は大きく鍵状に屈曲する。72は甕の口縁部であり、比較的緩やかに胴部から口縁部へと移行する形状を呈する。口縁端部には刻みが廻る。73は直線的に開く甕の台部である。

58の文様などに新しい要素が認められるが、単純口縁や受口状口縁、上げ底状の底部の壷が多く、弥生時代後期前半～中葉に位置づけできるものが目立つ。高坏・甕についても、同様の時期に位置づけることができる。

SF49土器棺（第46図）　74は、土器棺の身として用いられていた大型の壷である（第43図）。肩部以上を打ち欠いた状態で用いられていた。文様は認められず、外面はハケ調整で占められている。胴部は算盤玉に近い形状を呈するが、屈曲する最大径付近の稜線は明確ではない。底部は上げ底状である。以上のような特徴から、弥生時代後期前半に位置づけることができる。

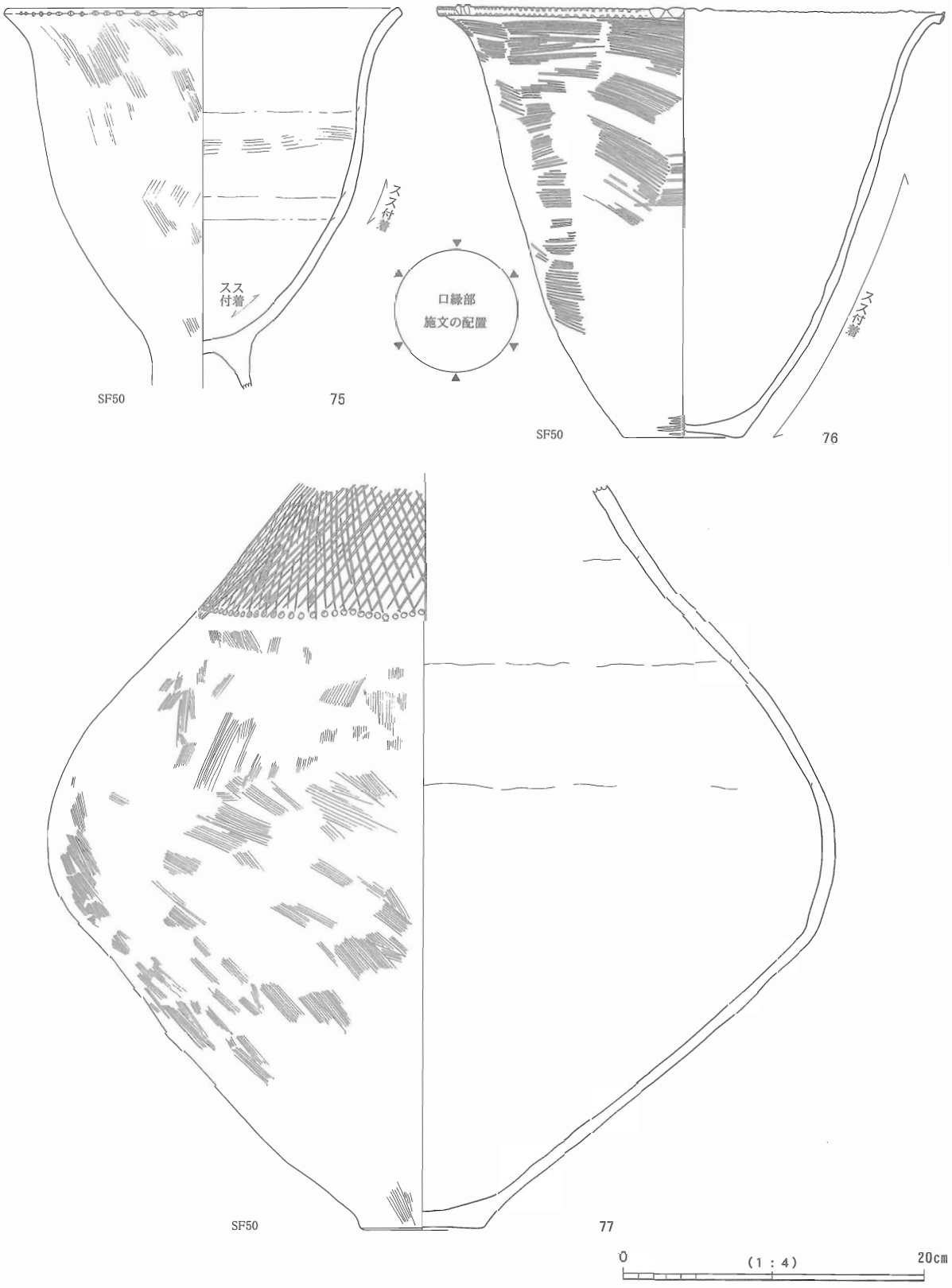
SF50土器棺（第47図）　75は、土器棺の蓋として用いられていた台付甕である（第43図）。台部の欠損は、後世の流土の影響による可能性もある。若干膨らみを伴う胴部から緩やかに外反する口縁部に至る。口縁端部の下端に刻みが廻る。外面はハケ調整で占められる。摩滅が著しくわかりにくいが、大半のハケ調整が右下から左上への方向である中で、胴部下寄りにだけ方向の異なるハケ調整が観察できる。また、内外面の一部にススの付着が認められるが、その範囲も摩滅のために不明瞭になっている。

76は、いくつかに割られた状態で納められていた甕である。75に比べて胴部の膨らみは弱く、口縁部



第46図　SF49土器棺

の外反は強い。口縁端部には、全体的に不明瞭な刻みが上下端に廻り、さらに、2単位の指頭押圧が6ヶ所に配置されている。外面には横方向に近い条痕が施されている。台部は付かず、底部は薄い平底である。この土器も器壁の摩滅が著しいが、下半部の外面にススの付着が認められる。



第47図　SF50土器棺

77は、土器棺の身として用いられていた大型の壷である（第43図）。頸部以上を打ち欠いた状態で用いられていた。肩部にはヘラ描の斜格子文が施され、その下に円形刺突文が廻る。外面調整はハケ調整で占められる。胴部の形状は算盤玉形に近いが、最大径付近に稜は伴わない。底部は平底である。

これらは弥生時代中期後葉に位置づけることができ、本遺跡群では最も古い土器棺であるといえる。

SF51土器棺（第48図）　78は、土器棺の身として用いられていた大型の壷である（第44図）。胴部の形状は算盤玉形に近いものの、胴部最大径が下寄りにあり、全体に縦長の形状を呈する。また、胴部最大径付近の稜は明確でない。外面調整はハケ調整で占められる。肩部以上および底部は欠損している。形態の特徴などから、弥生時代後期中葉頃に位置づけることができる。

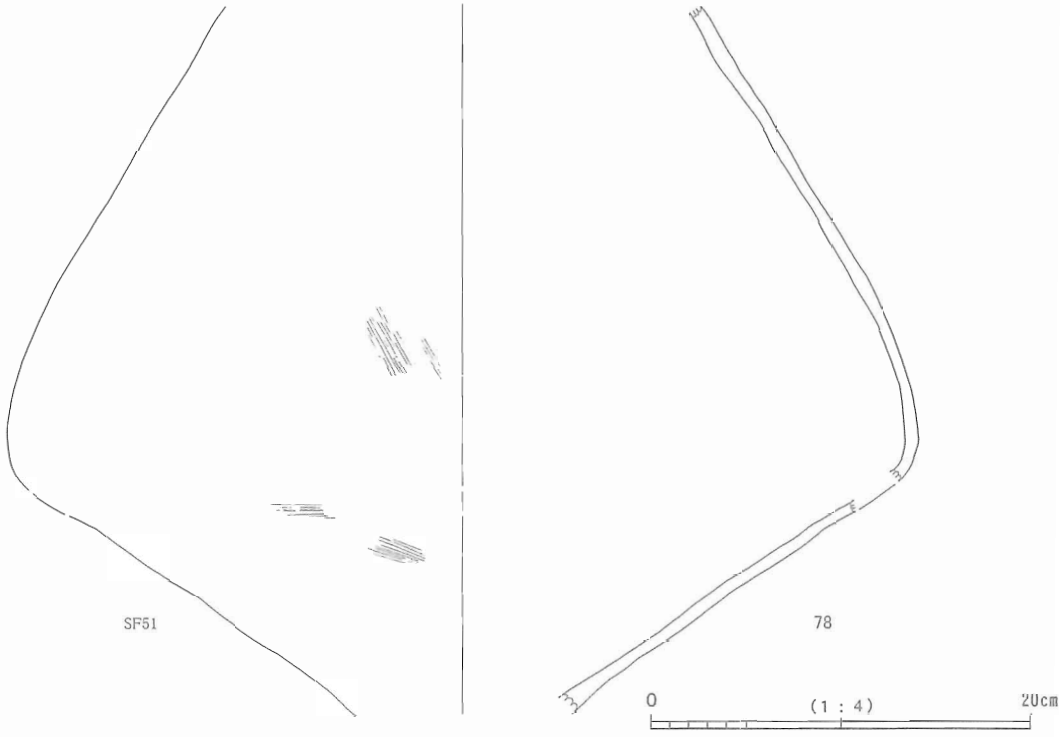
SF52土器棺（第49図）　79は、土器棺の蓋として用いられていた壷である（第44図）。大型の壷とは異なり、比較的丁寧なつくりの壷である。上半部を欠いた状態で用いられていた。胴部の形状は球形に近い。外面には、ハケ調整と荒いミガキ調整が観察できる。底部は平底で、木葉痕が認められる。

80は、土器棺の身として用いられた大型の壷である（第44図）。頸部以上を打ち欠いた状態で用いられていた。胴部は球形に近い形状を呈しているが、最大径の下部に明確な稜を伴う。外面調整はハケ調整で占められる。肩には、有段の羽状刺突文が施されている。底部は平底である。

これらは、各土器の特徴から弥生時代後期中葉～後半に位置づけることができる。

(2) 玉　類

ガラス小玉（第50図）　81～85はSF38から、86・87はSF45から、88はSF46から出土したガラス小玉である。歪みのあるものが多く、形状や大きさには個体差が目立つ。ただし、いずれも水色を呈しており、径0.5cm以下、長さ0.4cm以下の小型品である点で共通している。また、84・88をはじめとして気泡の目立つものが多い。出土遺構と遺物の特徴から、弥生時代後期の遺物であると考えられる。



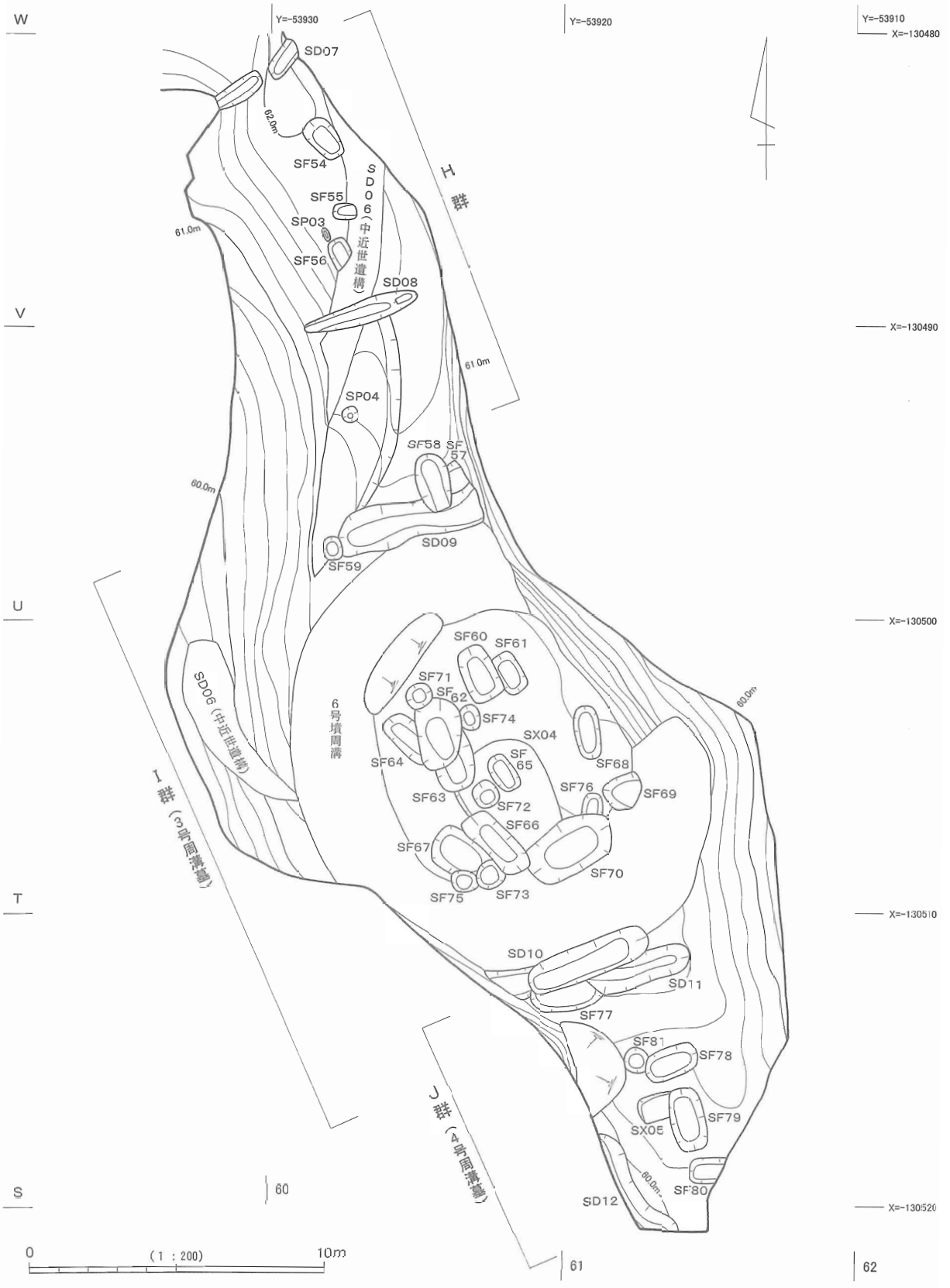
第48図　SF51土器棺

(3) 金属器

SF37出土銅鏃（第50図）　89は、SF37出土の銅鏃である。残存状態が悪いものの、形態の概要は把握できる。有茎の小型鏃であり、刃部は柳葉形もしくは長三角形に復元できる。逆刺は認められない。刃部の断面は菱形であり、刃部中央の稜が茎部にまで至る。ただし、茎部においては徐々に断面が楕円形に近くなり、稜はなくなっていく。出土遺構と遺物の特徴から、弥生時代後期に位置づけできる。

第50図　F・G群出土玉類・金属器

第5節　2区南部

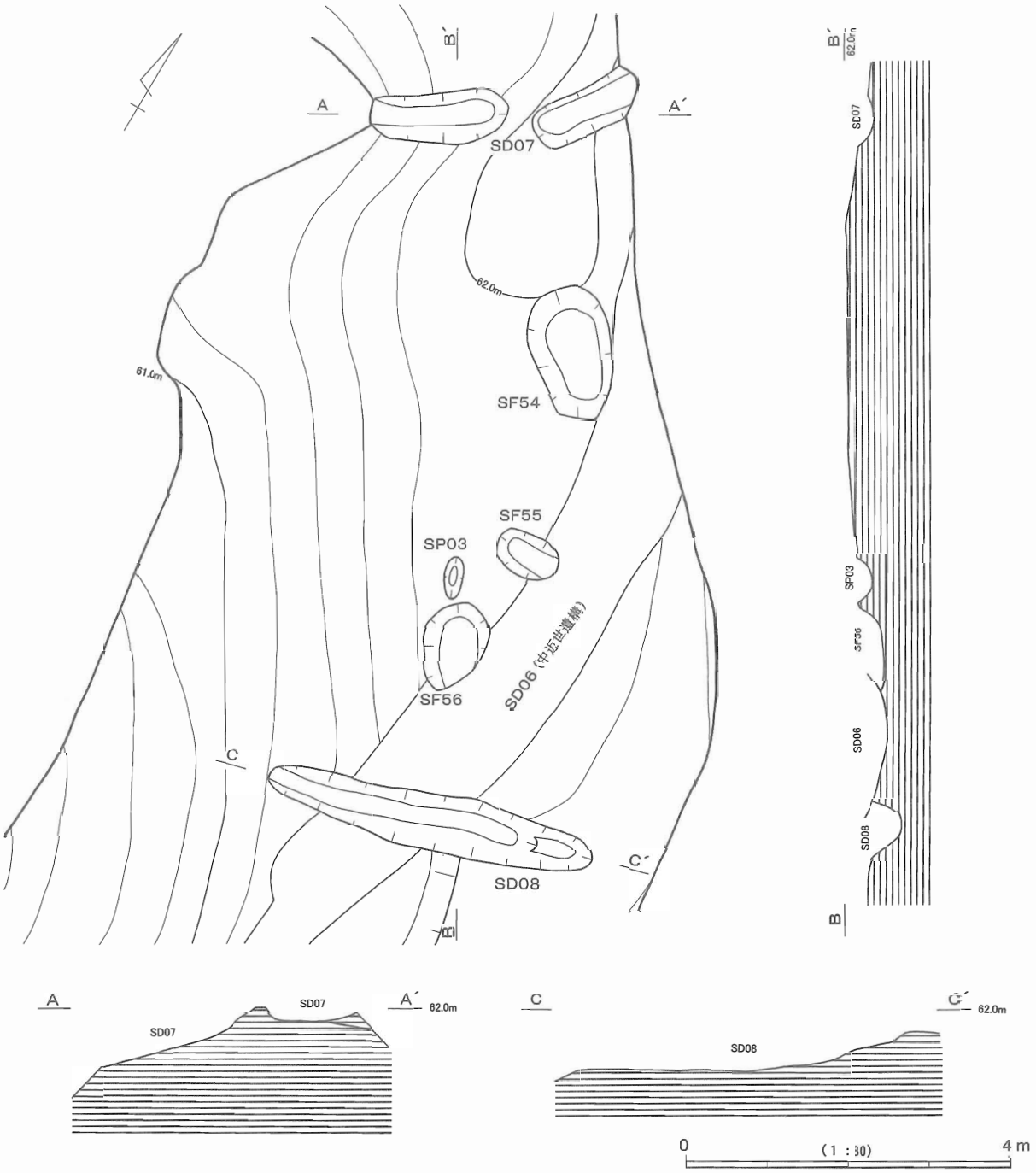


第51図　2区南部

1．H　群

2区南部の北寄りの尾根上、南北約14mの範囲にある遺構群である。丘陵上平坦部は幅3m以下と狭く、東は丘陵斜面、西は崖になる。基本的には黄～赤褐色砂質土層（V層）上面で遺構検出しているが、U60グリッドの三日月形の範囲に崩落土層が認められ、SP04・SF59はその上面で発見されている。

溝2条（SD07・08）、土坑3基（SF54～56）、小穴2基（SP03・04）が検出されたが、本遺構群には出土遺物がほとんどなく、時期などの特定は難しい。古墳群形成前の遺構として報告するが、小穴の時期・性格は不明、溝は他の周溝墓の周溝とは形態などが異なり、弥生時代か否かも判断し難い。土坑については、遺構の形状などから弥生時代の土坑墓である可能性を高く評価しておきたい。



第52図　H群北部

(1) 溝

SD07（第52図）　2区南部の北縁、尾根幅が狭くなる部分に位置する。丘陵を横断する方向にのびる溝で、丘陵上の中央で途切れる。東半は長さ約1.4mであり、平坦部に位置する。西半は長さ約1.7mであり、西斜面に位置する。幅は0.6m前後、深さは0.2m弱で一定し、底面は地形に沿って傾斜する。このような溝は、周辺の周溝墓には認められていない。覆土は灰黄褐色砂質土、出土遺物はない。

以上から、周溝墓の周溝とは異なると判断できる。弥生時代の遺構であるかも疑わしい。

SD08（第52図）　2区南部北寄りの丘陵上に位置する。丘陵を横断する方向にのびる溝で、東端が丘陵上中央付近で立ち上がる。長さ約4.1m、最大幅約0.8m、底面はほぼ水平であり、深さの最大は約0.4mである。覆土は灰黄褐色砂質土である。出土遺物はない。

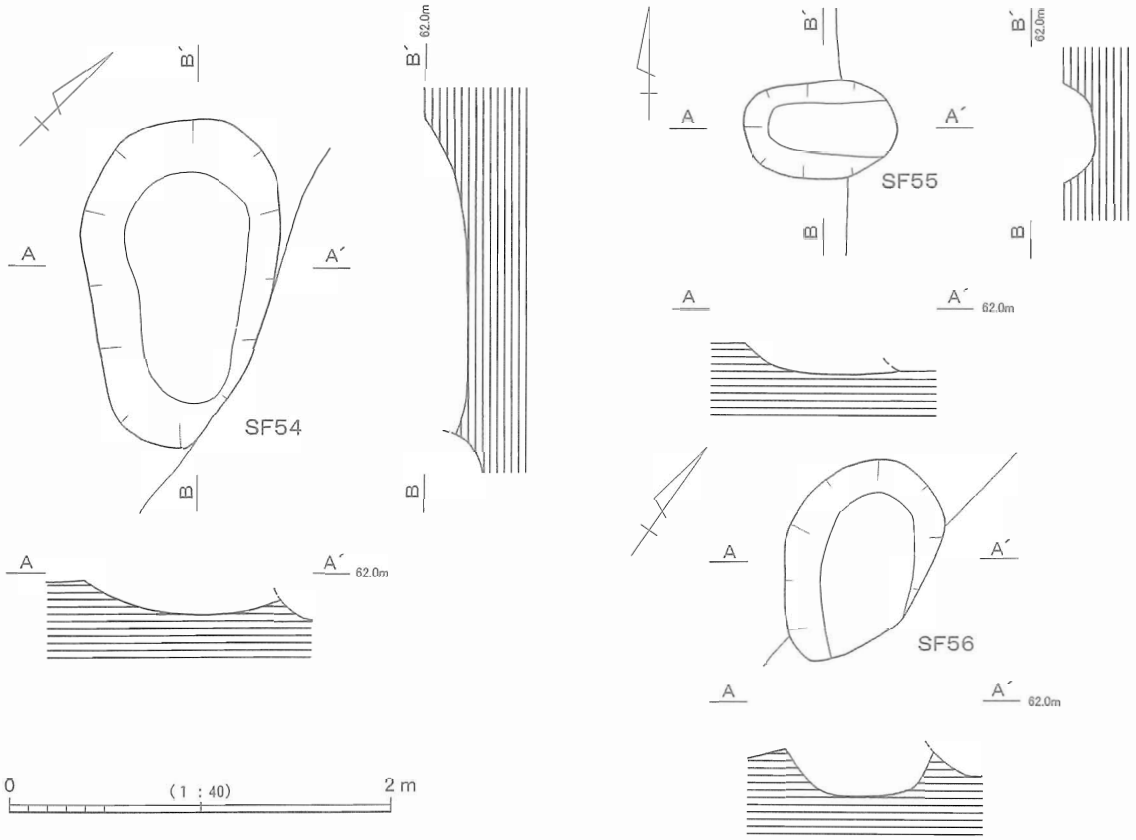
弥生時代の周溝墓の周溝としても問題ない形状を呈するが、立地・覆土の特徴、出土遺物がないことなどから、積極的に評価することはできない。

(2) 土坑墓・小穴

SF54～SF56（第53図）　2区南部北寄りの平坦部に位置する。SF54は1.0m強×1.7m強、SF55は約0.5m×0.8m以上、SF56は0.8m弱×1.0m以上であり、いずれも長楕円形で深さ0.2m前後である。主軸はSF54・SF56が丘陵筋に平行、SF55が直行する。いずれも中近世のSD06に切られている。覆土は炭化粒を含む暗灰褐色土、木棺の痕跡は認められず、出土遺物はない。

遺構の形状などの特徴からは、弥生時代中後期の土坑墓である可能性が評価できる。しかし、周辺域を含めて遺物の出土がなく、積極的に時期・性格を特定することはできない。

SP03・SP04（第51・52図）　SP03は最大径0.5m強で深さ0.2m強、SP04は最大径約0.6mで深さ0.3m強である。いずれも覆土は黒褐色土で、出土遺物はない。時期・性格の特定は難しい。



第53図　SF54～SF56

2．Ⅰ　群

2区南部の中央の尾根上、南北約20mの範囲にある遺構群である。この範囲は、古墳時代中期の6号墳の範囲に対応している。遺構検出面はⅤ層上面であり、古墳の墳丘部分では灰黄色砂層、墳丘外では黄～赤褐色砂質土層の上面となる。6号墳の墳丘部分では、古墳の盛土の下に黒褐色の旧表土が残っており、そこに本来の遺構面があった可能性もある。しかし、旧表土中での遺構把握は困難であり、また、古墳築造に伴う整地の影響も想定されることから、より下層に遺構検出面を求めた。古墳の南側でも黒～暗褐色砂質土層の堆積が認められたが、これについても同様に扱った。

6号墳の墳丘部分では、盛土下に径約9mの丘陵上平坦面が検出され、そこに古墳築造以前の土坑16基が発見されている。多くは弥生時代の土坑墓であると判断できるが、3基の土器棺墓なども含む。一方、古墳の北側では東西方向の溝1条と土坑墓2基・土器棺墓1基が検出され、南側では東西方向の溝2条と土坑墓1基が重なった状態で検出された。東西は丘陵斜面・崖になっている。

本遺構群は、遺構・遺物の特徴から弥生時代の墓群であり、土坑群が展開する中央部、その南北に区画の可能性が高い溝があることから、周溝墓であると把握することができる（3号周溝墓）。ただし、古墳の周溝によって壊された部分があり、検出状況が3号周溝墓の本来を示しているとは限らない。6号墳の北周溝内からは弥生時代の玉類が出土しており、その周辺に破壊された埋葬施設があった可能性を指摘することができる。また、墓群全体としては弥生時代後期後半を主とすると判断できるが、周溝は後期前半頃に位置づけられる。周溝墓の時期と土坑墓群の時期に差異があった可能性も指摘できる。

なお、立地地形によって台状部が周囲よりも1m程高くなっている。また、土器のほかに鉄剣・銅釧・玉類といった副葬品が他より多いことも、この墓群の特徴となっている。高まりを伴う周溝墓、副葬品の多い墓群として、他より目立った存在であったと位置づけることができる。

(1) 溝

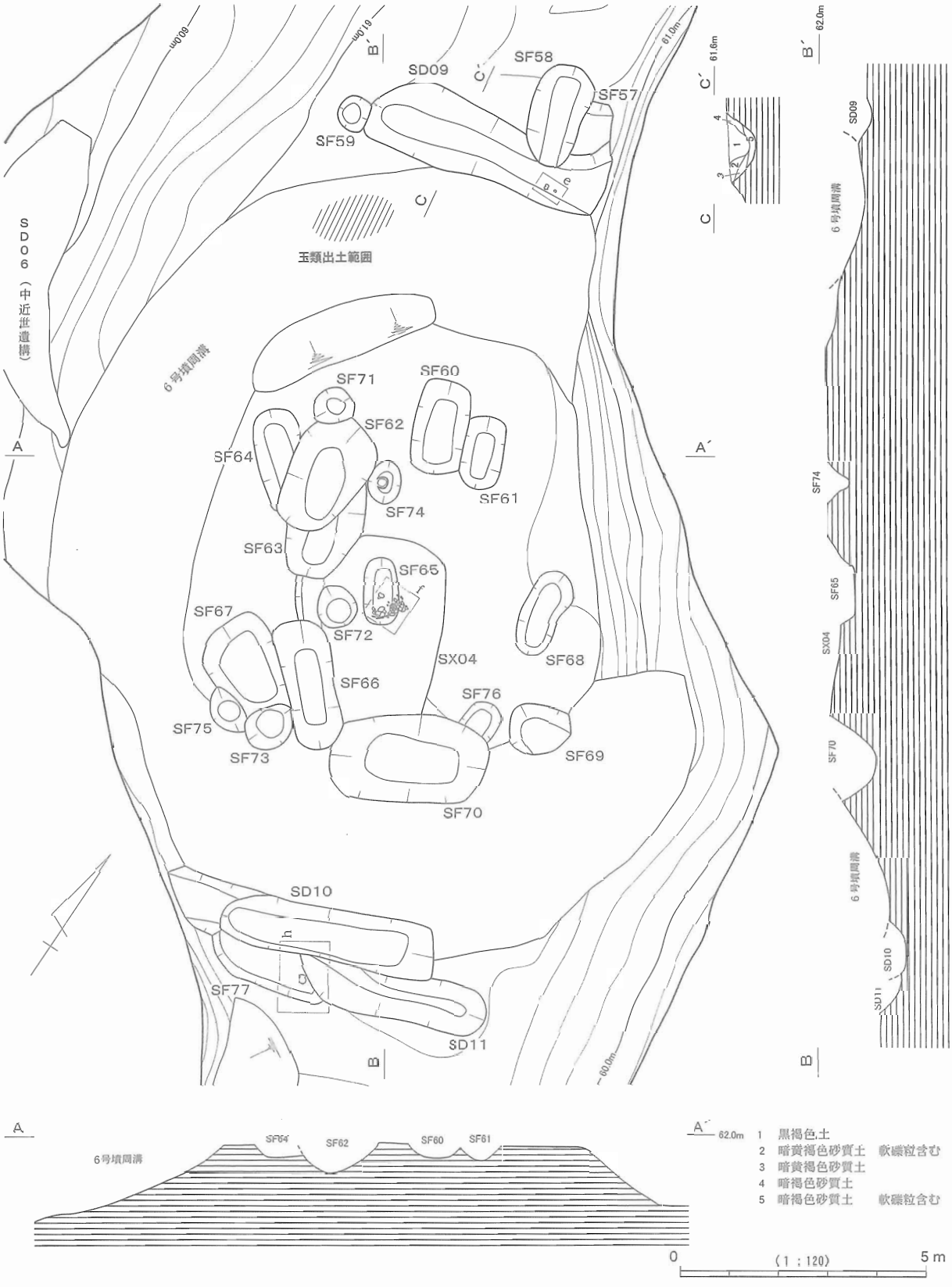
SD09（第54・55図）　6号墳の北側に位置する。丘陵筋に直行する、東西に近い方向にのびる溝である。幅は1.6m弱、長さは5.0m弱、深さは0.7m弱である。東端部は崖によって消失しているが、西端は丘陵上平坦面の西寄りで立ち上がる。覆土は上層が黒褐色土、下層が暗褐色砂質土で占められる。西端でSF59と接し、北東部でSF57・SF58と重なるが、土層による先後関係の判断はできなかった。

SD09出土土器とした第66図90と91とでは、時期差が認められ、古い90は破片化した状態で覆土中から出土、新しい91は良好な残存状態でSF58の長軸上から出土している。この差異を評価するならば、91はSF58に伴い、SD09はSF58よりも古いと判断することができる。さらに、SF59は91の時期に近い土器棺（第70図128）を伴うことから、SD09よりも新しいと判断することができる。

以上のように、遺構の特徴や出土遺物などから、SD09は3号周溝墓の北を区画する溝であり、弥生時代中期後半～後期前半に設けられていた可能性が高いと判断できる。

SD10・SD11（第54・60・64図）　6号墳の南側に位置する。丘陵筋に直行する東西に近い方向にのびる溝である。SD10は幅約1.2mで長さ約5.6m、東端は丘陵上平坦面の東寄りで立ち上がるが、西端は丘陵斜面で消失している。深さは約0.7mであり、西部で0.1m弱浅くなる。SD11は幅1.1m弱で長さ約3.9m、深さは0.7m弱である。東端は丘陵上平坦面の東縁で立ち上がる。西部はSD10によって消失しているが、検出状況からは北側に曲がる可能性、もしくは丘陵上平坦面の西寄りで立ち上がる可能性が指摘できる。ともに、覆土は黒～黄褐色砂質土で占められており、弥生土器片が少数出土している（第66図95・96）。SD10とSD11の先後関係については、土層断面によってSD10の方が新しいことが把握できている。また、土層断面によってSD10はSF77よりも古いことがわかっている。

3号周溝墓の南もしくは4号周溝墓（後述するJ群）の北を区画する溝であると判断でき、出土遺物およびSD09との関連性から、弥生時代後期前半頃に設けられていたと考えることができる。



第54図　I群（3号周溝墓）

(2) 土坑墓

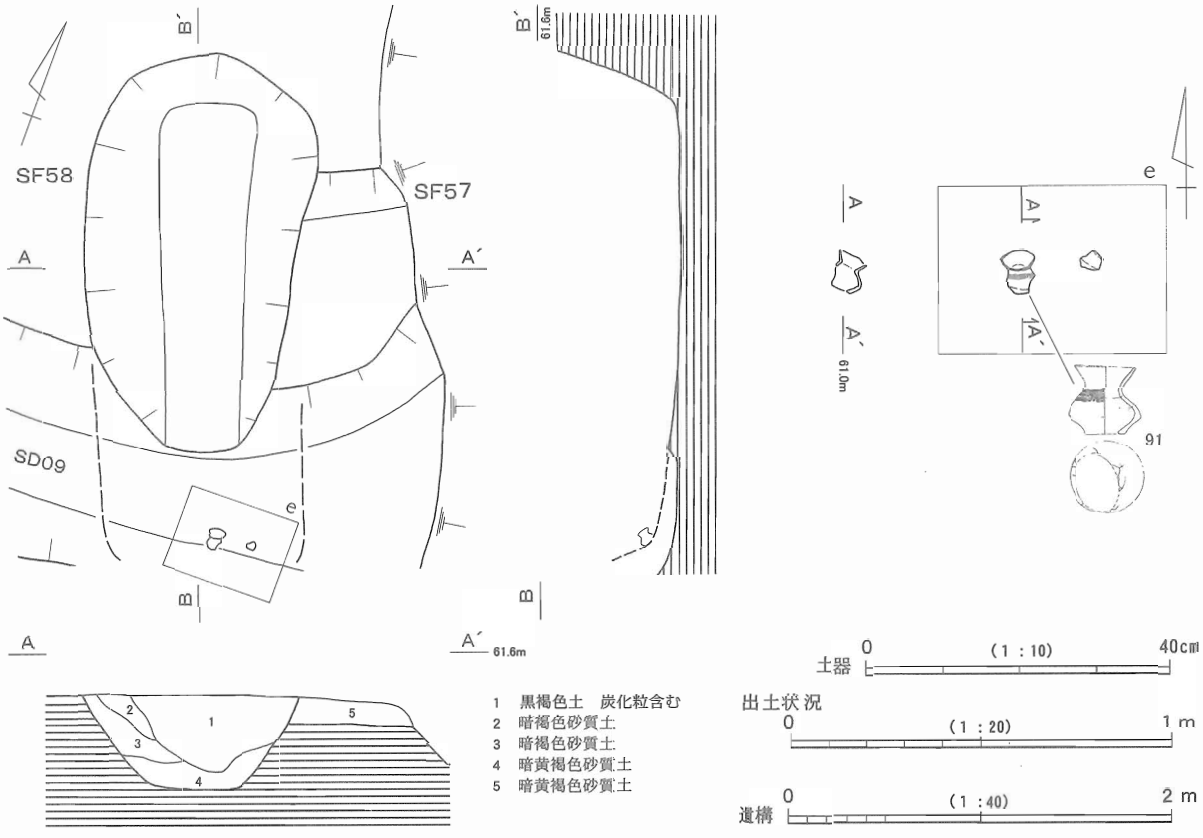
SF57・SF58（第55図）　6号墳の北側に位置する。SF58は、約1.2m×2.2m以上の長楕円～長方形で、深さは約0.6mである。主軸は丘陵筋に平行し、南北に近い。覆土は上層が黒褐色土、下層が暗黄褐色砂質土で占められ、数点の弥生土器片が出土している。木棺の痕跡は認められない。SD09で先述したとおり、SD09出土とした第66図91はSF58に伴う土器であり、土層による判断はできていないものの、SF58はSD09よりも新しい可能性を指摘することができる。さらに、そのことによってSF58の長軸は2.6mに至ると推測することができる。

SF57は、SF58・SD09および丘陵斜面によって壊されており、規模・形状の把握が難しい。主軸はSF58と平行もしくは直行すると推測できる。覆土は暗黄褐色砂質土で、数点の弥生土器片が出土している。土層からSF58より古いことがわかっているが、SD09との先後関係については判断できなかった。

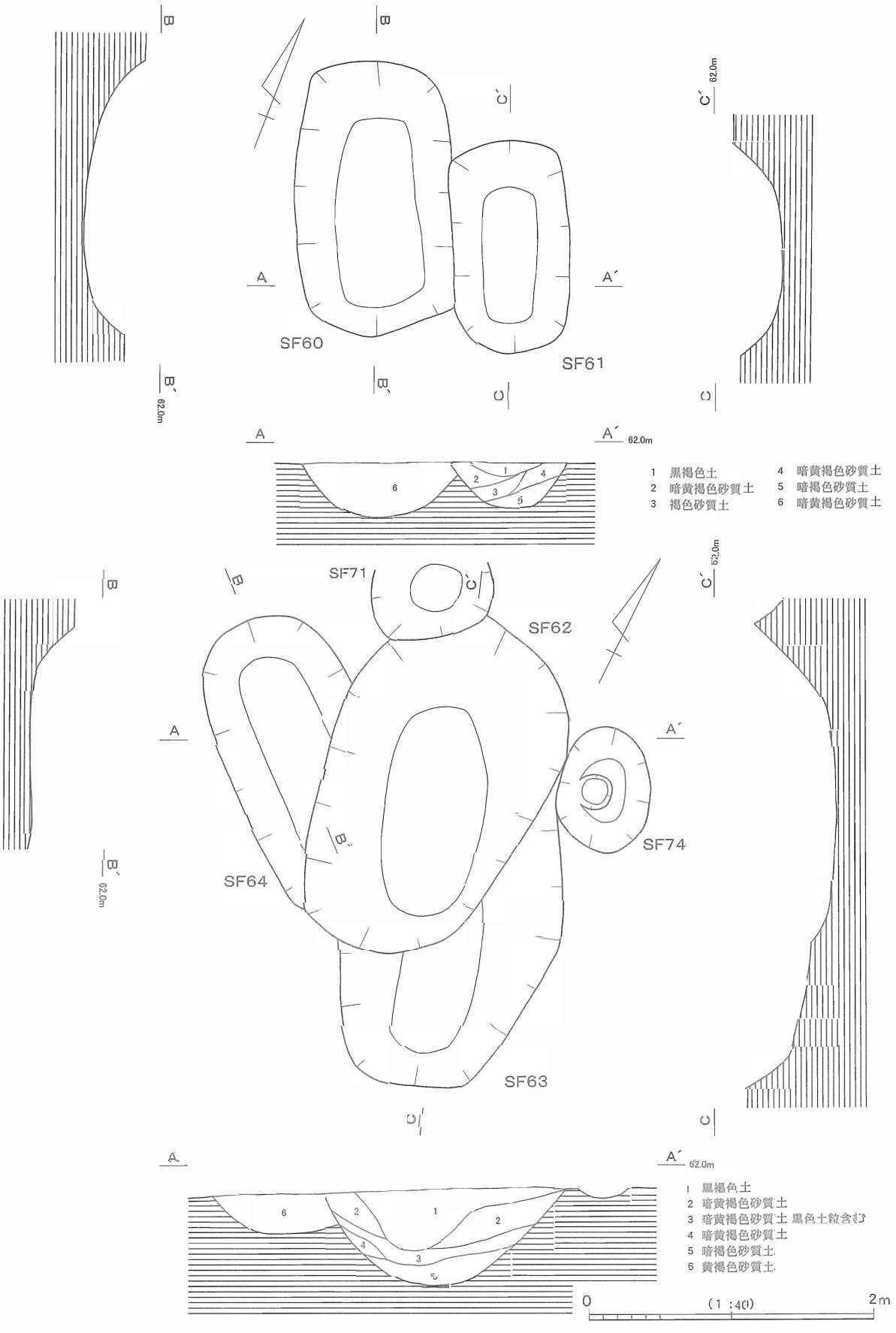
遺構の特徴や出土遺物から、ともに弥生時代後期の土坑墓である可能性が高いと判断できる。さらに、SF58は後期後半に特定できる可能性が指摘できる。

SF60・SF61（第56図）　6号墳墳丘部の北寄りに位置する。SF60は約1.1m×2.0m弱の長方形で深さ0.4m強、SF61は0.8m強×1.5m強の長方形で深さ0.4m弱である。ともに主軸は丘陵筋に平行し、南北に近い。覆土は、SF61上層が黒褐色土、SF61下層およびSF69が暗黄褐色などの砂質土で占められる。木棺の痕跡は認めらない。SF60の覆土中から弥生土器片（第68図108・109）が出土している。なお、両者は東西に並ぶように接しているが、土層からSF61の方が新しいことが確認されている。

遺構の特徴や出土遺物から、ともに弥生時代後期後半頃の土坑墓である可能性が高いと判断できる。



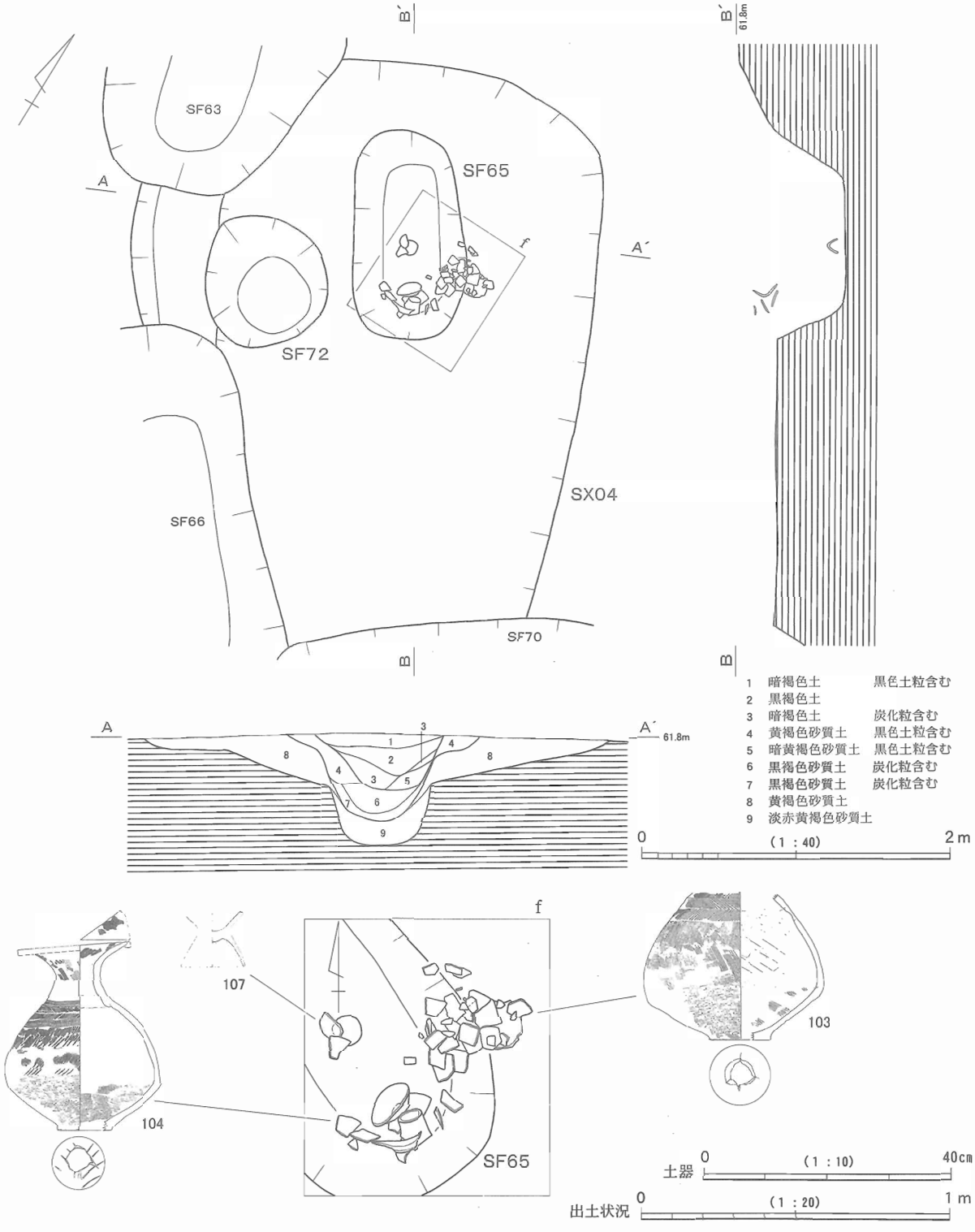
第55図　SF57・SF58



第56図　SF60～SF64

SF62・SF63（第56図）　6号墳墳丘部の西寄りに位置する。SF62は1.6m弱×2.5m弱の楕円形で深さ0.7m弱、SF63は1.5m強×2.4m以上の長楕円～長方形で深さ0.5m弱である。ともに、主軸は丘陵筋に平行し、南北に近い。覆土は、SF62上層が黒褐色土、SF62下層およびSF63が暗～黄褐色砂質土で占められる。木棺の痕跡は認められない。覆土中から弥生土器片（第68図110・111）が出土している。なお、両者は縦に並ぶようにして重なるが、土層からSF62の方が新しいことが確認されている。

遺構の特徴や出土遺物から、ともに弥生時代後期の土坑墓である可能性が高いと判断できる。



第57図　SF65・SX04

SF64（第56図）　SF62の西側に位置する。1.0m強×2.0m程の長楕円形で、深さは約0.3mである。主軸は丘陵筋に斜行し、南東部がSF62と重なる。覆土は黄褐色砂質土である。木棺の痕跡は認められないが、弥生土器片が出土している。なお、土層によってSF62よりも古いことが確認されている。

遺構の特徴や出土遺物から、弥生時代後期の土坑墓である可能性が高いと判断できる。

SF65・SX04（第57図）　6号墳墳丘部の南東寄りに位置する。SX04は約3.0m×3.7m以上の隅丸長方形で、深さは0.4m弱である。西側の張出し部を除いて、底面と壁面との区別が明確でなく、中央へと徐々に深くなる。長軸は丘陵筋に平行する。一部がSF63・SF66・SF70と重なるが、検出が浅いために土層による先後関係の判断はできなかった。SF65はSX04の北西寄り、6号墳墳丘部のほぼ中央に位置する。0.7m強×約1.4mの長楕円～長方形で、SX04底面からの深さは約0.4mである。周囲の土坑と比べると、長辺の壁体の傾斜が急である。主軸はSX04と同様である。

覆土は、SX04およびSF65下層が黄褐色を基調とする砂質土であり、比較的均一である。一方、SF65上層は黒褐色土などを含む様々な層で構成されており、炭化粒も含んでいる。後述の土層中にSF65内の陥没に伴う落ち込みを認めることができる。一方、SX04とSF65との明確な切り合い関係を土層から確認することはできず、両者は一連の遺構である可能性が指摘できる。なお、土器棺墓であるSF72もSX04内で検出されているが、土層による先後関係の判断はできなかった（SF72にて後述する）。

SF65周辺の上層を中心に、多くの弥生土器片が出土している。その中で、壷2点（第67図103・104）が良好な残存状態で出土している。SF65に伴って周囲に置かれた土器である可能性が高く、SF56の陥没に伴って落ち込んだものと推測できる。一方、第67図107だけは、埋葬時に何らかの目的でSF65内に置かれた可能性が指摘できる。なお、本遺構やSF66などの周辺域に分散が認められる土器もあるが（第67図102・106）、それらについては、どの遺構に伴った土器であったかは判断できない。土器片の分散については、崩落・流土のほかに古墳築造に伴う整地の影響なども考慮される。

遺構の特徴や出土遺物から、SF65は弥生時代後期中葉～後半の土坑墓であり、SX04はその関連施設である可能性が高いと判断できる。

SF66（第58図）　6号墳墳丘部の南西部に位置する。約1.1m×2.7m弱の長方形を呈し、深さは0.7m強である。主軸は丘陵筋に平行する。覆土は、上層が暗褐色、下層が黄褐色の砂質土で占められる。木棺の痕跡は認められていない。一部がSF67・SF70・SF73・SX04と重なるが、土層からはSF67より古いことだけしか判断できなかった。上層から弥生土器片（第68図116）が出土したほか、北西寄りの底面近くにおいて、2点の銅釧（第75図172・173）が出土している。2点の銅釧は重なり、北西を下に傾けた状態で検出された。出土状態から、被葬者が着装していた可能性が高いと判断でき、さらに、頭位が北西にあった点も指摘することができる。

遺構の特徴や出土遺物から、弥生時代後期の土坑墓である可能性が高いと判断できる。

SF67（第58図）　6号墳墳丘部の南西部に位置する。1.5m強×2.0m程の長方形で、北西側の幅が広くなる。深さは0.5m弱である。主軸は丘陵筋に概ね平行する。覆土は、上層が暗～暗黄褐色砂質土、下層が黄褐色などの砂質土で占められる。木棺の痕跡は認められない。一部がSF66・SF73・SF75と重なっている。土層によってSF66・SF73よりも新しいことが判断できているが、SF75との先後関係は判断できなかった。覆土上層から弥生土器片（第67図102）が出土している。

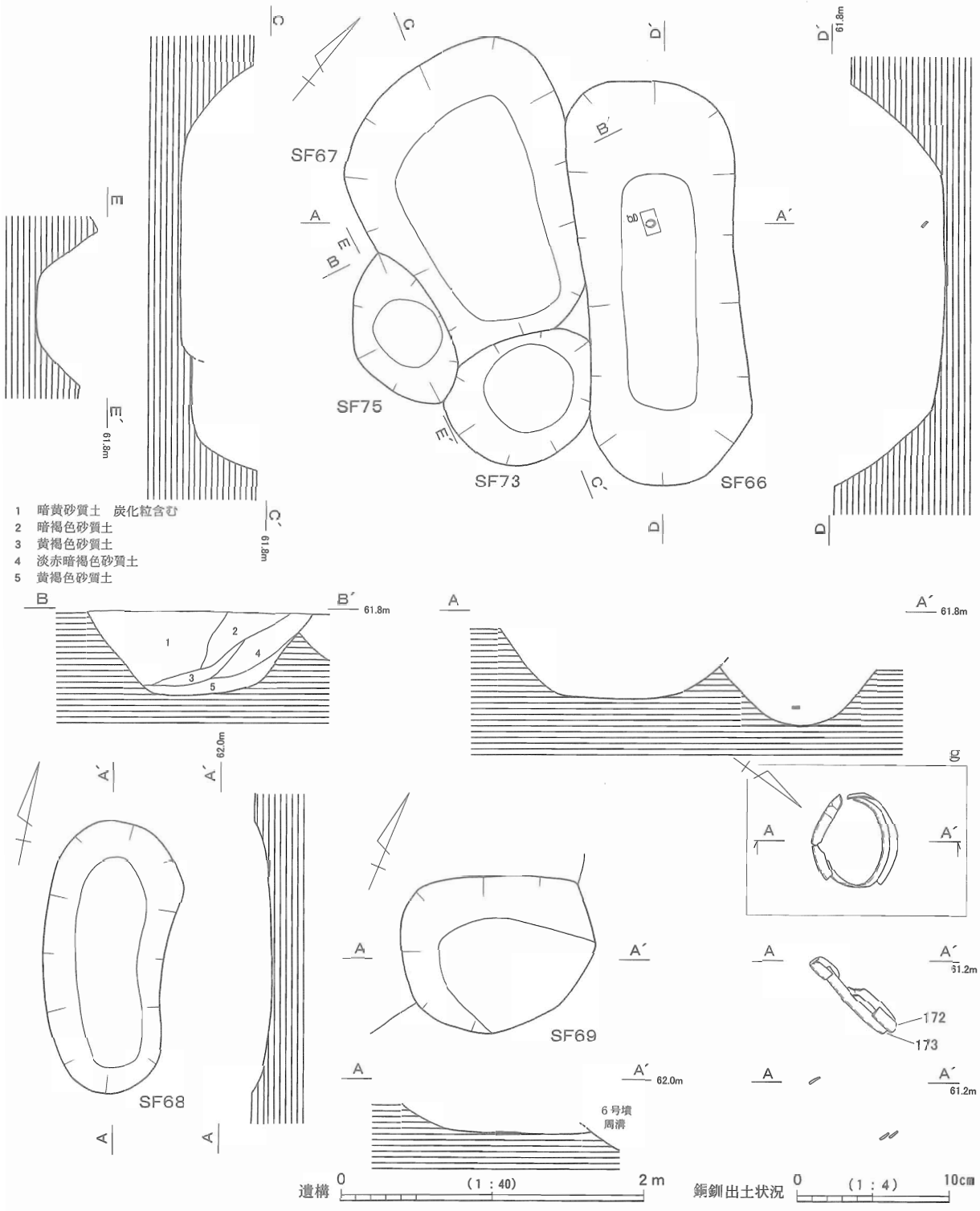
遺構の特徴や出土遺物から、弥生時代後期の土坑墓である可能性が高いと判断できる。

SF68（第58図）　6号墳墳丘部の南東部に位置する。約0.9m×1.8m強の長楕円形を呈し、深さは0.1m弱と浅い。主軸は丘陵筋に概ね平行する。覆土は暗黄褐色砂質土であり、木棺の痕跡は認められない。出土遺物はない。

遺構の特徴や周辺の出土遺物などから、弥生時代後期の土坑墓である可能性が高いと判断できる。

SF69（第58図）　6号墳墳丘部の南東縁に位置する。東西1.3m以上、南北1.0m以上、深さ0.2m弱の土坑であるが、6号墳の周溝によって大半が消失しているため、平面形や本来の規模、主軸方向などはわからない。覆土は淡赤黄褐色砂質土である。出土遺物はない。

遺構の特徴など不明点が多く、時期・性格についての明確な判断は難しい。周辺の遺構と同様、弥生時代後期の土坑墓であった可能性も否定できない。

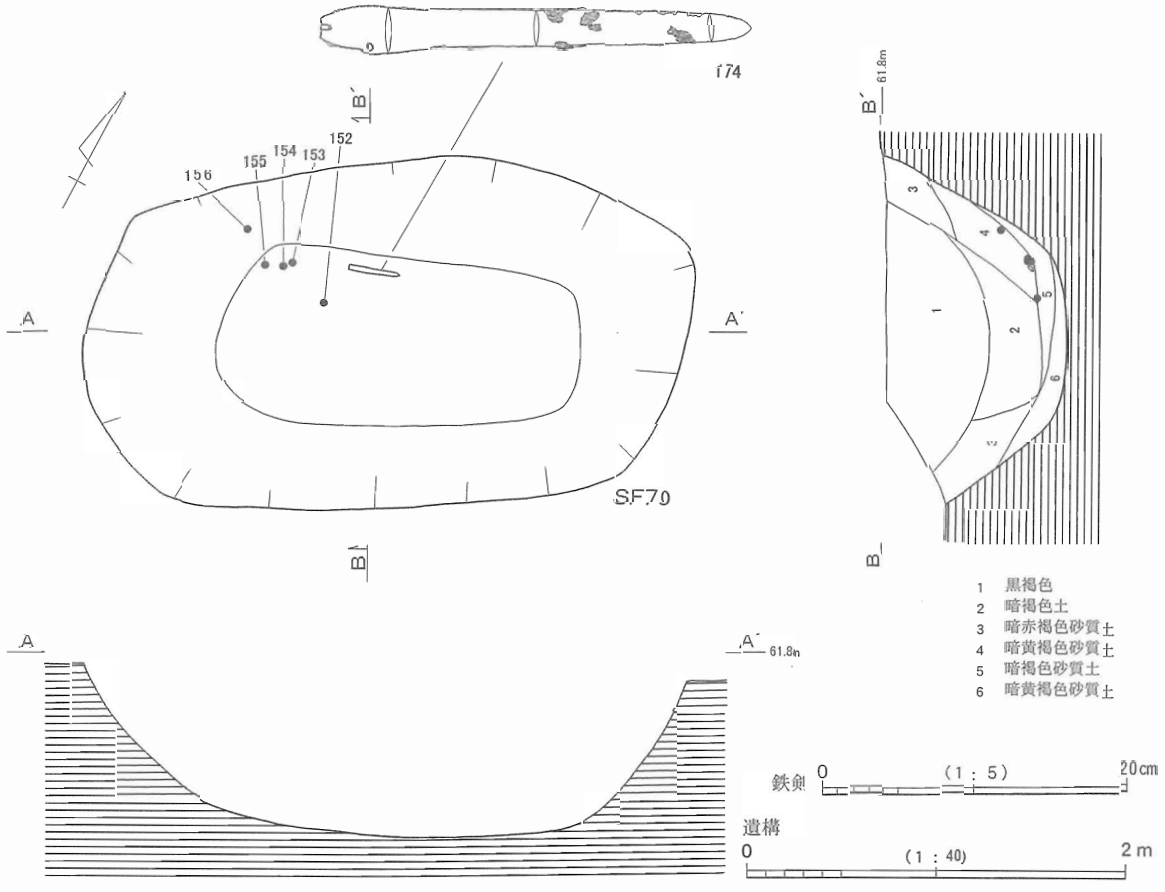


第58図　SF66～SF69

SF70（第59図）　6号墳墳丘部の南東縁に位置する。6号墳墳丘部では唯一、主軸を丘陵筋に直行させている土坑である。1.8m強×3.2m弱の長楕円～長方形を呈し、Ⅰ群の土坑の中では最も大きい。深さは1.0m弱である。壁面は短辺の傾斜がとくに緩く、底面は西側に若干高くなる。覆土には、中央に深く落ち込んだ黒～暗褐色土と、周縁部および下層の暗赤～暗黄褐色砂質土が認められている。しかし、明確な木棺の痕跡を認めることはできなかった。

出土遺物には、覆土上層から出土した弥生土器片（第68図114・115）のほか、北西部壁寄りの中層～底面付近の範囲で出土したガラス小玉（第75図146～156）、その東側の北壁寄りの底面付近で出土した鉄剣（第75図174）がある。鉄剣は、切先を東、目釘の出ている面を上に向け、中央（南）側の刃を若干下に傾けた状態で出土した。この鉄剣の出土状況と底面の傾斜から、被葬者の頭位が西にあった可能性が指摘できる。一方、ガラス小玉については、被葬者の上半身にあたる部分に多く出土しているが、壁寄りに集中する点や中層にまで分布する点など、伸展葬であったとすると、被葬者が着装していたとは明言し難い出土状況にある。着装しない副葬品であった可能性、葬送に際した儀礼的行為に用いられた可能性なども考えることができる。

遺構の特徴および出土遺物から、弥生時代後期の土坑墓の可能性が高いと判断できる。さらに、規模の大きい点や主軸方向が周囲の土坑墓と直行する点、さらに豊富な副葬品など、本遺跡の中でも目立って特徴的な埋葬施設であると評価することができる。明確な根拠は得られなかったが、木棺墓の可能性も考慮される。



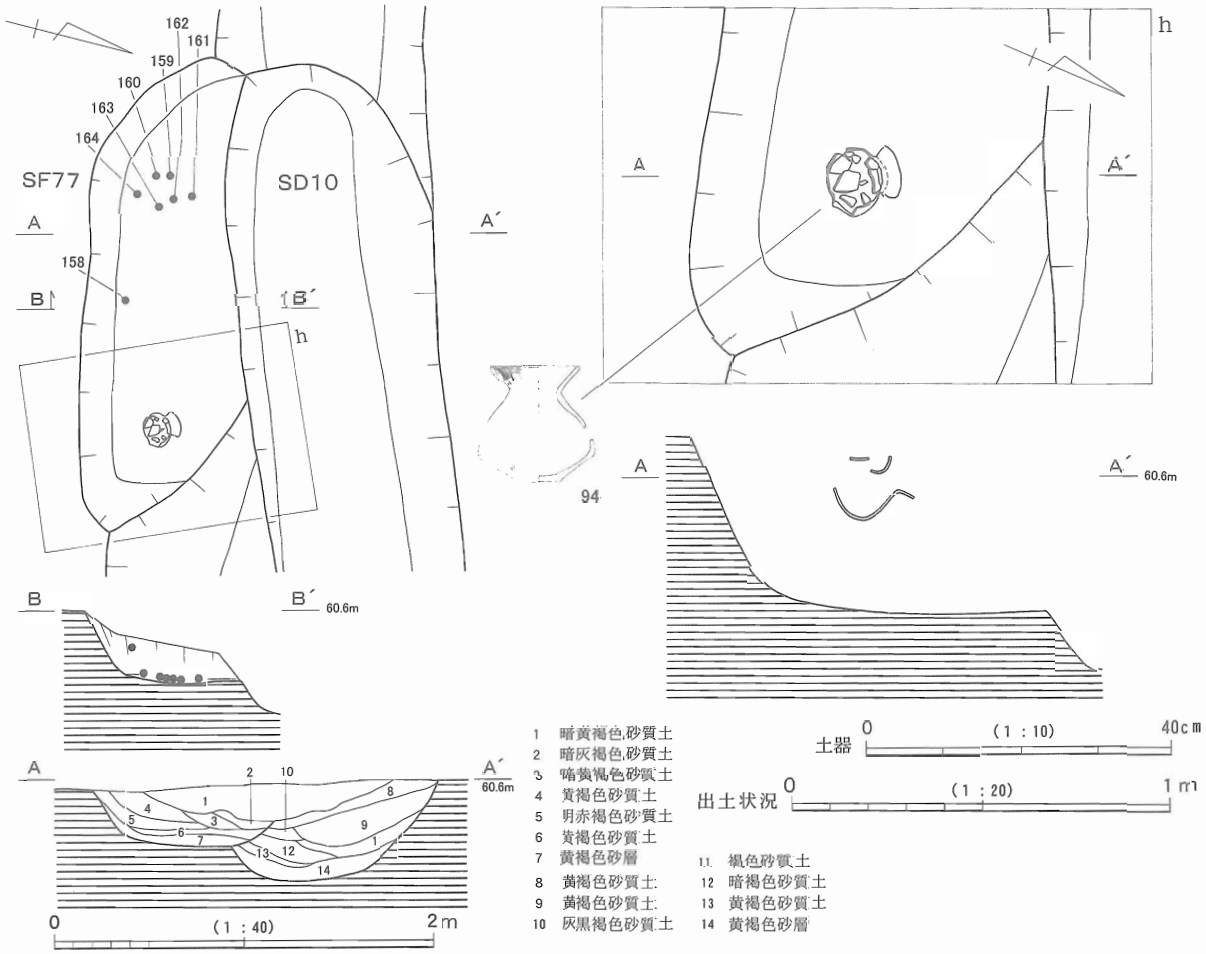
第59図　SF70

SF77（第60図）　6号墳の南側に位置する。平面規模は1.0m弱×約2.5m、深さは約0.4mである。主軸は丘陵筋に直行しており、東西に近い。平面形については、東部～中央部が長方形であるのに対して西部が先細になっており、舟形に近い形状を呈している。ただし、底面は水平である。

SD10・SD11と一部が重なるが、土層によってSF77の方が新しいと判断することができている。ただし、重複部分におけるSF77の把握は、断面でしかできなかった。覆土は、黄褐色を基調とする砂質土で占められる。最上層の暗黄褐色砂質土層の広がりがSF77とSD10とにまたがっていることから、SD10が埋没していく途中、完全に埋没する前にSF77がつくられた可能性を指摘することができる。なお、木棺の痕跡は認められていない。

東部の上層から、良好な残存状態で壷（第66図94）が出土している。SF77の上部に置かれたものであったと判断することができる。一方、西部の底面付近を中心とした範囲から、ガラス小玉（第75図157～164）が出土している。SF70の玉類と比べると、被葬者の上半身に伴っていた可能性が高いと判断できる出土状況であり、被葬者の頭位が西にあった可能性を指摘することもできる。しかし、他とは離れた中央部南縁寄りの中層から出土しているガラス小玉（158）もあり、全てが同じ着装品ではなかった可能性もある。

遺構の特徴や出土遺物から、弥生時代後期後半頃の土坑墓である可能性が高いと判断できる。なお、遺構の位置からＪ群に属する可能性も考慮する必要がある。



第60図　SF77

(3) 土器棺墓

SF59（第61図）　6号墳の北側に位置する。土坑は最大径約0.6mの円形を呈する。深さは0.2mに満たないが、本来はより深かったと推測できる。覆土は主に暗黄褐色砂質土である。SD09の報告で述べたとおり、SD09よりも新しい可能性が高いと判断できる。この土坑の中央に土器棺が埋置されていた。

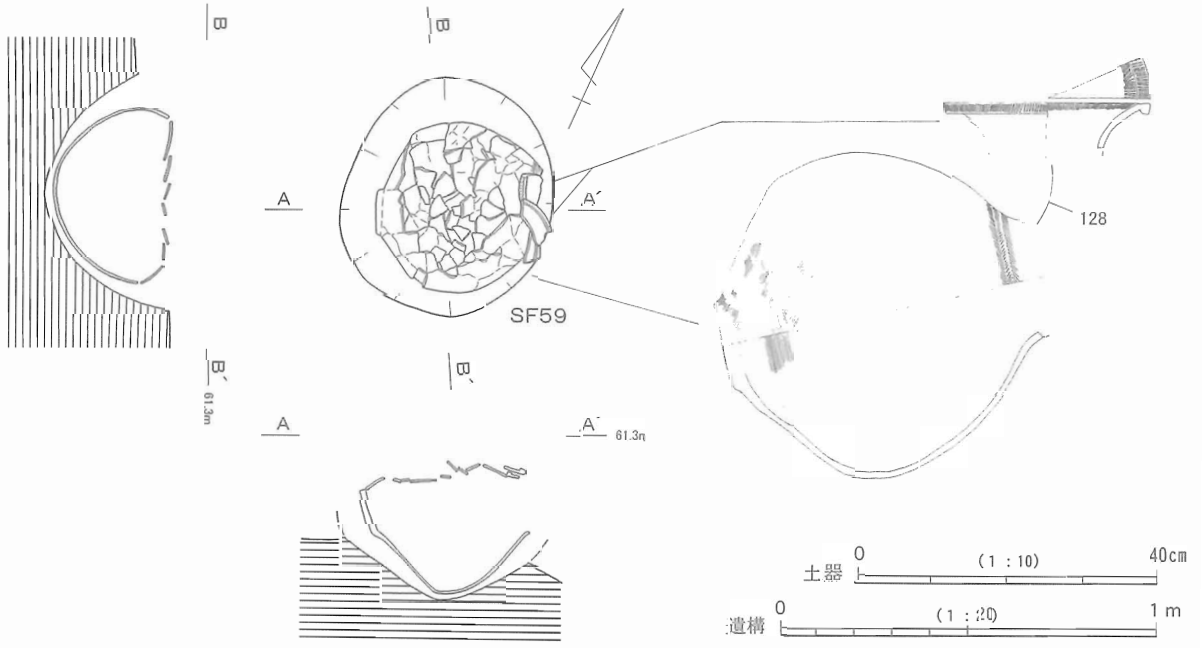
土器棺の身は、胴部最大径0.4m強の壷（第70図128）である。口縁部側を北東に向けて、横位に置かれていた。上部が押しつぶされてはいたが、残存状態は比較的良好である。ただし、頸部以上については一部の口縁部片が出土しただけで、胴部と接合することはなかった。また、その出土位置が肩部の上に限られており、残存状態の良い検出状況の下部においては、頸部以上の出土が認められなかった。したがって、土器棺の身には頸部以上を欠いた壷が用いられ、口縁部片は身とは別に扱われた可能性が指摘できる。土器棺内には砂質土が流入しており、副葬品などの出土はなかった。

土器棺の形態などから弥生時代後期後半頃の土器棺墓である可能性が高いと判断できるが、本遺跡群では正位の土器棺の方が多く、SF59のような横位については、中期後葉～後期前半の土器棺に多い。

SF71（第62図）　6号墳墳丘部の北西部に位置する。土坑は0.7m強×約0.9mの不整円形を呈する。深さは約0.5mである。覆土は主に暗黄褐色砂質土である。SF62と接するが、土層による先後関係の判断はできなかった。この土坑の中央に土器棺が埋置されていた。比較的良好な残存状態ではあったが、土圧などで蓋および身の上部が押しつぶされ、多くの土器片が棺内の下部に落ちた状態で出土した。

土器棺の身は、胴部最大径0.5m弱の壷（第71図131）である。ほぼ正位に置かれていた。頸部以上は破片でも出土が認められず、頸部以上を欠いた状態で用いられたことがわかる。蓋は、胴部最大径0.4m弱の壷（第71図130）である。肩部以上の出土がないことから、肩部以上を欠いた状態で用いられたことがわかる。身の中に落ちた底部片は内面を上にしていたが、その他の破片の出土状態から、逆位で蓋としていた可能性が高いと判断できている。とくに、原位置により近いと評価できる身の上部外側に残存する破片の出土状態は、逆位であったことを明確に示している。なお、棺内には土器片のほかに砂質土が流入しており、副葬品などの出土はなかった。

土器棺の形態などから、弥生時代後期後半頃の土器棺墓である可能性が高いと判断できる。



第61図　SF59

SF72（第63図）　6号墳墳丘部の中央南西寄りに位置する。土坑は径0.9m前後の不整円形で、深さは0.4m弱であるが、本来はより深かったと推測できる。覆土は黄褐色砂質土である。SX04内に位置しているが、土層による先後関係の判断はできなかった。この土坑の中央に土器棺が埋置されていた。

土器棺の身は、胴部最大径0.5m弱の壷（第73図133）である。上部の大半がつぶれた状態であったが、底部の出土位置から、正位より口縁部側を若干北に傾けた状態であったと復元できる。頸部以上にあたる部分の出土は破片でも認められず、頸部以上を欠いた状態で用いられたと考えられる。棺内には土器片および砂質土が流入しており、蓋に該当する土器や副葬品の出土はなかった。

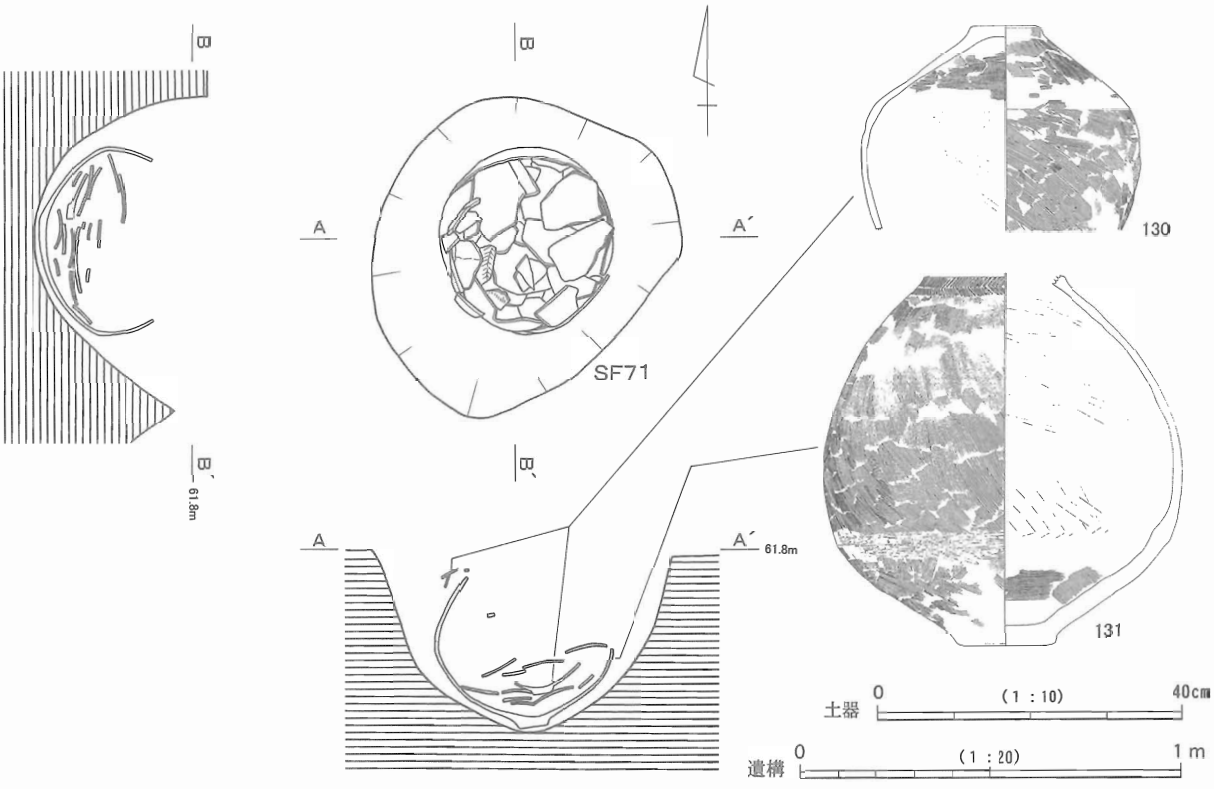
大きくつぶれた状態ではあったが、土器棺の身は完全に接合・復元することができた。その一方で他の土器の出土がないことから、本来より土器による蓋はなかった可能性を指摘することができる。さらに、SX04による破壊がなかった可能性も指摘することができ、SF72はSX04よりも新しい、もしくはSX04と一連で設けられた土器棺墓である可能性が高いと判断することができる。

土器棺の形態などから、弥生時代後期後半頃の土器棺墓である可能性が高いと判断できる。

SF73（第63図）　6号墳墳丘部の南西縁に位置する。土坑は最大径約1.0mの不整円形で、深さは約0.4mである。覆土は主に暗黄褐色砂質土である。SF66・SF67・SF75と接するが、土層からはSF67より古いことだけが判断できた。この土坑の中央北寄りに土器棺が埋置されていた。

土器棺の身は、胴部最大径約0.5m強の壷（第72図132）である。口縁部側を北にして、底部をやや上方に向けた横倒しの姿勢で検出された。口縁部の出土は破片でも認められず、口縁部を欠いた状態で用いられたと考えられる。一方、検出状況の南東寄り上部にあたる胴部下半に欠損部があり、胴部も打ち欠いた可能性が指摘できる。この壷以外の土器や副葬品の出土はない。

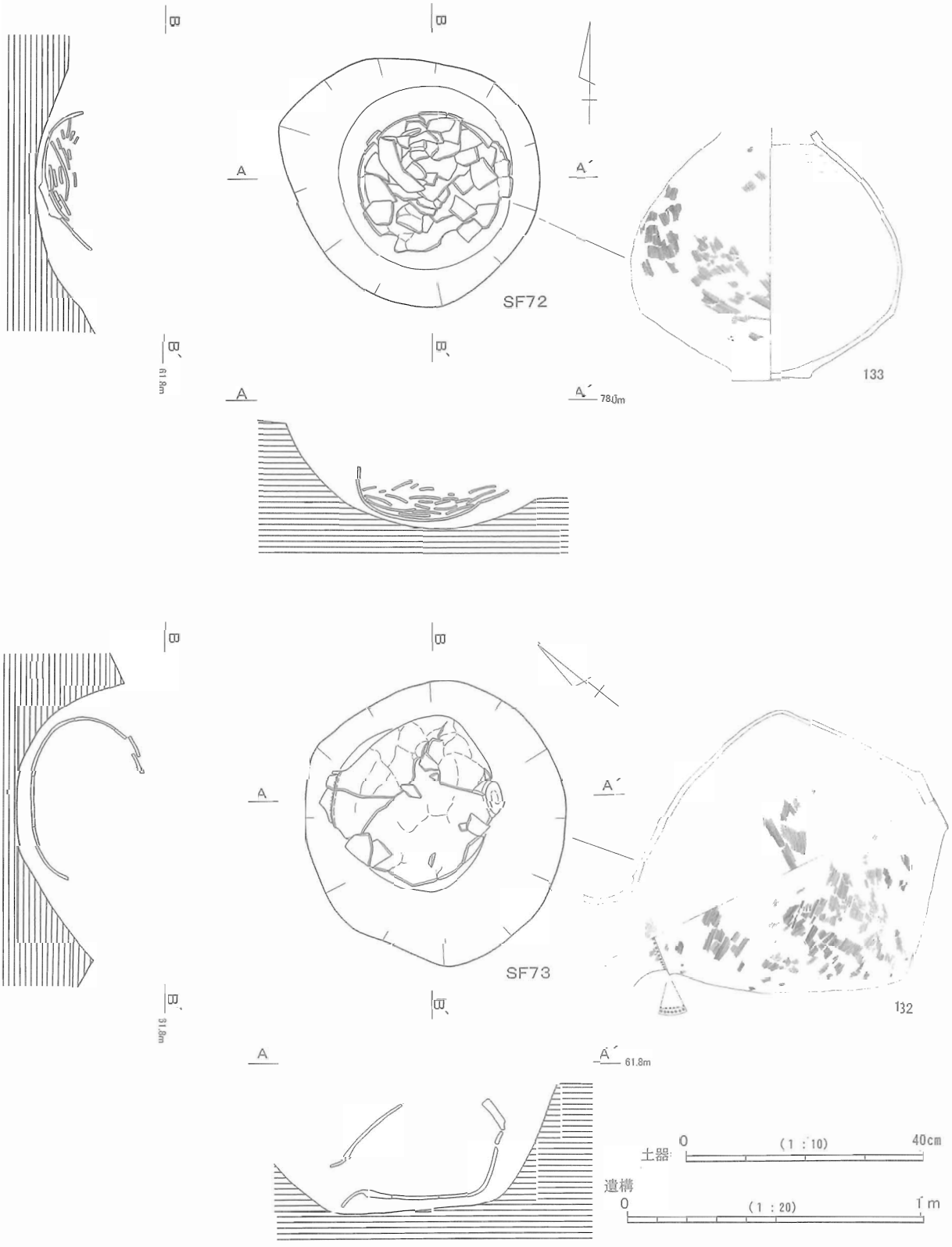
土器棺の形態などから、弥生時代後期中葉頃の土器棺墓である可能性が高いと判断できる。



第62図　SF71

(4) その他

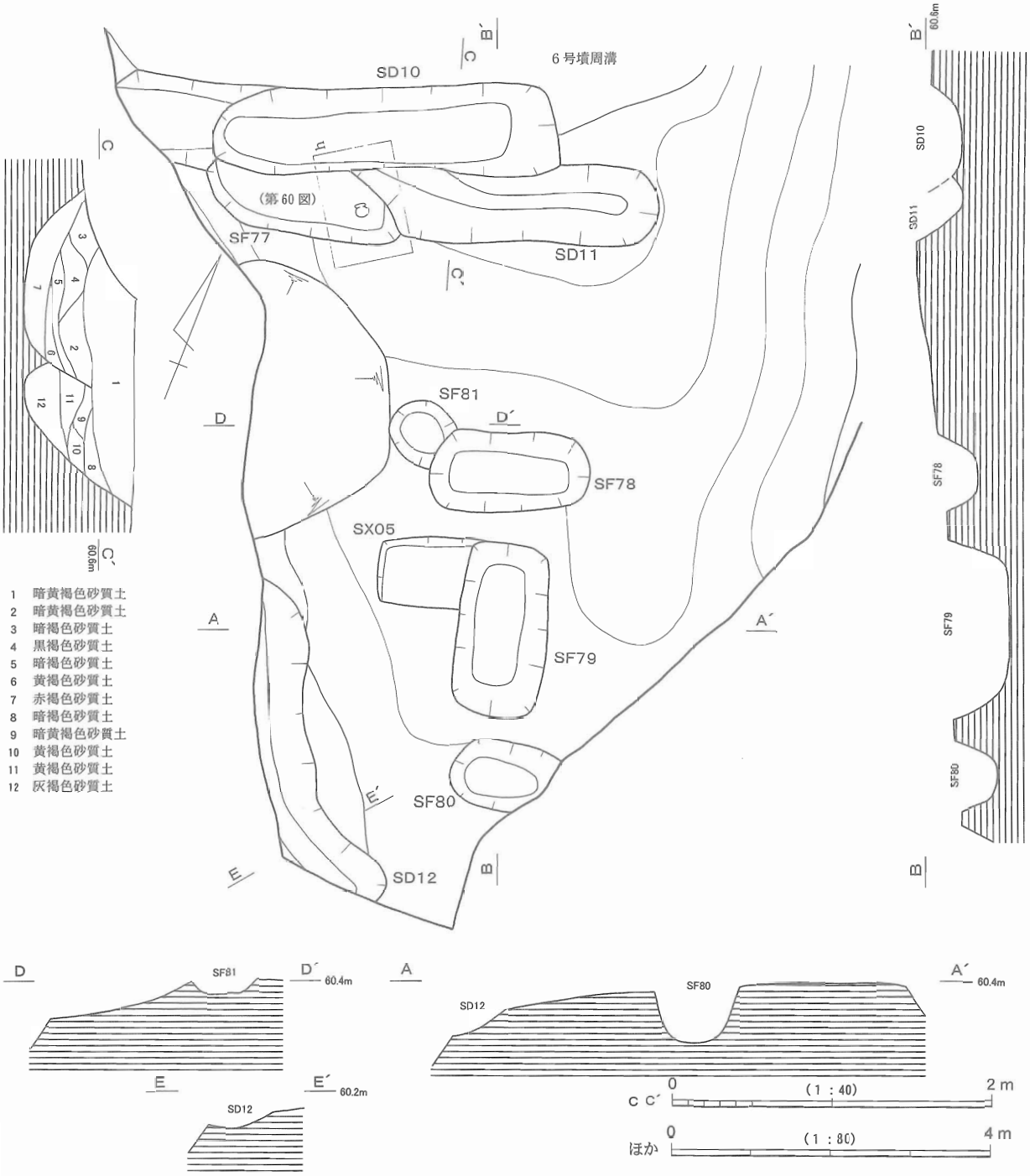
SF74・SF75（第54・56・58図） いずれも6号墳墳丘部に位置する、土器棺のない径0.9m前後の円形土坑である。覆土は土器棺墓と同様の黄褐色を基調とした砂質土であり、弥生時代の遺構である可能性が指摘できる。しかし、どのような遺構であるかはわからない。出土遺物はない。



第63図 SF72・SF73

3．J　群

2区南端の尾根上、南北約10mの範囲にある遺構群である。比較的平坦な部分に立地しており、表土下に暗褐色～黒褐色の砂質土の堆積（Ⅳ層）が認められている。このⅣ層中に遺構面が存在する可能性もあったが、遺構把握が困難であったため、その下の淡赤褐色砂質土層および黄色砂層（Ⅴ層）の上面を遺構検出面として調査した。この遺構群の北側には、周溝を隔てて6号墳墳丘部の高まりがある。他の三方には丘陵斜面や崖が廻る。



第64図　J群（4号周溝墓）

平坦部上で、数基の土坑が検出されている。弥生時代の土坑墓である可能性が高い3基のほか、円形の土坑1基がある。周辺域を含めて弥生土器の出土があり、遺構内からはガラス小玉の出土もあった。一方、南西の斜面際では溝が検出されており、既にⅠ群にて報告したSD11とともに、本遺構群の周囲を区画する溝があった可能性が指摘できる。以上から、本遺構群は一つの周溝墓にあたると把握することができる（4号周溝墓）。ただし、3号周溝墓のように高まりを伴うことはない。また、周溝墓に伴う盛土の存在も認めることはできない。

(1) 溝

SD12（第64図）　2区南端部の丘陵南西斜面際に位置する。残存長約4.5m、残存幅約0.8mの溝であり、J群の西～南側を区画するように、途中で屈曲しながらのびている。覆土は主に暗黄褐色砂質土である。出土遺物はない。

遺構の特徴などから、J群の南西側を区画する溝であり、弥生時代中後期の4号周溝墓の周溝の一部である可能性が高いと判断できる。

(2) 土坑墓

SF78（第65図）　2区南端部の丘陵上平坦面に位置する。約1.0m×2.0mの長方形で、深さは0.5m弱である。主軸は丘陵筋に直行し、東西に近い。覆土には、黒褐色砂質土の落ち込みと下層の黄褐色砂質土が認められる。SF81と接するが、土層による先後関係の判断はできなかった。また、木棺の痕跡は認められていない。出土遺物は、覆土上層から弥生土器（第66図97・98）が出土したほか、ガラス小玉（第75図165～168）の出土が認められている。ただし、ガラス小玉は篩いによって発見されたため、詳細な出土位置を特定することはできなかった。

遺構の特徴や出土遺物から、弥生時代中後期の土坑墓である可能性が高いと判断できる。

SF79・SX05（第65図）　2区南端部の丘陵上平坦面に位置する。SF79は1.1m強×約2.2mの長方形で、深さは0.7m強である。主軸は丘陵筋に平行し、南北に近い。覆土には、黒～暗褐色砂質土の落ち込みと下層の暗黄褐色砂質土などが認められる。明確な木棺の痕跡は認められていないが、4号周溝墓の中心に位置しており、遺構の形状や深さ、7層（第65図）の存在によって木棺墓である可能性を指摘することもできる。出土遺物には、上層から弥生土器片（第66図99）が出土しているほか、ガラス小玉（第75図169～171）の出土も認められている。ただし、ガラス小玉は篩いによって発見されたため、詳細な出土位置を特定することはできなかった。

SX05はSF79の西側に接する。残存範囲は約1.3m×0.9mであり、平面方形を呈する。深さは0.1m弱と浅い。土層によるSF79との先後関係の判断はできなかった。出土遺物はない。

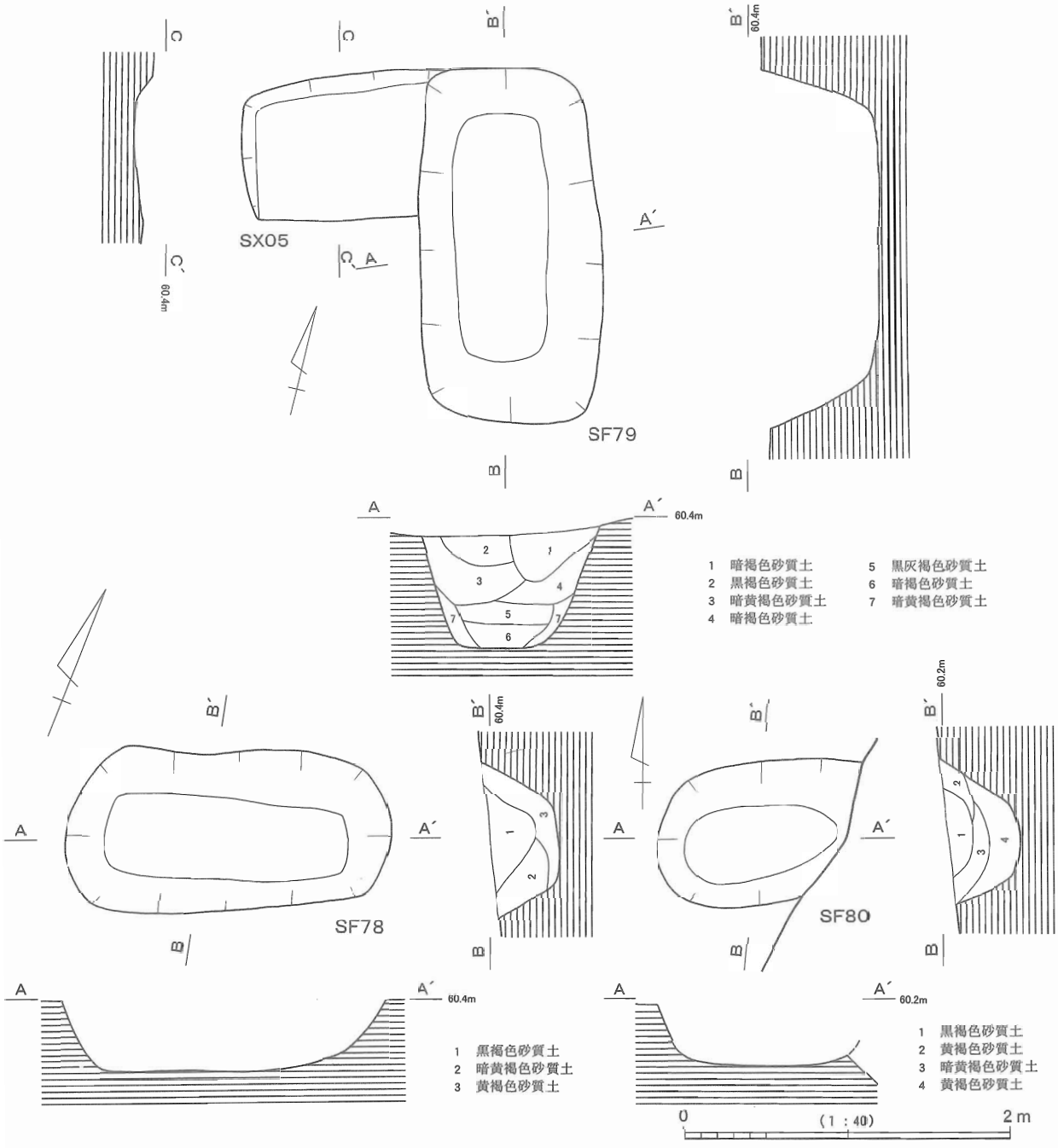
遺構の形状や出土遺物から、SF79は弥生時代中後期の土坑墓である可能性が高いと判断でき、木棺が用いられた可能性も指摘できる。一方、SX05はSX04などと同様、土坑墓（SF79）に関連した施設であった可能性を指摘することができる。

SF80（第65図）　2区南端部の丘陵上平坦面に位置する。約0.9m×1.3m以上の長楕円形であり、深さは約0.5mである。東縁部が丘陵斜面によって失われている。主軸は丘陵筋に直行し、東西に近い。覆土には、黒褐色砂質土の落ち込みと下層の黄褐色砂質土が認められる。木棺の痕跡は認められていない。出土遺物には上層から出土した弥生土器片（第66図100）がある。

遺構の形状や出土遺物から、弥生時代中期末頃の土坑墓である可能性が高いと判断できる。

(3) その他

SF81（第64図）　2区南端部の平坦面に位置する。径約0.8mの円形土坑であり、深さは約0.2mである。覆土は黄褐色を基調とした砂質土であり、弥生時代の遺構である可能性が指摘できる。しかし、形状などの特徴から遺構の性格を特定することは難しい。SF78と接するが、土層による先後関係の判断はできなかった。出土遺物はない。



第65図　SF79～SF80・SX05

４．２区南部の出土遺物

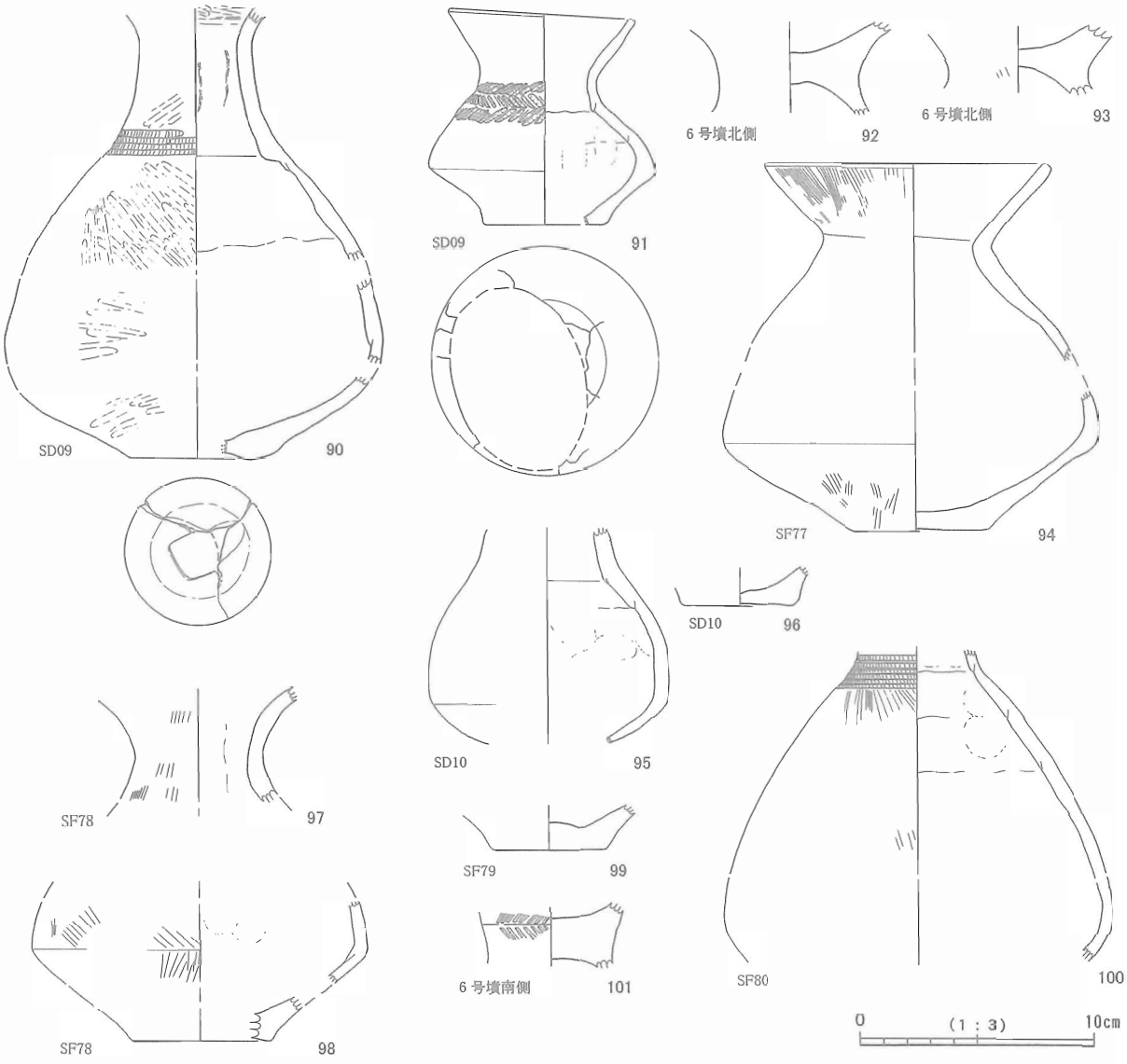
(１) 弥生土器

H群出土土器（第66・70図）　92・93・129は、H群の遺構外から出土した弥生土器である。92・93は、台付甕の台部の接合部片である。129は、壷の下半部である。底部は平底、外面調整はハケ調整で占められている。大型の壷であることから、土器棺に用いられていた可能性もある。

いずれも破片のために詳細な判断は難しいが、弥生時代後期に位置づけることはできる。

SD09出土土器（第66図）　90は、細頸の壷である。口縁部は欠損しているが、頸部は細く、胴部は肩の張りが弱い。底部は上げ底状であり、焼成後の穿孔を認めることができる。外面全体および口縁部内面にミガキ調整が施されており、肩部（頸部下端）に４条の押圧横線文が認められる。91は、小型壷である。胴部の形状は横長の算盤玉形に近く、頸部は短い。口縁部は単純口縁である。頸～肩部に３段の羽状刺突文が施されている。欠損部が胴部下半にある。

90は弥生時代中期後葉、91は後期後半頃に位置づけることができる。SD09およびSF58の報告で述べたとおり、91はSF58に伴い（第55図）、SD09は90の時期に近い可能性が指摘できる。



第66図　２区南部出土土器１（H群・J群・SD09・SD10・SF77）

SX04・SF65出土土器（第67図）　102は、小型の壷である。頸部は比較的太く短い。底部は平底、口縁部は単純口縁である。胴部外面の一部にミガキ調整が観察できる。肩部の文様は認められない。103は、壷の胴部である。底部は平底であり、焼成後の穿孔が認められる。肩部に3段の羽状刺突が施されており、その下に縦方向のハケ調整、胴部下半には横方向のミガキ調整が観察できる。104も壷であり、底部に焼成後の穿孔が認められる。肩部には羽状刺突文のほかに櫛描文・円形浮文が施され、その下に縄文、胴部下半にはミガキ調整が観察できる。縄文には結節が伴う。口縁部は折り返し部が欠損している。口縁部内面には縄文が観察できる。105も壷であるが、残存状態は悪い。106は、高坏の口縁部である。折り返し口縁と口縁部～坏底部への屈曲が認められる。107は、台付甕の台部である。

103・104・107は、出土状況からSF65に伴う可能性が高く（第57図）、形態・文様などの特徴から弥生時代後期中葉～後半に位置づけできる。他についても、弥生時代後期後半を中心とした時期に位置づけできる。しかし、古墳築造に伴う整地の影響なども考慮する必要があり、必ずしもSF65・SX04に伴うとはいえない。実際、102の破片はSF66・SF67からも出土、106の破片はSF73からもしている。

SF60～SF64、SF66～SF75出土土器（第68図）　108は、SF60出土の壷であり、単純口縁で頸部が太い。下部はミガキ調整、上半部はハケ調整で占められており、文様は認められない。109もSF60出土の壷であり、底部に木葉痕が残る。110・111は、SF62・SF63出土の壷である。110は2段の羽状刺突文が施された小型壷の頸部片、111は上げ底状の底部片である。112は、SF71出土の小型壷の胴部片であり、外面のミガキ調整が観察できる。113は、SF71周辺出土の高坏であり、つくりが比較的重厚である。接合部の文様は認められない。114は、SF70出土の高坏である。脚裾部の段は低く、明瞭ではない。接合部には2段の羽状刺突文が施されている。115の壷もSF70からの出土である。平底で外面にミガキ調整が観察できる。116は、SF66出土の壷の底部片であり、外面にミガキ調整が観察できる。

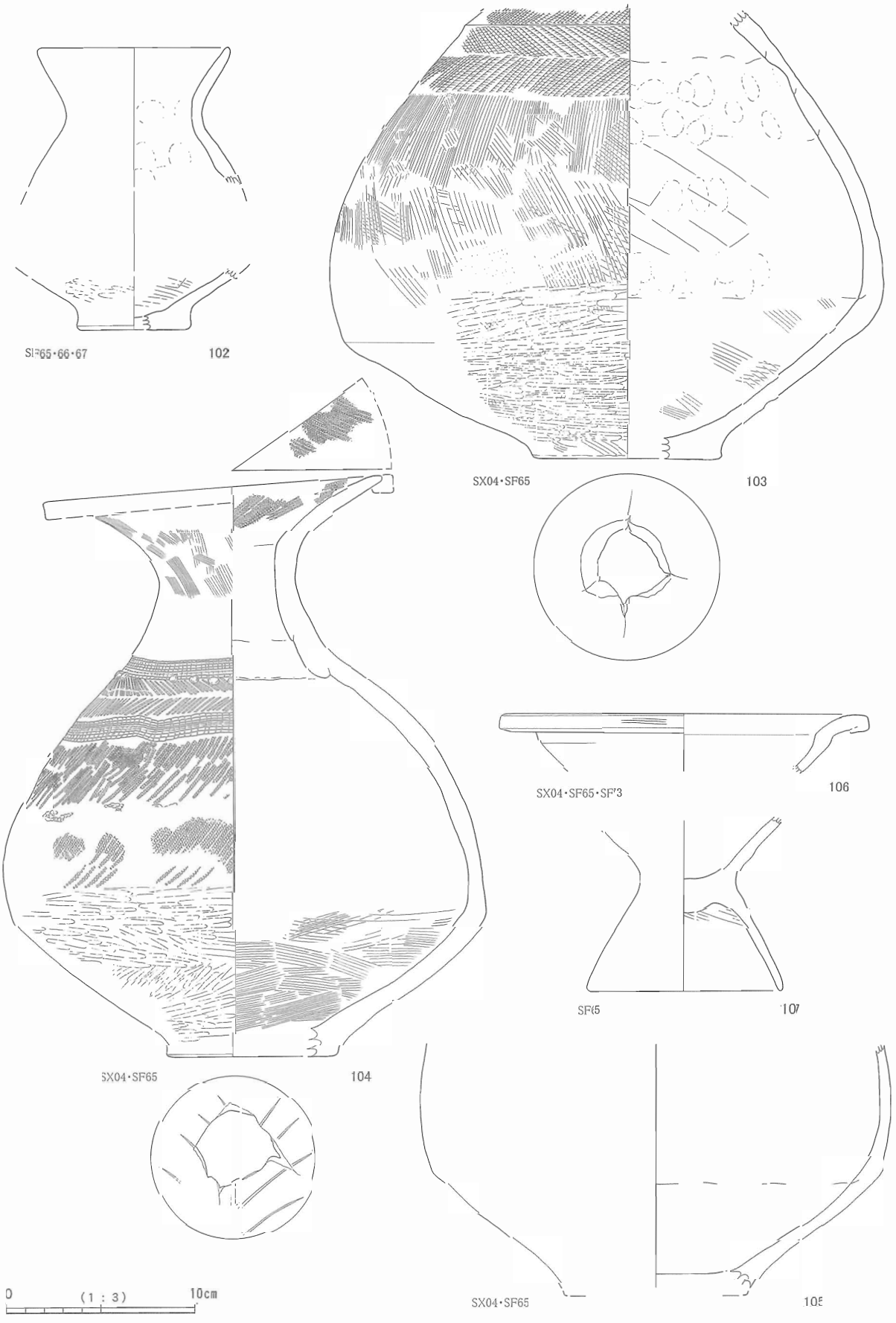
111は弥生時代中期後葉～後期前半の可能性が高いが、ほかは概ね後期後半を中心とした時期に位置づけできる。なお、いずれも遺構覆土上層および周辺からの出土であり、残存状態はよくない。

SF77・SD10出土土器（第66図）　94は、SF77出土の壷である。底部は平底である。胴部は最大径を下部にもち、肩部の張りが弱い。直立する頸部はなく、胴部から屈折を介して開き、単純口縁に至る。文様は認められない。95・96は、SD10出土の小型壷片である。

94は、先述のとおりSF77の周囲に置かれた土器である可能性が高く（第60図）、形態・文様などの特徴から概ね弥生時代後期後半に位置づけることができる。

I群遺構外出土土器（第69図）　117は、ほぼ完全に残存している小型壷である。胴部は横長の算盤玉に近い形状を呈し、頸～肩部には4段の羽状刺突文が施されている。頸部は短く、口縁部は単純口縁である。底部には、円形の焼成後の穿孔が認められる。118・119は折り返しを伴う壷の口縁部である。ともに、内面に縄文が施されている。119の縄文は結節縄文である。また、口縁端部にも文様が施されている。118は斜格子文、119は連続した縦方向の刺突文が廻る。120は、壷の胴部および底部片である。肩部には3段の羽状刺突文が施されており、その下に縦方向のハケ調整、さらに下部には横方向のミガキ調整が観察できる。121・122は、壷の胴部最大径付近の破片である。とくに121は大型の壷であり、土器棺に用いられていた可能性もある。123～126は、壷の底部片である。大小様々であるが、上げ底状のものはない。125には不明瞭ながら木葉痕が認められる。127は、高坏の破片である。口縁部は折り返しを伴うが、内外面に文様はない。脚部との接合部に、2段の羽状刺突文が施されている。

これらは6号墳盛土中からの出土であり、I群に伴うものと考えられる。多くの土坑墓・土器棺墓が展開する墓群であり、ある程度の時期幅が想定されるが、これら出土土器は概ね弥生時代後期後半に位置づけできるもので占められている。



第67図　2区南部出土土器2（Ⅰ群SF65ほか）

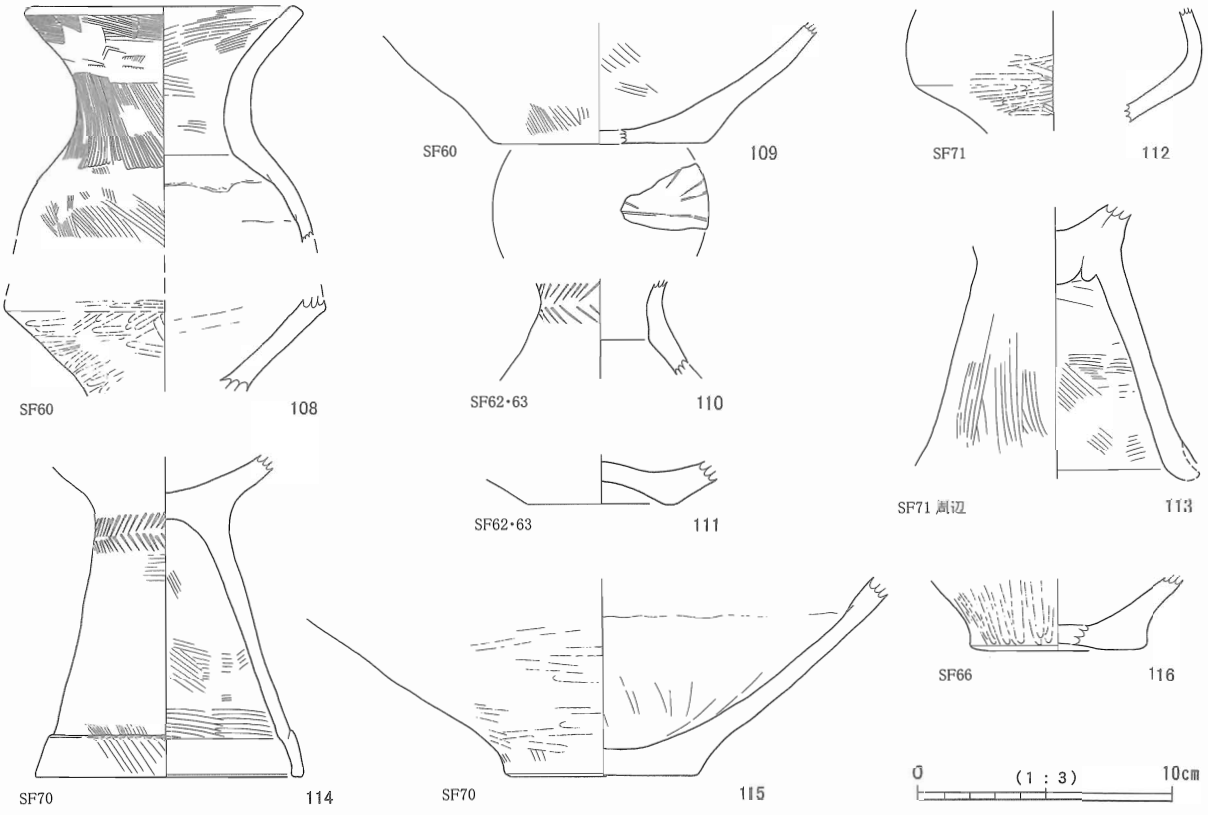
J群出土土器（第66図）　97～100は、各土坑墓から出土した壷の破片である。97・98は覆土上層から破片化した状態で出土しており、文様が施されることの多い口縁部や肩部は、完全に失われていた。99の底部片も、覆土上層からの出土である。100は胴部片であるが、同じく覆土上層からの出土である。胴部の下部に最大径をもつ下膨れ形を呈している。頸部は比較的細く、その下端に5条の押圧横線文が施されている。101は、遺構外出土の高坏の接合部である。2段の羽状刺突文が観察できる。

100は弥生時代中期末頃に位置づけできるが、その他は弥生時代後期のものである。出土状況を考慮するならば、いずれも出土遺構に伴った土器であるとは限らないが、J群の形成時期が弥生時代中期末～後期中葉前後にあると評価することはできる。

SF59土器棺（第70図）　128は、土器棺として用いられていた大型の壷である。頸部以上を打ち欠き、胴部を身としたようである（第61図）。底部は平底である。球形の胴部が特徴的であり、最大径付近に稜線はない。肩部に3段の羽状刺突文が施されている。外面調整はハケ調整で占められる。口縁部も出土しているが、土器棺の身とは別に扱われた可能性が高い。ただし、蓋としていたかは不明である（第61図）。折り返し口縁であり、内面に2段、端部外面に1段の櫛刺突文が廻る。器形の特徴や文様から、弥生時代後期後半頃に位置づけることができる。

SF71土器棺（第71図）　130は、土器棺の蓋として用いられていた大型の壷である。上半部を打ち欠いた状態で用いられていた（第62図）。球形に近い胴部であるが、最大径のやや下寄りの稜線は比較的明瞭である。外面調整はハケ調整で占められている。

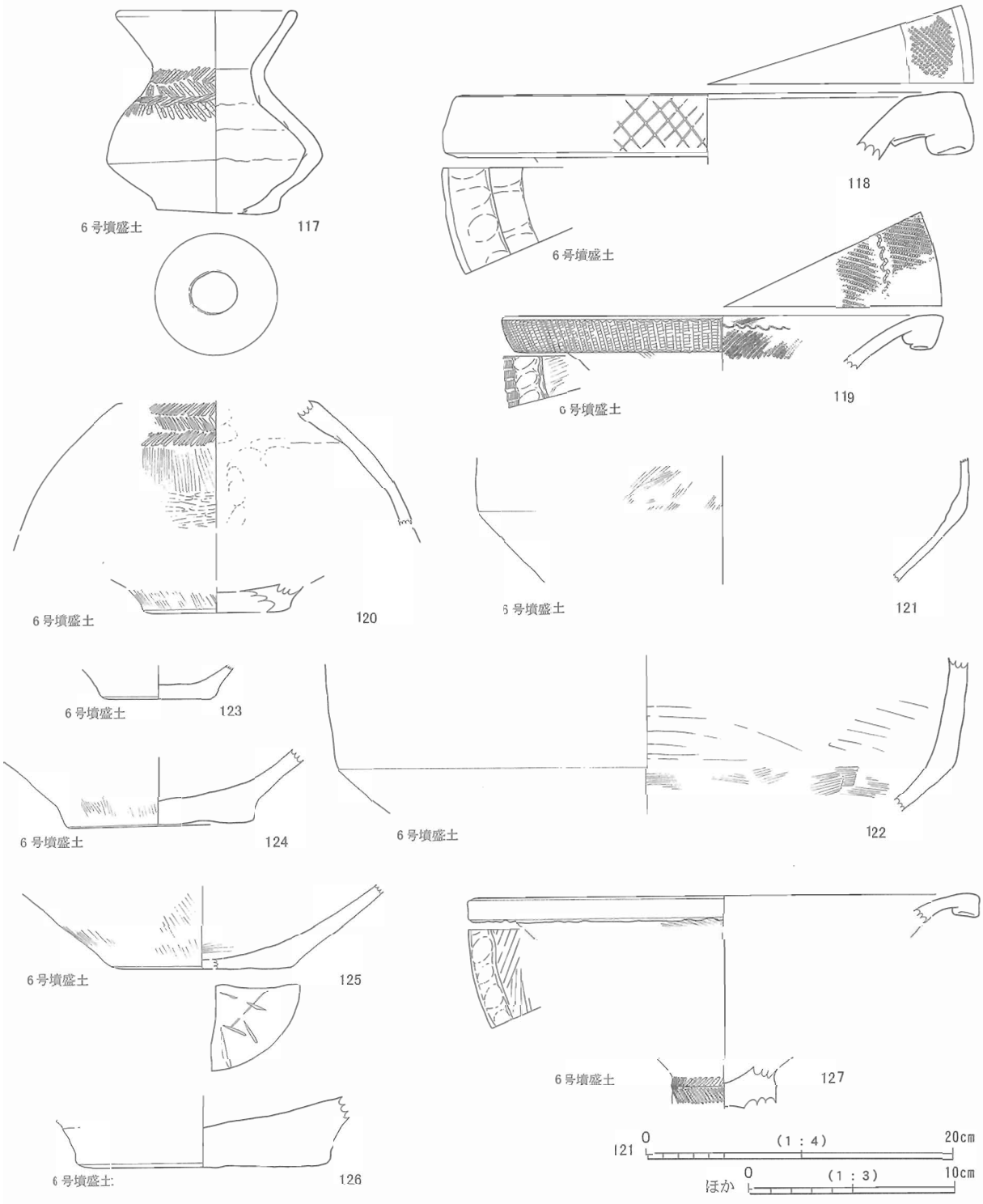
131は、土器棺の身として用いられていた大型の壷である。頸部以上を打ち欠いた状態で用いられて



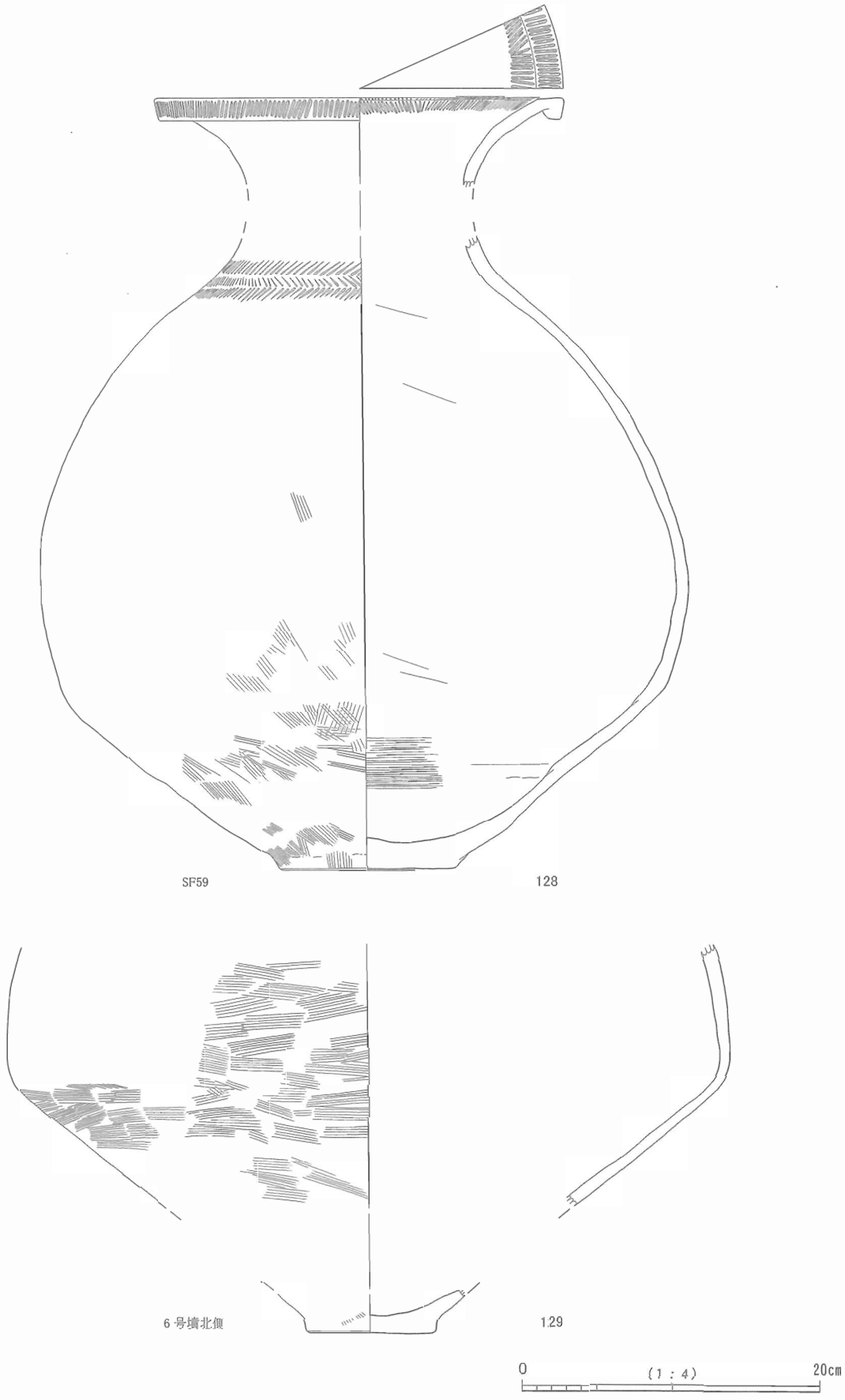
第68図　2区南部出土土器3（I群SF60～SF64、SF66～SF75）

いた（第62図）。比較的重厚なつくりである。底部は平底、胴部は球形に近い。外面調整の大半はハケ調整で占められているが、最大径のやや下寄りにだけ、帯状に横方向のミガキ調整が施された部分がある。また、肩部には2段の羽状刺突文が施されている。

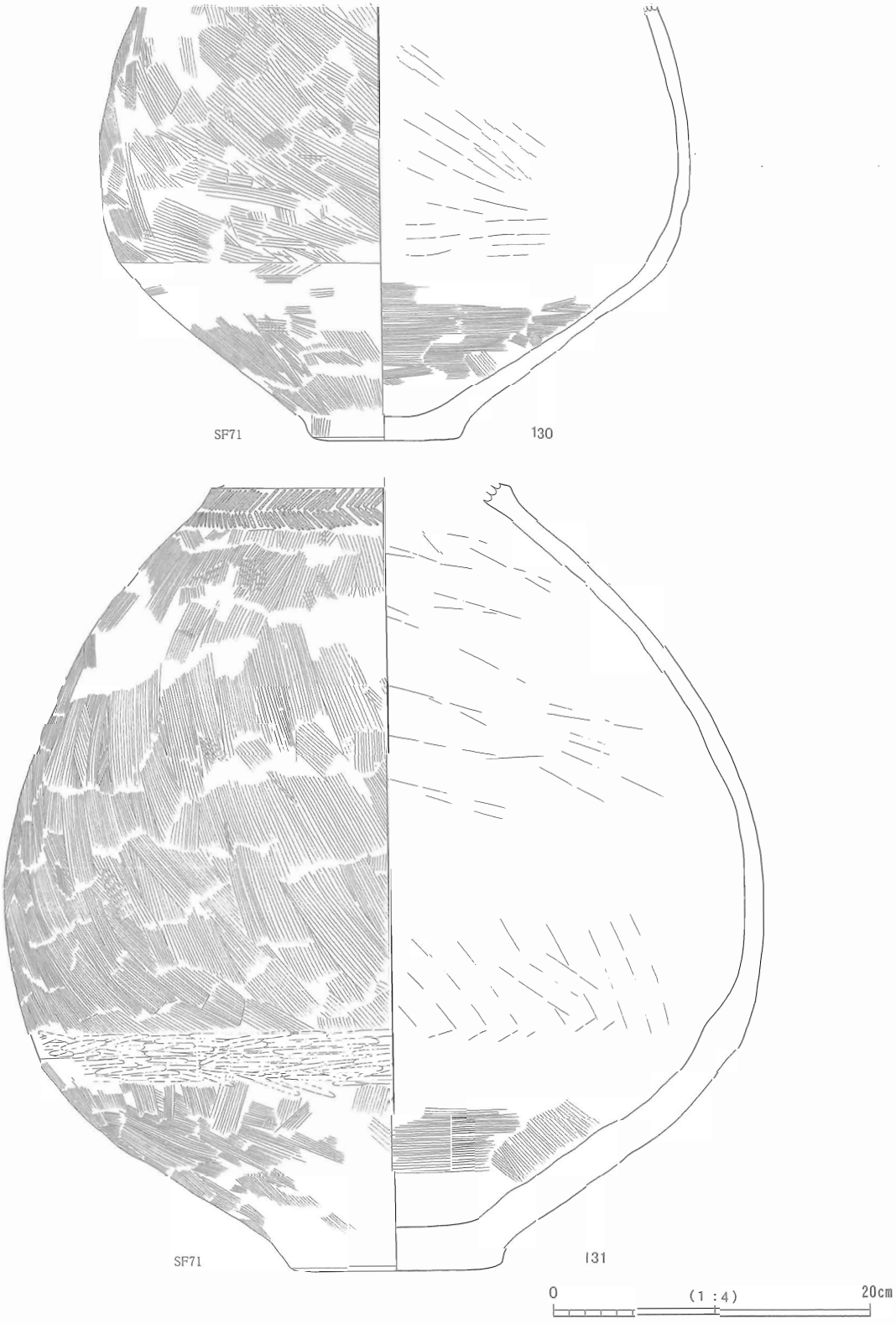
これらは、器形および文様の特徴から弥生時代後期後半頃に位置づけることができる。



第69図　2区南部出土土器4（I群遺構外）



第70図　SF59土器棺ほか



第71図　SF71土器棺

第72図　SF73土器棺

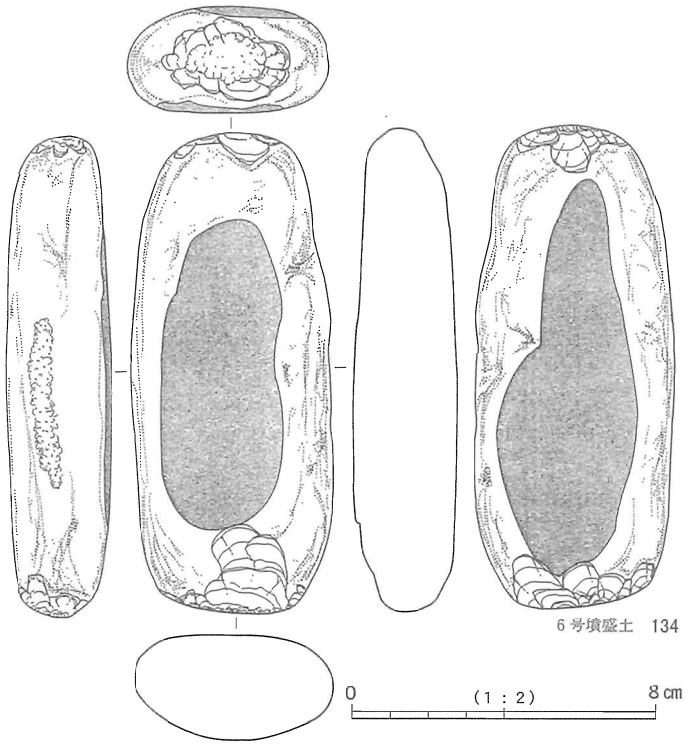
SF73土器棺（第72図）　132は、土器棺の身として用いられていた大型の壷である。口縁部を打ち欠いた状態で用いられていた（第63図）。底部は平底である。胴部は、算盤玉形よりも上半部が縦長になる形状を呈する。胴部最大径の部分で大きく屈曲するが、明瞭な稜線は伴わない。外面調整はハケ調整で占められる。頸部下端には断面三角形の突帯が廻り、その上部に2列の竹管文が施されている。縦長の器形ではあるが、平底であることなどから弥生時代後期中葉に位置づけることができる。

SF72土器棺（第73図）　133は、土器棺の身として用いられていた大型の壷である（第63図）。頸部以上を打ち欠いた状態で用いられていた。底部は、平底で木葉痕が残る。胴部は、球形よりも肩部の張りが弱い形状を呈する。外面調整はハケ調整で占められ、文様は認められない。器形から弥生時代後期後半頃に位置づけることができる。

第73図　SF72土器棺

(2)石　器

134（第74図）は、６号墳盛土中から出土した敲石である。上下の端面に敲きの痕跡が認められるほか、表裏の広い側面には磨耗痕が認められる。遺物の特徴から、弥生時代後期の墓域に伴う遺物ではなく、より古い時期のものである可能性がある。しかし、１区では縄文時代の落し穴や土器・石器が発見されているが、２区南部では縄文時代～弥生時代前期の遺構は認められておらず、遺物もこれ以外にない。



第74図　２区南部出土石器

(3)玉　類

6号墳周溝出土管玉（第75図）　135～139は、6号墳の北周溝内（第54図）から出土した管玉である。いずれも緑色の滑石製であり、長さは2.0～2.5cmの範囲内にある。また、上下両方向から穿孔されている点も共通する。横断面が正円になるものはなく、楕円形や歪みが目立つもので占められる。

形状・材質などの特徴は、林遺跡の弥生時代の土坑墓から出土した管玉と類似している。また、出土位置は6号墳北周溝であるが、弥生土器片も出土している覆土上位層の出土である。以上から、これらは周辺域から周溝内へと流れ込んだものであり、本来は弥生時代中後期の墓群に伴っていた可能性が指摘できる。一方、限定された範囲から出土していることを評価するならば、本来の所在は比較的近かったと考えることができる。なお、137が著しく劣化していることから、これらの他に、劣化して消滅してしまった管玉もあった可能性が考慮される。

6号墳周溝出土算盤玉（第75図）　140は、6号墳の北周溝内（第54図）から出土した水晶製算盤玉である。若干縦長の算盤玉形を呈している。横断面は正円形を呈する。側面はよく研磨されているが、上下端面には研磨が施されていない。側面中位の稜線は明瞭である。孔は片側から穿たれている。

管玉群と同じ範囲（第54図）の下層、6号墳北周溝の底面近くから出土している。古墳に伴う遺物である可能性も考えられたが、周辺域から出土している遺物には弥生時代の土器・玉類も多く、古墳に伴う遺物は土器に限られていた。弥生時代の水晶製玉類の出土例は非常に少ないが、県内では静岡市浅間神社境内遺跡の弥生時代の埋葬施設から出土が認められている（註3）。以上から、この水晶製算盤玉は6号墳に伴う遺物ではなく、弥生時代中後期の墓群に伴う可能性が高いと判断することができる。古墳築造後間も無く、もしくは古墳築造に際して周溝内に転落した可能性が指摘できる。

6号墳周溝出土ガラス小玉（第75図）　141～144は、管玉群と同じ範囲内（第54図）からの出土したガラス小玉である。大きさ・色には個体差が認められる。141だけは若干緑味のある濃青色を呈しており、他の3点に比べて大きい。他の3点（142～144）の大きさには大差はないが、色は142が青色、143・144が緑青色と異なっている。製作に伴って生じる形状の個体差もうかがえる。以上のような形状等の特徴および出土状況から、管玉などと同様、弥生時代中後期の墓群に伴っていた可能性が高いと判断することができる。

6号墳盛土出土ガラス小玉（第75図）　145は、6号墳の盛土中から出土したガラス小玉である。盛土中からは弥生時代中後期の土器が多く出土しており、このガラス小玉についても、同様に弥生時代中後期の墓群に伴っていた可能性が指摘できる。しかし、伴っていた遺構を特定することは難しい。

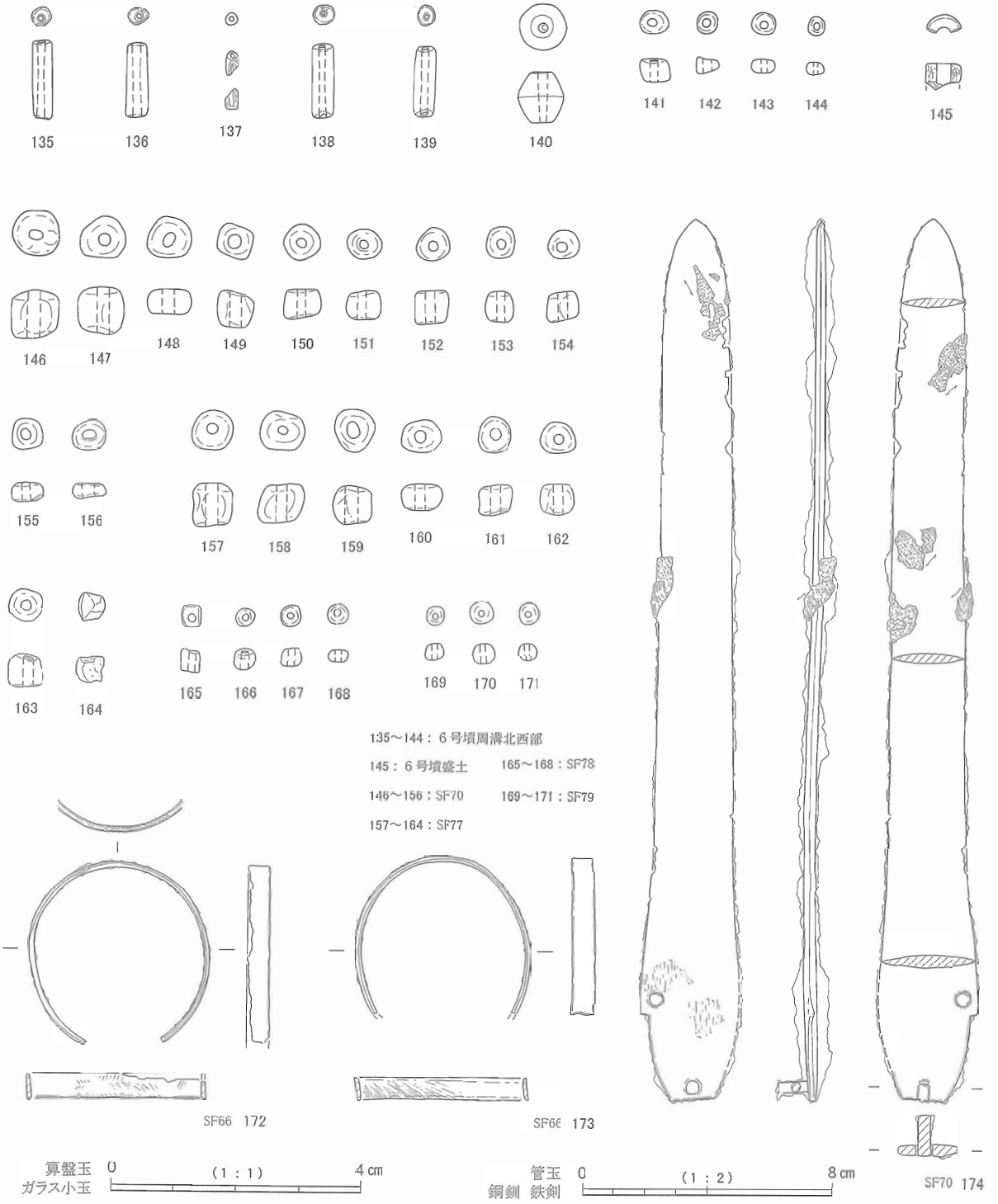
SF70出土ガラス小玉（第75図）　146～156は、SF70出土（第59図）のガラス小玉である。比較的大きく、濃い青色を呈するもので占められているが、152だけは明るい緑青色を呈している。製作に伴って生じたと考えられる、形状の歪みや大きさ（直径および長さ）の個体差が目立つ。これらは土坑墓であるSF70に伴うものであり（第59図）、そのSF70では鉄剣の副葬も認められている。また、覆土中からは弥生土器片が出土している。以上のような形状等の特徴および共伴遺物から、弥生時代後期のものであると判断することができる。

SF77出土ガラス小玉（第75図）　157～164は、SF77出土（第60図）のガラス小玉である。比較的大きく、濃い青色を呈するもので占められている。製作に伴って生じたものと考えられる、形状の歪みや大きさ（直径および長さ）の個体差が目立つ。これらは土坑墓であるSF77に伴う玉群であり（第60図）、SF70出土玉群と特徴が類似していることから、弥生時代後期のものであると判断できる。

SF78出土ガラス小玉（第75図）　165～168は、SF78出土のガラス小玉である。4点とも小型品であり、透明度の高い水色を呈している。大きさの差はそれほどないが、形状については、側面と上下端面との境が明瞭な165・166と、丸味の強い167・168に大別することができる。このような形状等の特徴は、

２区中央部で出土しているガラス小玉と類似する。詳細な出土位置は特定できなかったが、SF78に伴うものであり、弥生時代中後期のものであると判断できる。

SF79出土ガラス小玉（第75図）　169～171は、SF79出土のガラス小玉である。３点とも小型品であり、丸みの強い形状を呈している。全て水色のガラス小玉であるが、170は他２点に比べて透明度が低い。形状等の特徴は、２区中央部やSF78で出土しているガラス小玉と類似する。詳細な出土位置は特定できなかったが、SF79に伴うものであり、弥生時代中後期のものであると判断できる。



第75図　２区南部出土玉類・金属器

(4) 金属器

SF66出土銅釧（第75図）　172は、SF66出土の銅釧であり、173の上に重なるようにして出土している（第58図）。図は、この出土状況に合わせて実測したものである。劣化が著しく、非常に脆い状態になっている。出土状況における上部を中心に、欠損が多く認められているが、その中には劣化の末に粉状になっていた部分もある。しかし、残存部の断面形などについては比較的良くとどめている。

銅釧は帯状円環形であり、幅約0.8cm、厚さ約0.15cmの帯状の板で直径5.8～6.0cmの円形につくられている。鋳造による完結した円環であったのか、接合部を伴っていたのか、もしくは断環状であったのかについては、欠損部のために明確な判断ができない。帯板の断面をみると、内外での違いをみることができる。外側の面が平坦（直線的）であるのに対して、内側の面には若干の膨らみを伴う。また、上下の端面と内外面との境をみると、外面との境には明瞭な角を伴うのに対して、内面との境は若干の丸味を伴っていることがわかる。一方、図の上にした方が薄くなっており、上下における相違も確認することができる。

173も、SF66出土の銅釧である。172の下に重なるようにして出土している（第58図）。図は、出土状況に合わせて実測したものである。劣化・残存状況は172と同様であるが、172の下にあったために縁部の欠損は少ない。172同様の帯状円環形の銅釧であり、幅約0.7cm、厚さ約0.12cmの帯状の板で直径5.6～6.0cmの楕円形につくられている。鋳造による完結した円環であったのか、接合部を伴っていたのか、もしくは断環状であったのかについては、欠損部のために明確な判断ができない。正円形でない点については、製作による可能性とともに、装着や土圧などによる歪みである可能性も考慮される。帯板の断面については、概ね172と同様であるが、上下における厚さの相違は認め難い。

なお、172・173双方の内面および172の下端面に、繊維状の痕跡を認めることができる。詳細は図のとおりである。格子状に残っている部分もあるが、基本的には一方の方向の痕跡だけが強く残る。172の内面では、その方向が上下で変化している。人毛や鉄剣（第75図174）に付着しているような布ではなく、被葬者の衣類もしくは銅釧自体の内面に伴っていた毛のような繊維物の痕跡であると推測することができる。しかし、繊維そのものが残存しているわけではなく、それ以上の詳細はわからない。

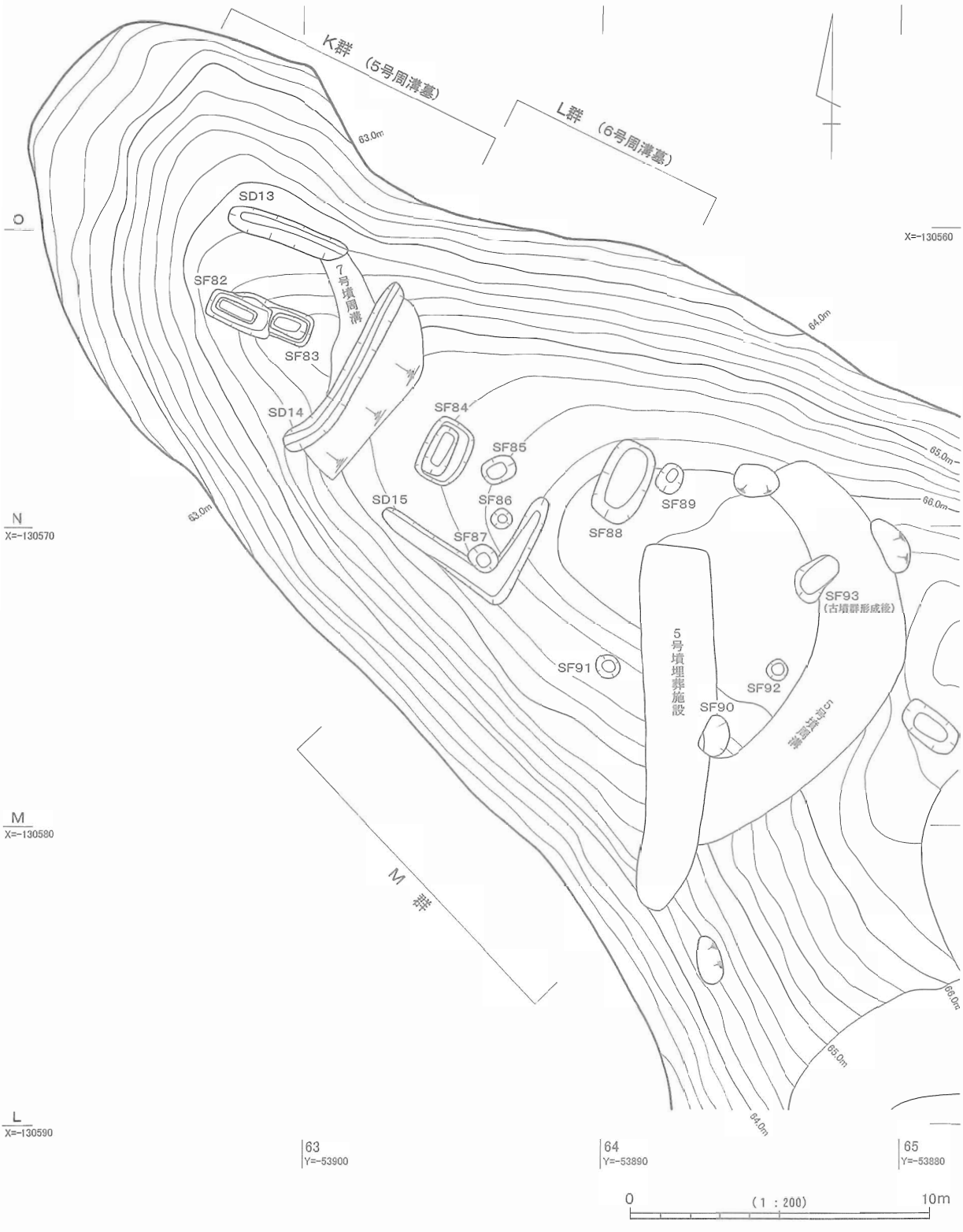
以上2点の銅釧は、SF66の被葬者が装着していたものであり、弥生時代後期のものである。

SF70出土鉄剣（第75図）　174は、SF70に副葬されていた鉄剣である（第59図）。刃部長約25.6cm、茎部長約2.7cmであり、九州～丹後および関東に多く認められている形態・規模の鉄剣である。

刃部は、全体的に先細の形態を呈し、とくに切先部と茎部寄りの部分は著しく細くなる。断面はレンズ形に近く、明確に観察できる鎬は認められない。関については、片側は直関であることが明らかである。しかし、反対側は茎部の錆膨れが著しいために判断し難い。直関を伴う可能性もあるが、図化したような緩やかな曲線をもって茎部に至る可能性もある。茎部は短く、直線的な長方形にはならない。断面は中央が膨む長方形に復元できる。図の下端部寄りの中央に目釘が残存している。刃関双孔もあるが、確認できるのは直関側だけである。錆の影響であろうか、反対側はX線でも明確な孔を確認することができなかった。把については、何らかの痕跡を観察することはできるが、明確に木質であるといえるものではなく、あくまで錆の状態による痕跡である（註4）。

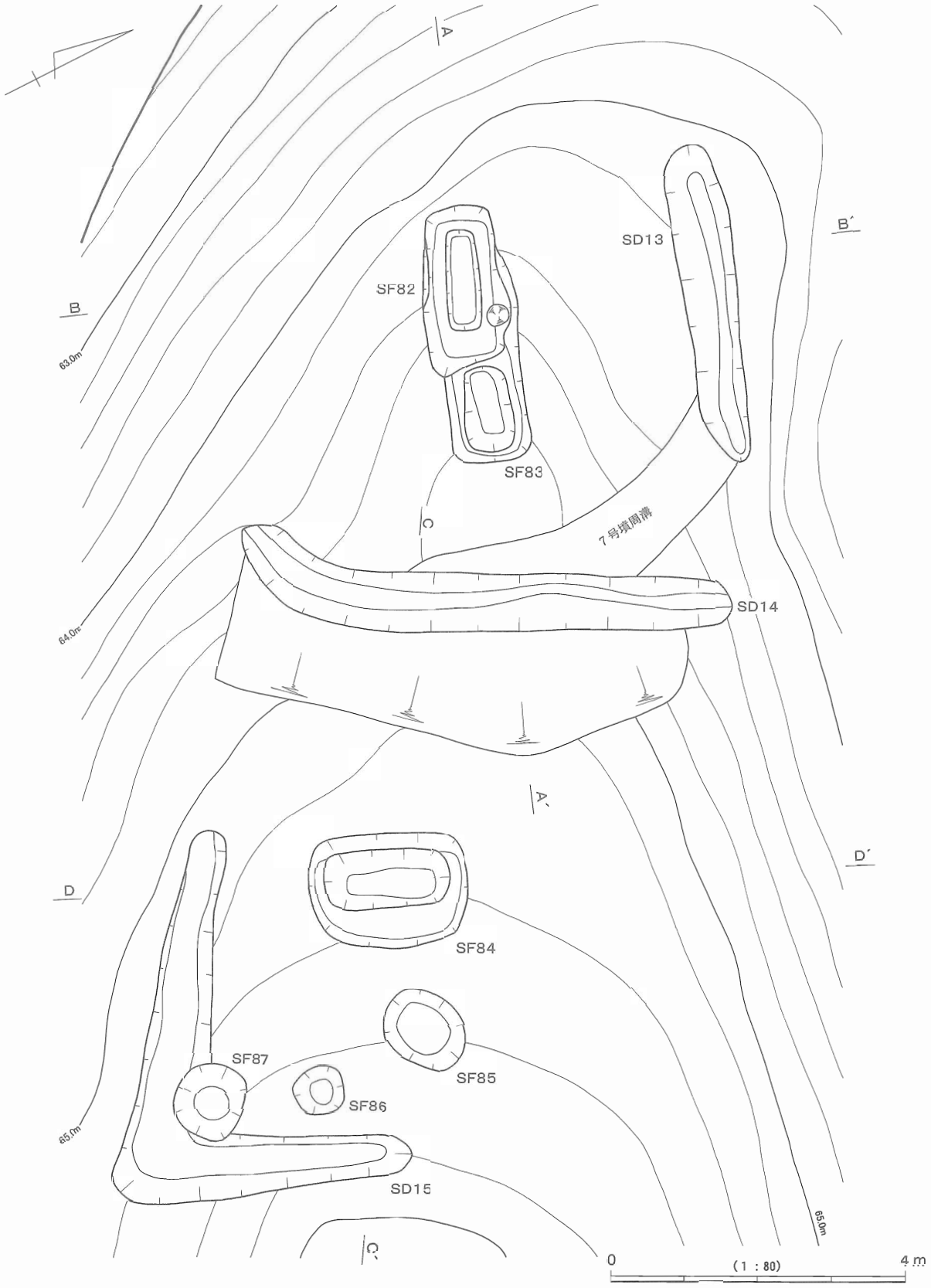
なお、この鉄剣の刃部には、布の付着が認められている。布目は比較的粗いもので、右撚りの糸を使用しているようである。なお、図にある矢印は、間隔を広くしている糸もしくは細く目立たない糸を緯糸としたときの経糸の方向を示したものである。木質などを介さないで直接鉄剣に布が付着していることから、この鉄剣は鞘がない状態で布に巻かれて副葬されたと判断できる。また、布の付着が刃部に限られていることから、刃部を中心に巻かれた可能性が考慮できるが、このような詳細については、全体的に残存が良好ではないので判断し難い。

第6節　3区北部



第76図　3区北部

1．K・L・M群



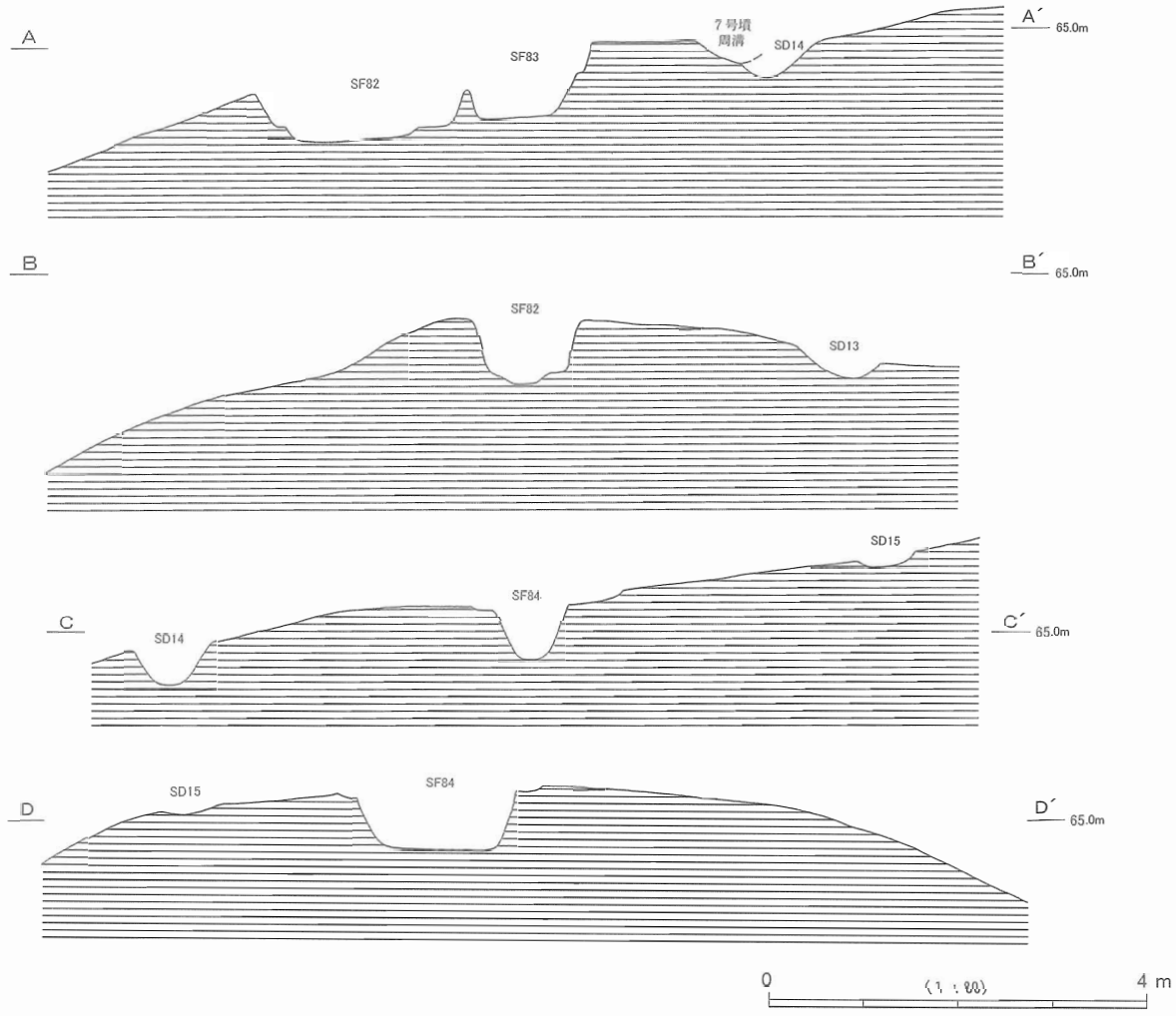
第77図　K群（5号周溝墓）・L群（6号周溝墓）1

K～M群は、3区北部の尾根上に位置する遺構群であり、北西から南東へと丘陵筋に沿って並ぶ。立地地形は、北西へと下りながらのびる丘陵上で、平坦面も北西に向かって狭くなる。M群内の5号墳墳丘部では、盛土の下に黒・褐色砂質土の堆積（Ⅳ層）が認められた。しかし、その上面での遺構把握は難しかったため、遺構検出はその下の黄～灰色砂層（Ⅴ層）上面で行った。その他については、Ⅳ層を認めることができず、表土下に黄～灰色砂層（Ⅴ層）が検出された。以上のように、黄～灰色砂層（Ⅴ層）上面を遺構検出面として調査している。各群からは、次に述べるような遺構が検出されており、遺構の特徴および出土遺物から、弥生時代後期の墓群が展開していることがわかっている。

K群は、周溝墓1基と対応する（5号周溝墓）。周溝の残存は悪く、南東辺と北東辺だけしか検出できなかった。しかし、7～8m四方の方形周溝墓であると復元することはできる。南隅には周溝が廻っていたと考えられるが、東隅・北隅は造墓時から溝が途切れていた可能性がある。西隅については判断できない。周溝墓の中央には2基の土坑墓が検出されており、そこからガラス小玉が出土している。

L群も、周溝墓1基と対応する（6号周溝墓）。8～9m四方の方形周溝墓であったと復元できるが、周溝は北隅部分しか残っていなかった。遺構の配置状況から、北西側は5号周溝墓の周溝を共有していた可能性も考慮される。周溝墓の中央に土坑墓が1基、その南東側に3基の土器棺墓が南北に並ぶように発見されている。

M群は、遺構密度が比較的薄い。しかし、土器棺墓や長楕円～長方形の土坑が検出されており、弥生時代の墓群の一部が展開していると判断することができる。



第78図　K群（5号周溝墓）・L群（6号周溝墓）2

(1) 溝

SD13・SD14（第77・78図）　3区北西端部（K群）に位置する。SD13は、北東斜面際で丘陵筋と平行してのびる。幅約0.8m、残存長約4.5mである。SD14は、SD13の南東側で丘陵を横断するようにのびる。幅約0.8m、残存長約7.0mである。深さは最大0.5m弱である。双方の溝は、7～8m四方の方形に区画するように配置されている。覆土は暗黄～灰褐色砂質土であり、出土遺物はない。

遺構の特徴および周辺域の遺構・遺物の状況から、弥生時代後期前半頃の方形周溝墓（5号周溝墓）の周溝の一部である可能性が高いと判断できる。

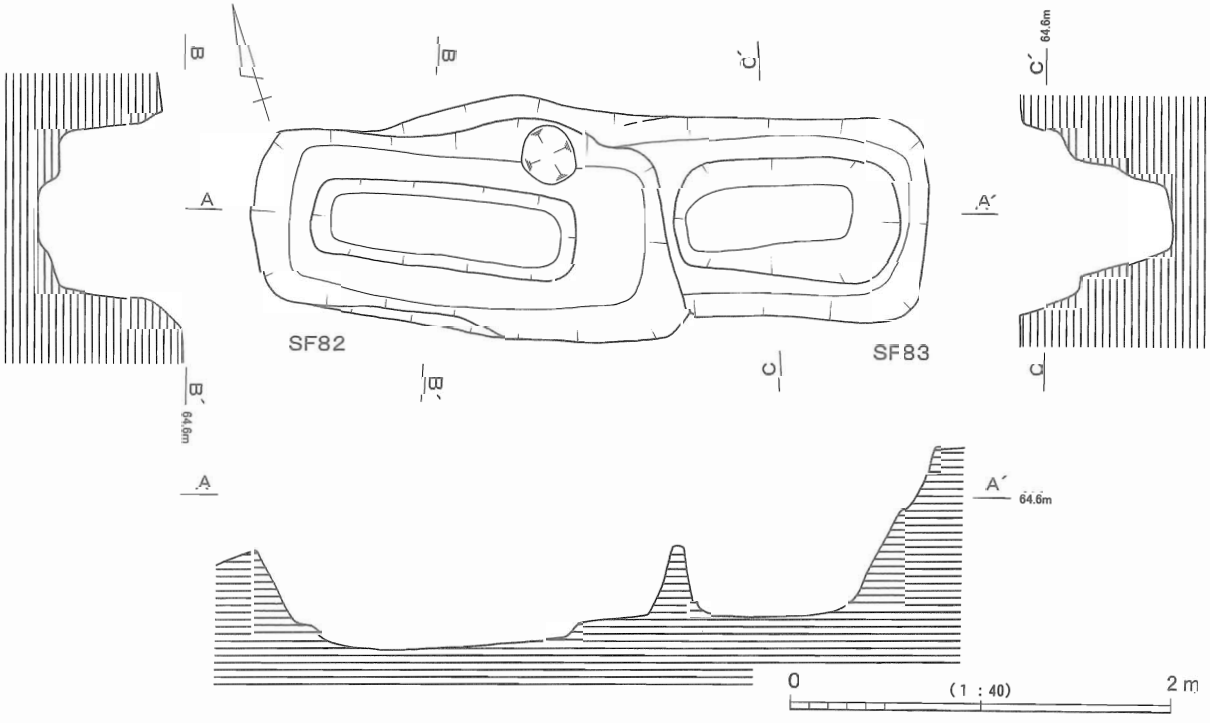
SD15（第77・78図）　3区北西部（L群）に位置する。南西斜面際で丘陵筋と平行してのび、その南側で直角に曲がり、さらに北東へとのびる。幅は最大約1.1m、深さは0.2m以下である。総長8m程が検出されたが、本来はより長くのびていたと推測できる。以上のように、8～9m四方の方形に区画するように配置された溝である。覆土は暗黄～灰褐色砂質土である。出土遺物はない。

遺構の特徴および周辺域の遺構・遺物の状況から、弥生時代後期前半頃の方形周溝墓（6号周溝墓）の周溝の一部である可能性が高いと判断できる。

(2) 土坑墓ほか

SF82・SF83（第79図）　3区北西端部（K群：5号周溝墓）の中央に位置する。ともに主軸を丘陵筋に平行させ、縦に並ぶ。先後関係を土層から判断することはできなかった。SF82は、約1.0m×2.4mの長方形、深さ約0.8mである。底面は緩やかに西に下る。また、底面中央には0.5m弱×約1.4mの長方形で深さ約0.1mの凹部が伴う。SF83は、約1.1m×1.8m以上の長方形、深さ約0.8mである。壁面中位に段が廻り、下部は約0.6m×1.2mの長方形を呈する。覆土はともに暗黄褐色砂質土であり、いずれかの上層から土器片（第84図175）が出土している。また、双方からガラス小玉（SF82：第90図192～196、SF83：第90図197～202）が出土しているが、詳細な出土位置は特定できなかった。

遺構の特徴や出土遺物から、弥生時代後期前半頃の土坑墓である可能性が高いと判断できる。土層による検討はできなかったが、遺構の深さや形状などから、また周溝墓の中心に単独的に位置することか

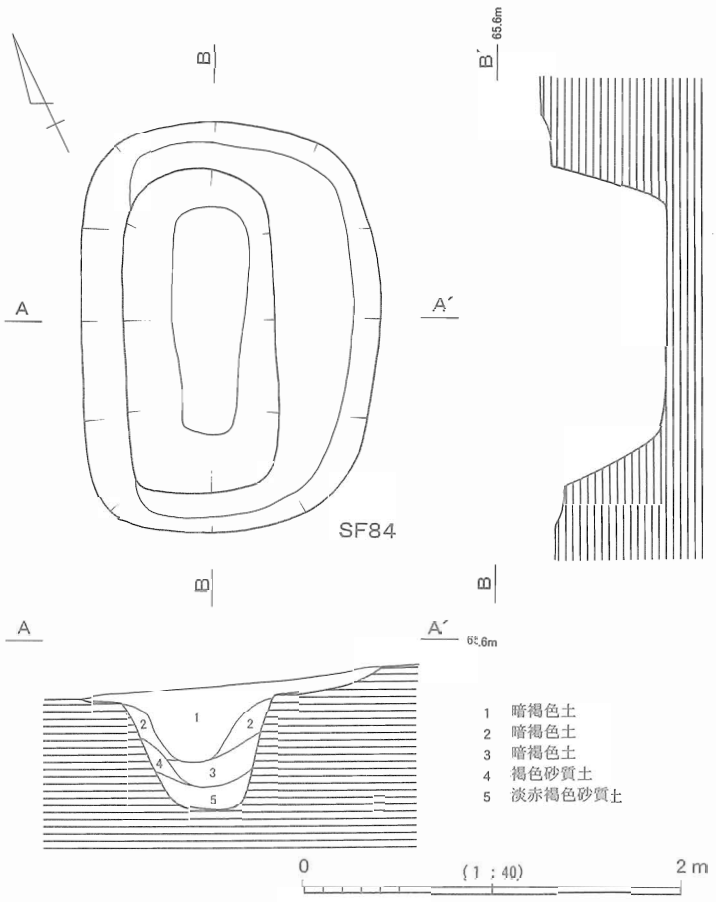


第79図　SF82・SF83

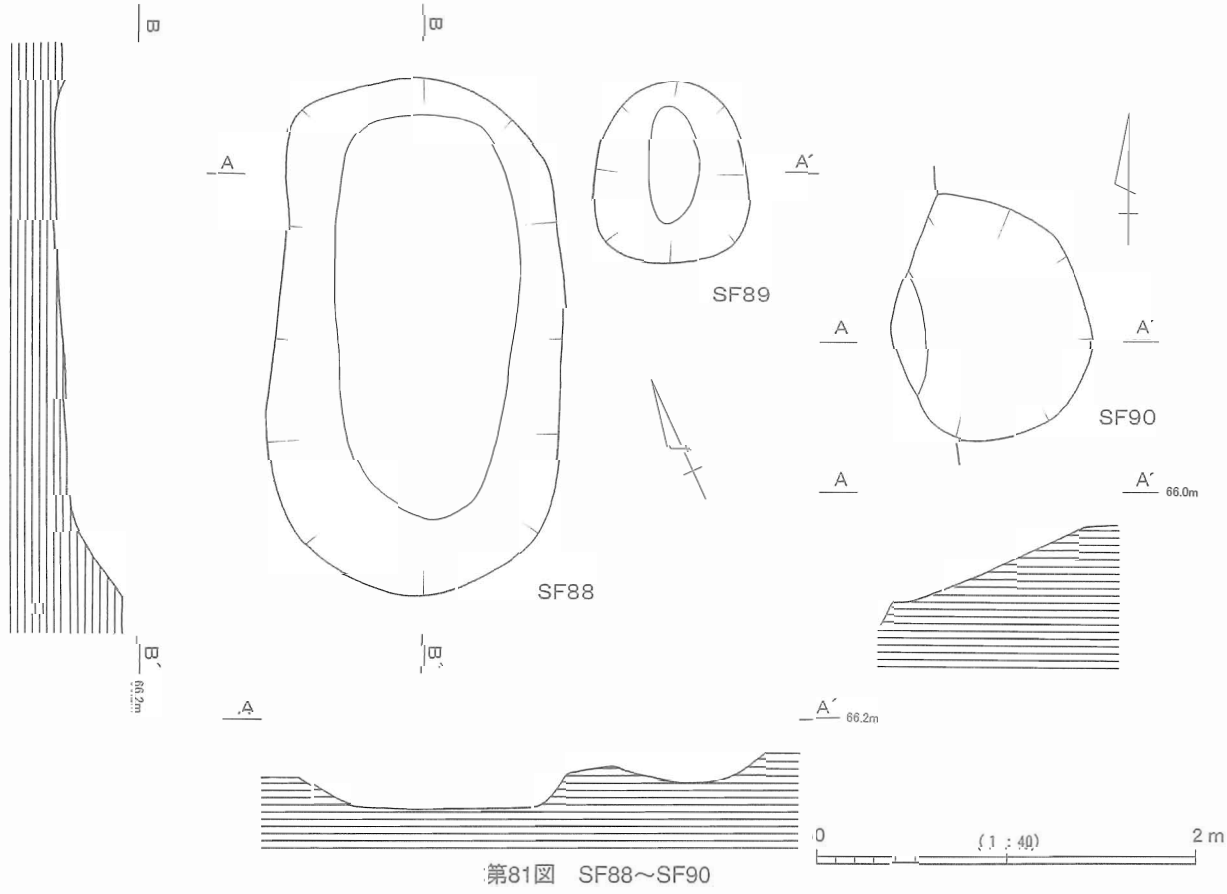
ら、木棺が用いられた可能性が指摘できる。なお、SF83はとくに小さく、大人を伸展葬することはできない。

SF84（第80図）　3区北西部（L群：6号周溝墓）の中央に位置する。主軸は丘陵筋に直行する。上部は1.6m弱×約2.2mの長楕円形で、深さは0.1mと浅い。その西寄りに、0.8m弱×1.8m弱の長方形で、深さ約0.6m強の土坑が伴う。覆土には、暗褐色土の落ち込みと下層の褐色砂質土が認められる。出土遺物はない。

遺構の特徴および周辺の状況から、弥生時代後期前半頃の埋葬施設である可能性が高いと判断できる。深い土坑部分に埋葬空間があり、上部の浅い部分はSX05と類似するものと推測できる。土層からの判断は難しいが、遺構の深さや形状などから、また周溝墓の中心に単独で位置することから、木棺が用いられた可能性が指摘できる。



第80図　SF84



第81図　SF88～SF90

SF88・SF89（第81図）　3区北部（M群）に位置する。2基とも主軸を丘陵筋に直行させ、隣接して並ぶ。SF88は1.5m強×2.8m弱の長楕円形で、深さは0.3m弱である。覆土は淡赤灰褐色砂質土である。一方、SF89は約0.8m×1.0m弱の長楕円形で、深さは0.2m弱である。覆土は暗褐色砂質土であり、数点の弥生土器片が出土している。ともに木棺の痕跡は認められない。

遺構の特徴や出土遺物などから、弥生時代後期前半頃の土坑墓である可能性が高いと判断できる。なお、SF88は比較的大きな土坑墓であるが、SF89は大人を埋葬するには小さすぎる。

SF90（第81図）　3区北部（M群）の丘陵南西斜面に位置する。5号墳の埋葬施設のために本来の規模・形状はわからない。覆土は暗赤褐色砂質土で、弥生土器（第84図176）が出土している。

出土遺物から、弥生時代後期前半頃の墓域に伴う遺構である可能性が高い。しかし、土坑墓とするには壁面の傾斜が緩い。周溝墓の周溝である可能性もあるが、いずれにしても評価が難しい。

(3) 土器棺墓

SF85（第82図）　3区北西部（L群）、丘陵上平坦面のほぼ中央に位置する。土坑は約1.0m×1.2m強の楕円形を呈する。深さは約0.2mであるが、本来はより深かったと推測できる。土坑の東寄りに土器棺が埋置されていた。西部で出土している土器片は、壊れた土器棺上部の破片である。

土器棺の身は、胴部最大径0.3m強の短頸壷（第85図181）である。どこも打ち欠くことなく、口縁を南西に向けて横倒しの状態で置かれていた。若干、口縁部が上方を向く。蓋は、胴部最大径約0.3mの壷（第85図180）である。上半部を打ち欠いた状態で、身と合せ口になるように置かれていた。なお、この壷の口縁部片も出土している。身・蓋とは別に用いられた可能性が指摘できるが、詳細な出土位置はわからない。その他、棺内からガラス小玉（第90図189～191）が出土している。

土器棺の形態などから、弥生時代後期前半頃の土器棺墓である可能性が高いと判断できる。

SF86（第82図）　3区北西部（L群）、SF85の南に位置する。土坑は最大径約0.7mの不整円形を呈する。深さは約0.4mであるが、本来はより深かったと推測できる。覆土は主に暗黄褐色砂質土である。この土坑の中央に土器棺が埋置されていた。土器棺の身は、胴部最大径約0.4mの壷（第86図182）である。口縁を北東に向けて横倒しの状態で置かれていた。若干、口縁側が下を向く。胴部に欠損があるが、埋葬時の打ち欠きか、後世の上部破壊による欠損であるかは判断し難い。他の出土遺物はない。

土器棺の形態などから、弥生時代後期前半頃の土器棺墓である可能性が高いと判断できる。

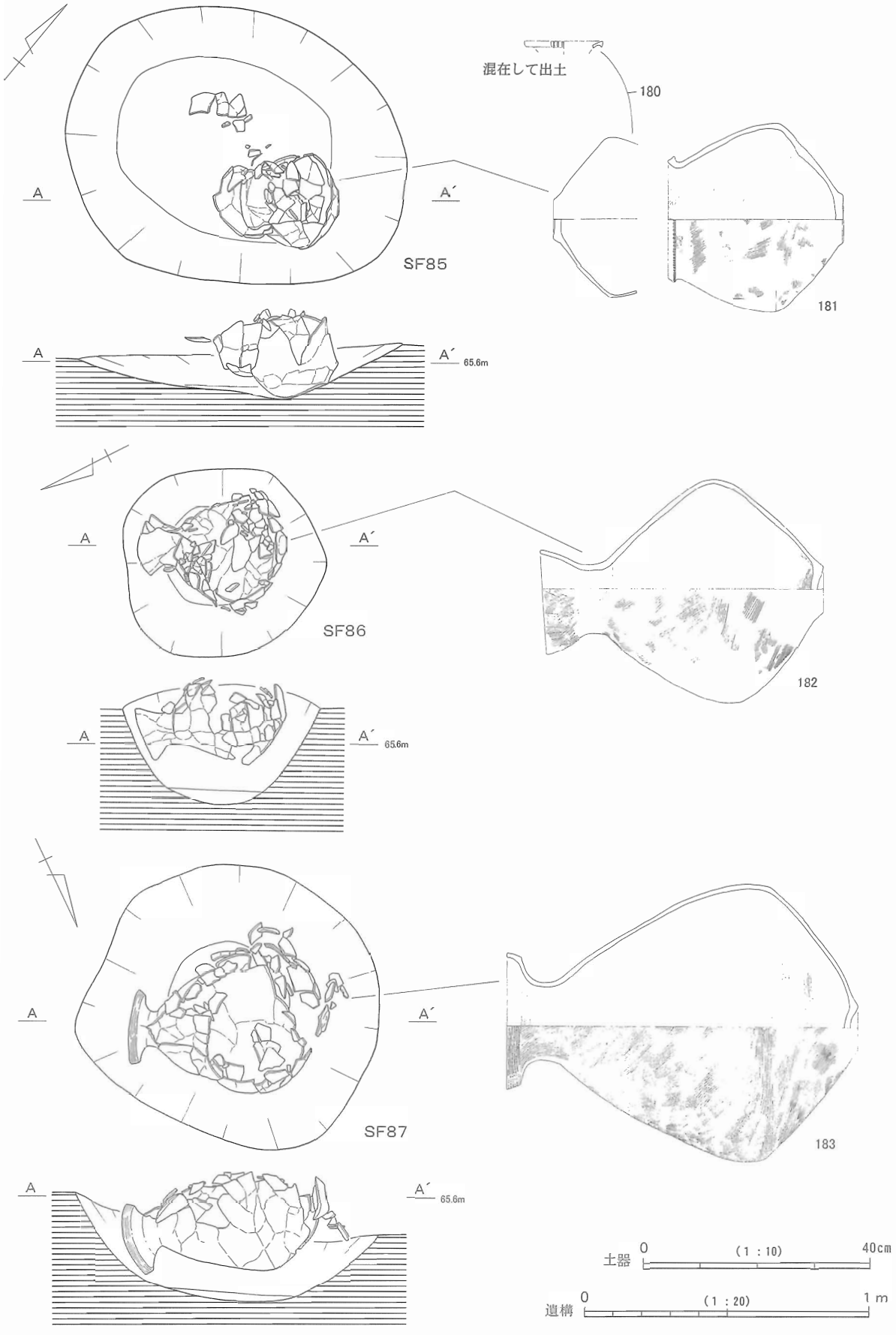
SF87（第82図）　3区北西部（L群）、SF86の南に位置する。土坑は最大径約1.1mの不整円形を呈する。深さは約0.4mであるが、本来はより深かったと推測できる。土層によるSD15との先後関係の判断はできなかった。土器棺の身は、胴部最大径約0.5mの壷（第87図183）である。口縁部を東に向けて横倒しの状態で置かれていた。若干、口縁部側が下を向く。胴部に欠損部があるが、埋葬時の打ち欠きか、後世の上部破壊による欠損であるかは判断し難い。他の出土遺物はない。

土器棺の形態などから、弥生時代後期前半頃の土器棺墓である可能性が高いと判断できる。

SF91（第83図）　3区北部（M群）の丘陵南西斜面に位置する。土坑は径0.8m弱の円形で、深さは約0.6mである。この土坑の中央に土器棺が埋置されていた。上部が若干の破壊を受けている。

土器棺の身は、胴部最大径約0.5mの壷（第88図185）であり、正位に置かれていた。頸部以上の出土は破片でも認められず、頸部以上を欠いた状態で用いられたと考えられる。この身の上部から、甕の破片（第88図184）が出土している。残存状況が非常に悪く、確実な判断はできないが、逆位にして蓋としていた可能性が高いと考えられる。これらの他に出土遺物はない。

土器棺の形態などから、弥生時代後期前半～中葉の土器棺墓である可能性が高いと判断できる。

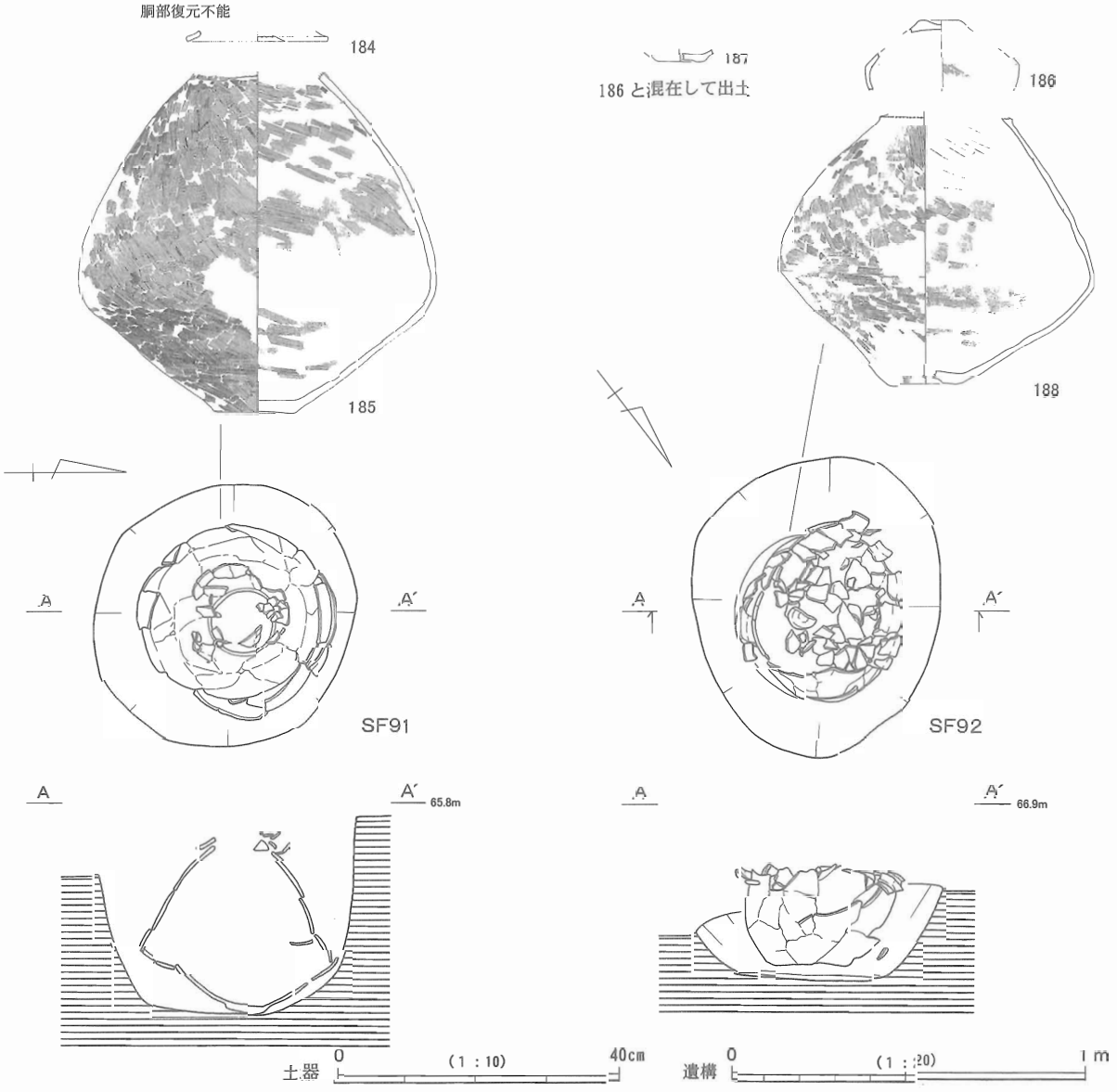


第82図　SF85～SF87

SF92（第83図）　3区北部（M群）の丘陵平坦面の南西寄りに立地している。土坑は最大径0.9m弱の楕円形を呈する。深さは0.3m弱であるが、本来はより深かったと推測できる。この土坑の中央に土器棺が埋置されていた。5号墳の墳丘構築の影響もあったのであろうか、上部のみならず下部も押しつぶされており、上からの圧力の影響を他よりも顕著に認めることができる。

土器棺の身は、胴部最大径0.4m強の壷（第89図188）であり、正位に置かれていた。頸部以上の出土は破片でも認められず、頸部以上を欠いた状態で用いられたと考えられる。土器棺の蓋は、胴部最大径0.2m強の壷（第89図186）である。底部の出土状況から、逆位にして蓋としていたと復元できる。また、上半部の出土が破片でも認められず、上半部を欠いた状態で用いられたと考えられる。これらのほかに、壷の底部片（第89図187）が土器棺上部のつぶれた部分から出土している。出土状況の詳細は多くの土器片と混在していたためにわからないが、3個体を土器棺に用いた可能性が考慮される。土器棺内には砂質土が流入しており、副葬品などの出土はなかった。

土器棺の形態などから、弥生時代後期前半頃の土器棺墓である可能性が高いと判断できる。



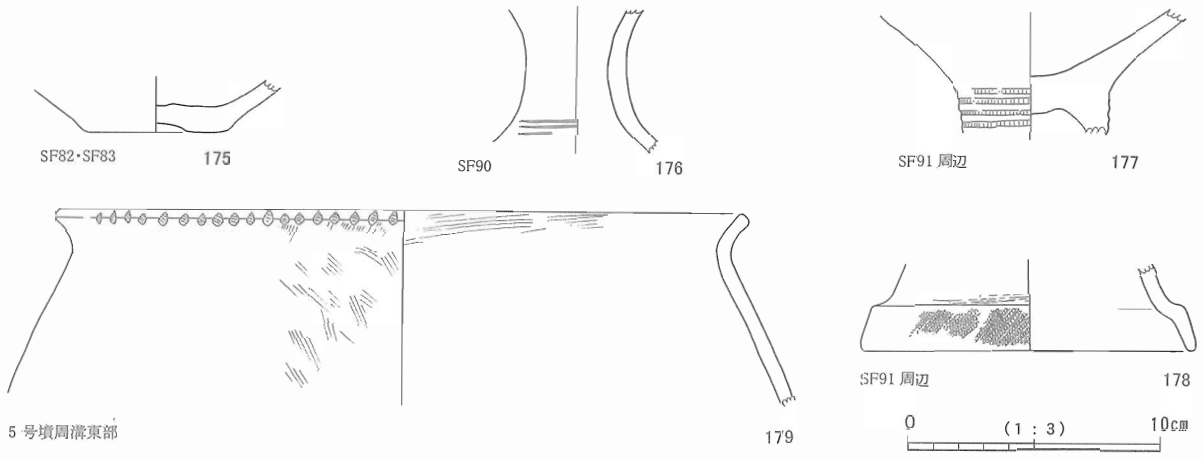
第83図　SF91・SF92

2．3区北部の出土遺物

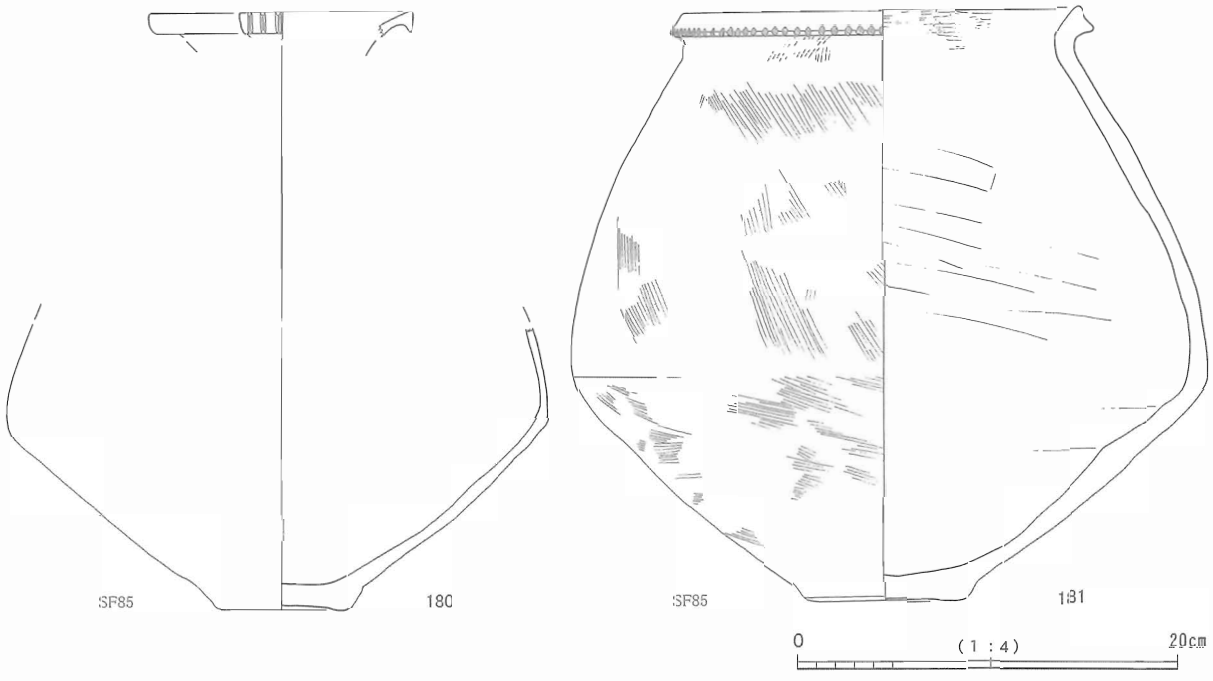
(1)弥生土器

K～M群出土土器（第84図）　175は、SF82もしくはSF83出土の壷の底部片であり、上げ底状を呈する。176は、SF90出土の壷の頸部である。細く長い頸部であり、胴部との境界付近に櫛描横線文が施されている。177・178は、SF91の周辺から出土した高坏である。同一個体であるかはわからない。177の接合部には4条の押圧横線文が観察できる。178の脚裾には明確な段が設けられ、裾部外面に縄文が施されている。179は、5号墳周溝に転落・流入していた大型の甕である。胴部は球形よりもやや直線的に立ち上がり、稜線を伴わずに屈曲して口縁部に至る。口縁部は短く開き、端部に刻みが廻る。

全般的に、弥生時代後期前半に位置づけできるもので占められている。遺構に伴う遺物ではないが、K～M群が展開した時期を示すものとして評価できる。



第84図　K～M群出土土器



第85図　SF85土器棺

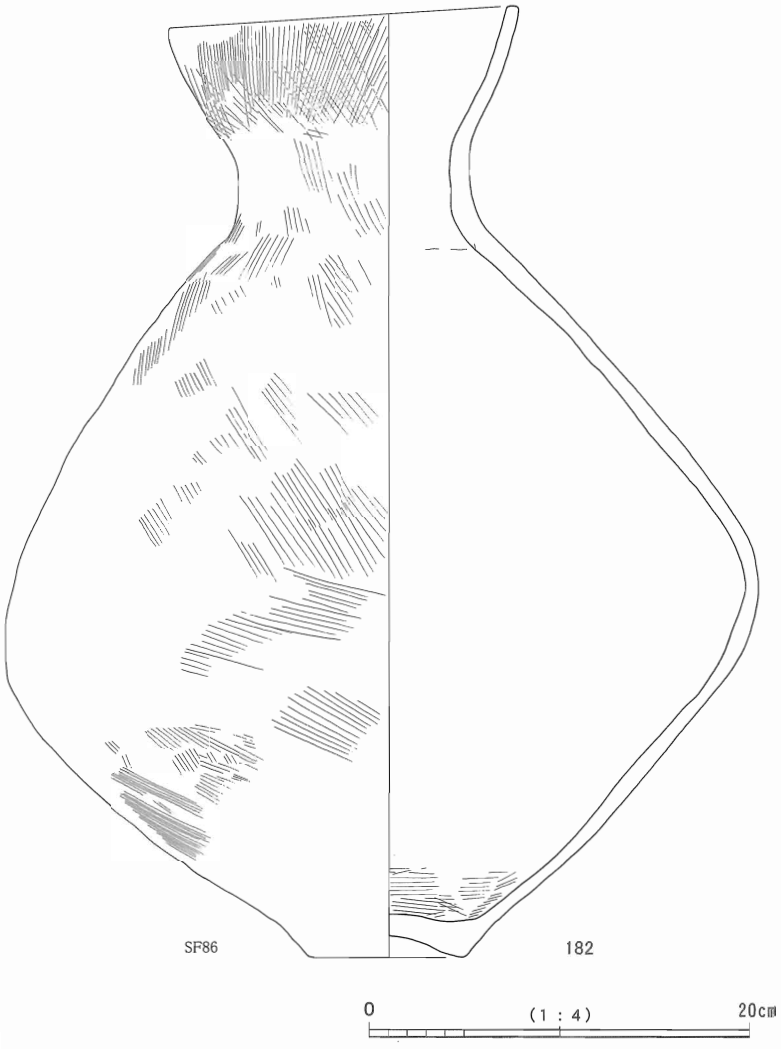
SF85土器棺（第85図）　180は、土器棺の蓋として用いられていた壷である。上半部を打ち欠いた状態で、下半部を蓋として用いていた（第82図）。口縁部片も出土しているが、どのように用いられていたのかはわからない。底部は平底である。胴部は下膨れの形状を呈する。摩滅が著しく、調整などの観察はできない。口縁端部の外面に刻みが廻る。

181は、土器棺の身として用いられていた短頸壷である。ほぼ完形の状態で用いられていた（第82図）。底部は平底である。胴部は球形を呈さず、中位下寄りに屈曲部を伴う。頸部はほとんどなく、屈曲部を介して胴部から口縁部へと至る。外面調整はハケ調整で占められる。口縁部は短く外反し、口縁端部の下端に刻みが廻る。

これらは、器形および文様の特徴から弥生時代後期前半頃に位置づけることができる。

SF86土器棺（第86図）　182は、土器棺に用いられていた大型の壷である。完形に近い状態で用いられていた（第82図）。底部は上げ底状である。胴部は縦長の算盤玉形を呈するが、中位の屈曲部に稜線は伴わない。直立する頸部をもち、口縁部は内湾させる。外面調整はハケ調整で占められている。

器形および文様の特徴から、弥生時代後期前半に位置づけることができる。



第86図　SF86土器棺

SF87土器棺（第87図）　183は、土器棺に用いられていた大型の壷である。完形に近い状態で用いられていた（第82図）。底部は上げ底状である。胴部は、中位よりも下寄りに最大径の屈曲部を伴い、算盤玉形よりも上部が縦長になる形状を呈する。屈曲部に稜線は伴わない。頸部は短く直立するものであり、そこから大きく外反して受け口状の口縁部に至る。口縁部外面には櫛描による横線文が施されている。外面調整はハケ調整で占められているが、胴部最大径部は横方向、胴部上半は斜方向、頸部・口縁部は縦方向などと部位ごとに方向を異にして施されている。

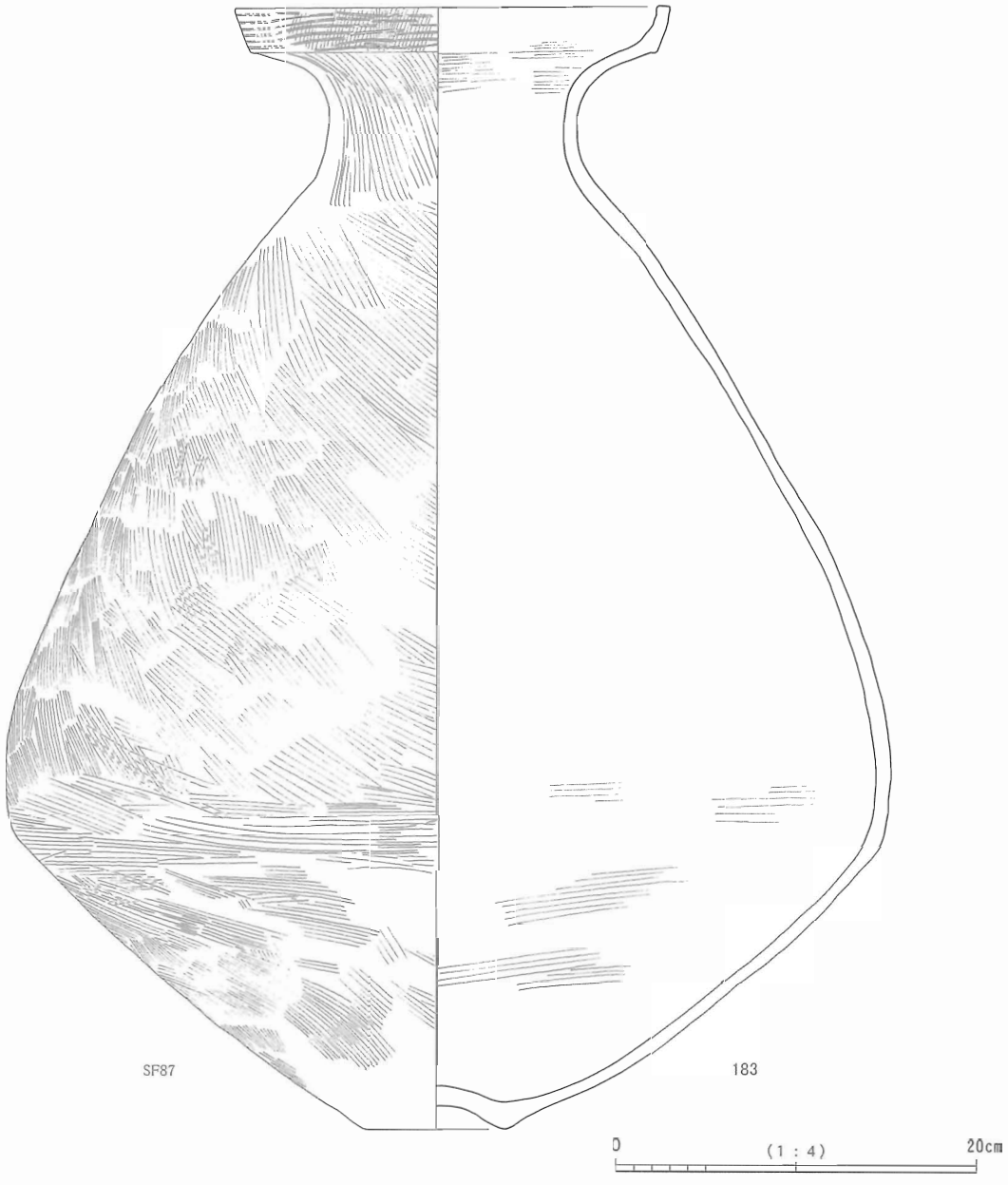
器形および文様の特徴から、弥生時代後期前半に位置づけることができる。

SF91土器棺（第88図）　184は、土器棺の蓋として用いられていた甕である。残存状況が悪く、どのような状態で用いられたのか、打ち欠きの有無などを推測することは難しい。また、

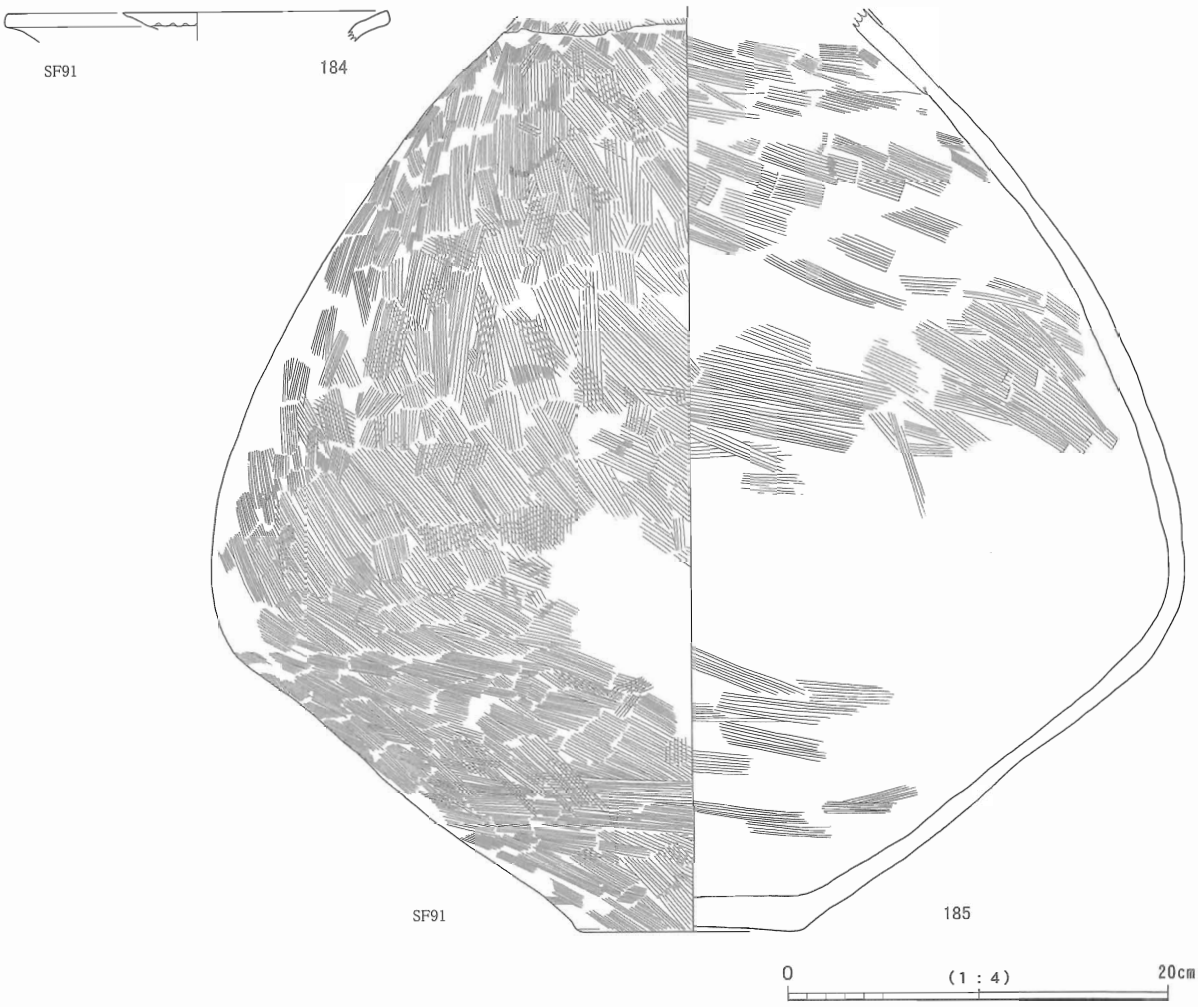
SF91の報告で述べたとおり、逆位にして蓋とした可能性を考えることができるが、出土状況によって詳細をみることはできなかった（第83図）。図化した破片は短く開く口縁部であり、口縁端部には刻みが廻る。

185は、土器棺の身として用いられていた大型の壷である。頸部以上を打ち欠いた状態で用いられたと考えられる（第83図）。底部はほぼ平底である。胴部は球形ではなく、中位下寄りに屈曲部を伴う。ただし、屈曲部に稜線は伴わない。外面調整はハケ調整で占められている。胴部と頸部との接合面に沿って打ち欠かれており、頸部によって隠れていた胴部上端のハケ調整が現れている。頸部の文様は確認することができない。比較的重厚なつくりの壷である。

これらは、器形および文様の特徴から弥生時代後期前半～中葉に位置づけることができる。



第87図　SF87土器棺



第88図　SF91土器棺

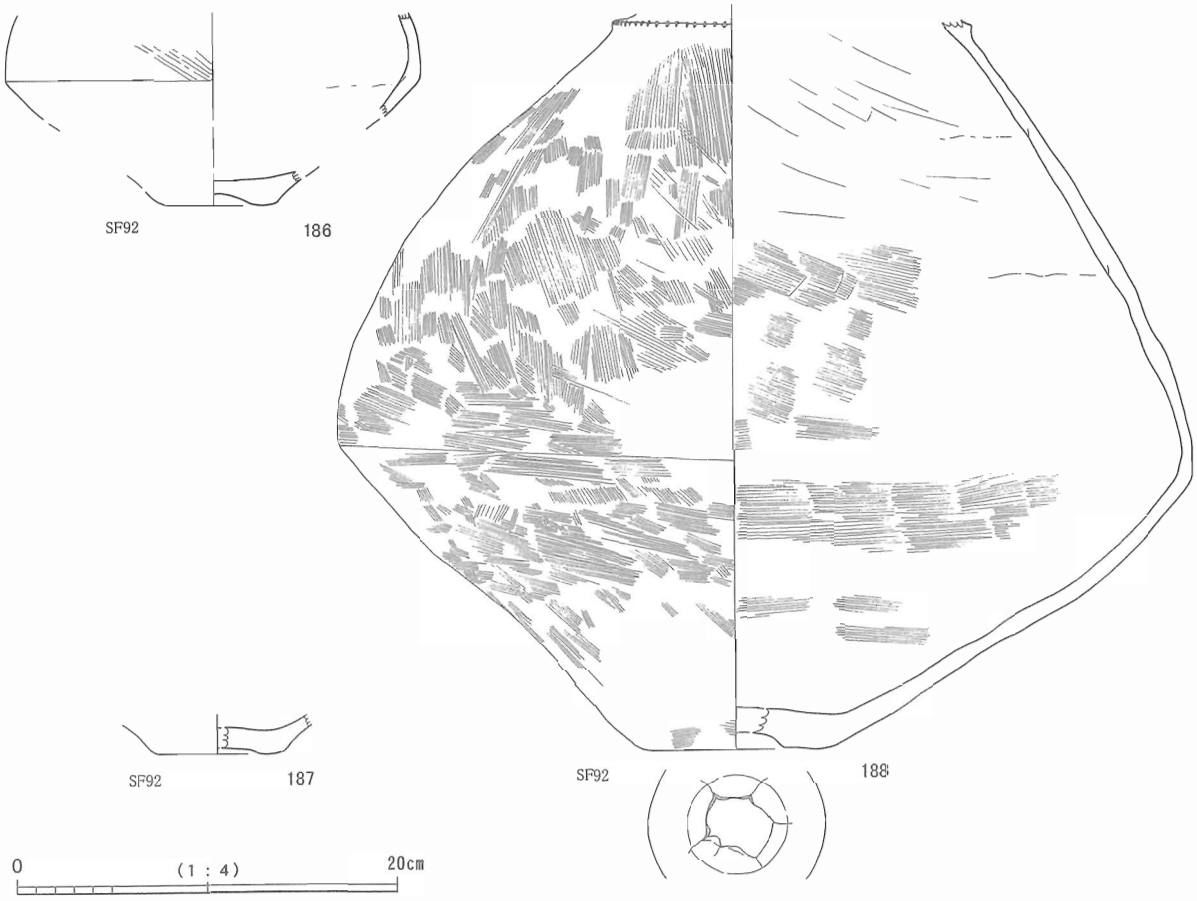
SF92土器棺（第89図）　186は、土器棺の蓋に用いられていた壷である。残存状況はよくないが、上げ底状の底部片の出土と、中位下寄りに屈曲部を伴う胴部片の出土を認めることができる。したがって、上半部を打ち欠いて用いた可能性を考慮することができる（第83図）。187は、186と混在して出土した壷の底部片である。上げ底状を呈する。

188は、土器棺の身に用いられていた大型の壷である。頸部以上を打ち欠いた状態で用いられたと考えられる（第83図）。底部は上げ底状である。胴部は球形ではなく、中位に屈曲部を伴う算盤玉に近い形状を呈する。外面調整はハケ調整で占められる。頸部下端には、刻みを伴う断面三角形の突帯が廻る。図化した底部の欠損は、土圧による下部のつぶれ（第83図）と関連したものである可能性もあるが、土器棺に用いる際に穿孔した可能性も否定できない。

これらは、器形および文様の特徴から弥生時代後期前半に位置づけることができる。

(2)玉　類

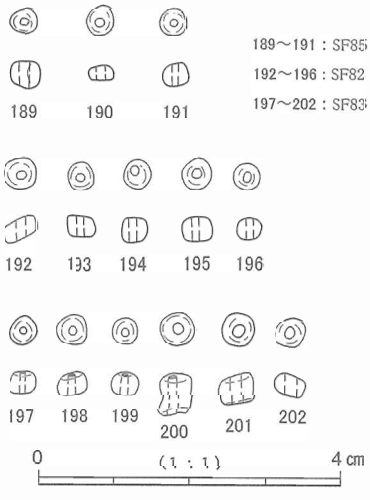
SF85出土ガラス小玉（第90図）　189～191は、SF85の土器棺内から出土したガラス小玉である。3点とも小型品であり、青色を呈している。大きさの差はさほどない。形状は全般的に丸味が強く、歪みが目立つ。土器棺に伴うことから、弥生時代後期のものであると判断できる。



第89図　SF92土器棺

SF82出土ガラス小玉（第90図）　192～196は、SF82出土のガラス小玉である。いずれも小型品である。196だけが青色で、他より若干小さい。他は透明度の高い水色を呈する。全般的に歪みや形状の個体差が目立つ。193以外は丸味が強い。詳細な出土位置は特定できなかったが、SF82・墓群に伴う副葬品か儀礼品の可能性が高く、弥生時代後期のものであると判断できる。

SF83出土ガラス小玉（第90図）　197～202は、SF83出土のガラス小玉である。いずれも小型品である。197～199は青色、200～202は透明度の高い水色を呈する。水色の3点の方が大きめである。全般的に丸味の強い形状を呈するが、歪みや形状の個体差が目立つ。詳細な出土位置は特定できなかったが、SF82もしくは墓群に伴う可能性が高く、弥生時代後期のものである可能性が高いと判断できる。なお、SF82出土のガラス小玉と特徴が類似していることから、192～202は同様に扱われたものである可能性を指摘することもできる。



第90図　3区北部出土玉類

第７節　３区中央・南部

１．Ｎ・Ｏ・Ｐ群（３区中央部）

Ｎ～Ｐ群は、３区中央の尾根上に位置する遺構群であり、丘陵筋に沿って南北に並ぶ。立地地形は、南へと緩やかに下りながらのびる丘陵で、丘陵上平坦面の幅は８ｍ程である。ただし、Ｏ群の東側には数段の崖があり、丘陵上平坦面が狭くなっている。遺構の分布状況などを考慮しても、本来はＯ群の東側に丘陵上平坦面が広がっていたことが指摘できる。

各古墳の墳丘部では、盛土の下に暗～褐色砂質土の堆積（Ⅳ層）が認められた。しかし、その上面での遺構把握は難しかったため、遺構検出はその下の黄～灰色砂層（Ⅴ層）上面で行った。その他については、Ⅳ層を認めることができず、表土下に黄～灰色砂層（Ⅴ層）が検出された。以上のように、黄～灰色砂層（Ⅴ層）の上面を遺構検出面として調査した。各群からは、次に述べるような遺構が検出されており、遺構の特徴および出土遺物から、弥生時代中後期の墓群が展開していたことがわかっている。一方、SF100・SF101・SF108・SD23は古墳群形成（古墳築造）後の遺構であり、古墳群とともに別書にて報告することとする。また、SX06・SD19・SD20・SD22・SP05～SP09については、検出が浅く遺物の出土もなかったため、時期・性格の特定が難しい遺構である。

Ｎ群は、３区の中で最も高い場所に立地する。しかし、密集するような遺構検出状況や集中した遺物の出土は認められず、長楕円～長方形の土坑墓が点在するように検出されただけであった。

Ｏ群は、周溝墓１基と対応すると考えられる（７号周溝墓）。北側のＮ群との境で東西にのびる溝（SD16）が検出されており、少なくとも区画を伴う遺構群であることは明確である。しかし、南側の溝（SD21）は残存状況が非常に悪く、東西については丘陵斜面や３号墳によって消失したためか、周溝を検出することができなかった。SD21を南側周溝として評価できるとするならば、７号周溝墓は約19m四方の大きな規模を有することになる。なお、台状部の高まりや周溝墓に伴う盛土は認められない。

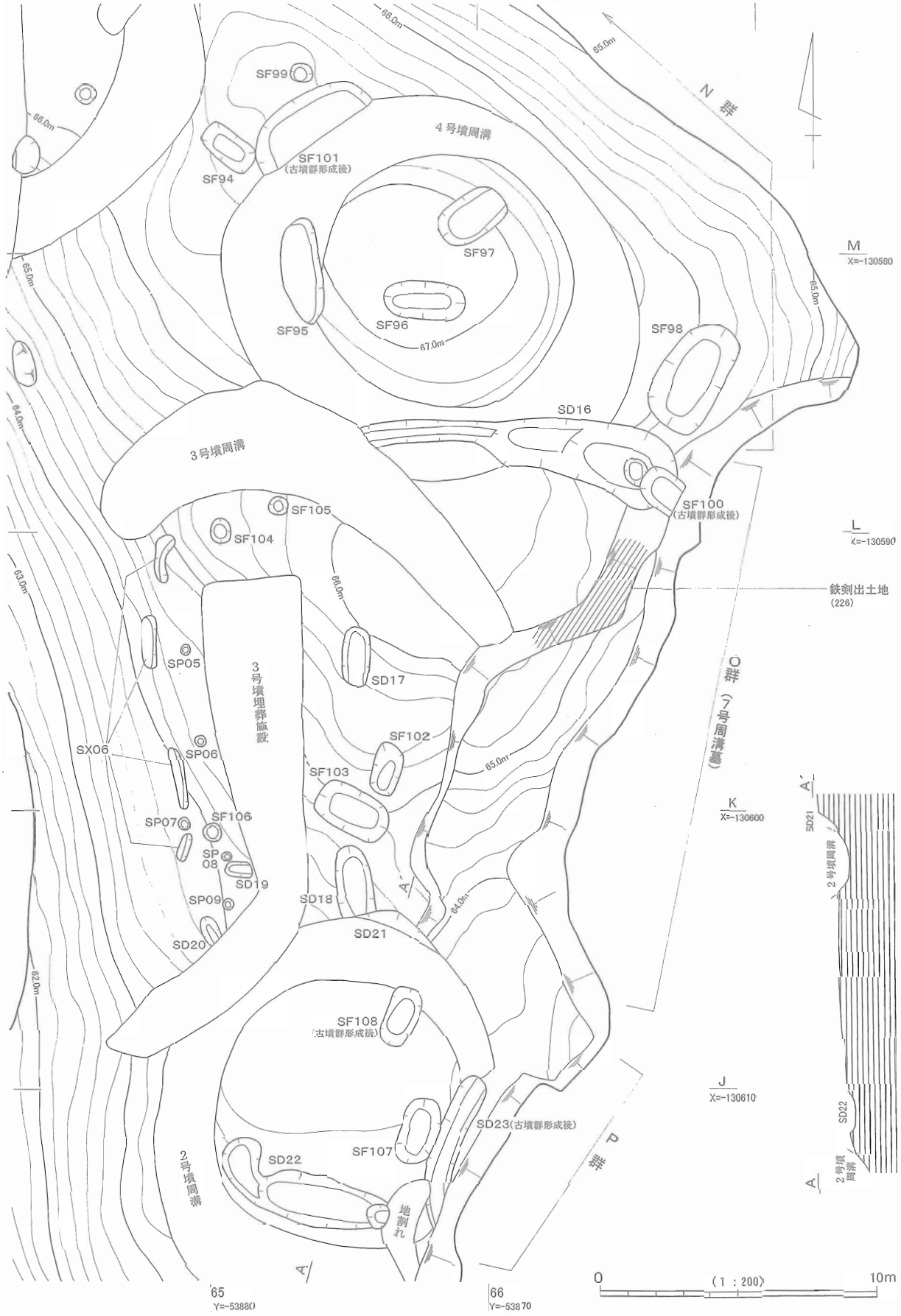
埋葬施設については、北西隅および南西隅寄りで土器棺墓３基、西部中央寄りで土坑墓群が検出されている。しかし、これら全てが周溝墓に伴うとは限らない。SD16からは弥生時代後期中葉以降の土器が出土しているが、墓群全体としては、より古い時期の土器片の出土や土器棺墓が認められている。周溝墓の時期と周溝を伴わない墓群の時期があった可能性がある。一方、７号周溝墓の中央部は崖になっており、そこから鉄剣が出土している。周溝墓に伴う埋葬施設が消失している可能性が指摘できる。

Ｐ群は、遺構密度の薄い遺構群である。SF107は、弥生時代中後期の墓域に伴う土坑墓の可能性が高い。一方、SD22は浅い溝で出土遺物もないことから、弥生時代の墓域に伴うとは評価し難い。なお、この遺構群の範囲内では、地割れの影響を顕著に認めることができた。

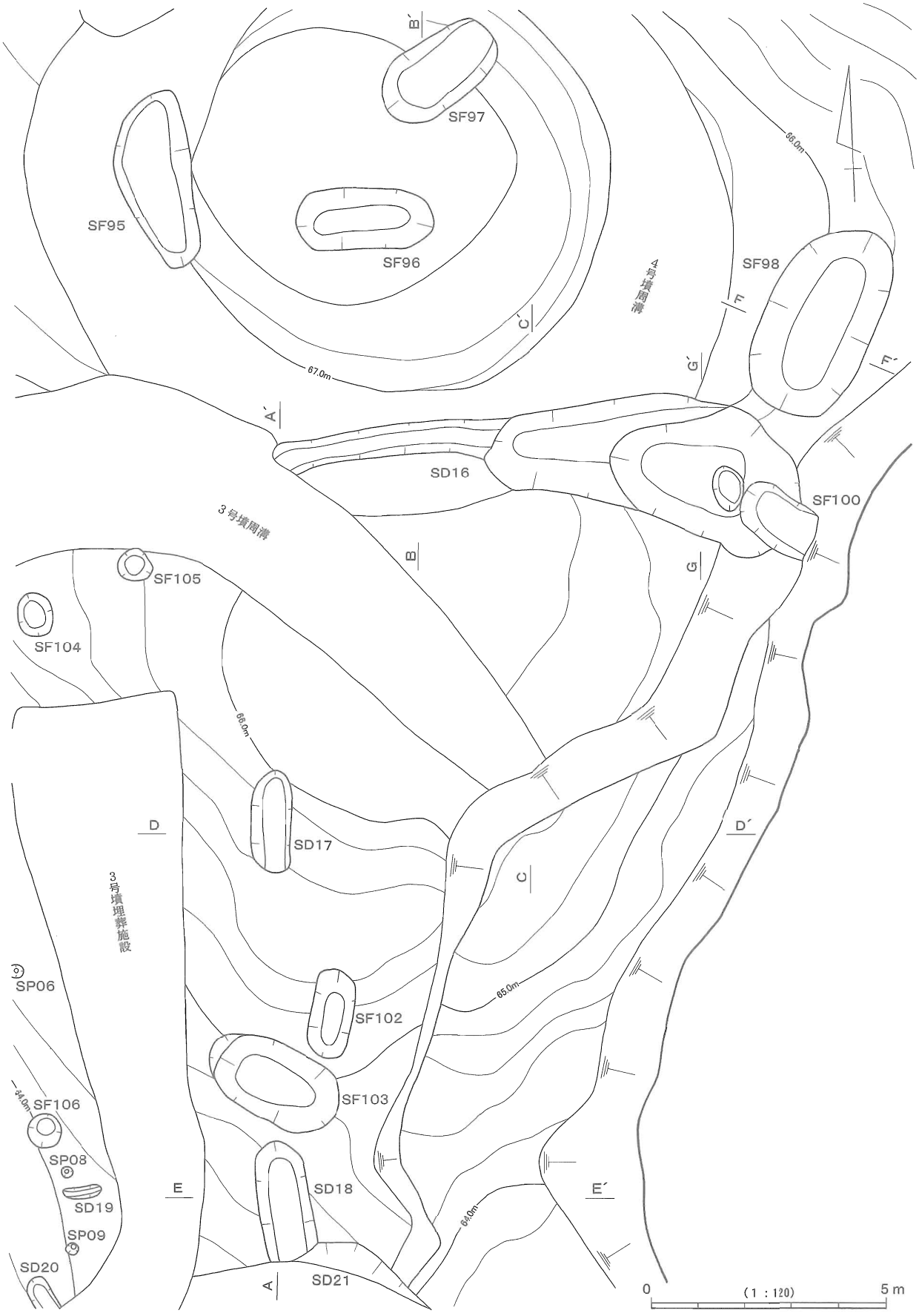
（１）溝

SD16（第91・92図）　３区中央部、Ｏ群の北縁に位置している。丘陵を横断する溝であり、東西方向にのびている。西部は３号墳の周溝によって失われており、東端部は崖によって失われている。

検出した部分の総長は約11.5ｍである。検出部分の西半においては、幅が約0.8ｍで、深さは約0.3ｍである。一方、東半になると幅が最大2.8ｍにまで広がり、深さも0.5ｍに至るようになる。西端部がやや南に曲がることから、このあたりで西側の周溝へと移行する可能性が指摘できる。また、残存部の形状から、西側の周溝が浅くなる、もしくは一旦途切れる可能性も考慮される。覆土は上層が暗褐色土、下層が暗褐色～黄褐色砂質土である。覆土中からは弥生土器片（第107図207）が出土している。

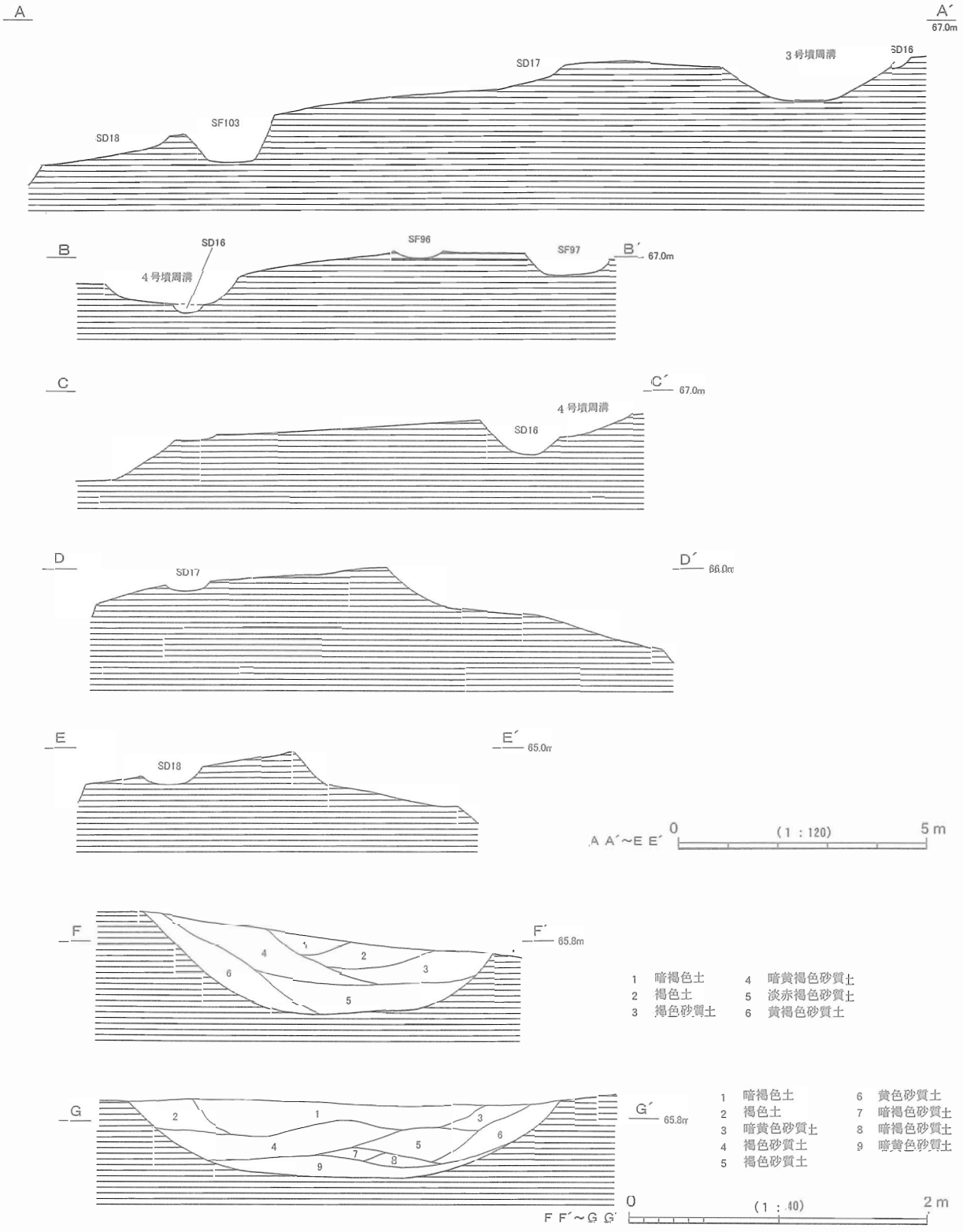

SF99
SF94
SF101
(古墳群形成後)
4号墳周溝
SF97
SF95
SF96
SF98
SD16
3号墳周溝
SF105
SF104
SF100
(古墳群形成後)
鉄剣出土地
(226)
SP05
3号墳埋葬施設
SD17
SX06
SP06
SF102
SF103
SP07
SF106
SP08
SD19
SP09
SD18
SD20
SD21
SF108
(古墳群形成後)
SD23(古墳群形成後)
SF107
SD22
2号墳周溝
地割れ
N群
O群
(7号周溝墓)
P群
M
X=-130580
L
X=-130590
K
X=-130600
J
X=-130610
65
Y=-53880
66
Y=-53870
0
(1:200)
10m

第91図　3区中央部



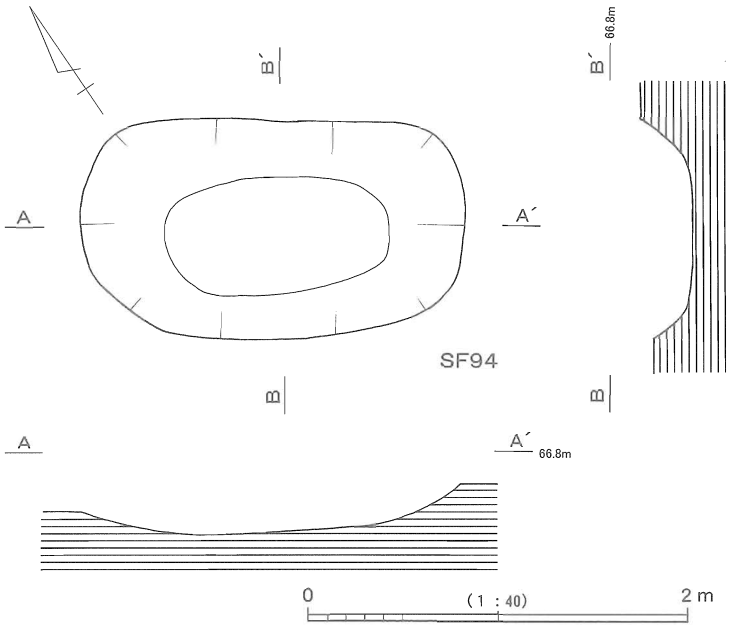
第92図　N～O群（7号周溝墓）1

遺構の特徴や出土遺物から、弥生時代後期の方形周溝墓（7号周溝墓）の周溝である可能性が高いと判断できる。なお、周辺域からの出土遺物には弥生時代後期前半に位置づけできるものも少なくないが、この遺構からは後期中葉～後半の土器が出土している。本遺構および7号周溝墓の時期としては、後者の時期を評価したい。



第93図　N～O群（7号周溝墓）2

SD21（第91図）　3区中央部（O群）の南縁に位置する。調査では2号墳の周溝と同時に検出したが、その際に周溝とは別の遺構であることが認識された。大半が古墳の周溝によって失われていたが、地形の傾斜変換部に位置する東西方向の溝であることが確認できる。出土遺物や覆土による明確な根拠を示すことはできないが、遺構の形状や位置から、7号周溝墓の南側周溝の残存である可能性が考慮される。

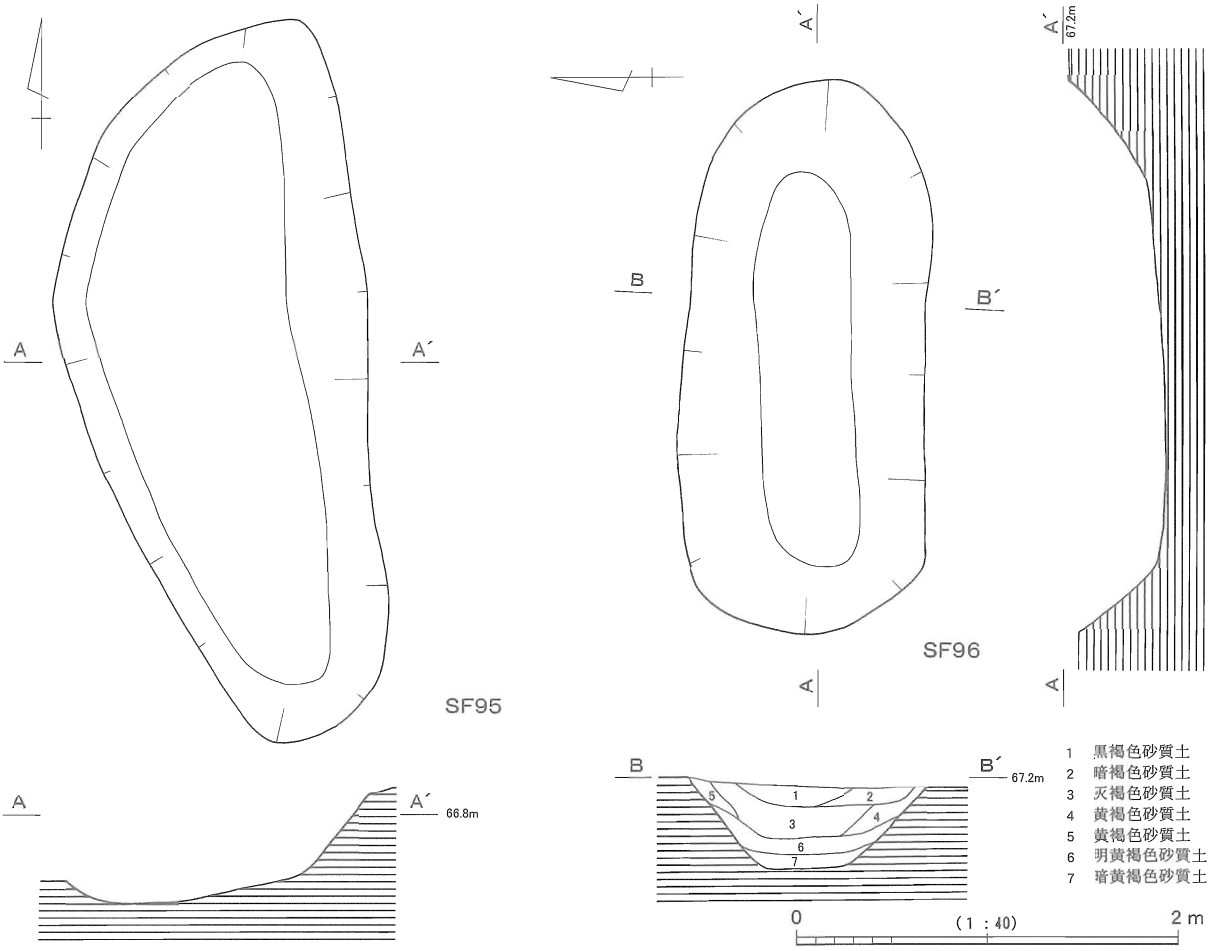


第94図　SF94

(2) 土坑墓ほか

SF94（第94図）　3区中央部（N群）の丘陵上に位置する。約0.8×2.0mの長方形で、深さ約0.3mである。主軸は丘陵筋に平行する。覆土は淡赤灰褐色砂質土で、木棺の痕跡は認められない。出土遺物もない。

遺構の特徴から弥生時代中後期の土坑墓の可能性が高いと判断できる。



第95図　SF95・SF96

SF95（第95図）　3区中央部（N群）に位置する。4号墳の周溝と重なるため、残存状況はよくない。しかし、1.7m弱×約3.8mの不整楕円形で、深さ0.6m弱であることが把握できている。覆土は暗黄褐色土であり、木棺の痕跡は認められない。覆土中から弥生土器片が出土している。

遺構の特徴から、弥生時代中後期の土坑墓の可能性が高いと判断できる。

SF96（第95図）　3区中央部（N群）に位置し、3区の中で最も高所に立地する。約1.3m×2.9m強の長楕円形で、深さは約0.5mである。主軸は丘陵筋に直行し、ほぼ東西である。覆土は、上層が黒～暗褐色砂質土、下層が黄褐色を基調とした砂質土である。木棺の痕跡は認められず、出土遺物もない。

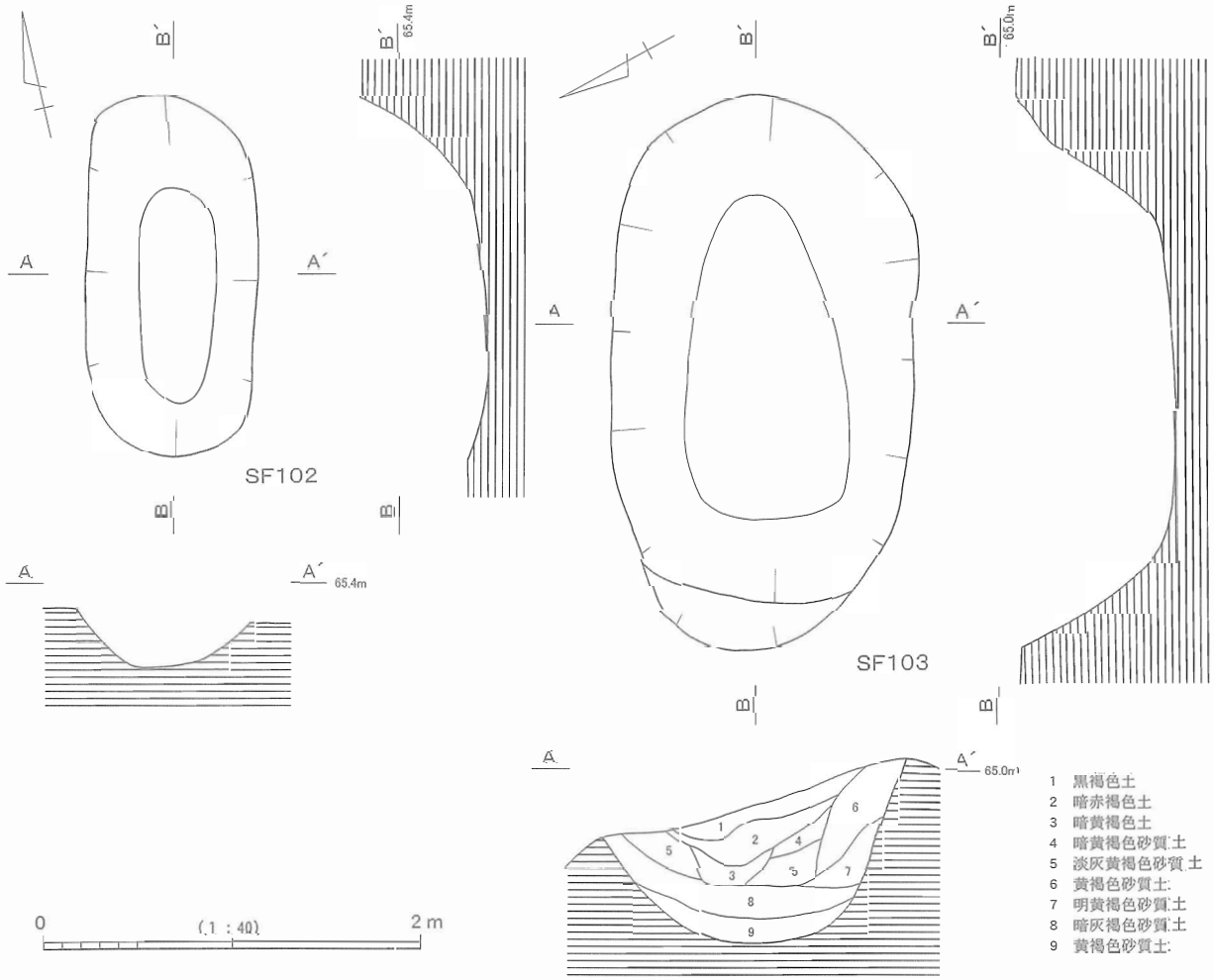
4号墳墳丘部の中央に位置するが、形状・覆土などの特徴から古墳の埋葬施設ではなく、弥生時代中後期の土坑墓である可能性が評価できる。

SF97（第92・93図）　3区中央部（N群）に位置する。1.6m弱×2.7m以上の長楕円形で、深さは約0.2m弱である。主軸は概ね丘陵筋に直行するが、SF96とは斜行する。覆土は淡赤黄褐色砂質土である。木棺の痕跡は認められず、出土遺物もない。

遺構の特徴や周辺域の状況から、弥生時代中後期の土坑墓である可能性が高いと判断できる。

SF98（第92・93図）　3区中央部（N群）の丘陵東斜面際に位置する。2.3m強×約4.3mの長楕円形で、深さは約0.7mである。主軸は丘陵筋に平行し、南北に近い。覆土は、上層が暗褐色～褐色土、下層が褐色を基調とする砂質土である。木棺の痕跡は認められず、出土遺物もない。

大型ではあるが、遺構の形状や覆土の特徴から弥生時代中後期の土坑墓である可能性が指摘できる。



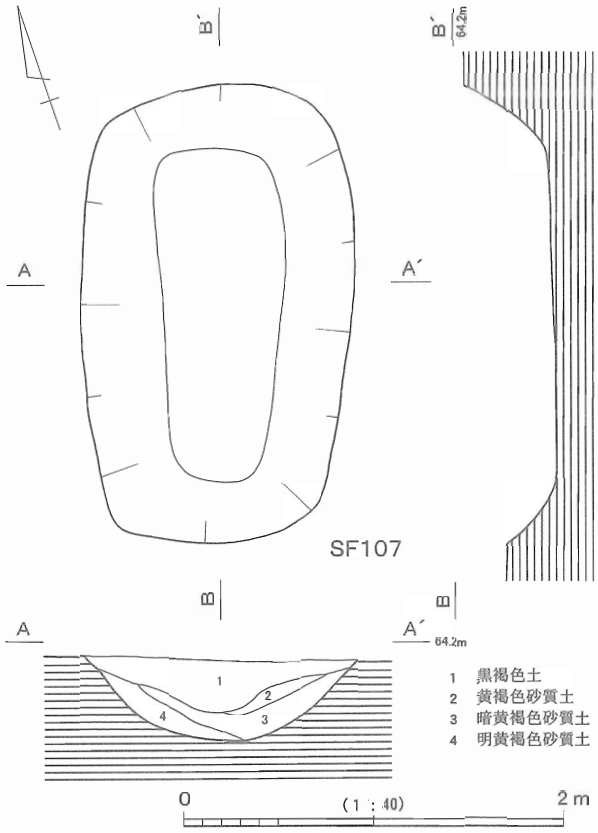
第96図　SF102・SF103

SF102・SF103（第96図）　ともに3区中央部（O群）に位置する。SF102は、0.9m強×1.4m強の長楕円形で、深さは約0.7mである。主軸は丘陵筋に平行し、南北に近い。覆土は淡赤暗褐色砂質土である。木棺の痕跡は認められず、出土遺物もない。SF103は、約1.6m×3.0mの長楕円形で、深さは約1.0mである。覆土には黒～暗黄褐色土の落ち込みと下層の黄褐色を基調とした砂質土が認められる。しかし、明確な木棺の痕跡を認めることはできなかった。出土遺物はない。

遺構の特徴や周辺の状況から、ともに弥生時代中後期の土坑墓である可能性が高いと判断できる。SF103は深く、土層断面などから木棺が用いられた可能性が指摘できる。

SD17・SD18（第92・93図）　3区中央部（O群）に位置する。いずれも幅1.0m弱であり、深さは0.3m以下と浅い。覆土は淡赤黄褐色砂質土である。出土遺物はない。

弥生時代中後期の土坑墓である可能性もある。ただし、南端が確認できないことなどから、また遺構の形状や覆土の特徴がSF102・SF103と異なることから、溝として遺構番号を付した。



第97図　SF107

SF107（第97図）　3区中央部南寄り（P群）に位置する。1.4m強×2.4m強の長楕円～長方形で、深さは0.5m弱である。主軸は丘陵筋に平行する。木棺の痕跡は認められず、出土遺物もない。

遺構の特徴から、弥生時代中後期の土坑墓である可能性が高いと判断できる。

(3) 土器棺墓

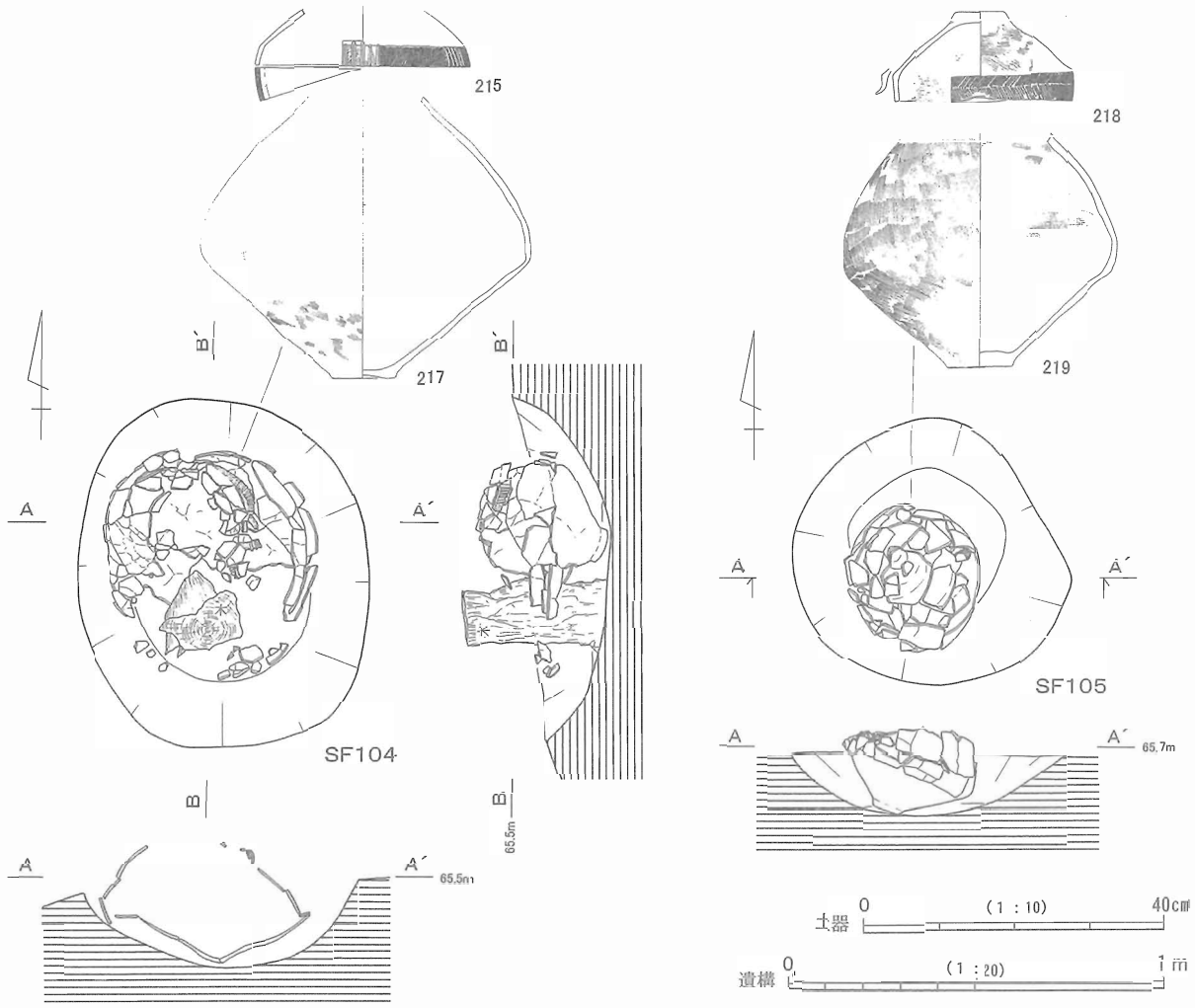
SF104（第98図）　3区中央部、7号周溝墓（O群）の北西隅に位置する。土坑は最大径0.9m強の楕円形を呈する。深さは0.2m強であるが、本来はより深かったと推測できる。この土坑の中央に土器棺が埋置されていた。土圧の影響は少なかったが、木の根によって南部が大きく破壊されていた。

土器棺の身は、胴部最大径0.4m強の壷（第109図217）であり、ほぼ正位に置かれていた。頸部以上は破片でも出土が認められず、頸部以上を欠いた状態で用いられたと考えられる。土器棺の蓋は、口径約0.3mの壷（第109図215）の口縁部である。逆位にして蓋としていた。頸部以下は破片でも出土が認められず、頸部以下を打ち欠いた状態で用いられたと考えられる。ただし、根などの影響で破壊された部分もあることから、用いられた範囲を詳細に特定することは難しい。土器棺内には砂質土が流入しており、副葬品などの出土はなかった。

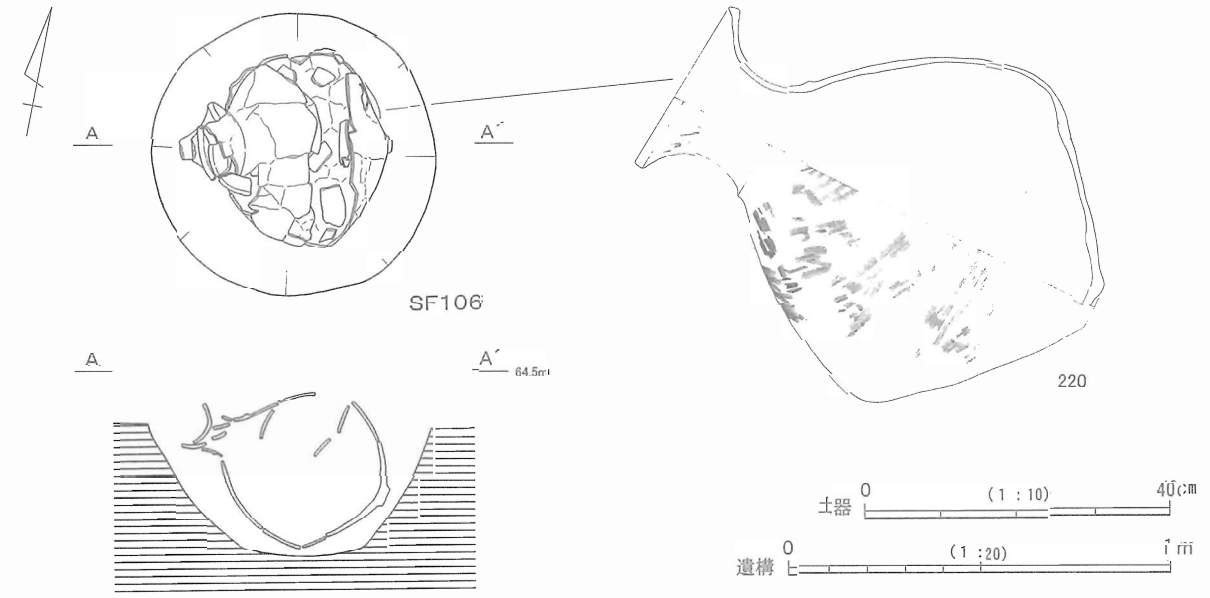
土器棺の形態などから、弥生時代後期中葉頃の土器棺墓である可能性が高いと判断できる。

SF105（第98図）　3区中央部、7号周溝墓（O群）の北西隅に位置する。土坑は最大径0.7m強の不整円形を呈する。深さは約0.2mであるが、本来はより深かったと推測できる。この土坑の南西寄りに土器棺が埋置されていた。土圧によって土器棺の上部が押しつぶされていた。

土器棺の身は、胴部最大径0.4m弱の壷（第109図219）である。正位より上部を東に傾けた状態で置か



第98図　SF104・SF105



第99図　SF106

れていた。頸部以上の出土は破片でも認められず、頸部以上を打ち欠いた状態で用いられたと考えられる。土器棺の蓋は、口径0.3m弱の片口鉢（第109図218）である。どこも打ち欠くことなく、逆位にして

蓋としていた。土器棺内には砂質土が流入していたが、そこからガラス小玉（第113図227～239）が出土した。詳細な出土位置の特定はできなかったが、中央部の中位層からの出土が比較的多かったことが確認されている。

土器棺の形態などから、弥生時代後期中葉頃の土器棺墓である可能性が高いと判断できる。

SF106（第99図）　3区中央部、7号周溝墓（O群）の南西部に位置する。土坑は径約0.8mの円形を呈する。深さは約0.4mであるが、本来はより深かったと推測できる。この土坑の中央に土器棺が埋置されていた。破壊・土圧の影響は大きくない。

土器棺の身は、胴部最大径約0.5mの壺（第110図220）である。口縁部を西に向けて、横倒しの状態で置かれていた。口縁部側が若干上を向く。胴部中位の一部に、欠損部が認められる。上部が壊された痕跡である可能性も否定できないが、比較的良好な残存状況であることから、埋葬時の打ち欠きの可能性も評価できる。他の出土遺物はなく、土器による蓋の存在も認められない。

土器棺の形態などから、弥生時代後期前半の土器棺墓である可能性が高いと判断できる。

(4) その他

SF99（第91図）　3区中央部（N群）に位置する、径約0.7mの円形土坑である。出土遺物はない。時期・性格についての判断は難しい。

SP05～SP09（第91図）　3区中央部（O群）の西寄りに位置する。等間隔で南北に並ぶ小穴4基と、その列の西側に位置する小穴1基（SP07）である。いずれも径0.2m～0.3mの円形を呈する。深さはSP09だけが0.2mに達し、他は0.1m程度と浅い。覆土は灰褐色砂質土、出土遺物はない。

3号墳の盛土除去後に発見された遺構ではあるが、弥生時代の墓域に伴う遺構としては、周辺遺跡に類例がない。むしろ、3号墳の埋葬施設（横穴式石室）の斜面下方（西側）に、埋葬施設の主軸に沿って並ぶ点が注目される。したがって、3号墳の築造に際して、もしくは築造途中の段階で設けられた小穴の残存であると推測できる。以上のように古墳に伴う可能性が評価でき、この遺構については別書（古墳群の報告）において述べることとする。

SD19・SD20（第91図）　3区中央部（O群）、3号墳の埋葬施設の西側に接する短い溝である。幅は0.5m以下であり、深さは0.1mに満たない。覆土はSP05などと同様の灰褐色砂質土である。

3号墳の盛土除去後に発見された遺構ではあるが、弥生時代の墓域に伴う遺構としては周辺遺跡に類例がない。3号墳埋葬施設（墓道）の主軸に直行しており、古墳に関連した遺構である可能性がある。築造に際して、もしくは築造途中の段階で設けられたと推測することもでき、この遺構については別書（古墳群の報告）においても述べることとする。

SX06（第91図）　3区中央部（O群）の西側斜面に位置する。南北約12mにわたって断続的にのびる、浅い段状遺構である。覆土は灰褐色砂質土である。出土遺物はない。

7号周溝墓の西側周溝の残存である可能性も、完全には否定できない。しかし、SD16・SD21が7号周溝墓の周溝であるとするならば、SX06の位置は西に寄りすぎる。一方、SP05～SP09の小穴列の西側に平行する点や覆土がSP05～SP09やSD19・SD20と類似する点から、3号墳に関連した遺構である可能性が評価できる。したがって、この遺構については別書（古墳群の報告）においても述べることとする。

SD22（第91図）　3区中央部の南寄り（P群）に位置する。丘陵筋に直行する方向にのびる。残存長約6.4m、最大幅約2.0m、深さ0.2m強である。覆土は暗赤褐色砂質土である。出土遺物はない。

周溝墓の周溝である可能性も否定はできない。しかし、周辺における遺構・遺物の検出状況は、周溝墓の存在を積極的に評価できるものではない。遺構の特徴がSD05（2区中央部）と類似していることから、古墳築造に伴う整地痕などの可能性も考慮される。

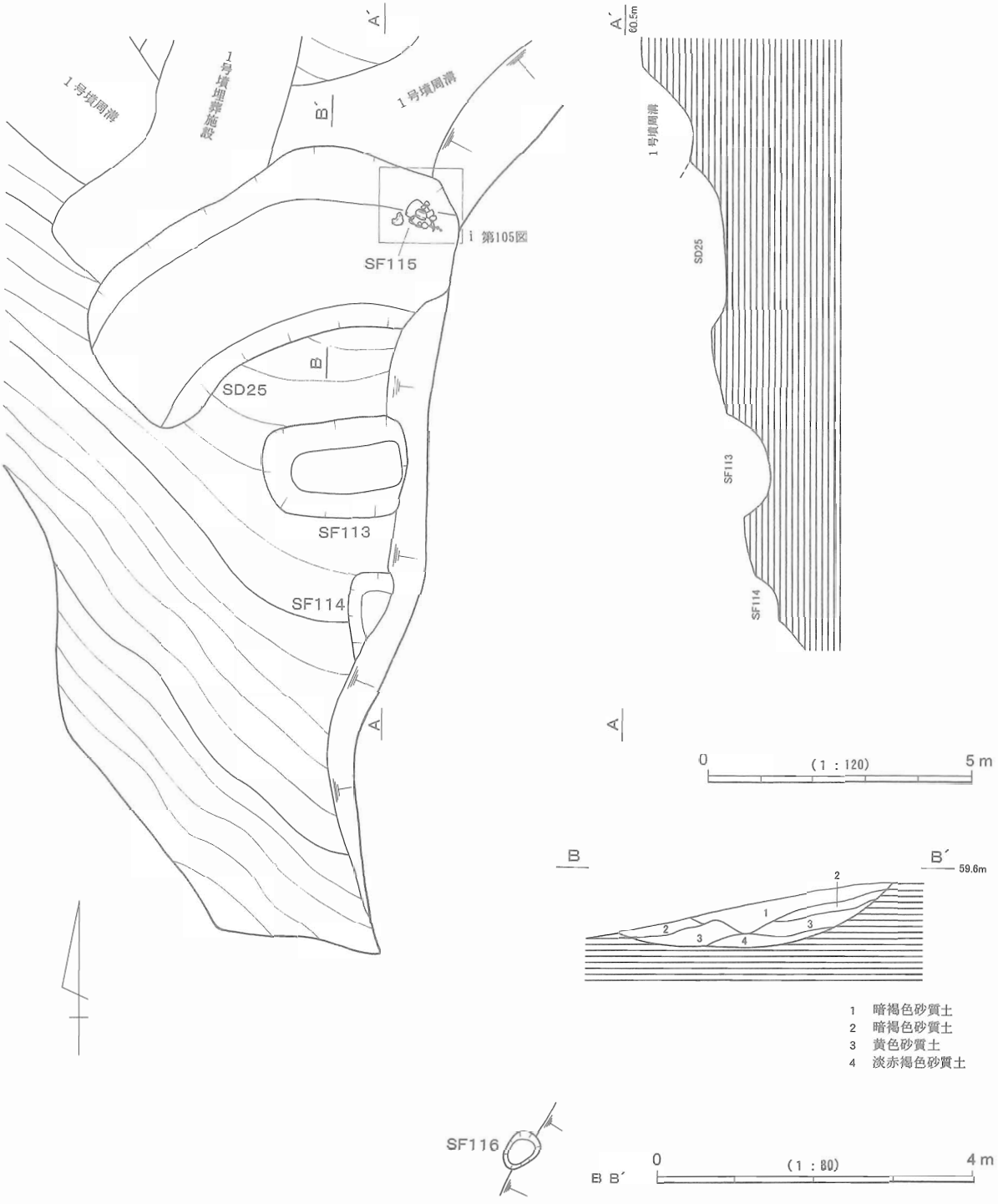
2．Q・R群（3区南部）

Q・R群は、3区南部の尾根上に位置する遺構群であり、南に下りながらのびる丘陵の先端部上に立地する。西側は丘陵斜面が残るが、東側は崖になっている。遺構の状況などをみると、3区中央部と同様に東側の地形が大きく失われていることがわかる。したがって、本来は丘陵上平坦面がより東側に広がっていたと復元できる。

第100図　3区南部

1号墳の墳丘部では、盛土の下に淡黒褐色土の堆積（Ⅳ層）が認められた。しかし、その上面での遺構把握は難しかったため、遺構検出はその下の黄～灰色砂層（Ⅴ層）上面で行った。その他については、Ⅳ層を認めることができず、表土下に黄～灰色砂層（Ⅴ層）が検出された。以上のように、黄～灰色砂層（Ⅴ層）上面を遺構検出面として調査した。各群からは、次に述べるような遺構が検出されており、遺構の特徴および出土遺物から、弥生時代中後期の墓群が展開していたことがわかる。

Q群では、数基の土坑墓が検出されている。しかし、副葬品の出土はなく、周辺域からの土器の出土も少なかった。



第101図　R群（8号周溝墓）

一方、R群は周溝墓1基と対応する可能性が高い（8号周溝墓）。ただし、北側周溝として検出できたSD25は、幅広の溝で直線的ではない。したがって、方形周溝墓であるとはいえない。周溝墓の中央部では2基の土坑墓、北縁部および南縁部では土器棺墓が検出されている。ただし、北縁部の土器棺墓（SF115）は溝内に崩落した状況であった。遺構の検出状況から、8号周溝墓の規模は10m前後であったと復元することができる。

(1) 溝

SD24（第100図）　3区南部（Q群）の北縁に位置する。東西にのびる溝であるが、1号墳の周溝などによって大半が失われている。幅は約1.2m、深さは約0.4mであり、検出範囲における幅・深さの変動は少ない。覆土は淡赤暗褐色砂質土である。出土遺物はない。

墓群を区画する溝である可能性もあるが、残存状況が非常に悪い。また、1号墳の影響もあってか、全体的にQ群の遺構・遺物の検出状況が良くない。Q群の様相が把握し難く、SD24についても積極的な評価ができない。

SD25（第101図）　3区南部、8号周溝墓（R群）の北側に位置する。北に凸の曲線を描きながら東西にのびる溝である。東西端部が丘陵斜面や崖によって失われており、本来はより長くのびていたと推測できる。幅は2.0m程である。深さは1号墳の周溝の底から約0.4m、本来は0.8m程度であったと復元できる。覆土は、上層が暗褐色砂質土、下層が黄褐色・淡赤褐色砂質土である。覆土中から弥生土器片が出土している。なお、SD25内に土器棺（SF115）が出土しているが、出土状況から、SD25内に転落したものである可能性が高いと判断できる。詳細はSF115の報告で述べる。

遺構の特徴や出土遺物から、弥生時代後期前半～中葉の8号周溝墓の周溝である可能性が高い。なお、8号周溝墓については、周溝の残存が悪く詳細な判断はできないが、10m前後の規模を有する不整形もしくは円形の周溝墓であると復元できる。

(2) 土坑墓

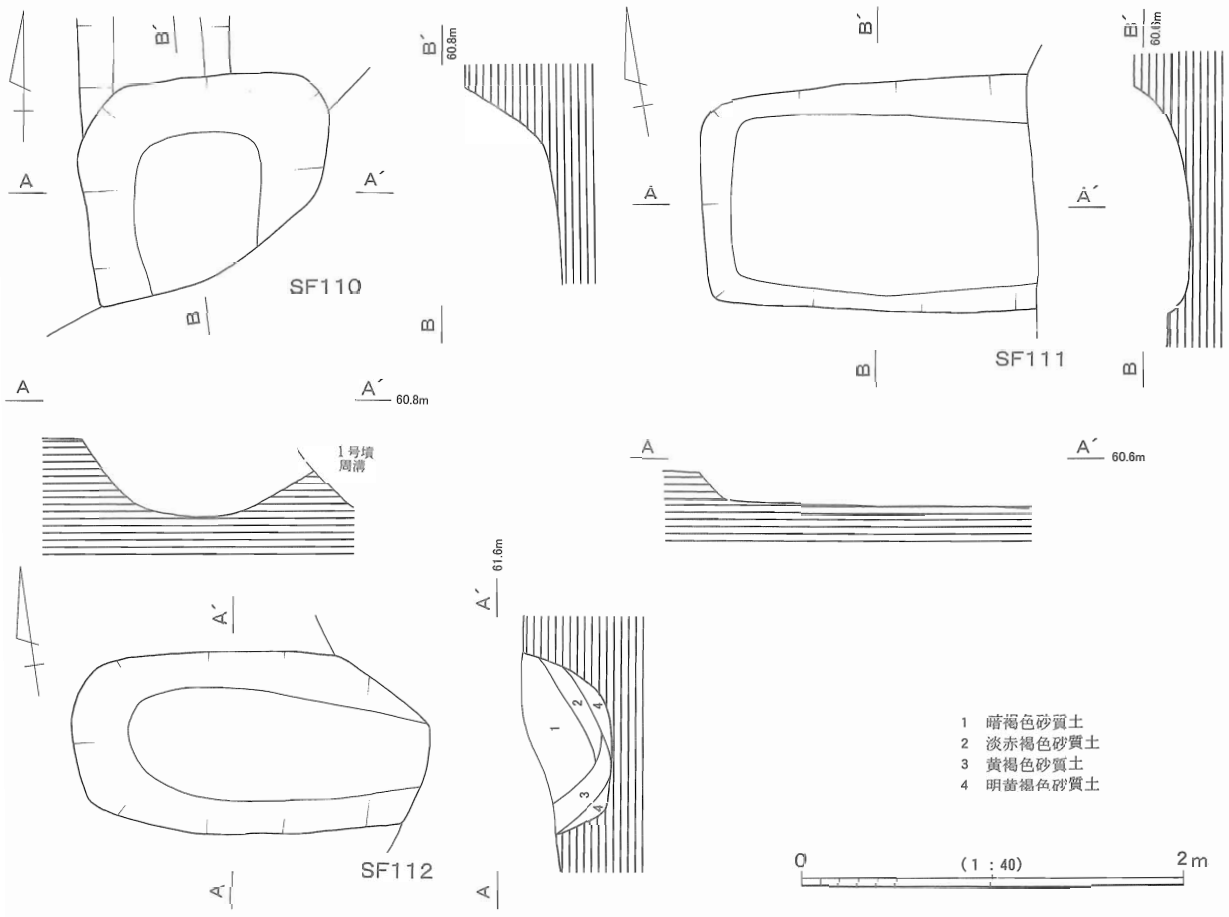
SF109・SF110（第100・102図）　3区南部（Q群）に位置する。ともに、主軸を丘陵筋に平行（南北）させた土坑であり、南部が失われている。SF109は約0.9m×1.4m以上の長方形で深さ約0.3m、SF110は約1.3m×1.1m以上の長方形で深さ約0.5mである。覆土は、SF109が淡赤黄褐色砂質土、SF110が淡赤暗黄褐色砂質土である。土層によってSF110の方が新しいことが確認できている。木棺の痕跡は認められず、出土遺物もない。

1号墳の盛土下で発見された遺構であり、遺構の特徴や周辺域の出土遺物などから、弥生時代中後期の土坑墓である可能性が高いと判断できる。

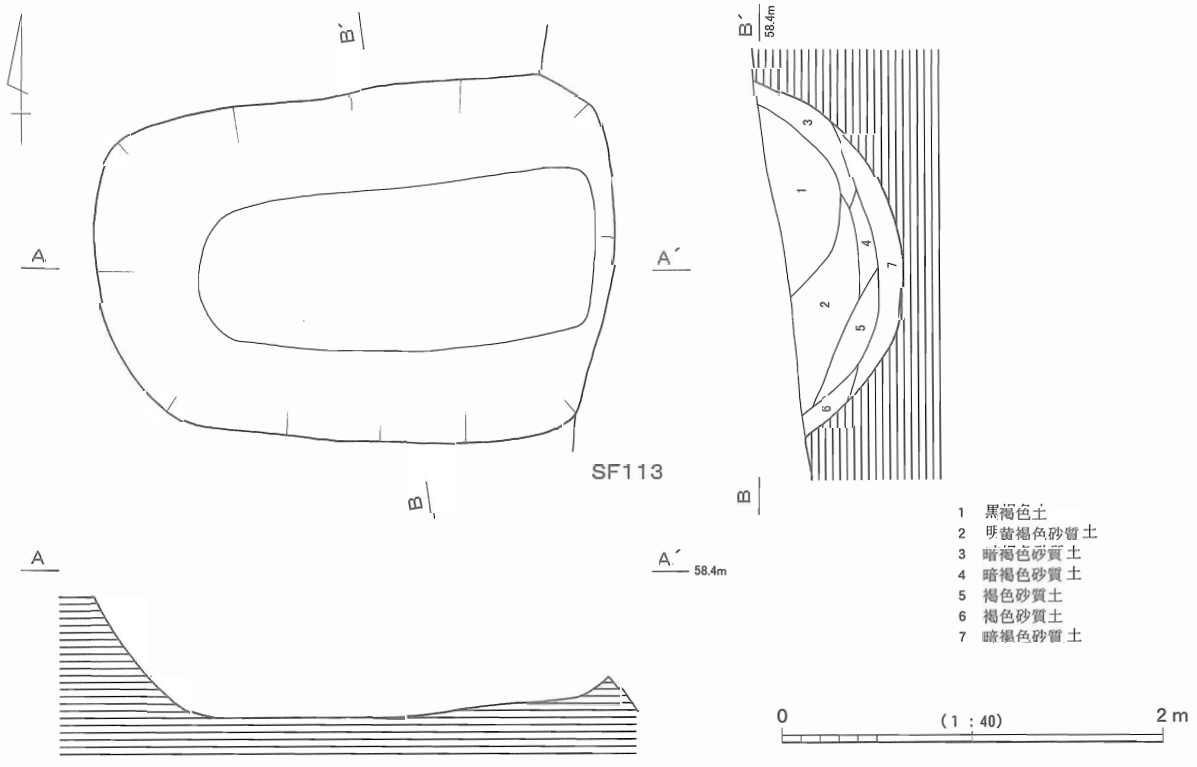
SF111・SF112（第102図）　3号墳南部（Q群）に位置する。ともに主軸を丘陵筋に直行（東西）させた土坑であり、東部が失われている。SF111は1.2m強×1.8m以上の長方形で深さ約0.3m、SF112は約1.0m×1.9m以上の長楕円形で深さ約0.3mである。覆土は、SF111が淡赤黄褐色砂質土、SF112が暗褐色～黄褐色砂質土である。木棺の痕跡は認められず、出土遺物もない。

1号墳の盛土下で発見された遺構であり、遺構の特徴や周辺域の出土遺物などから、弥生時代中後期の土坑墓である可能性が高いと判断できる。

SF113（第103図）　3号墳南端部（R群）に位置する。東端が失われているが、1.9m強×3.0m程の長方形の土坑に復元することができる。深さは0.6m強である。主軸は丘陵筋に直行し、ほぼ東西である。覆土は黒～暗褐色砂質土で大半が占められる。木棺の痕跡は認められていない。覆土中から弥生土器片が出土している。



第102図　SF110～SF112

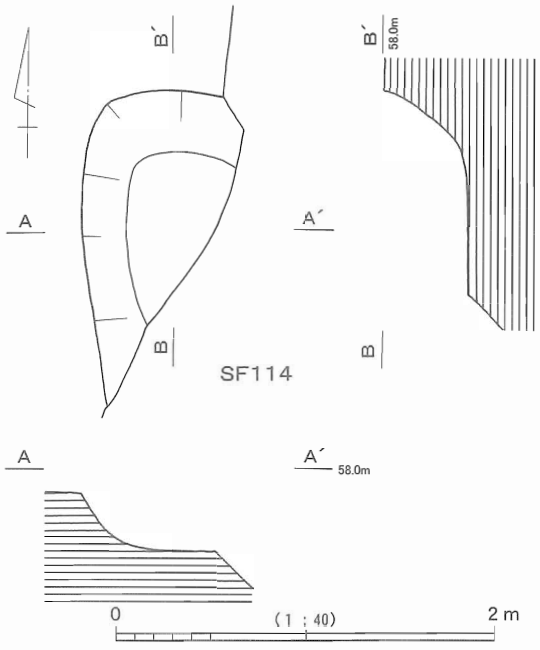


第103図　SF113

弥生時代後期の8号周溝墓に伴う土坑墓である可能性が高いと判断できる。

SF114（第104図）　3号墳南端部（R群）に位置する。南東部が大きく失われており、本来の規模はわからない。長方形の土坑であり、主軸は丘陵筋に平行（南北）させている可能性が高い。深さは0.4m強である。覆土は暗褐色砂質土である。木棺の痕跡は認められず、出土遺物もない。

弥生時代後期の8号周溝墓に伴う土坑墓である可能性が高いと判断できる。



第104図　SF114

(3) 土器棺墓

SF115（第105図）　3区南端部（R群）北縁のSD25の覆土中で、胴部最大径約0.5mの壷（第111図222）と胴部最大径約0.3mの甕（第111図221）がまとまって出土した。ともに大型品であり、重なるように検出されたことから、これらは土器棺であり、1号墳の築造や東側の崖などの影響によって崩れたものである可能性が指摘できる。

土器棺であるならば、大型の壷が身であったと考えられる。口縁部が接合面に沿って打ち欠かれていたほか、胴部の一部も失われていた。後世の影響である可能性も否定できないが、打ち欠いた状態で用いられた可能性もある。甕については、蓋としていたと考えられるが、どのように用いたのかは判断し難い。壷と合せ口にした可能性のほか、破片の状態で壷の口縁部もしくは胴部の欠損部に置いて蓋とした可能性も考えることができる。

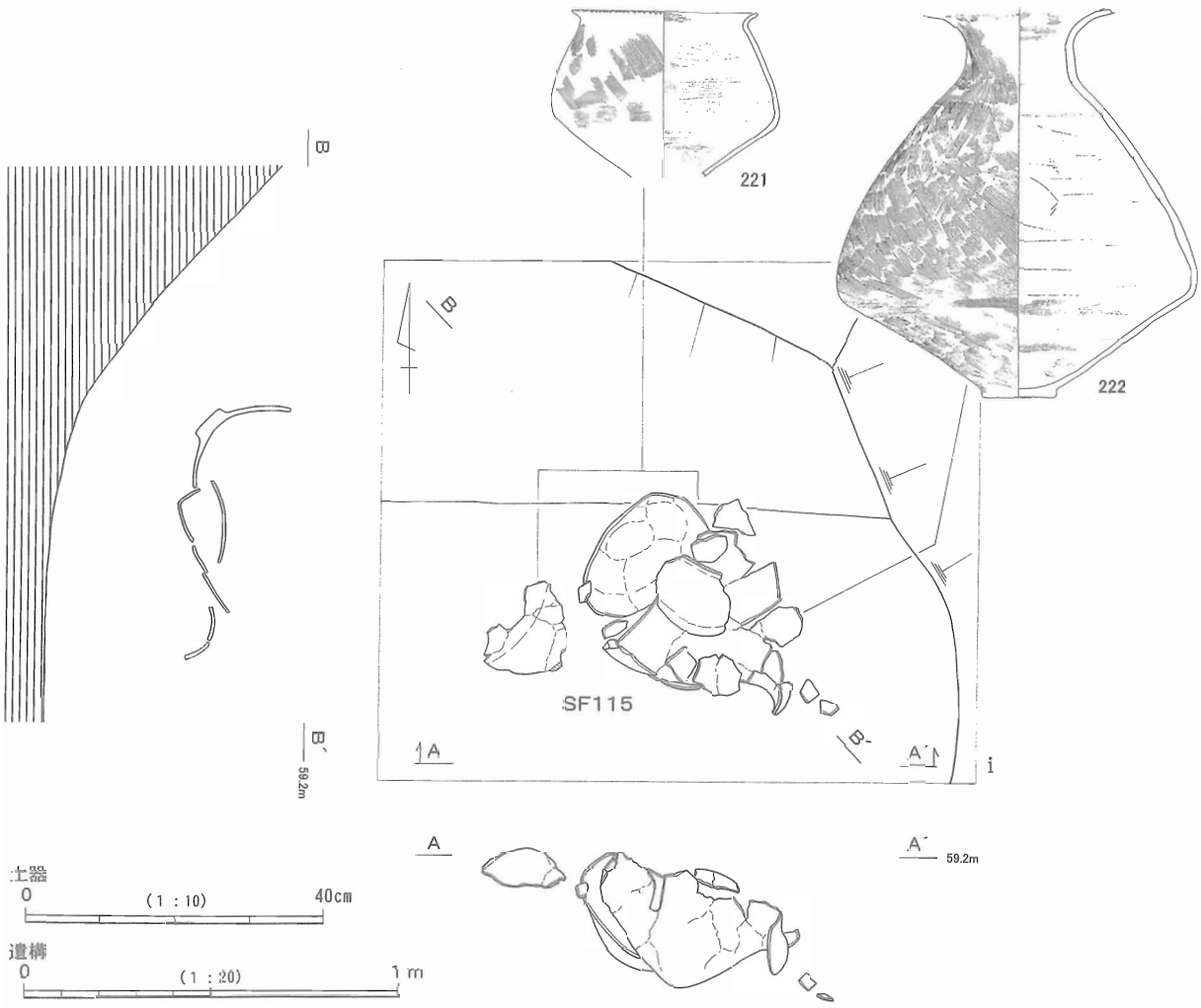
遺構の性格については確実な根拠に欠けるが、弥生時代後期前半～中葉の土器棺墓である可能性を評価したい。

SF116（第106図）　3区南端部（R群）、丘陵東側の崖の中段で発見された土器棺墓である。土坑は最大径0.8m弱の楕円形を呈する。深さは0.3m強であるが、本来はより深かったと推測できる。この土坑の北東寄りに土器棺が埋置されていた。土圧によって、土器棺の上部が押しつぶされていた。

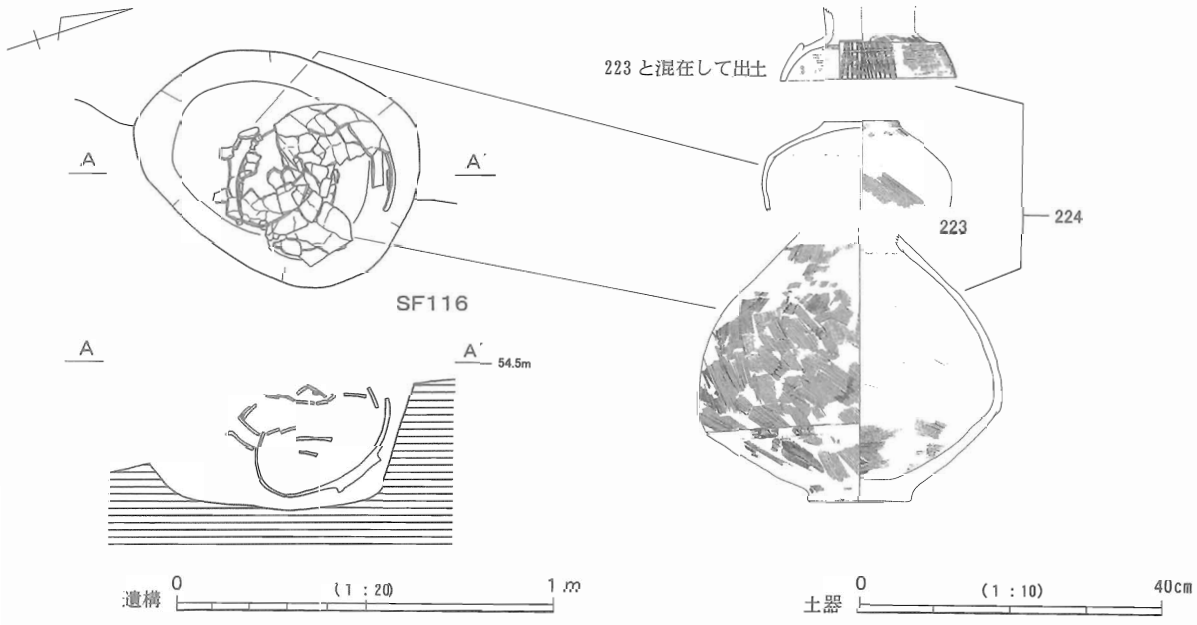
土器棺の身は、胴部最大径0.4mの壷（第112図224）である。口縁部側を南西に傾けた状態で置かれていた。頸部～口縁部の出土も認められるが、後述のとおり胴部とは離れた状態であった。したがって、頸部以上を打ち欠いた状態で土器棺の身としたと考えられる。土器棺の蓋は、胴部最大径0.3m弱の壷（第112図223）の下半部である。出土状況から逆位で用いられたと復元できる。

土器棺の上部はつぶれた状態であったが、決して乱された状況ではなかった。そして、最も上にあった破片は、223の底部片と224の頸部片である。さらに、その下からは224の胴部片と混在して224の口縁部片が出土している。一方、土器の接合・復元作業においては、別々に復元できた224の胴部と口縁～頸部について、胎土・色調から同一個体であると判断できるものの、実際に接合することはできなかった。以上の状況から、224の口縁～頸部については、土器棺の身となる胴部と切り離され、口縁部を下にして蓋（223）の上に置かれた可能性が指摘できる。

土器棺の形態などから、弥生時代後期中葉頃の土器棺墓である可能性が高いと判断できる。



第105図　SF115



第106図　SF116

３． ３区中央・南部の出土遺物

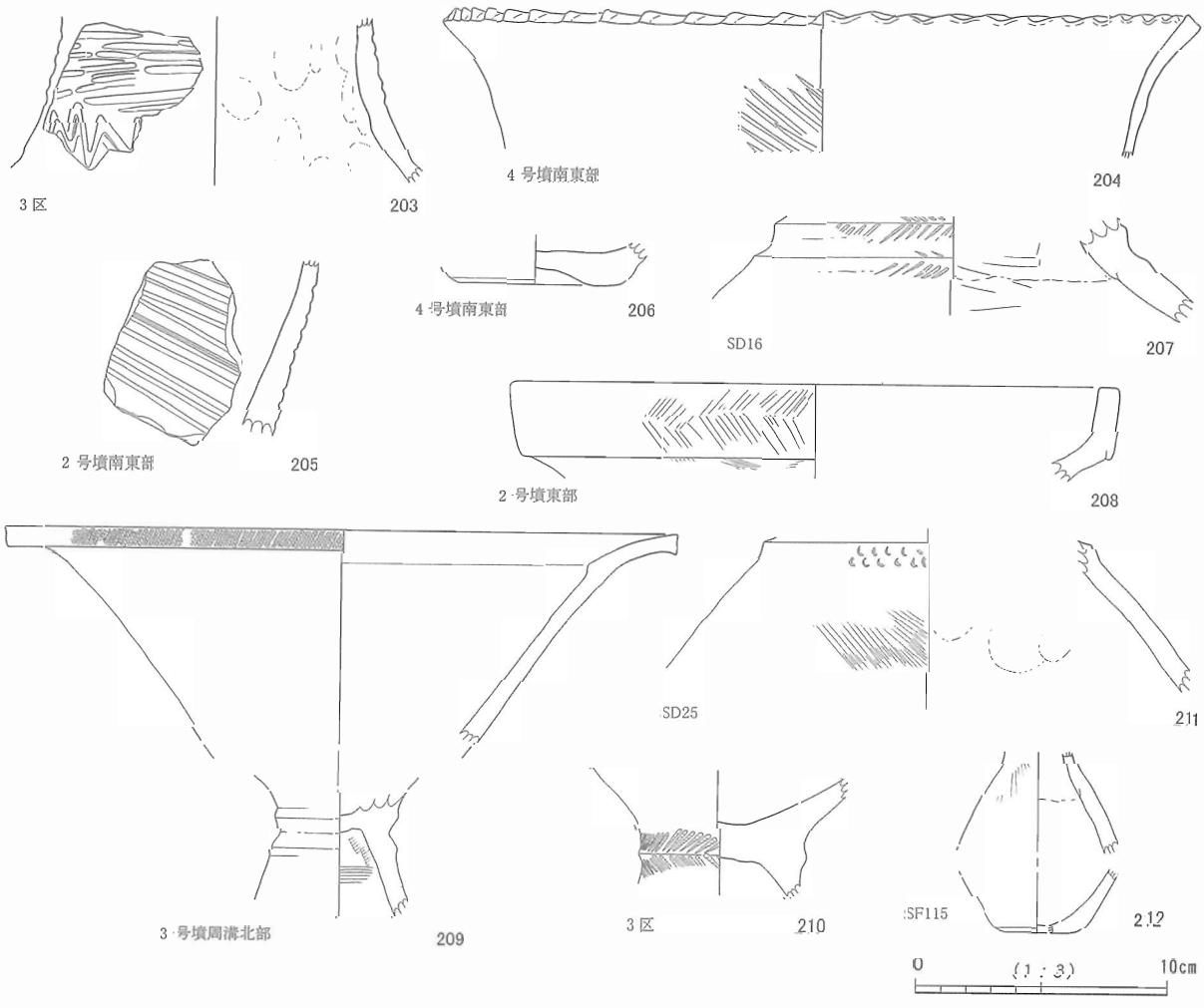
(１) 弥生土器

Ｎ～Ｒ群出土土器（第107～109図）　203は壷の頸～肩部であり、幅広の沈線による横線文と波状文が施されている。204・205は条痕文系の甕であり、204の口縁端部には押圧が廻る。

206～208および211・212は、壷である。206は上げ底状の底部、207は４段の羽状刺突文が廻る頸～肩部、208はハケ状工具による羽状文が施された受け口状の口縁部である。211の頸部下端には、２段の竹管文が施された断面三角形の突帯が廻る。

213・214は、大型の壷である。古墳の周溝や盛土から出土したものであり、本来は土器棺などに用いられていた可能性もある。213の肩部は有段になっており、そこに４段の羽状刺突文が廻る。一方、214の頸部下端には断面三角形の突帯が廻る。また、214の口縁部端面には櫛描波状文が施されている。外面調整はハケ調整が大半を占めるが、213の口縁部内面や214の頸部外面にはミガキ調整が観察できる。216も大型の壷であり、肩部以上が失われていることから土器棺に用いられた可能性が指摘できる。

209・210は、高坏である。209の口縁部は単純口縁で、端面に縄文が施されている。口縁部内面には明瞭な段が設けられ、脚部との接合部には２条の三角突帯が廻っている。一方、210の接合部には、２段の羽状刺突文が廻る。



第107図　Ｎ～Ｒ群出土土器１

本遺跡群出土土器の大半は弥生時代中期後葉以降のものであるが、203～205は、より古く位置づけることができる。それ以外については、後期前半頃の206・208・209・212・214と、後期後半頃の207・210とに大別することができる。

SF104土器棺（第109図）　215は、土器棺の蓋として用いられていた壷の口縁部である。頸部以下を打ち欠いた状態で用いられた可能性が高いと判断できる（第98図）。浅鉢に近い形状を呈する受口状口縁であり、口縁部の端面と外面には縄文が施されている。さらに、4本単位の棒状浮文が口縁部外面の6方向に付けられている。

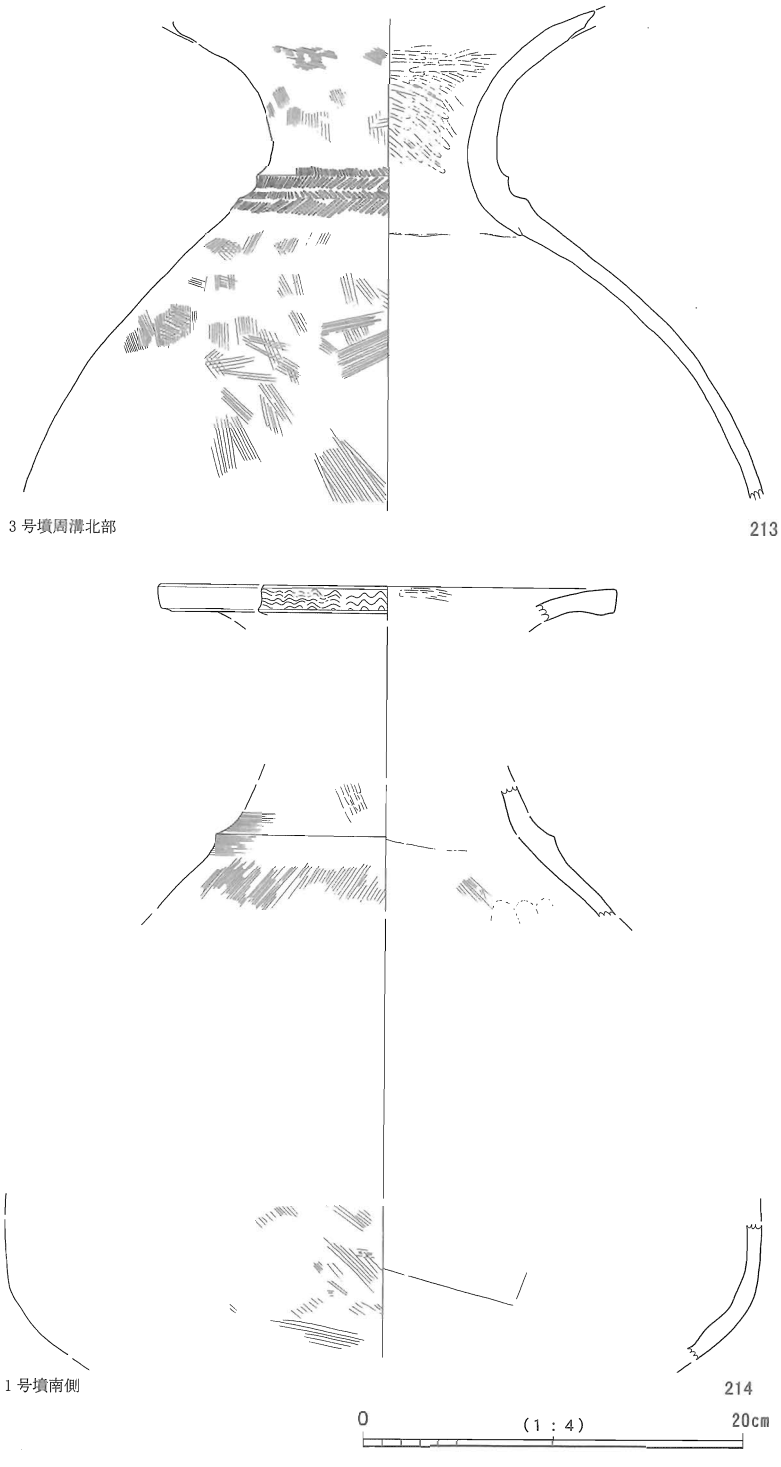
217は、土器棺の身として用いられていた壷である。頸部以上を打ち欠いた状態で用いられていた（第98図）。底部は若干の上げ底状を呈する。胴部は算盤玉に近い形状を呈するが、最大径付近に明確な稜線は伴わない。外面調整はハケ調整で占められている。施文は認められていない。

これらは、器形および文様の特徴から弥生時代後期前半～中葉に位置づけることができる。

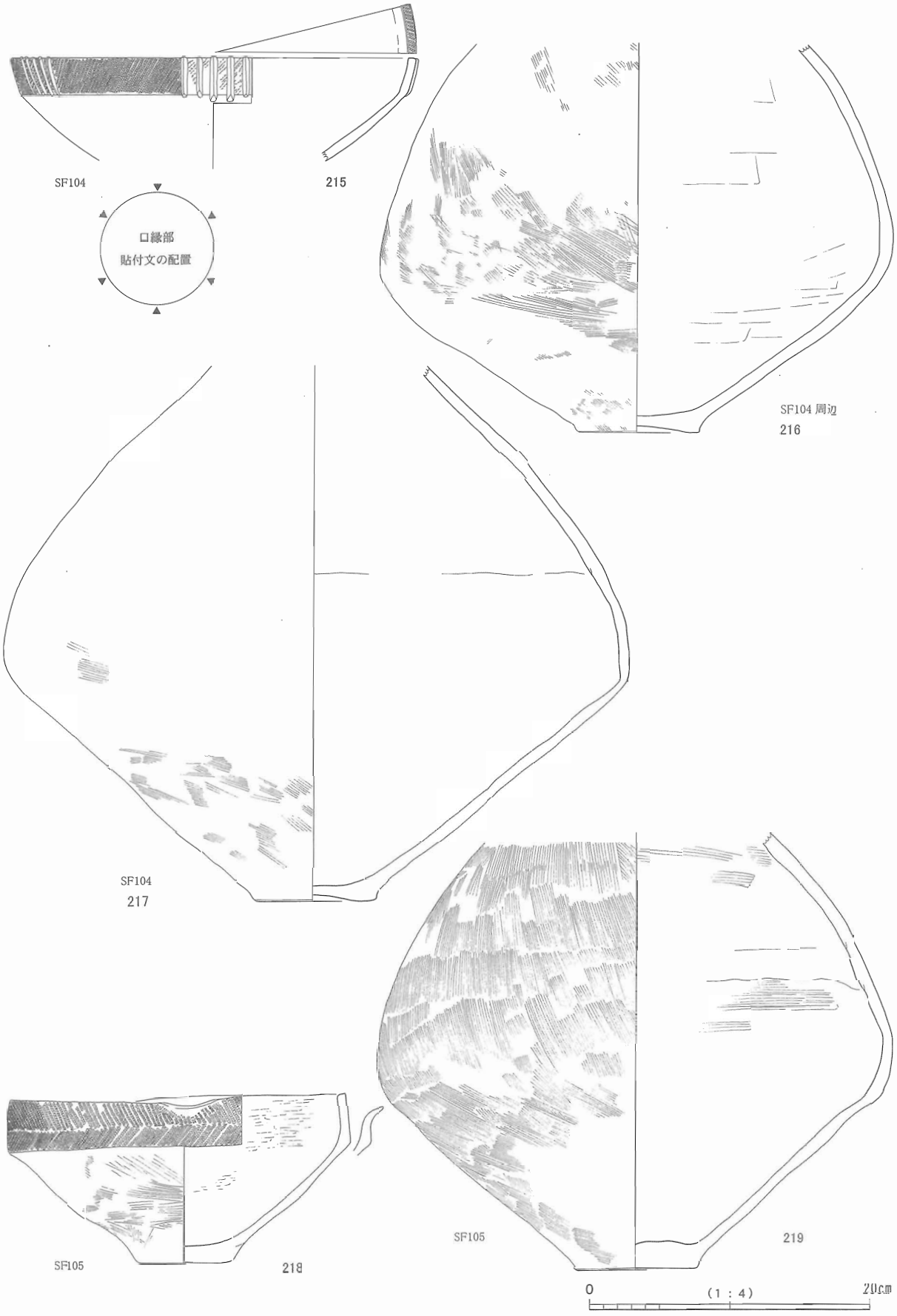
SF105土器棺（第109図）
218は、土器棺の蓋として用いられていた片口鉢である（第98図）。底部は平底である。体部は内湾することなく開きながら立ち上がり、直立する口縁部に至る。口縁部外面には、2段の羽状に縄文が施されている。

219は、土器棺の身として用いられていた壷である。肩部以上を打ち欠いた状態で用いられていた（第98図）。底部は平底である。胴部は算盤玉形に近いが、上半は内湾しながら立ち上がる。また、最大径付近に明確な稜線は伴わない。外面はハケ調整で占められている。

これらは、器形および文様の特徴から弥生時代後期中葉に位置づけることができる。



第108図　N～R群出土土器2



第109図　SF104・SF105土器棺

SF106土器棺（第110図）　220は、土器棺に用いられていた壷である。胴部の中位下寄りに欠損部があるが、先述のとおり、埋葬時の打ち欠きである可能性も指摘できる（第99図）。底部は小さく上げ底状を呈する。胴部は算盤玉に近いが、縦長であり、最大径付近に明瞭な稜線は伴わない。肩部には断面三角形の突帯が廻る。頸部から徐々に外反して、短く直立する受口状の口縁部に至る。

器形および文様の特徴から、弥生時代後期前半に位置づけることができる。

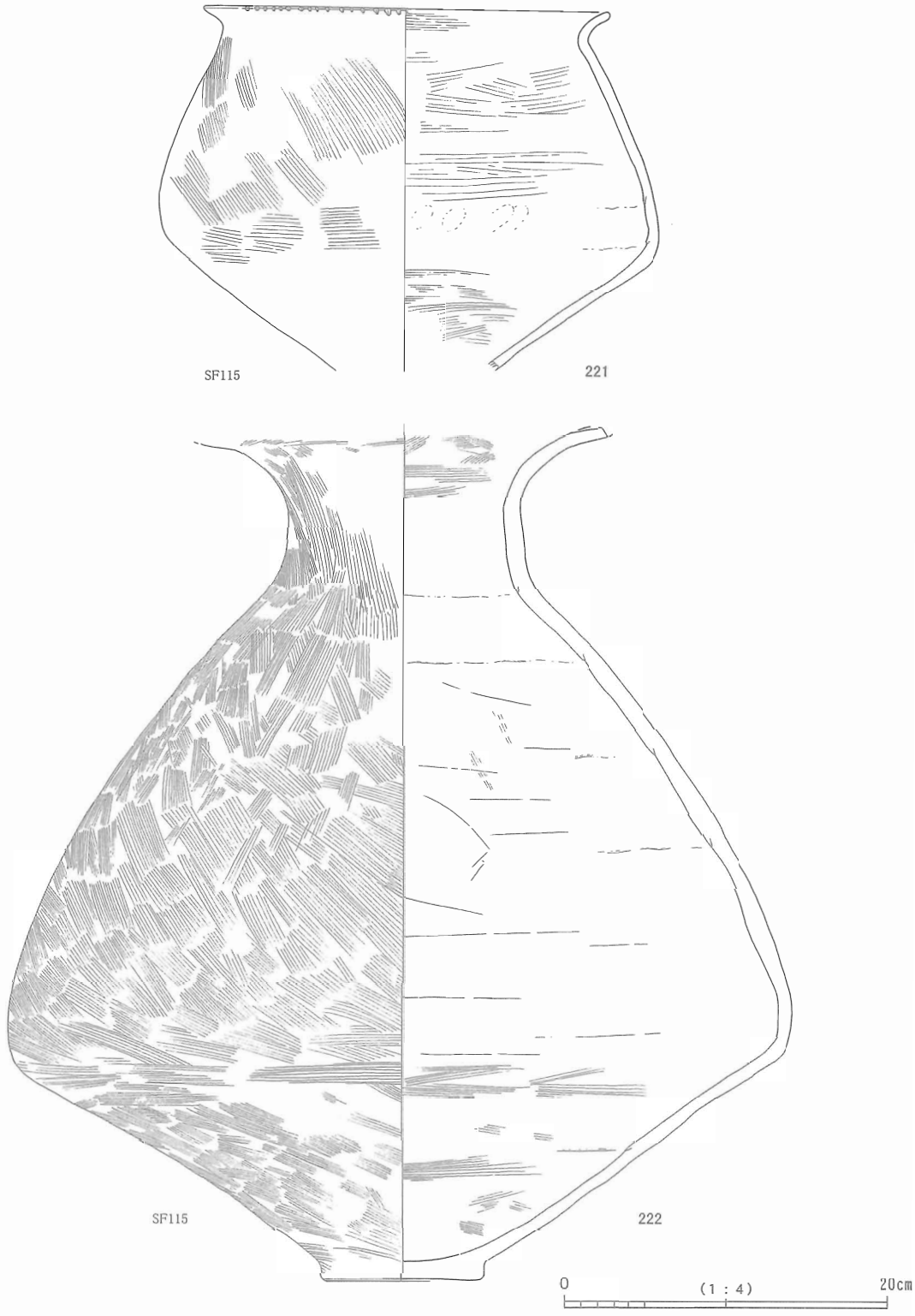
SF115土器棺（第111図）　221・222は、SD25の上層で重なって出土している（第105図）。出土状況および遺物の特徴から、これらは土器棺であった可能性が高いと判断し、SF115としている。

221は、台部（もしくは底部）を欠いた甕である。胴部は全体的に内湾度が弱く、大きく開きながら立ち上がる下半部と、弱く内傾しながら立ち上がる上半部に分かれる。したがって、中位で大きく屈曲することになる。ただし、稜線は伴わない。口縁部は、胴部から大きく屈曲して外反する。口縁端部には刻みが廻る。調整はハケ調整で占められる。

第110図　SF106土器棺

222は、大型の壷である。底部は平底である。胴部は、中位下寄りで屈曲する形状を呈し、大きく開きながら立ち上がる下半部と、内湾しながら立ち上がる上半部とに分かれる。屈曲部に稜線は伴わない。頸部は直立し、口縁部は大きく開く。口縁端部は欠損している。外面調整はハケ調整で占められる。胴部屈曲部だけヨコ方向のハケ調整である。文様は認められない。

これらは、器形および文様の特徴から弥生時代後期前半～中葉に位置づけることができる。

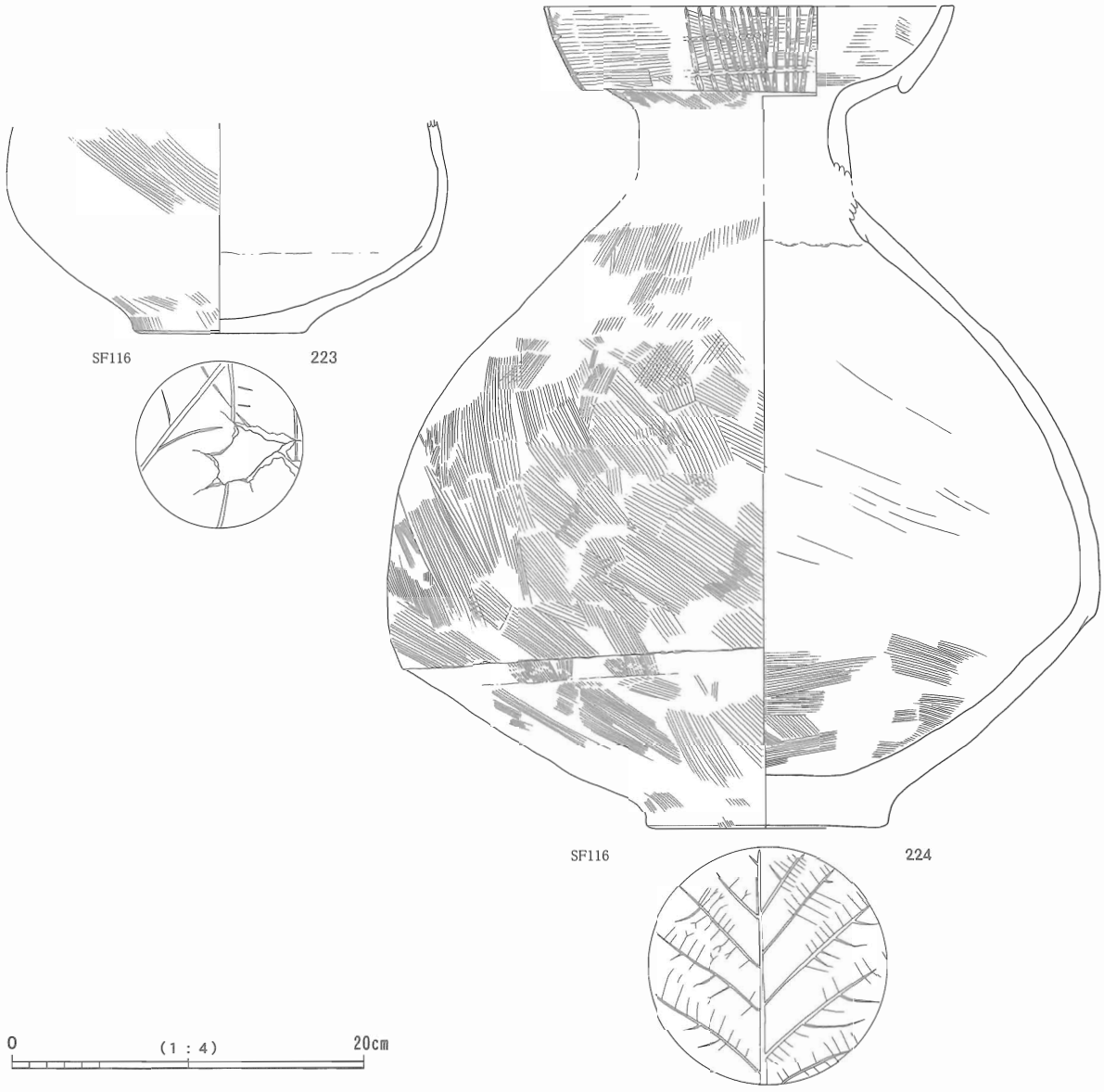


第111図　SF115土器棺

SF116土器棺（第112図）　223は、土器棺の蓋として用いられていた壷である。上半部を打ち欠いた状態で用いられていた（第106図）。底部は平底で、木葉痕が残る。胴部は球形に近い。

224は、土器棺の身などに用いられていた壷である。胴部は身として用いられ、口縁～頸部は蓋の上に逆位で置かれた可能性が高いと判断できる（第106図）。底部は平底であり、木葉痕が残されている。胴部は、大きく開く下部と内湾しながら立ち上がる上部に分かれ、中位下寄りに稜線を伴う屈曲部をもつ。頸部は直立し、口縁部へは大きく外へ開く屈曲部を介する。口縁部は、複合口縁である。口縁部外面には、十数条の縦方向の沈線と2条の横方向の沈線による格子状の文様が、4方向に施されている。外面調整はハケ調整で占められている。

これらは、器形および文様の特徴から弥生時代後期中葉頃に位置づけることができる。

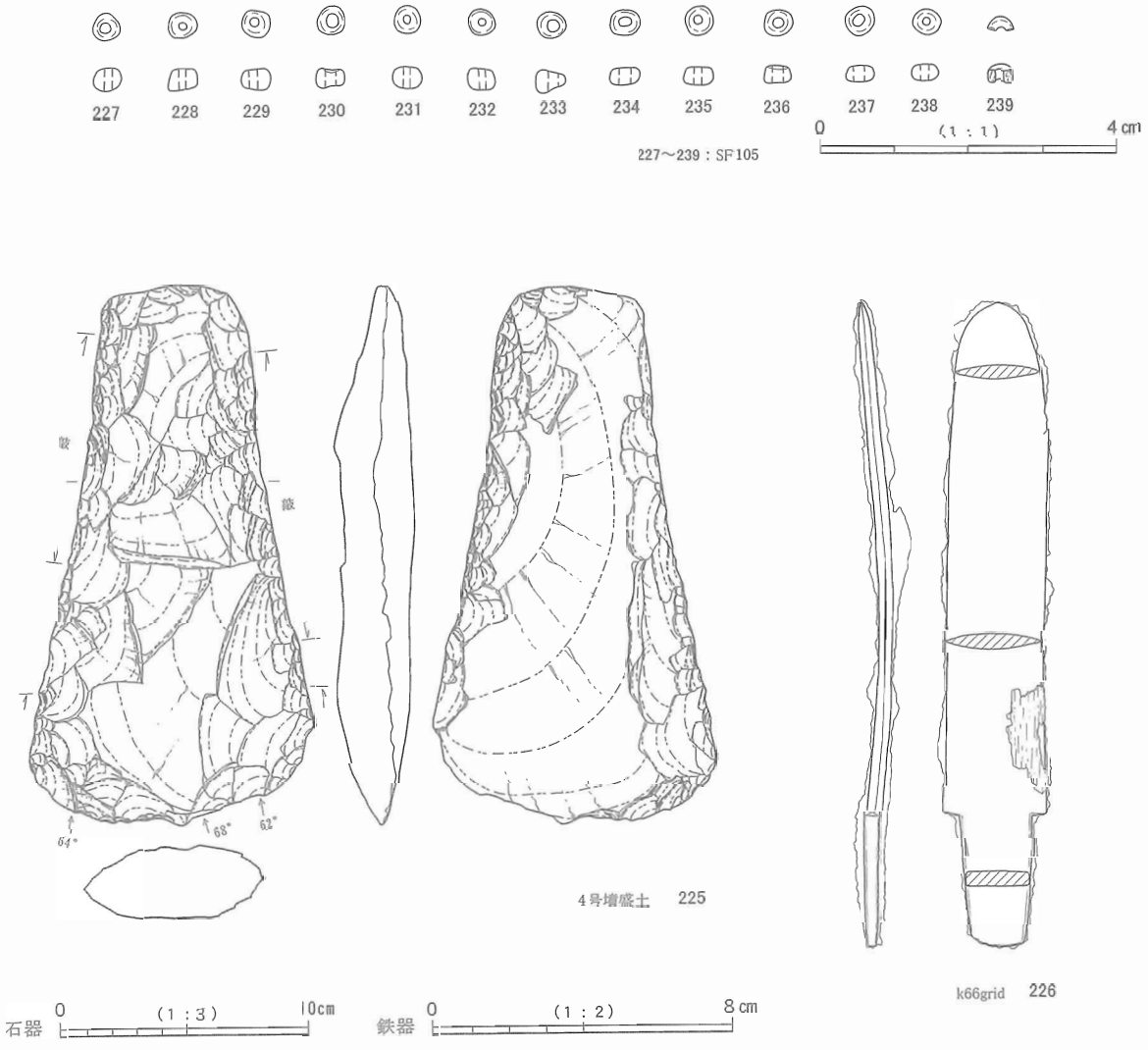


第112図　SF116土器棺

(2)石　器

4号墳盛土出土石鏃（第113図）　225は、4号墳盛土中から出土した石鏃である。砂岩製であり、大型の撥形を呈する。打製の石器であり、両面ともに大小の剥離面で占められている。刃部（図の下端縁）は片刃に近く、図に示したとおりの角度でつくられている。使用痕も両面に認められる。しかし、使用度は低かったようであり、いずれの使用痕も顕著ではない。両側縁には、柄の装着に関連する敲打調整が認められる。

出土土器にみる主体時期よりも古く、概ね弥生時代前期末～中期前半のものと位置づけることができる。土器の少ない場所からの出土であるが、少数ながら中期中葉以前の土器片の出土も認められている。この点を評価するならば、この石鏃が墓域に伴う副葬品などであった可能性も否定はできない。ただし、遺構に伴って出土したものではなく、確実視することはできない（註5）。



第113図　3区中央部・南部出土石器・玉類・金属器

(3) 玉　類

SF105出土ガラス小玉（第113図）　227～239は、土器棺墓であるSF105から出土したガラス小玉である。全て土器棺の身の内部からの出土であり、やや散在しつつも、棺内の中央部の中層に集中して出土している。いずれも小型の玉であり、透明度の高い水色を呈する。全体的に丸味の強い形状を呈するが、歪みもあり、形状に個体差が認められる。

出土遺構の時期から、弥生時代後期のものであると判断できる。なお、土器棺墓からの玉類出土例は、本遺跡群においても少ない。

(4) 金属器

K66grid出土鉄剣（第113図）　226は、K66グリッドの崖面出土の鉄剣である（第91図）。この鉄剣が出土した崖は、7号周溝墓の西半部を大きく破壊しており、多くの遺構が丘陵の崩落とともに消失したと考えられる。この鉄剣も、そうした7号周溝墓に関連した遺構に伴っていた可能性がある。

刃部は、長さ約13.8cmと短いが、54（第30図）や174（第75図）のように先細の形状は呈さない。切先部の手前に至るまで同じ幅を保っている。鏑は観察できない。茎部との境には、明確な直関を両側に伴う。茎部は約3.5cmと短い。目釘孔は、X線透過写真においても認めることができなかった。

周辺の古墳は盗掘や埋葬施設の流失を受けており、鏡や馬具といった採集遺物も知られている（森町史編さん委員会1998）。この鉄剣についても、出土当初は4号墳などの副葬品であった可能性が考慮された。しかし、古墳時代中期後半以降の鉄剣としては短い。また、今回の調査では、周辺に古墳の副葬品が転落していたという事実は認められなかった。したがって、古墳の副葬品が離れた崖に転落したものである可能性よりも、弥生時代中後期の墓域に伴っていた可能性の方を高く評価したい。なお、形態的には54（第30図）・174（第75図）よりも新しい特徴が認められることから、弥生時代後期後半～末葉以降に位置づけできる可能性が高いと判断できる（註6）。

註

1　角張淳一氏（株式会社アルカ）よりご教示いただいた。

2　この鉄剣については、豊島直博氏（奈良文化財研究所）より多くのご教示・ご指導をいただいた。本文にある所見や類例などは、その内容によって記述したものである。

3　静岡市浅間神社境内遺跡の水晶製算盤玉については、伊藤寿夫氏（静岡市）よりご教示いただいた。

4　この鉄剣については、豊島直博氏（奈良文化財研究所）より多くのご教示・ご指導をいただいた。本文にある所見などは、その内容によって記述したものである。

5　この石鏃については、松井一明氏（袋井市教育委員会）より多くのご教示・ご指導をいただいた。本文にある所見などは、その内容によって記述したものである。また、実測図中の数値や矢印などは、松井氏の観察・計測によって示したものである。

6　この鉄剣については、豊島直博氏（奈良文化財研究所）より多くのご教示・ご指導をいただいた。本文にある所見などは、その内容によって記述したものである。

第4表　遺物観察表（土器）

番号	挿図番号	図版番号	出土位置	種別	器種	部位	残存率(%)	器高(cm)	器径(cm)	口径(cm)	底径(cm)	色調(外面)	色調(内面)	摩滅	備考
1	23	28	p49grid	縄文土器	深鉢	口縁部						褐(7.5YR4/6)	黄褐(10YR4/6)	△	
2	23	28	p49grid	縄文土器	深鉢	頸部(把手)						灰黄褐(10YR4/2)	にぶい黄橙(10YR5/4)	△	
3		(別表：p49grid出土石鏃)													
4	24	28	SF13	弥生土器	壷	全体	90	11.9	11.9	9.8	5.7	にぶい黄橙(10YR7/4)	明黄褐(10YR7/6)	×	底部打欠
5	24	28	SF13	弥生土器	壷	頸部	15					にぶい黄橙(10YR6/4)	にぶい黄橙(10YR7/4)	△	
6	24		SF13	弥生土器	壷	底部	40				(5.6)	黄橙(10YR8/6)	にぶい黄褐(10YR5/4)	×	
7	24		SF13	弥生土器	高坏	口縁部	5		(27.6)	(27.6)		にぶい橙(7.5YR7/4)	浅黄橙(10YR8/4)	×	
8	24		SD02	弥生土器	壷	口縁部	10			(19.0)		橙(7.5YR6/6)	橙(7.5YR7/6)	△	
9	24	28	SD02	弥生土器	壷	口縁部	30			(24.0)		橙(7.5YR6/6)	橙(7.5YR6/6)	△	
10	24	28	SD02	弥生土器	壷	胴部	10					にぶい黄橙(10YR6/4)	にぶい黄(2.5Y6/3)	△	
11	24		SD02	弥生土器	壷	胴部・底部	20				(8.4)	橙(7.5YR7/6)	浅黄(2.5Y7/4)	×	
12	24		SD02	弥生土器	壷	底部	60				(6.0)	にぶい黄橙(10YR6/4)	にぶい黄橙(10YR6/4)	△	
13	24		SD02	弥生土器	高坏	坏部	5		(25.0)	(25.0)		にぶい黄橙(10YR7/4)	にぶい黄橙(10YR7/4)	×	
14	24	28	SD02	弥生土器	高坏	坏部	40		26.8	26.8		にぶい黄橙(10YR7/3)	にぶい黄橙(10YR7/3)	△	
15	24	28	SD02	弥生土器	高坏	全体	90	18.1	23.3	23.3	10.4	橙(7.5YR6/6)	橙(7.5YR6/6)	△	
16	24	28	q48grid	弥生土器	甕	口縁部	10		(26.9)	(26.9)		橙(7.5YR7/6)	橙(7.5YR 7 /6)	△	
17	24		q48grid	弥生土器	壷	口縁部	10		(17.0)	(17.0)		橙(7.5YR7/6)	にぶい黄(2.5Y6/4)	△	
18	24		q48grid	弥生土器	壷	口縁部	10			(21.5)		橙(7.5YR7/6)	橙(7.5YR7/6)	△	
19	25	28	q48grid	弥生土器	壷	頸～底部	60		25.7		8.2	にぶい黄橙(10YR7/4)	にぶい黄橙(10YR7/4)	△	胴部打欠？
20	25	28	A～C群	弥生土器	壷	頸～胴部	40		(13.1)			浅黄(2.5Y 7 /4)	浅黄(2.5Y 7 /4)	△	
21	25		q48grid	弥生土器	壷	頸～胴部	25					黄橙(10YR8/6)	にぶい黄橙(10YR7/4)	×	
22	25		q48grid	弥生土器	壷	底部	15				(10.0)	橙(7.5YR7/6)	浅黄(2.5Y7/4)	×	
23	25	28	A・B群	弥生土器	鉢	口縁～胴部	15		(23.3)	(22.6)		橙(7.5YR 7 /6)	橙(7.5YR 7 /6)	△	
24	26	29	SD03	弥生土器	壷	全体	90	12.3	12.3	10.8	7.0	灰白(2.5Y8/2)	灰白(2.5Y8/2)	△	底部穿孔
25	26	29	SD03	弥生土器	壷	頸～底部	80		11.5		6.4	にぶい黄橙(10YR7/4)	にぶい黄橙(10YR7/4)	△	底部打欠
26	26	29	SD03	弥生土器	高坏	全体	80	22.2	29.0	29.0	12.6	浅黄(2.5Y7/4)	浅黄(2.5Y7/4)	△	
27	26		SD03	弥生土器	壷	底部	30				(6.2)	橙(7.5YR7/6)	橙(7.5YR6/6)	△	
28	26	29	SF12	弥生土器	壷	頸～底部	90		10.5		5.7	浅黄橙(7.5YR8/6)	橙(7.5YR7/6)	×	
29	27	29	SF23	弥生土器	壷	全体	60	28.9	22.7	10.9	8.7	橙(5YR6/6)	橙(5YR6/6)	△	胴部打欠
30	27	29	SF23	弥生土器	高杯	全体	80	23.0	30.4	30.4	12.7	にぶい黄橙(10YR7/3)	にぶい黄橙(10YR7/3)	△	
31	27		SD04・SF23	弥生土器	壷	底部	20				(9.0)	橙(7.5YR7/6)	灰黄(2.5Y7/2)	△	
32	27	30	SD04・SF23	弥生土器	壷	底部	100				11.5	明黄褐(10YR7/6)	明黄褐(10YR7/6)	△	
33	27	30	SD04・SF23	弥生土器	高坏	坏部	20		(29.0)	(29.0)		橙(7.5YR7/6)	橙(7.5YR7/6)	×	
34	27	30	SF24	弥生土器	高坏	坏部	25		(27.9)	(27.9)		明黄褐(10YR7/6)	明黄褐(10YR7/6)	×	
35	28	30	p49grid	弥生土器	壷	口縁部-胴～底部	20		(17.6)	(13.5)	(7.6)	にぶい黄橙(10YR7/4)	にぶい黄橙(10YR7/4)	△	赤彩
36	28	30	p49grid	弥生土器	壷	口縁～頸部	40			(13.6)		にぶい黄橙(10YR7/4)	にぶい黄橙(10YR7/4)	△	
37	28		p49grid	弥生土器	壷	頸部	60					浅黄橙(10YR8/4)	浅黄橙(10YR8/4)	△	
38	28		p49grid	弥生土器	壷	胴部	30		(11.9)			橙(7.5YR7/6)	褐灰(10YR4/1)	×	
39	28		12号墳北側	弥生土器	壷	胴部	10		(19.9)			灰黄(2.5Y7/2)	灰黄(2.5Y7/2)	△	
40	28	30	p49grid	弥生土器	壷	胴部	40		(21.8)			にぶい黄橙(10YR7/3)	にぶい黄橙(10YR7/3)	△	
41	28		p49grid	弥生土器	壷	底部	25				(9.0)	橙(7.5YR6/6)	黄灰(2.5Y5/1)	△	
42	28		p48grid	弥生土器	壷	底部	20				(9.0)	淡黄(2.5Y8/4)	灰(5Y4/1)	△	
43	28		p48grid	弥生土器	壷	底部	15				(7.5)	にぶい黄橙(10YR6/4)	にぶい黄橙(10YR6/4)	△	
44	28	30	p48grid	弥生土器	高坏	坏部	5		(26.0)	(26.0)		にぶい黄橙(10YR7/3)	にぶい黄橙(10YR7/3)	△	
45	29	31	SF08	弥生土器	壷	胴部	20					にぶい黄橙(10YR7/4)	灰黄褐(10YR7/2)	△	
46	29	30	SF08	弥生土器	壷	胴～底部	75		50.5		12.0	明黄褐(10YR6/6)	暗褐(10YR3/3)	×	棺身
47	29	31	SF08・09周辺	弥生土器	壷	胴部・底部	30				5.4	橙(7.5YR7/6)	黒褐(10YR3/1)	△	
48	29	31	SF09	弥生土器	壷	胴～底部	20				(8.0)	浅黄橙(10YR8/4)	にぶい黄橙(10YR7/4)	△	棺蓋？
49	29	31	SF09	弥生土器	壷	胴～底部	50		41.5		13.5	にぶい黄(2.5Y6/3)	暗灰黄(2.5Y5/2)	×	棺身
50	30	31	SF18	弥生土器	壷	胴～底部	90		38.1		11.6	浅黄橙(10YR8/4)	にぶい黄橙(10YR7/4)	△	棺身
51・52		(別表：SF21出土ガラス小玉)													
53		(別表：p49grid出土鉄鏃)													
54		(別表：SF23出土鉄剣)													
55	36	31	11号墳周溝北西部	弥生土器	壷	口縁～頸部	40			(10.0)		にぶい黄橙(10YR7/6)	にぶい黄橙(10YR7/6)	△	
56	45	32	8号墳周辺	弥生土器	壷	口縁部	5			(14.0)		にぶい橙(10YR7/4)	にぶい橙(10YR7/4)	△	
57	45	32	8号墳周辺	弥生土器	壷	口縁部	5			(22.0)		にぶい黄橙(10YR6/4)	橙(7.5YR7/6)	△	
58	45		8号墳南西側	弥生土器	壷	口縁部-胴部	5			(15.4)		浅黄橙(7.5YR8/6)	浅黄橙(10YR8/4)	△	
59	45	32	8号墳周辺	弥生土器	壷	口縁～頸部	30			(12.4)		にぶい黄橙(10YR6/4)	にぶい黄橙(10YR6/4)	△	
60	45		8号墳周辺	弥生土器	壷	胴部	15		(11.6)			にぶい黄橙(10YR7/4)	にぶい黄橙(10YR7/4)	×	
61	45		8号墳南部	弥生土器	壷	胴部・底部	30		(17.7)		(7.0)	浅黄橙(10YR8/4)	灰黄(2.5Y7/2)	△	
62	45	32	8号墳南西側	弥生土器	壷	口縁～頸部	30			(29.8)		にぶい黄橙(10YR7/4)	にぶい黄橙(10YR7/4)	△	
63	45	32	8号墳南部	弥生土器	壷	口縁部	5			(27.0)		橙(5YR6/6)	にぶい橙(7.5YR7/4)	△	
64	45	32	8号墳周辺	弥生土器	壷	頸～胴部	15					橙(7.5YR7/6)	橙(7.5YR7/6)	△	
65	45	32	9号墳周辺	弥生土器	壷	底部	70				9.9	橙(7.5YR7/6)	橙(7.5YR7/6)	△	
66	45	32	8号墳南部	弥生土器	壷	底部	70				5.9	にぶい黄橙(10YR7/4)	浅黄(2.5Y 7/4)	△	
67	45	32	8号墳北側	弥生土器	壷	底部	15				(8.0)	にぶい黄橙(10YR6/4)	にぶい黄橙(10YR7/4)	△	
68	45	32	8号墳南部	弥生土器	壷	底部	10				(8.0)	黄灰(2.5Y5/1)	灰黄(2.5Y7/2)	△	
69	45		9号墳周辺	弥生土器	壷	底部	5				(5.0)	淡黄(2.5Y8/4)	浅黄(2.5Y7/4)	△	
70	45		9号墳周辺	弥生土器	高坏	坏部	15					橙(5YR6/6)	にぶい黄橙(7.5YR6/4)	△	
71	45	32	9号墳周溝南西部	弥生土器	高坏	脚部	25				(11.0)	にぶい黄橙(10YR7/4)	にぶい黄橙(10YR7/4)	△	
72	45	32	8・9号墳周辺	弥生土器	甕	口縁部	5			(16.0)		にぶい黄(2.5Y6/3)	にぶい黄(2.5Y6/3)	○	
73	45	32	8号墳北側	弥生土器	甕	台部	20				(8.0)	にぶい黄橙(10YR6/4)	にぶい黄橙(10YR6/4)	△	

番号	挿図番号	図版番号	出土位置	種別	器種	部位	残存率(%)	器高(cm)	器径(cm)	口径(cm)	底径(cm)	色調(外面)	色調(内面)	摩滅	備考
74	46	32	SF49	弥生土器	壷	胴～底部	70		44.4		9.0	にぶい橙(7.5YR7/4)	にぶい黄橙(10YR7/4)	△	棺身
75	47	33	SF50	弥生土器	甕	口縁～台部	90		26.0	26.0		にぶい黄橙(10YR7/3)	にぶい黄橙(10YR7/3)	△	棺蓋、スス付着
76	47	33	SF50	弥生土器	甕	全体	90	28.4	33.6	33.6	8.0	にぶい黄橙(10YR7/4)	にぶい黄橙(10YR7/4)	△	スス付着
77	47	33	SF50	弥生土器	壷	胴～底部	90		52.3		8.5	にぶい黄褐(10YR4/3)	褐灰(10YR4/1)	△	棺身
78	48	34	SF51	弥生土器	壷	胴部	30		47.8			にぶい黄橙(10YR7/4)	にぶい黄橙(10YR7/4)	×	棺身
79	49	34	SF52	弥生土器	壷	胴～底部	80		24.2		7.6	橙(5YR7/6)	橙(5YR6/6)	○	棺蓋
80	49	34	SF52	弥生土器	壷	胴～底部	95		46.8		10.3	橙(7.5YR6/6)	黄褐(2.5Y5/3)	○	棺身
81～85			(別表：SF38出土ガラス小玉)												
86・87			(別表：SF45出土ガラス小玉)												
88			(別表：SF46出土ガラス小玉)												
89			(別表：SF37出土鋼鏃)												
90	66	35	SD09	弥生土器	壷	頸～底部	50		(15.5)		6.3	にぶい黄橙(10YR6/4)	にぶい黄橙(10YR6/3)	△	底部穿孔
91	66	35	SD09	弥生土器	壷	全体	80	9.1	9.6	7.6	5.4	橙(7.5YR7/6)	橙(7.5YR7/6)	△	底部打欠
92	66	35	6号墳北側	弥生土器	甕	接合部	70					明赤褐(5YR5/6)	明赤褐(5YR5/6)	△	
93	66	35	6号墳北側	弥生土器	甕	接合部	40					明黄褐(10YR7/6)	にぶい黄橙(10YR7/4)	△	
94	66	35	SF77	弥生土器	壷	全体	70	(15.6)	(15.9)	12.0	5.5	にぶい黄橙(10YR7/4)	にぶい黄橙(10YR7/4)	△	
95	66	35	SD10	弥生土器	壷	頸～胴部	40		(10.4)			橙(7.5YR7/6)	橙(7.5YR7/6)	×	
96	66		SD10	弥生土器	壷	底部	80				4.9	にぶい黄橙(10YR6/4)	にぶい黄橙(10YR6/4)	×	
97	66	35	SF78	弥生土器	壷	頸部	25					にぶい黄橙(10YR7/3)	浅黄橙(10YR8/2)	△	
98	66		SF78	弥生土器	壷	胴部・底部	25		(14.3)		(6.0)	にぶい黄橙(10YR7/4)	浅黄橙(10YR8/3)	△	
99	66		SF79	弥生土器	壷	底部	30				(5.0)	明黄褐(10YR6/6)	明褐(2.5Y5/4)	△	
100	66	35	SF80	弥生土器	壷	胴部	30		(16.5)			にぶい黄橙(10YR7/4)	にぶい黄橙(10YR7/4)	△	
101	66		6号墳南側	弥生土器	高坏	接合部	70					にぶい黄橙(10YR7/4)	暗灰黄(2.5Y5/2)	△	
102	67	37	SF65・66・67	弥生土器	壷	口縁～胴部・底部	30			(8.3)	(6.0)	橙(7.5YR6/6)	橙(7.5YR6/6)	△	
103	67	36	SX04・SF65	弥生土器	壷	胴～底部	70		29.3		10.0	にぶい黄橙(10YR6/4)	灰黄(2.5Y6/3)	○	底部穿孔
104	67	36	SX04・SF65	弥生土器	壷	頸～底部	80	30.0	25.4		9.0	橙(5YR6/6)	浅黄(2.5Y7/4)	△	底部穿孔
105	67	37	SX04・SF65	弥生土器	壷	胴～底部	30		(24.9)		(10.0)	橙(7.5YR6/6)	橙(7.5YR6/6)	×	
106	67	37	SX04・SF65・SF73	弥生土器	高坏	口縁部	20		(19.6)	(19.6)		橙(7.5YR7/6)	橙(5YR6/6)	△	
107	67	36	SF65	弥生土器	甕	台部	10				10.3	橙(5YR6/6)	にぶい黄橙(10YR6/4)	×	
108	68	36	SF60	弥生土器	壷	口縁～胴部	80		(10.2)	11.1		にぶい橙(7.5YR6/4)	にぶい黄橙(10YR6/4)	△	
109	68	37	SF60	弥生土器	壷	底部	15				(4.5)	にぶい黄橙(10YR7/4)	にぶい黄橙(10YR7/4)	△	
110	68	37	SF62・63	弥生土器	壷	頸～胴部	70					にぶい黄橙(10YR7/3)	にぶい黄橙(10YR7/3)	△	
111	68	37	SF62・63	弥生土器	壷	底部	60				(5.9)	にぶい黄橙(10YR6/4)	にぶい黄橙(10YR6/3)	△	
112	68		SF71	弥生土器	壷	胴部	20		(11.6)			にぶい橙(7.5YR6/4)	にぶい橙(10YR6/4)	△	
113	68	36	SF71 周辺	弥生土器	高坏	脚部	70					にぶい黄橙(10YR6/4)	にぶい黄橙(10YR6/4)	△	
114	68	36	SF70	弥生土器	高坏	脚部	80				10.5	浅黄橙(10YR8/4)	浅黄橙(10YR8/4)	△	
115	68	36	SF70	弥生土器	壷	胴～底部	95				7.8	にぶい黄橙(10YR7/4)	にぶい黄橙(10YR7/4)	△	
116	68		SF66	弥生土器	壷	底部	20				(7.0)	橙(5YR6/6)	橙(5YR6/6)	△	
117	69	37	6号墳盛土	弥生土器	壷	全体	95	9.5	9.9	8.2	5.8	橙(5YR6/8)	にぶい黄橙(10YR7/4)	△	底部穿孔
118	69		6号墳盛土	弥生土器	壷	口縁部	5			(24.5)		にぶい黄橙(10YR7/4)	にぶい黄橙(10YR7/4)	△	
119	69	37	6号墳盛土	弥生土器	壷	口縁部	30			(21.5)		にぶい橙(7.5YR7/4)	にぶい橙(7.5YR7/4)	△	
120	69	37	6号墳盛土	弥生土器	壷	胴部・底部	10				(7.4)	にぶい黄橙(10YR7/4)	灰白(10YR7/1)	○	
121	69		6号墳盛土	弥生土器	壷	胴部	20		(32.2)			橙(7.5YR7/6)	灰黄(2.5Y7/3)	×	
122	69		6号墳盛土	弥生土器	壷	胴部	30					浅黄(2.5Y7/4)	にぶい黄(2.5Y6/3)	△	
123	69		6号墳盛土	弥生土器	壷	底部	85				5.4	暗灰黄(2.5Y5/2)	暗灰黄(2.5Y5/2)	×	
124	69		6号墳盛土	弥生土器	壷	底部	40				9.0	浅黄橙(10YR8/4)	浅黄橙(10YR8/4)	△	
125	69	37	6号墳盛土	弥生土器	壷	底部	25				(9.0)	にぶい黄橙(10YR7/4)	にぶい黄橙(10YR7/4)	△	
126	69		6号墳盛土	弥生土器	壷	底部	15				(12.0)	にぶい黄橙(10YR7/4)	にぶい黄橙(10YR7/4)	△	
127	69	38	6号墳盛土	弥生土器	高坏	口縁部・接合部	20		(25.0)	(25.0)		浅黄橙(10YR8/3)	にぶい黄橙(10YR7/4)	△	
128	70	38	SF59	弥生土器	壷	口縁部・胴～底部	90		33.6	(27.5)	11.9	橙(7.5YR7/6)	明黄褐(10YR7/6)	△	棺身
129	70		6号墳北側	弥生土器	壷	胴～底部	20		(48.5)		8.5	褐(7.5YR4/4)	浅黄(2.5Y7/3)	△	
130	71	39	SF71	弥生土器	壷	胴～底部	90		36.8		9.2	明黄褐(10YR6/6)	明黄褐(10YR6/6)	△	棺蓋
131	71	39	SF71	弥生土器	壷	胴～底部	95		48.0		13.0	にぶい黄橙(10YR7/4)	灰黄褐(10YR6/2)	△	棺身
132	72	38	SF73	弥生土器	壷	頸～底部	75		51.0		11.0	にぶい黄橙(10YR7/4)	橙(7.5YR6/6)	△	棺身
133	73	39	SF72	弥生土器	壷	胴～底部	95		46.5		13.0	橙(7.5YR6/6)	にぶい黄橙(10YR7/4)	△	棺身
134			(別表：6号墳盛土出土敲石)												
135～139			(別表：6号墳周溝北西部出土管玉)												
140			(別表：6号墳周溝北西部出土算盤玉)												
141～144			(別表：6号墳周溝北西部出土ガラス小玉)												
145			(別表：6号墳盛土下層出土ガラス小玉)												
146～156			(別表：SF70出土ガラス小玉)												
157～164			(別表：SF77出土ガラス小玉)												
165～168			(別表：SF78出土ガラス小玉)												
169～171			(別表：SF79出土ガラス小玉)												
172・173			(別表：SF66出土銅釧)												
174			(別表：SF70出土鉄剣)												
175	84	40	SF82・SF83	弥生土器	壷	底部	50				(5.5)	淡黄(2.5Y8/4)	浅黄(2.5Y7/3)	△	
176	84	40	SF90	弥生土器	壷	頸部	40					暗灰黄(2.5Y5/2)	暗灰黄(2.5Y5/2)	△	
177	84	40	SF91周辺	弥生土器	高坏	接合部	50					にぶい黄橙(10YR7/4)	にぶい黄橙(10YR7/4)	△	
178	84	40	SF91周辺	弥生土器	高坏	脚部	15				(13.0)	暗灰黄(2.5Y4/2)	にぶい黄橙(10YR6/4)	△	
179	84	40	5号墳周溝東部	弥生土器	甕	口縁～胴部	15			(35.4)		にぶい黄橙(10YR6/4)	にぶい黄橙(10YR6/4)	△	
180	85	40	SF85	弥生土器	壷	口縁部・胴～底部	60		28.3	(14.0)	7.0	淡黄(2.5Y8/3)	灰(5Y6/1)	×	棺蓋

番号	挿図番号	図版番号	出土位置	種別	器種	部位	残存率(%)	器高(cm)	器径(cm)	口径(cm)	底径(cm)	色調(外面)	色調(内面)	摩滅	備考
181	85	40	SF85	弥生土器	壷	全体	95	31.4	33.4	20.7	8.0	にぶい黄橙(10YR7/4)	にぶい黄橙(10YR6/4)	△	棺身
182	86	40	SF86	弥生土器	壷	全体	70	50.0	39.4	18.0	8.0	浅黄(2.5Y7/4)	にぶい橙(7.5YR7/4)	△	棺身
183	87	41	SF87	弥生土器	壷	全体	80	62.5	49.0	24.2	7.6	にぶい褐(7.5YR5/6)	にぶい黄(2.5Y6/6)	△	棺身
184	88	41	SF91	弥生土器	甕	口縁部	10			(20.0)		浅黄(2.5Y7/4)	浅黄(2.5Y7/4)	×	棺蓋
185	88	41	SF91	弥生土器	壷	胴～底部	95		51.1		12.0	褐(7.5YR4/4)	にぶい褐(7.5YR5/3)	△	棺身
186	89	41	SF92	弥生土器	壷	胴部・底部	25		(21.8)		(6.8)	浅黄(2.5Y7/3)	浅黄(2.5Y7/3)	×	棺蓋
187	89	41	SF92	弥生土器	壷	底部	20				(7.0)	浅黄(2.5Y7/4)	浅黄(2.5Y7/4)	×	
188	89	42	SF92	弥生土器	壷	胴～底部	90		45.0		9.0	にぶい黄橙(10YR7/4)	にぶい黄橙(10YR6/3)	○	棺身、底部穿孔？
189～191			(別表：SF85出土ガラス小玉)												
192～196			(別表：SF82ガラス小玉)												
197～202			(別表：SF83出土ガラス小玉)												
203	107	42	3区	弥生土器	壷	頸部	20					橙(7.5YR6/6)	橙(7.5YR6/6)	△	
204	107	42	4号墳南東部	弥生土器	甕	口縁部	5		(30.0)	(30.0)		にぶい黄橙(10YR6/3)	にぶい黄橙(10YR6/3)	△	
205	107	42	2号墳南東部	弥生土器	壷	胴部	5					明赤褐(5YR5/6)	明赤褐(5YR5/6)	○	
206	107	42	4号墳南東部	弥生土器	壷	底部	100				7.0	浅黄(2.5Y7/4)	浅黄(2.5Y7/4)	×	
207	107	42	SD16	弥生土器	壷	頸部	10					にぶい黄橙(10YR7/4)	にぶい黄橙(10YR7/4)	△	
208	107	42	2号墳東部	弥生土器	壷	口縁部	10			(24.0)		にぶい黄橙(10YR6/4)	にぶい黄橙(10YR6/4)	△	
209	107	42	3号墳周溝北部	弥生土器	高坏	坏部・接合部	25		(26.6)	(26.6)		にぶい橙(7.5YR7/4)	にぶい橙(7.5YR7/4)	△	
210	107	42	3区	弥生土器	高坏	接合部	80					にぶい黄橙(10YR7/4)	浅黄(2.5Y7/3)	△	
211	107	42	SD25	弥生土器	壷	胴部	15					にぶい黄橙(10YR6/4)	にぶい黄橙(10YR7/4)	△	
212	107	42	SF115	弥生土器	壷	頸～底部	30				(3.6)	にぶい黄(2.5Y6/4)	にぶい黄(2.5Y6/4)	△	
213	108	42	3号墳周溝北部	弥生土器	壷	頸～胴部	30					灰黄(2.5Y6/2)	にぶい黄橙(10YR7/4)	△	
214	108	43	1号墳南側	弥生土器	壷	口縁部・胴部	10		(39.5)	(24.0)		にぶい黄(2.5Y6/3)	にぶい黄(2.5Y6/3)	△	
215	109	43	SF104	弥生土器	壷	口縁部	50			(29.0)		にぶい黄橙(10YR7/4)	にぶい黄橙(10YR7/4)	△	
216	109	43	SF104 周辺	弥生土器	壷	胴～底部	60		36.6		8.5	橙(10YR7/6)	橙(10YR7/6)	△	
217	109	43	SF104	弥生土器	壷	胴～底部	50		44.7		8.7	明黄褐(10YR6/6)	にぶい黄(2.5Y6/4)	×	
218	109	43	SF105	弥生土器	鉢	全体	95	12.3	24.5	24.0	6.9	明黄褐(10YR7/6)	にぶい黄橙(10YR7/4)	△	
219	109	43	SF105	弥生土器	壷	胴～底部	95		36.9		8.8	にぶい黄橙(10YR6/4)	にぶい黄(2.5Y6/3)	△	
220	110	43	SF106	弥生土器	壷	全体	80	62.8	48.9	24.0	6.0	明黄褐(10YR7/6)	橙(7.5Y7/6)	×	
221	111	44	SF115	弥生土器	甕	口縁～胴部	70		30.6	25.0		にぶい黄橙(10YR7/4)	にぶい黄橙(10YR7/4)	△	
222	111	44	SF115	弥生土器	壷	頸～底部	80		48.3		10.0	にぶい黄橙(10YR6/4)	にぶい黄橙(10YR7/4)	△	
223	112	44	SF116	弥生土器	壷	胴～底部	90		25.0		9.7	浅黄(2.5Y7/3)	灰黄(2.5Y6/2)	△	
224	112	44	SF116	弥生土器	壷	口縁部・胴～底部	85		40.5	23.4	13.7	にぶい黄橙(10YR7/4)	灰黄(2.5Y6/2)	△	
225			(別表：4号墳盛土出土石鏃)												
226			(別表：k66grid出土鉄剣)												
227～239			(別表：SF105出土ガラス小玉)												

(　)は復元値　　摩滅－○：摩滅少ない、△：摩滅あり、×：摩滅著しい

第5表　遺物観察表（石器）

番号	挿図番号	図版番号	出土位置	種類	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	欠損	備考
3	23	44	p49grid	石鏃	黒曜石	2.2	(1.4)	0.4	0.8	あり	
134	74	44	6号墳盛ニ	敲石	緑色岩	12.7	5.3	2.8	344.8	なし	
225	113	45	4号墳盛ニ	石鏃	砂岩	21.7	11.4	3.3	771.6	なし	

(　)は残存値

第6表　遺物観察表（金属器）

番号	挿図番号	図版番号	出土位置	種類	全長(cm)	鏃身・刃部長(cm)	鏃身・刃部幅(cm)	茎部長(cm)	茎部幅(cm)	重量(g)	備考
53	31	45	o49grid	鉄鏃	(3.9)	(3.2)	(2.9)	(1.4)	0.7	5.40	
54	31	46	SF23	鉄剣	14.8	11.4	3.2	3.3	3.2	63.50	鹿角製把
89	50	45	SF37	銅鏃	(2.6)	(1.4)	(1.0)	(1.2)	0.5	1.34	
174	75	46	SF70	鉄剣	28.2	25.6	3.3	2.7	3.0	73.81	
226	113	46	k66grid	鉄剣	17.3	13.8	2.8	3.5	1.9	48.95	

(　)は残存値

番号	挿図番号	図版番号	出土位置	種類	最大直径(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
172	75	45	SF66	銅釧	5.7	0.8	0.15	3.92	
173	75	45	SF66	銅釧	5.6	0.7	0.12	3.74	

第７表　遺物観察表（玉類）

番号	挿図番号	図版番号	出土位置	種類	材質	直径(㎜)	全長(㎜)	孔径(㎜)	重量(g)	色調	備考
51	31	45	SF21	小玉	ガラス	5.0	5.9	2.4	0.21	濃青色	
52	31	45	SF21	小玉	ガラス	6.8	5.8	2.6	0.17	濃青色	
81	50	45	SF38	小玉	ガラス	3.8	3.3	1.1	0.05	水色	
82	50	45	SF38	小玉	ガラス	3.5	2.3	1.3	0.03	水色	
83	50	45	SF38	小玉	ガラス	2.8	3.0	1.0	0.04	水色	
84	50	45	SF38	小玉	ガラス	4.5	2.2	1.3	0.05	水色	
85	50	45	SF38	小玉	ガラス	3.7	1.8	1.7	0.03	水色	
86	50	45	SF45	小玉	ガラス	3.4	3.3	1.2	0.03	水色	
87	50	45	SF45	小玉	ガラス	4.0	2.5	1.2	0.05	水色	
88	50	45	SF46	小玉	ガラス	4.6	2.0	1.8	0.06	水色	
135	75	45	6号墳周溝北西部	管玉	滑石	6.6	24.9	2.7	1.89	灰緑色	両側穿孔
136	75	45	6号墳周溝北西部	管玉	滑石	6.9	22.9	3.5	1.36	灰緑色	両側穿孔
137	75	45	6号墳周溝北西部	管玉	滑石			2.0	0.06	灰緑色	破片、風化著しい
138	75	45	6号墳周溝北西部	管玉	滑石	7.2	22.9	3.2	1.69	灰緑色	両側穿孔
139	75	45	6号墳周溝北西部	管玉	滑石	6.8	22.2	3.1	1.60	灰緑色	両側穿孔
140	75	45	6号墳周溝北西部	算盤玉	水晶	7.2	8.0	1.4	0.51	透明	片側穿孔
141	75	45	6号墳周溝北西部	小玉	ガラス	4.5	3.5	1.3	0.09	濃青色	
142	75	45	6号墳周溝北西部	小玉	ガラス	3.5	2.3	1.5	0.03	青色	
143	75	45	6号墳周溝北西部	小玉	ガラス	4.1	2.2	1.6	0.04	緑青色	
144	75	45	6号墳周溝北西部	小玉	ガラス	2.9	2.1	1.3	0.02	緑青色	
145	75	45	6号墳盛土下層	小玉	ガラス				0.05	緑青色	破片
146	75	45	SF70	小玉	ガラス	7.3	7.5	3.1	0.58	青色	
147	75	45	SF70	小玉	ガラス	7.4	7.2	2.5	0.47	青色	
148	75	45	SF70	小玉	ガラス	5.9	3.9	2.3	0.31	青色	
149	75	45	SF70	小玉	ガラス	5.5	6.0	2.1	0.16	青色	
150	75	45	SF70	小玉	ガラス	5.9	4.9	1.4	0.21	青色	
151	75	45	SF70	小玉	ガラス	5.3	4.8	1.5	0.21	青色	
152	75	45	SF70	小玉	ガラス	5.0	5.3	1.5	0.19	緑青色	
153	75	45	SF70	小玉	ガラス	4.3	4.9	1.2	0.13	青色	
154	75	45	SF70	小玉	ガラス	4.9	5.0	1.5	0.15	青色	
155	75	45	SF70	小玉	ガラス	4.7	3.3	1.6	0.10	青色	
156	75	45	SF70	小玉	ガラス	5.6	2.6	2.5	0.08	青色	
157	75	45	SF77	小玉	ガラス	6.3	7.0	1.8	0.38	青色	
158	75	45	SF77	小玉	ガラス	7.1	6.4	1.8	0.39	青色	
159	75	45	SF77	小玉	ガラス	6.4	5.7	2.3	0.29	青色	
160	75	45	SF77	小玉	ガラス	6.2	4.5	1.6	0.20	青色	
161	75	45	SF77	小玉	ガラス	5.5	4.1	2.2	0.17	青色	
162	75	45	SF77	小玉	ガラス	5.5	4.4	1.7	0.19	青色	
163	75	45	SF77	小玉	ガラス	5.2	4.5	1.6	0.21	青色	
164	75	45	SF77	小玉	ガラス				0.08	青色	破片
165	75	45	SF78	小玉	ガラス	3.1	3.2	1.2	0.04	水色	
166	75	45	SF78	小玉	ガラス	3.3	3.2	1.3	0.02	水色	
167	75	45	SF78	小玉	ガラス	3.5	2.7	1.2	0.03	水色	
168	75	45	SF78	小玉	ガラス	3.2	2.3	1.2	0.03	水色	
169	75	45	SF79	小玉	ガラス	2.7	2.9	0.7	0.04	水色	
170	75	45	SF79	小玉	ガラス	3.6	3.5	0.6	0.05	水色	
171	75	45	SF79	小玉	ガラス	3.3	3.1	0.8	0.03	水色	
189	90	45	SF85	小玉	ガラス	4.2	3.5	1.5	0.05	青色	
190	90	45	SF85	小玉	ガラス	3.4	1.6	1.3	0.03	青色	
191	90	45	SF85	小玉	ガラス	3.3	2.8	0.7	0.03	青色	
192	90	45	SF82	小玉	ガラス	4.3	2.8	1.5	0.04	水色	
193	90	45	SF82	小玉	ガラス	3.5	3.0	1.3	0.03	水色	
194	90	45	SF82	小玉	ガラス	3.5	3.3	1.4	0.03	水色	
195	90	45	SF82	小玉	ガラス	4.0	3.3	1.0	0.05	水色	
196	90	45	SF82	小玉	ガラス	3.3	3.0	1.0	0.04	青色	
197	90	45	SF83	小玉	ガラス	3.5	2.7	0.7	0.03	青色	
198	90	45	SF83	小玉	ガラス	3.8	2.8	1.1	0.05	青色	
199	90	45	SF83	小玉	ガラス	3.3	2.8	0.9	0.03	青色	
200	90	45	SF83	小玉	ガラス	4.4	5.0	1.4	0.11	水色	
201	90	45	SF83	小玉	ガラス	4.4	3.9	1.7	0.07	水色	
202	90	45	SF83	小玉	ガラス	3.8	2.9	1.2	0.04	水色	
227	113	45	SF105	小玉	ガラス	3.6	3.0	1.2	0.04	水色	
228	113	45	SF105	小玉	ガラス	3.8	3.0	1.0	0.04	水色	
229	113	45	SF105	小玉	ガラス	4.0	3.0	1.2	0.04	水色	
230	113	45	SF105	小玉	ガラス	3.6	2.9	1.7	0.03	水色	
231	113	45	SF105	小玉	ガラス	3.8	2.9	1.0	0.04	水色	
232	113	45	SF105	小玉	ガラス	3.5	2.9	1.2	0.04	水色	
233	113	45	SF105	小玉	ガラス	3.9	3.0	1.6	0.03	水色	
234	113	45	SF105	小玉	ガラス	4.1	2.3	1.7	0.03	水色	
235	113	45	SF105	小玉	ガラス	3.8	2.8	1.3	0.04	水色	
236	113	45	SF105	小玉	ガラス	3.7	2.2	1.2	0.03	水色	
237	113	45	SF105	小玉	ガラス	3.9	2.3	1.8	0.04	水色	
238	113	45	SF105	小玉	ガラス	3.9	2.1	1.0	0.04	水色	
239	113	45	SF105	小玉	ガラス		2.0		0.01	水色	破片

第５章　宇藤蓮台遺跡

第１節　概　要

基本土層　本遺跡の基本土層は文殊堂遺跡（第４章）と同様、下記のように把握できる。

Ⅰ：表土　　Ⅱ：古墳群形成以降の堆積・崩落・流土層　　Ⅲ：古墳の盛土

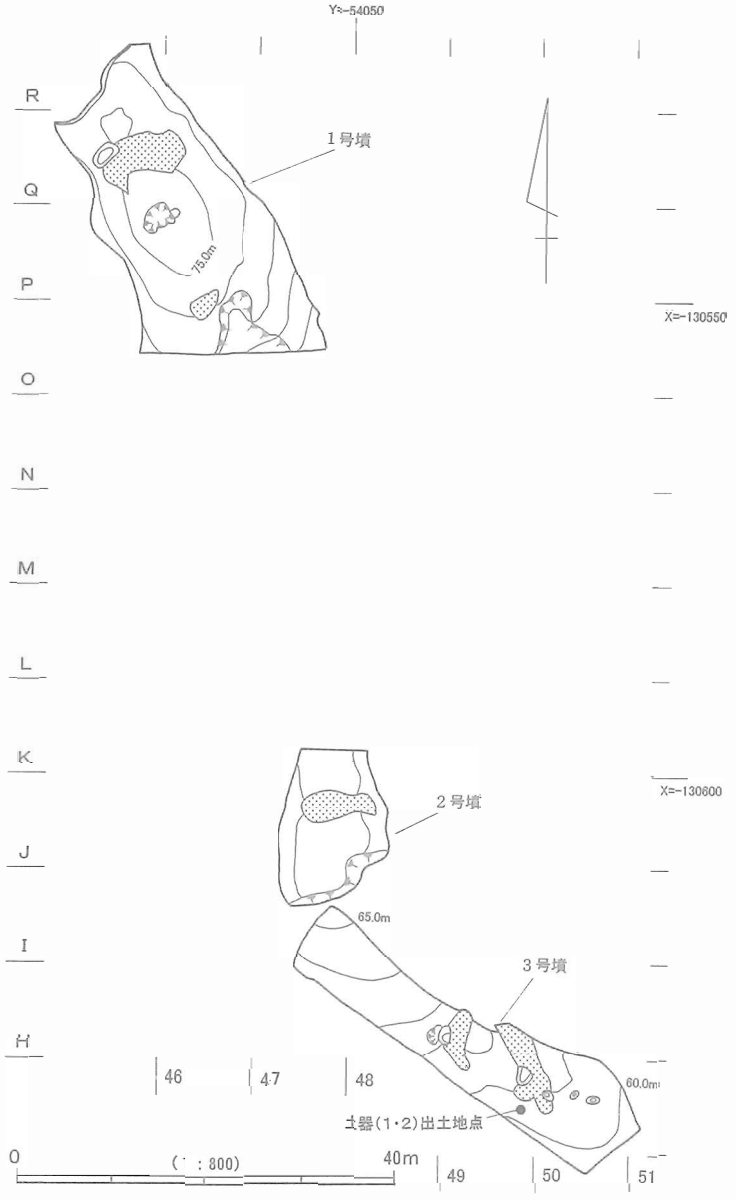
Ⅳ：古墳築造前の旧表土・堆積・崩落・流土層　　Ⅴ：地山（主に丘陵の基盤層）

Ⅰ層とⅤ層は、調査区全域で確認できる。Ⅰ層は、褐色を基調とする土層であるが、根の影響や撹乱なども含む。Ⅴ層は、丘陵を構成する基盤層である。大半においては灰～黄色砂層が検出されたが、一部に明黄～赤褐色砂質土層が検出された場所もある。

１号墳墳頂部においては、Ⅰ層とⅤ層の間に淡赤褐色砂質土層が確認できた。古墳の盛土（Ⅲ層）もしくはⅣ層の可能性が指摘できる。一方、３号墳の南側斜面では、斜面に堆積した淡赤暗褐色砂質土層が、Ⅰ層とⅤ層の間で確認された。後述する出土遺物から、この土層はⅣ層に対応すると判断できる。本遺跡は、堆積の少ない地形に立地しており、一方、崩落・流土の影響は少なくなかったと判断される。さらに、１区では山道、２・３区では茶畑などによる人為的な削平が確認できている。以上の要因から、Ⅱ層は認められず、Ⅳ層も一部の狭い範囲でしか確認できなかったと推測できる。

検出地形　本遺跡は、やせた丘陵上に立地している。検出地形をみても、南に向かって下りながらのびるやせ尾根であることがわかる。後述するような撹乱・削平や流土の影響を受けており、検出地形が本来の地形であるわけではない。しかし、撹乱は一部であり、削平も平坦面を造り出す程度のものである。概ねの地形的特徴は残していると推測することができる。

１区（北部）では、東縁部に丘陵筋に平行した山道があり、南東部にも撹乱が認められた。１号墳の周溝をみると、東西および南部の残存状



第114図　調査区全体図

況が悪い。顕著な破壊を伴うのは一部に限られるが、崩落・流土などを合わせると、ほぼ全域に何らかの影響を認めることができる。2・3区（南部）では、茶畑との関連であろうか、ほぼ全域に人為的な削平を認めることができた。丘陵斜面（とくに西側斜面）での影響は少ないが、丘陵上は著しく削平されている。2・3号墳の高まりは、完全に失われていた。

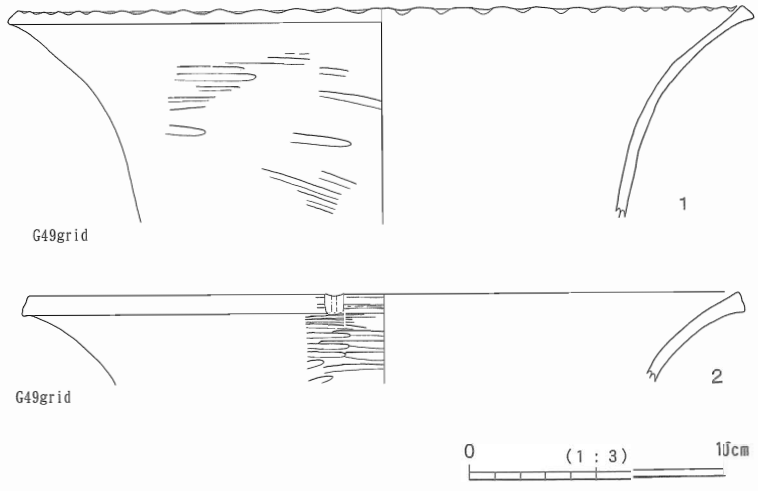
調査区　本遺跡については、今回が最初の正式な発掘調査である。また、今回の調査は本遺跡の全域を対象としている。したがって、今回の調査以外で設けられた調査区はない。調査区は、遺構分布や地形の特徴などによって3つに分かれ、北から1区・2区・3区とする。1区は1号墳周辺域、2区は2号墳周辺域、3区は3号墳周辺域にほぼ対応している。なお、2区と3区は接するが、3区斜面下にあった墓地の移転など、諸条件によって同時に調査することができずに分割された。また、2・3区間の境は、茶畑であった時からの用地境に対応しており、削平の程度も異なっている（第114図）。

遺構・遺物の概要　古墳群形成以前の遺物の出土は、3区南部から出土した数点の土器片に限られる（第114・115図）。また、古墳群形成以前の遺構は認められていない。検出遺構は3基の古墳のほか、中近世の墓穴、近世以降の山道跡に限られている。

3区では、弥生土器片の出土があり、比較的顕著な削平が認められていることから、消失してしまった弥生時代の遺構があった可能性も否定できない。しかし、遺物量は非常に少なく、文殊堂遺跡やフケ遺跡のように多くの遺構が展開していたとは判断し難い。

第2節　出土遺物

前節で述べたとおり、古墳群形成以前の遺構は検出されていない。また、古墳群形成以前の遺物の出土も、次にあげる土器片数点に限られる。



第115図　出土弥生土器

3区出土弥生土器（第115図）1・2は、3区南部の西側斜面に堆積したⅣ層から出土した、甕の口縁部片である（第114図）。1の口縁部では、上端に押圧が廻る。一方、2の口縁部では、端面に横位の条痕と縦方向の押圧が施されている。1・2ともに、口縁部より下の条痕は横方向である。

破片であるために詳細な特定は難しいが、弥生時代中期後葉よりも古く位置づけることができる。

第8表　遺物観察表

番号	挿図番号	図版番号	出土位置	種別	器種	部位	残存率(%)	器高(cm)	器径(cm)	口径(cm)	底径(cm)	色調(外面)	色調(内面)	摩滅	備考
1	115	47	G49grid	弥生土器	甕	口縁部	10		(28.5)	(28.5)		にぶい黄橙(10YR7/4)	にぶい黄橙(10YR7/5)	△	
2	115	47	G49grid	弥生土器	甕	口縁部	5		(28.0)	(28.0)		にぶい黄橙(10YR7/5)	浅黄(2.5Y7/4)	△	

(　)は復元値　　摩滅－○：摩滅少ない、△：摩滅あり、×：摩滅著しい

第６章　フケ遺跡

第１節　概　要

１．基本土層と検出地形

基本土層　本遺跡の基本土層は、文殊堂遺跡で認められた下記の範疇で捉えることができる。

Ⅰ：表土　　Ⅱ：古墳群形成以降の堆積・崩落・流土層　　Ⅲ：古墳の盛土

Ⅳ：古墳築造前の旧表土・堆積・崩落・流土層　　Ⅴ：地山（主に丘陵の基盤層）

ただし、本遺跡においては古墳が存在せず、実際にはⅢ層は認められない。

Ⅰ層は、褐色を基調とする表土層である。丘陵上部では、Ⅰ層の直下に丘陵の基盤層であるⅤ層（黄～灰色砂層）が現れた。一方、斜面部では、Ⅰ層とⅤ層の間に淡赤褐色砂質土（Ⅱ・Ⅳ層）の堆積が確認された。しかし、正確な遺構の把握のために、その下のⅤ層上面を遺構検出面として調査した。

地形の概要　フケ遺跡は、林古墳群の立地する丘陵から南に派生した丘陵に立地している。やせた丘陵ではあるが、部分的には幅15m程の丘陵上平坦面を伴う。本遺跡の範囲は、この丘陵筋に沿った長さ200mに及ぶ。なお、丘陵先端部付近で尾根が東西に分岐するが、西側に立地する遺跡を岩名栗古墳群・遺跡とし、東側尾根をフケ遺跡の範囲内としている（第２図）。

丘陵の東西は急斜面となり、谷部に至る。谷を挟んだ東側には、宇藤蓮台遺跡のある丘陵が平行してのびている。北側には林遺跡のある丘陵があり、南側には名栗遺跡が立地する段丘上平坦面が広がる。

検出地形と本来の地形　本書で報告・掲載する地形は、遺構検出面（Ⅴ層上面）での地形である（検出地形）。流土などの影響が推測できることから、検出地形が遺跡形成時の地形（本来の地形）であるとは限らない。ただし、大きな撹乱や削平は認められず、概ねの地形的特徴は残していると考えられる。すなわち、遺跡形成時においても、検出地形と同様のやせた丘陵であったと判断できる。

２．調査区および遺構・遺物

調査区　今回の調査は、遺跡全域を対象としたものではない。また本遺跡については、本書で報告する調査以外に、すでに調査・報告された場所がある（森町教育委員会2004）。１区・２区はその調査区であり（第２章 第３図）、本章で報告する調査区は３区・４区・５区となる。

遺物の出土状況　出土遺物には、弥生時代の土器（土器棺を含む）・玉類・金属製品がある。大半は遺構内からの出土であるが、遺構外（Ⅰ～Ⅳ層）の出土であっても、墓域・墓群を対象とした供献土器である場合が多いことから、出土した場所が重視される。各遺物の出土遺構や出土位置については、実測図や観察表に記している。遺構外の出土位置は、調査区やグリッド・遺構群の名称を用いて記した。

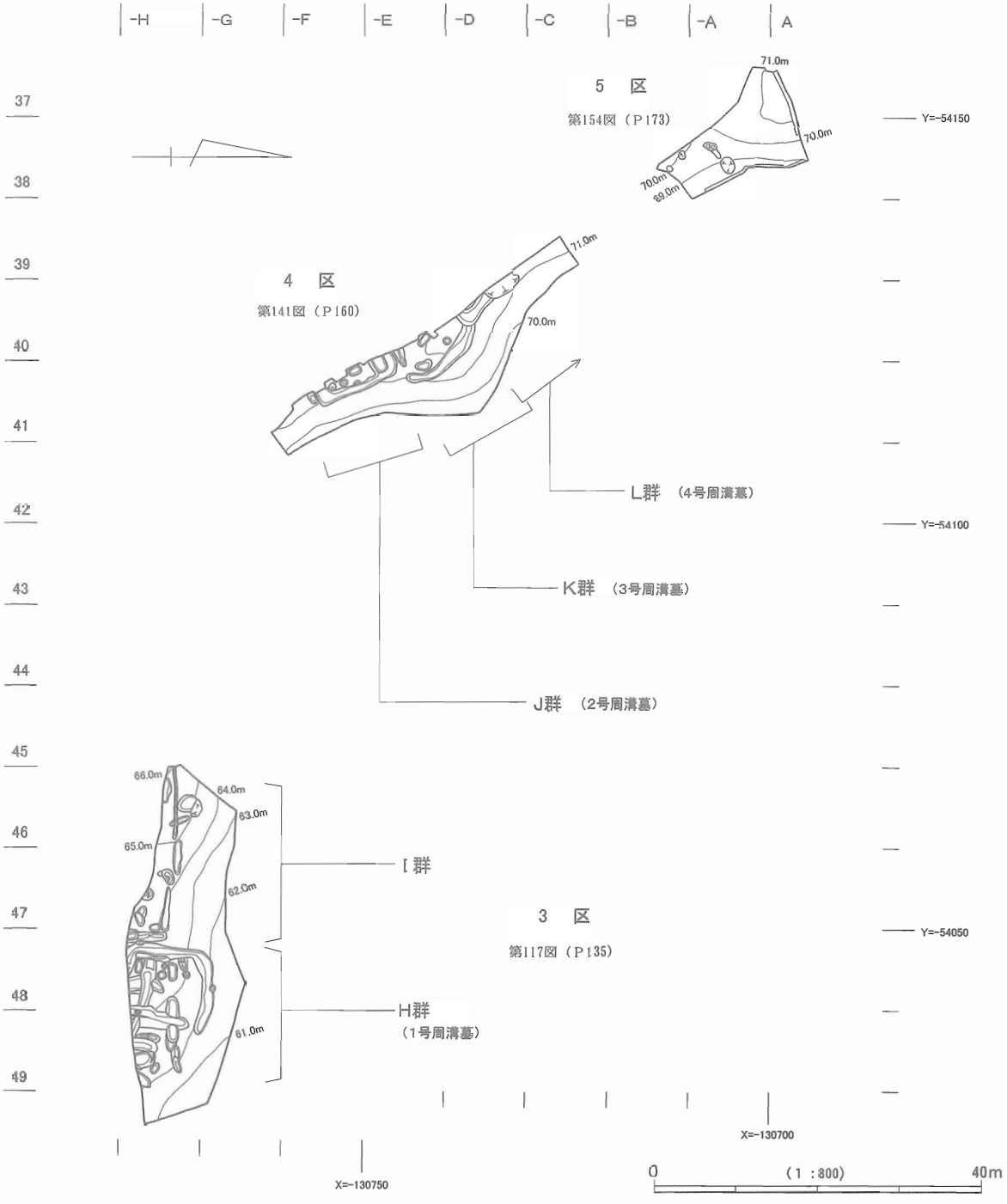
遺構の種類と時期　遺構は、３・４区のほぼ全域で検出されている。５区にはない。検出遺構には、土坑（SF01～SF37）、小穴（SP01）、溝（SD01～SD13）、その他・不明遺構（SX01～SX03）がある。SP01・SD09などは他より新しい可能性が高いが、大半の遺構は弥生時代の墓域に関連するものと判断できる。したがって、文殊堂古墳群・遺跡のように古墳群形成の前後で分割せず、本書においてフケ遺跡３～５区の調査成果の全てを報告することとする。

遺構の多くは土坑であり、土器棺墓・土坑墓といった埋葬施設で占められる（SF）。なお、土坑墓とした中には、木棺墓が含まれている。本遺跡群では木棺の有無を全てに明確化することが難しいため、

ここでは土壙と木棺墓を含めて土坑墓とする。この他に、墓群を区画するような溝（SD）などがある。

遺構群・周溝墓の把握　3区・4区のほぼ全域に遺構が分布するが、微地形や遺構の分布、区画・溝の配置などから、これらを計5つの遺構群に細分することができる。各遺構群は、10～20mの範囲をもち、墓群と呼びかえることもできる。ただし、あくまで検出遺構の分布状況による遺構群の把握であり、墓域の形成過程や墓域を営む集団を反映したものとは限らない。なお、1・2区においても7つの遺構群（A～G群）に分けて報告されている（第3章 第6図、森町教育委員会2004）。したがって、本書では3区のH群・I群、4区のJ群・K群・L群について報告することになる。

なお、墓群を区画する溝が認められる場合があり、そのような溝を伴う墓群は周溝墓と呼称する。



第116図　調査区（3～5区）全体図

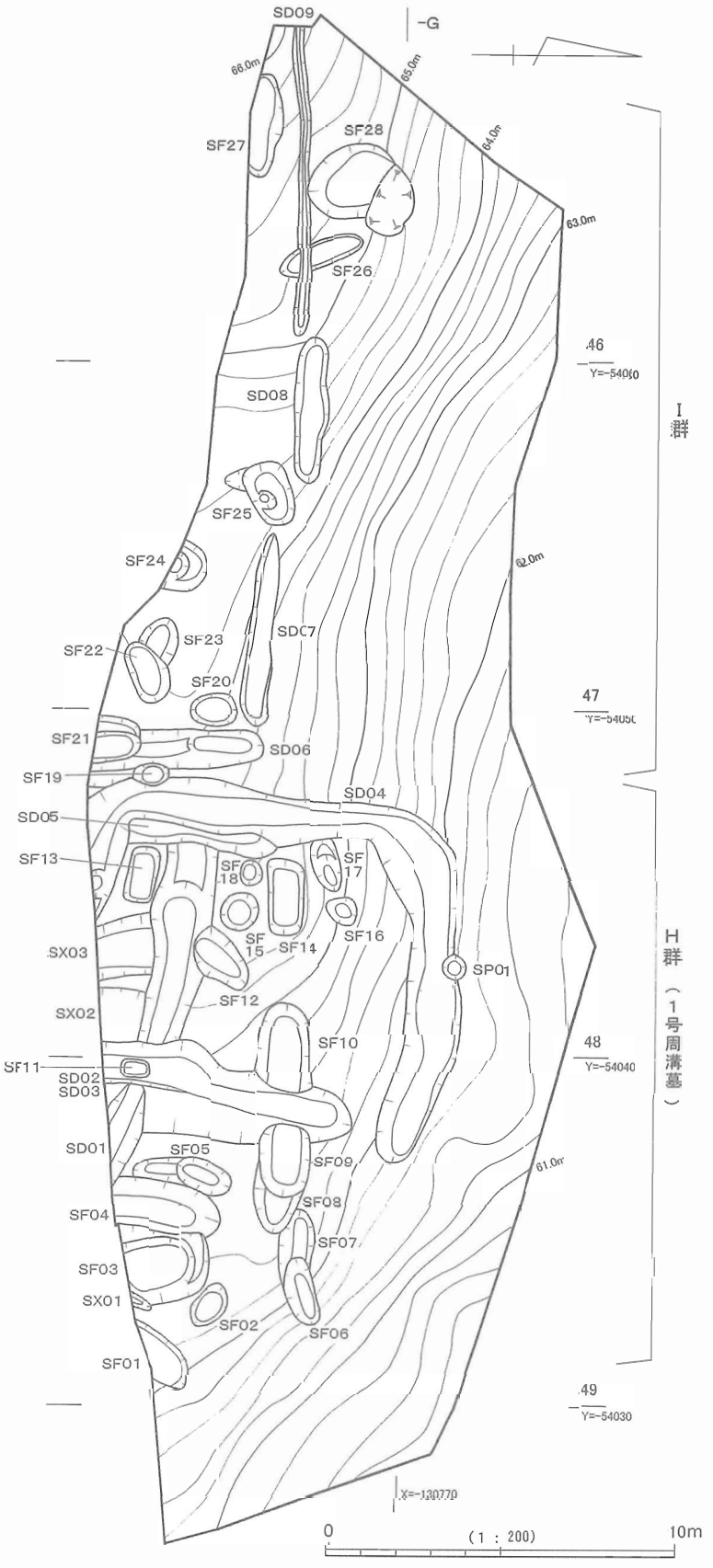
第2節　3　区

1．H　群

3区の東半部、東西約17mの範囲にある遺構群である。調査区は、東にのびる丘陵の頂上筋から北側斜面にかけた範囲に限られている。遺構の分布をみても、この遺構群の範囲が調査区外の南側斜面へと広がることがわかる。すなわち、遺構群の全体を調査・検出したわけではない。

遺構は、尾根上を中心に分布し、北側および東側の斜面際にまで認められる。比較的多くの土坑や溝が検出されており、他より遺構密度が高い。SP01やSX02・03などの時期・性格不明の遺構もあるが、検出遺構の大半は、形状・覆土や出土遺物から弥生時代の墓群に関連した遺構であると判断できる。土坑墓11基以上や土器棺墓2基といった埋葬施設のほか、方形に廻る溝であるSD02～SD05が検出されており、弥生時代後期中葉～後半の周溝墓1基を把握することができる（1号周溝墓）。

1号周溝墓は、8m前後四方の方形周溝墓であるが、台状部の高まりや盛土はない。玉類が出土した土坑墓（SF14：木棺墓）や銅鏃を副葬した土坑墓（SF13）が台状部に位置するが、いずれも西縁に寄っている。土器棺墓（SF18・19）も西寄りに位置している。一方、東の周溝墓外にも土坑墓が多く認められている。周溝に重なる埋葬施設も少なくないことから、この墓群の形成期間は長期にわたり、



第117図　3　区

1 表土
2 灰色砂質土
3 灰褐色砂質土
4 暗褐色砂質土　炭化粒含む
5 褐色砂質土
6 黄褐色砂質土
7 褐色砂質土
8 黄褐色砂質土
9 褐色砂質土
10 灰褐色砂質土
11 暗灰褐色砂質土　炭化粒含む
12 暗褐色砂質土　炭化粒含む
13 黄褐色砂質土　炭化粒含む
14 暗褐色砂質土
15 褐色砂質土　炭化粒含む
16 暗黄褐色砂質土　炭化粒含む
17 黒褐色砂質土　炭化粒含む
18 暗灰色砂層
19 褐色砂質土
20 褐色砂質土
21 暗灰色砂質土
22 暗褐色砂質土
23 灰褐色砂質土
24 灰色砂層
25 暗褐色砂質土　炭化粒含む
26 褐色砂質土
27 暗灰褐色砂質土　炭化粒含む
28 灰褐色砂質土
29 暗褐色砂質土
30 灰褐色砂質土
31 明褐色砂質土
32 黄褐色砂質土
33 褐色砂質土
34 黄褐色砂質土
35 褐色砂質土

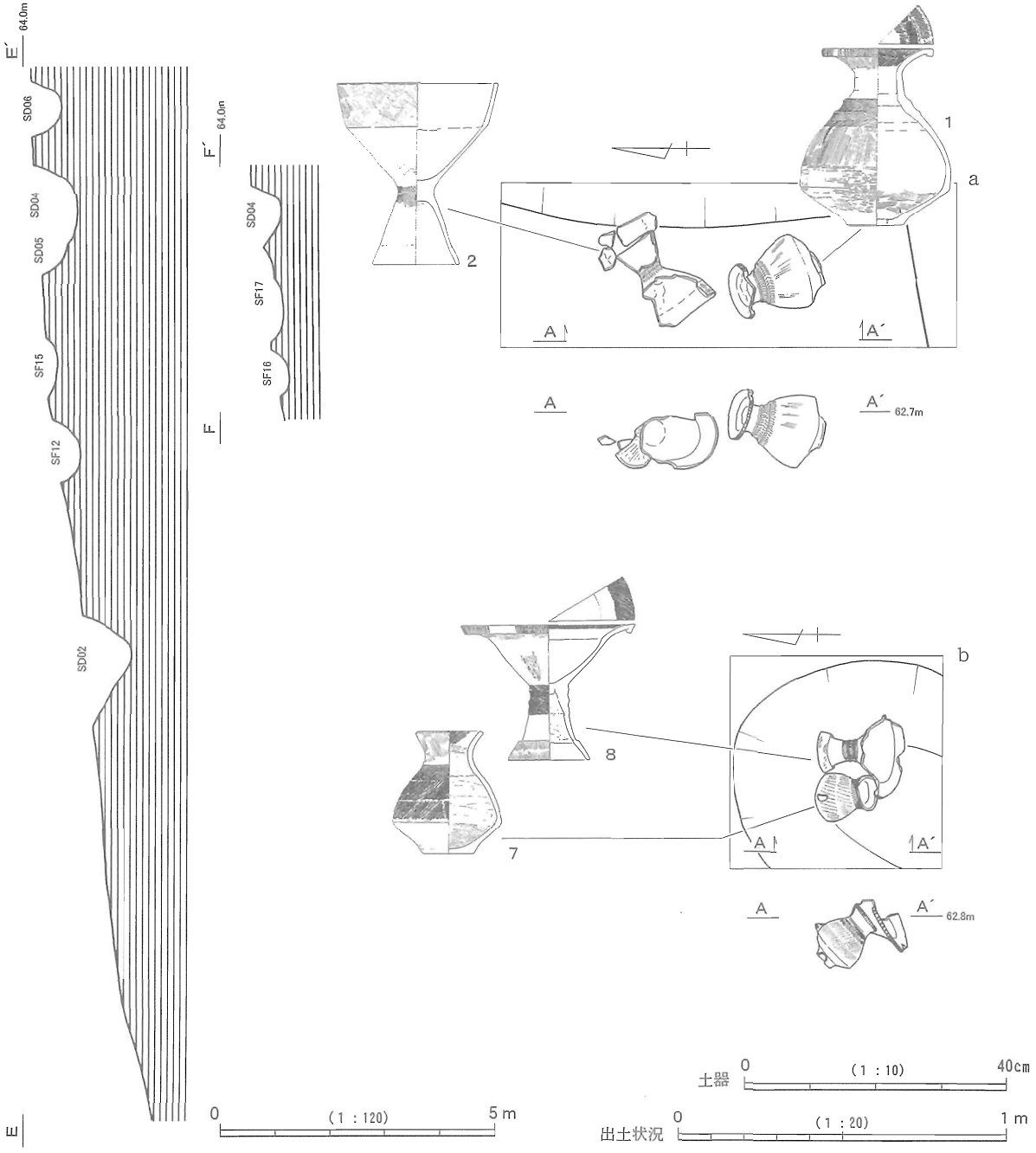
第118図　H群（1号周溝墓）1

土坑墓群の段階と１号周溝墓の段階があった可能性が指摘できる。なお、SD01も弥生時代の墓群に伴う溝であると判断できるが、その性格についてはわからない。本遺構群は調査区の南側へと広がっており、そこでの状況が明らかになれば、さらに異なる様相が確認できる可能性もある。

出土土器には、土器棺のほかに周溝墓や埋葬施設に供献された土器がある。残存状況は比較的良い。また、SF03の管玉・ガラス小玉、SF13の銅鏃、SF14のガラス小玉といった副葬品も出土している。

(１)溝

SD01（第118図）　３区東部に位置する。丘陵の北側斜面際に沿って東西にのびる溝であり、若干、南に凸の弧を描く。検出長10.2m、最大幅1.7m、深さは最大0.9m弱であるが、西部は浅くなる。覆土は



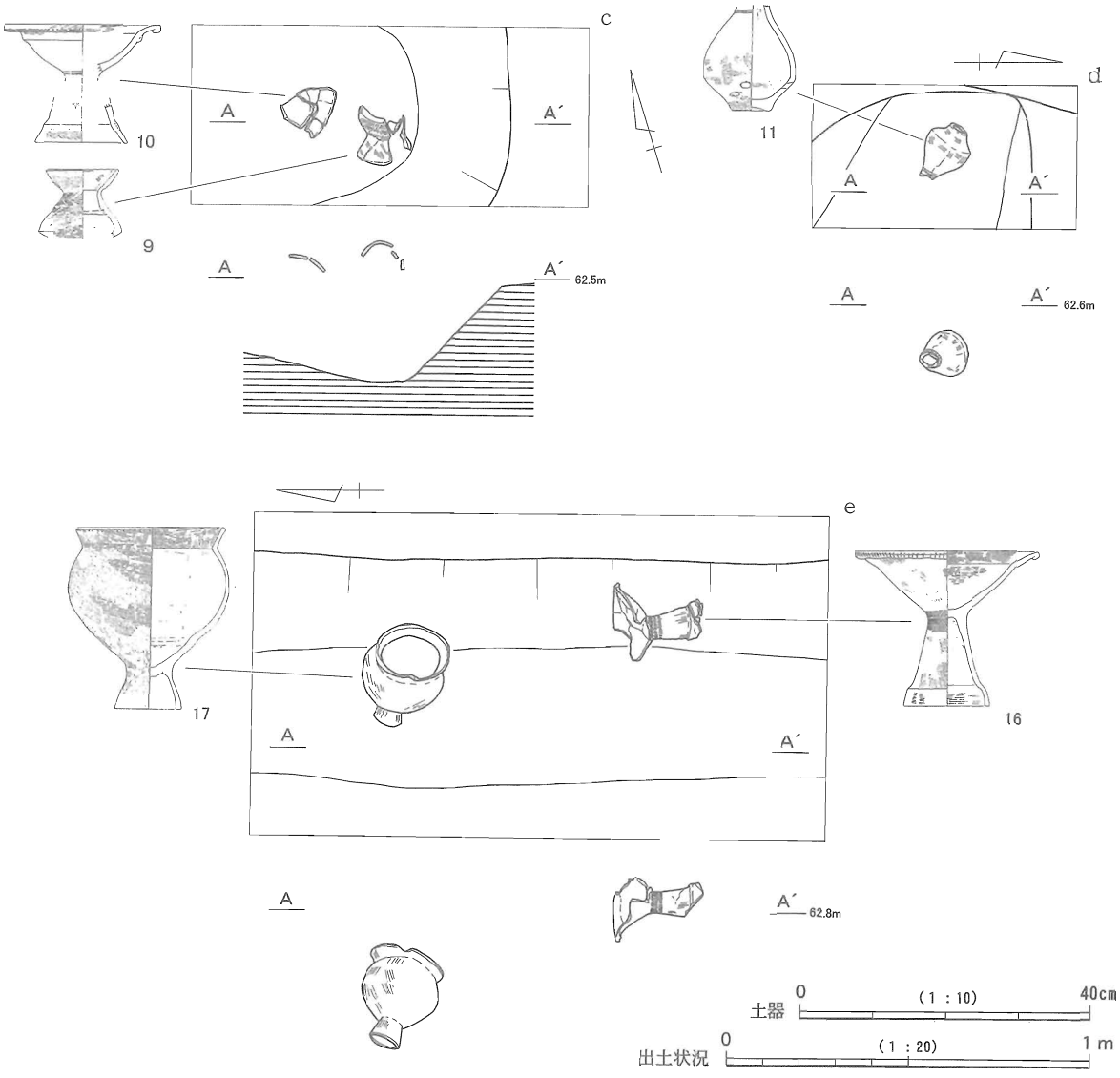
第119図　H群（１号周溝墓）２、H群土器出土状況１

灰褐色砂質土である。様々な遺構と重なるが、SF12・SX02・SX03よりも新しく、SD02～SD05・SF04よりも古いことが土層・出土遺物によって判断できる。覆土中から、弥生土器片（第133図11・13・14）が出土している。

南側の調査区外へとのびており、遺構の全体像および性格については推測し難い。しかし、遺構の特徴や出土遺物から、弥生時代後期前半～中葉の墓群に伴う溝であると判断することはできる。

SD02～SD05（第118～121図）　SD02・SD04は、１号周溝墓の周溝である。SD02は東辺、SD04は南・西・北辺にあたる。東西約9.5m、南北約11mの方形に廻り、溝の幅は最大2.0m、深さは最大0.9mである。溝は概ね全周するが、北東隅は途切れる。また、南辺の東半部が調査外になっているため、南東隅に溝が廻っているかは判断できない。覆土には黒褐色～褐色の砂質土が認められる。

１号周溝墓の東辺・西辺では、周溝の掘り返しが土層断面によって判明している。この掘り返した東辺溝をSD03、西辺溝をSD05とする。検出状況では、SD05の東縁だけがSD04の範囲外に現れ、大半はSD02・SD04の覆土中に収まってしまう。しかし、土層断面などによって、次のように把握することができた。いずれも幅1.0m弱、深さ0.5m弱の溝であり、SD03は長さ約4.8m、SD05は長さ約5.5mに復元



第120図　H群土器出土状況２

できる。さらに、調査区南壁付近で南辺へと曲がることがわかっている。覆土は暗褐色砂質土である。

土層の観察によって、SD02～SD05がSD01・SX02より新しく、SD04がSF19より古いと判断できる。しかし、SF09・SF10との先後関係を土層から判断することはできなかった。また、各溝からは、多くの弥生土器が出土している（第120・121図）。出土位置から、第134図16～19と第135図27はSD03の出土、第135図20～26はSD04の出土であると判断できる。

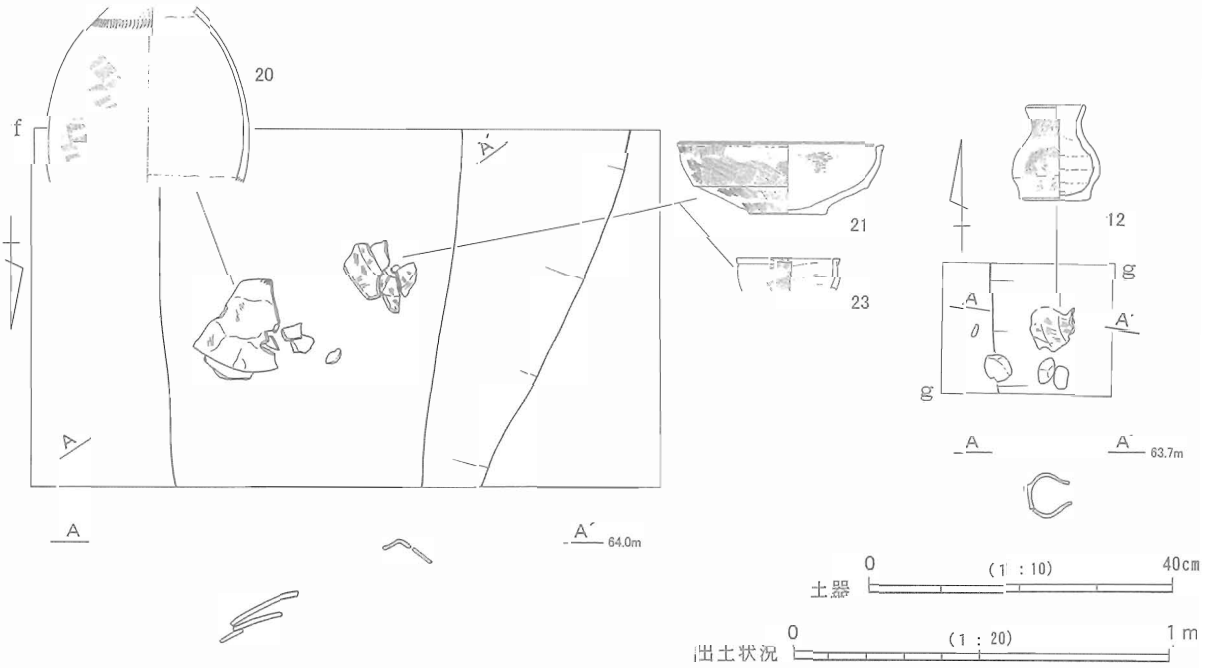
遺構の特徴や出土遺物から、SD02・SD04およびSD03・SD05は1号周溝墓の周溝であり、弥生時代後期中葉～後半の間に設けられ、また掘り返されたと判断できる。さらに、検出遺構の多くは下層が明るく上層が暗い砂質土を覆土とするが、SD02・SD04の最上層は、下層よりも明るい褐色砂質土（第118図5・9・10層）で占められている。SD03・SD05の掘り返しに際して人為的に埋められた土層である可能性が考慮される。

なお、SD02の南部に台状部側へと幅が広がる部分がある（以下、SD02幅広部）。文殊堂遺跡の2号周溝墓などとの類似性（本書第4章）から、この部分が埋葬施設（土坑墓）であった可能性が指摘できる。

(2) 土坑墓

SF03・SF04（第122図）　3区東端部に位置する。SF03は2.4m弱×2.4m以上の長楕円形で深さ約0.9m、SF04は1.8m前後×3.0m以上の長楕円形で深さ0.4m強である。SF03は上部にテラス部を伴う土坑であり、下部は約1.8m×2.2m程の長楕円～長方形を呈している。主軸は丘陵筋に直行し、南北に近い。2基の土坑は南北に並んで接するが、土層からSF03の方が古いことが判断できている。覆土は暗～灰褐色砂質土であり、ともに木棺の痕跡は認められていない。SF03からは管玉（第139図38）とガラス小玉（第139図39～47）、SF04からは弥生土器（第132図1～6）が出土している。土器は上層からの出土であり、SF04もしくは周辺の土坑墓に対する供献土器であると判断できる（第119図）。一方、ガラス小玉はSF03の副葬品である可能性が高いが、詳細な出土位置は特定できなかった。

遺構の特徴や出土遺物から、SF03は弥生時代後期の土坑墓、SF04は後期後半～末頃の土坑墓である可能性が高いと判断できる。



第121図　H群土器出土状況3

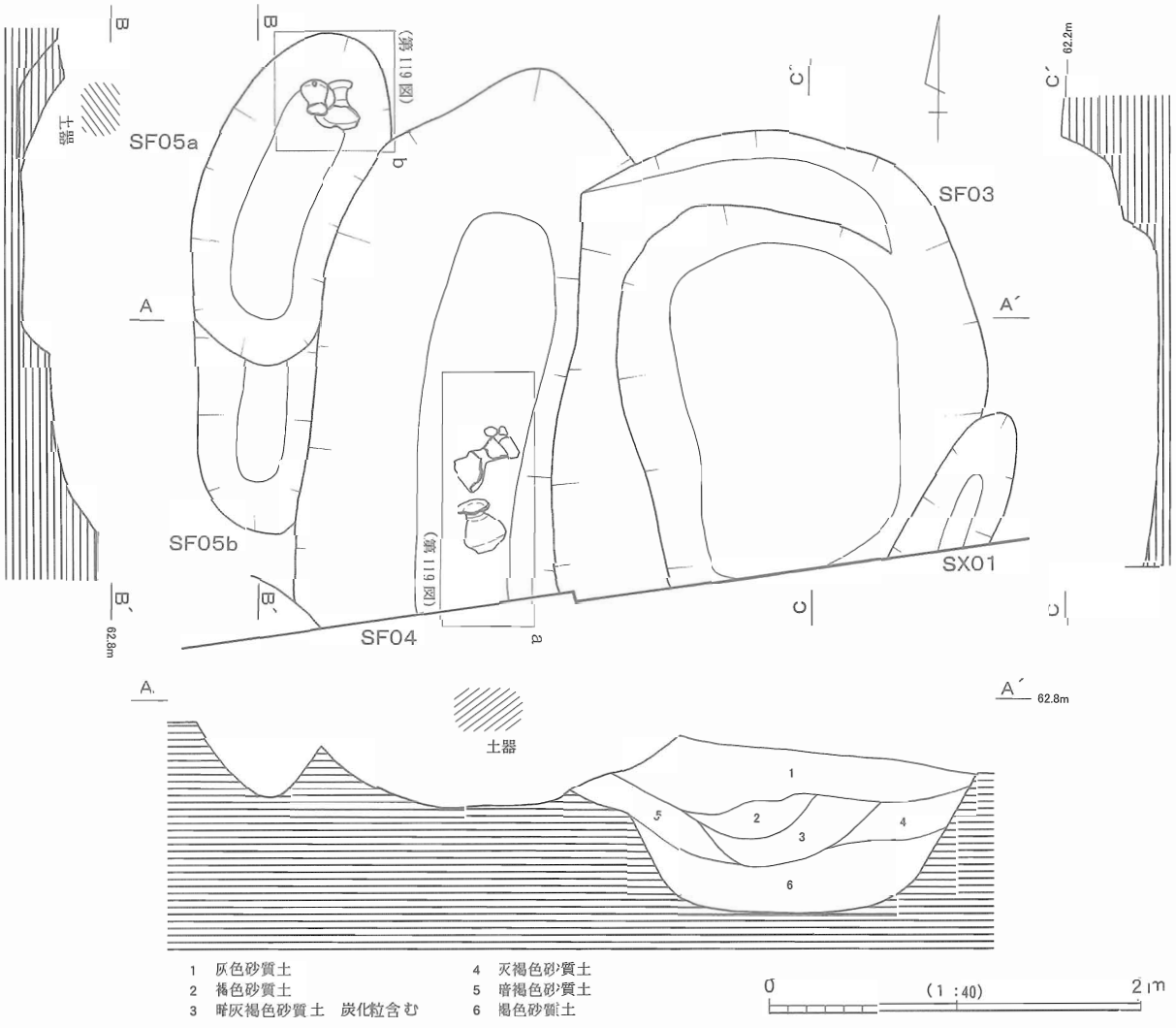
SF05ａ・ｂ（第122図）　3区東端部に位置する。SF05aは0.8m強×1.8m強の長楕円形で深さ0.4m強、SF05bは0.6m強×1.2m以上の長楕円形で深さ0.3m弱である。ともに主軸は丘陵筋に直行する。両者は一部が重なり、土層によってSF05aの方が新しいと判断できている。一方、隣接するSF04との先後関係については、土層による判断ができなかった。覆土は暗褐色砂質土であり、木棺の痕跡は認められない。SF05a北部の上層から壷（第133図７）と高坏（第133図８）が出土している（第119図）。

遺構の特徴や出土遺物から、弥生時代後期中葉頃の土坑墓である可能性が高いと判断できる。

SF06・SF07（第123図）　3区東端部に位置する。SF06は約0.9m×2.0m強の長楕円形で深さ0.4m弱、SF07は約1.0m×2.1m以上の長楕円形で深さ0.4m弱である。ともに主軸は丘陵筋に平行し、東西に近い。頭位・埋葬姿勢と関係するのか、SF06の底面は西に向かって高くなる。両土坑は一部が重なるが、土層による先後関係の判断はできなかった。一方、土層によってSF07はSF08よりも古いと判断できている。覆土は暗灰褐色砂質土であり、木棺の痕跡は認められない。出土遺物はない。

遺構の特徴や周囲の出土遺物から、弥生時代後期の土坑墓である可能性が高いと判断できる。

SF08・SF09・SF10（第123・124図）　3区東部に位置する。SF08は約1.3m×2.2m強の長楕円形で深さ0.3m弱、SF09は1.6m弱×約2.0mの長楕円形で深さ約0.6m、SF10は1.6m強×2.6m以上の長楕円形で深さ約0.4mである。いずれの主軸も丘陵筋に平行する。さまざまな遺構と重なるが、土層からは



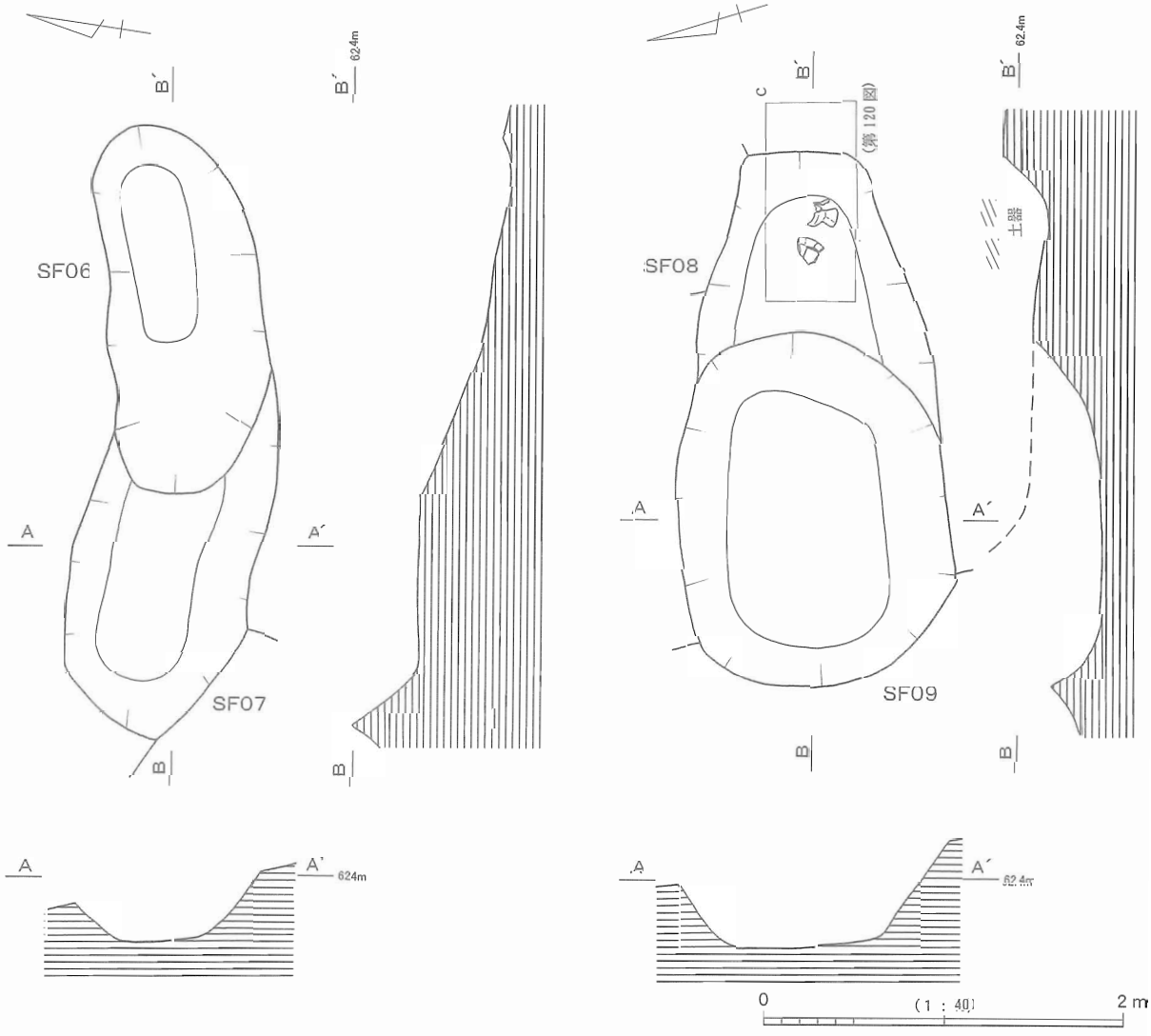
第122図　SF03～SF05、SX01

SF08がSF07・SF09より新しいことだけしか判断できなかった。覆土は概ね暗灰褐色砂質土であり、木棺の痕跡は認められない。SF08の上層から壷（第133図9）と高坏（第133図10）が出土している（第120図）。また、SF10の覆土中からも土器片が出土している。

遺構の特徴や出土遺物から、SF08は弥生時代後期後半、SF09・SF10も弥生時代後期の土坑墓である可能性が高いと判断できる。

SF11（第125図）　3区東部、SD02の底面に位置する。約0.5m×0.8mの長方形で、SD02底面からの深さは0.1m弱である。覆土はSD02最下層と同様の黒褐色砂質土であり、土層によるSD02との先後関係の判断はできなかった。SF11内からの出土遺物はないが、上層のSD02覆土中からは土器片の出土が認められている。

SF11は非常に小さく、土坑墓の可能性があるSD02幅広部の底面に位置している。SD02幅広部との関連性が評価され、弥生時代後期の土坑墓に付属する施設であった可能性が指摘できる。SF11自体が（子供などの）埋葬部であった可能性も否定できない。



第123図　SF06～SF09

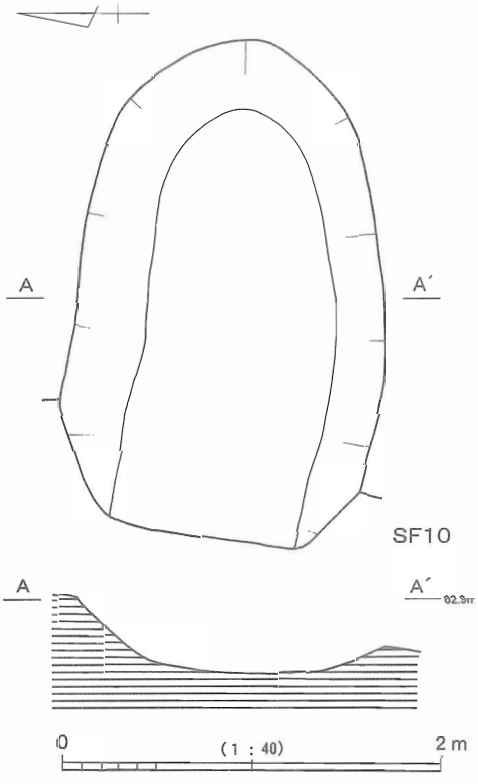
SF12（第118図）　3区東部に位置する。約1.4m×1.9m程の長楕円形で、深さは0.5m弱である。主軸は、丘陵筋および方位に対して斜行する。覆土は灰褐色砂質土である。SD01と一部が重なるが、土層からSF12の方が古いと判断できている。出土遺物はない。

遺構の特徴などから、弥生時代後期の土坑墓である可能性が指摘できる。しかし、1号周溝墓に伴う埋葬施設であるとは判断できない。台状部の中央に位置してはいるが、主軸方向は斜行している。また、遺構間の切り合い関係をみると、周溝墓よりも古い時期の遺構であると判断できる。

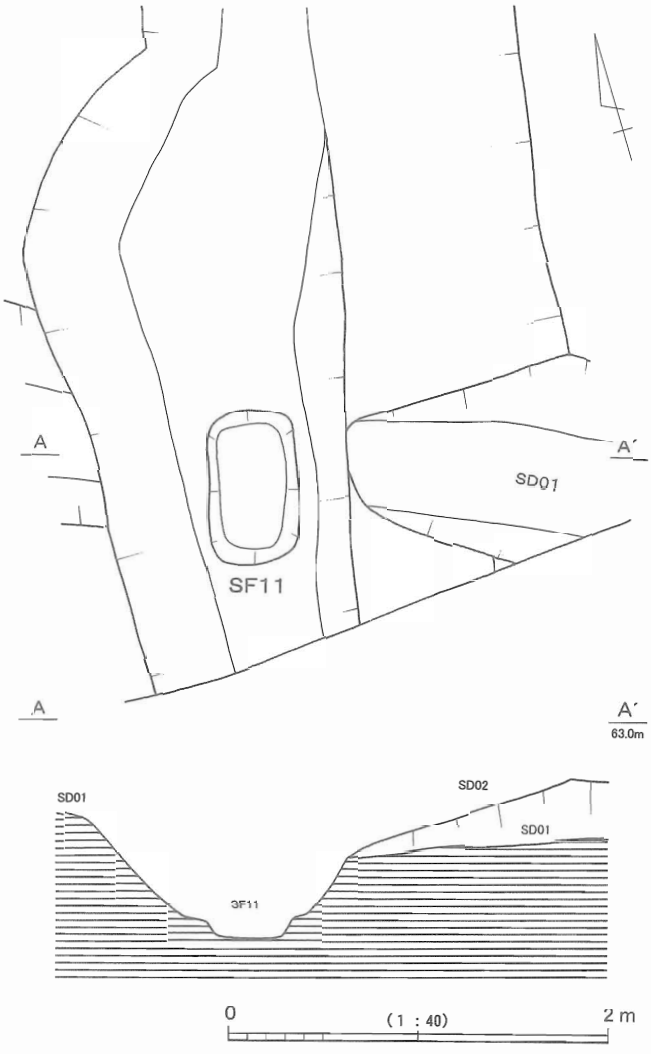
SF13（第126図）　3区東部に位置する。約0.8m×1.7m強の長方形で、深さは0.3m強である。主軸は丘陵筋に平行し、東西に近い。頭位・埋葬姿勢との関連か、底面が西に向かって高くなっている。また、北西隅の壁面中位に平坦部が設けられている。覆土は、灰～暗褐色砂質土が大半を占めている。

西寄りの下層（底面付近）で、銅鏃2点（第140図52・53）が出土している。出土状況などから副葬品であると判断できる。一方、西端部の上層では、小型壷（第133図12）が出土している。出土状況から供献土器であると判断することができる。

遺構の特徴や出土遺物から、弥生時代後期の土坑墓であると判断することができる。弥生時代後期中葉後半の1号周溝墓に伴う可能性も考慮される。ただし、台状部の中央には位置していない。なお、比較的整った形状の土坑であること、土層断面図の第5層が確認されていることから、木棺が用いられた



第124図　SF10

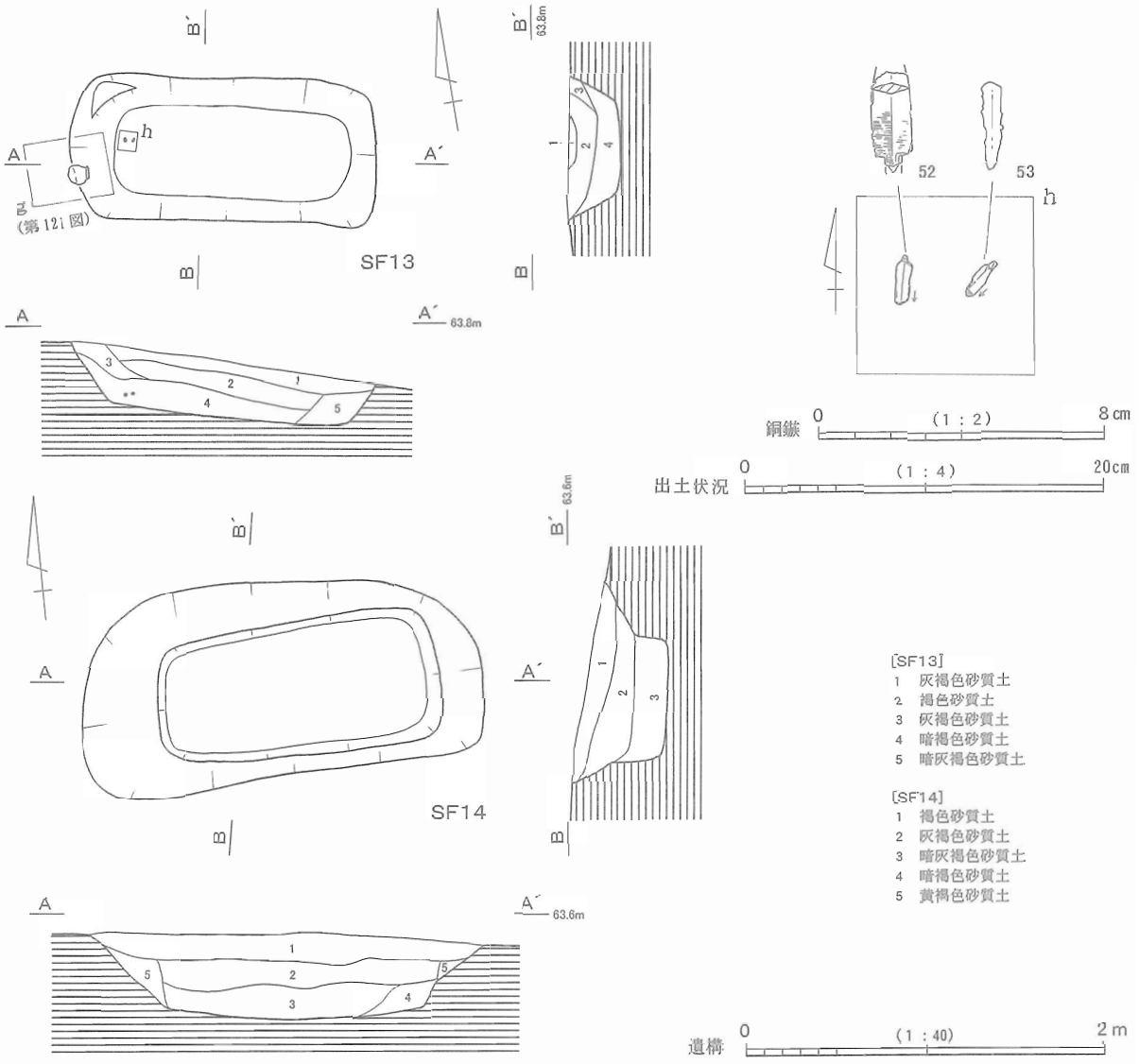


第125図　SF11

可能性を指摘することができる。木棺墓であるとするならば、約0.5m×1.1m程度の箱形木棺が用いられていたと推測できる。

SF14（第126図）　3区東部に位置する。約1.1m×2.2m強の長楕円～長方形で、深さは約0.5mである。主軸は丘陵筋に平行し、東西に近い。底面の傾斜はないが、幅が西に向かって広がる。覆土は、灰～暗褐色砂質土が大半を占める。覆土中からガラス小玉（第139図48～51）が出土している。副葬品である可能性が考えられるが、詳細な出土位置を特定することはできなかった。

遺構の特徴や出土位置から、弥生時代後期の土坑墓であると判断することができる。弥生時代後期中葉～後半の1号周溝墓に伴う埋葬施設である可能性も考慮されるが、台状部の中央には位置していない。なお、遺構の形状や土層断面図の第4・5層の把握によって、木棺が用いられたと判断することができる。木棺自体は残存していないが、遺構の形状や第4・5層の状況から、0.7m弱×1.4m程の箱形木棺が用いられたと推測することができる。



第126図　SF13・SF14

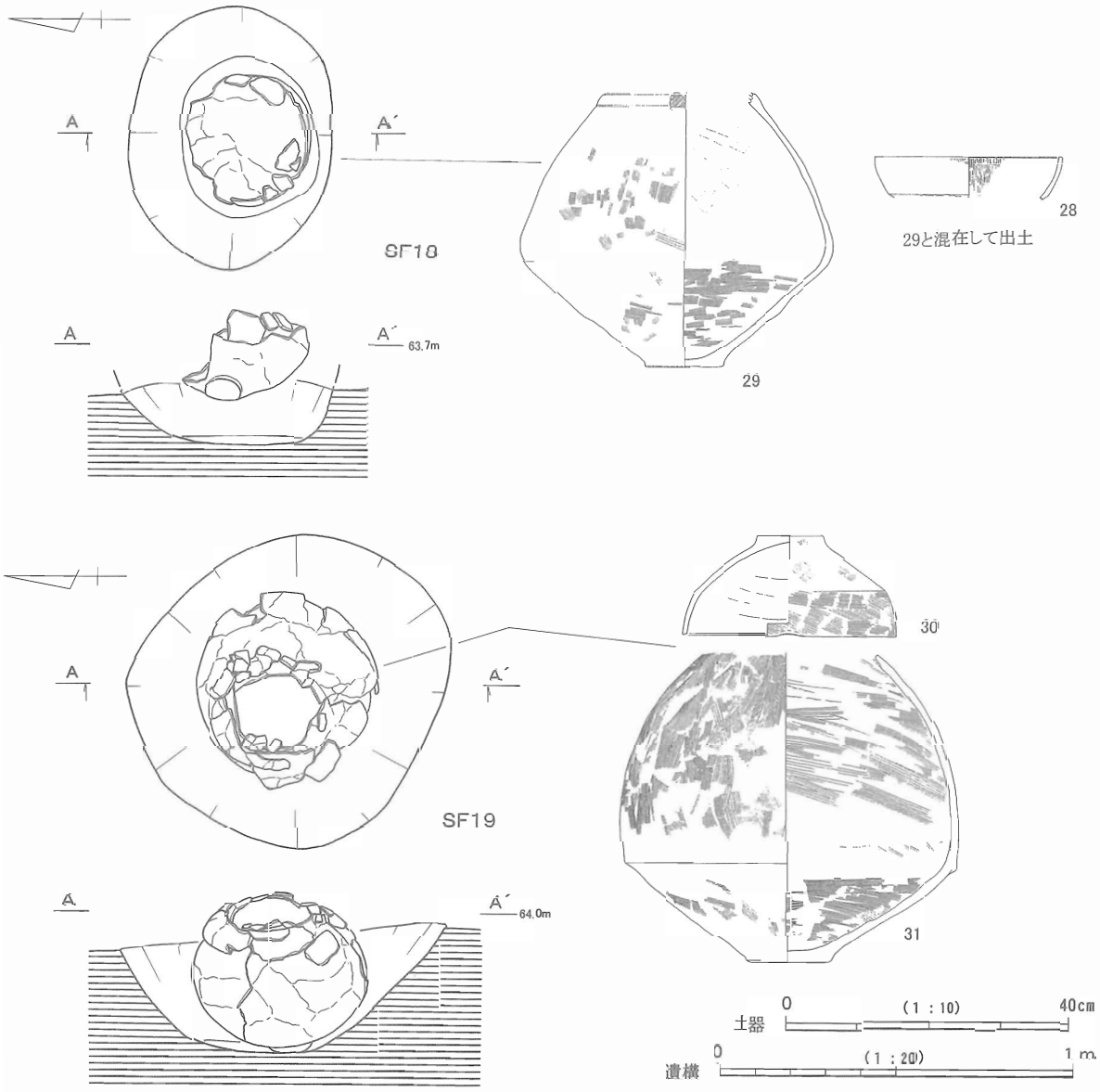
(3) 土器棺墓

SF18（第127図）　3区東部、1号周溝墓の台状部の西縁に位置する。土坑は最大径0.8m弱の楕円形を呈する。深さは約0.2mであるが、本来はより深かったと推測できる。覆土は暗灰褐色砂質土である。この土坑の中央に土器棺が埋置されていた。土器棺は、上部が大きく削平されていた。

土器棺の身は、胴部最大径0.4m強の壷（第136図29）である。口縁部側を南東に傾けて置かれていた。ただし、上部の削平に伴って傾いた可能性もあり、本来は正位であったかもしれない。頸部以上は破片でも出土していない。削平のために確実であるとはいえないが、頸部以上を欠いた状態で用いられた可能性が指摘できる。また、上部の破片と混在して、蓋の可能性が指摘できる鉢の口縁部片（第136図28）が出土している。内部には砂質土が流入しており、副葬品などの出土はなかった。

土器棺の形態などから、弥生時代後期中葉～後半の土器棺墓の可能性が高いと判断できる。

SF19（第127図）　3区東部、1号周溝墓の西縁に位置する。土坑は最大径約0.9mの楕円形を呈する。深さは0.4m弱であるが、本来はより深かったと推測できる。覆土は暗灰褐色砂質土である。この土坑の中央に土器棺が埋置されていた。上部が若干壊れていたが、比較的良好な残存状況である。



第127図　SF18・SF19

土器棺の身は、胴部最大径0.5m弱の壷（第137図31）である。口縁部側をやや西に傾けて置かれていた。頸部以上の出土は破片でも認められず、頸部以上を欠いた状態で用いられたと考えられる。土器棺の蓋は、口径約0.3mの片口鉢（第137図30）である。出土状況から、逆位にして壷の上に置かれたことがわかる。土器棺内には砂質土が流入しており、副葬品などの出土はなかった。

土器棺の形態などから、弥生時代後期中葉～後半の土器棺墓である可能性が高いと判断できる。また、1号周溝墓の周溝であるSD04とは重なっており、出土状況などからSD04埋没後にSF19が設けられたと判断できる。したがって、SD04を掘り返したSD05に近い時期に設けられた可能性が評価される。

(4) その他

SF01（第118図）　3区東端部に位置する。1.3m強×2.1m以上の長楕円形で、深さは0.4m弱である。覆土は暗灰褐色砂質土である。出土遺物はない。平面形や覆土からは弥生時代後期の土坑墓である可能性も指摘できるが、主軸方向が丘陵に斜行している点や壁の傾斜が緩い点などから、埋葬施設ではない可能性もある。

SF02（第118図）　3区東端部に位置する。最大径約1.4mの楕円形を呈する。覆土は黄褐色砂質土であり、周囲に多く分布する弥生時代の土坑墓などとは異なる。出土遺物はない。以上の特徴から、時期・性格を明確にすることはできない。弥生時代後期の墓群に伴う遺構であるのかも判断し難い。

SF15～SF17（第118・119図）　いずれも3区東部、1号周溝墓の台状部の西寄りに位置する。SF15は径約1.1mの円形で深さ約0.2m、SF16は径約0.9mの円形で深さ0.4m弱、SF17は0.8m弱×約1.7mの長楕円形で深さ約0.4mである。覆土は灰褐色砂質土を主とする。弥生時代の遺構である可能性はあるが、遺構の性格を特定することは難しい。

SP01（第118図）　3区東部の北側斜面に位置する。径0.7m弱の円形で、深さは0.1m弱である。非常に浅い遺構であり、時期・性格の特定は困難である。弥生時代の墓群としては類例がほとんどない遺構である。

SX01（第118・122図）　3区東端部に位置する。0.4m強×1.0m以上の長楕円形で、深さは約0.7mである。覆土は明褐色や黄褐色の砂質土で占められており、周囲に多く分布する弥生時代の土坑墓などとは異なる。出土遺物はない。以上の特徴から、時期・性格を明確にすることはできない。ただし、重複する弥生時代後期の土坑墓であるSF03よりも古いことが、土層から判断できている。

SX02・SX03（第118図）　3区東部の調査区南縁部に位置する。SX02は、約1.4m四方の範囲で検出されたが、検出範囲が狭いために形状などは把握し難い。出土遺物はない。一方、SX03は東西幅約1.9m、南北長1.6m以上、深さ約0.3mの遺構であり、土坑もしくは溝の可能性が指摘できる。出土遺物はない。覆土は暗灰褐色砂質土であり、周囲に分布する弥生時代の墓群に伴う遺構と類似する。いずれの遺構も、弥生時代後期の墓群に伴う遺構である可能性が高いと考えられるが、どのような遺構であるのかは判断が難しい。

2．I　群

3区の西半部、東西約20mの範囲にある遺構群である。調査区は、丘陵の頂上筋から北側斜面にかけた範囲に限られている。遺構の分布をみても、この遺構群の範囲が調査区よりも南へ広がることは明らかである。すなわち、遺構群の全体を調査・検出したわけではない。

尾根上で数基の土坑（SF20～SF28）が検出され、北側斜面際では丘陵筋に平行する溝（SD07～SD09）、東寄りでは丘陵を横断する溝（SD06）が検出されている。東寄りに位置するSF20～SF25やSD06については、形状・覆土や出土遺物から、弥生時代後期の墓域に関連した遺構であると判断できる。SF20は土器棺墓であり、SF20～SF25は土坑墓の可能性が高い。なお、SD07を含めれば、そこに方形周溝墓のあった可能性も指摘することができる。しかし、残存するはずの西辺の周溝が認められないこと、遺物の出土が全体的に少ないことなどから、積極的に評価することはできない。SD07は非常に浅い溝であり、弥生時代の墓域に伴う遺構ではない可能性もある。以上から、本遺構群は周溝墓とは異なる弥生時代後期の墓群（埋葬施設群）であると評価した。

(1) 溝

SD06（第128図）　3区中央部に位置する。丘陵を横断するように、南北方向にのびる溝である。幅は約1.1mである。約4.8mの長さを検出したが、さらに南側調査区外へとのびる。深さは約0.8mであり、北端部が深くなる。覆土は灰褐色などの砂質土である。SF19・SF21と重なるが、土層によってSF21・SF19よりも古いと判断できている。覆土中から弥生土器片が出土している。

遺構の特徴や出土遺物から、弥生時代後期の墓群に伴う区画溝である可能性が高いと判断できる。しかし、先述のとおり、本遺構群（I群）に周溝墓が存在する可能性を評価することはできない。したがって、SD06はI群の東区画ではなく、1号周溝墓とは異なる段階の、H群の西区画であった可能性も指摘することができる。いずれかの判断は、南側調査区外の状況によって異なると考える。

SD07（第128図）　3区中央部に位置する。丘陵上平坦部の北側斜面際に立地し、丘陵筋に沿って東西にのびる溝である。幅0.8m強、長さ約5.5mが検出されている。深さは約0.2mと浅い。覆土は灰褐色砂質土であり、弥生土器の小破片（第133図15）が出土している。

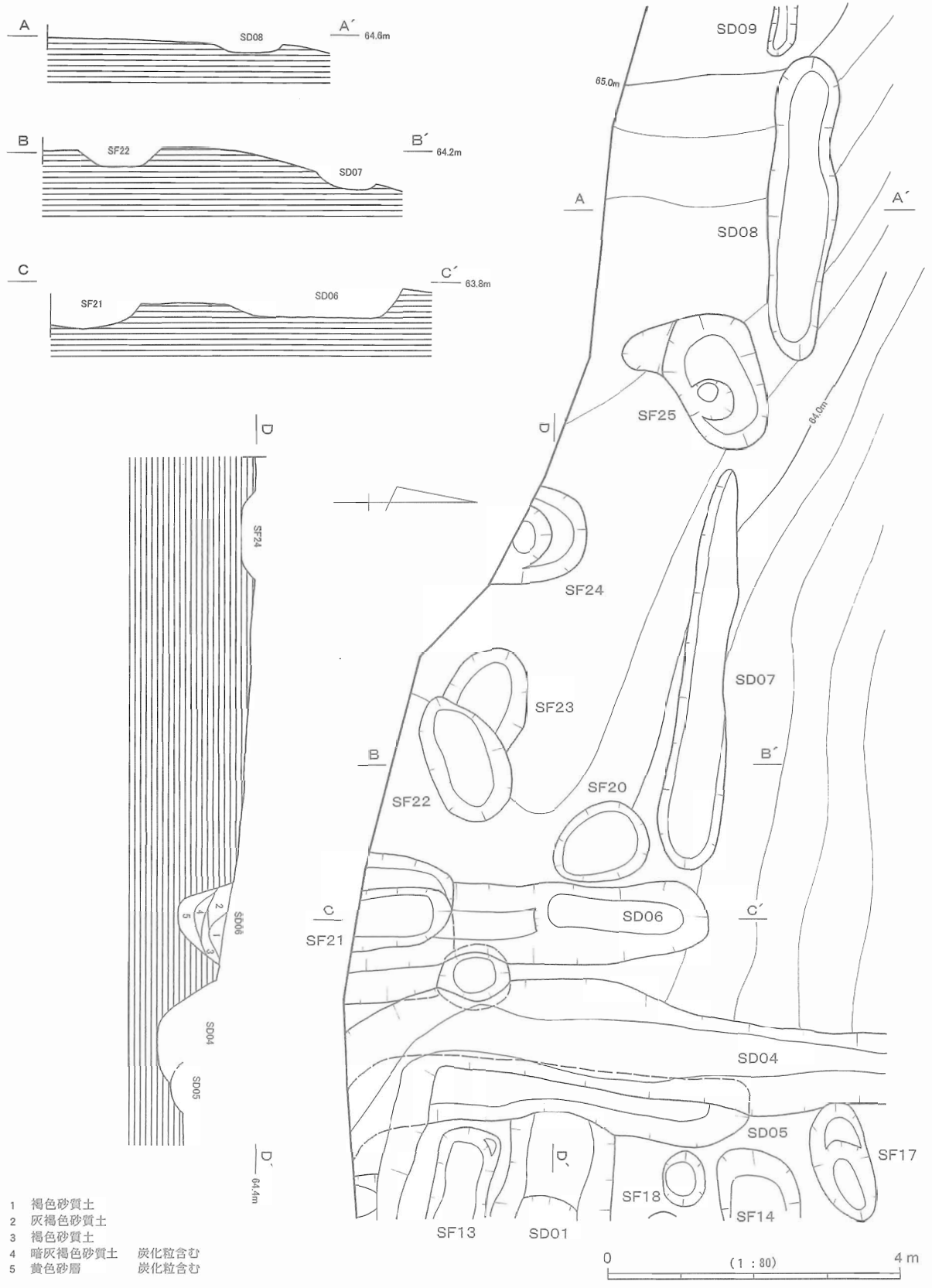
遺構の形状などは、弥生時代の周溝墓の北側周溝であるようにみえる。しかし、先述のとおり、本遺構群（I群）に周溝墓が存在する可能性を評価することはできない。したがって、SD07の時期・性格の特定は難しく、弥生時代の墓群に伴わない可能性もある。

SD08（第128図）　3区西部に位置する。丘陵上平坦部の北側斜面際に位置し、丘陵筋に沿って東西にのびる溝である。幅1.0m弱、長さ約4.2mであり、深さは約0.1mと浅い。出土遺物はない。

平面形や位置・方向などの特徴は、弥生時代の周溝墓の周溝であっても問題ないものである。しかし、非常に浅い溝であり、出土遺物もないことから、時期・性格の特定はできない。

SD09（第117・131図）　3区西部に位置する。丘陵上平坦部の北側斜面際に位置し、丘陵筋に沿って東西にのびる溝である。幅0.4m弱、長さは約9.0m以上であり、西側調査区外へとのびる。深さは0.1m強と浅い。土層によってSF26より新しいことがわかっている。出土遺物はない。

形状などの特徴は、弥生時代の周溝墓の周溝にはないものである。時期・性格の特定は難しいが、弥生時代の墓群とは無関係であると判断できる。陶磁器の小破片の出土が周辺であることから、近世以降の溝である可能性も指摘できる。


A
SD08
A´
64.8m
B
SF22
SD07
B´
64.2m
C
SF21
SD06
C´
63.8m
D
SF24
SD06
SD04
SD05
D´
64.4m
1 褐色砂質土
2 灰褐色砂質土
3 褐色砂質土
4 暗灰褐色砂質土 炭化粒含む
5 黄色砂層 炭化粒含む
SD09
65.0m
SF25
64.0m
SD07
SF23
SF20
SF22
SD06
SF21
SD04
SD05
SF17
SF18
SF14
SF13
SD01
0
(1 : 80)
4 m

第128図 Ⅰ群

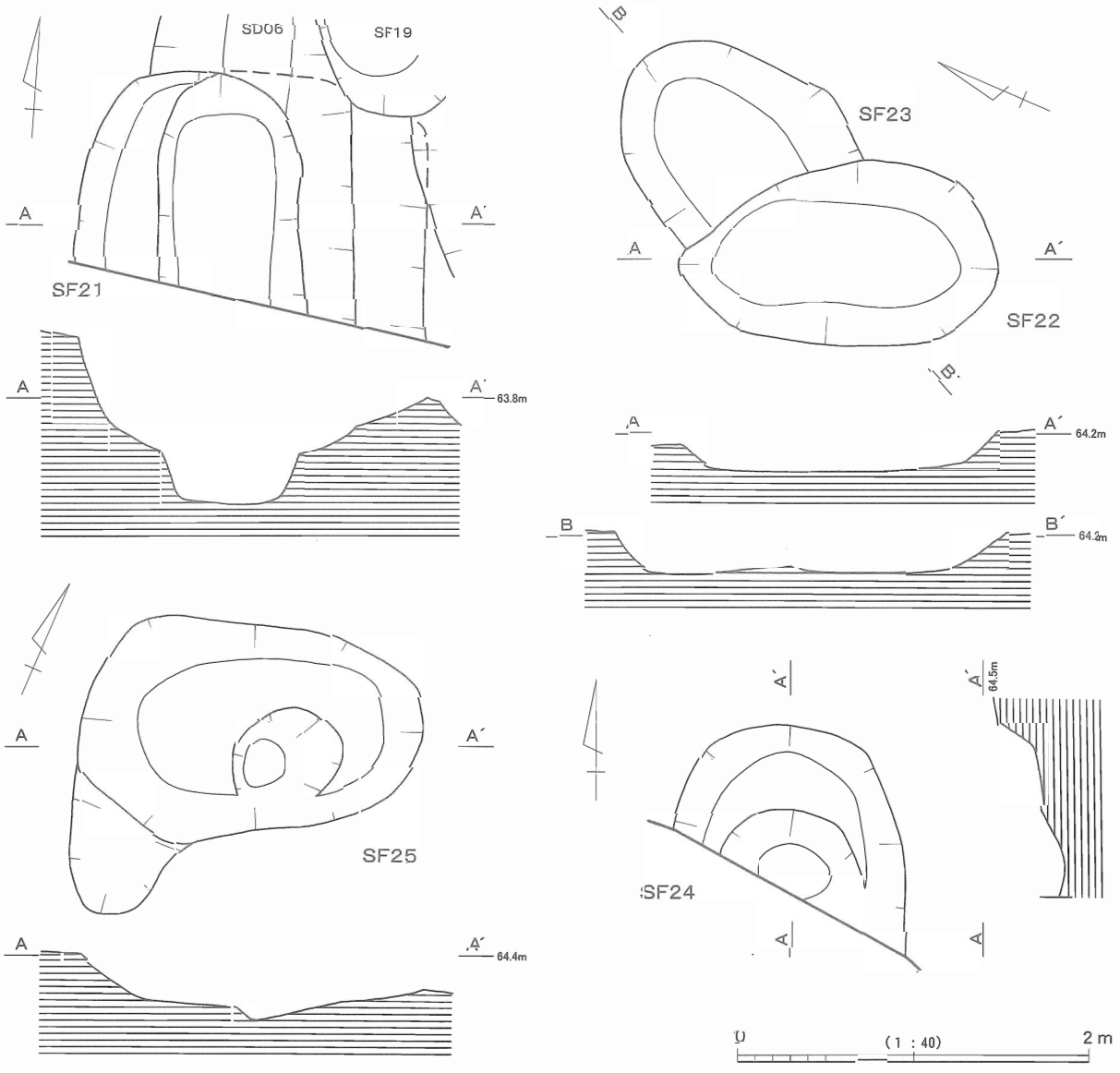
(2) 土坑墓

SF21（第129図）　3区中央部に位置する。約2.0m×1.5m以上の長方形を呈するが、その中央に0.8m強×1.3m以上の長楕円形部分を伴う。深さは、長楕円形部分が約0.9m、その周囲は約0.6mである。主軸は丘陵筋に直行する。覆土は暗褐色砂質土であり、木棺の痕跡は認められない。SD06と重なるが、土層からSF21の方が新しいと判断できている。出土遺物はない。

遺構の特徴や周囲の出土遺物から、弥生時代後期の土坑墓である可能性が高いと判断できる。

SF22・SF23（第129図）　3区中央部に位置する。SF22は、約1.1m×約1.8mの長楕円形で、深さは約0.2mである。主軸は丘陵筋に平行する方向に近いが、やや斜行する。覆土は暗褐色砂質土であり、木棺の痕跡はない。一方のSF23は、約1.2m×1.2m以上の長楕円形で、深さは約0.2mである。主軸は丘陵筋にほぼ平行する。覆土は暗灰褐色砂質土であり、木棺の痕跡はない。出土遺物はない。

遺構の特徴や周囲の出土遺物から、ともに弥生時代後期の土坑墓である可能性が高いと判断できる。なお、SF22とSF23とは重なるが、土層からSF22の方が新しいと判断できている。



第129図　SF21～SF25

SF24（第129図）　3区中央部に位置する。1.2m強×1.2m以上の長楕円形を呈する。深さは0.4m弱であるが、中央部が0.1m程深くなる。主軸は丘陵筋に直行し、南北に近い。覆土は暗灰褐色砂質土であり、木棺の痕跡は認められない。また、出土遺物はない。

遺構の特徴や周囲の出土遺物などから、弥生時代後期の土坑墓である可能性が高いと判断できる。

SF25（第129図）　3区中央部に位置する。1.3m弱×2.0m弱の長楕円形を呈する。深さは約0.4mであるが、中央部南寄りに0.1m程深くなる部分を伴う。主軸は丘陵筋に斜行する。覆土は灰褐色砂質土であり、木棺の痕跡は認められない。また、出土遺物はない。

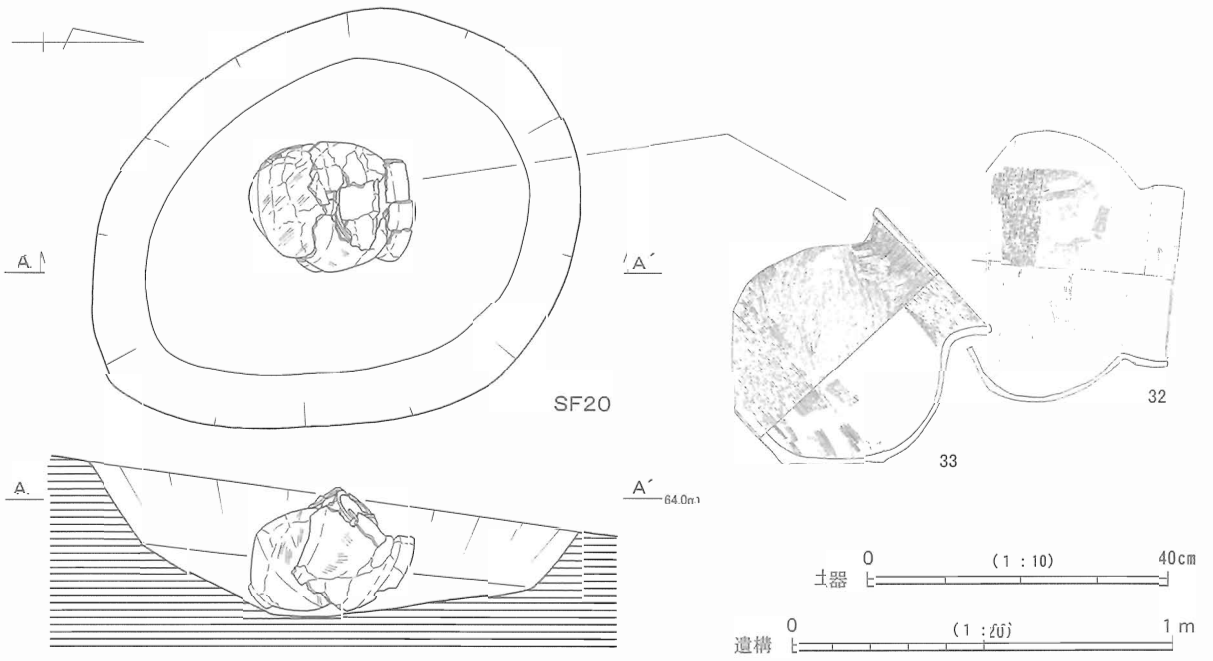
遺構の特徴や周囲の出土遺物から、弥生時代後期の土坑墓である可能性が高いと判断できる。

(3) 土器棺墓

SF20（第130図）　3区中央部、SD06北部の西側に位置する。土坑は1.1m弱×1.4m弱の楕円形を呈する。土器棺墓としては大きい。深さは0.3m強であるが、本来はより深かったと推測できる。覆土は灰褐色砂質土である。この土坑の中央に土器棺が埋置されていた。土圧の影響も認められるが、比較的良好な残存状況である。

土器棺の身は、胴部最大径約0.3mの壷（第138図33）である。どこも打ち欠くことなく、口縁部側を北側上方に傾けて置かれていた。蓋は、胴部最大径0.3m強の壷（第138図32）である。底部一帯および胴部～口縁部の一部が失われていたが、いずれも後世の影響が及んでいない部分での欠損である。出土状況から、底部一帯および胴部～口縁部の一部を打ち欠き、口縁部を北側下方に向けて、胴部内面を身の口縁部にあてるようにして蓋としたと復元できる。土器棺内には砂質土が流入しており、副葬品などの出土はなかった。

土器棺の形態などから、弥生時代後期末頃の土器棺墓である可能性が高いと判断できる。



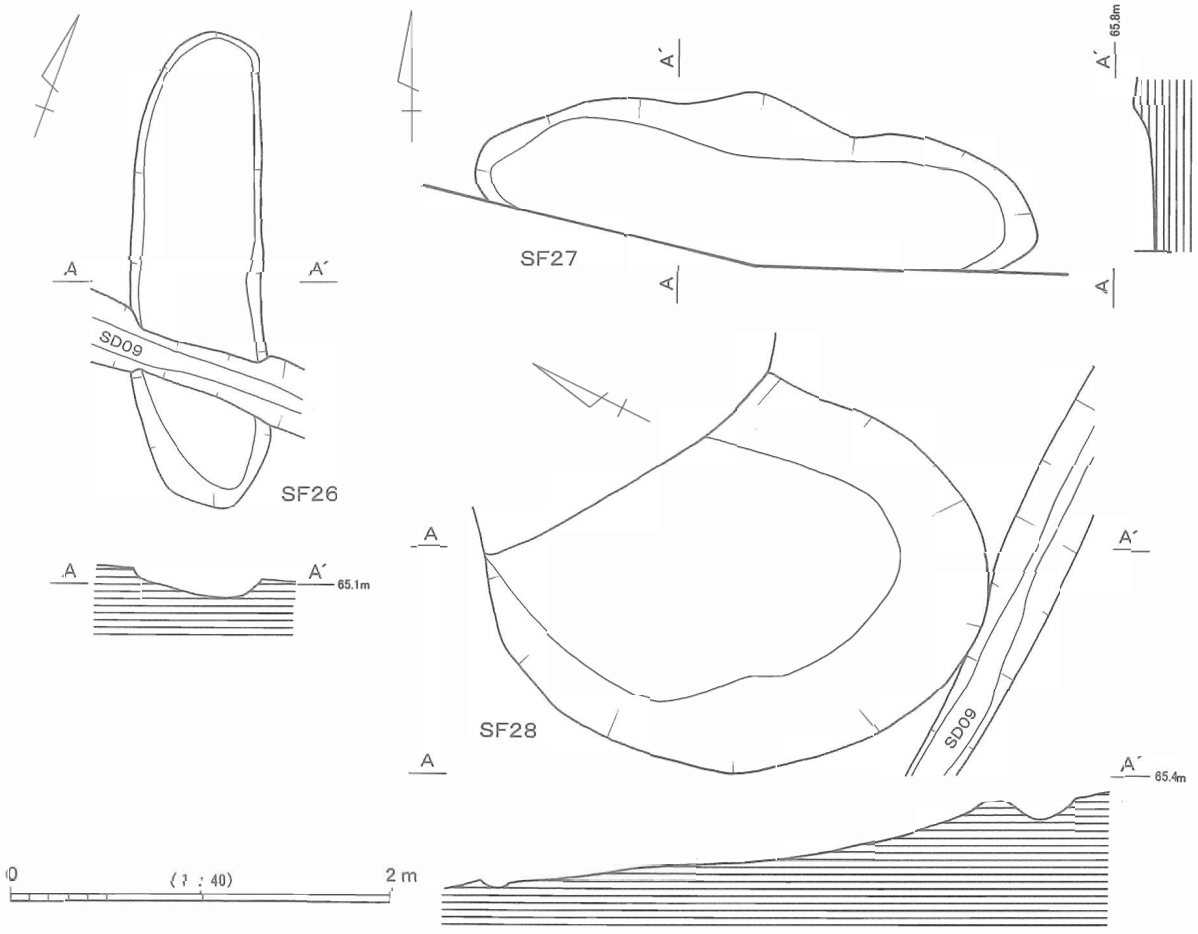
第130図　SF20

(4) その他

SF26（第131図）　3区西部に位置する。約0.7m×2.5mの長楕円形で、深さ約0.1mである。主軸は丘陵筋に斜行する。SD09と重なるが、土層によってSF26の方が古いと判断できている。出土遺物はない。弥生時代の土坑墓である可能性も否定できないが、主軸や深さなどの特徴は、土坑墓であるSF03～SF10やSF22～SF25などとは大きく異なる。時期および性格の特定は難しい。

SF27（第131図）　3区西部に位置する。0.9m以上×3.0m弱の長楕円形で、深さ約0.1mである。主軸は丘陵筋に平行する。出土遺物はない。弥生時代の土坑墓である可能性も否定できないが、主軸や深さなどの特徴は、土坑墓であるSF03～SF10やSF22～SF25などとは異なる。時期および性格の特定は難しい。

SF28（第131図）　3区西部に位置する。長軸2.6mの楕円形で、深さは約0.1mである。出土遺物はない。弥生時代の墓域に伴う可能性も否定できないが、周辺遺跡に展開する弥生時代の墓域関連遺構には、このような特徴をもつ遺構がほとんどない。時期および性格の特定は難しい。

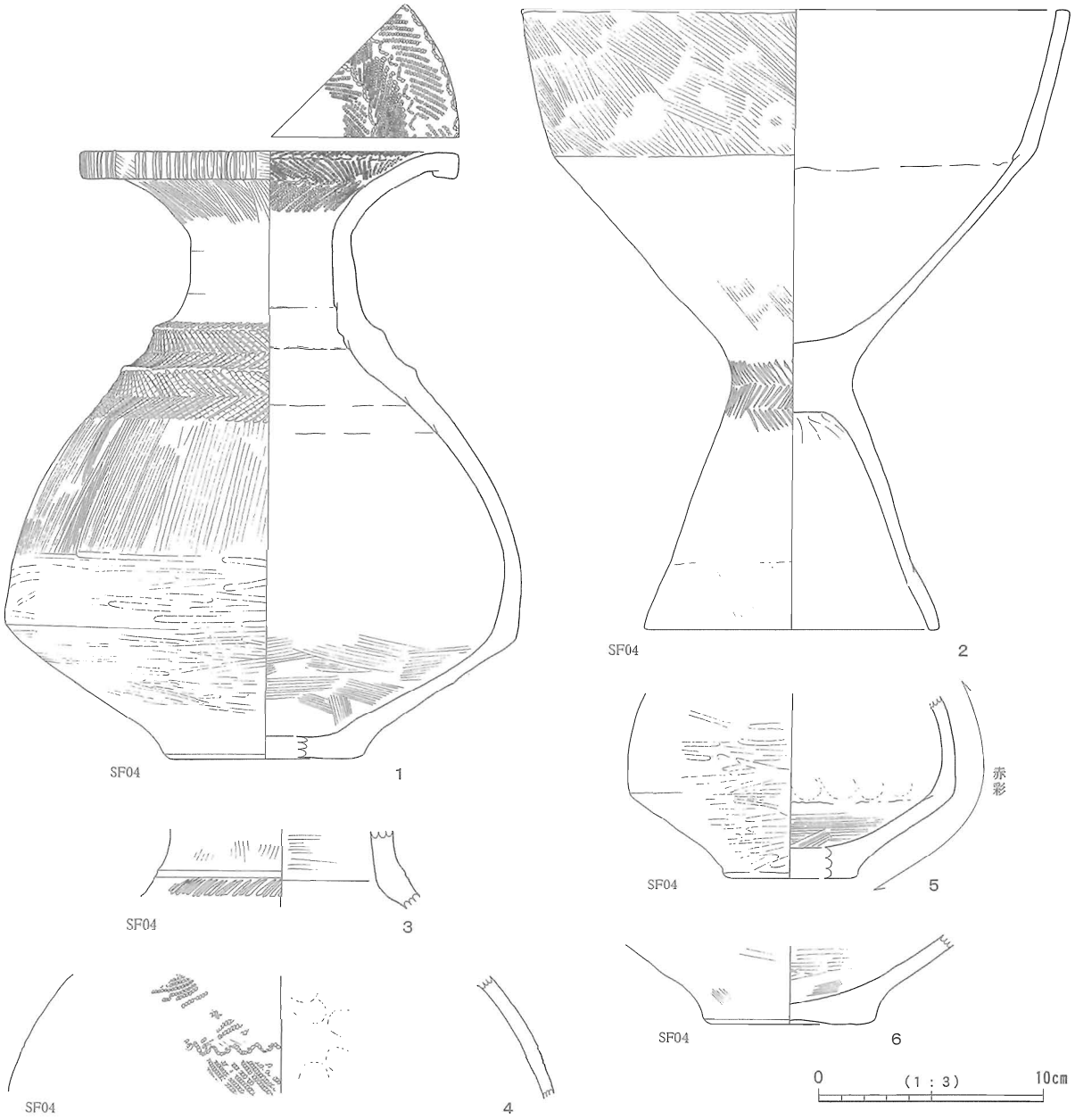


第131図　SF26～SF28

3．3区の出土遺物

(1) 弥生土器

SF04出土土器（第132図）　1・2は、SF04の上層で隣り合って出土した壷と高坏である（第119・122図）。1の壷は、底部付近が欠損している。底部は平底であり、胴部は下位で屈折する下膨れ形を呈する。頸部は直立する。口縁部は大きく開き、口縁端部には折り返しを伴う。頸部には横方向のナデ調整、胴部下半には横方向のミガキ調整が観察できる。一方、口縁部外面や胴部上半にはハケ調整が施されているが、縦方向に統一されており、文様的な効果を認めることができる。口縁端部外面では、14～19を単位とした縦方向の刺突が、7方向に施されている。口縁部内面には結節縄文が3段、肩部には5段の羽状刺突が廻る。2の高坏は、深い鉢形を呈する坏部が特徴的である。口縁部は、坏底部から屈折して直立に近く立ち上がる。その外面には、ハケ調整が観察できる。脚部との接合部には、3段の羽状



第132図　H・I群出土土器1

刺突文が廻る。脚部は大きく開かず、比較的短い。脚裾部に至る段はほとんどなく、僅かな境を観察することができる程度である。

3～6は、覆土中から出土した壷の破片である。3の肩部には羽状刺突、4の肩部（もしくは胴部上半）には結節縄文が施されている。5・6の底部はいずれも平底である。5は小型壷であり、外面にはミガキ調整が観察できるほか、赤彩が残されている。

1・2はSF04に伴う可能性が高く、器形・文様などの特徴から弥生時代後期末頃に位置づけることができる。2は菊川式土器の鉢形高坏として捉えることができるが、坏部が極端に深くなったものであり、そこに欠山式土器の影響を認めることもできる。3～6においても、平底で占められている点、胴部に結節縄文が施されるものがある点などから、同様の時期に位置づけることができる。

SF05・SF08・SF13出土土器（第133図）　7・8は、SF05の上層で隣り合って出土した壷と高坏である（第119・122図）。7の壷は、底部付近および口縁部・胴部の一部に欠損が認められる。下位で屈折する下膨れ形の胴部、平底の底部、短く開く単純口縁を伴う。肩部には4条の押圧横線文、その下に2段の羽状刺突文が廻る。さらに、その下部には縄文が広範囲に施されている。口縁端面および口縁部内面にも縄文が施されている。8は、鍔状口縁の高坏である。口縁部には折り返しを伴い、その端部外面には、30前後を単位とした縦方向の刺突が5方向に施されている。また、口縁部内面には縄文が廻る。口縁部と坏底部との境には、内面に明瞭な屈折を伴う。脚部との接合部には、5段の羽状刺突文が廻る。脚部は比較的短く、上部（脚柱部）に対して脚裾部の開きが大きい。脚裾部に至る境には、外面の段と内面の明確な屈折が設けられている。

9・10は、SF08の上層で隣り合って出土した壷と高坏である（第120・123図）。9は小型壷であり、底部～胴部下位が欠損している。胴部は下位で屈折する形状で、肩部に3段の羽状刺突文が廻る。口縁部は単純口縁であり、内湾しながら開く。胴部下半および口縁部内面には、ミガキ調整と赤彩の残存が観察できる。10は、鍔状口縁の高坏である。口縁端部には折り返しを伴い、その外面下端には刻みが廻る。口縁部と坏底部との境については、内面の屈折が不明瞭であるのに対して、外面には明瞭な稜線が設けられている。坏部と脚部との接合部には、2条以上の押圧横線文が廻る。脚裾部は上部（脚柱部）に対して開く形状を呈するが、その境には段がなく、稜線をもって介している。調整はハケ調整以外に観察できない。

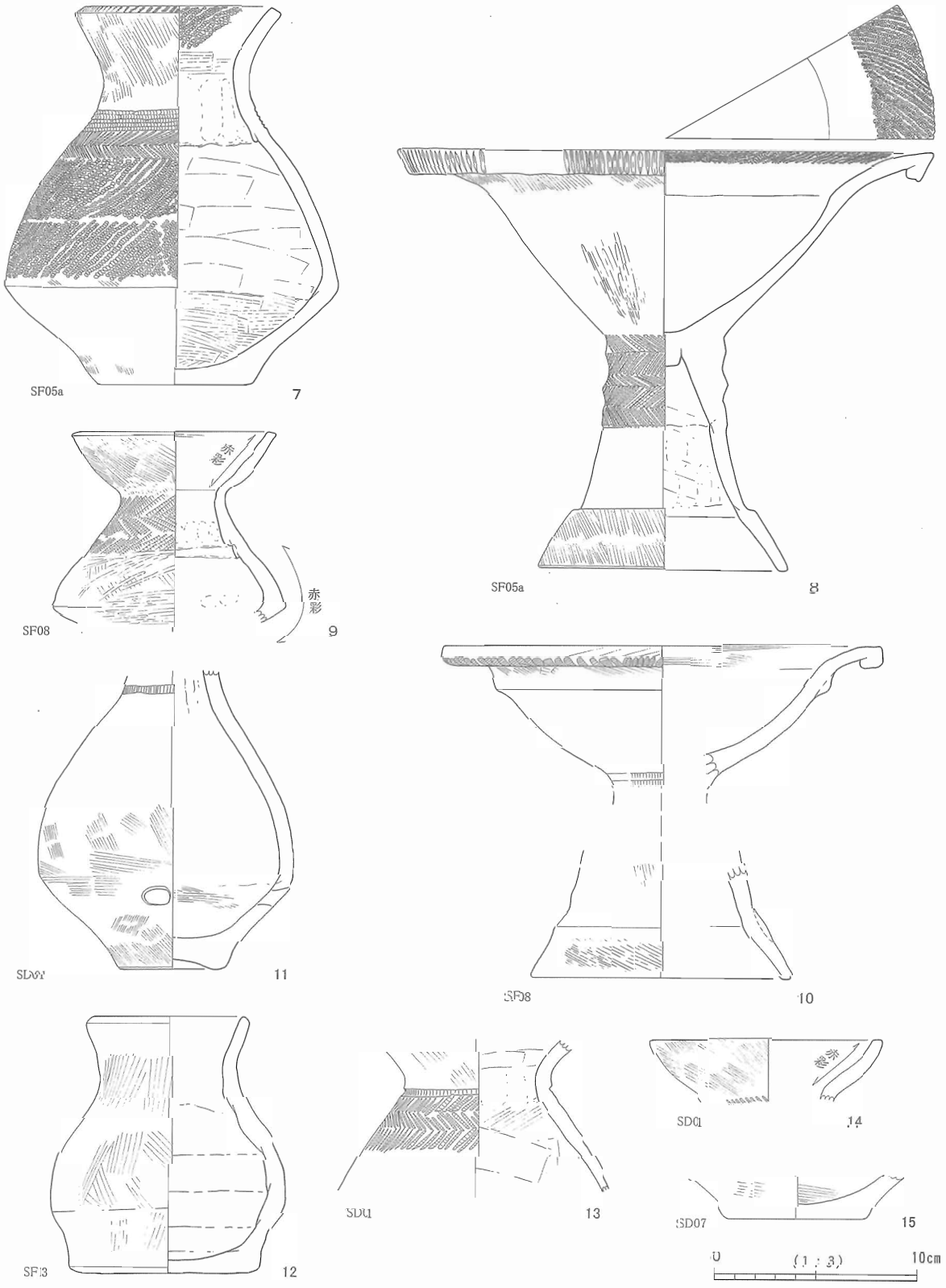
12は、SF13西端の上層で出土した小型壷である（第121・126図）。頸部は太く、大きく開かずに単純口縁に至る。底部は比較的大きく、平底である。文様はなく、外面調整はハケ調整で占められている。

出土遺構ごとにみると、器形・文様の特徴から7・8は弥生時代後期中葉頃、9・10は弥生時代後期後半に位置づけることができる。12も、弥生時代後期中葉以降のものであろう。

SD01・SD07出土土器（第133図）　11および13・14は、SD01出土の壷である。11は、下層から出土している（第120図）。口縁部が欠損しているほか、胴部下位に孔が穿たれている。上げ底状の底部を伴い、胴部は縦長の下膨れ形を呈する。胴部下位の最大径付近には稜線を伴わず、横方向のハケ調整が施されている。頸部下端には押圧横線文が施されている。13は、壷の頸～胴部上半であり、頸部下端に1条の押圧横線文、その下の肩部に3段の羽状刺突文が廻る。14は、内湾しながら開く小型壷の口縁部であり、肩部に羽状刺突文、口縁部内面に赤彩が観察できる。

器形・文様の特徴から、11は弥生時代後期前半、13・14は後期中葉頃に位置づけることができる。SD01は比較的幅広の溝であることから、下層出土の11の時期が遺構の機能した時期に近く、13・14は長期にわたる埋没過程の中で流入した可能性が考えられる。なお、15はSD07出土の平底の底部である。周辺の出土遺物の状況から弥生時代後期の土器である可能性が高いが、それ以上の詳細は特定し難い。

SD03出土土器（第134・135図）　16～19および27は、SD03の覆土中から出土した土器であり、16・17は良好な残存状態で出土している（第120図）。16は、鍔状口縁の高坏である。口縁端部には折り返しを伴い、その下端に刻みが廻る。口縁部と坏底部との境は、内面に稜線を伴うものの、外面は明瞭でない。坏底部の内面は横方向のミガキ調整、その他はハケ調整で占められる。脚部との接合部には、3段



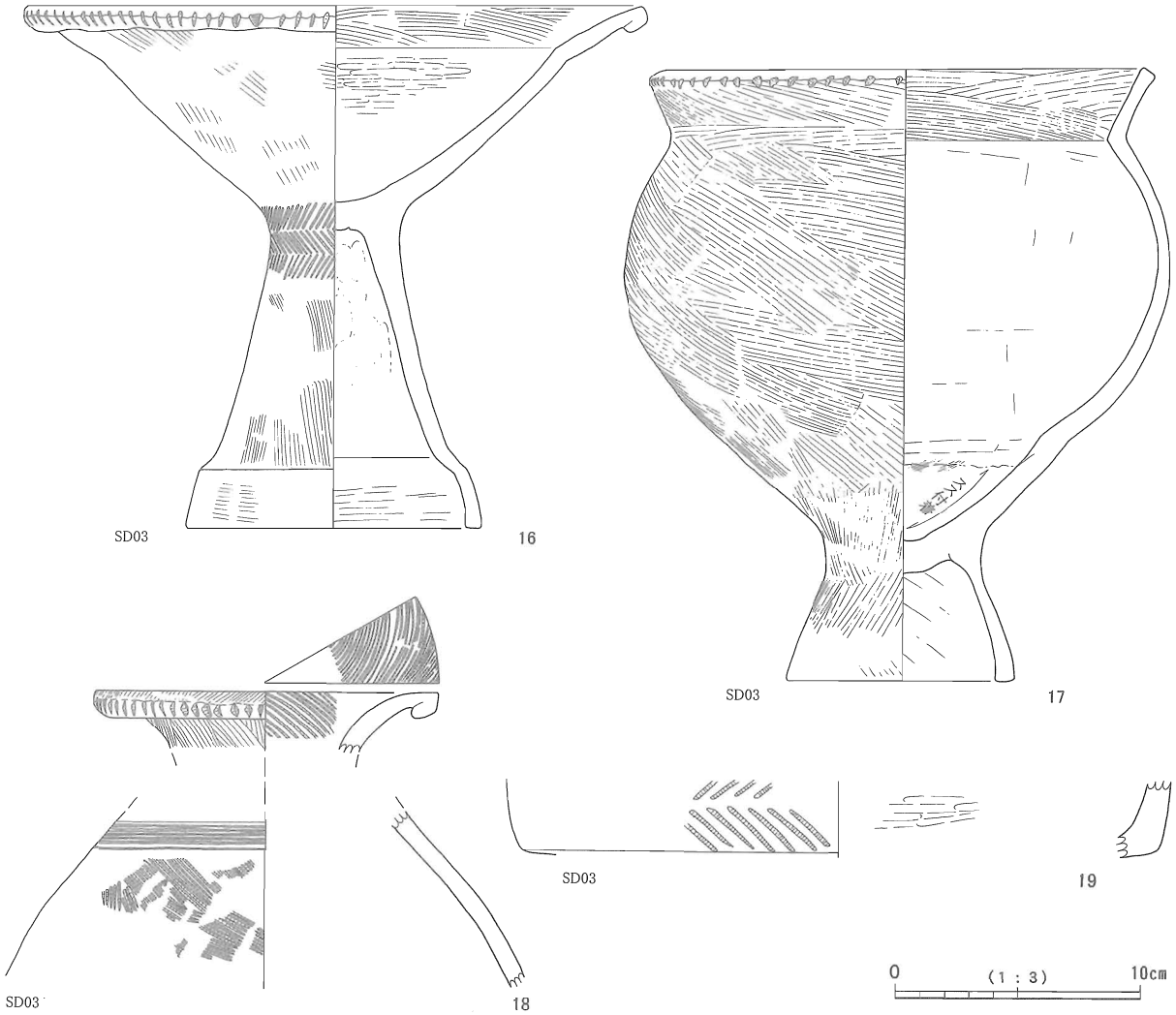
第133図　H・I群出土土器2

の羽状刺突文が施されている。脚部は比較的高く、明瞭な屈曲を介して脚裾部に至る。外面調整は、上部が縦方向のハケ調整、脚裾部が横方向のハケ調整である。

17は、台付甕である。口縁部の一部のみが欠けた状態で出土している（第120図）。溝内に転落した土器であるので断定はできないが、供献に際して口縁部の打ち欠きが行われた可能性が考慮される。口縁部は大きく開かず、端面には刻みが廻る。口縁部と胴部との境は、とくに内面において明瞭な稜線が認められる。台部は比較的低く、若干内湾する。外面および口縁部内面にはハケ調整、胴部内面にはケズリ調整が施されている。さらに、胴部内面の底付近にススが観察できる。

18・19・27は、壷の破片である。18は、端部に刻みを伴う折り返し口縁と胴部の破片である。肩には櫛描横線文、その下部と口縁部内面には無節縄文が施されている。19は大型壷の受口状口縁部であり、内面に横方向のミガキ調整、外面に羽状刺突が観察できる。27は木葉痕のある平底の底部である。

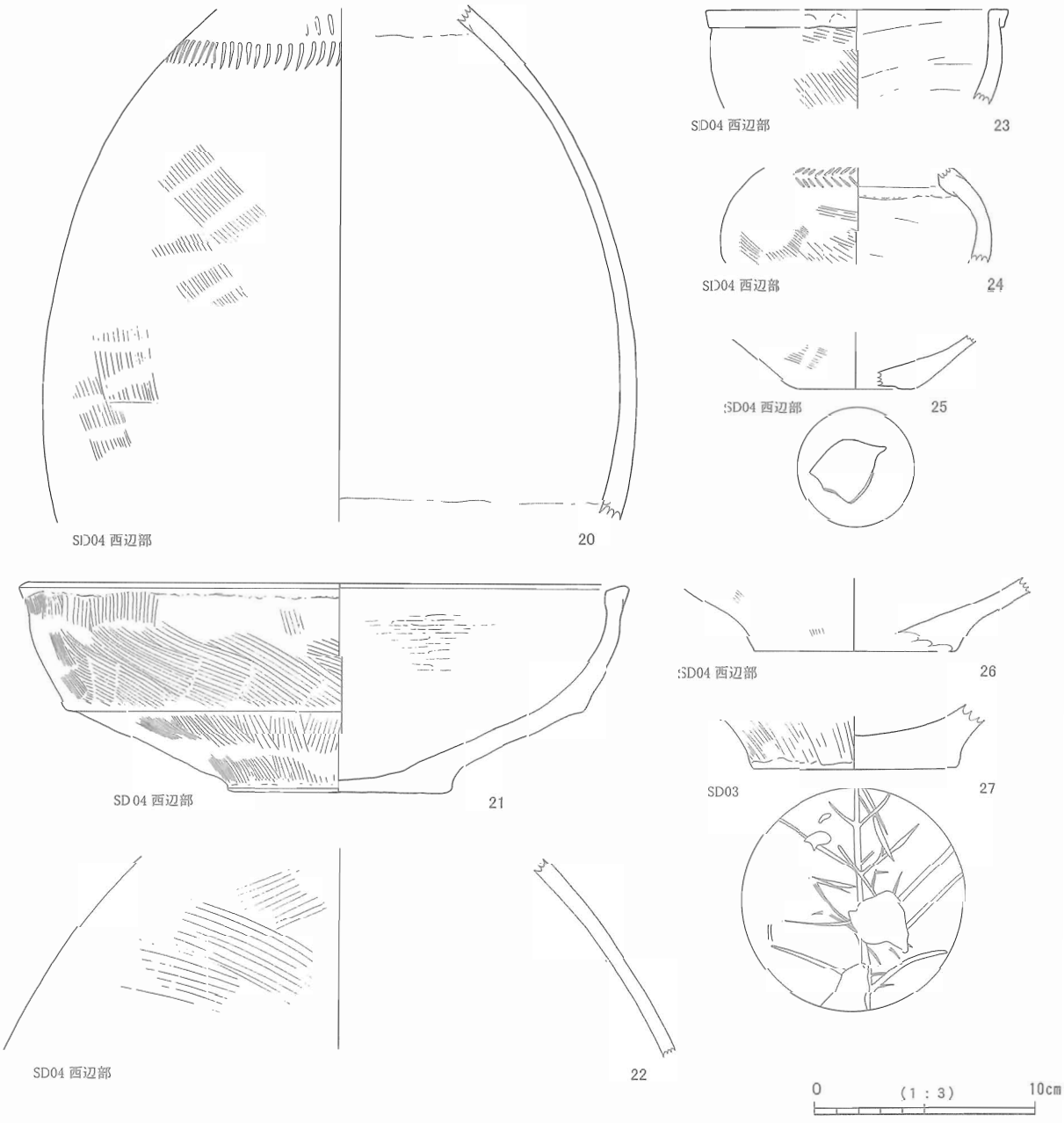
SD03はSD01などと同様、機能した頃から埋没していく過程の中で、様々な遺物が流入した可能性がある。16～19および27は、弥生時代後期中葉～後半に位置づけできる一群であるといえるが、その中で複数段階の遺物が混在している可能性もある。



第134図　H・I群出土土器3

SD04出土土器（第135図）　20～26は、SD04の1号周溝墓西辺にあたる部分から出土した土器である。20・21・23をはじめとして、上層からの出土が多い（第121図）。20は肩部に2段の羽状刺突文が廻る壷であり、比較的丸味のある胴部である。21は鉢である。比較的大きいものであり、外面にはハケ調整、内面には横方向のミガキ調整が観察できる。その他、壷を中心とした破片が出土している。25は上げ底状の底部であり、焼成後の穿孔が認められる。

SD04はSD01などと同様、機能した頃から埋没していく過程の中で、様々な遺物が流入している可能性がある。とくに、20～26は上層出土の破片で占められており、複数段階の遺物が混在している可能性がある。大半は弥生時代後期中葉以降に位置づけできるが、25はより古い時期の可能性が指摘できる。



第135図　H・I群出土土器4

SF18土器棺（第136図）　28は、土器棺の蓋として用いられていた可能性のある鉢（もしくは鉢形高坏）の口縁部である。破片の状態で29と混在して出土しており、どのように用いられていたのかは明確ではない（第127図）。しかし、周辺域に同様の土器片が散在していたわけではなく、供献土器の混入である可能性は低いと考える。比較的大型の鉢であることからも、蓋として用いられた可能性を高く評価したい。さらに、蓋であったとするならば、SF18などの類例から、逆位にして身の上に乗せられた可能性を考えることができる。内湾しながら立ち上がる口縁部であり、内面には縦方向のミガキ調整が観察できる。

29は、土器棺の身として用いられていた壺である（第127図）。頸部以上の出土は破片でもなく、頸部以上を打ち欠いた状態で用いられた可能性が高いと判断できる。底部は平底である。胴部は、算盤玉形に近い形状を呈しているが、最大径付近の稜線は明確ではない。肩部には、羽状刺突文が施されている。外面調整はハケ調整で占められている。

28については小破片のために詳細な判断はできないが、主に29の器形や文様などの特徴から、弥生時代後期中葉以降に位置づけることができる。

SF19土器棺（第137図）　30は、土器棺の蓋として用いられていた鉢である。底部は平底である。体部は、内湾しながら大きく開く。口縁部は直立に近く立ち上がるが、内湾気味である。体部と口縁部との境は、内面においては不明瞭であるが、外面においては明確な稜線を介している。口縁部には片口が設けられている。外面調整はハケ調整で占められており、とくに、口縁部のハケ調整が顕著に観察することができる。

31は、土器棺の身として用いられていた壺である。頸部以上を欠いた状態で用いられていた。底部は平底である。胴部は、中位やや下寄りに稜線を伴う。下部は底部から大きく開いて稜線に至り、上部は

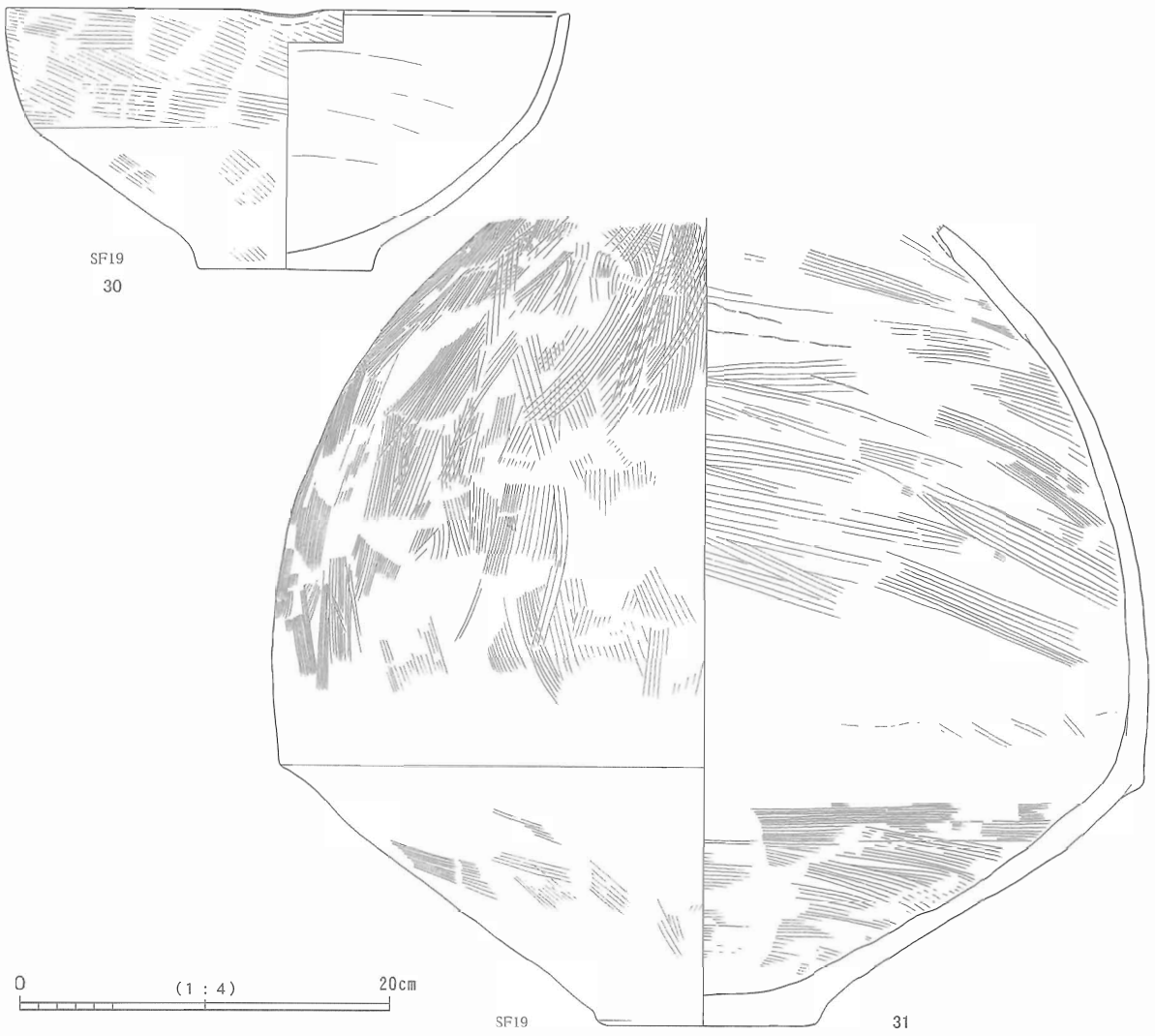
第136図　SF18土器棺

球形に近く、丸味を伴って頸部へと立ち上がる。文様は認められない。本来は肩部に文様が施されていた可能性もあるが、打ち欠きによって判断することはできない。外面調整はハケ調整で占められている。残存状況が良好であったためでもあるが、比較的重厚である。

これらは、器形の特徴から弥生時代後期後半に位置づけることができる。

SF20土器棺（第138図）　32は、土器棺の蓋として用いられていた壷である。底部一帯および口縁部～胴部の一部を打ち欠いた状態で用いられたと考えられる（第130図）。胴部は、中位下寄りに稜線を伴っている。稜線より下部は、底部から大きく開く形状を呈する。稜線より上部は、球形に近く、丸味をもって頸部へと立ち上がる。頸部は太く、短くやや開く。口縁部はわずかに内湾しながら直立する。内面においては口縁部と頸部との境はない。一方、外面においては明確な稜（段）を介している。上半部の外面調整は縦方向や斜め方向のハケ調整であるが、胴部下半の外面には横方向のミガキ調整が丁寧に施されている。文様は全く認められない。

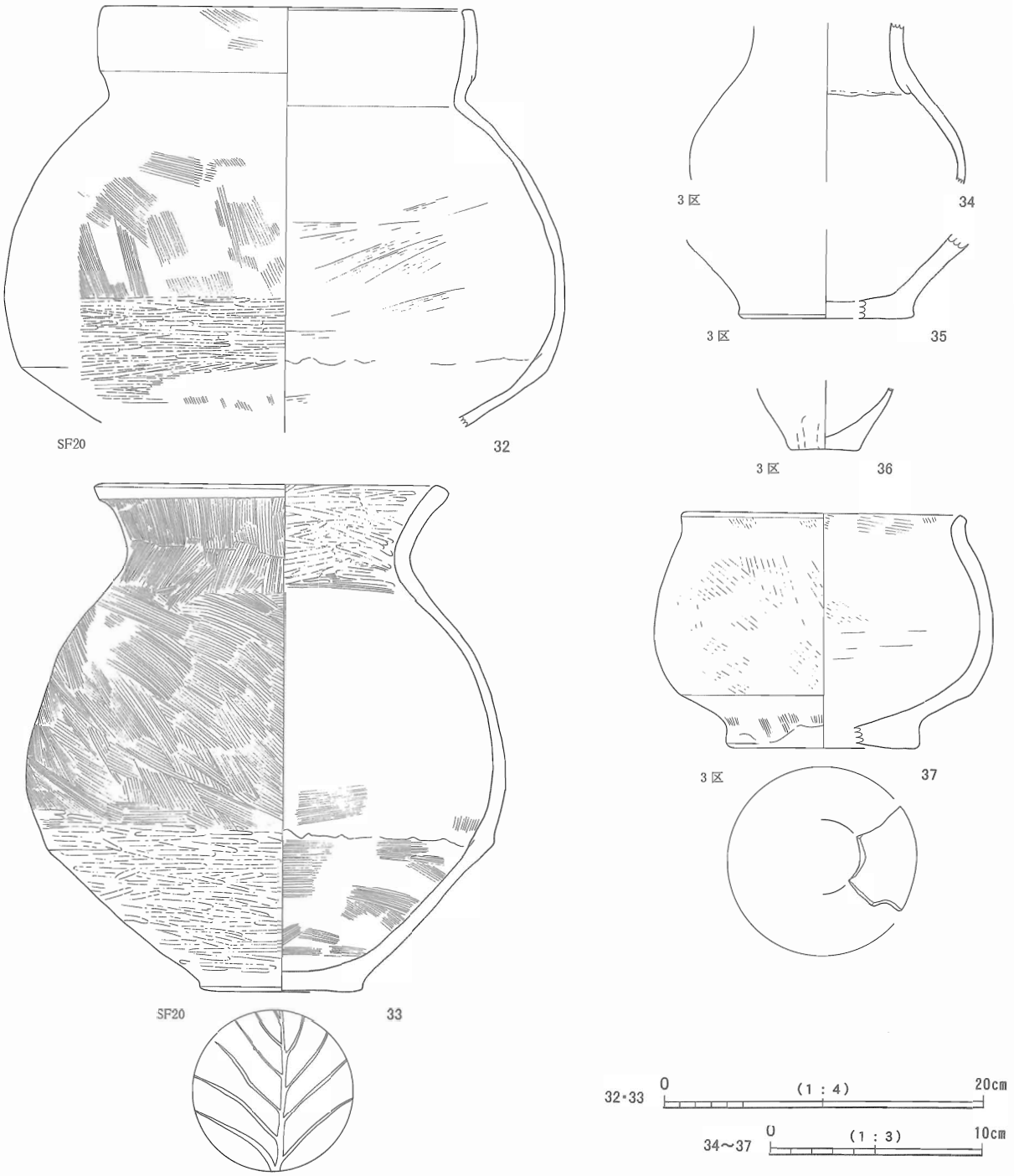
33は、土器棺の身として用いられていた壷である。底部から口縁部まで、ほぼ完全に残っている。底部は平底であり、木葉痕が残されている。胴部は、中位下寄りに稜を伴う。稜線より下部はさほど内湾しない。一方、稜線より上部は球形に近く、丸味をもって頸部へと立ち上がる。頸部は太く、屈曲して短く外反する単純口縁に至る。頸部より上の外面には縦方向のハケ調整、胴部上半の外面には斜め方向



第137図　SF19土器棺

のハケ調整が施されている。胴部下半には、横方向のミガキ調整が丁寧に施されている。口縁部内面にもミガキ調整が観察できる。

これらは、弥生時代後期末～古墳時代初頭の中に位置づけることができる。32については、口縁部の形態に外来（山陰・北陸など）の影響を認めてもよいのかもしれないが、胎土などに特異性はなく、胴部の形態・つくりなどには菊川式土器の特徴を強くもつ。したがって、33を含めて在地性を評価することができる。ただし、土器棺墓である点を考慮するならば、被葬者の性格（出自など）と関連して、壺の形態における特異性も軽視することはできない。



第138図　SF20土器棺、H・I群出土土器5

3区遺構外出土土器（第138図）　34～37は、3区の表土から出土した土器である。34～36は壺の破片である。34は摩滅が著しく、文様・調整の観察ができない。35・36は平底の底部である。36は極端に小型である点が特徴的である。37は鉢である。破片のために確実視はできないが、底部が穿孔された可能性がある。体部は球形に近いが、下位に稜線を伴っている。弱い屈曲を介して、短く外反する口縁部に至る。いずれの土器片についても、詳細な時期を特定することは難しいが、遺構出土土器の示す時期（弥生時代後期）の範囲内に位置づけることはできる。

(2)玉　類

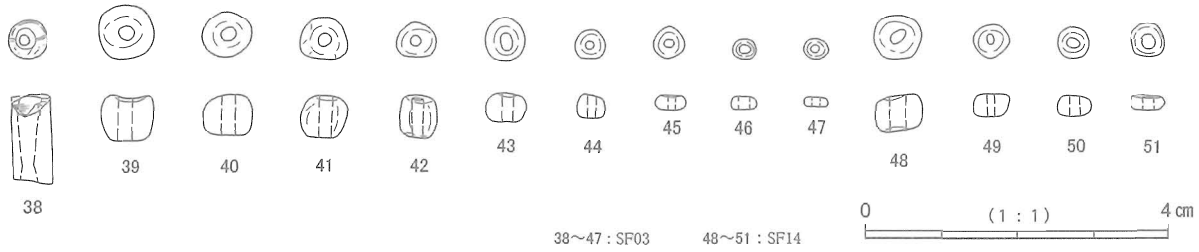
SF03出土玉類（第139図）　38～47は、SF03出土の玉類である。一般的には副葬品である可能性が考えられるが、詳細な出土位置の特定はできなかった。したがって、被葬者が装着していたかなどについては明確な判断ができない。38は緑色凝灰岩製の管玉であり、上下両方向から穿孔されている。39～47はガラス小玉であり、いずれも濃青色を呈する。大きさや形態にばらつきが目立ち、大きく厚い39～42、小さく薄い45～47、その中間の43・44に大別される。また、全体的に形態の歪みが目立つ。

SF14出土玉類（第139図）　48～51は、SF14出土のガラス小玉である。SF03出土玉類と同様、被葬者が装着していたかなどについては明確な判断ができない。いずれも濃青色を呈するが、大きさや形態にばらつきが目立つ。また、全体的に形態の歪みが目立つ。

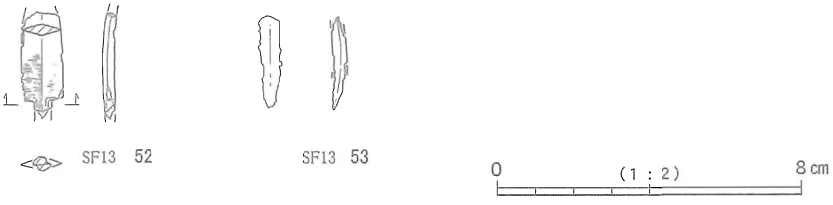
(3)金属器

SF13出土銅鏃（第140図）　52・53は、SF13に副葬されていた銅鏃である。いずれも有茎の小型鏃である。52は、刃部先端と茎部の大半が失われている。刃部は柳葉形を呈する。断面は菱形であり、明確な鎬を認めることができる。また、両面に横方向の擦（研磨）痕を観察することもできる。その範囲は茎部にまで達するが、鎬は茎部で不明瞭になっていく。53については、52と同様の形態であった可能性が比較的高いと考えられるが、残存状態が非常に悪く、明確な根拠はない。

周辺の出土土器などは、弥生時代後期のもので占められている。52・53についても、同様の時期に位置づけて問題はない。

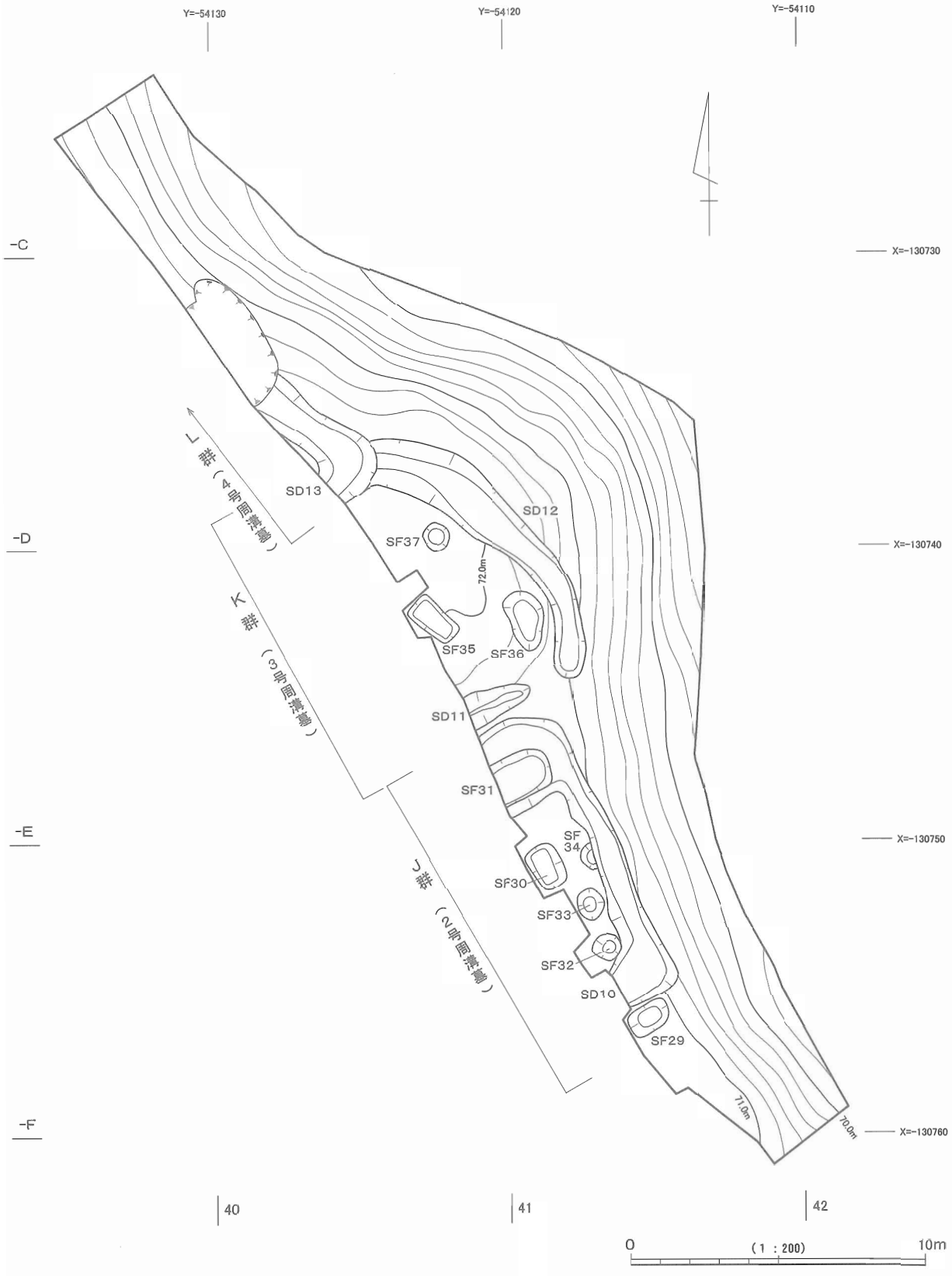


第139図　H群出土玉類



第140図　H群出土金属器

第3節　4　区



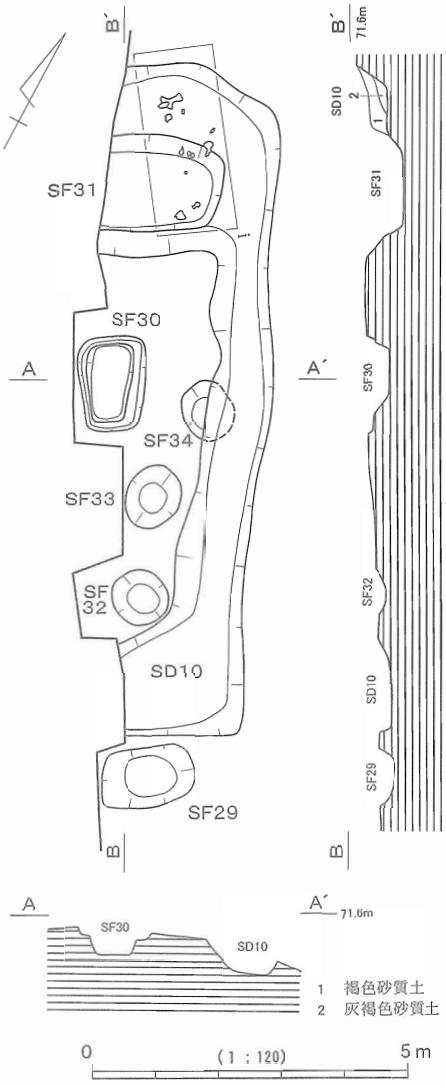
第141図　4　区

1．J　群

4区南東部、南東にのびる丘陵上に立地する、約12mの範囲にある遺構群である。調査区は丘陵上の北東斜面寄りに限られている。遺構の状況をみても、遺構群の全体を検出したわけではなく、遺構群の範囲が調査区外（南西）へと広がることは明らかである。ただし、その調査区外は茶畑になっており、実際には残存していない可能性がある。

遺構は丘陵上において検出されているが、丘陵上の範囲は狭く、斜面際にまで及んでいる。検出遺構には、土坑墓（木棺墓を含む）や土器棺墓といった埋葬施設であると判断できる土坑（SF29～SF34）と、遺構群全体を方形に区画する溝（SD10）がある。以上のような検出遺構の状況および出土遺物から、本遺構群は弥生時代の方形周溝墓1基に対応するものと把握できる（2号周溝墓）。

2号周溝墓の規模は、丘陵筋の方向で全体が約11m、台状部が約7mである。台状部の北東寄り、南東周溝外、北西周溝内のそれぞれに土坑墓が検出されている。また、台状部の北西縁に2基の土器棺墓が発見されている。周溝墓の全体を検出していないため、中心埋葬などについての詳細はわからない。出土遺物については、弥生時代後期の土器がSF31周辺を中心に多く出土しているほか、土坑墓（SF30・SF31）からはガラス小玉が出土している。



第142図　J群（2号周溝墓）

(1) 溝

SD10（第142図）　4区南東部に位置する、遺構群（J群）の周縁を方形に廻る溝である。検出は遺構群の北東辺と北西辺・南東辺の一部に限られたが、さらに南西（調査区外）へとのびることは明らかである。検出部の深さは0.3m～0.6mである。幅は、北東辺では約1.0mであるが、北西辺では土坑墓（SF31）の影響であろうか、約3.1mと広くなる。覆土は灰褐色などの砂質土である。SF31周辺域の上層から、多くの弥生土器（第148図54～62）が出土している。

遺構の特徴および出土遺物から、弥生時代後期中葉以降の2号周溝墓の周溝であると判断できる。

(2) 土坑墓

SF29（第144図）　4区南東部、2号周溝墓の南東外側に位置する。0.9m強×1.5m弱の長方形で、深さ0.4m強である。主軸は丘陵筋に直行する。覆土は褐色系砂質土、木棺の痕跡や出土遺物はない。

遺構の特徴や周辺の遺構・遺物から、弥生時代後期の土坑墓である可能性が高いと判断できる。

SF30（第144図）　4区南東部、2号周溝墓の台状部の北東寄りに位置する。1.1m強×1.5m強の長方形で、北西に向って幅広になる。深さは0.4m弱である。主軸は丘陵筋に平行する。覆土は大半が褐色系砂質土で占められるが、底面・壁寄りに黄褐色砂層（第144図7層）がみられ、木棺の使用を把握することができる。木棺自体は残っていないが、土層から0.6m×1.2m程度の箱形木棺が用いられたと推測

できる。ガラス小玉（第153図76）が出土したが、詳細な出土位置は特定できなかった。

遺構の特徴や出土遺物から弥生時代後期の土坑墓であり、木棺が用いられたと判断できる。

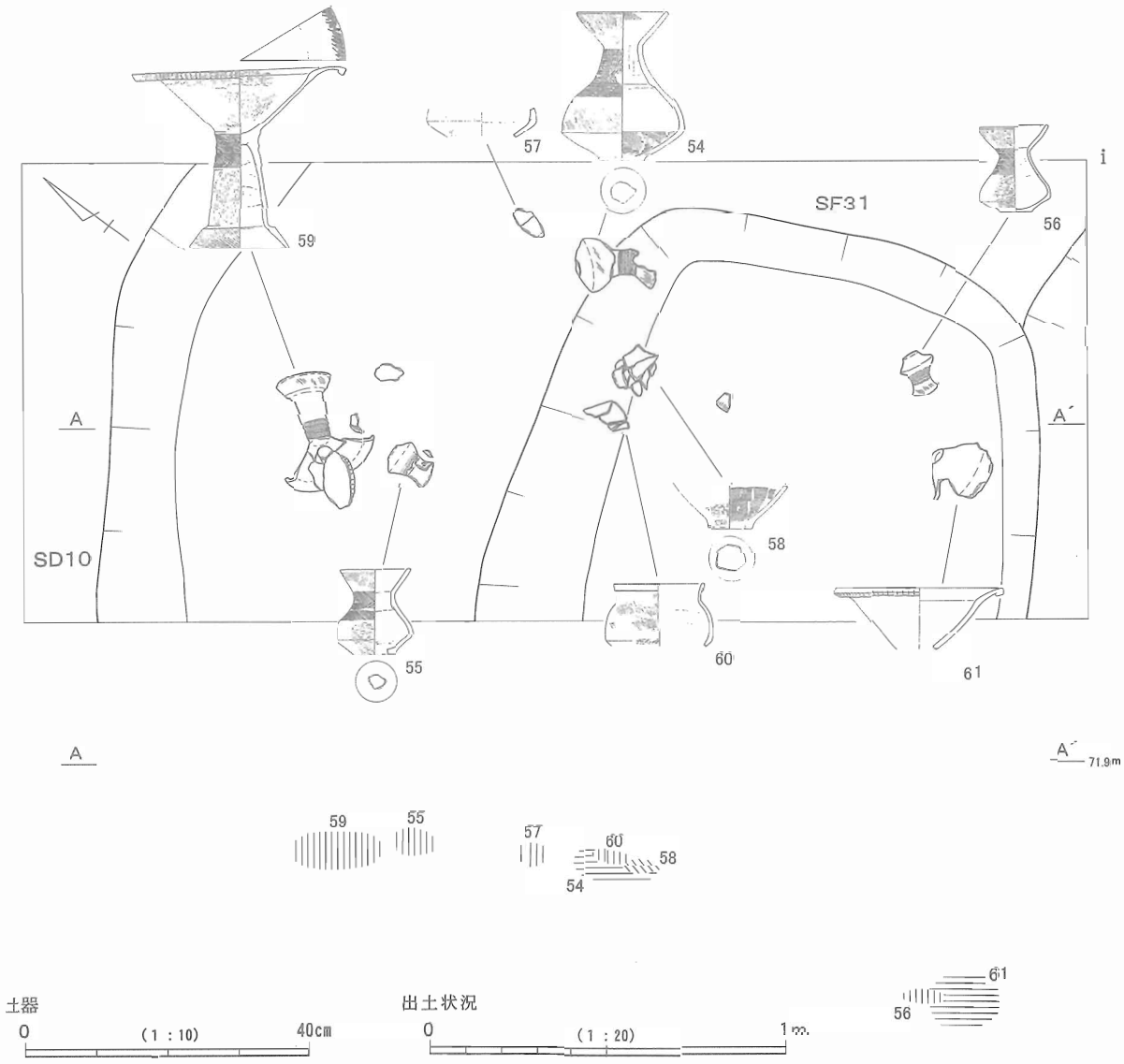
SF31（第144図）　4区南東部に位置する。1.6m弱×1.9mの長方形で、深さはSD10底面から0.2m、遺構検出面から約0.7mである。覆土は大半が褐色系砂質土であるが、下部の壁寄りに暗灰褐色や黄色の砂層（第144図8・9層）が認められ、幅1.0m弱の木棺が用いられた可能性が指摘できる。

SF31は2号周溝墓の北西周溝（SD10）内にあり、土層断面によって、周溝の埋没途中で設けられたことがわかっている。また、SF31覆土中やSD10上層から多くの弥生土器（第148図54～62）が出土しているが、出土層位からSF31の周囲に置かれた供献土器群であると判断できる（第143図）。なお、土坑内からガラス小玉（第153図77～80）が出土しているが、詳細な出土位置は特定できなかった。

遺構の特徴および出土遺物から、弥生時代後期中葉頃の土坑墓（木棺墓か）であると判断できる。

(3) 土器棺墓

SF33（第145図）　4区南東部、2号周溝墓台状部の北東縁に位置する。土坑は最大径約1.0mの不整円形を呈する。深さは0.4m弱であるが、本来はより深かったと推測できる。覆土は褐色系の砂質土であ



第143図　SD10（SF31周辺）遺物出土状況

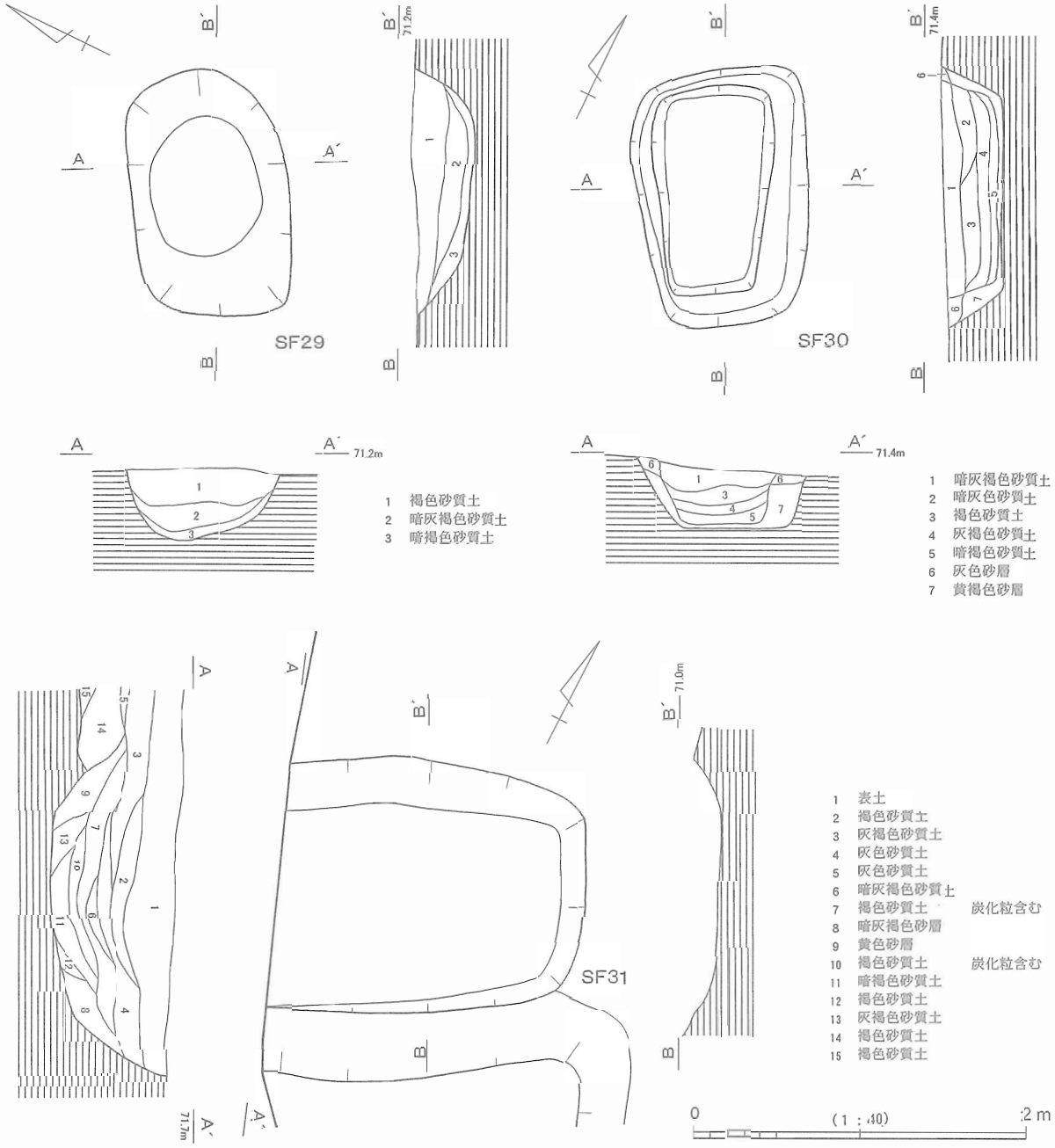
る。この土坑の中央西寄りに土器棺が埋置されていた。土器棺の残存状況は比較的良好である。

土器棺の身は、胴部最大径0.5m弱の壷（第150図69）であり、口縁部側を北側上方へと傾けて置かれていた。頸部以上の出土は破片でもなく、頸部以上を欠いた状態で用いられた可能性が高いと判断できる。また、この壷以外の出土遺物はない。削平による消失の可能性も否定できないが、本来より土器による蓋はなかった可能性が指摘できる。

土器棺の形態などから、弥生時代後期中葉～後半の土器棺墓であると判断できる。

SF34（第145図）　4区南東部、2号周溝墓台状部の北東縁に位置する。土坑は最大径約1.0mの不整円形を呈する。深さは0.2m弱であるが、本来はより深かったと推測できる。覆土は褐色系砂質土である。この土坑の中央に土器棺が埋置されていた。土圧などの影響を強く受け、全体につぶれていた。

土器棺の身は、胴部最大径0.4m強の壷（第151図71）である。大きくつぶされていたために判断し難



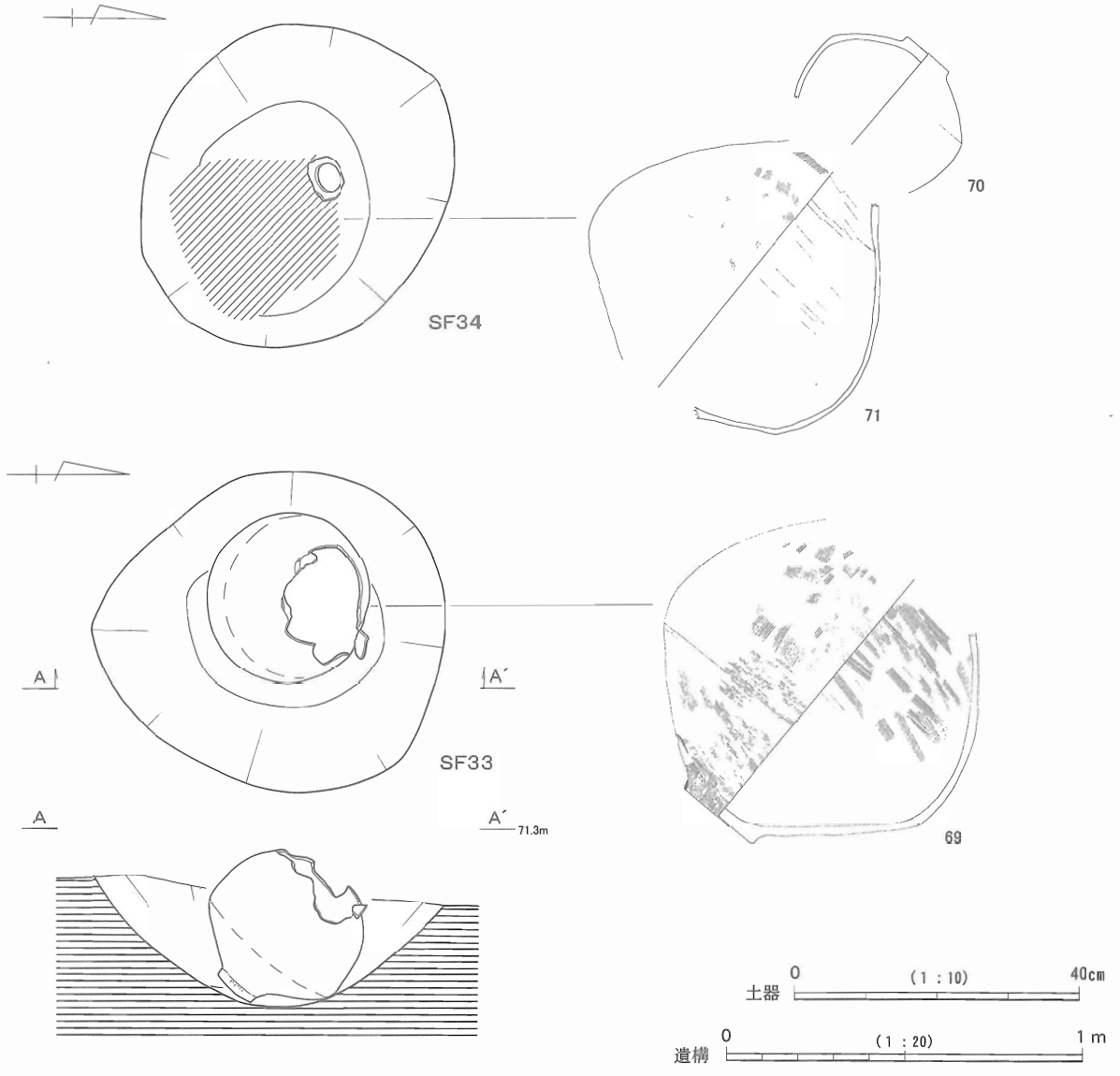
第144図　SF29～SF31

いが、口縁部側を北西上方に傾けて置かれたと推測できる。また、破片でも頸部以上の出土はなく、頸部以上を欠いた状態で用いられたと判断できる。一方、底部の出土も認められていない。復元できない程に著しく破片化したと考えることもできるが、底部を穿孔していた可能性も否定はできない。土器棺の蓋は、胴部最大径0.3m弱の壺（第151図70）である。大きくつぶれてはいたが、土器棺の最上部から底部片が出土、底部外面を北西上方に向けていたことから、身と合せ口になるようにして蓋としていたと復元できる。また、肩部以上を欠いた状態で用いられたと判断できる。

土器棺の形態などから、弥生時代後期中葉～後半の土器棺墓であると判断できる。

(4) その他

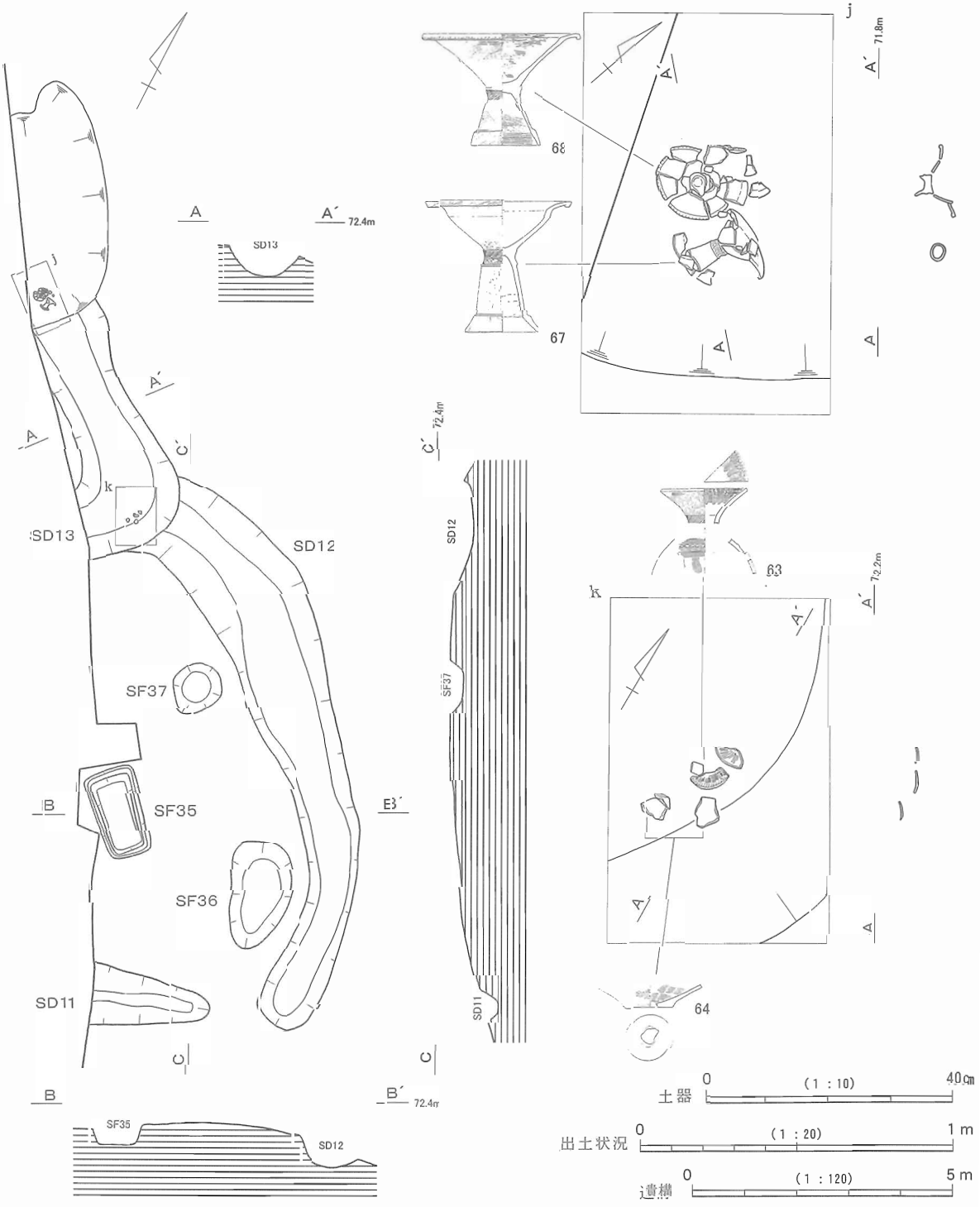
SF32（第142図）　4区南東部、2号周溝墓台状部の南東隅に位置する。最大径0.9m強の円形土坑であり、深さは0.1m程と浅い。出土遺物はない。周辺の状況からは、弥生時代後期の墓域に伴う可能性が指摘できる。本遺跡のSF15やSF37、文殊堂遺跡のSF75などといった類例もあるが、これらの性格・時期を明確に示すことは難しい。



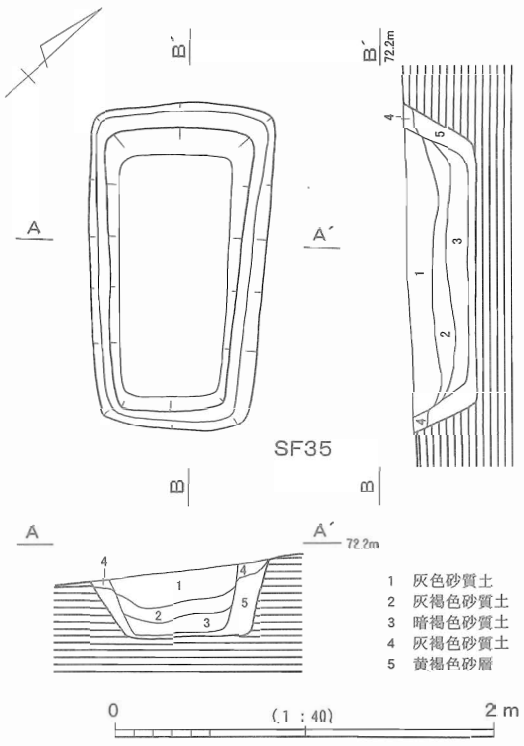
第145図　SF33・SF34

2．K　群

4区中央部、丘陵上に立地する約11mの範囲にある遺構群である。丘陵上がやや幅広になる部分に立地する。調査区は北東斜面寄りの範囲に限られているが、遺構の状況をみても、遺構群の全体を調査・検出しているとは判断できない。本遺構群の範囲が調査区外（南西）へと広がることは明らかである。



第146図　K群（3号周溝墓）・L群（4号周溝墓）



第147図　SF35

ただし、その調査区外は茶畑になっており、実際には遺跡が残存していない可能性がある。

遺構は丘陵上に分布するが、北東側の斜面際にまで及んでいる。検出遺構には、土坑墓（木棺墓）であると判断できる土坑（SF35）、性格不明の土坑（SF36・SF37）、遺構群の周囲を区画する溝（SD11・SD12）がある。以上のような検出遺構の状況から、本遺構群は弥生時代の周溝墓1基に対応するものと把握できる（3号周溝墓）。

3号周溝墓の規模は、丘陵筋の方向で全体が11m弱、台状部が約9mである。平面の形状は、明確な方形を呈さず、不整形である。台状部のほぼ中央にSF35（木棺墓）、南東部にSF36（不整形土坑）、北東部にSF37（円形土坑）が検出されている。出土遺物は少なく、詳細な時期の特定は難しい。ただし、弥生時代後期中葉以降の周溝墓である4号周溝墓との切り合いがあり、3号周溝墓の方が古いと判断できている。したがって、弥生時代後期中葉以前の周溝墓である可能性が高いと判断できる。

(1)溝

SD11（第146図）　4区中央部の遺構群（K群）の南東縁に位置する溝である。幅約1.2m、深さ約0.6mである。長さ約2.4m分を検出しているが、さらに南西（調査区外）へとのびる。一方、北東端は立ち上がりをもって終結している。覆土は褐色系の砂質土で占められる。出土遺物はない。

遺構の特徴や周辺の遺構・遺物から、弥生時代後期中葉以前の3号周溝墓の南東周溝であると判断できる。なお、このSD11の形状の特徴によって、3号周溝墓の周溝は全周することがなく、少なくとも南東隅にあたる部分では途切れることがわかる。

SD12（第146図）　4区中央部の遺構群（K群）の北東縁に位置し、丘陵筋に沿って南東から北西にのびる溝である。幅は最大約2.1mであり、一定しない。検出長は約11mであり、北東に凸の弱い弧を描く。北側では、遺構群の北西縁へと屈曲すると推測されるが、その部分がSD13によって失われている。南端部では、遺構群の南東隅にあたる部分で立ち上がる。溝の深さは約0.6mである。覆土は褐色系の砂質土であり、若干の弥生土器片が出土している。

SD11と同様、SD12も3号周溝墓の周溝であると判断できる。なお、このSD12およびSD11から、3号周溝墓は10m前後の規模を有する不整形の周溝墓であり、周溝は南東隅で途切れることがわかる。

さらに、SD12は4号周溝墓の周溝（SD13）と重なっており、土層によってSD12の方が古いと判断できている。4号周溝墓は弥生時代後期中葉以降に形成された可能性が高いと判断でき（次頁参照）、したがって、3号周溝墓は後期中葉以前に形成された可能性が指摘できる。なお、SD13出土土器には後期中葉～後半に位置づけられるものと、後期前半～中葉に位置づけできるものとがある（第149図など参照）。前者である第149図63などは、SD12と重なる場所の上層から出土しており（第146図）、本来は3号周溝墓に伴う土器であった可能性も考慮される。そうであるならば、3号周溝墓が弥生時代後期前半～中葉に形成された可能性をより高く評価することができる。

(2) 土坑墓

SF35（第147図） 4区中央部、3号周溝墓の台状部中央に位置する。1.0m弱×1.8m弱の長方形で、北西側の方が幅広である。深さは約0.4mである。主軸は丘陵筋に平行する。覆土は大半が灰～暗褐色の砂質土であるが、底面・壁寄りに黄褐色砂層（第147図5層）が認められ、木棺の使用を把握することができる。木棺自体は残っていないが、土層から0.6m×1.3m前後の箱形木棺が用いられたと推測できる。出土遺物はない。

遺構の特徴や周囲の遺構・遺物から、弥生時代後期前半～中葉の3号周溝墓に伴う土坑墓であり、木棺が用いられた可能性が高いと判断できる。

(3) その他

SF36（第146図） 4区中央部、3号周溝墓の台状部の南東寄りに位置する。約1.2m×2.2m弱の不整楕円形で、深さは約0.3mである。長軸は丘陵筋に平行する。弥生時代の土坑墓である可能性もあるが、ほかの土坑墓に比べて不整形である点が目立つ。少なくとも木棺の使用は想定できない。出土遺物もなく、時期・性格を特定することは難しい。

SF37（第146図） 4区中央部、3号周溝墓の台状部の北東寄りに位置する。最大径1.0m弱の円形土坑であり、深さは約0.1mと浅い。出土遺物はない。周辺の状況からは弥生時代の墓群に伴う可能性が指摘できる。本遺跡のSF15やSF32、文殊堂遺跡のSF75などといった類例もあるが、遺構の特徴や出土遺物から性格・時期を明確にすることは難しい。

3．L 群

4区北西部、丘陵上に立地する6m以上の範囲にある遺構群である。調査区は北東斜面寄りの範囲に限られている。遺構の状況をみても、遺構群の全体を調査・検出しているわけではなく、遺構群の範囲が調査区外（南西）へと広がることは明らかである。ただし、その調査区外は茶畑になっており、実際には遺跡が残存していない可能性もある。

検出遺構は、丘陵上にある1条の溝（SD13）だけである。遺構群の北西斜面際とK群（3号周溝墓）との境界を区画するような溝であり、弥生時代後期の土器が多く出土している。したがって、本遺構群は弥生時代後期の方形周溝墓1基に対応するものと把握することができ（4号周溝墓）、SD13はその北東辺～南東辺周溝である可能性が高いと判断できる。

(1) 溝

SD13（第146図） 4区北西部に位置する。遺構群の北東および南東を区画するようにL字に廻る溝である。幅1.7m前後、深さ約0.6mである。長さ約5m分を検出しているが、さらに調査区外（南西）へとのびることは明らかである。北側は、撹乱によって破壊されている。覆土は、褐色系の砂質土である。覆土中から比較的多くの弥生土器（第149図63～68）が出土している。周溝墓の南東隅部の上層では、壷の破片などが多く出土している（63・64など）。SD12の報告で先述したとおり、これらは3号周溝墓に伴っていた土器群である可能性がある。一方、北側の撹乱部分で2個体の高坏がまとまって出土しているが、遺構の状況から4号周溝墓の北西周溝に伴っていた可能性が指摘できる（67・68）。

遺構の特徴や出土遺物から、弥生時代後期中葉～後半の4号周溝墓の周溝であると判断できる。

4．4区の出土遺物

(1)弥生土器

SF31出土土器（第148図）　54～56は残存状態の良好な壷で、わずかに内湾しながら開く単純口縁、比較的細い頸部、3段以上の羽状刺突文が廻る頸～肩部、下部に明確な稜を伴う下膨れ形の胴部、外面および口縁部内面に施された赤彩など、共通した特徴が多い。さらに、55と56は同じ小型壷であり、口縁部外面のハケ調整、胴部外面の横方向のミガキ調整などの共通点も認められる。一方、54だけは中型の壷であり、口縁部内面の櫛描波状文、頸部の羽状刺突文間の円形浮文、肩部の櫛描横線文など、55・56との相違点がある。また、55・56のような胴部外面の丁寧なミガキ調整は認められない。

54・55には底部穿孔、56では底部～胴部下半の欠損が認められる。57・58も壷の破片であるが、58の底部に穿孔が認められる。60は、短く直立する口縁部を伴う鉢である。口縁端部に折り返しを伴う。体部は、壷の胴部と同様に下部に稜線を伴い、稜線付近に横方向のミガキ調整が施されている。

59は、鍔状口縁の高坏である。口縁端部に折り返しを伴い、25前後を単位とした棒状浮文が3方向に施されている。口縁部内面には横方向のミガキ調整と縄文、坏底部には縦方向のミガキ調整が観察できる。坏底部と口縁部との境は、内面に明確な稜を伴う。脚部との接合部には、6段の羽状刺突文が廻る。脚部は、脚裾部だけが大きく開く形態を呈する。脚裾部に至る境には、外面の段と内面の屈折を伴う。脚裾部外面にはハケ調整、脚柱部外面には縦方向のミガキ調整が観察できる。61も鍔状口縁の高坏である。折り返し口縁を伴い、端部に刻みが廻る。62も高坏であるが、形態などの特徴は異なる。

これらは、器形の特徴などから弥生時代後期中葉頃に位置づけることができる。

SD13出土土器（第149図）　63は、SD13南部の上層から出土した壷であり、図は小破片となっていたものを図上で復元したものである。単純口縁で頸部は細い。口縁部内面には扇形文・横線文や下端が曲がる（Ｊ字状）縦線文、肩部には波状文・横線文、さらに下端が曲がる（逆Ｊ字状）縦線文といった様々な櫛描文が施されている。円形浮文や廉状文風の横線文も認められる。また、施文範囲は口縁部内面と肩部だけに留まらず、頸部には羽状刺突文が廻る。65は肩部に断面三角形の突帯が廻る小型壷、64・66は焼成後の穿孔が認められる壷の底部である。

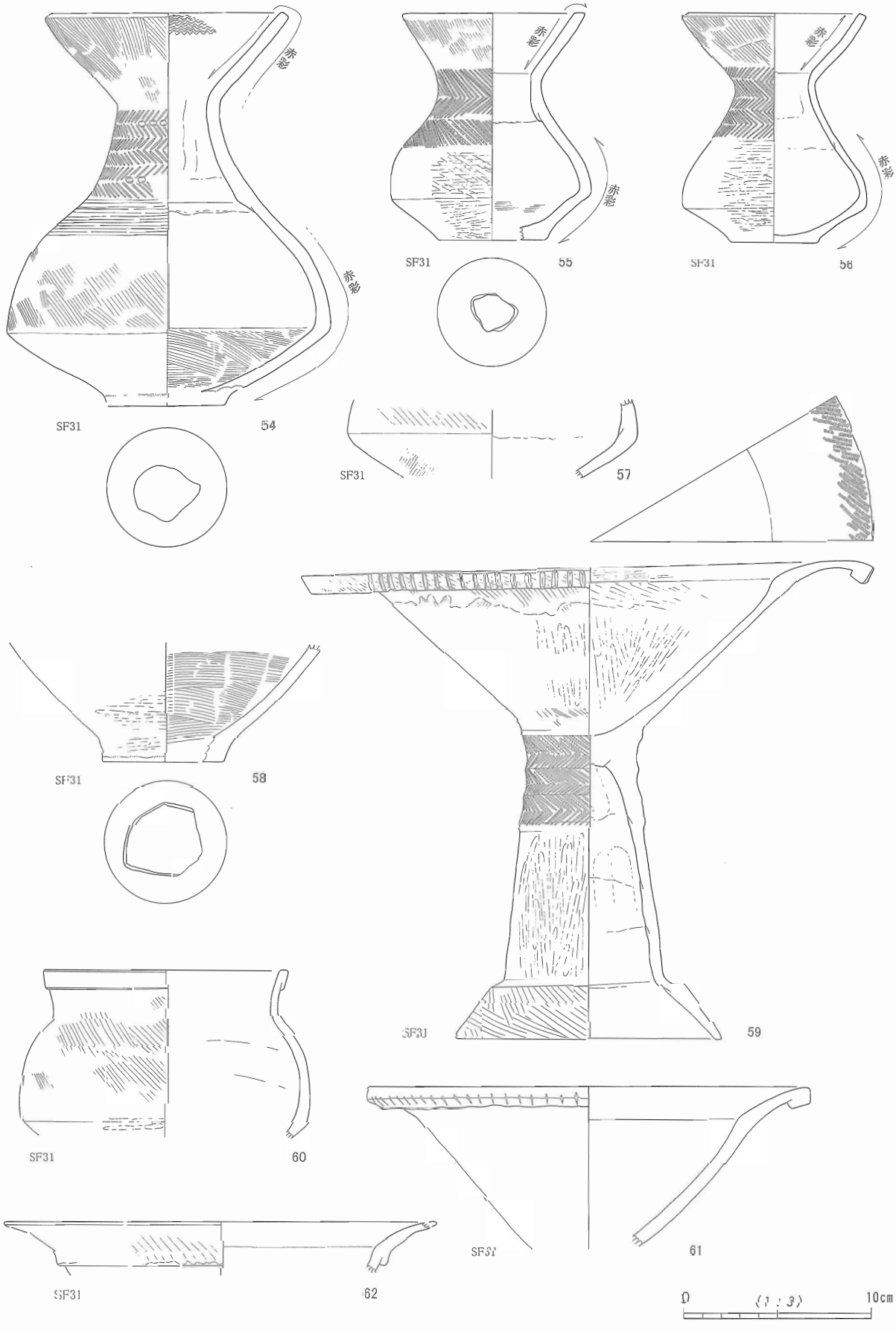
67・68は鍔状口縁の高坏であり、折り返しを伴う口縁部、口縁端部に廻る刻み、接合部に施された2段の羽状刺突文などといった共通点がある。しかし、形態には相違点が目立つ。坏底部と口縁部との境については、67が内外面に屈曲と稜線が認められるのに対して、68は内面に稜線が伴う程度である。脚部は、67に対して68が低い。67の脚部は、脚裾部だけが大きく開く形態を呈する。一方の68の脚部は、脚裾部を含めて全体的に開く形態を呈する。脚裾部に至る境は、ともに外面の段と内面の屈折（稜）を伴う。調整においても、両者の違いを指摘することができる。67は坏底部や脚柱部の外面にミガキ調整が施されているが、68では外面のミガキ調整が認められない。

高坏（67・68）は、弥生時代後期中葉～後半に位置づけできる。一方、63などの特徴は、より古い時期（弥生時代後期前半～中葉）に位置づけできる可能性が高い特徴である。

SF33土器棺（第150図）　69は、土器棺の身として用いられていた壷である（第145図）。頸部以上を打ち欠いた状態で用いられていた。底部は平底で、木葉痕が残る。胴部は中位下寄りに稜線を伴うが、全体的に球形に近い形状を呈する。文様は認められない。外面調整については、上半部にはハケ調整、下半部には横方向のミガキ調整が観察できる。

詳細な特定は難しいが、器形の特徴から弥生時代後期中葉～後半に位置づけることができる。

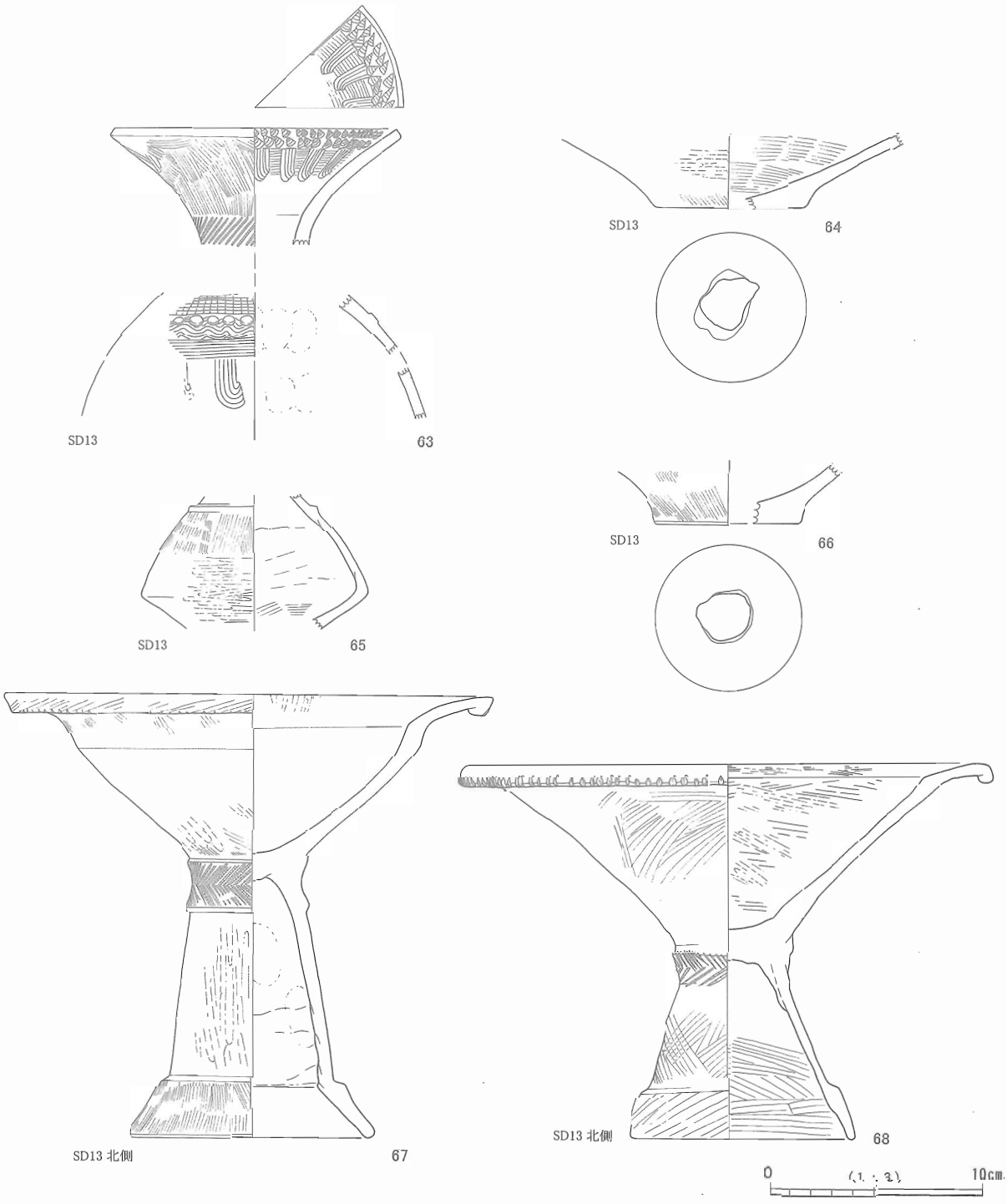
SF34土器棺（第151図）　70は、土器棺の蓋として用いられていた壷である（第145図）。肩部以上を打ち欠いた状態で用いられていた。底部は平底である。胴部は、中位下寄りに稜を伴うが、全体的に丸



第148図　J～L群出土土器1

味をもった形状を呈している。文様は認められず、摩滅のために調整の観察もできない。71は、土器棺の身として用いられていた壺である（第145図）。頸部以上を打ち欠いた状態で用いられていた可能性が高い。底部の欠損については、底部を穿孔して用いていた可能性も否定できないが、土器棺全体が大きくつぶされていたために復元できなかったと考えることもできる。胴部は下膨れの形状であり、最大径付近に稜は伴わない。肩部に羽状刺突文が廻る。摩滅が著しく、調整などは観察し難い。

器形・文様の特徴から、弥生時代後期中葉～後半に位置づけることができる。



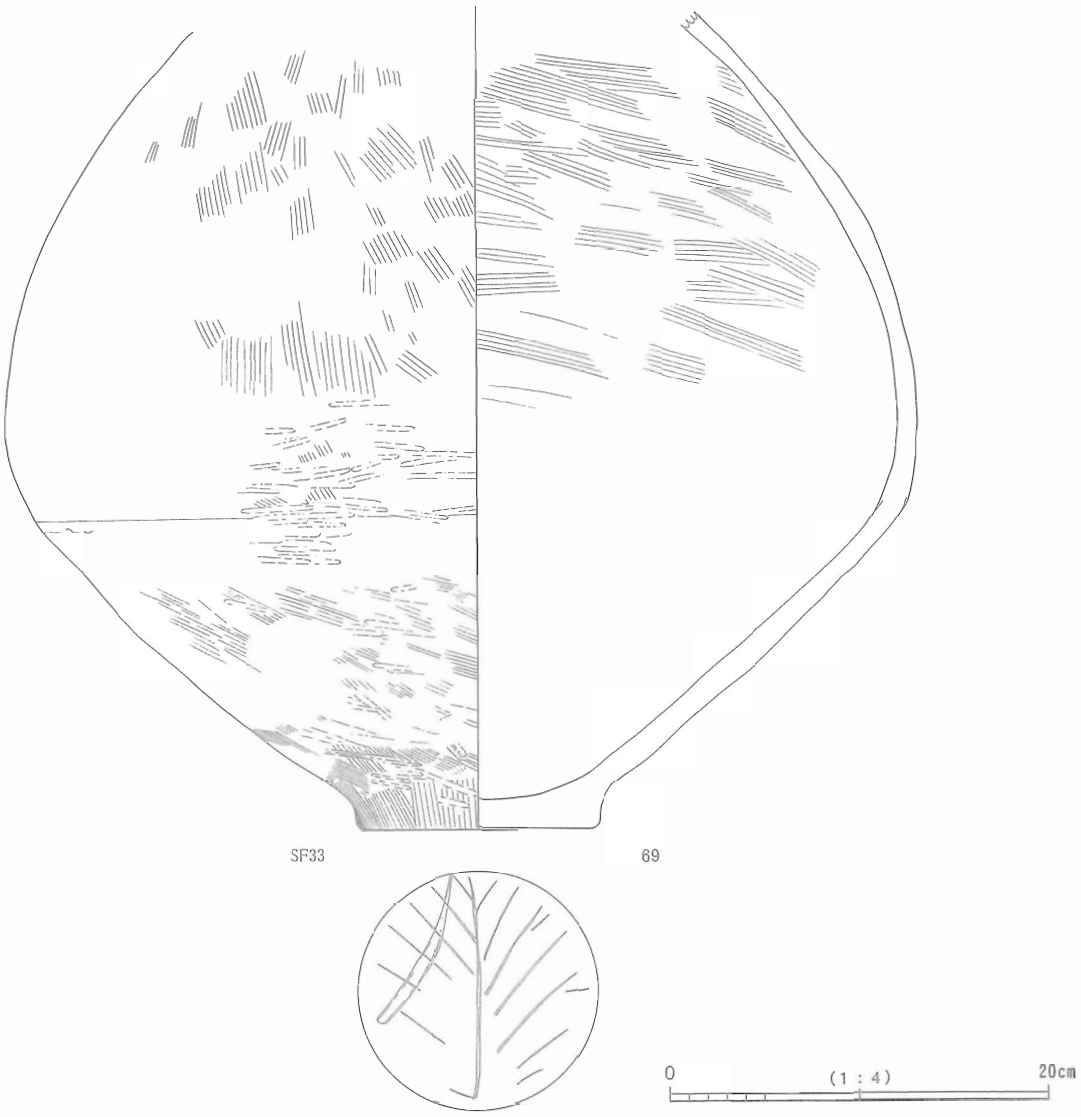
第149図　J～L群出土土器2

4区遺構外出土土器（第152図）　72・73は、4区北西部から出土した壷である。73の肩部には、広範囲に横線文が施されている。74・75は4区出土の壷の底部であり、74には焼成後の底部穿孔が認められる。73は4区の遺構内出土土器よりも古く、弥生時代中期後葉に位置づけることができる。文殊堂遺跡などと同様に、中期後葉にはフケ遺跡4区の墓域が形成され始めていた可能性が指摘できる。

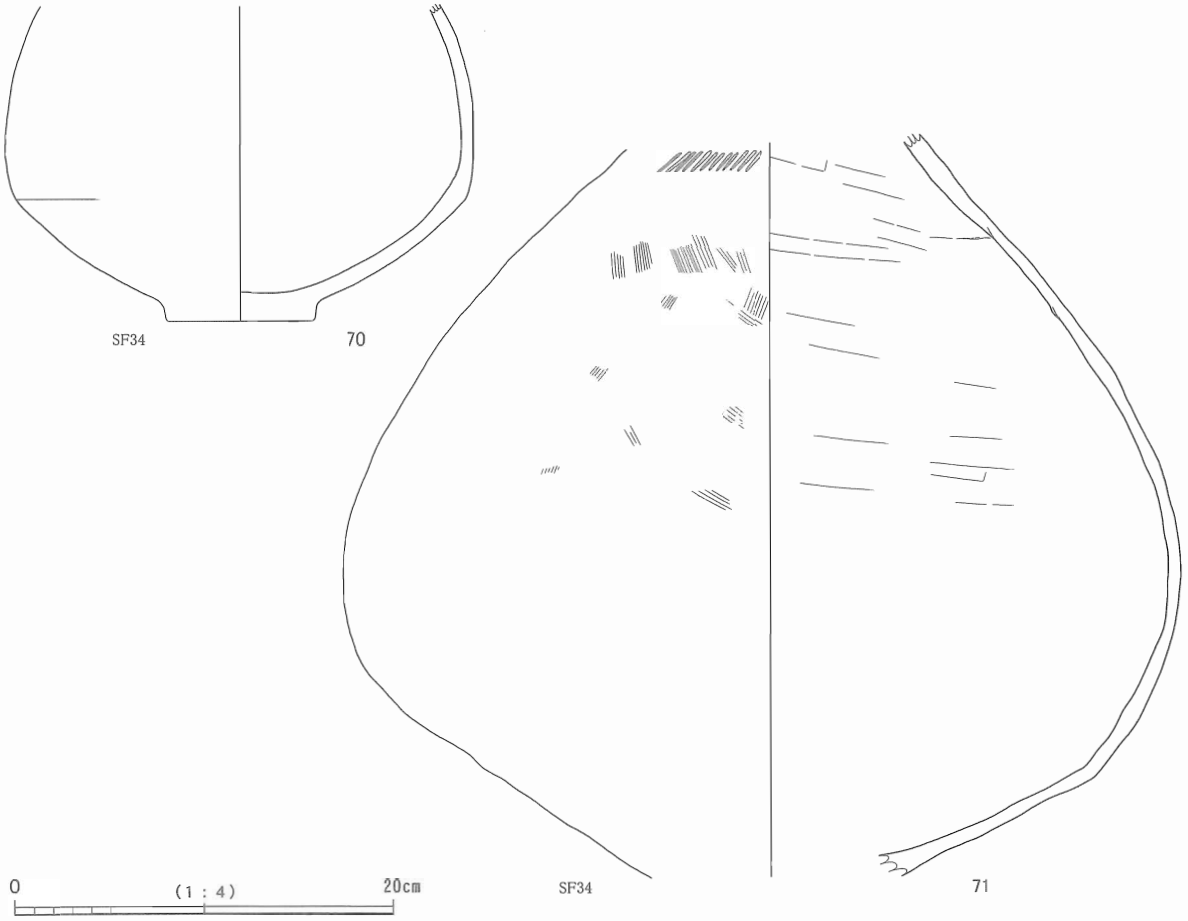
(2)玉　類

SF30・SF31出土ガラス小玉（第153図）　76は、SF30出土のガラス小玉である。濃青色を呈するが、3区出土のガラス小玉（第139図39～51）よりも透明度が高い。ほぼ円筒形を呈するが、形状の歪みも認められる。1点のみの出土であり、また、詳細な出土位置は特定できなかった。ただし、次に述べるSF31出土ガラス小玉とは色調などが明らかに異なる。被葬者が装着していたかは判断できないが、SF31の小玉がまぎれ込んだ可能性は低いと考えられ、SF30に伴って扱われた可能性を評価したい。

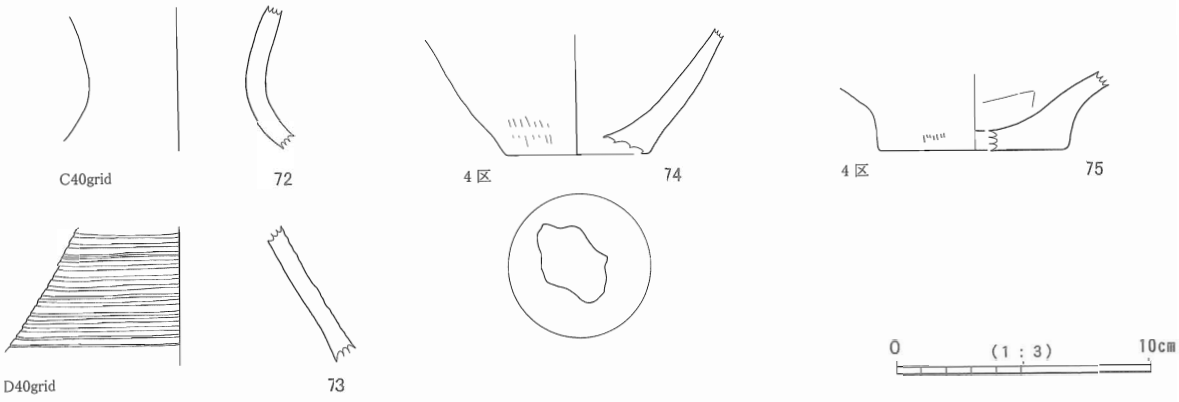
77～80は、SF31出土のガラス小玉である。全て水色を呈する。77～79は大きく、80はやや小さい。形



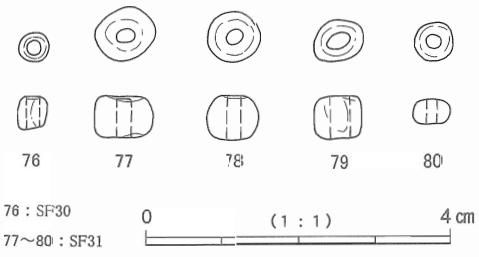
第150図　SF33土器棺



第151図　SF34土器棺



第152図　4区出土土器



第153図　J群出土玉類

状は円筒形に近いものと丸味の強いものがあり、ばらつきが目立つ。また、歪みもある。少数の出土であり、詳細な出土位置は特定できなかった。しかし、周囲からの混在を示す根拠はない。被葬者が装着していたかは判断できないが、SF31に伴って扱われた可能性は高いと判断できる。

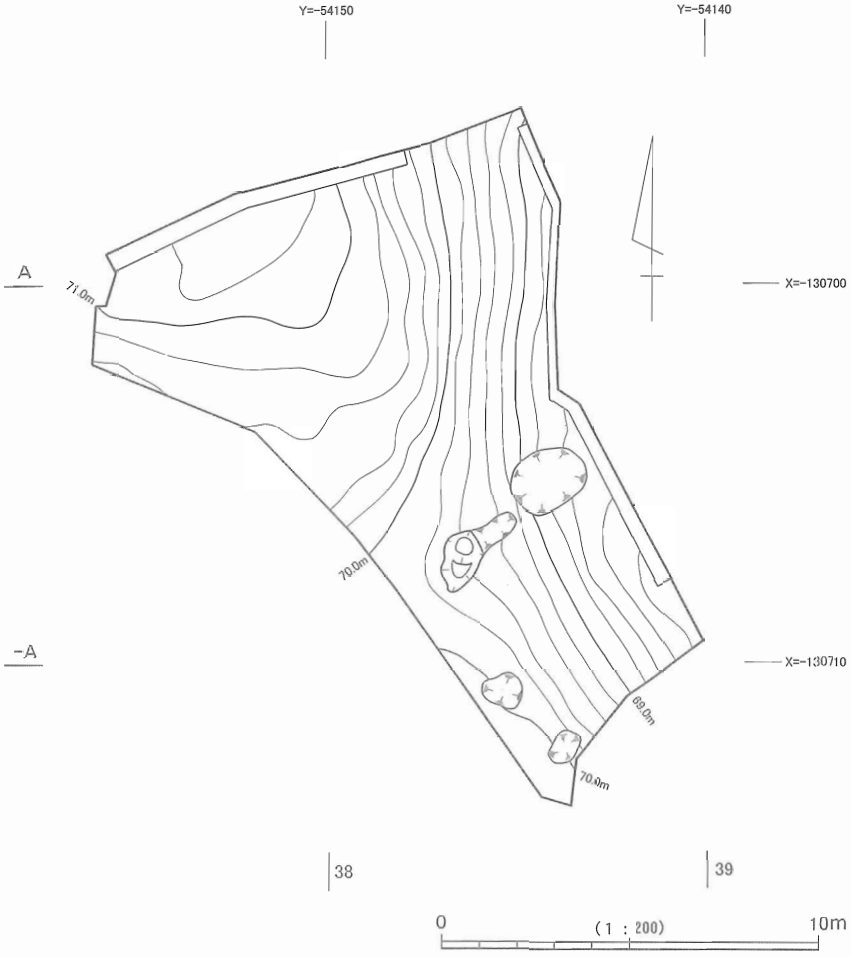
いずれも、弥生時代後期の方形周溝墓（2号周溝墓）の埋葬施設に伴うものであると判断できる。

第4節　5　区

5区は、確認調査において弥生土器片が出土し、さらに周辺域（3・4区）で弥生時代の墓群が確認できたことから、弥生時代の墓域に関連した遺構・遺物が発見される可能性が評価され、調査に至った。

調査では、調査区全体に表土（Ⅰ層）および若干の堆積層（Ⅱ・Ⅳ層）が認められ、その下でⅤ層（北側：泥岩層、南側：黄褐色砂質土・砂層）が検出された。しかし、遺構の検出はなく、出土遺物も非常に少なかった。崩落・流土によって遺構が消失した可能性も否定できないが、遺物量からは多くの遺構が展開していたとは考え難い。5区は丘陵幅が周囲よりも狭くなる場所にあり、遺構が多く形成されなかった可能性が指摘できる。

調査区の北東側は、確認調査によって遺跡の存在が認められなかった。したがって、5区で出土した少数の弥生土器片は、南東側（4区）から流入したものと推測できる。



第154図　5　区

第9表　遺物観察表（土器）

番号	挿図番号	図版番号	出土位置	種別	器種	部位	残存率(%)	器高(cm)	器径(cm)	口径(cm)	底径(cm)	色調(外面)	色調(内面)	摩滅	備考
1	132	57	SF04	弥生土器	壷	全体	90	26.8	22.5	16.6	8.8	にぶい黄橙(10YR6/4)	にぶい黄橙(10YR6/4)	○	底部打欠
2	132	57	SF04	弥生土器	高坏	全体	60	27.5	24.2	24.4	13.0	浅黄橙(10YR8/3)	浅黄橙(10YR8/3)	△	
3	132	57	SF04	弥生土器	壷	頸部	20					浅黄橙(10YR8/4)	にぶい黄橙(10YR7/2)	△	
4	132	57	SF04	弥生土器	壷	胴部	5					オリーブ黒(7.5Y3/1)	にぶい黄(2.5Y6/4)	△	
5	132		SF04	弥生土器	壷	胴～底部	40		(14.3)		(5.7)	明黄褐(10YR7/6)	にぶい黄橙(10YR6/4)	△	赤彩
6	132	57	SF04	弥生土器	壷	底部	40				(7.5)	にぶい黄橙(10YR7/4)	淡黄(2.5Y8/8)	△	
7	133	57	SF05a	弥生土器	壷	全体	90	18.5	16.4	10.1	7.4	浅黄(2.5Y7/4)	浅黄(2.5Y7/4)	△	胴部打欠
8	133	57	SF05a	弥生土器	高坏	全体	85	20.6	26.2	26.2	12.2	にぶい黄橙(10YR7/4)	にぶい黄橙(10YR7/4)	△	
9	133	57	SF08	弥生土器	壷	口縁～胴部	50		10.4	9.3		にぶい黄橙(10YR7/4)	にぶい黄橙(10YR7/4)	○	赤彩
10	133	57	SF08	弥生土器	高坏	坏部・脚部	20		21.5	21.5	12.8	橙(7.5YR7/6)	橙(7.5YR7/6)	△	
11	133	58	SD01	弥生土器	壷	頸～底部	95		12.6		5.2	暗灰黄(2.5Y5/2)	暗灰黄(2.5Y5/2)	△	胴部穿孔
12	133	58	SF13	弥生土器	壷	全体	80	7.5	11.5	7.9	9.3	浅黄橙(7.5YR8/6)	浅黄橙(7.5YR8/6)	△	底部打欠
13	133	58	SD01	弥生土器	壷	頸～胴部	15					にぶい黄橙(10YR7/4)	にぶい黄橙(10YR7/4)	△	
14	133		SD01	弥生土器	壷	口縁部	15			(11.6)		にぶい黄橙(10YR7/4)	にぶい黄橙(10YR7/4)	△	
15	133		SD07	弥生土器	壷	底部	15				(6.8)	黄橙(10YR8/6)	黄橙(10YR8/6)	×	
16	134	58	SD03	弥生土器	高坏	全体	70	21.4	25.4	25.4	12.0	にぶい黄橙(10YR7/6)	にぶい黄橙(10YR7/6)	△	
17	134	58	SD03	弥生土器	甕	全体	100	24.9	22.1	19.4	9.3	にぶい黄橙(10YR7/4)	にぶい黄橙(10YR7/4)	○	スス付着
18	134	58	SD03	弥生土器	壷	口縁・胴部	30			(14.0)		明黄褐(10YR7/6)	明黄褐(10YR7/6)	△	

番号	挿図番号	図版番号	出土位置	種別	器種	部位	残存率(%)	器高(cm)	器径(cm)	口径(cm)	底径(cm)	色調(外面)	色調(内面)	摩滅	備考
19	134		SD03	弥生土器	壷	口縁部	5			(27.1)		橙(7.5YR6/8)	にぶい黄橙(10YR7/4)	△	
20	135	59	SD04 西辺部	弥生土器	壷	胴部	30		(26.7)			橙(7.5YR6/6)	橙(7.5YR6/6)	△	
21	135	59	SD04 西辺部	弥生土器	鉢	全体	60	9.4	(27.2)	(26.5)	10.2	にぶい黄橙(10YR7/4)	にぶい黄橙(10YR7/4)	△	
22	135		SD04 西辺部	弥生土器	壷	胴部	30					明黄褐(10YR7/6)	明黄褐(10YR7/6)	×	
23	135	59	SD04 西辺部	弥生土器	鉢	口縁部	10		(13.8)	(13.8)		にぶい黄(2.5Y6/4)	にぶい黄(2.5Y6/4)	△	
24	135	59	SD04 西辺部	弥生土器	壷	胴部	20		(12.0)			浅黄(2.5Y7/4)	明黄褐(10YR7/6)	△	
25	135	59	SD04 西辺部	弥生土器	壷	底部	80				5.2	浅黄(2.5Y7/4)	浅黄(2.5Y7/4)	×	底部穿孔
26	135	59	SD04 西辺部	弥生土器	壷	底部	40				(9.1)	橙(7.5Y7/6)	橙(7.5Y7/6)	×	
27	135	60	SD03	弥生土器	壷	底部	90				9.3	にぶい黄橙(10YR6/4)	にぶい橙(7.5YR7/4)	△	
28	136	60	SF18	弥生土器	鉢?	口縁部	20		(26.3)	(26.3)		橙(7.5YR7/6)	橙(7.5YR7/6)	△	楕蓋
29	136	60	SF18	弥生土器	壷	胴～底部	70		(44.5)		11.2	明黄褐(10YR7/6)	浅黄(2.5Y7/3)	△	楕身
30	137	59	SF19	弥生土器	鉢	全体	80	14.3	30.8	30.8	9.5	にぶい黄橙(10YR7/4)	にぶい黄橙(10YR7/4)	△	片口、楕蓋
31	137	59	SF19	弥生土器	壷	胴～底部	95		47.3		12.2	にぶい黄橙(10YR7/4)	にぶい黄橙(10YR7/4)	△	楕身
32	138	60	SF20	弥生土器	壷	口縁～胴部	50		33.0	23.2		浅黄橙(10YR8/4)	浅黄橙(10YR8/4)	△	楕蓋
33	138	60	SF20	弥生土器	壷	全体	95	32.3	30.2	22.2	10.3	橙(5YR7/6)	橙(7.5YR7/6)	△	楕身
34	138		3区	弥生土器	壷	頸～胴部	20		(13.0)			橙(7.5YR7/6)	にぶい黄橙(10YR7/4)	×	
35	138	60	3区	弥生土器	壷	底部	20				(8.2)	にぶい橙(7.5YR6/4)	橙(7.5YR7/6)	×	
36	138	60	3区	弥生土器	壷	底部	70				3.2	橙(7.5YR7/6)	橙(7.5YR7/6)	△	
37	138	60	3区	弥生土器	鉢	全体	40	11.1	16.0	13.4	9.5	浅黄橙(7.5YR8/6)	浅黄橙(7.5YR8/6)	×	底部穿孔？
38	(別表：SF03出土管玉)														
39～47	(別表：SF03出土ガラス小玉)														
48～51	(別表：SF14出土ガラス小玉)														
52・53	(別表：SF13出土鋼鏃)														
54	148	61	SF31	弥生土器	壷	全体	90	20.9	17.1	13.0	6.2	浅黄橙(10YR8/4)	浅黄橙(10YR8/3)	△	赤彩、底部穿孔
55	148	61	SF31	弥生土器	壷	全体	95	12.0	10.8	9.8	5.6	にぶい黄橙(10YR6/4)	にぶい黄橙(10YR7/4)	△	赤彩、底部穿孔
56	148	61	SF31	弥生土器	壷	全体	80	12.2	9.9	9.8	4.6	にぶい黄橙(10YR7/4)	にぶい黄橙(10YR7/4)	△	赤彩、底部打欠
57	148		SF31	弥生土器	壷	胴部	15		(15.3)			にぶい黄橙(10YR7/4)	にぶい黄(2.5Y6/3)	△	
58	148	61	SF31	弥生土器	壷	胴～底部	40				6.4	明黄褐(10YR7/6)	にぶい黄(2.5Y6/3)	△	底部穿孔
59	148	61	SF31	弥生土器	高坏	全体	95	25.5	30.3	30.3	14.1	にぶい黄橙(10YR5/4)	にぶい黄橙(10YR6/4)	△	
60	148	61	SF31	弥生土器	鉢	口縁～胴部	15		(15.1)	(12.9)		明黄褐(10YR7/6)	橙(7.5YR7/6)	△	
61	148	61	SF31	弥生土器	高坏	坏部	70		23.6	23.6		橙(7.5YR6/6)	橙(7.5YR6/6)	×	
62	148	61	SF31	弥生土器	高坏	口縁部	10			(22.8)		浅黄(2.5Y7/2)	浅黄(2.5Y7/2)	△	
63	149	62	SD13	弥生土器	壷	口縁～胴部	30			(13.3)		橙(7.5YR6/6)	橙(7.5YR6/6)	△	
64	149		SD13	弥生土器	壷	底部	70				7.2	明黄褐(10YR7/6)	浅黄(2.5Y7/4)	△	底部穿孔
65	149	62	SD13	弥生土器	壷	胴部	30		(10.8)			にぶい黄橙(10YR7/4)	にぶい黄橙(10YR7/4)	△	
66	149	62	SD13	弥生土器	壷	底部	70				6.8	明黄褐(10YR7/6)	にぶい黄(2.5Y6/4)	△	底部穿孔
67	149	62	SD13 北側	弥生土器	高坏	全体	70	21.5	23.1	23.0	11.7	明黄褐(10YR6/6)	にぶい黄橙(10YR7/4)	△	
68	149	62	SD13 北側	弥生土器	高坏	全体	90	17.8	24.5	24.5	10.5	橙(7.5YR7/6)	橙(7.5YR7/6)	△	
69	150	62	SF33	弥生土器	壷	胴～底部	90		48.2		12.6	浅黄(2.5Y7/4)	浅黄(2.5Y7/4)	△	楕身
70	151	63	SF34	弥生土器	壷	胴～底部	90		21.4		8.1		浅黄(2.5Y7/4)にぶい黄橙(10YR6/4)		
71	151	63	SF34	弥生土器	壷	胴～底部	70		44.1			浅黄(2.5Y7/4)	にぶい黄橙(10YR7/4)	×	楕身
72	152		C40grid	弥生土器	壷	頸部	15					明黄褐(10YR7/6)	明黄褐(10YR7/6)	×	
73	152	62	D40grid	弥生土器	壷	胴部	15					にぶい黄橙(10YR7/4)	にぶい黄橙(10YR7/4)	△	
74	152		4区	弥生土器	甕	底部	25				5.8)	橙(7.5YR7/6)	橙(7.5YR7/6)	×	底部穿孔
75	152		4区	弥生土器	壷	底部	20				7.5)	明黄褐(10YR7/6)	明黄褐(10YR7/6)	×	
76	(別表：SF30出土ガラス小玉)														
77～80	(別表：SF31出土ガラス小玉)														

(　)は復元値　　摩滅－○：摩滅少ない、△：摩滅あり、×：摩滅著しい

第10表　遺物観察表（玉類）

番号	挿図番号	図版番号	出土位置	種類	材質	直径(mm)	全長(mm)	孔径(mm)	重量(g)	色調	備考
38	139	63	SF03	管玉	緑色凝灰岩	5.3	11.9	2.7	0.42	灰緑色	両側穿孔
39	139	63	SF03	小玉	ガラス	7.1	5.5	1.7	0.33	濃青色	
40	139	63	SF03	小玉	ガラス	6.7	5.1	2.2	0.25	濃青色	
41	139	63	SF03	小玉	ガラス	6.4	5.6	1.8	0.23	濃青色	
42	139	63	SF03	小玉	ガラス	5.0	5.5	1.5	0.20	濃青色	
43	139	63	SF03	小玉	ガラス	5.5	3.7	2.6	0.12	濃青色	
44	139	63	SF03	小玉	ガラス	4.2	3.0	0.8	0.07	濃青色	
45	139	63	SF03	小玉	ガラス	4.2	2.0	1.0	0.05	濃青色	
46	139	63	SF03	小玉	ガラス	3.3	1.5	1.7	0.02	濃青色	
47	139	63	SF03	小玉	ガラス	3.3	1.2	1.2	0.01	濃青色	
48	139	63	SF14	小玉	ガラス	6.5	4.7	2.3	022	濃青色	
49	139	63	SF14	小玉	ガラス	4.7	3.0	1.0	006	濃青色	
50	139	63	SF14	小玉	ガラス	4.2	2.7	1.5	006	濃青色	
51	139	63	SF14	小玉	ガラス	4.6	1.8	2.3	004	濃青色	
76	153	63	SF30	小玉	ガラス	3.9	4.4	2.0	008	濃青色	
77	153	63	SF31	小玉	ガラス	8.1	5.4	2.5	036	水色	
78	153	63	SF31	小玉	ガラス	7.2	5.4	3.1	032	水色	
79	153	63	SF31	小玉	ガラス	5.5	5.5	3.2	028	水色	
80	153	63	SF31	小玉	ガラス	5.0	3.3	1.7	0.10	水色	

第11表　遺物観察表（金属器）

番号	挿図番号	図版番号	出土位置	種類	全長(cm)	鏃身長(cm)	鏃身幅(cm)	茎長(cm)	茎幅(cm)	重量(g)	備考
52	140	63	SF13	鋼鏃	(2.8)	(2.2)	1.1	(0.6)	0.5	1.48	
53	140	63	SF13	鋼鏃	(2.4)		(0.6)			1.18	

第7章　林遺跡

第1節　概　要

1．基本土層と検出地形

基本土層　本遺跡の基本土層は、文殊堂遺跡で認められた下記の範疇で捉えることができる。

Ⅰ：表土　　Ⅱ：古墳群形成以降の堆積・崩落・流土層　　Ⅲ：古墳の盛土

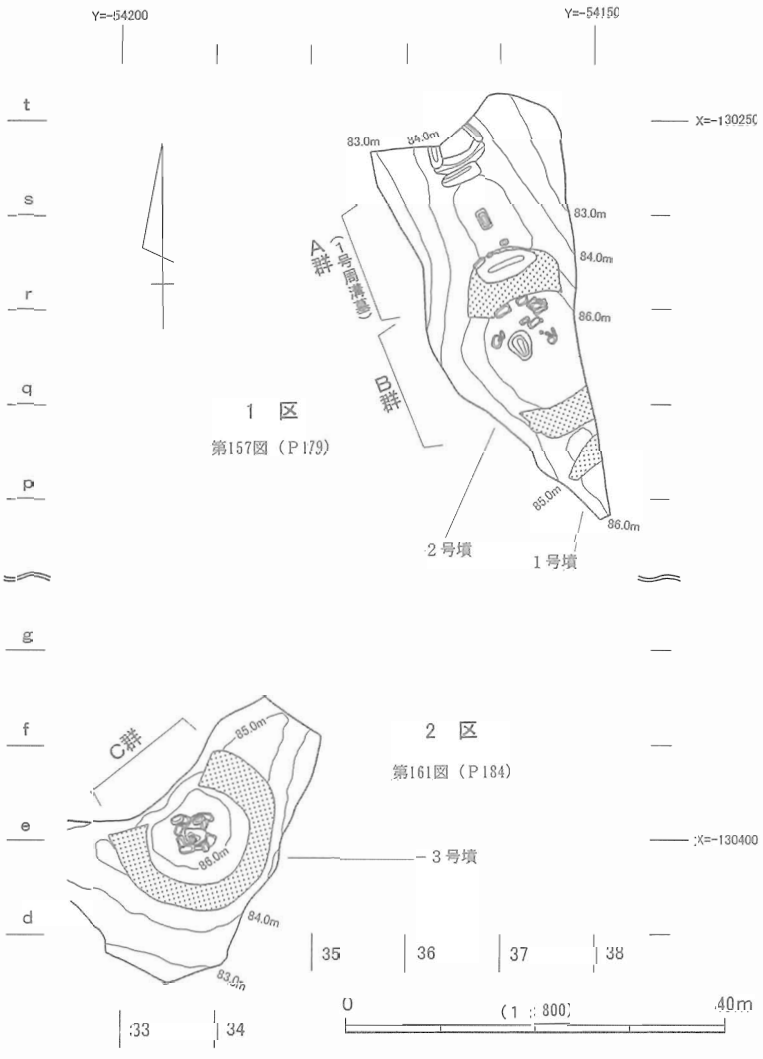
Ⅳ：古墳築造前の旧表土・堆積・崩落・流土層　　Ⅴ：地山（主に丘陵の基盤層）

Ⅰ層は、褐色を基調とする表土層である。Ⅱ層は、褐色～暗赤褐色の砂質土層である。Ⅰ層とⅡ層との区別は難しいが、斜面の流土層としてⅡ層が認められる場合がある。Ⅲ・Ⅳ層については後述する。Ⅴ層は、丘陵の基盤層である。明黄～赤褐色砂質土層、黄色～灰色砂層、河原石の礫層、白色泥岩層が互層状になって丘陵を構成するが、断層の影響などもあって単純化はできない。調査区内においては、大半は砂層・砂質土層が検出されているが、3区SF26付近と4区北端部に礫層が認められた。

遺構検出面　大半の場所では、Ⅰ・Ⅱ層の直下にⅤ層が現れるため、Ⅴ層上面を遺構検出面として調査することができた。

一方、2～5号墳の墳丘部では、古墳の盛土（Ⅲ層）や古墳築造以前の旧表土・堆積層（Ⅳ層）が認められた。盛土は、基本的に丘陵を掘削した土で構成される。黒褐色砂質土層などの旧表土は、2・3号墳の盛土下に広がっていた。さらに、旧表土下に暗灰褐色砂質土の堆積も認められた。この暗灰褐色砂質土の堆積は、4号墳でも認められている。5号墳では、盛土下が灰色砂層（Ⅴ層）となり、Ⅳ層は認められなかった。古墳築造などに伴う整地のあった可能性が指摘できる。

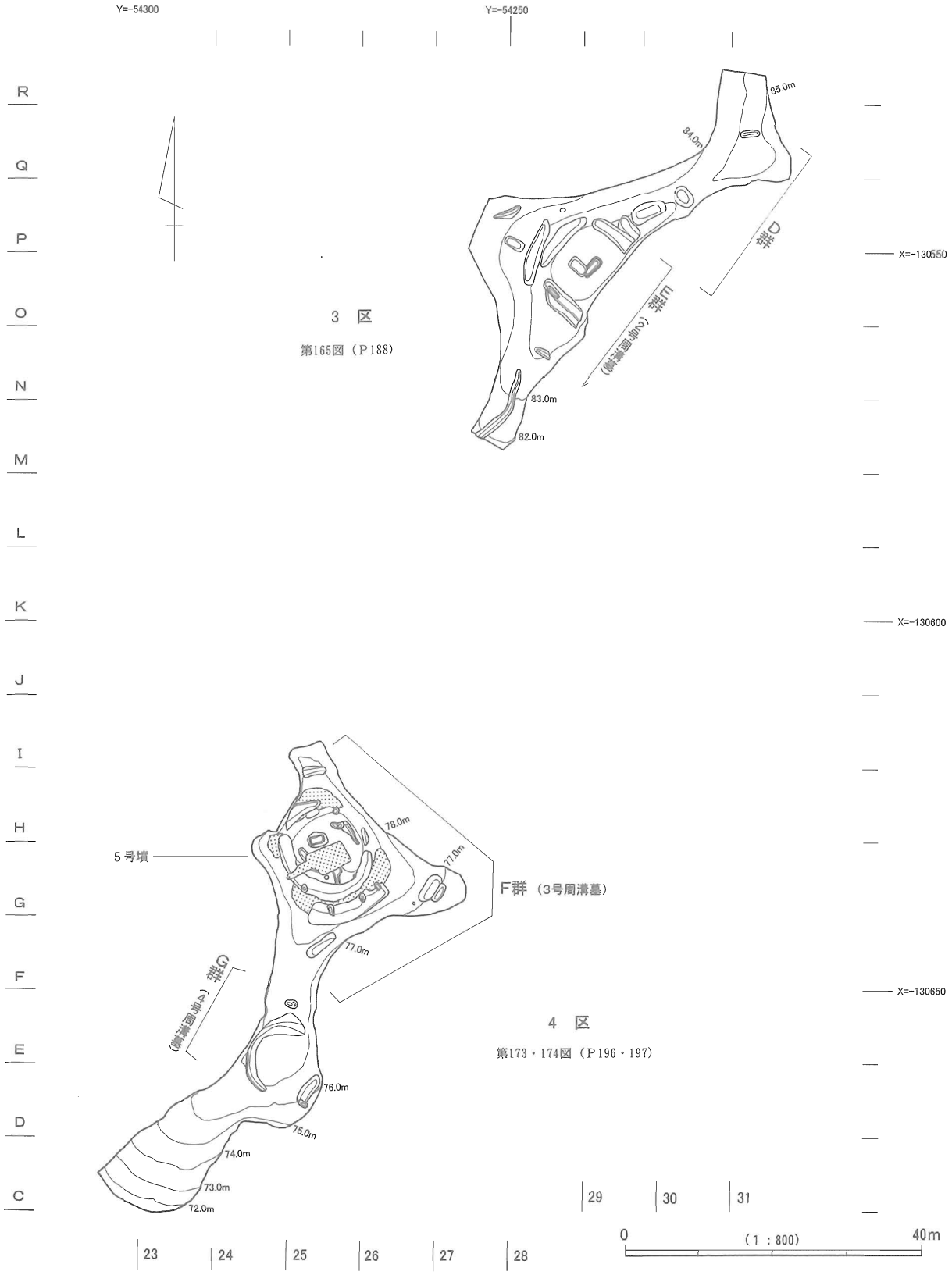
Ⅳ層の中に古墳群形成以前の遺構面が認められる可能性はある。しかし、実際にⅣ層中で古墳築造以前の遺構の全てを把握することは難しい。Ⅳ層の認められる場所においても、その下のⅤ層上面を遺構検出面として調査した。



第155図　調査区全体図1

地形の概要　林遺跡は、南北にのびる丘陵上に立地している。場所によって頂上部の高さや広さは異なるが、全体的にやせた尾根地形を呈しており、頂上平坦面の幅は最大でも20m弱程度である。

この尾根は、一宮川流域と太田川流域にはさまれた丘陵地帯の中心となる筋の一部にあたり（第２章



第156図　調査区全体図２

第4図)、大局的には遺跡の南・北にも連なるものと把握することができる。しかし、詳細にみると遺跡の南北端に谷地形などによる分断を認めることができ、地形的に規定された南北長約500mの範囲に遺跡の範囲が対応していることがわかる。一方、この林遺跡が立地する丘陵からは、いくつかの尾根が東西へと派生している。東に派生する尾根は長く、文殊堂古墳群・遺跡、宇藤蓮台古墳群・遺跡、フケ遺跡などが立地する。一方、西に派生する尾根は短く、一部は林古墳群の範囲内に含まれる。

検出地形と本来の地形　本書で報告・掲載する地形は、遺構検出面での地形であり、Ⅴ層上面を検出した状態の地形である（以下、検出地形)。文殊堂遺跡と同様、厳密には諸遺構が形成された面（以下、遺構面）による古墳群形成前の地形（以下、本来の地形）とは異なる（第4章 第1節参照)。

なお、調査前段階において、林遺跡の立地する尾根が道路によって大きく分断されていた。この分断による地形改変の影響は大きく、今回の調査区設定においても制限を与えている。分断前の地形は第2図（第2章)、分断後（調査開始段階）の地形は第3図（第2章）に示している。調査区内の検出地形においては、この影響を認めることはできない。

2．調査区および遺構・遺物

調査区　本遺跡については、今回が最初の正式な発掘調査である。また、今回の調査は本遺跡の全域を対象としている。したがって、今回の調査以外で設けられた調査区はない。調査区は、地形および遺跡を分断する道路によって4つに分かれており、北から1区・2区・3区・4区とする。各調査区とも、丘陵上平坦部が比較的広い場所を中心とした、長さ30～70m程の尾根上を範囲としている。

遺物の出土状況　出土遺物には土器と玉類がある。土器は、弥生時代後期～古墳時代前期に位置づけられるもので占められ、遺構内からの出土は少ない。遺構外の出土でも、墓群に対する供献土器である場合が多いことから、出土した場所が重視される。その出土位置は、調査区やグリッド・遺構群などによって実測図や観察表に記した。玉類はSF08出土小玉1点とSF24出土管玉1点だけである。

遺構の種類と時期　遺構は、各区で多く検出されている。検出遺構には、土坑（SF01～SF40)、小穴(SP01～SP05)、溝（SD01～SD25)、その他・不明遺構（SX01～SX02）がある。大半は、弥生時代～古墳時代前期の墓域に関連するものと判断できる。しかし、SD01・SD05は古墳群築造以降の可能性が高い。また、SX01・SX02は古墳築造前の倒木痕、SP01～SP05は古墳築造と関連する遺構の可能性がある。

弥生時代～古墳時代前期の墓域に伴う遺構の多くは、土器棺墓・土坑墓といった埋葬施設である(SF)。土坑墓とした中には木棺が用いられたものがあるが、本書では、全てに木棺の有無を明確化することができないことから、木棺墓も土坑墓に含めている。その他、墓群を区画する溝（SD）がある。

遺構群・周溝墓の把握　遺構は各区のほぼ全域に分布するが、微地形や遺構の分布、区画溝の配置などから、7つの遺構群に区分することができる。各遺構群は、10～30mの範囲をもち、墓群と呼びかえることもできる。ただし、あくまで検出遺構の分布状況による遺構群の把握であり、墓域の形成過程や営む集団を反映したものとは限らない。

墓群の中には、区画の溝（周溝）の存在が認められ、周溝墓として認識できるものがある。なお、本遺跡の周辺地域には台状墓とされているものがあり、そこにも溝が伴う場合がある（第3章参照)。周溝墓との違いは、盛土の有無や立地地形に反映される高まりにあると考えられる。しかし、厳密な基準によって分けられているようには見受けられない。後（第8章）に述べるが、本遺跡群においても双方に区分することが難しいことから、区画の溝を伴う墓群全てを周溝墓として扱うことにする。なお、弥生時代～古墳時代前期の墓群に伴う盛土の存在は認められていない。

第2節　1　区

1．A　群

1区北部に位置する遺構群である。南北にのびる幅約6mの丘陵上平坦面に立地し、南北約17mの範囲にある。遺構群内の地形は概ね平坦であり、凸凹はない。遺構群の南側では、隣接するB群に向かって地形が1m程高くなる。北側は崖になっているが、遺構の検出状況から、本来はより北側に丘陵上平坦面がのびていた可能性が指摘できる。

この丘陵上平坦面のほぼ全域に、遺構が分布している。検出遺構には5条の溝と4基の土坑がある。遺構が密集しているという状況ではないが、各遺構の特徴や配置から、弥生時代の墓域に伴う遺構群であると判断でき、さらに、SD02とSD03に区画された範囲が方形周溝墓1基に対応するものと把握することができる（1号周溝墓）。出土遺物は少数の弥生土器片に限られており、実測図化できるものはなかった。また、SD01については、弥生時代の墓域に伴う遺構ではない可能性がある。

1号周溝墓の規模は、丘陵筋の方向で全体が約13m、台状部が約10mである。南北辺の周溝は残存していた（SD02・SD03）が、東西辺の周溝は検出されなかった。丘陵斜面の崩落・流土によって消失した可能性もあるが、本来より東西周溝がなかった可能性も否定はできない。ただ、SD02・SD03の状況から四隅には周溝が廻らないと判断することはできる。台状部の中央には、土坑墓（木棺墓）1基（SF01）があり、南寄りには数基の小規模な土坑墓（SF02～SF04）が位置する。SF01は中心的な埋葬施設であり、また単独的でもある。形成時期については、出土遺物などの根拠に乏しいが、供献土器が少ない点、単独埋葬である点、周溝が四隅を廻らない点などは、弥生時代後期前半～中葉の林遺跡2号周溝墓（古い段階）や文殊堂古墳群3～6号周溝墓と類似している。

(1)溝

SD01（第157図）　1区北端部に位置する。丘陵筋に直行する溝1条と平行する斜面際の溝2条を合わせてSD01としている。ただし、これらの時期・性格が同じであるかは明確でない。また、これらが古墳群形成前の遺構である根拠もない。丘陵筋に直行する溝は、南に凸の緩い弧を描く溝であり、覆土上層からは須恵器の甕片が出土している。したがって、古墳群に関連している可能性の方が高いと評価できる。この遺構については別書（林古墳群）において述べることとする。

SD02（第158図）　1区北部に位置する、丘陵筋に直行する溝である。長さは約4.2m、幅は約1.6m、深さは0.8m弱である。覆土は褐色系の砂質土であるが、土層断面から掘り返しのあった可能性が指摘できる。また、土層によってSD01よりも古いと判断できている。出土遺物はない。

遺構の特徴などから、SD02は弥生時代後期頃の1号周溝墓の北側周溝である可能性が高いと判断できる。さらに、SD02の東西端部が立ち上がることから、1号周溝墓の周溝は、少なくとも北西隅・北東隅では途切れることがわかる。

SD03（第158図）　1区北部に位置する、丘陵筋に直行する溝である。上部が2号墳の周溝によって失われているが、全体像は把握できる。長さは約6.5m、幅は約3.0m、深さは約1.1mである。覆土は、上層が黒～褐色砂質土であり、下層が黄褐色砂質土である。覆土中から弥生土器片が出土している。

遺構の特徴から、SD03は弥生時代後期の1号周溝墓の南側周溝である可能性が高いと判断できる。さらに、先のSD02とこのSD03の検出によって、1号周溝墓は南北約13m（台状部約10m）の方形周溝墓であり、周溝は少なくとも四隅には廻らないことがわかる。

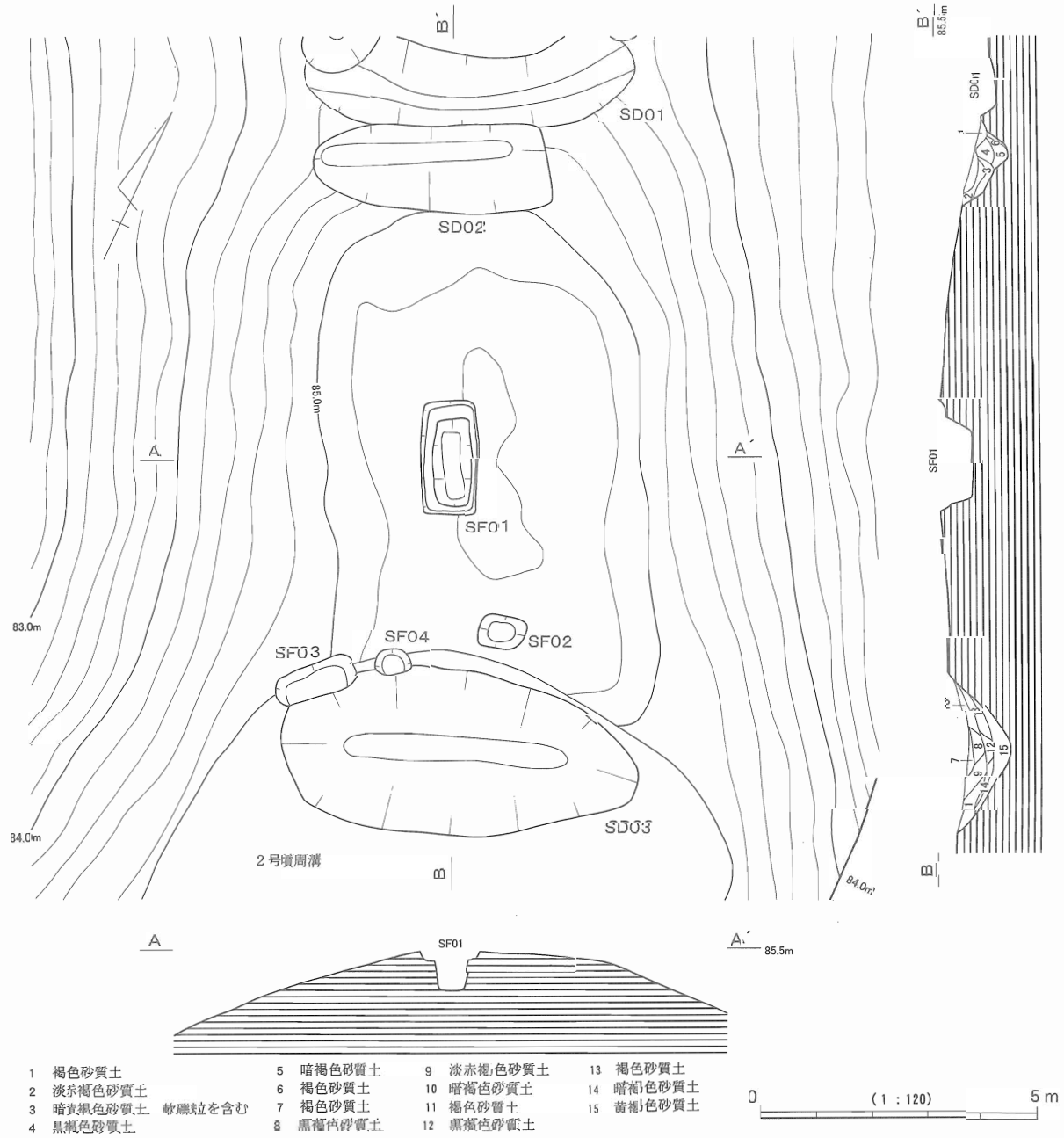
Y=-54170
Y=-54160
Y=-54150
X=-130250
X=-130260
X=-130270
X=-130280
X=-130290
t
s
r
q
SD01
SD02
SF01
SF02
SF03
SF04
SD03
2号墳周溝
SF06
SF08
SF05
SF07
SF09
SF10
SP01
SF11
SF12
SP02
SD04
SP03
SP04
SF14
SF13
SP05
SX01
A群（1号周溝墓）
B群
A
A´
83.0m
84.0m
85.0m
86.0m
1号墳周溝
36
37
38
A
SX01
SP03
A´
86.4m
0
(1：200)
10m

第157図　1　区

(2) 土坑墓

SF01（第159図）　1区北部、1号周溝墓の台状部の中央に位置する。1.0m強×2.1mの長方形で、深さは0.6m強である。主軸は丘陵筋に平行し、南北に近い。覆土は上層が黒～褐色の砂質土、下層が黄褐色砂質土である。上部は浅い皿状を呈している。その中央に、0.7m×1.6m程の長方形で深い土坑（下部）が設けられている。このような形状は文殊堂遺跡のSF84に近く、下部が比較的整った箱形を呈していることから、木棺が用いられていた可能性を指摘することができる。上部については、下部埋葬部の周辺施設として考えることができる。なお、文殊堂遺跡のSF84とは、方形周溝墓の中央に位置する点でも共通している。覆土中からは弥生土器片が出土しているが、副葬品の出土はなかった。

遺構の特徴や出土遺物から、弥生時代後期頃の土坑墓であると判断できる。さらに、1号周溝墓の中心的な埋葬施設であり、木棺が用いられていた可能性が高いと判断できる。



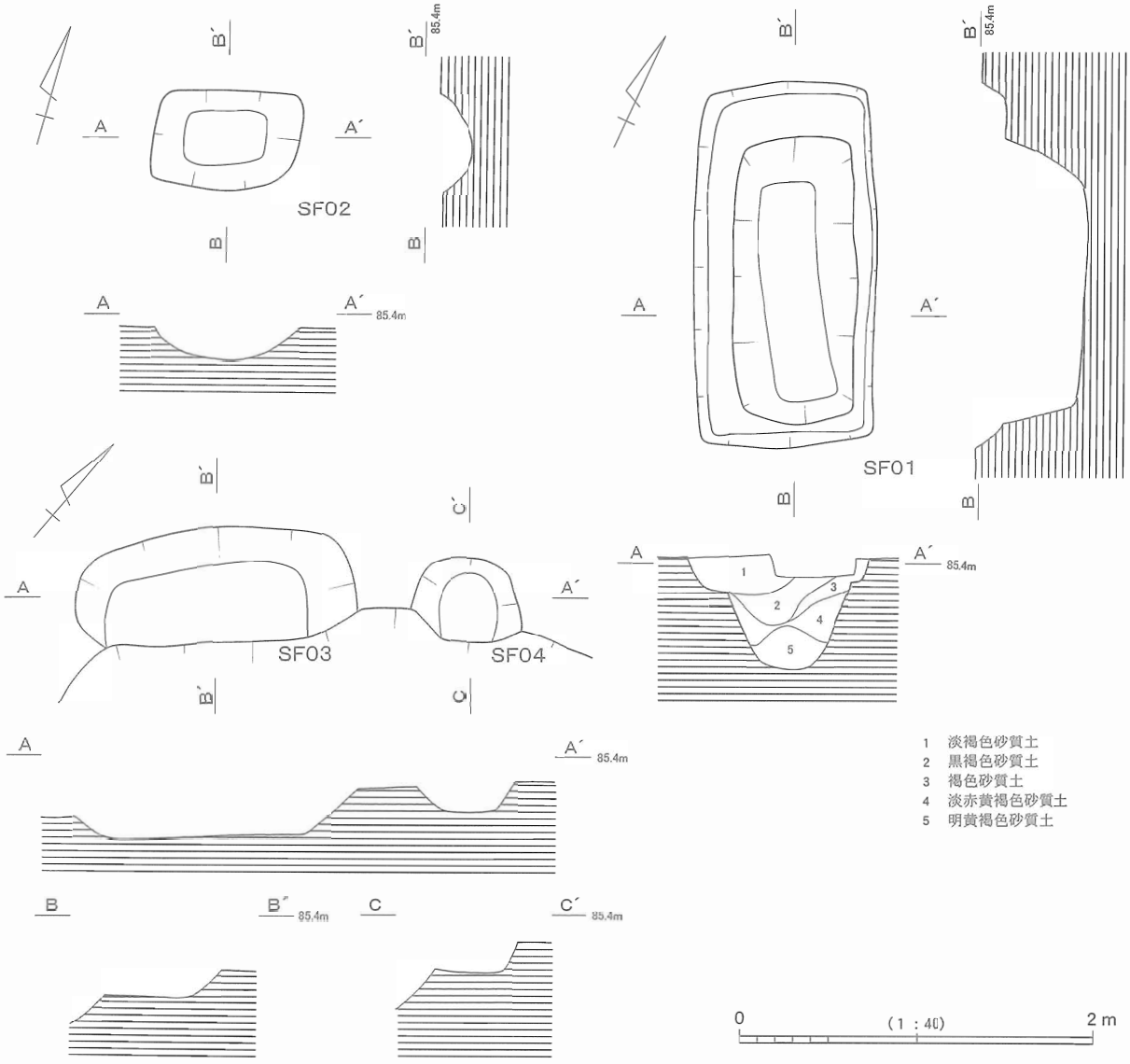
第158図　A群（1号周溝墓）

SF02（第159図）　１区北部、１号周溝墓の台状部の南寄りに位置する。0.6m弱×約0.8mの長方形を呈する。深さは0.2m弱であり、碗形の断面を呈している。主軸は丘陵筋に直行し、東西に近い。覆土は淡赤黄褐色砂質土であり、木棺の痕跡は認められていない。出土遺物はない。

遺構の特徴や周囲の状況から、弥生時代後期頃の土坑墓である可能性が高いと判断できる。

SF03・SF04（第159図）　１区北部、１号周溝墓の台状部の南縁に位置する。SF03は、0.7m以上×1.6m弱の長方形を呈し、深さは0.2m強である。SF04は、0.6m強×0.5m以上の長楕円～長方形を呈し、深さは0.1m強である。主軸は、SF03が丘陵筋に直行、SF04が丘陵筋に平行する。覆土は、ともにSF02と同様、淡赤黄褐色砂質土であり、木棺の痕跡は認められていない。また、これらは１号周溝墓の南側周溝（SD03）と重なった状態で検出されたが、土層から先後関係を判断することはできなかった。出土遺物はない。

遺構の特徴や周囲の状況から、弥生時代後期頃の土坑墓である可能性が高いと判断できる。ただし、１号周溝墓の周溝と重なることから、少なくとも１号周溝墓が設けられる際に形成されたものではないと推測することができる。



第159図　SF01～SF04

2．B　群

1区中央部の丘陵上に位置する、約10mの範囲にある遺構群である。2号墳の墳丘部にあたる、北側（A群）よりも1m程高くなった場所に立地する。南側へは同じ高さの丘陵上平坦面が続くが、道路によって大きく削平されている。

2号墳の墳丘部には、南北約12m、東西約9mの平坦面がある。しかし、遺構群の展開は、その北半部（A群寄り）に限られている。検出遺構には、土坑（SF05～SF14）・小穴（SP01～SP05）・溝（SD04）・その他（SX01）がある。出土遺物はほとんどないが、古墳の盛土下で検出された遺構群であり、古墳築造後に形成されたものでないことは明確である。

SF05～SF14は、遺構の特徴から弥生時代後期頃の土坑墓である可能性が評価できる。遺構群を区画する溝は検出されていないため、周溝墓とは異なる土坑墓群として把握できる。また、1号周溝墓に寄った位置に集中することから、1号周溝墓と関連する土坑墓群である可能性も考慮することができる。一方、SP01～SP05やSD04については性格の特定が難しく、古墳築造に関わる遺構である可能性もある。SX01は古墳築造前の倒木痕である。

(1) 土坑墓ほか

SF05～SF11（第160図）　1区中央部に分布する土坑群の内、SF05～SF11は主軸が丘陵筋に直行する長方形土坑である。規模は、約0.6m×1.0m程のSF10が最も小さく、最大は0.9m強×1.8弱のSF05である。0.7m×1.4m程度が平均的である。深さはいずれも0.2m以下と浅い。覆土は暗灰褐色砂質土である。木棺の痕跡は認められていない。また、検出が浅かったため、土坑間の先後関係を土層から判断することはできなかった。SF08の覆土中から、ガラス小玉1点（第160図）が出土している。

遺構の特徴や周囲の状況から、これらは弥生時代後期頃の土坑墓である可能性が高いと判断できる。

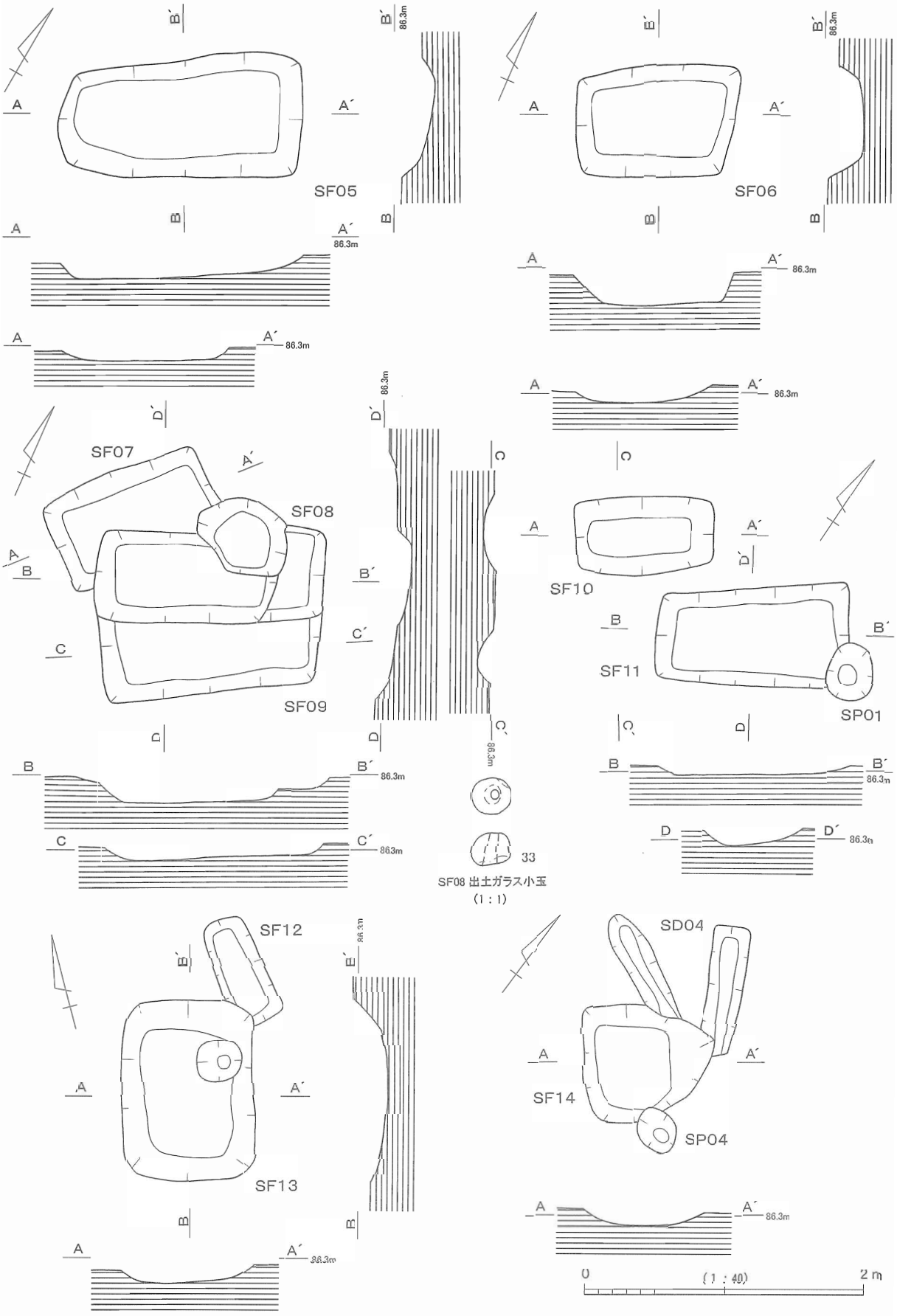
SF12～SF14（第160図）　1区中央部に分布する土坑群の内、SF12～SF14は主軸が丘陵筋に直行しない長方形土坑である。SF05～SF11に比べて短い平面形を呈するが、その他の特徴は類似する。したがって、同様に弥生時代後期頃の土坑墓である可能性が高いと判断できる。

(2) その他

SD04、SP01～SP05（第157・160図）　1区中央部に位置する。SD04は、SF14北側にある2条の溝である。いずれも浅く、短い。SP01～SP05は、2号墳墳丘部の中央やや北寄りに分布する、径0.3m程の平面円形の小穴である。このような遺構が弥生時代の墓域に確実に伴うといえる例は、周辺遺跡にはほとんどない。一方、文殊堂3号墳や8号墳の墳丘部にも小穴などが検出されており（第4章 第4節・第7節）、これらと同様、古墳築造に関連する遺構である可能性を考える必要がある。したがって、これらの遺構については、別書（林古墳群の報告）においても述べることとする。

SX01（第157図）　1区中央部、2号墳墳丘部の中央やや西寄りに位置する。2.5m×3.0m程の不整楕円形で、深さは2mを超える。上層は落ち込みに堆積した黒褐色砂質土で占められているが、下層には黒褐色・灰色などの様々な砂層・砂質土層が混在していた。下層のしまりが非常に強い。形状・覆土の特徴が他の遺構とは全く異なり、人為的な遺構でない可能性がある。出土遺物はない。

以上のような遺構の特徴から、古墳築造前の倒木痕である可能性が高いと判断することができる。なお、2号墳の墳丘部にあることから、古墳築造に際して木を除去した跡である可能性も考えることができるが、推測の域を出ない。

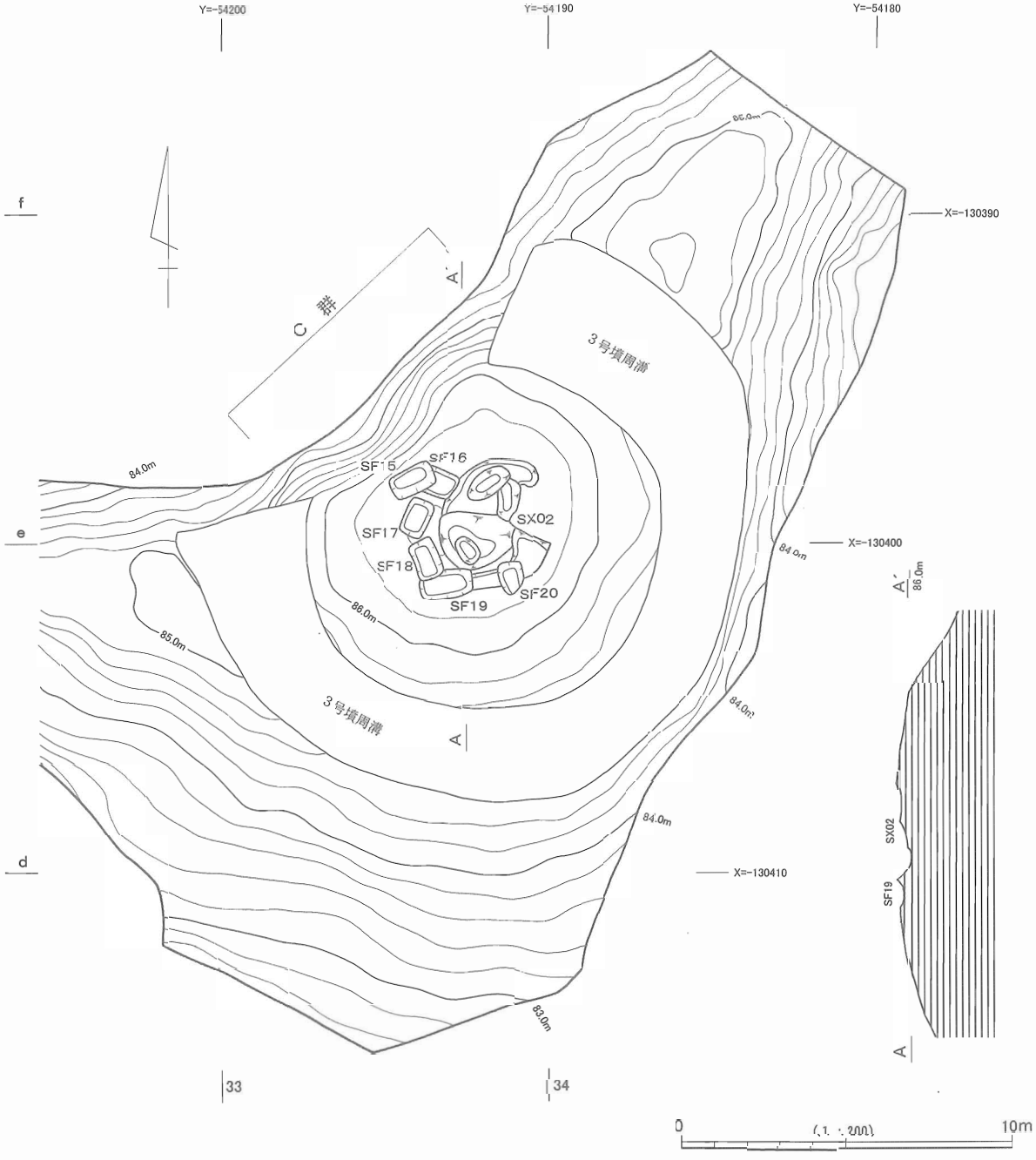


第160図　SF05～SF14

第3節　2　区

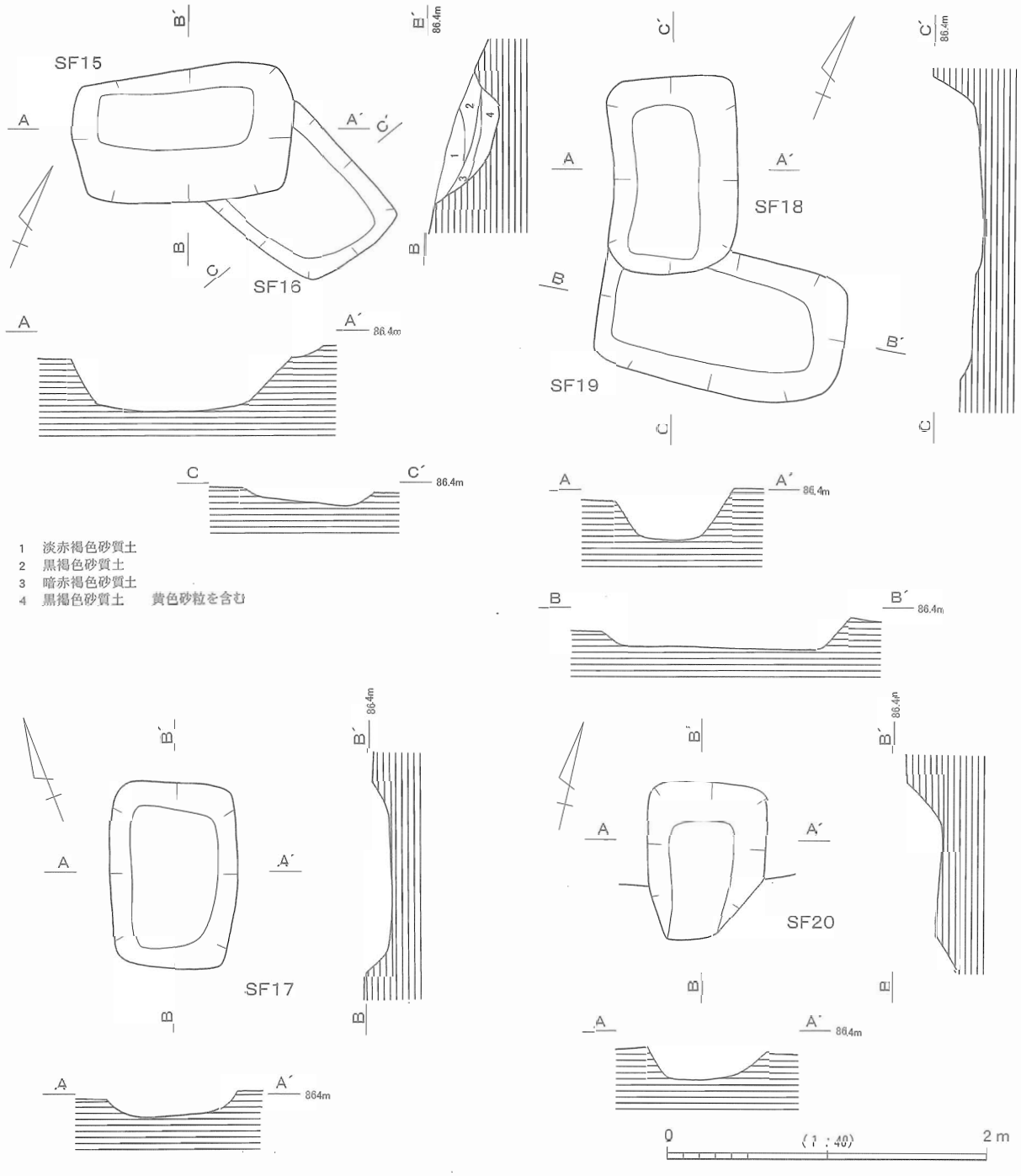
1．C　群

2区東部の丘陵上に位置する、6m四方の範囲にある遺構群である。南北にのびる丘陵筋の内でも高所となる場所であり、3号墳と重なる。また、この場所からは弥勒平遺跡のある尾根が西へと派生している（第2章 第3図）。



第161図　2　区

遺構の検出は、3号墳墳丘部の盛土の下に限られる。検出遺構には、長方形の土坑（SF16～SF20）と不定形の遺構（SX02）がある。遺構の特徴や出土遺物などから、SF16～SF20は弥生時代後期前半頃の土坑墓であると判断でき、本遺構群は高所に立地する土坑墓群であると把握できる。一方、SX02は人為的な遺構ではなく、SX01と同様に倒木痕である可能性が高いと判断できる。なお、3号墳の周溝によって、弥生時代の遺構が消滅している可能性も否定できない。しかし、周囲から弥生時代の遺物が多く出土しているわけではなく、積極的には評価できない。墓群を区画するような溝の存在も認め難く、周溝墓として把握することはできない。



第162図 SF15～SF20

(1) 土坑墓

SF15～SF20（第162図）　2区東部、3号墳墳丘部に集中する土坑群である。いずれも長方形を呈する。規模も類似しており、最大で約0.9m×1.6m弱（SF19）、最小で約0.8m×約1.2m（SF17）である。深さは、遺構検出面から0.1m～0.4mである。覆土は、SF15・SF17・SF18が黒褐色～淡赤褐色砂質土、SF19・SF20が黄褐色砂質土である。SF17・SF20の覆土中から、弥生土器の小片数点が出土している。

この6基の土坑は、主軸方向によってSF16・SF17とSF15・SF18～SF20とに大別することができる。前者は南北にのびる丘陵筋に平行・直行する土坑、後者は西に派生する尾根筋に平行・直行する土坑である。なお、土層観察によって前者のSF16が後者のSF15より古いことが確認できている。

遺構の特徴や出土遺物から、これらは弥生時代後期頃の土坑墓である可能性が高いと判断できる。

(2) その他

SX02（第161図）　2区東部、3号墳墳丘部の南北4.0m、東西3.2mの範囲にある。平面・断面形ともに不定形である。深さは0.6m程である。上層は落ち込みに堆積した黒褐色砂質土で占められているが、下層には黒褐色～灰色の様々な砂層・砂質土層が混在している。下層のしまりが非常に強い。上層からは弥生土器の小片が数点出土している（第163図1・2）。

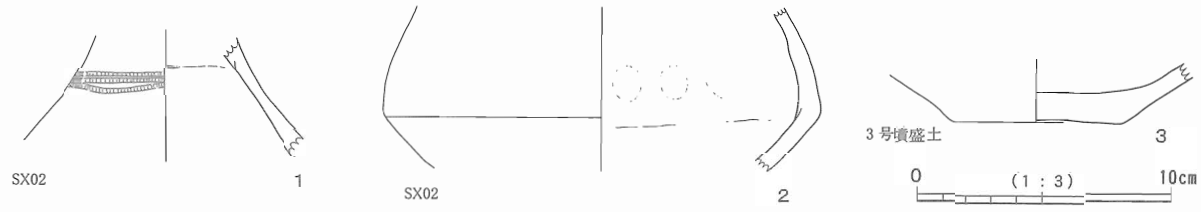
形状・覆土の特徴が他の遺構とは全く異なる。SX01と同様、人為的な遺構ではなく、古墳築造前の倒木痕である可能性が高いと判断できる。なお、3号墳の墳丘部にあることから、古墳築造に際して木を除去した跡である可能性も考えることができるが、そこまで特定できる明確な根拠はない。

2．2区の出土遺物

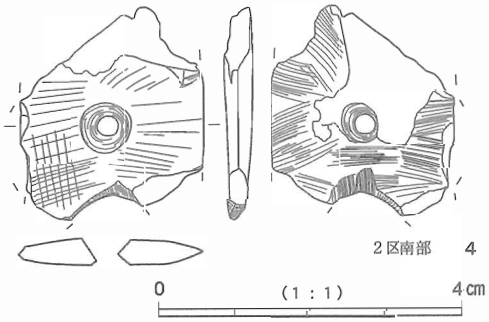
(1) 弥生土器

2区出土土器（第163図）　1・2区では古墳群形成前の遺物の出土が少ない。弥生土器の小破片が数点出土した程度であり、図化できたのはC群（2区）出土の3点だけである。1は壷の肩部であり、2条の押圧横線文が施されている。2は壷の胴部で、胴部最大径に稜線を伴う。3は壷の底部である。

小破片のために明確でないが、1の特徴から弥生時代後期前半～中葉の土器群である可能性が高い。



第163図　C群出土土器



第164図　2区出土石器

(2) 石　器

2区出土石鏃（第164図）　4は、2区南部出土の有孔磨製石鏃である。弥生時代中後期に位置づけできる遺物であるが、墓域に伴う遺構群とは離れた場所で出土しており、墓群との関連性については判断し難い。

第4節　3　区

1．D・E群

3区に位置する2つの遺構群である。北東部がD群、南西部がE群であり、ともに北東から南西へとのびる尾根に立地する。遺構検出面はV層上面であり、大半では灰～黄色砂層の上面、SD11付近やSF28の南東斜面では礫層の上面となる。両遺構群は地形によって分けられているが、後述の遺構検出状況から、1基の周溝墓を中心とした一連の遺構群として把握することもできる。また、調査区の北東側は道路によって丘陵が分断されているが、そこへの遺構群の広がりは想定し難い。

検出遺構には土坑・溝があり、出土遺物は弥生時代後期～古墳時代前期の土器で占められている。遺構・遺物の特徴から、D・E群は弥生時代後期～古墳時代前期の墓群であると判断でき、E群北東寄りの比較的広い場所に方形周溝墓1基が認められる（2号周溝墓）。一方、SD05・SD08・SD12・SF26・SF27は自然流路・窪地・地すべり痕などの可能性がある。

2号周溝墓は方形周溝墓である。南東部が崖によって消失しているが、直線的にのびる3辺の周溝が検出されている。ただし、北隅・西隅には周溝が廻らない。台状部の中央には、土坑墓2基（SF24・SF25）が重なって検出されている。いずれも中心的位置にあり、また単独的でもある。その他、SD07内に土坑墓1基（SF22）、周溝墓外にも土坑墓（SF23など）が検出されている。

北東・南西周溝では、2条の溝が重なって検出されている。また、台状部の土坑墓2基も一部が重なり、時期差を認めることができる。以上のように、2号周溝墓には2つの形成段階を認めることができ、出土遺物から古い段階を弥生時代後期前半、新しい段階を古墳時代前期前半に求めることができる。前者にはSD06・SD11とSF24、後者にはSD07・SD09・SD10とSF25が対応する。古い段階の周溝墓の規模は全体約15.8mで台状部13m前後、新しい段階での規模は全体約13.1mで台状部約10.2mである。

(1) 溝

SD05（第165図）　3区南西部端に位置し、丘陵上を尾根筋に沿って蛇行する溝である。幅は約1.2mで、深さは南西に向かって深くなる。出土遺物はない。自然流路である可能性が高いと判断できる。

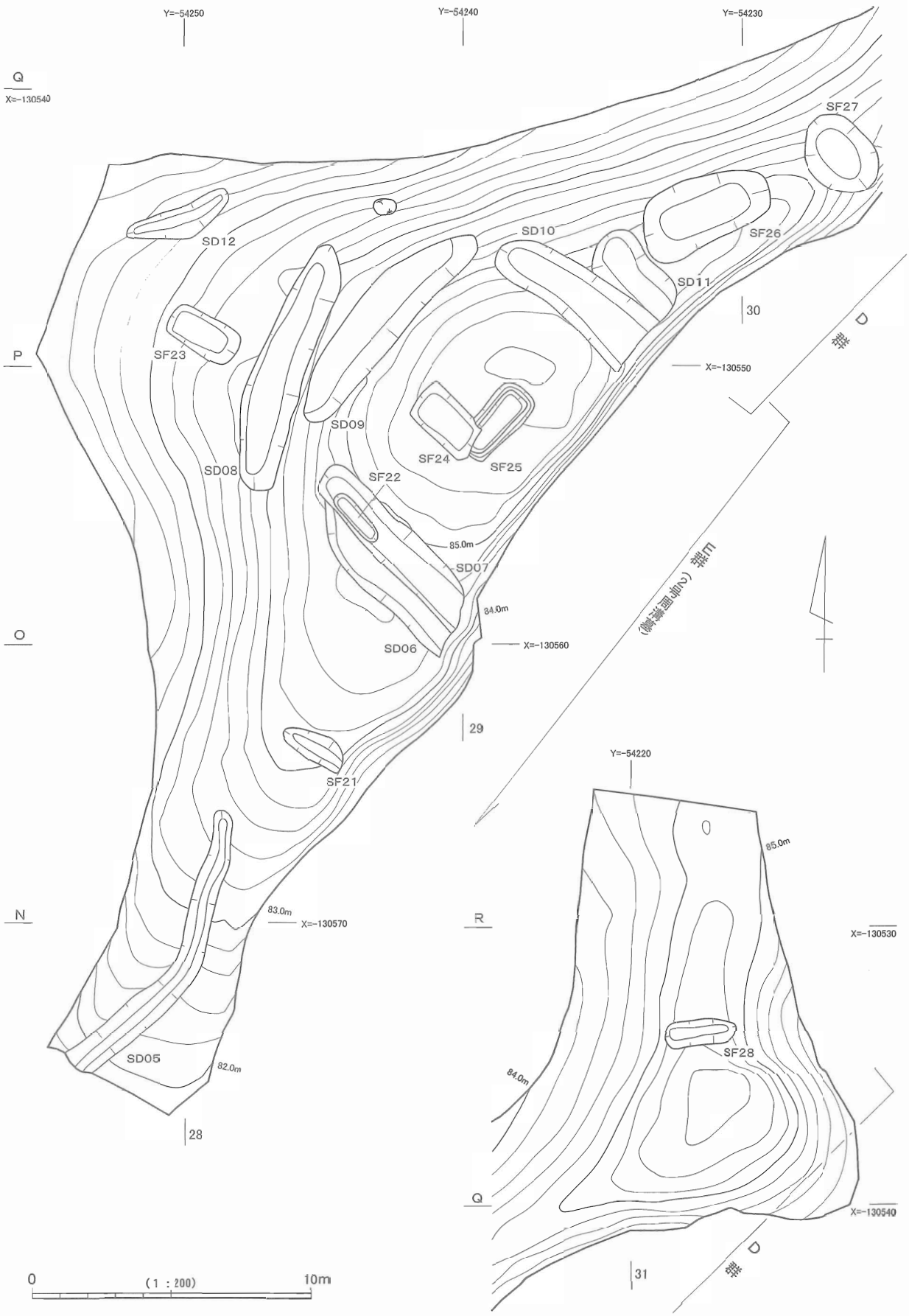
SD06・SD07（第166図）　E群南西寄りの丘陵筋を横断する溝である。SD06は幅1.2m以上で長さ6.8m以上、SD07は幅約1.6mで長さ7.2m以上である。南東部は崖で消失している。一方の北西端は、本来より溝が途切れていた可能性が高い。深さはSD06が0.2m以下、SD07が0.4m弱である。覆土はSD06が褐色砂質土、SD07が暗褐色～褐色砂質土である。2条は重なっており、土層によってSD07の方が新しいことがわかっている。出土遺物はない。

遺構の特徴や周辺の状況から、ともに2号周溝墓の南西周溝であり、SD06は弥生時代後期前半、SD07は古墳時代前期前半の可能性が高いと判断できる。

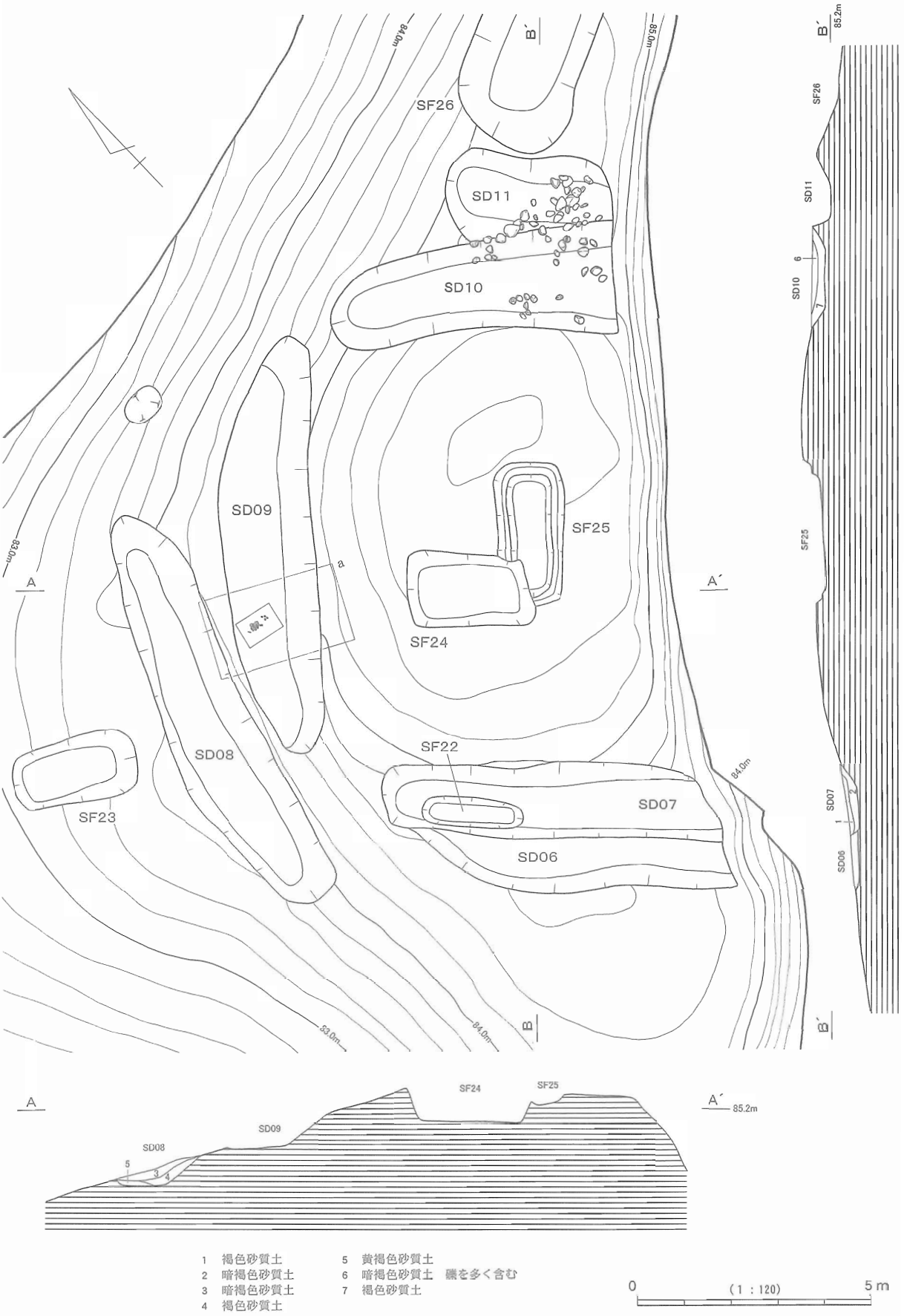
SD08（第166図）　E群の北西側斜面に位置する。幅2.0m弱で長さ約9.2m、深さは約0.6mである。方向は、2号周溝墓の方向とは異なり、地形の傾斜に沿って等高線に平行している。覆土は暗褐色～黄褐色砂質土であり、他の遺構よりも黄色味が強い。出土遺物はない。

弥生～古墳時代の墓域に伴う溝である可能性もあるが、地すべり痕である可能性も否定できない。墓域に伴うならば、遺構の方向からSF23（弥生時代後期の土坑墓）と関連する可能性が評価できる。

SD09（第166・167図）　E群北西寄りの丘陵筋に平行する溝である。幅約1.9m、長さ約8.9m、深さ0.7m強である。北西縁の立ち上がりは検出できなかった。斜面のために流失した可能性もあるが、本来


Y=-54250
Y=-54240
Y=-54230
Q
X=-130540
SF27
SD12
SD10
SF26
SD11
30
P
SF23
X=-130550
SD09
SF24
SF25
SD08
SF22
85.0m
SD07
84.0m
O
SD06
X=-130560
29
SF21
Y=-54220
N
83.0m
X=-130570
R
X=-130530
SD05
82.0m
SF28
84.0m
Q
X=-130540
28
31
0
(1 : 200)
10m

第165図　3　区



第166図　E群（２号周溝墓）１

より溝状を呈していなかった可能性もある。北東端と南西端は、本来より溝が途切れていた可能性が高い。覆土は上層が暗褐色砂質土、下層が褐色砂質土である。覆土中から古墳時代前期前半の土師器（第171図6・7）が出土している（第167図）。

遺構の特徴などから2号周溝墓の北東周溝であり、古墳時代前期前半に形成された可能性が高い。

SD10・SD11（第166・170図）　E群北東寄りの丘陵を横断する溝である。SD10は幅約2.4mで長さ6.1m以上、SD11は幅2m程で長さ3.6m以上である。南東部は崖で消失している。一方の北西端は、本来より溝が途切れていた可能性が高い。深さはSD10が約0.3m、SD11が0.4m強である。覆土はSD10が褐色砂質土、SD11が暗褐色～褐色砂質土であり、SD10・SD11上層には基盤層（V層）からの礫の流入が多く認められた。この2条の溝は接しており、土層によってSD10の方が新しいと判断できている。SD10からは、胎土などから土師器である可能性が高いと判断できる土器片が出土している。

遺構の特徴や周辺の状況から、ともに2号周溝墓の北東周溝であり、SD10は古墳時代前期前半、SD11は弥生時代後期前半に形成された可能性が高いと判断できる。

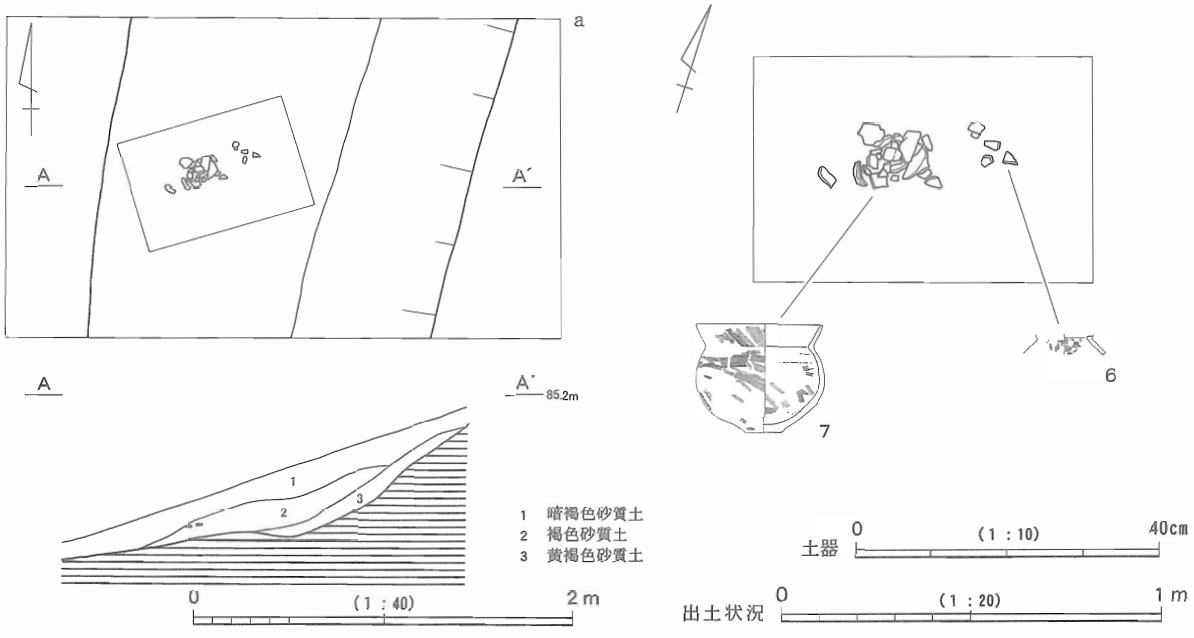
SD12（第165図）　E群の北西側斜面に位置する。幅は最大約1.1m、長さは約4.0m、深さは0.3m弱である。等高線にほぼ平行し、地形に沿って蛇行する。覆土は黄褐色砂質土である。出土遺物はない。以上の特徴から、自然流路や地すべり痕などである可能性が高いと判断できる。

(2) 土坑墓

SF21（第168図）　3区南西部に位置する。1.1m弱×2.5m以上の不整長楕円形で、深さは0.4m弱である。東端部が崖によって失われている。覆土は暗褐色～黄褐色砂質土である。出土遺物はない。

覆土は周辺にある弥生時代後期～古墳時代前期前半の遺構と大差ないが、幅が狭く不整形であることから、土坑墓ではなく、溝や自然流路であった可能性もある。

SF22（第168図）　3区中央部（E群）、2号周溝墓の南西周溝内に位置する。SD07北西部の底面南西寄りに位置し、主軸はSD07と平行する。0.6m弱×2.1m弱の長楕円形で、深さはSD07底面から0.3m強である。覆土は褐色砂質土であり、木棺の痕跡は認められていない。また、土層によるSD07との先後関係の判断もできなかった。出土遺物はない。



第167図　E群（2号周溝墓）2

遺構の特徴や周囲の状況から、弥生時代～古墳時代前期前半の土坑墓である可能性が高いと判断できる。SD07形成後～埋没後に設けられたとするならば、古墳時代前期前半の可能性がより高い。

SF23（第169図）　３区中央部（Ｅ群）、２号周溝墓の北西側斜面に立地する。約1.4m×2.6m弱の長方形で、深さは約0.8mである。主軸は丘陵筋（等高線）に直行する。覆土は暗褐～灰褐色砂質土であり、木棺の痕跡は認められない。上層から土器片が出土、胎土などから弥生土器と判断できる。

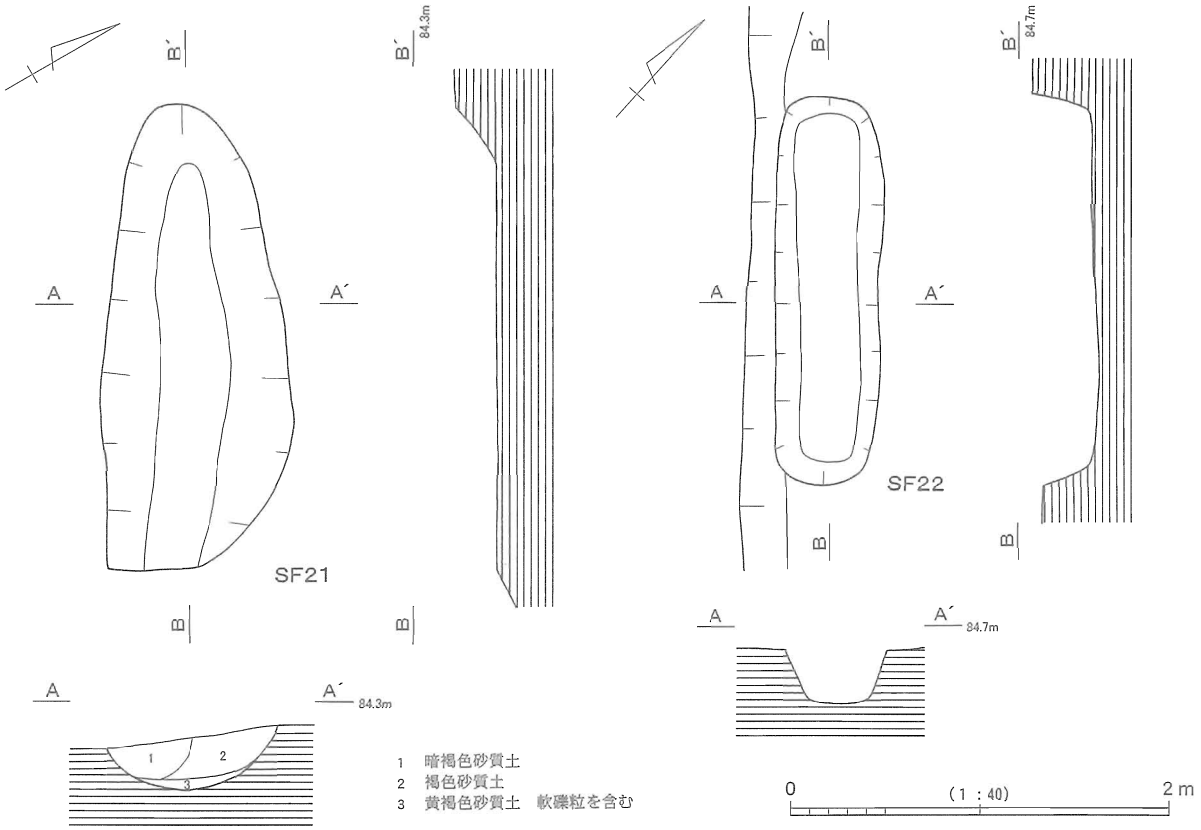
遺構の特徴や出土遺物から、弥生時代後期の土坑墓である可能性が高いと判断できる。

SF24（第169図）　３区中央部（Ｅ群）、２号周溝墓の台状部の中央に位置する。約1.6m×約2.8mの長方形で、深さ約0.8mである。主軸は丘陵筋に直行する。覆土は暗～灰褐色砂質土であり、土層からSF25より古いことが確認できている。断面箱形の整った長方形土坑であるが、木棺の痕跡を把握することはできなかった。上層から弥生土器片（第171図５）、下層から管玉（第172図８）が出土している。管玉は南東寄りから出土したことが把握できているが、詳細な出土地点は特定できなかった。

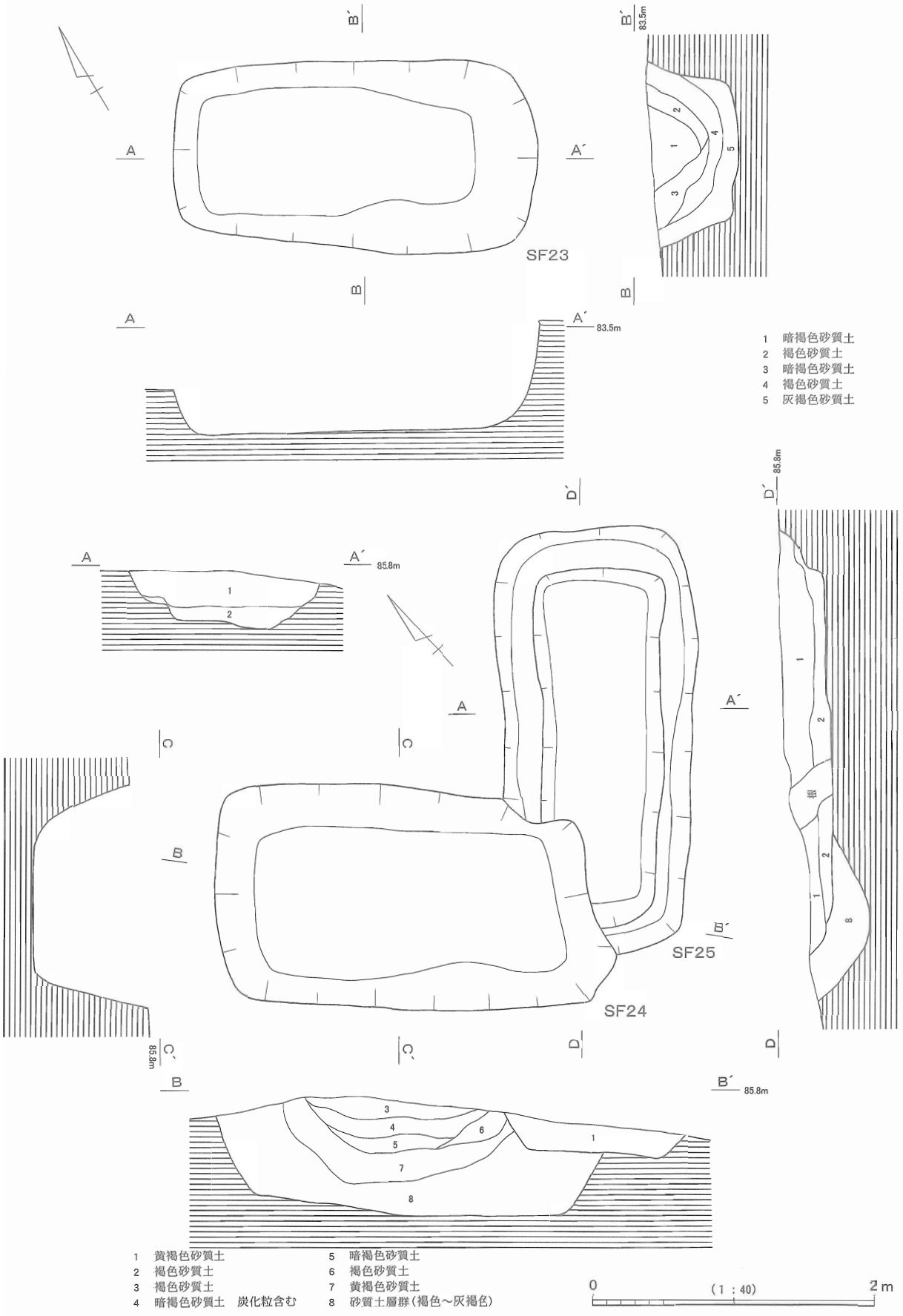
遺構の特徴や出土遺物から、弥生時代後期前半の土坑墓である可能性が高いと評価できる。２号周溝墓が設けられた当初の中心的な埋葬施設として把握することができ、林遺跡では珍しく副葬品が出土した土坑墓でもある。明確な根拠は得られなかったが、木棺が用いられた可能性も否定できない。

SF25（第169図）　３区中央部（Ｅ群）、２号周溝墓の台状部の中央に位置する。約1.4m×約3.1mの長方形で、深さは約0.3mである。主軸は丘陵筋に平行、SF24に直行する。覆土は上層が黄褐色、下層が褐色の砂質土である。土層によって、SF24よりも新しいことが確認できている。また、検出状況によって、0.8m×2.5m程の木棺が用いられていたことがわかっている。出土遺物はない。

遺構の特徴から、２号周溝墓の中心に位置する土坑墓であり、木棺が用いられたと判断できる。さらに、SF24との切り合いから古墳時代前期前半の遺構である可能性が高いと判断できる。



第168図　SF21・SF22



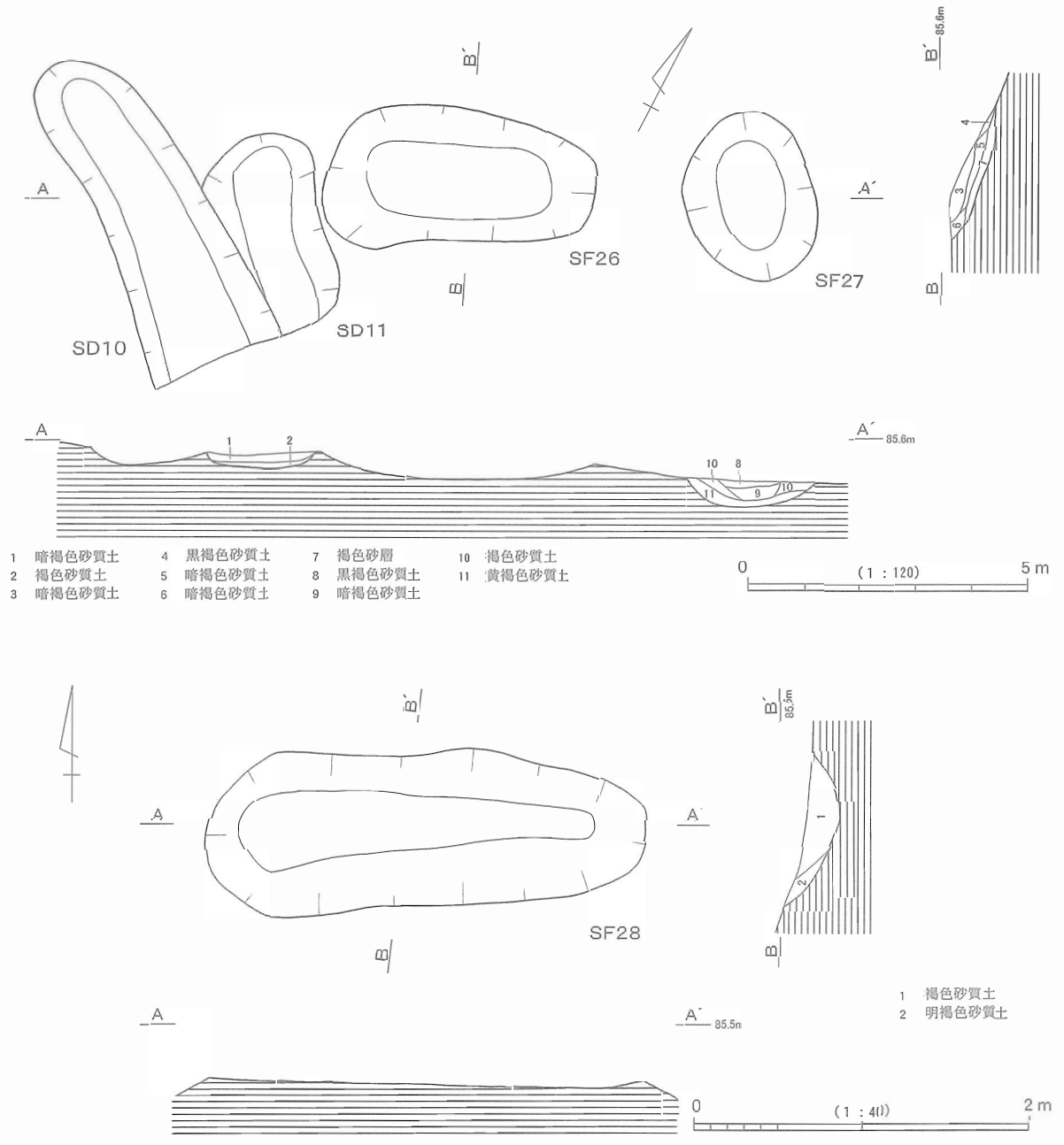
第169図　SF23～SF25

SF26・SF27（第170図）　3区北東部（D群）、2号周溝墓の北東側に位置する。SF26は2.6m強×4.8m強の長楕円～長方形で、深さは0.5m弱である。底面が北西側斜面に向かって下がる。一方、SF27は長軸3.1m強の楕円形で、深さは約0.4mである。主軸は、SF26が丘陵筋に平行、SF27が丘陵筋に直行する。覆土は、ともに暗褐色～黄褐色砂質土であり、出土遺物はない。

遺構の形状などは、周囲にある弥生時代後期～古墳時代前期前半の土坑墓などとは大きく異なる。丘陵上の幅の狭まった場所に立地する点も、ほかの土坑墓とは異なっている。以上から、地すべりや自然地形による窪地などの可能性も考慮する必要がある。

SF28（第170図）　3区北東端部（D群）に位置する。約1.0m×2.6m強の長楕円形で、深さは約0.3mである。主軸は丘陵筋に直行し、東西に近い。覆土は明褐色～褐色砂質土である。出土遺物はない。

弥生時代～古墳時代前期の土坑墓もしくは溝の可能性もある。しかし、2号周溝墓を中心とする遺構群からは離れた場所にあり、覆土や出土遺物などに明確な根拠を見出すことはできない。



第170図　SD10・SD11、SF26～SF28

2．3区の出土遺物

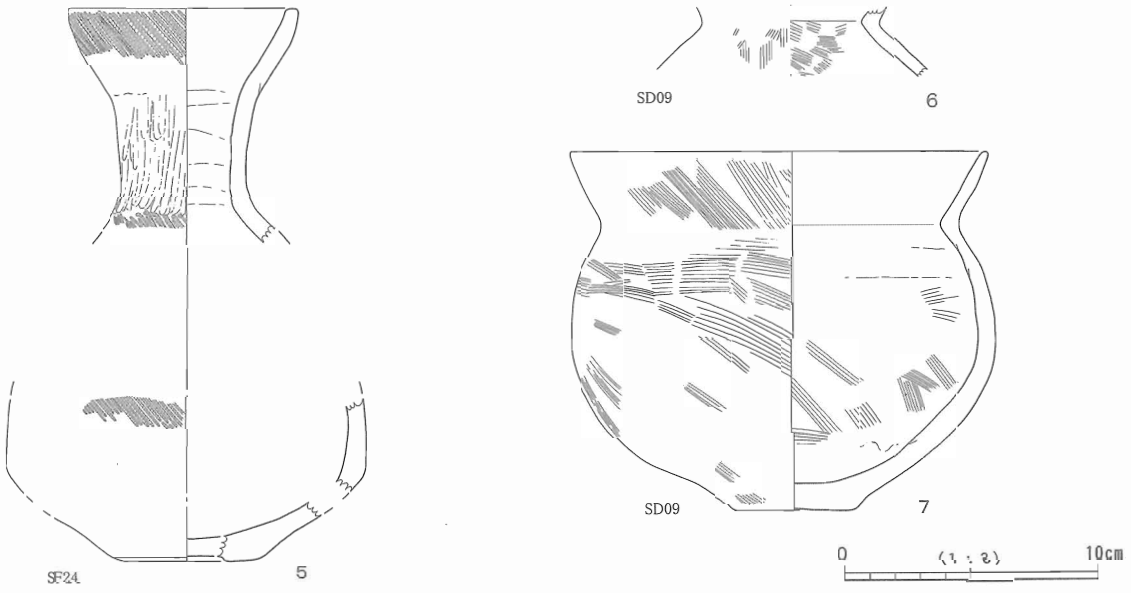
(1) 弥生土器・土師器

SF24出土土器（第171図）　5は、SF24上層から出土した壷である。底部は上げ底状、胴部は下膨れ形である。頸部は細く直立し、口縁部はやや受口状を呈する。口縁部外面と胴部上半の広い範囲に無節縄文が施されている。頸部外面には縦方向のミガキ調整が観察できる。

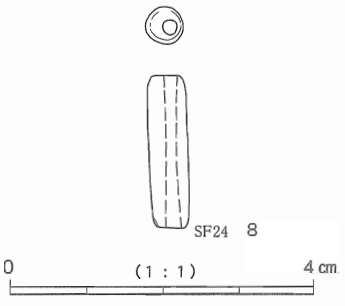
器形・文様の特徴から、5は弥生時代後期前半に位置づけることができる。

SD09出土土器（第171図）　6は、SD09出土の壷の頸部片である。胴部は肩が張る形状を呈する。頸部は、胴部から屈折を介して大きく開く口縁部に至るものである。7は、SD09出土のく字鉢である。底部は相対的に小さく、平底ではあるが中央にわずかな凹部がある。胴部は球形に近く、屈折を介して口縁部に至る。文様はなく、外面にはハケ調整だけが観察できる。口縁部には、斜方向のハケ調整が施されている。胴部のハケ調整は、上部が横方向で中位以下が斜方向になる。

6による詳細な時期判断は難しいが、主に7の特徴から、古墳時代前期前半の土器群であると位置づけることができる。したがって、先述のSF24出土土器とは明確な時期差を認めることができ、2号周溝墓形成をめぐる2つの時期を把握することができる。



第171図　E群出土土器



第172図　3区出土玉類

(2) 玉　類（第172図）

8は、SF24南西部の下層から出土した管玉である。詳細な出土位置が特定できないため、どのように扱われていたのか、どこに装着されていたのかなどの判断はできない。滑石製であり、歪みの少ない比較的整った円柱形を呈している。穿孔は両面穿孔である。

第5節　4　区

1．F　群

4区北部に位置する遺構群である。南北にのびる丘陵上に立地しており、やせ尾根の中で比較的広い場所にある。また、高まりを伴っている点も本遺構群の地形的特徴であり、古墳時代後期においては林5号墳が築造されている。南側にはやせた尾根が続き、北側・西側には細く短い尾根がのびる。東側は崖になっている。遺構検出面はV層上面であり、大半では灰～黄色砂層の上面、SD14付近と5号墳周溝内の一部では淡赤褐色砂質土層や礫層の上面となる。

検出遺構には土坑・溝があり、出土遺物は弥生時代後期～古墳時代前期前半の土器で占められている。この遺構・遺物の特徴から、本遺構群は弥生時代後期～古墳時代前期前半の墓群であると判断でき、SD14～SD16やSD17の検出によって、周溝墓の存在を把握することができる（3号周溝墓）。一方、SD18～SD23やSF37・SF38などについては、非常に浅く不整形であることから、自然の窪地・地すべり痕や古墳築造に伴う整地痕などである可能性が指摘できる。

3号周溝墓は、出土遺物などによって2つの形成時期・段階（弥生時代後期前半～中葉と古墳時代前期前半）を認めることができる。

弥生時代後期前半～中葉の遺構としては、まずSD17およびSF33～SF35をあげることができる。その他、SF29（木棺を用いた土坑墓）や周溝墓東側斜面のSF36（土器棺墓）、SD21やSD22、周溝墓北側のSD13も同時期の可能性がある。確実性の高い復元であるとはいえないが、SD17を周溝墓の南周溝東半部、SD13を北周溝の一部とするならば、SF29を中心とする南北20m前後の不整形な周溝墓に復元することも可能である。なお、SF30～SF35は周溝墓の周縁部に位置する小型土坑である。遺構の位置や規模から、SF29とは社会的位置や年齢の異なる被葬者の土坑墓であったと推測することもできる。

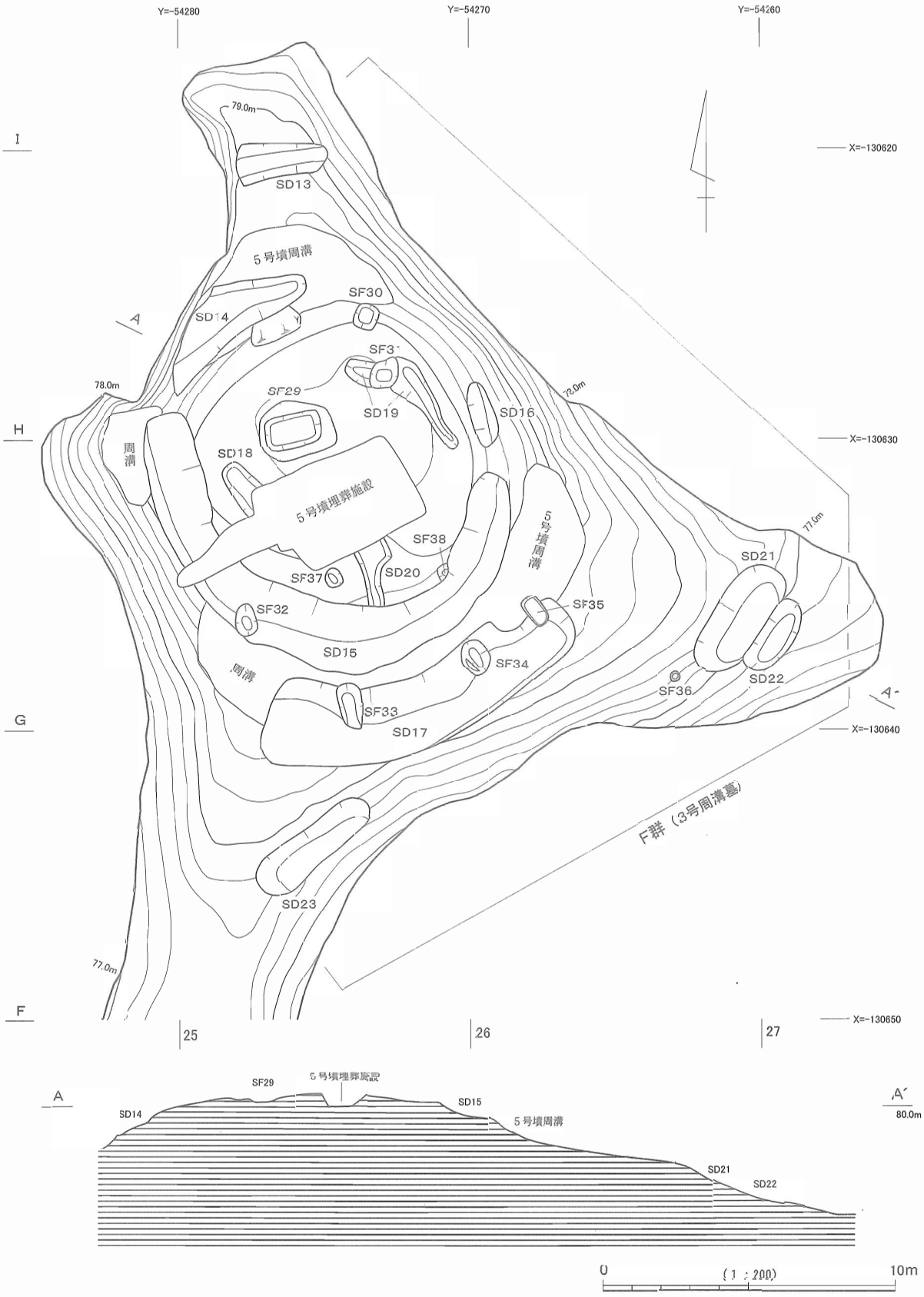
一方、古墳時代前期前半の遺構としては、SD14～SD16をあげることができる。これらの溝は、他の周溝墓の周溝とは異なり、地山の削り出しに近い。したがって、これらによって形成される周溝墓の形状も、他とは異なる特徴を有することになる。古墳時代前期前半の3号周溝墓は、最大径約14.5m（台状部約12.2m）の円形周溝墓であり、台状部に1m以上の高まりを伴うことから、古墳に近い外観をもつ。なお、埋葬施設については、明確にこの時期に該当するといえるものがない。周溝墓の北側では、高坏が出土している。また、林5号墳の盛土中に混在した状態で、焼成前穿孔の底部穿孔壺の破片（数個体分）が出土している。

(1) 溝

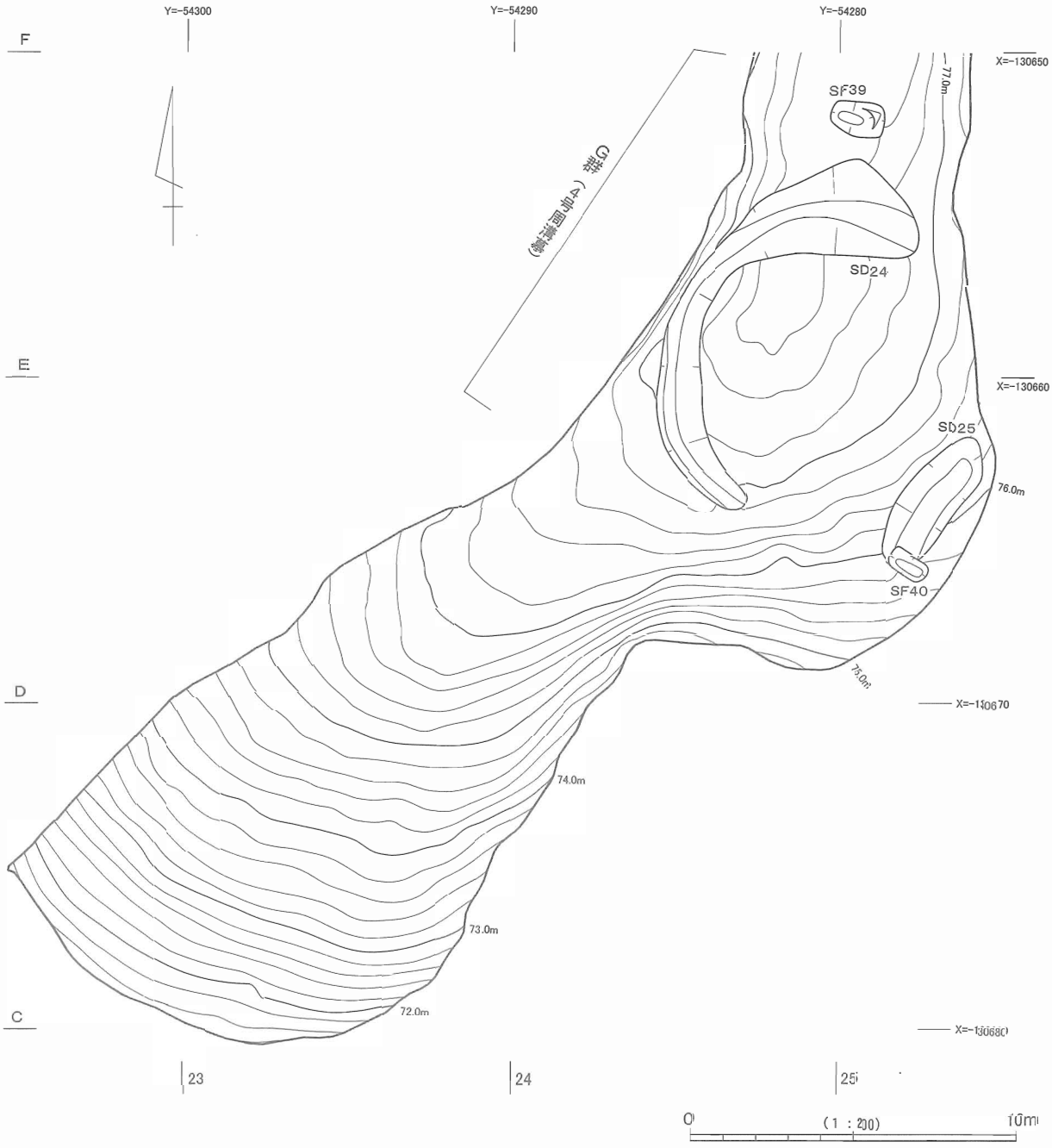
SD13（第175図）　3区北端部に位置する。幅1.4m強、深さ0.4m弱であり、東西方向に丘陵を横断する。検出長は約3.2m、東西端部が消失している。覆土は淡赤褐色砂質土である。以上のような形状・覆土などの特徴から、3号周溝墓に関連する遺構である可能性が考慮される。

また、周囲では土師器高坏片が多く出土しているが、SD13内からの出土はない。したがって、SD13は古墳時代前期前半の遺構ではなく、弥生時代後期前半～中葉における3号周溝墓の北周溝である可能性を高く評価することができる。ただし、このような遺構の時期・性格を直接的に示す根拠はない。

SD14～SD16（第175・176図）　3区北部に位置する。斜面の崩落や古墳の周溝によって消失している部分が多いが、3号周溝墓の台状部を楕円形に廻っていることがわかる。検出した最大幅は約2.4mである。北側（SD14）だけは溝状を呈しているが、ほかは台状部側の削り出しが廻る。なお、SD14の東


Y=-54280
Y=-54270
Y=-54260
X=-130620
X=-130630
X=-130640
X=-130650
I
H
G
F
25
26
27
A
A'
79.0m
78.0m
77.0m
SD13
5号墳周溝
SF30
SD14
SF31
SF29
SD19
SD16
SD18
周溝
5号墳埋葬施設
SF38
SD20
SF37
SF32
SD15
SF35
SF34
SF33
SD17
SD21
SD22
SF36
SD23
F群（3号周溝墓）
SF29
5号墳埋葬施設
SD14
SD15
5号墳周溝
SD21
SD22
80.0m
0
(1：200)
10m

第173図　4区北半部

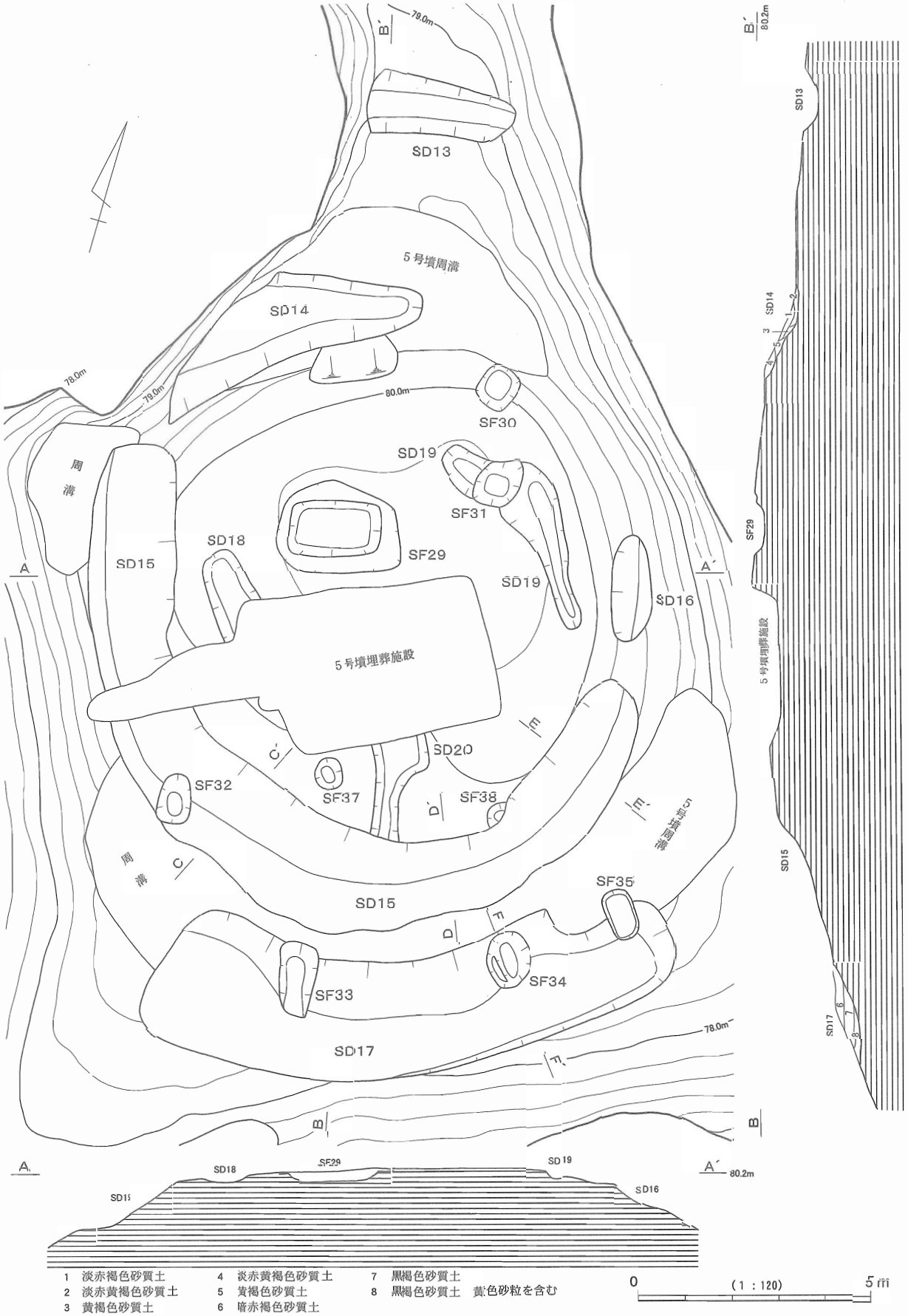


第174図　4区南半部

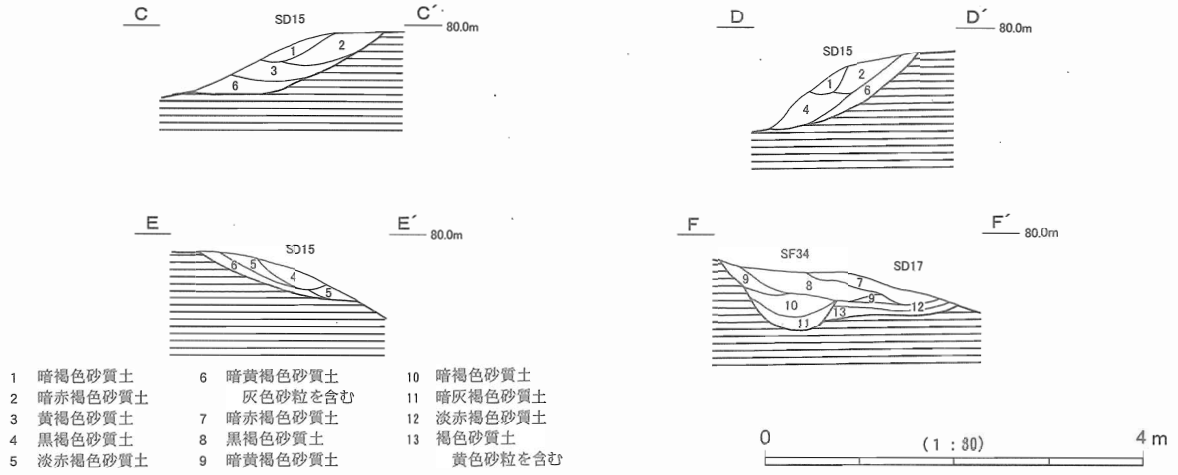
端部が立ち上がることから、北東部は本来より溝や削り出しが廻らなかった可能性もある。覆土は黒褐色～黄褐色、淡赤褐色などの砂質土である。少量の土師器片が出土している。

遺構の特徴や出土遺物、周囲の状況などから、古墳時代前期前半における3号周溝墓の周溝であると判断することができる。

SD17（第175・176図）　3区北部に位置する。3号周溝墓台状部の南側の溝である。幅は最大3.0m、深さは0.7m程である。南斜面に立地しているため、南縁の立ち上がりはわずかである。また、東端は立ち上がりをもって終結するが、西端は流土などによって消失している。本来は西側により長くのびていたと推測することができる。検出した長さは約11.5mであり、南に凸の緩い弧を描きながらのびる。



第175図　F群（3号周溝墓）1



第176図　F群（3号周溝墓）2

台状部側の裾は、SF33とSF34との間で南に張り出している。覆土は黒褐色～褐色、赤褐色などの砂質土であり、弥生土器片（第183図26）が出土している。また、土層によってSF33～SF35はSD17の埋没途中で設けられていることがわかっている。

遺構の特徴や出土遺物から、弥生時代後期前半～中葉における3号周溝墓の南周溝であると判断できる。ただし、この時期における3号周溝墓の全体像については、先述のとおり明確でない。

SD18～SD20（第173図）　3区北部、3号周溝墓の台状部に立地する。いずれも不整形であり、深さは0.2m以下と浅い。覆土は淡赤褐色砂質土であり、出土遺物はない。古墳の盛土の下で発見されており、古墳築造後の遺構でないことは明らかである。しかし、遺構の特徴から古墳時代前期以前の墓域に伴う可能性も評価できない。自然の窪地や古墳築造に伴う整地痕などである可能性が考慮される。

SD21・SD22（第173図）　3区北部、3号周溝墓の東側斜面に位置する。SD21は幅約1.8mで長さ約4.2m、深さは約0.2mである。SD22は幅1.2m弱で長さ2.8m、深さは約0.2mである。ともに、等高線に平行してのびる溝状遺構である。覆土は暗褐色～褐色砂質土である。SD21の覆土中からは、弥生時代後期に位置づけできる土器片（第183図30）が出土している。しかし、遺構の形状などにおいては、弥生～古墳時代前期の墓域に伴うものとは評価し難く、地すべり痕などの可能性が考慮される。

SD23（第173図）　3区北部、3号周溝墓の南東斜面に位置する。等高線に平行してのびる溝であり、南東縁（斜面下方）の立ち上がりは検出できなかった。検出した幅は最大1.4m程、長さ約4.7m、深さ約0.5mである。覆土は黒～暗褐色砂質土であり、出土遺物はない。時期や性格について特定することが難しい遺構である。

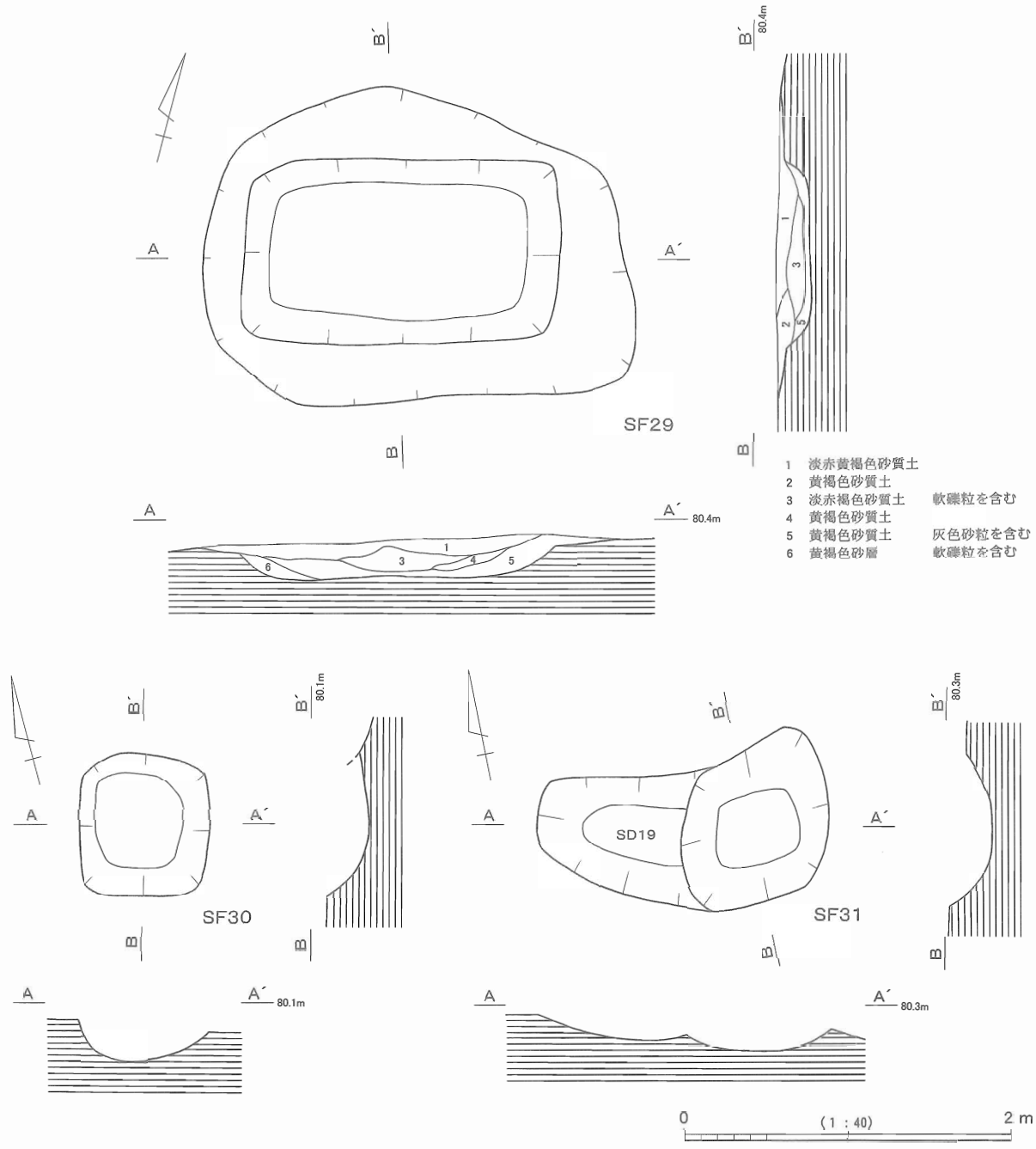
(2) 土坑墓ほか

SF29（第177図）　3区北部、3号周溝墓の台状部の中央付近に位置する。上部は、2.0m弱×約2.7mの不整形を呈し、深さは0.1m以下である。その中央に、1.0m弱×1.9m強の長方形を呈し、深さ0.2m弱の土坑（下部）が設けられている。主軸は丘陵筋に直行し、東西に近い。覆土の大半は淡赤褐色～黄褐色の砂質土である。弥生土器の小片が少量出土している。

遺構の特徴や出土遺物から、弥生時代後期の土坑墓であると判断できる。さらに、遺構の形状などから、1.0m弱×1.9m強の木棺が用いられていた可能性も評価することができる。

SF30・SF31（第177図）　3区北部、3号周溝墓の台状部の北東寄りに位置する。SF30は一辺0.8m強の方形で深さ0.2m強、SF31は一辺0.8m前後の不整方形で深さ約0.2mである。覆土は淡赤褐色砂質土であり、出土遺物はない。古墳の盛土の下で発見された遺構であり、古墳築造後の遺構でないことは明らかである。規模が極端に小さく、時期・性格の特定が難しい遺構であるが、弥生時代後期の屈葬・子供用などの土坑墓である可能性も考えることができる。

SF32（第178図）　3区北部、3号周溝墓の南西部に位置する。SD15の底面で発見されており、約0.7m×1.1m弱の楕円形、深さは約0.4mである。覆土は暗褐色砂質土であり、出土遺物はない。規模が小さく、時期・性格の特定が難しい遺構であるが、弥生時代後期の屈葬・子供用などの土坑墓である可能性も考えることができる。

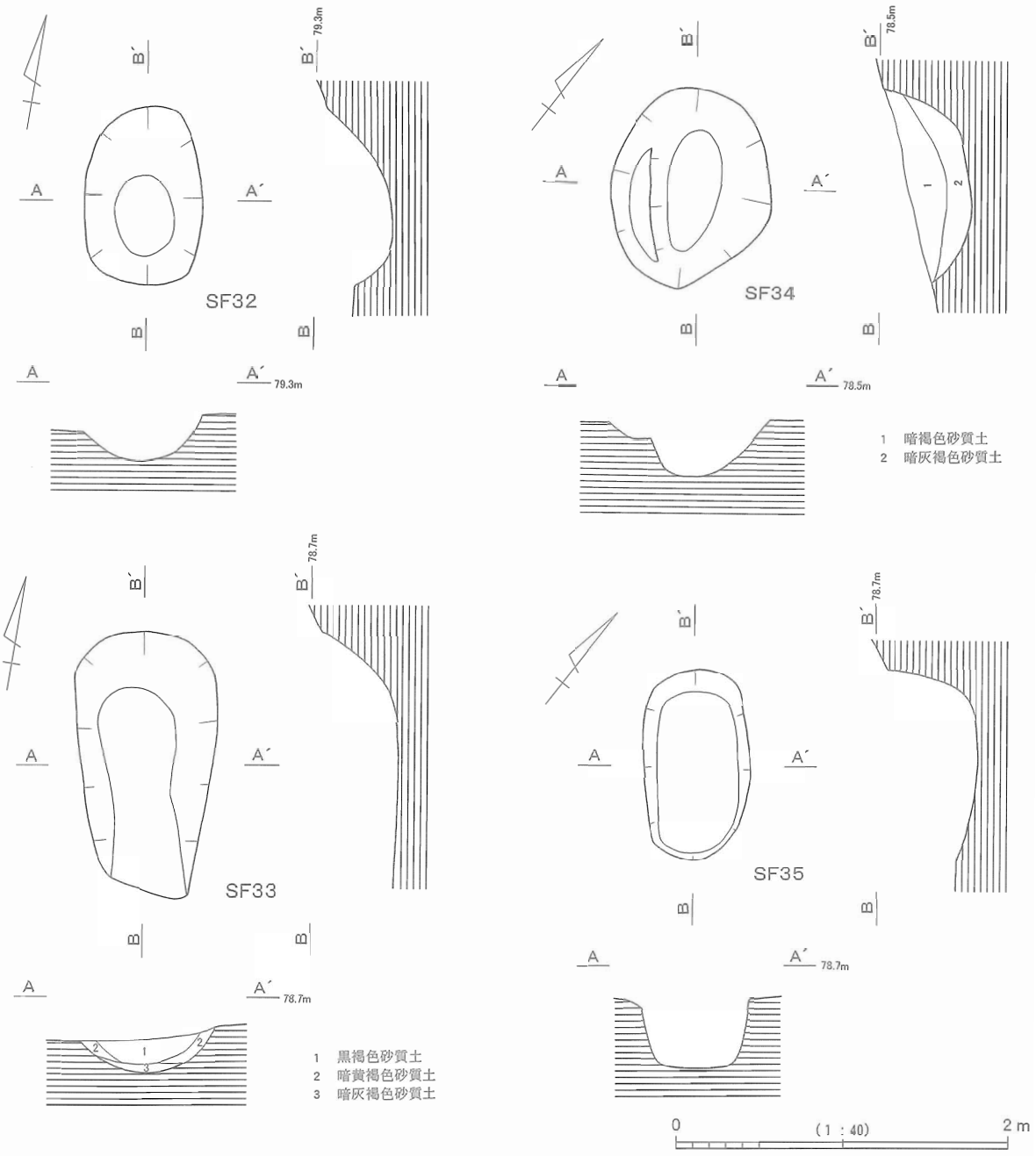


第177図　SF29～SF31

SF33（第178図）　3区北部、3号周溝墓の南周溝（SD17）内に位置する。0.8m強×1.6m以上の長楕円形で、深さは約0.5mである。SD17西部の台状部側斜面に設けられており、主軸を斜面（等高線）に直行させている。覆土は黒～暗褐色砂質土である。出土遺物はない。

遺構の特徴や周囲の状況から、SF34などと同様の弥生時代後期の土坑墓である可能性が高いと判断できる。小規模であることから、子供用・屈葬といった可能性も指摘でき、周溝墓の周縁に位置することから、台状部のSF29とは異なる社会的位置にある被葬者を想定することができる。

SF34（第178図）　3区北部、3号周溝墓の南周溝（SD17）内に位置する。1.0m弱×1.2m強の楕円形で、深さ約0.5mである。SD17東部の台状部側斜面に設けられており、主軸を斜面（等高線）に直行させている。覆土は黒～暗褐色砂質土であり、弥生土器片が少量出土している。また、土層によって



第178図　SF32～SF35

SD17の埋没途中に設けられたことが確認できている（第176図）。

遺構の特徴や出土遺物などから、弥生時代後期の土坑墓である可能性が高いと判断できる。小規模であることから、屈葬・子供用といった可能性も指摘でき、3号周溝墓の周縁に位置することから、台状部上のSF29とは異なる年齢・社会的位置にある被葬者を想定することができる。

SF35（第178図）　3区北部、3号周溝墓の南周溝（SD17）内に位置する。0.6m強×1.2m弱の長方形で、深さは0.6m弱である。SD17東端部の台状部側斜面に設けられており、主軸を斜面（等高線）に直行させている。覆土は黒～暗褐色砂質土であり、弥生土器片が少量出土している。

遺構の特徴や出土遺物などから、SD34などと同様の弥生時代後期の土坑墓である可能性が高いと判断できる。小規模であることから、屈葬・子供用といった可能性も指摘でき、周溝墓の周縁に位置することから、台状部のSF29とは異なる社会的位置にある被葬者を想定することができる。

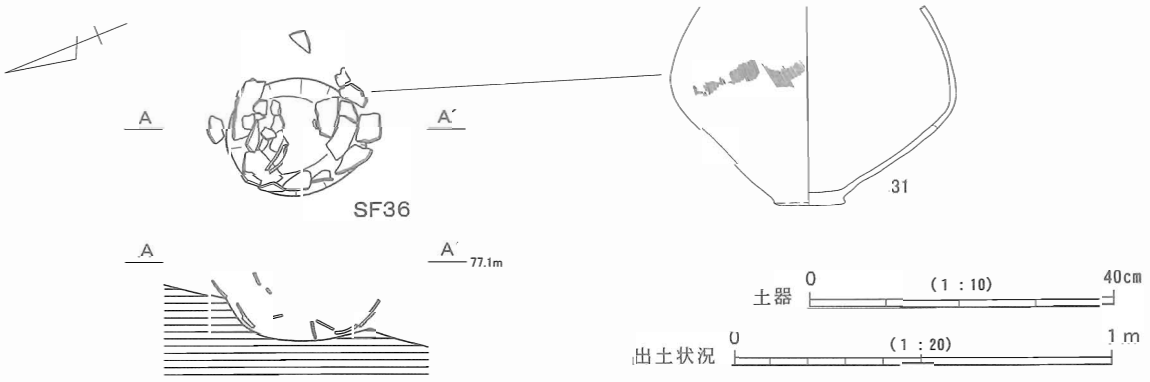
SF37・SF38（第175図）　3区北部、3号周溝墓の台状部の南寄りに位置する。ともに長軸0.7m程度の楕円形であり、深さは0.2m以下である。覆土は淡赤褐色砂質土であり、出土遺物はない。古墳の盛土の下で発見されており、古墳築造後の遺構でないことは明らかである。しかし、遺構の特徴などから弥生時代後期～古墳時代前期の墓域に伴う可能性は評価できず、自然の窪地や古墳築造に伴う整地痕などの可能性も考慮される。

(3) 土器棺墓

SF36（第179図）　3区北部、3号周溝墓の東側斜面に位置する。土坑は径0.4mの円形を呈する。深さは0.1m強であるが、本来はより深かったと推測できる。覆土は暗褐色～褐色砂質土である。この土坑内に土器棺が埋置されていた。土器棺の残存状況は非常に悪い。

土器棺の身は、胴部最大径0.4m弱の壷（第184図31）である。残存状態が悪いために詳細な判断はできないが、正位に近い状態であったことが把握できている。また、肩部以上は破片でも出土が認められず、確実であるとはいえないが、肩部以上を欠いた状態で用いられた可能性が指摘できる。なお、この土器片と混在して別個体（第184図32）の出土が認められている。しかし、蓋であった可能性については、その器形などから低いと判断できる。斜面上方の3号周溝墓や北東隣のSD21からも弥生土器・土師器の出土が認められており、それらから流入してきたものである可能性が考慮される。

土器棺の身の形態などから、弥生時代後期の土器棺墓の可能性が高いと判断できる。



第179図　SF36

２．Ｇ　群

４区南部に位置し、北から南西へとのびるやせ尾根に立地している遺構群である。本遺構群の範囲より北側は、比較的平坦な尾根が続いている。一方、遺構群の南西側は、徐々に下っていく。南東側は丘陵急斜面、北西側は崖になっている。遺構検出面はⅤ層上面であり、大半では灰～黄色砂層の上面、SF39付近やSD25の斜面上方だけは礫層の上面となる。

検出遺構は土坑２基と溝２条、出土遺物は数点の弥生土器片に限られている。遺構の特徴から、弥生時代後期～古墳時代前期の墓群である可能性が高いと判断できる。しかし、出土遺物には図化できるものがなく、詳細な時期を判断することは難しい。

第180図　Ｇ群（４号周溝墓）

SD24は丘陵上平坦部の南端域を囲むように廻る溝であり、そこに周溝墓の存在を認めることができる（4号周溝墓）。平面円形を呈する周溝墓であり、全体の規模は径約11.4m、台状部の規模は径9.2m強である。ただし、台状部に埋葬施設を認めることはできなかった。一方、北側の丘陵上平坦部と南東側の斜面部において、弥生時代後期の可能性が高い土坑墓が検出されている。

(1) 溝

SD24（第180図）　4区南部に位置する、円形に廻る溝である。東部は丘陵斜面の流土によって消失していた。溝の幅は、西～南部が1.4m程であるが、北部で最大3.0mまで広がる。深さは最大約0.8mであり、底面の凸凹は少ない。覆土は、大半が黒褐色～暗褐色砂質土で占められており、下層の一部に暗黄褐色砂質土が認められている。

遺構の特徴などから、弥生時代後期～古墳時代前期の4号周溝墓の周溝であると判断できる。しかし、周辺域を含めて出土遺物がほとんどなく、詳細な時期を特定することはできない。

SD25（第180図）　4区南部の南東斜面に位置する。丘陵筋（等高線）に平行してのびる溝状遺構であり、幅1.7m弱で長さ4.6m強、深さは0.5m弱である。覆土は暗黄褐色砂質土であり、出土遺物はない。南西端部でSF40と重なるが、土層による先後関係の判断はできなかった。

時期・性格の特定が難しい遺構であり、地すべり痕や自然の窪地などの可能性が考慮される。

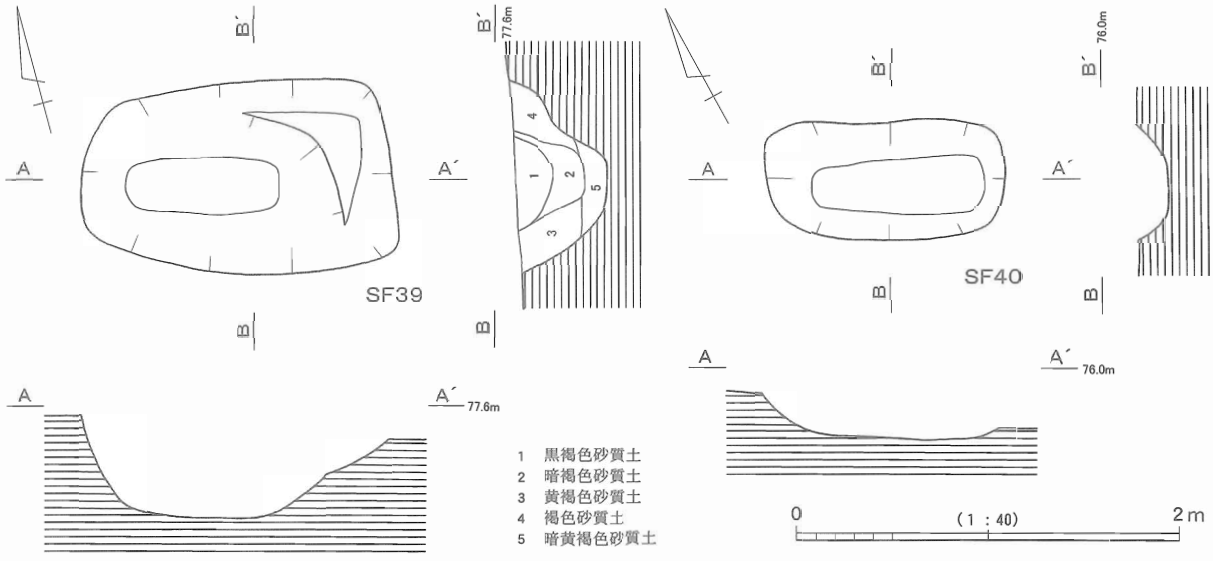
(2) 土坑墓

SF39（第181図）　4区南部、4号周溝墓の北側丘陵上に位置する。1.0m強×1.6m強の長楕円～長方形で、深さは約0.5mである。東側壁面の中位にテラス部があり、深くなる部分は長軸約1.4mの範囲に限られる。主軸は丘陵筋に直行する。覆土には、黒褐色砂質土の落ち込みと下層の褐色～黄褐色砂質土が認められる。木棺の痕跡は認められていない。上層から弥生土器の小破片が出土している。

遺構の特徴や出土遺物から、弥生時代後期の土坑墓である可能性が高いと判断できる。

SF40（第181図）　4区南部、4号周溝墓の南東側斜面に位置する。0.6m強×1.3m弱の長楕円～長方形で、深さは約0.2mである。主軸は丘陵筋に直行する。覆土は淡赤暗褐色砂質土である。木棺の痕跡は認められていない。出土遺物はない。

遺構の特徴などから、弥生時代後期の土坑墓である可能性が高いと判断できる。



第181図　SF39・SF40

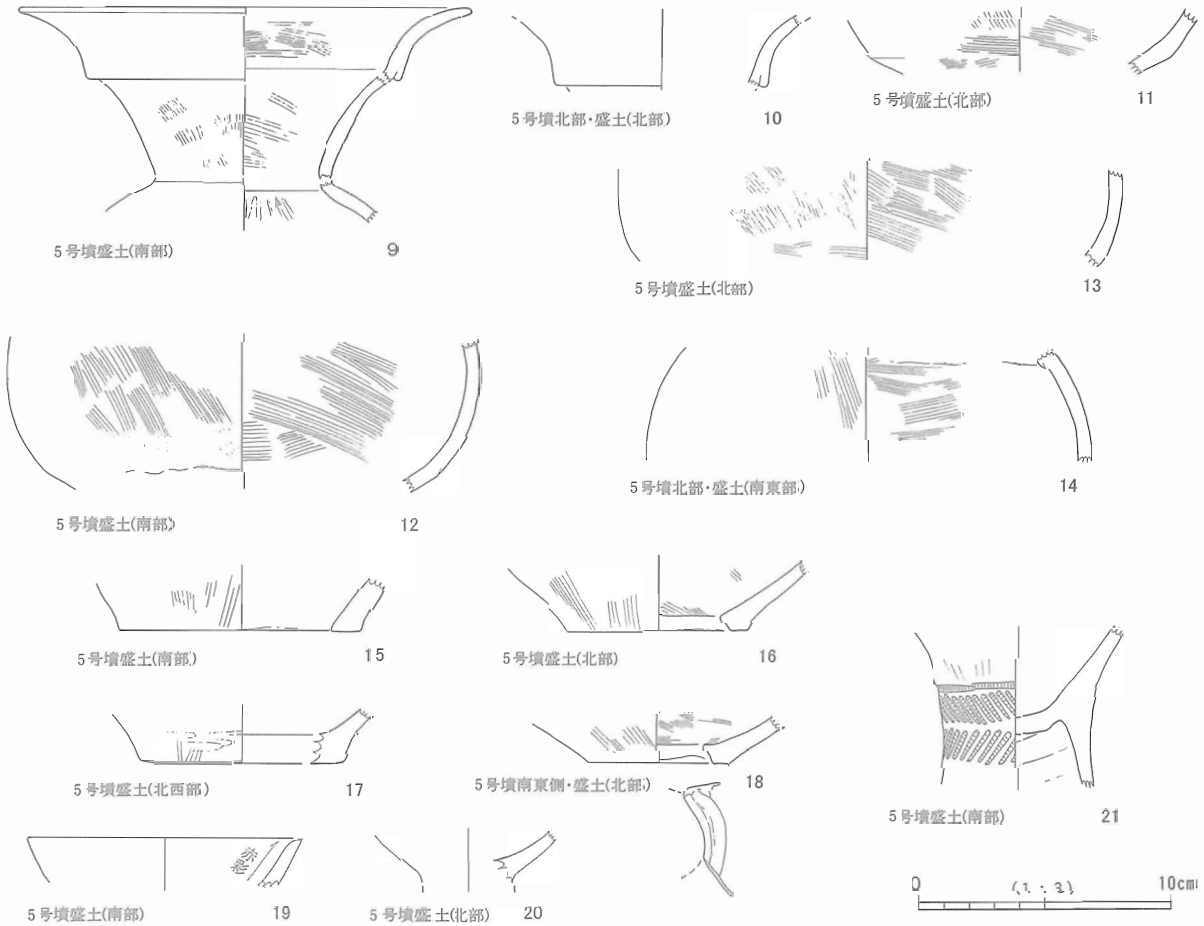
3．4区の出土遺物

(1) 弥生土器・土師器

F群（5号墳盛土）出土土器（第182図）　9～21は、古墳時代後期に築造された林5号墳の盛土中から出土した、弥生時代後期～古墳時代前期前半の土器群である。破片化した状態で、墳丘内の全域にわたって散在的に出土している。これら土器群は、3号周溝墓に伴っていたものであり、それが林5号墳の築造などに伴って破片化した状態となり、盛土内へと混在したと推測できる。なお、古墳時代前期の壺については、3号周溝墓の周溝・周囲からの出土がほとんどないことから、林5号墳築造に伴う整地の影響が想定できる台状部上にあった可能性が評価できる。

9～18は、土師器の壺である。図化した以外にも多くの破片が出土しており、底部片から4個体以上を認めることができる。底部は、15～18のように焼成前に穿孔されたものが多い。胴部は球形に近く、外面調整はハケ調整で占められている。頸部は直立せずに外反して開き、内面の屈曲と外面の段を介して口縁部に至る。口縁部は、さらに大きく外反して開く。すなわち、頸部～口縁部は2重に外反して開く形状を呈する。口縁端部には面を伴わない。19は壺もしくは鉢の口縁部片であり、内面に赤彩が認められる、20は器台もしくは小型高坏の破片である。21は弥生土器の高坏の接合部である。押圧横線文が1条廻り、その下に羽状刺突文が施されている。

9～18の二重口縁壺や20は、古墳時代前期前半に位置づけることができる。一方、21は弥生時代後期前半～中葉に位置づけることができ、両者の明らかな時期差を認めることができる。

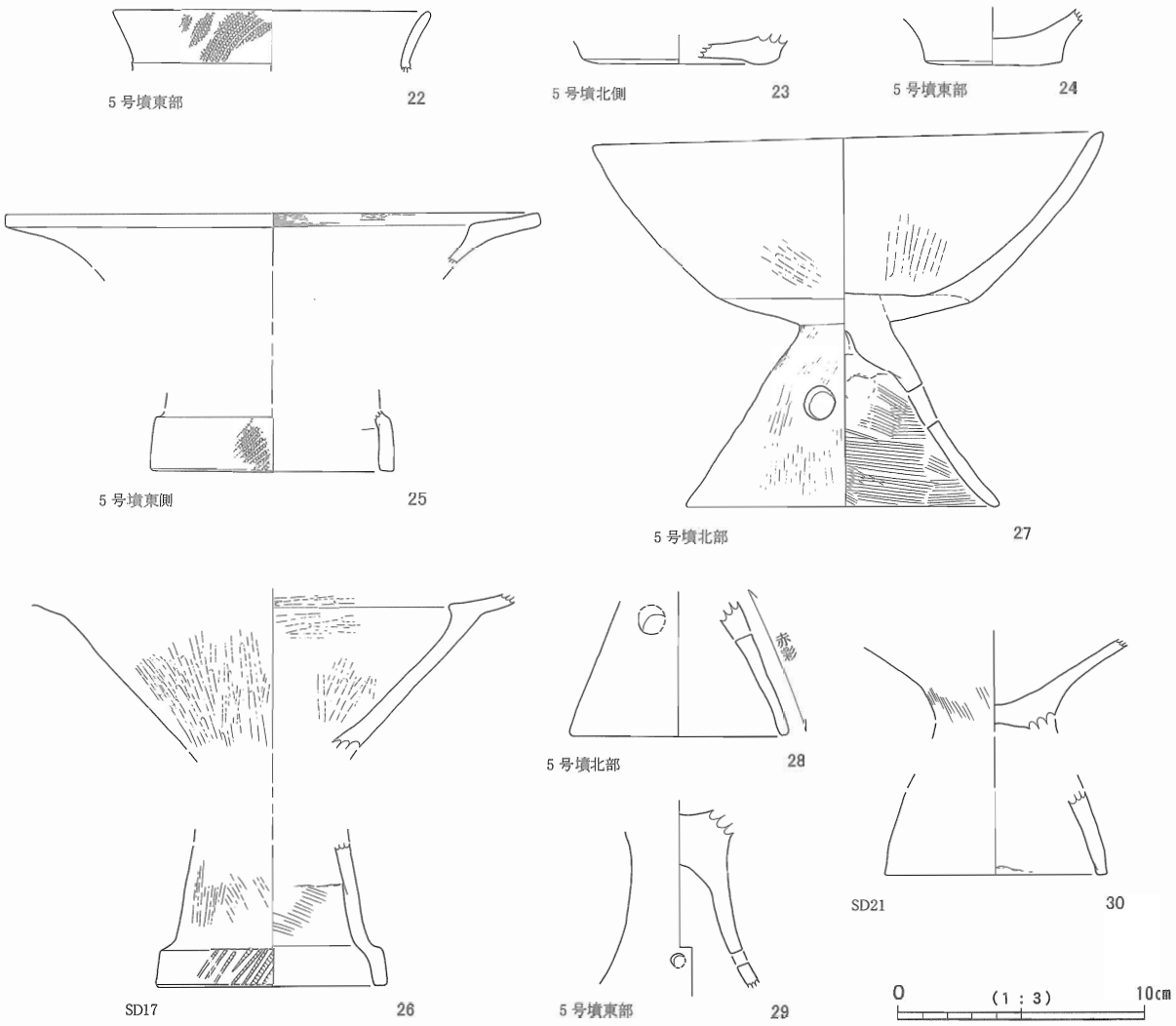


第182図　F群出土土器1

F群（5号墳周辺）出土土器（第183図）　22～25と27～29は、古墳時代後期に築造された林5号墳の墳丘上や周溝上層、周辺域の遺構外から出土した土器群である。林5号墳に伴った遺物でないことは明らかである。先述の9～21と同様、3号周溝墓に伴っていた土器が、林5号墳の築造や斜面・墳丘の崩落・流土などによって移動したものと推測することができる。さらに、出土が3号周溝墓の北側と東側とに片寄ることから、ある程度の原位置を復元することもできる。ただし、台状部上か周縁・周溝部かなどを特定することは難しい。

22は、外面に縄文が施された鉢の口縁部であり、屈折を介して胴部に至る。23・24は壷の底部である。25は高坏の口縁部および脚裾部である。口縁部は、端部に折り返しを伴わない鍔状口縁である。脚裾部は、外面に縄文が施されており、その上端には比較的明確な段を伴う。

一方、27～29も高坏であるが、その形態は25と大きく異なる。27は有稜高坏であり、比較的良く残っていた。脚部は、円推形を呈しており、中位の3方向に円形の透孔が設けられている。脚裾径に対する脚部高が比較的低い。また、裾部がわずかに外反する程度であり、概ね直線的に開く脚部であるといえる。坏部は、比較的深い形状を呈する。平らな底部から屈折（稜）を介して、やや内湾しながら立ち上がる体部・口縁部に至る。外面と坏部内面にはミガキ調整、脚部内面にはハケ調整を観察することができる。28も円形の透孔のある脚部であり、有稜高坏か小型器台の可能性がある。基本的には27と同様に



第183図　F群出土土器2

直線的に開く脚部であるが、脚裾がわずかに内湾する点、外面に赤彩が施されている点が異なる。小破片のため、透孔の配置などの詳細はわからない。29も高坏の脚部片であるが、大きく外反しながら開く形状を呈する。透孔は27・28より小さく、4方向に設けられていたと復元できる。

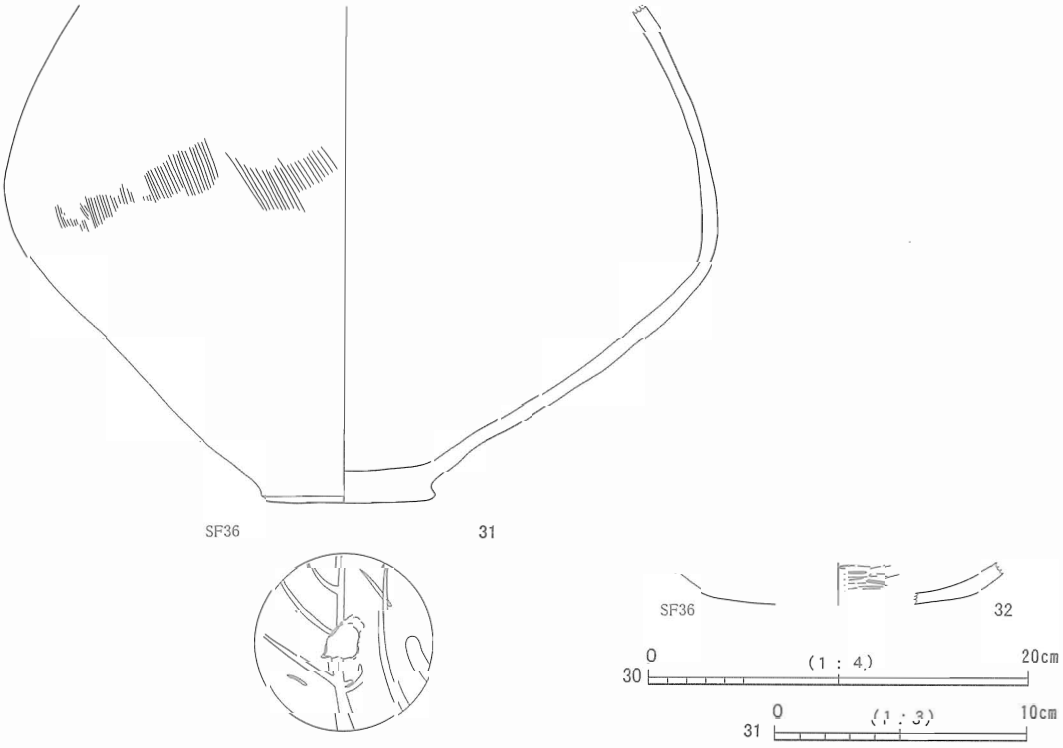
22・25は弥生時代後期に位置づけでき、とくに25は後期前半に位置づけできる可能性が高い。一方、27～29は古墳時代前期前半に位置づけできる。その中でも形状等の個体差が認められているが、27以外は小破片であり、より詳細な時期差について検討することは難しい。

F群遺構内出土土器（第183図）　26は、SD17から出土した高坏の坏部および脚裾部である。坏部は比較的深く、鍔状口縁を伴う。内外面にミガキ調整が観察できる。脚裾部には明確な段を伴い、外面に斜方向の櫛刺突文が廻る。30は、SD21出土の甕の台部である。図では内湾気味に見えるが、複数の小破片を図上で復元したものであるので、詳細についての特定は難しい。

30の時期は特定できないが、26は弥生時代後期前半に位置づけることができる。

SF36土器棺（第184図）　31は、土器棺の身として用いられていた壷である（第179図）。残存状況が悪いために確実であるとはいえないが、肩部以上を欠いた状態で用いられた可能性が高い。底部は平底であり、木葉痕が認められる。胴部は算盤玉形に近い形状を呈しているが、最大径付近に稜線は認められない。文様は認められず、外面にはハケ調整を観察することができる。32は、31と混在して出土した高坏もしくは鉢の破片である。内面に横方向のミガキ調整が施されている。

土器棺である31については、その形状などから弥生時代後期中葉頃に位置づけできる可能性が高い。一方の32については、小破片であるために詳細な判断はできないが、土器棺の蓋であると積極的に評価できる根拠はない。



第184図　SF36土器棺

第12表　遺物観察表（土器）

番号	挿図番号	図版番号	出土位置	種別	器種	部位	残存率(%)	器高(cm)	器径(cm)	口径(cm)	底径(cm)	色調(外面)	色調(内面)	摩滅	備考
1	163	76	SX02	弥生土器	壷	胴部	30					にぶい黄(2.5Y6/4)	暗灰黄(2.5Y5/2)	△	
2	163		SX02	弥生土器	壷	頸～胴部	15		(17.2)			暗灰黄(2.5Y4/2)	暗灰黄(2.5Y4/2)	×	
3	163		3号墳盛土	弥生土器	壷	底部	75				6.6	浅黄(2.5Y7/4)	浅黄(2.5Y7/4)	×	
4	（別表：2区南部出土石鏃）														
5	171	76	SF24	弥生土器	壷	口縁～頸部・胴部～底部	30		(14.1)	9.0	(7.0)	にぶい黄(2.5Y6/4)	にぶい黄(2.5Y6/4)	△	
6	171	76	SD09	土師器	壷	頸部	10					橙(7.5YR6/6)	橙(7.5YR6/6)	△	
7	171	76	SD09	土師器	鉢	全体	70	14.3	16.6	(16.3)	4.8	にぶい黄橙(10YR7/4)	にぶい黄橙(10YR7/4)	△	
8	（別表：SF24出土管玉）														
9	182	76	5号墳盛土(南部)	土師器	壷	口縁～頸部	15			(17.8)		にぶい黄橙(10YR6/4)	にぶい黄橙(10YR6/4)	△	二重口縁
10	182	76	5号墳北部・盛土(北部)	土師器	壷	口縁部	20					にぶい黄橙(10YR6/4)	にぶい黄橙(10YR6/4)	△	二重口縁
11	182		5号墳盛土(北部)	土師器	壷	胴部	5					にぶい橙(7.5YR6/4)	にぶい橙(7.5YR6/4)	△	
12	182	76	5号墳盛土(南部)	土師器	壷	胴部	10		(18.6)			にぶい黄橙(10YR7/4)	にぶい橙(7.5YR6/4)	△	
13	182	76	5号墳盛土(北部)	土師器	壷	胴部	5		(19.8)			にぶい橙(7.5YR6/4)	にぶい橙(7.5YR6/4)	△	
14	182		5号墳北部・盛土(南東部)	土師器	壷	胴部	5					にぶい橙(7.5YR7/4)	にぶい橙(7.5YR6/6)	△	
15	182	76	5号墳盛土(南部)	土師器	壷	底部	5				(8.0)	橙(7.5YR6/6)	橙(7.5YR6/6)	△	底部焼成前穿孔
16	182	76	5号墳盛土(北部)	土師器	壷	底部	10				(7.0)	にぶい橙(7.5YR6/4)	にぶい橙(7.5YR6/4)	△	底部焼成前穿孔
17	182		5号墳盛土(北西部)	土師器	壷	底部	15				(8.0)	にぶい黄橙(10YR6/4)	にぶい黄橙(10YR6/4)	△	
18	182	76	5号墳南東側・盛土(北部)	土師器	壷	底部	20				(5.5)	橙(7.5YR7/6)	橙(7.5YR7/6)	△	底部焼成前穿孔
19	182		5号墳盛土(南部)	土師器	壷？	口縁部	5			(12.5)		にぶい黄橙(10YR7/4)	にぶい黄橙(10YR7/4)	△	赤彩
20	182	76	5号墳盛土(北部)	土師器	器台？	接合部	30					橙(7.5YR7/6)	橙(7.5YR7/6)	△	
21	182	76	5号墳盛土(南部)	弥生土器	高坏	接合部	70					にぶい黄橙(10YR7/4)	にぶい黄橙(10YR7/4)	△	
22	183	76	5号墳東部	弥生土器	鉢	口縁部	10			(12.5)		にぶい黄橙(10YR6/4)	にぶい黄橙(10YR6/4)	△	
23	183		5号墳北側	弥生土器	壷	底部	10				(9.0)	赤褐(5YR6/4)	赤褐(5YR6/4)	△	
24	183		5号墳東部	土師器？	壷	底部	20				(5.6)	にぶい褐(7.5YR6/4)	にぶい褐(7.5YR6/4)	△	
25	183	76	5号墳東側	弥生土器	高坏	口縁部・脚裾部	10		(21.8)	(21.8)	(9.9)	明黄褐(10YR6/6)	明黄褐(10YR6/6)	×	
26	183	76	SD17	弥生土器	高坏	坏部・脚裾部	10				(9.5)	にぶい黄橙(10YR6/4)	にぶい黄橙(10YR6/4)	△	
27	183		5号墳北部	土師器	高坏	全体	75	15.0	(20.5)	(20.5)	12.5	にぶい黄橙(10YR7/4)	にぶい黄橙(10YR7/4)	△	
28	183	76	5号墳北部	土師器	高坏	脚部	10				(8.9)	にぶい黄橙(10YR6/4)	にぶい黄橙(10YR6/4)	△	赤彩
29	183	76	5号墳東部	土師器	高坏	脚部	70					橙(7.5Y7/6)	橙(7.5Y7/6)	×	
30	183	76	SD21	弥生土器	甕	接合部・台部	15				(8.9)	にぶい黄橙(10YR7/4)	にぶい黄橙(10YR7/4)	△	
31	184	76	SF36	弥生土器	壷	胴～底部	30		37.8		9.5	にぶい黄橙(10YR6/4)	にぶい黄橙(7.5YR6/4)	×	
32	184		SF36	土師器	高坏？	坏部？	5					にぶい黄橙(10YR6/4)	橙(7.5YR6/6)	△	
33	（別表：SF08出土小玉）														

（　）は復元値　　摩滅－○：摩滅少ない、△：摩滅あり、×：摩滅著しい

第13表　遺物観察表（石器）

番号	挿図番号	図版番号	出土位置	種類	全長(cm)	鏃身長(cm)	鏃身幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	欠損	備考
4	164	76	2区南部	石鏃	凝灰岩	2.7	2.4	0.3	2.8	なし	

第14表　遺物観察表（玉類）

番号	挿図番号	図版番号	出土位置	種類	材質	直径(mm)	全長(mm)	孔径(mm)	重量(g)	色調	備考
8	172	64	SF24	管玉	滑石	4.9	20.0	2.2	1.87	灰緑色	両側穿孔
33	160		SF08	小玉	ガラス	6.9	5.5	1.5	0.29	濃青色	

第８章　まとめ

第１節　弥生時代における墓域の展開

森町円田丘陵の文殊堂・宇藤蓮台・フケ・林遺跡では、古墳群が形成される以前、弥生時代後期～古墳時代前期にも墓域が形成されていたことが、今回の調査や森町教育委員会の調査（森町教育委員会2004）によって明らかになった。

文殊堂・宇藤蓮台・フケ・林遺跡の調査された中で、弥生時代～古墳時代前期の墓域に伴うと判断できる遺構を第185図に示した。丘陵上の平坦面が比較的広い場所に遺構が分布しており、その分布や微地形によって37の遺構群に分けることができる。さらに、遺構群によって遺構密度・配置・種類などの様相が異なっており、単に広い墓域が地形によって分断されているというだけではなく、時期差や集団差との関連を伴って形成されていると予測することができる。

本節では、これら遺構群が形成時期（段階）や集団・社会的位置の相異を伴った墓群である可能性を評価し、各墓群の様相と形成時期の相異を示し、墓域の形成過程について検討していきたい。なお、本章では遺跡名を「Ｍ・Ｕ・Ｆ・Ｈ」と略し、文殊堂遺跡のＡ群はＭＡ群、フケ遺跡の３号周溝墓はＦ３号周溝墓、林遺跡のSF02はＨSF02といったようにして表記する。

１．墓群の種類と時期

(１) 墓群の様相

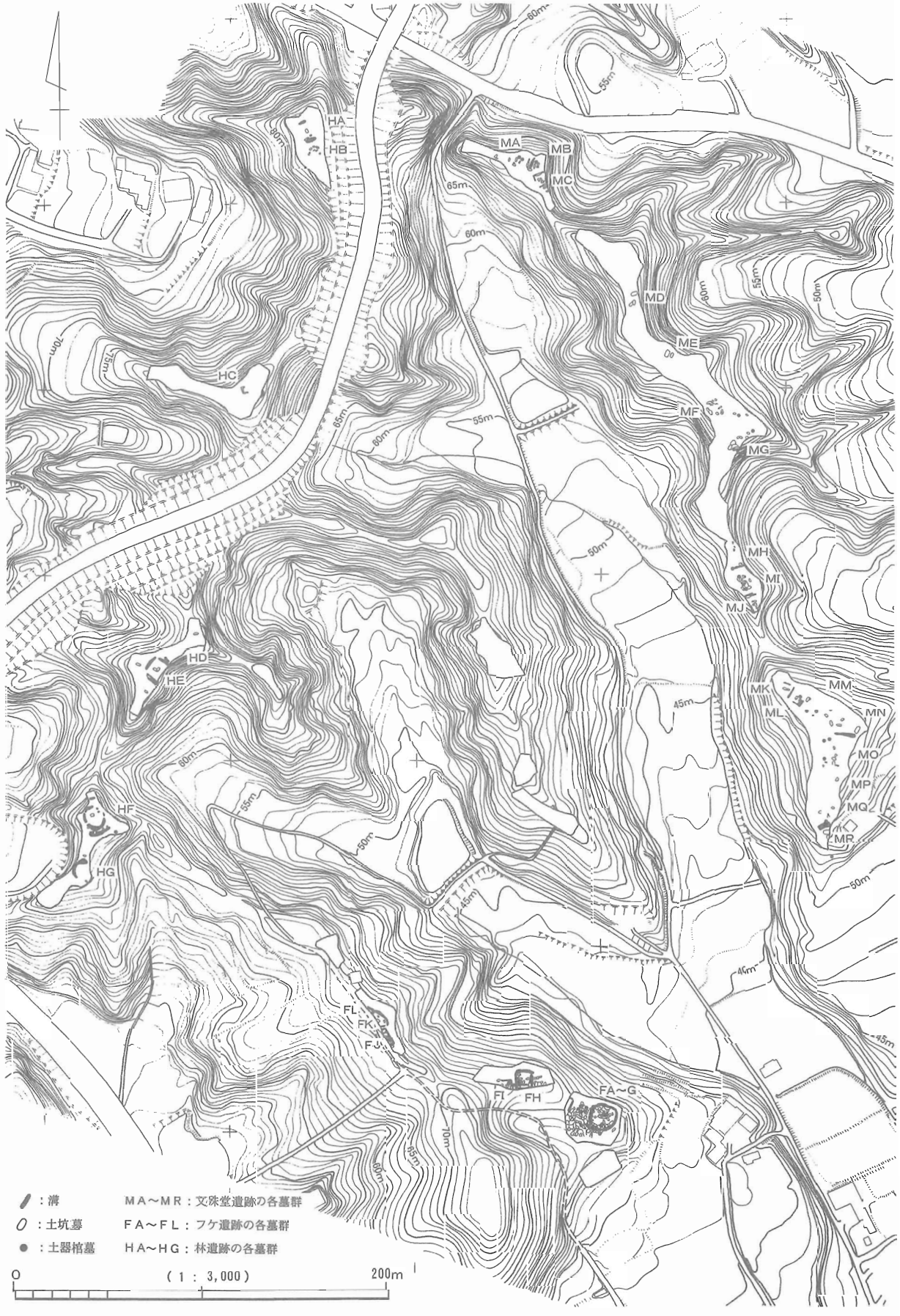
墓群間の様相の差異については、墓群全体を区画するような溝の有無と、木棺墓・土坑墓・土器棺墓といった埋葬施設の状況によって把握することができる。実際に分類したものを第15表に示したが、以下にその詳細について述べておきたい。

周溝の有無　墓群の中には、区画する溝を伴うものと伴わないものとがある。溝を伴う墓群は、既に報告（第４～７章）の中で周溝墓としている。溝のない墓群については、遺構・遺物の検出状況などから、崩落・流土・古墳築造などによって溝が失われた可能性を積極的に評価できるものはなく、これら墓群が周溝墓であった可能性は低いと判断することができる。

なお、森町教育委員会によって調査されたＦ２区でも区画の溝が検出されているが（森町教育委員会2004）、本章では東側の円形周溝墓をＦ２東周溝墓、西縁部で一部が検出された方形周溝墓をＦ２西周溝墓と称することとする（第185図、第15表）。また、Ｈ２号・Ｈ３号周溝墓については、古墳時代前期前半における溝の再掘削によって、新旧で規模・形状が大きく変わっている。古い時期の周溝墓にはａ、新しい時期の周溝墓にはｂを付して表記する。

周溝墓の規模と形状　周溝墓とされる墓群は、主に周溝で区画された範囲の規模と平面形によって分類することができる。

規模については、Ａ・Ｂ・Ｃ（大・中・小）に分類した。対象となる周溝墓の台部の規模の分布をみると、15m付近と11m付近に境界を設けることができ、それによって分類している。一方、周溝墓の平面形態については、Ⅰ（方形）・Ⅱ（不整円形）に分類した。ただし、Ⅱについては、円形・不整形など方形以外の様々な形態のものがある。また、Ⅱには残存状況によって形状が明確に把握できないものも含まれている。



第185図　円田丘陵の遺構分布（弥生時代～古墳時代前期の墓域）

周溝墓については、平面的な規模・形態だけではなく立体観も重視される場合が想定できる。ただし、文殊堂・宇藤蓮台・フケ・林遺跡においては、明確に盛土が認められている墓群はなく、各墓群の立体観は立地地形に左右されるといってもよい。したがって、今回の検討においては、立地地形の分類によって、周溝墓以外の墓群を含めた立体観の差異が示されるものとした。なお、対象となる周溝墓の中で、台状部と周辺域との比高が1mを超えるのは、M3号周溝墓とH3号周溝墓（a・b）だけである。その他の多くは比較的平坦な場所に立地しており、周囲との比高差は少ない。M3号・H3号周溝墓を設けるにあたっては、他の周溝墓よりも高まりを伴う立体観がとくに考慮され、立地地形の利用がなされたものと考えられる。

第15表　墓群一覧

遺跡	区・部	墓群	立地地形	周溝墓				埋葬施設		
				名称	形状	規模	台部長	配置状況	土坑墓数	土器棺墓数
文殊堂遺跡M		MA群	イ					③	7基	2基
	M1区	MB群	ウ	M1号	Ⅰ：方形	C	7.2m	③	5～6基	1基
		MC群	ウ	M2号	Ⅰ：方形	C	6.8m	③	7基	
	M2区北部	MD群	ウ					②	3基	
		ME群	ウ					②	2基	
	M2区中央部	MF群	ウ					③	8～12基	
		MG群	イ					②	4～6基	4基
	M2区南部	MH群	ウ					②	1～3基	
		MI群	ア	M3号	Ⅰ：方形	A	16.0m	④a（①+③?）	12～15基	4基
		MJ群	ウ	M4号	Ⅰ：方形	C	8.8m	①か③	3基	
	M3区北部	MK群	ウ	M5号	Ⅰ：方形	C	6.0m	①	2基	
		ML群	ウ	M6号	Ⅰ：方形	C	7.4m	①	1基	3基
		MM群	ウ					②	2基	2基
	M3区中央部	MN群	イ					②	2～4基	
		MO群	ウ	M7号	Ⅰ：方形	A	18.0m	①か③	2～4基	3基
		MP群	ウ					②	1基	
	M3区南部	MQ群	ウ					②	4基	
		MR群	ウ	M8号	Ⅱ：円形?	B	12.0m	①か③	2基	2基
フケ遺跡F	F1区	FA～F群	ウ	F2東	Ⅱ：円形	B	12.8m	④a（①+③?）	130基	11基
	F2区	FG群	ウ	F2西	Ⅰ：方形	C	8.0m	?		
	F3区	FH群	ウ	F1号	Ⅰ：方形	C	7.4m	④a（②+③?）	14～16基	2基
		FI群	ウ					②	5基	1基
	F4区	FJ群	ウ	F2号	Ⅰ：方形	C	7.0m	③	3～4基	2基
		FK群	イ	F3号	Ⅱ：不整形	C	9.0m	①	2～3基	
		FL群	ウ	F4号	Ⅰ：方形	C?	?	?		
林遺跡H	H1区	HA群	ウ	H1号	Ⅰ：方形	C	10.4m	①	2～4基	
		HB群	イ					④b	10基	
	H2区	HC群	ア					④b	6基	
	H3区	HD群	ウ					②	1基	
		HE群	イ	H2号a	Ⅰ：方形	B	13.0m	①	3～4基	
				H2号b	Ⅰ：方形	C	10.2m	①		
	H4区	HF群	ア	H3号a	Ⅱ：不整形	A	18.4m	①	4～7基	1基
				H3号b	Ⅱ：円形	B	12.0m	①?		
		HG群	イ	H4号	Ⅱ：円形	C	9.2m	①?	2基	

立地地形－ア：特に高まりが目立つ地形
イ：周囲に比べて高所にある地形
ウ：その他

周溝墓の形状－Ⅰ：方形　Ⅱ：不整円形
周溝墓の規模－A：大（15m～）　B：中（11～15m）　C：小（～11m）

埋葬施設の配置状況－①：1基程度の土坑墓が中央部に単独的にある墓群
②：中心的な土坑墓が把握しがたく、散在的に分布する墓群
③：5基以上の土坑墓が中央部に比較的整然と配置されている墓群
④：5基以上の土坑墓が整然とせず中央部に密集している墓群
a：埋葬施設の種類や差異が様々なもの
b：埋葬施設の差異がとくに認められないもの

台状墓の是非　森町内では、平面（不整）円形の台状墓と称される弥生時代の墓が、善千鳥遺跡や峯山台状墓で報告されている（第４章参照、森町教育委員会1996・1998）。善千鳥遺跡の台状墓については、盛土が確認されており、周囲と頂上部との比高差は1.8m、盛土を除いても1.4mの高まりが認められる。一方の峯山台状墓については、盛土の存在は認められているが、北西側には台状部と同じ高さの丘陵上平坦面が広がっており、善千鳥遺跡の台状墓とは立体観が異なる。また、前者が弥生時代中期の形成とされるのに対して、後者は後期後半に形成されたとことがわかっている。

盛土は、一般的に方形周溝墓にも認められる場合が少なくない。したがって、盛土の有無だけを台状墓の基準にするのは難しい。なお、円田丘陵の墓群の中に、盛土の存在が確認できたものはない。一方、丘陵上の地形を利用して、多少の盛土や地山整形などによって高まりを強調したものを台状墓とする場合が想定される（斎藤1998）。この場合、善千鳥遺跡の例やＭ３号周溝墓やＨ３号周溝墓（ａ・ｂ）は台状墓と認められる可能性がある一方、峯山台状墓が台状墓に該当するかは疑問である。現状で用いられている用語に、高まりについての基準が伴っているようには見受けられない。いずれにしても、現状の用法の中で円田丘陵の墓群を台状墓とその他に区分することは難しい。まずは、区画の溝を伴う墓群については、同じ周溝墓という範疇の中で比較検討していくことが望ましいと考える。

埋葬施設の粗密と配置　各墓群には、必ずといってよい程に土坑墓（以下、木棺墓を含む）や土器棺墓といった埋葬施設が設けられている。しかし、その数（密度）や配置などの状況は墓群によって異なっており、主に土坑墓の数・配置によって、大きく以下の４種類に大別することができる。

① 中央部に１基程度の土坑墓が単独的にある墓群。なお、中央部の１基とは別に、数基の土坑墓・土器棺墓が周囲に認められる場合もある。

② 中心的な土坑墓が把握し難い状態にある墓群。１～２基ごとの土坑墓が、散在的に分布する。

③ ５基以上の土坑墓が、比較的整然と中央部に配置されている墓群。各土坑墓が直行・平行関係にあり、大きく重なり合うことがない。また、中心的な土坑墓が把握できる場合が少なくない。

④ ５基以上の土坑墓が整然とせずに密集している墓群。大きく重なり合う土坑墓もある。

ａ　④の中で、土器棺墓を含み、土坑墓間の規模差なども認められる墓群。形成時期が長期にわたる可能性を指摘できる場合が多い。また、中心的な土坑墓が把握できる場合もある。

ｂ　④の中で、土器棺墓を含まず、土坑墓の差異も顕著でない墓群。形成時期が長期にわたる可能性を指摘できる場合、また中心的な土坑墓が把握できる場合は少ない。

埋葬施設の状況を異にしている原因としては、墓群を営む集団の大きさ・構成と、墓群が営まれた期間とが想定される。したがって、集団の大小もしくは形成時期の長短の一方だけを、検出状況から直接的に判断することはできない。しかし、出土土器などから墓群の形成時期・期間を判断することによって、墓群の規模・構成に関する比較が可能になると考える。

なお、土器棺墓の状況と墓群間の差異との関係については、以下のように判断できる。④ｂの墓群には、土器棺墓が伴わない。その他の墓群について、区画溝の有無や埋葬施設の状況と土器棺墓の有無とに相関を見出すことは困難である。土器棺墓の配置については、墓群の周縁部に位置している点では全てに共通するが、台状部内か外かの違いがある（第17表）。さらに、Ｍ８・Ｈ３号周溝墓やＭＧ群では、外側の丘陵斜面で土器棺墓が検出されている。斜面の崩落が著しい遺跡群であるので、この他にも同様の土器棺墓があった可能性は否定できない。以上のように、土器棺墓の有無・数・配置においては様々であるが、墓群間の差異として把握することは難しい。

（2）墓群の時期

墓群の形成時期については、中・東遠江の弥生土器（白岩式・菊川式）編年（中嶋1988、岩本貴1995、佐藤1996、鈴木敏1996、萩野谷2000、佐藤・萩野谷・篠原2002）や遠江の古式土師器編年（松井1995、中嶋1997、鈴木敏2002、鈴木一2002）の研究を参考にして、ある程度の把握ができる（註1）。

墓域の開始と終末　円田丘陵における墓域の形成開始時期は、MSF50（土器棺墓）や一部の出土土器によって、弥生時代中期後葉である可能性が高いと判断できる。ただし、M3区・U3区の遺構外からは、より古い時期の土器片が出土している（第107・115図）。明確には判断できないが、弥生時代中期後葉よりも前から墓域が形成されはじめていた可能性も否定はできない。

終末の時期は、HE・F群で廻間Ⅱ～Ⅲ式並行の古式土師器が出土していることから（第171・182・183図）、概ね古墳時代前期前半であると判断できる。なお、文殊堂・宇藤蓮台・林古墳群の形成が開始されるのは、墓域終末から100年ほど経た後の古墳時代中期中葉前後となる。

各墓群の時期　円田丘陵の墓域は、主に弥生時代中期後葉から古墳時代前期前半に形成されたと判断できるが、さらに、その中で墓群ごとに異なる形成時期や盛衰を認めることができる。

各墓群の形成時期は第16表のとおり様々であるが、これらを概すると、ⅰ中期後葉～後期前半を主体とする形成時期、ⅱ 後期後半を主体とする形成時期、ⅲ古墳時代前期前半を主体とする形成時期に大別することができる。時期ⅰの墓群はMD～G群・MJ～N群・MP～R群・FK群・HA～C群、時期ⅱの墓群はMA～C群・FH～J群・FL群である。MI・O群は時期ⅰ～時期ⅱにかけて形成されるが、時期ⅰと時期ⅱでは形成される墓群の構成（様相）が異なるようである。また、HD～G群では時期ⅰに周溝墓が形成された後、時期ⅲにおいて再び周溝墓が形成されたことがわかっている。

第16表　墓群形成時期の概要

遺跡	区部	墓群形成：諸遺構とその時期					
		～中期中葉	中期後葉	後期前半	後期中葉	後期後半	～古墳時代前期前半
文殊堂遺跡	1区	?			MA：坑～7・棺2 MB：1号周溝墓（坑～6・棺1） MC：2号周溝墓（坑7）		
	2区北部				MD・ME：坑～5		
	2区中央区			MF・MG：坑～18・棺4			
	2区南部		MI：3号周溝墓（坑1～・棺1） MJ：4号周溝墓（坑～3）		MH：坑～3 MI：坑～15・棺3		
	3区北部			MK：5号周溝墓（坑2） ML：6号周溝墓（坑1・棺3） MM：坑2・棺2			
	3区中央部	?		MN：坑～4 MO・MP：坑～5・棺1	MO：7号周溝墓（坑?・棺2）		
	3区南部			MQ：坑～4 MR：8号周溝墓（坑2・棺2）			
宇藤蓮台	3区	?					
フケ遺跡	2区			FA～FF：F2東周溝墓	FA～FG：坑～130・棺11	FG：F2西周溝墓	
	3区			FH：溝(SD01)など	FH・FI：坑～21・棺1 FH：1号周溝墓（坑3・棺2）		
	4区			FK：3号周溝墓（坑～3）	FI：2号周溝墓（坑～4・棺2） FL：4号周溝墓		
林遺跡	1区 2区			HA：1号周溝墓（坑～4） HB：坑～10　HC：坑～6			
	3区			HD・HE：2号周溝墓a（坑1～3）			2号周溝墓b（坑1～3）
	4区			HF：3号周溝墓a(坑～4・棺1) HG：坑2		HG：4号周溝墓（坑?）	3号周溝墓b(坑?)

※「坑」は土坑墓、「棺」は土器棺墓のことであり、その後の数字は該当（推測）基数である。

2．墓域の形成過程

以上のように整理・分類した各墓群の種類や時期をもとに、円田丘陵における弥生時代中期後葉～古墳時代前期前半の墓域の形成過程を概観したい。

(1) 時期ⅰ（弥生時代中期後葉～後期前半）

墓域の開始　中期後半に位置づけできる土器の多くは土器棺であるが、少数の供献土器も認められている。したがって、土器棺墓がほかに先行するとは明示できない。供献される土器が少なかった可能性もあるため、土坑墓・周溝墓・土器棺墓が同様に形成されはじめたと推測することもできる。

周溝墓にみる二者　中期後葉～後期前半に該当する遺構の分布（第186図）をみると、まず、周溝墓の展開を広い範囲に認めることができる。さらに、これら周溝墓における埋葬施設の配置は、①を基本としている点が指摘できる。ただし、周溝墓の平面形においては方形のものと不整円形のものとに分かれる。両者には、明確な時期差を認めることができない。むしろ、北半部（ＭＩ～Ｌ群とＨＡ～Ｅ群）に方形周溝墓、南半部（ＭＲ・ＨＦ群とＦ２区）に不整円形の周溝墓といった分布の違いが伴っていることから、系統の違いが存在している可能性を評価したい。

方形周溝墓には、丘陵筋に直行する２辺の周溝のみが検出できたものと、周溝が隅にも廻り、丘陵筋に平行する方向へと続くものがある。前者の方が多く、後者はＭ５・６号周溝墓だけである。さらに、前者が時期ⅰに限られることから、この形態の方が古い傾向にあると評価することができる。規模においては、中・小型が多くを占めるが、Ｍ３号周溝墓だけは大型である。また、Ｍ３号周溝墓だけは高まりの目立つ地形に立地しており、北半部の方形周溝墓の中で目立った存在であったと推測される。

不整円形の周溝墓には、丘陵先端部に立地するものと、周囲より高い場所に立地するものとがある。Ｈ３号周溝墓ａだけが大型であり、高まりの目立つ地形に立地している。したがって、不整円形の周溝墓が分布する南半部においては、Ｈ３号周溝墓ａが北半部のＭ３号周溝墓と同様の位置づけにあった可能性を考えることができる。詳細は第３節でも述べるが、東海地方における弥生時代の周溝墓の大半は方形であり、円形周溝墓は非常に少ない。時期ⅰに該当する県内の円形墓としては、本遺跡群や森町善千鳥遺跡のほかに、浜松市瓦屋西遺跡・静岡市千代遺跡があげられる程度である（静岡県考古学会2002など）。円形周溝墓を形成した集団に関しては、特徴的な背景が伴っている可能性が考慮される。

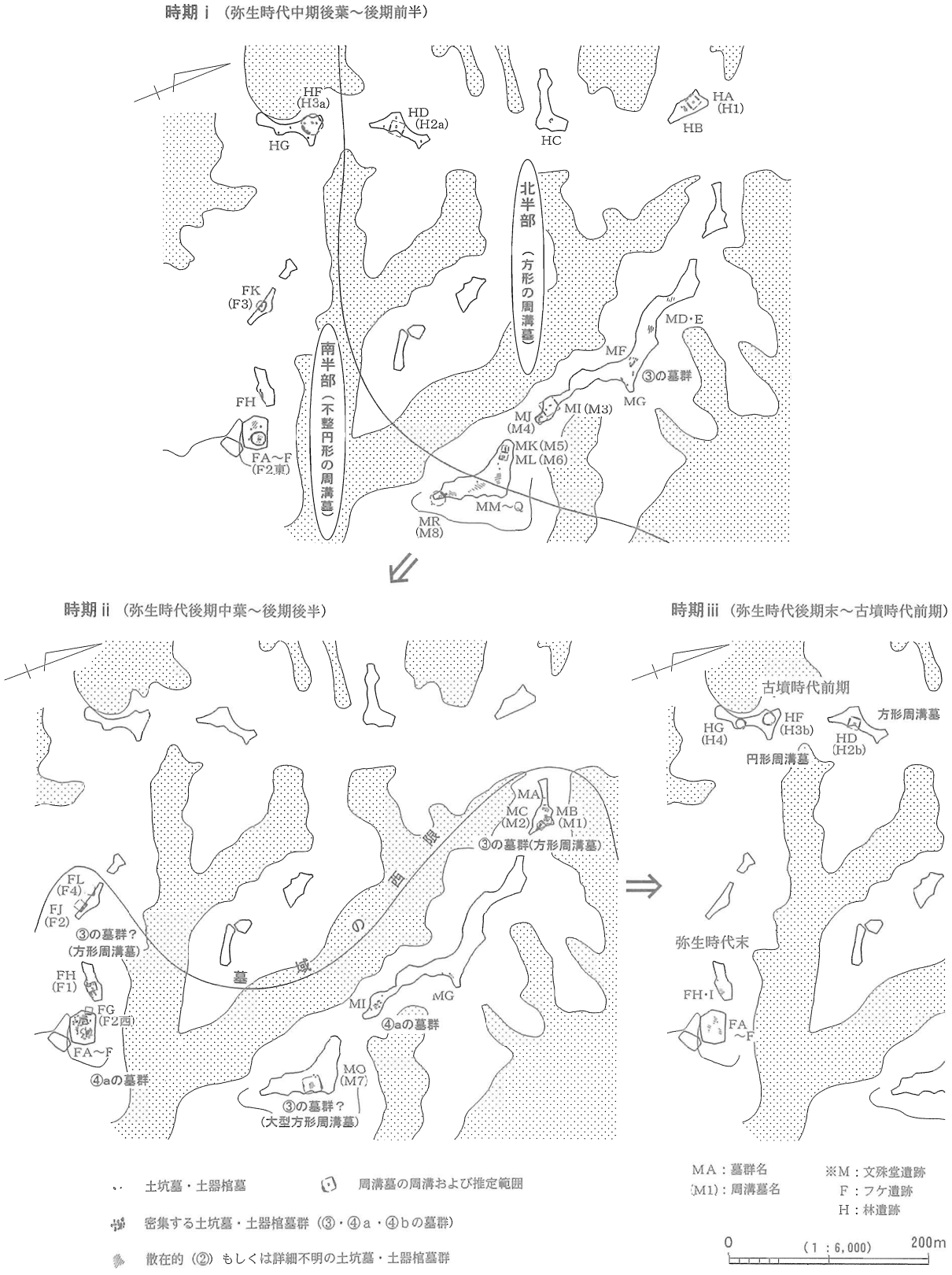
その他の墓群　周溝墓ではない墓群についても、北半部と南半部での相違を認めることができる。北半部では③の墓群や④ｂの墓群が分布する一方、南半部では②の墓群が周溝墓の周辺に把握できる程度である。方形周溝墓のＨＡ群（Ｈ１号周溝墓）では隣接して④ｂの墓群が形成されているが、不整円形の周溝墓であるＨＦ群（Ｈ３号周溝墓ａ）では周縁に小型土坑墓群が配置されている。周溝墓に付随する土坑墓群の配置においても、南北での違いが認められる。ただし、③の墓群（ＭＦ・Ｇ群）は、周溝墓と離れて独立的に立地していることから、南北の差異と関係なく形成された可能性もある。

(2) 時期ⅱ（弥生時代後期中葉～後期後半）

時期ⅰに多くの土坑墓・土器棺墓が設けられてきたＭＦ・Ｇ群やＨＡ～Ｇ群は、後期中葉になると徐々に終焉をむかえる。一方、ＭＡ～Ｃ群やＦＨ～Ｉ群といった新たな場所で、墓群の形成が認められるようなる。また、ＭＩ群・ＭＯ群・ＦＡ～Ｆ群といった時期ⅰから継続して形成される墓群においても、それぞれ異なる形態の墓群へと変化している。全体的にみると、墓域の展開範囲が東寄りに狭くなり、その一方で、各墓群においては多埋葬化・密集化が認められるようになる。

周溝墓にみる変化　大型の周溝墓は１基程度（Ｍ７号周溝墓）であり、多くが小型の周溝墓である点

は時期ｉと同様である。しかし、この時期の周溝墓には、時期ｉで多く認められたような不整円形の周溝墓や、丘陵を横断する2辺の溝だけが検出される方形周溝墓はない。いずれの周溝墓も、周溝が四辺にわたって廻り、四隅の全てが途切れるということがない方形周溝墓である。



第186図　墓域の形成過程

また、時期ｉの周溝墓との違いとして、埋葬施設の数・配置をあげることができる。時期ⅱの方形周溝墓においては、台状部に土坑墓が１基だけということはなく、複数が配置されている。時期ｉにおいても複数の土坑墓が配置される周溝墓はある（Ｍ４号・Ｍ８号周溝墓など）が、中心の土坑墓と平行して配置される土坑墓の存在は、時期ⅱになって認められる特徴である（Ｍ１・２号周溝墓）。

その他の墓群における変化　各遺構の時期を詳細に特定することは難しく、とくに②の墓群については、時期ⅱに形成されたものか否かを明示することは困難である。しかし、出土土器などから判断するならば、周溝墓と同様に形成範囲が狭くなる可能性が高い。また、④ａの墓群（ＭＪ群、ＦＡ～Ｈ群）の形成という埋葬施設の密集化も認めることができる。

多くの埋葬施設を設ける点は、時期ｉのＭＧ群にも認められ、密集度の差は単に形成期間の長短が関係している可能性も考慮する必要がある。しかし、④ａの墓群（ＭＪ群・ＦＡ群～Ｈ群）の出現については、丘陵先端部や高所といった目立つ場所に立地する点、土坑墓の配置がＭＧ群のように整然としない点、土坑墓の規模においてもＭＧ群よりばらつく点などを含めて考えると、時期ⅱへの変化として評価することができる。むしろ、遺構配置などにおけるＭＧ群との類似性は、時期ⅱの方形周溝墓であるＭＡ～Ｃ群に求めることができる。

(３)時期ⅲ（～古墳時代前期前半）

土坑墓群の終末と新たな展開　各墓群の出土土器をみる限り、時期ⅱの墓群の大半は時期ⅲに継続されない可能性が高い。比較的長期に形成されたであろう④ａ群のＦＡ～Ｈ群においても、時期ⅲの比較的早い時期（弥生時代後期末頃）には終息すると推測される。

一方、時期ⅱには墓群が形成されなかったＨＤ～Ｇ群に、時期ⅲの墓群形成を認めることができる。これらの墓群には必ず周溝が伴うが、埋葬施設は１基程度しか検出されていない。したがって、時期ⅲにおいては、時期ⅱのような多数の埋葬施設を伴う墓群形成は終わり、新たな場所に単数・少数の埋葬施設による周溝墓が形成されるという新たな展開を認めることができる。

古墳文化の影響　最終末に位置づけできる墓群は、ＨＦ群のＨ３号周溝墓ｂである。時期ⅱ・ⅲの周溝墓が方形で占められる中、円形を呈する周溝墓である。また、立地地形による高まりが伴う点も特徴的である。盛土の存在は確認できなかったが、林５号墳（古墳時代後期）築造による削平などの影響を強く受けていることから、本来は盛土を伴っていた可能性も否定できない。このＨ３号周溝墓ｂからは焼成前の底部穿孔を伴う二重口縁壺と有稜高坏が出土しており、葬送祭祀において古墳文化の影響を認めることができる（次節３参照）。

墓域の終焉　以上のように弥生時代中期後葉から続いてきた墓域の展開は、弥生時代後期末頃における多埋葬墓群の終息、さらに古墳的な要素を多くもつＨ３号周溝墓ｂの形成をもって認められなくなる。すなわち、古墳時代への移行が、この墓域の終焉と関連している可能性が考慮される。なお、本遺跡群の東に位置する中屋敷遺跡において、Ｈ３号周溝墓と同時期もしくは後続する時期の周溝が発見されている（註２）。削平のために埋葬施設・盛土については不明であるが、一辺18ｍ程の方形を呈し、底部穿孔二重口縁壺や高坏の出土がないなど、Ｈ３号周溝墓ｂとは異なる特徴をもつ。古墳文化の定着化のなか、被葬者や集団の環境・特質によって、Ｈ３号周溝墓ｂのような葬送祭祀が用いられる場合もあれば、むしろ方形周溝墓の伝統が強く残される場合もあることが想定される。

概略的ではあるが、弥生時代中期後葉～古墳時代前期前半に形成された円田丘陵の墓域は、時期ｉ・時期ⅱ・時期ⅲと様相を変えながら展開していったことがわかる。墓域を営む集団をとりまく社会（環境）の動向が、墓域の展開にも反映されている可能性を考えることができる。

第2節　弥生墓群の諸属性

本節では、埋葬施設の種類・規模・配置、出土遺物（供献土器・副葬品）の内容など、円田丘陵の墓域・墓群に関わる諸属性について整理・検討し、調査で得られた成果と課題を示しておきたい。

1．土坑墓について

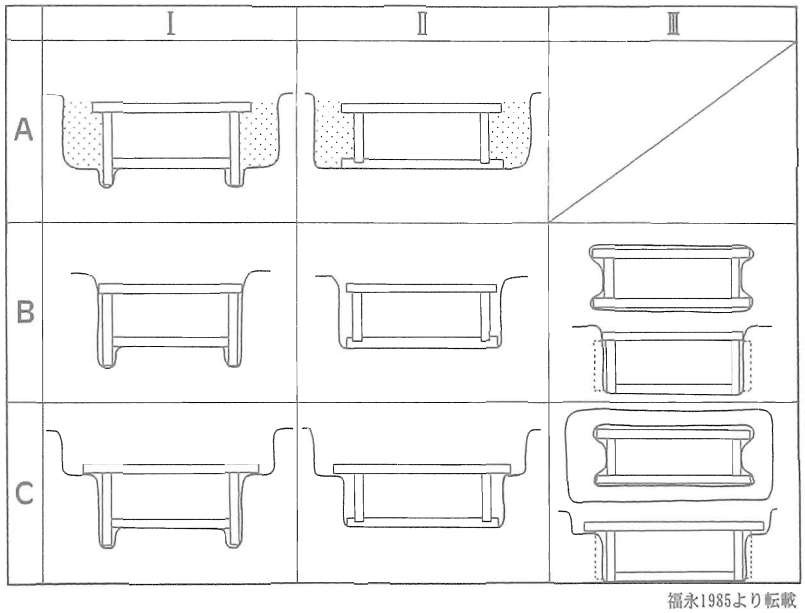
(1) 土坑墓の構造と規模

木棺の有無と構造　本遺跡群では、土器棺墓を除く埋葬施設は平面長楕円～長方形の土坑として検出され、これらを一括して土坑墓と称してきた。しかし、土坑墓には「直接遺骸を埋葬したものと遺骸を安置した木棺を納めたものがある」（斎藤1998）とされ、本来は、木棺使用の有無によって木棺墓と土壙などとして分けて検討する必要があると考えられる。ただし、本遺跡群では遺骸や木棺が残存する埋葬施設はなく、土層などから木棺の使用を明らかにできたものは一部に限られている。実際には、全ての土坑墓に対して木棺使用の有無を厳密に判断することは難しいと考えられる。

FSF14・SF30・SF35では、土層によってⅡ型木棺（福永1985、第187図）が使用された可能性が高いと判断できる。また、MSF82やHSF25・SF29においても、遺構の形状からⅡ型木棺の使用を推測することができる。さらに、MSF83・SF84やFSF14・HSF01は、Ⅱ－Cの木棺が想定できるような形状を呈している。その一方で、底面や壁面に木棺材を固定した痕跡（掘込み・切込み）が認められる土坑墓はなく、Ⅰ型・Ⅲ型の木棺の使用は確認することができなかった。また、箱形以外の木棺の使用を認めることもできなかった。以上から、概ねⅡ型の箱形木棺で占められていたと推測できる。

規模の分類　第188図は、円田丘陵の墓域に伴う土坑墓の規模（長軸長）をグラフにしたものである。円田丘陵全体では、分布が4.3m～0.7mの広範囲にわたっており、顕著な規模差を伴っていることがわかる。さらに、規模の分布は墓群によって異なる傾向を示しており、この傾向の差異などによって、土坑墓の規模をa～eに分類することができる（第188図）。

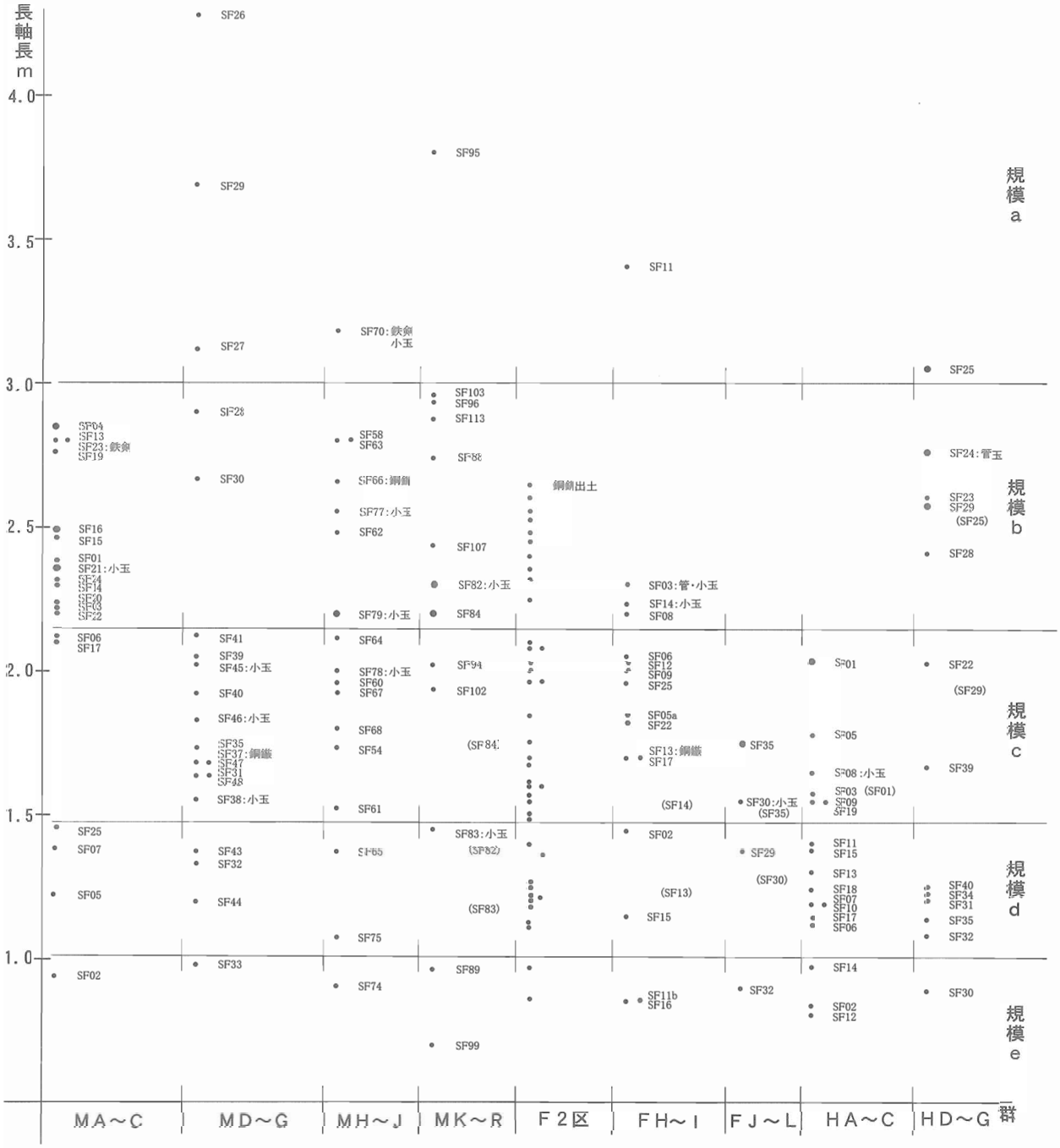
なお、墓群内での位置・規模・副葬品の全てにおいて絶対的優位にあるような土坑墓、古墳時代においてみられるような隔絶的な存在として評価できる土坑墓は見出し難い。被葬者の社会的地位と土坑墓の規模との関連は否定できないが、極端に強調しているようには見受けられない。むしろ、後述するように、被葬者の身長および埋葬姿勢が、土坑墓規模a～eの違いに直接的に関連していると評価することができる。



福永1985より転載

第187図　墓壙と木棺型式

被葬者の年齢と埋葬姿勢　土坑墓の規模を左右すると考えられる被葬者の身長は、主に年齢によって異なるものと考えられる。弥生人の平均身長は、男性成人で160cm前後、女性で150cm前後であると考えられている（中橋・永井1989a）。したがって、成人を伸展葬する場合には長軸約170cm以上の埋葬空間が必要になり、木棺を用いた場合には、より大きな墓壙が必要になる。木棺の使用が判明している土坑墓をみると、墓壙長の90～60%、平均75%程の長さの木棺を用いているようである（第188図）。すなわち、成人を木棺に納めて伸展葬するとき、墓壙の長さは２ｍを超える場合が多いと想定される。当然ではあるが、子供（註３）を埋葬する場合には、より小さな墓壙で問題ない。



全ての土坑墓のうち、長側長が不明のものは除外している。

●：墓群の中央に位置する土坑墓
(SF31)は、SF31の木棺の推定長を示す。

第188図　土坑墓の規模

土坑墓の規模は、埋葬姿勢によっても異なると考えられる。弥生時代の近畿地方（西日本）においては、縄文時代以来の屈葬の埋葬習俗から伸展葬の埋葬習俗へと、集団等による進度の差異を含みながら徐々に変化していったことが解明されている（福永1990）。静岡県内においても、中期中葉までは屈葬が多くを占めていたが、中期後葉には近畿地方などと連動するように伸展葬が増え、後期後半にはさらに伸展葬化が進んでいることが示されている（松井1998）。

木棺墓の墓壙においては、概ね2.5m前後以上であれば成人の伸展葬の可能性が高く、とくに3.0mを超えるものは確実に伸展葬であったと考えることができる。一方、2.0m前後以下になると、成人においては屈葬の可能性が高くなると考えられる。ただし、本遺跡群のように木棺・遺骸が残っていない状態で検討する場合、木棺規模：墓壙規模の割合や膝屈曲の度合が必ずしも一様ではないことから、詳細な判断には注意を要する。

規模別にみる被葬者と埋葬方法　これらの研究成果を参考にすると、以下のように、円田丘陵に展開する規模ａ～ｅの土坑墓について整理することができる。

規模ａは、木棺を用いたとしても成人の伸展葬に問題のない規模である。該当数は少なく、古墳時代前期前半の周溝墓の中心的埋葬施設（ＨSF25）、弥生時代後期後半頃の鉄剣・ガラス小玉が副葬された埋葬施設（MSF70）が含まれている。該当する全てが優位な社会的位置にあった被葬者の埋葬施設であるかはわからない。しかし、後期後半～古墳時代前期前半においては、完全に伸展葬化したものであり、さらに被葬者像と関連して、他より大きな埋葬施設を設けようとした意図がうかがえる。

規模ｂは、土壙であるならば成人の伸展葬が可能であるが、木棺墓においては屈葬が含まれる規模である。MSF82・ＦSF14では、長さ150cm程の木棺の使用が認められており、膝屈曲度のさほど強くない（膝内角90度以上の）屈葬が想定される（註４）。該当数は規模ｃに続いて多いが、墓群による粗密があり、集団や時期による伸展葬率の差異を指摘することができる。副葬品の有無や墓群中の位置は様々である。しかし、鉄剣・銅釧出土の土坑墓は規模ａ・ｂに限定され、さらに、銅釧出土のMSF66とＦSK30がほぼ同規模、鉄剣出土のMSF23とMSF70がそれ以上の規模を有する点は注目される。

規模ｃは、土壙であっても屈葬が含まれている可能性が高く、木棺墓においては大半が屈葬で占められると想定される規模である。木棺の使用が認められるＦSF13・ＦSF30・ＦSF35やＨSF01では、長さ120～160cmの木棺が想定されている。墓域全体としては該当数が最も多いが、規模ｂと同様に墓群による粗密があり、集団や時期による伸展葬率の差異を指摘することができる。副葬品の有無や墓群中の位置は様々であるが、規模ａ・ｂのように鉄剣や銅釧が出土した土坑墓はない。その一方で、銅鏃が出土したMSF37・ＦSF13が、ともにこの規模に該当する点が注目される。

規模ｄは、成人であれば木棺の有無に関わらず屈葬の可能性が高く、子供であっても、木棺墓の場合は屈葬が含まれる可能性が高い規模である。全体的に各墓群に認めることのできる規模であるが、ＨＡ～Ｃ群以外では小規模な部類の少数派に位置づけられる。墓群の中央に位置するものはMSF65だけであり、副葬品の出土はMSF83（ガラス小玉出土）だけである。

規模ｅは、伸展葬・屈葬にかかわらず成人の埋葬が想定し難い規模である。子供の埋葬においては、乳幼児でなければ屈葬の可能性が高い。規模ｄと同様、全体的に認められるが、各墓群中で主体とはならず、少数に限られる。墓群の中央に位置するもの、副葬品が出土したものはない。

墓群内の構成　各墓群内における土坑墓の規模分布をみると、集中範囲にある一群と、より大きな一群、より小さな一群の三者を認めることができる。

ＭＡ～Ｃ群を例とすると、集中範囲を2.0～2.5mに認めることができる。ここに該当する一群は成人埋葬であり、木棺であれば屈葬、土壙であれば伸展葬の可能性が高いと判断できる。2.8m前後には、より大きな一群がある。成人を伸展葬した木棺墓の可能性があり、墓群内における時期差もしくは被葬者

の地位の違いが、埋葬姿勢や木棺の有無に反映されている可能性が考慮される。一方、1.5m以下の小さな一群については、成人を屈葬した土壙の可能性も否定できないが、該当数が非常に少ないこと、集中範囲との規模差が隔絶的であることから、子供の埋葬である可能性を評価したい。なお、これら土坑墓以外に数基の土器棺墓があるが、後述するように、乳幼児の埋葬施設であると考えられる。

他の墓群においても、同様に説明できる規模分布を示している場合が多い。多少の身長差（年齢・性別）や埋葬方法の違いを含みながらも、成人が被葬者の多くを占めており、その点では墓群による違いはなかったと考えられる。

墓群間の相違　ただし、墓群による土坑墓規模の傾向の違いは確かに存在する。この点については、墓群による埋葬方法（埋葬姿勢および木棺の有無）の違いを示している可能性が評価できる。

後期前半を主とするＭＦ～Ｊ群では規模ｃに集中するのに対して、後期後半を主とするＭＡ～Ｃ群では、より大きい規模ｂに集中する。また、後期前半を主とするＨＡ～Ｇ群では規模ｄに集中するのに対して、後期中葉～後半を主とするＦＡ～Ｌ群では、より大きい規模ｃに集中している。これらの違いについては、古墳時代に向かって伸展葬化が進行していったことを示すものとして評価できる。

一方、同時期における墓群間の差異も認められる。後期後半ではＭＡ～Ｃ群よりもＦＡ～Ｇ群、後期前半ではＭＦ～Ｊ群よりもＨＡ～Ｇ群が小さい傾向となる。小さい傾向のＦＡ～Ｇ群とＨＡ～Ｇ群が④の墓群（整然としない密集する土坑墓群）であるのに対して、大きい傾向のＭＡ～Ｃ群とＭＦ～Ｊ群は③の墓群（比較的整然と配置された土坑墓群）であることから、各墓群を営む集団の性質の違いが、伸展葬化への対応を含む埋葬習俗の違いや埋葬原理の違いとして表れている可能性が考慮される。

(2) 主軸方向の違い

墓群内における主軸方向の別　ＭＡ～Ｃ群やＭＦ～Ｇ群といった③の墓群では、墓群内での主軸方向の違いを明確に認めることができ、中心的な土坑墓に平行するものと、それに直行するものとに大別することができる。中心の土坑墓が墓群形成の契機となっている可能性が高い（大庭1999）ことから、どちらかといえば、それに平行する一群の方が主体的であった可能性が高いと推測される。実際、平行する土坑墓の方が多く、直行するものは墓群の周縁や斜面地に位置している場合が目立つ。しかし、周溝墓の台状部内においても両者が存在しており、埋葬施設の規模や副葬品においては、明確な優劣を見出すことができない。ＭＩ群・ＦＨ群といった④ａの墓群やＭＪ群・ＭＲ群といった数基の土坑墓が位置する周溝墓においても、主軸方向による二者が認められるが、③の墓群と同様、大きな時期差や絶対的な優劣関係として両者を評価することは難しい。

この主軸方向による二者については、半族や胞族といった二分原理による集団的な構造があった可能性が考慮される（田中1998）。半族・胞族は社会集団を便宜によって任意に分割するものであり、親族関係と直接的に結びつくとは限らない。しかし、墓域形成において機能するだけではなく、出自や様々な場面での役割の違いが関連している可能性は否定できない。

墓群間における主軸方向の別　単数埋葬である①の墓群においても、主軸方向の別を認めることができる。隣り合うＭＬ群（Ｍ５号周溝墓）とＭＬ群（Ｍ６号周溝墓）は、ともに①の墓群（周溝墓）であるが、それぞれの中央に位置する土坑墓の方向は異なっている。そして、先述の墓群内における主軸方向の別と同様、両者において顕著な時期差や優劣関係を認めることはできない。

一方、ＨＡ群（Ｈ１号周溝墓）とＨＢ群（④ｂの土坑墓群）、ＨＦ群（Ｈ３号周溝墓ａ）のＨSF29とＨSF33～SF35の関係においては、主軸方向の相違とともに立地・規模・構造の違いを認めることができ、優劣関係として評価できる可能性がある。時期的もしくは個別集団的に様相の違いがある中で、このように優劣関係が伴う場合も一部にあった可能性が想定される。

2．土器棺墓について

土器棺墓の位置　土器棺墓は、各遺跡・各区に分散して分布している。単独的に立地する場合と数基が集中する場合があるが、いずれにしても各墓群の周縁部や外側の丘陵斜面に位置しており、墓群の主体を成すことはない。このような特徴は、小規模（規模ｄ・ｅ）な土坑墓と類似している。

遠江の土器棺墓は、諸研究によって乳幼児の墓であるとされながらも、再葬墓が一部に含まれている可能性も指摘されている。ただし、本遺跡群においては積極的に再葬墓であると評価できる根拠はなく、分布や位置の特徴から、基本的には乳幼児の墓であった可能性を評価したい（註５）。

土器棺墓の種類　円田丘陵における土器棺の身は、全て壷である。一方、蓋には壷の下部が用いられる場合が比較的多いが、壷の上部や鉢・甕などの場合もある。その選択基準は明確でない。

埋置姿勢は、後期前半までは横位、中葉以降は斜位・正位が主となる。後者の場合、土器棺の身は頸部以上を打ち欠いて用いられ、土器の蓋が伴う場合が多い。一方、前者の土器棺には頸部以上の打ち欠きがない場合、上を向く胴部中央に穴が開いている場合も多い。なお、蓋の出土がない土器棺については、削平などによって蓋が消失した可能性のほかに、土器以外を蓋とした可能性も考慮する必要があるのかもしれない。ただし、石の使用は認められていない。

土器棺の変遷　土器棺墓の時期は、棺自体の編年によって導き出されるべきであるが、遠江においては、その研究成果がほとんどない。身と蓋以外に一括性を評価できるものがなく、大型の身には歪みを伴う場合があって、通常の土器ほど形状等に対する繊細な意識がなかった可能性が想定される。さらに、多くは打ち欠きによって失われた部分があり、全体的に文様などの要素が少ない傾向にある。以上のような問題点もあり、少なくとも円田丘陵の資料だけからでは、詳細な時期判断を伴う編年を求めることはできない。ただし、次のようにある程度の変遷観を提示することはできる。

第189図は、円田丘陵における土器棺の身（大型壷）の変遷について、蓋の特徴や墓群の時期などを参考にして作成したものである。底部については、後期前半では上げ底状のもので占められるが、後期中葉以降には平底になる。文様については、無文のものが多い中で、中期後葉には胴部上半の斜格子文など、後期前半～中葉には頸部下端に三角突帯、後期中葉以降になると羽状刺突文が廻るものが認められるようになる。調整については、後期前半までは胴部最大径付近に横方向のハケ調整が施される場合が多いが、後期中葉以降には少なくなる。

第17表　土器棺墓一覧

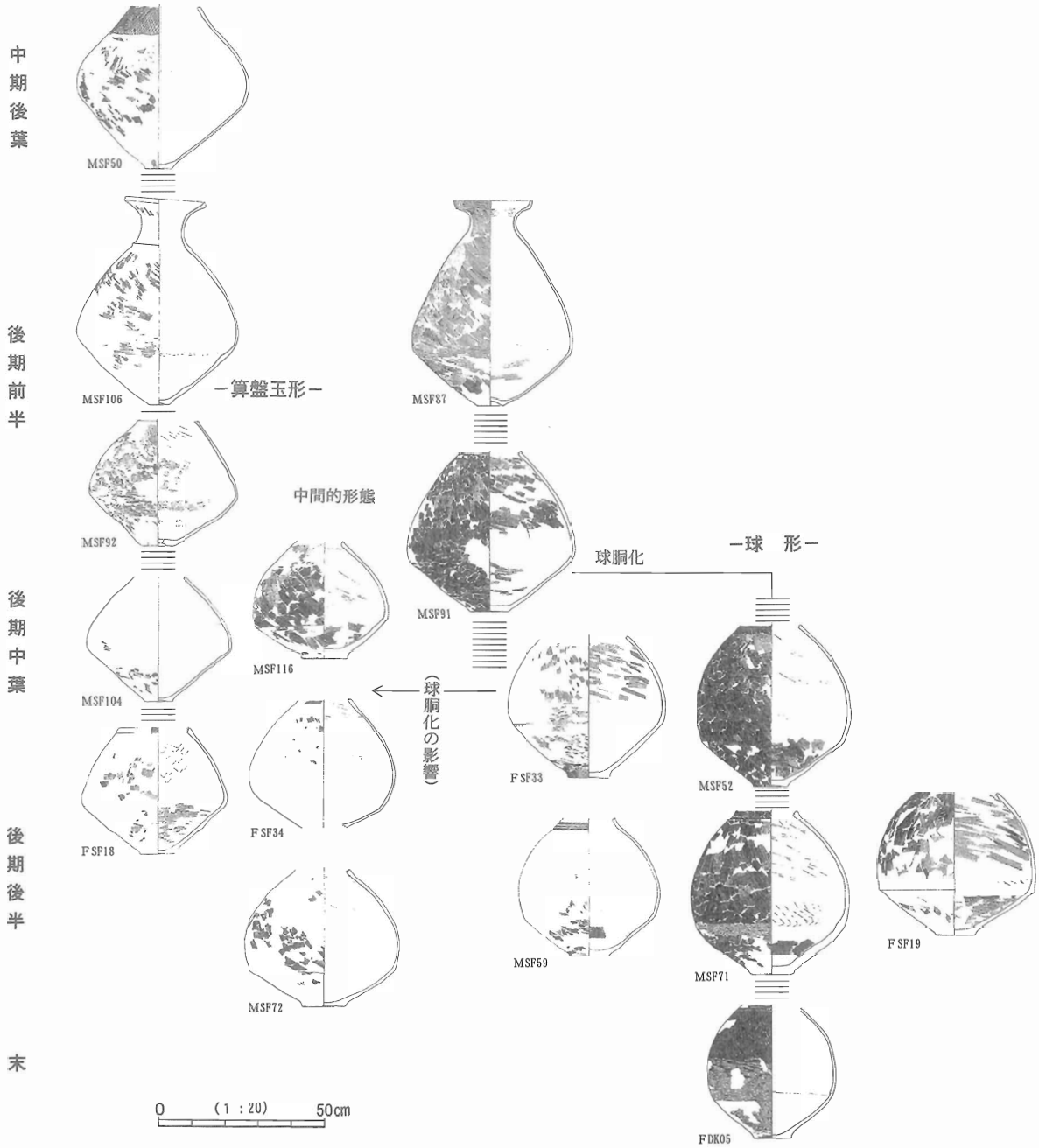
遺跡	区部	墓群	遺構	位置	埋置姿勢	蓋	身	その他の遺物
文殊堂遺跡	Ｍ１区	ＭＡ	MSF08	A	正		壷(胴部)	
			MSF09	A	斜	壷(下部)	壷(胴部)	
		ＭＢ	MSF18	A	正		壷(胴部)	
	Ｍ２区中央部	ＭＧ	MSF49	B	正		壷(胴部)	
			MSF50	B	横	甕	壷(胴部)	甕
			MSF51	B	?		壷(胴部)	
			MSF52	B	正	壷(胴部)	壷(胴部)	
	Ｍ２区南部	ＭＩ	MSF59	B	横	壷(口縁部)	壷(胴部)	
			MSF71	A	正	壷(胴部)	壷(胴部)	
			MSF72	A	正		壷(胴部)	
			MSF73	A	横		壷(口縁欠損)	
	Ｍ３区北部	ＭＬ	MSF85	A	横	壷の下部	短頸壷	ガラス小玉
			MSF86	A	横		壷	
			MSF87	A	横		壷	
		ＭＭ	MSF91	B？	正	甕	壷(胴部)	
			MSF92	A？	正	壷(下部)	壷(胴部)	
	Ｍ３区中央部	ＭＯ	MSF104	A？	正	壷(口縁部)	壷(胴部)	
			MSF105	A？	正	鉢	壷(胴部)	ガラス小玉
			MSF106	B？	横		壷	
	Ｍ３区南部	ＭＲ	MSF115	B？	?	甕	壷(口縁欠損)	
			MSF116	B	斜	壷(下部)	壷(胴部)	身の口縁部

遺跡	区部	墓群	遺構	位置	埋置姿勢	蓋	身	その他の遺物
フケ遺跡	Ｆ２区	ＦＡ	ＦDK08	A	正	壷(下半)	壷(胴部)	
			ＦDK11	A	横	壷(胴部上半)	壷(頸部以下)	壷(下部)
		ＦＢ	ＦDK05	A	正	壷(胴部)	壷(胴部)	壷(胴部)
			ＦDK06	B？	斜	壷(胴部)	壷(胴部)	
			ＦDK09	B？	斜	壷(上半)	壷(胴部)	
		ＦＣ	ＦDK07	B？	斜	壷(下部)	壷(胴部)	
		ＦＥ	ＦDK01	B？	斜		壷(胴部)	
			ＦDK02	B？	正		壷(胴部)	
			ＦDK03	B？	正	高坏(坏部)	短頸壷	
			ＦDK04	B？	斜	壷(上半)	壷(胴部)	
			ＦDK10	B？	正	壷(下部)	壷(胴部)	
	Ｆ３区	ＦＨ	ＦSF18	A	正	鉢？	壷(胴部)	
			ＦSF19	B	正	鉢	壷(胴部)	
		ＦＩ	ＦSF20	B	斜	壷(上半)	広口壷	
	Ｆ４区	ＦＪ	ＦSF33	A	斜	壷(下半)	壷(胴部)	
			ＦSF34	A	斜		壷(胴部)	
林	Ｈ４区	ＨＦ	ＨSF36	B	正		壷(胴部)	

位置－Ａ：墓群の中央範囲、周溝墓の台状部内
Ｂ：墓群の周縁部、周溝墓の台状部外

さらに、胴部の器形についても、ある程度の変遷を把握することができる。中期後葉～後期前半では縦長の算盤玉形で占められるが、後期前半～中葉になると、比較的大型で器壁の厚い重厚なものを中心にして、胴部上半に丸味を伴うものが認められるようになる。さらに後期中葉～後半には、主体が球形のものへと変わっていく。一方、器壁が薄く重厚でないものについては、算盤玉形が残存する傾向にあるが、後期中葉以降、球胴化の影響が多く認められるようになる。

以上は円田丘陵に限られた資料によるものであり、詳細で信頼性のある編年のためには、より多くの資料を対象にして検討する必要があると考える。また、先述したような課題もある。重厚で球形のものとその他の算盤玉形のものとに分けて述べたが、両者が隣り合う場合もあり（MSF51とMSF52）、製作～使用の各段階において、どれ程の差異があったのかは評価できていない。ただ、各土器棺墓の時期判断の根拠になっている部分もあるため、円田丘陵におけるある程度の変遷観として提示した。



第189図　円田丘陵の土器棺に用いられる大型壺の変遷

3．供献土器による評価

土器の出土状況　土器棺以外の土器の多くは、墓群内の表土・流土や遺構内の堆積土中から出土している。これらは墓群・埋葬施設の周囲で行われた葬送祭祀に用いられたと考えられるが、供献の場所（置かれた場所）や崩落・流土の状況の違い、後世の遺構（古墳等）の有無によって残存状況が異なる。したがって、当時における供献土器の有無や量などを比較することは難しい。

しかし、概ねの傾向として、墓群間における供献土器の量の違いを把握することはできる。土器棺以外の全出土土器片の量は、ＭＢ～Ｃ群・ＭＩ群・ＦＨ群で多く、ＭＤ～Ｅ群・ＭＫ～Ｌ群で少ない。したがって、供献土器は①・②の墓群よりも③・④ａの墓群に多く、埋葬施設数に対応する可能性が指摘できる。ただし、④ｂの墓群であるＨＢ・Ｃ群では、土坑墓が多いにも関わらず出土土器が少ない。墓群自体の優劣なども左右している可能性が考慮される。

供献土器の組成　比較的良好な状態で把握できる供献土器群を、第190図にあげた。まず、全体的に壷と高坏との組み合わせが多く、埋葬施設（土坑墓）から出土した土器群の全てに壷が含まれる点が注目される。さらに、その壷の大半には、底部や胴部への穿孔や打ち欠きが認められており、葬送に際しての儀礼的行為を認めることができる。

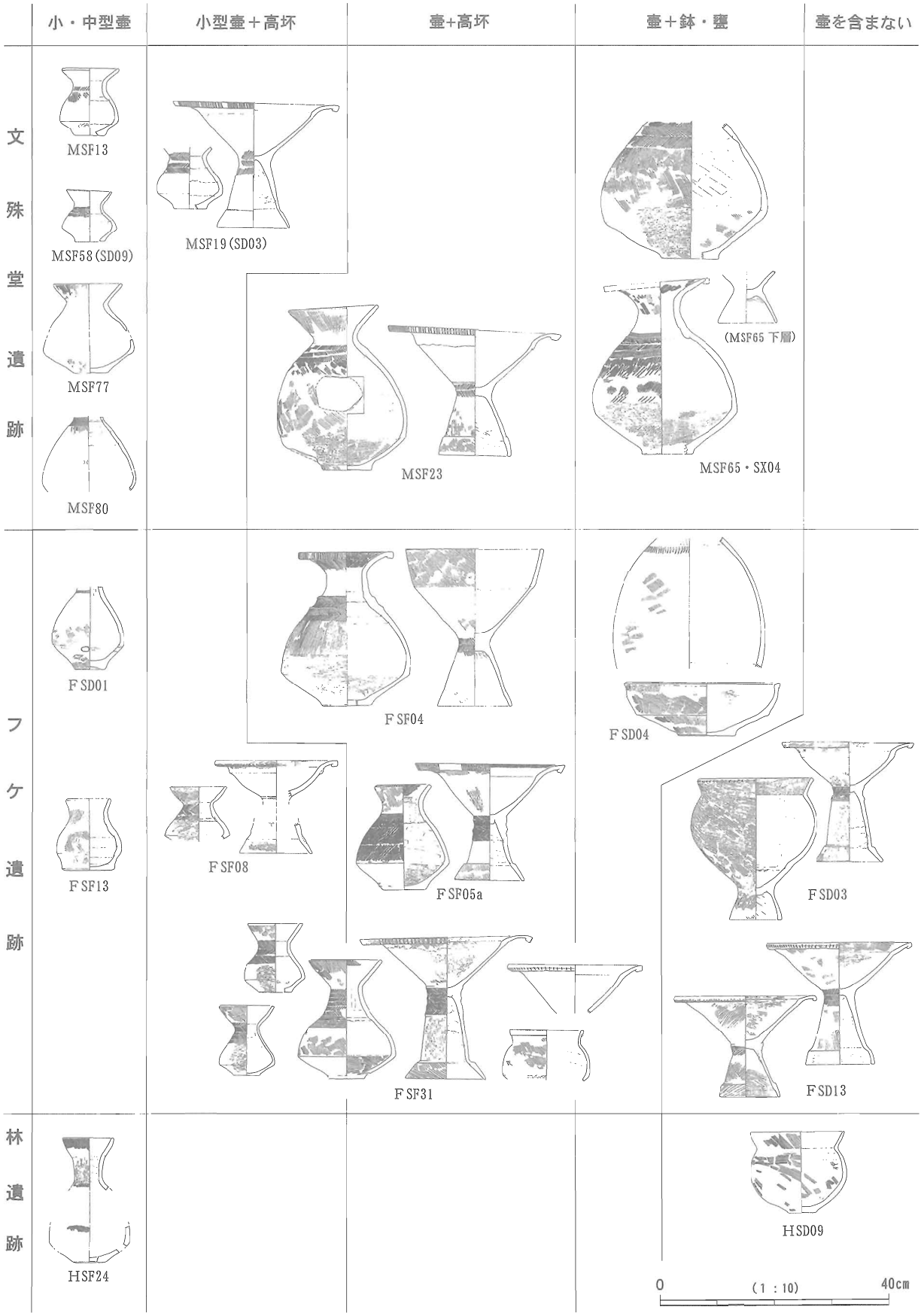
一方、溝からの出土土器群には、壷を含まない場合も少なくない。出土位置によって土器群の組成が異なることから、個々の埋葬施設に対してと墓群全体に対してとで、異なる儀礼的行為が行われた可能性が指摘できる。もちろん、それぞれが一連の葬送祭祀の一場面として位置づけられ、明確に分化できるものではない可能性もある。しかし、少なくとも穿孔・打ち欠きを伴う壷を用いた儀礼的行為が、墓群の中でも埋葬施設に対して意識されていた可能性は高いと考えられる。

壷の大小の違い　葬送祭祀に用いられた壷には、大小の違いを明確に認めることができる。第190図の中で比較的大きな壷の出土をみると、墓群の中心に位置する土坑墓、規模の比較的大きな土坑墓、鉄剣や管玉が出土している土坑墓などと様々ではあるが、いずれも③・④ｂの墓群の比較的優位に位置づけできる土坑墓に伴うことがわかる。一定以上の社会的位置にあった者の葬送祭祀に際しては、他の多くの者の場合とは異なり、大きめの壷を用いる意識が生じていたと推測することができる。

また、小型壷や高坏に比べて、大・中型の壷には個体ごとの形状・文様の違いを顕著に認めることができる。一定以上の社会的位置にあった者の葬送祭祀に際しては、被葬者の社会的位置・役割や出自を背景とした地域を越えたネットワークが機能した可能性を指摘することができる。一方、通常の土器製作および交流上の差異が墓域内に持ち込まれただけであり、指摘したような関係が壷と被葬者像との間になかった可能性もある。しかし、そうであったとしても、被葬者の社会的位置や出自など、もしくはそれを背景とした集団の意識が、ある土器の使用に象徴されている可能性を考えることはできる。

墓域終末期の変化　葬送儀礼における穿孔を伴う壷の使用は、墓域が終末時期に至り、③・④の墓群が認められなくなる古墳時代前期前半にまで継続される（Ｈ３号周溝墓ｂ）。また、高坏の使用も同様に認められ、儀礼に用いられた土器の器種に弥生時代からの変化を見出すことはできない。

しかし、古墳時代前期前半のＨ３号周溝墓ｂで使用された壷は、焼成前に底部穿孔を設けたものである。したがって、葬送祭祀に際しては、穿孔・打ち欠きといった実用器を仮器化する行為は行われなくなった可能性が指摘できる。また、残存状況が悪く詳細な判断はできないが、壷の破片は台状部上（林５号墳盛土中）、高坏の破片は周囲の斜面から多く出土しており、弥生時代の墓群のように壷と高坏とが組み合わさることがなく、両者の用いられる場所・場面がより分化している可能性が指摘できる。以上のように、供献土器が弥生土器から土師器になったというだけではなく、葬送儀礼の内容においても、古墳時代への移行に伴う変化があったと推測することができる。



第190図　供献土器の組成

4．副葬品による評価

(1) 副葬品を伴う被葬者像

副葬品の有無　第18表・第188図にあるとおり、副葬品が出土した埋葬施設は少なく、一定以上の社会的位置にある被葬者に対して副葬品が伴われた可能性が指摘される。しかし、副葬品を伴う埋葬施設は、必ずしも墓域の中心に位置したり単独で立地したりするわけではない。他との隔絶性をもった被葬者像や墓群形成の契機・中心となるような被葬者像とは関連していないようである。一方、前節や本節1で述べたように、墓群の種類や土坑墓の規模は、必ずしも優劣の関係だけで説明できるものではない。優劣関係の絶対性・隔絶性は高くないと想定することはできるが、副葬品が一定以上の位置にある被葬者に伴うという評価を、埋葬施設の規模や位置によって完全に否定する必要はないと考える。

さらに後述のとおり、副葬品の種類によって埋葬施設の特徴の違いを認めることができる。副葬品となる玉類や金属器がもたらされた背景には、地域を越えた様々な交流があったと考えられ、その経緯や付されてきた価値観は、物の種類によって異なっていたと想定される。そうした異なる背景が、被葬者像と関連して埋葬施設の差異に表れている可能性が指摘できる。

ガラス小玉の出土　ガラス小玉の出土は他の副葬品に比べると多く、一定以上の社会的位置にある者は、他よりもまず玉類を伴うことができたことがわかる。また、土坑墓においては規模b・cに多く、規模eに出土がないことから、基本的には成人に伴うものであったと判断できる。ただし、土器棺墓からの出土が認められている点は、この判断に反している。乳（幼）児においては、ある程度成長した子供に比べて親（成人）との独立性が低く、親の社会的位置が反映される可能性が考慮される。

なお、ガラス小玉の多くは装身具であったと想定されるが、同一墓群内の複数の土坑墓から数点ずつ出土する場合や、埋葬施設内で上下層を含めて散在的に出土する場合も認められている。詳細な出土地点を特定できるものが少なく、個別に判断することは難しいが、出土ガラス小玉の全てが被葬者の身に着いていたわけではなく、葬送祭祀において使用されたガラス小玉が含まれている可能性もある。

その他の玉類　ガラス小玉以外の玉類として、水晶製算盤玉と管玉をあげることができる。残念ながら、出土遺構が特定できるのはFSF03（管玉）とHSF24（管玉）だけである。しかし、FSF03は規模の大きい土坑墓（規模b）、HSF24は周溝墓の中心にある比較的大きな土坑墓（規模b）であり、比較的優位な位置にある埋葬施設であると判断することができる。なお、遺構外で出土した水晶製算盤玉・管玉は、MI群（M3号周溝墓）に伴う玉類であるが、この墓群は玉類・銅釧・鉄剣といった副葬品の出土が多い墓群でもある。

第18表　玉類・金属器出土一覧

遺跡	区・部	墓群（周溝墓）	遺構（種類）	金属器	玉類 水晶製算盤玉	玉類 管玉	玉類 ガラス小玉
文殊堂遺跡	M1区	MC群（M2号周溝墓）	MSF21（土坑墓）				1
			MSF23（土坑墓）	鉄剣1			
			o 49grid（遺構外）	鉄鏃1			
	M2区中央部	MF群	MSF37（土坑墓）	銅鏃1			
			MSF38（土坑墓）				5
		MG群	MSF45（土坑墓）				2
			MSF46（土坑墓）				1
	M2区南部	MI群（M3号周溝墓）	6号墳北西周溝（遺構外）		1	5	4
			M6号墳盛土				1
			MSF66（土坑墓）				
			MSF70（土坑墓）	銅釧2			11
			MSF77（土坑墓）	鉄剣1			8
		MJ群（M4号周溝墓）	MSF78（土坑墓）				4
			MSF79（土坑墓）				3

遺跡	区・部	墓群（周溝墓）	遺構（種類）	金属器	玉類 水晶製算盤玉	玉類 管玉	玉類 ガラス小玉
文殊堂遺跡	M3区北部	MK群（M5号周溝墓）	MSF82（土坑墓）				5
			MSF83（土坑墓）				6
		ML群（M6号周溝墓）	MSF85（土器棺墓）				3
	M3区中央部	MO群（M7号周溝墓）	MSF105（土器棺墓）				13
			K66grid（遺構外）	鉄剣1			
フケ遺跡	F2区	FE群	FSK30（土坑墓）	銅釧3			
	F3区	FH群（F1号周溝墓）	FSF03（土坑墓）			1	9
			FSF13（土坑墓）	銅鏃2			
			FSF14（土坑墓）				4
	F4区	FJ群（F2号周溝墓）	FSF30（土坑墓）				1
			FSF31（土坑墓）				4
	H1区	HB群	HSF08（土坑墓）				1
林	H3区	HE群（H2号周溝墓a）	HSF24（土坑墓）			1	

銅鏃出土の土坑墓　銅鏃は、MSF37とFSF13から出土している。ともに埋葬施設の多い墓群にあるが、MSF37が墓群の中央付近に位置する一方、FSF13は斜面際に位置している。また、主軸方向はMSF37が丘陵筋に直行、それに対してFSF13は丘陵筋に平行する。

両土坑墓の注目できる類似点は、その規模にある。ともに規模cであり、墓群中においても大きい部類には属さない。また、後述する鉄剣・銅釧出土土坑墓と比べると、明らかに規模が小さいことがわかる。膝屈曲度の高い屈葬による埋葬が想定され、鉄剣・銅釧を伴う土坑墓よりも古い時期、もしくは同時期であっても伝統的・保守的な性格が強い被葬者（集団）であった可能性が指摘できる。

鉄剣出土の土坑墓　鉄剣は、MSF23とMSF70から出土している。ともに多くの埋葬施設を伴う③・④aの墓群にあり、墓群の周縁部に位置する点、主軸が丘陵筋および主要な土坑墓に対して直行する点、墓群の中で比較的大きな規模を有する点など、共通する特徴が多い。

規模が大きい点については、伸展葬による新進的な埋葬習俗を用いていることを示しており、さらに墓群の中で優位な位置にあった可能性を評価することができる。一方、位置や主軸方向における特徴は、墓群形成の契機・基点とはならなかったこと、他の多くのものとは異なることを示している可能性が評価できる。鉄剣がもたらされた背景となる地域を越えた交流の中で、他の多くの者とは異なる役割を担っていた、もしくは特異な存在として意識されていたと評価することもできる。比較的優位な社会的位置や埋葬習俗にみる脱伝統性についても、このような背景と関連している可能性が考慮される。

銅釧出土の土坑墓　銅釧は、MSF66とFSK30から出土している。鉄剣と同様、多くの埋葬施設を伴う④a群にあり、墓群の中央に位置しない点でも共通する。ただし、主軸方向が丘陵筋および主要な土坑墓と平行する点は、鉄剣出土土坑墓と異なる特徴である。規模は、比較的大きい方ではあるが（規模b）、鉄剣出土土坑墓には及ばない。

規模における特徴は、鉄剣出土土坑墓ほどではないが、比較的優位な社会的位置にあり、新進的な埋葬習俗を用いている可能性が高いと評価できる。また、墓群中の位置によって、鉄剣出土土坑墓と同様に墓群形成の契機・基点とはならなかったと判断することもできる。一方、主軸方向において鉄剣出土土坑墓と対照的である点については、被葬者の役割・社会的位置に大きな違いがあったと評価することができる。なお、銅釧と鉄剣が共伴しない点についても、同様に判断することができる。

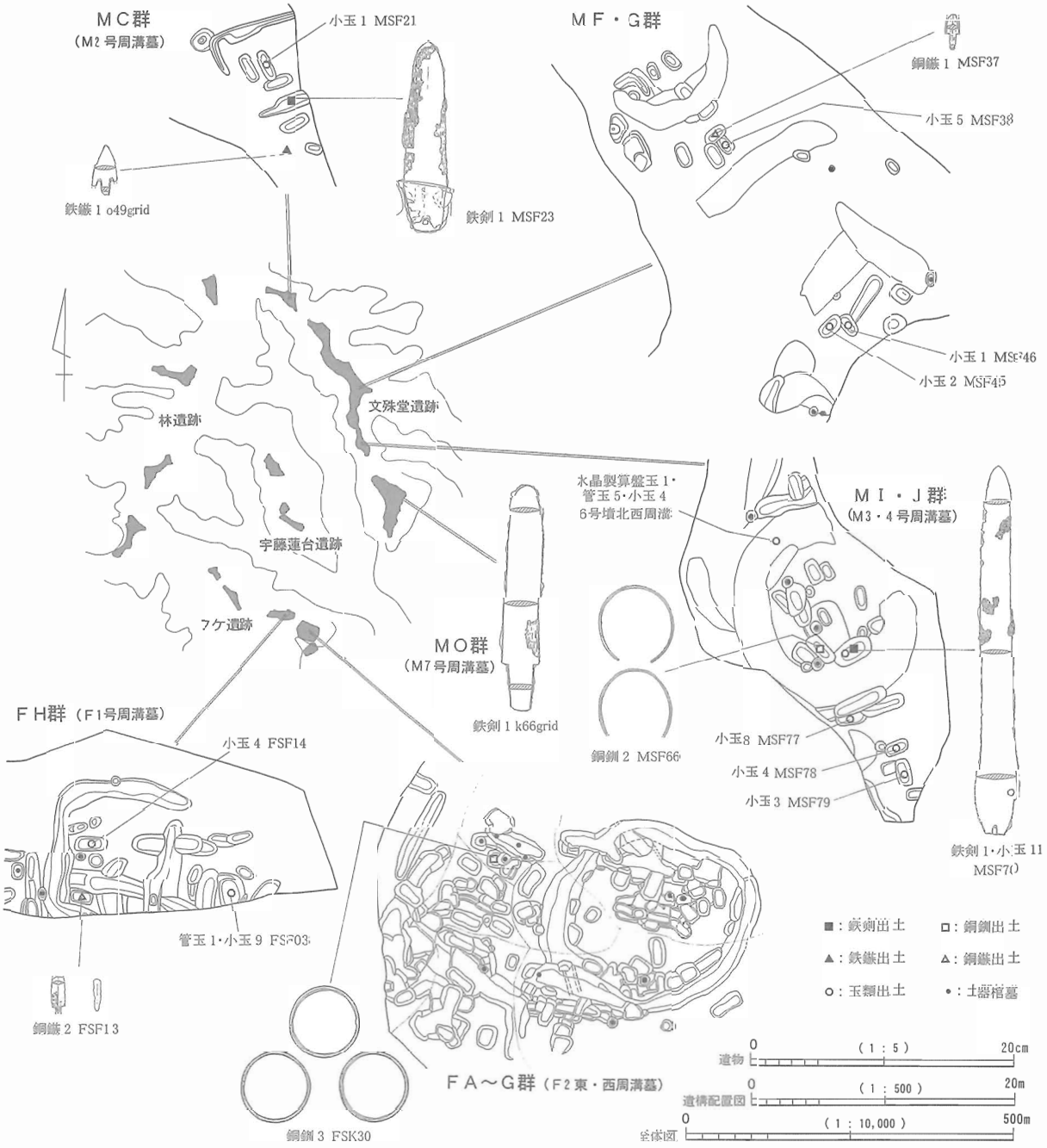
副葬品にみる被葬者像　以上のように、副葬品の種類によって出土する土坑墓の特徴が異なり、それぞれに異なる被葬者像を想定することができる。とくに、鉄剣出土土坑墓と銅釧出土土坑墓との相違は注目される点であり、再度、双方の被葬者像について検討しておきたい。

すでに述べたとおり、いずれの被葬者も比較的優位で新進的な存在であった可能性が指摘できる。さらに、それぞれの出土土坑墓が各墓群に１基程度であって特定の墓群に集中しないこと、異なる墓群であっても出土品によって特徴が類似することから、各集団内において同様に、鉄剣に付随する位置・役割と銅釧に付随する位置・役割が備えられていたと考えることができる。そして、鉄剣と銅釧が同じ土坑墓で共伴することがないことから、双方に付随する位置や役割は、同一者に与えることができないものであった可能性を評価したい。

鉄剣と銅釧は、ともに地域を越えた交流の中でもたらされたと考えられるが、鉄・銅という素材の違いや武器・腕輪という用途の違いと関連して、全く同じ経緯と価値・意味を伴ってもたらされたとは想定し難い。さらに、次のような違いを指摘することもできる。鉄剣については、集団内外に対する活動の中で獲得できるものであったと推測され、その際に重要な役割を担って実力を発揮した者が、武威・実力を背景として伴うことができたと考えることができる。その一方で、銅釧については、多くが成人になってからの着脱が不可能な大きさであることから、基本的には子供の頃に装着して生涯にわたって伴い続けたものであったと推測される（野澤2002など）。したがって、鉄剣のように活動の結果として

獲得されるものではなく、成人として活動する前に、必要と期待をもって銅釧とそれに付随する役割・位置が与えられ、生涯にわたってその役割と位置が伴い続けていた可能性が指摘できる。

前節でも述べたが、墓群中における主軸方向の異なる二者については、半族や胞族といった集団内の二分構造が墓群形成に反映している可能性が指摘できる（田中1998）。そして、円田丘陵においては、この二分構造に対応するように、鉄剣出土土坑墓と銅釧出土土坑墓とで主軸方向が異なるのである。二分されたそれぞれが、墓群形成以外の諸活動の中でも役割を異にしている可能性が評価できる。なお、鉄剣出土土坑墓の主軸方向の方が、中心の土坑墓とは異なり、墓群内の多数派にもならない。墓域を営む集団や地域社会にとっては、鉄剣に伴う役割や武威は特異的なものであり、当初から必要とされた銅釧に伴う役割の方が主であったのかもしれない。ただし、数の論理と重要性が必ずしも一致するとはかぎらず、いずれにしても円田丘陵内での検討だけでは推測の域を出ない。



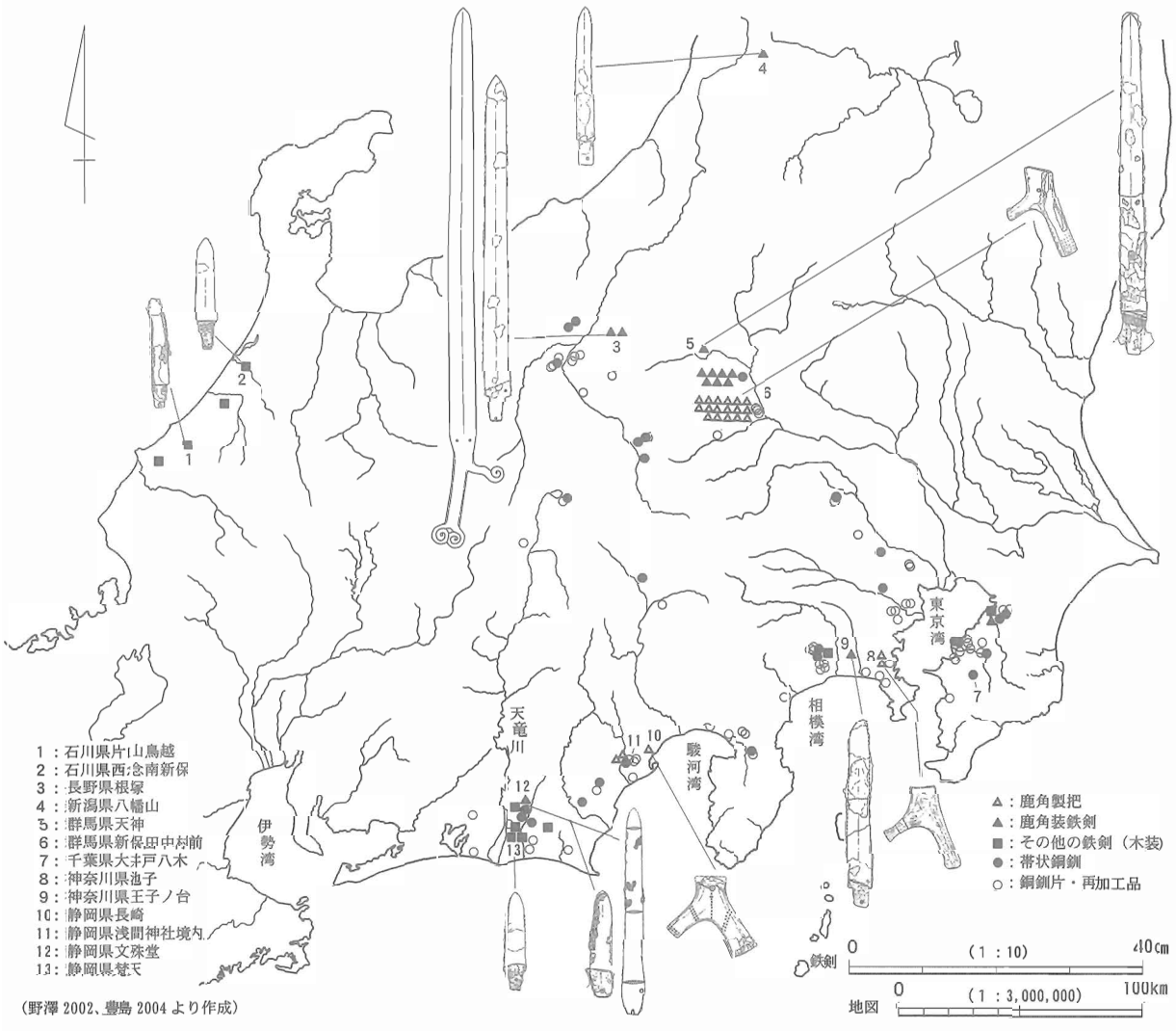
第191図　主な副葬品の出土

(2)副葬品にみる地域性

帯状銅釧の分布と類例　円田丘陵で出土している弥生時代の銅釧（帯状銅釧）については、中部高地・北関東および天竜川～利根川の太平洋側に分布が偏ることから、東日本の金属製釧の一つとして評価されている（野澤2002、池田2003、北條2005）。さらに、中部高地と太平洋側とでは断面形態が異なるといった、分布圏内での地域性についても指摘されている（池田2003）。

文殊堂遺跡の出土銅釧は、細身で薄く、全体的に丁寧に磨くという太平洋側の特徴に合致する断面形状を呈する。ただし、劣化・欠損のために全周していたか判断できず、鋳造品ではない可能性もある。なお、内面に観察できる繊維状の痕跡については、帯状銅釧と同様に東日本に特徴的であるといわれている鉄釧に類例がある。本例を含めて繊維の実体を明らにすることはできていないが、南関東の資料に集中している点が指摘されている（北区教育委員会1998、岩本崇2002）。

鉄剣にみる地域的傾向　弥生時代の鉄剣については、北九州・中国地方・北近畿といった西日本や北陸などに多く分布するが、東日本である中部高地や東海東部～南関東にも分布圏が認められている。ただし、鉄剣自体について、積極的に東日本での生産を評価することはできない。舶載品を中心に西日本から日本海側・信濃などを経て、関東地方などに移入した可能性が指摘されている。その一方で、鹿角製把は東日本に分布が限られることから、東日本の地域性（生産・流通）を示すものとして評価されて



第192図　帯状銅釧と鉄剣の分布（主に弥生時代後期）

いる（野島2002、豊島2003・2004）。

ＭＣ群出土の鉄剣は、鹿角製把の最西出土例となる。一方、ＭＩ群出土鉄剣や、同じ中・東遠江の磐田市梵天遺跡出土鉄剣２点（磐田市教育委員会2003）などは、木製把であった可能性が高い（註６）。太平洋側である天竜川～東京湾岸の諸地域では、鹿角製把と木製把の双方の分布が認められており（豊島2004、第192図）、円田丘陵の出土鉄剣についても、このような両者が混在する特徴が示されていると評価することができる。

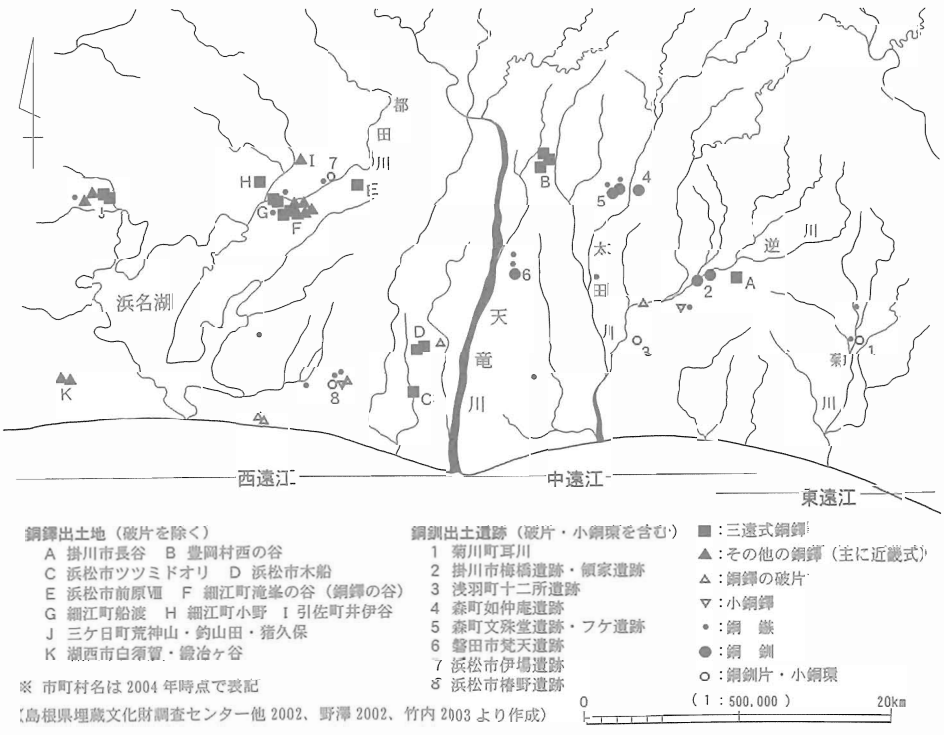
水晶製算盤玉の出土　出土玉類の中で最も特異的なものは水晶製算盤玉である。弥生時代の水晶製玉類は西日本から日本海側に多く、北近畿や山陰では生産についても明らかにされている（河村1986、十菱1997）。一方、東日本では長野県岡谷市天王垣外遺跡（長野県1988）や千葉県君津市大井戸八木遺跡（君津郡市文化財センター1991）、静岡県では本遺跡や静岡市浅間神社境内遺跡（註７）で少数出土している程度である。銅釧などのように地域性を示すかは判断し難いが、交流の存在は想定できる。

銅釧・鉄剣にみる地域性と交流　これまで述べてきたように、銅釧や鉄剣については、天竜川から東京湾岸に共通する地域性と、地域を越えた広域での交流の存在を認めることができる。

帯状銅釧の分布は明らかに東日本に限定されており、少なくとも、特定の者が死後に至るまで装着するという文化的要素については、天竜川・千曲川流域以東に特徴的な地域性を示すものであると評価できる。しかし、その素材については、鉛同位体比分析などで三遠式銅鐸と同じものが多いと指摘されており、天竜川以西に供給元がある可能性も指摘されている（野澤2002）。青銅器の鋳造技術に関しても、三遠式銅鐸分布圏の中心となる天竜川以西の地域が先進的であったと考えられる。

天竜川を境とした西遠江と中（東）遠江については、土器様式や金属器の分布などから、異なる文化圏として評価することができる。しかし、一部の土器に東西交流がうかがえるほか、西遠江にも銅釧片や銅環の出土があり、一方で中遠江にも埋納に至る銅鐸文化が入ってきているなど、交流においては決して排他的であったとはいえない（中嶋1991、鈴木敏1997、田村2002、第193図）。以上から、中遠江の地域は、西側地域との交流も機能させながら、それとは異なる地域性・文化のなかに融合させていく地域であったと評価したい。

鉄剣については、鹿角製把の装着などといった東日本的な地域性を反映した加工が認められる一方、剣身自体に関しては、より広域の流通によってもたらされた可能性が高いと判断されている。ただし、西遠江や伊勢湾周辺では、弥生時代の鉄剣の出土がほとんどない。鉄剣については、青銅器のように東海地方で生産した



（島根県埋蔵文化財調査センター他 2002、野澤 2002、竹内 2003 より作成）

第193図　遠江における弥生青銅器の分布

とする可能性を評価することは難しい。したがって、青銅器と同様の経緯でもたらされたとは考えられず、既に指摘されているとおり、日本海側・中部高地を経由する流入ルートが想定される（野島2003、豊島2004）。そして、この鉄剣の流通に伴う交流が、天竜川以西にはない天竜川以東に特有の地域性と関連している可能性が考慮される。

玉類・金属器副葬にみる地域性　先述した副葬品の種類と埋葬施設との関係についても、円田丘陵に限ったことではなく、地域を越えた交流や地域性との関連を指摘することができる。

玉類の出土は金属器に比べると多く、ガラス玉の普遍化は東日本に共通するとされている（田口2002）。また、埋葬施設の規模と副葬品の有無・内容が対応するとは限らず（田口2002、野島2002）、副葬品が必ずしも中心埋葬に集中するわけではないという指摘もなされている（大庭1999）。金属器の副葬については、玉類を副葬する被葬者よりも特定された優位な社会的位置・性格が推測されている（北條2005）。これらの指摘は、円田丘陵に認められる様相と合致している。

さらに、鉄剣と銅釧が同一埋葬施設に伴わない点についても、中部高地・東海・関東の諸地域で認められている（田口2002、北條2004）。単に帯状銅釧や鉄剣が分布圏内で流通・便用されていたというだけではなく、その中の各地域に共通した集団的構造や観念があった可能性を指摘することができる。なお、山陰地方などでは、鉄製刀剣類の出土が四隅突出形墳丘墓よりも方形台状墓に偏ることが判明しており、鉄製武器の流通が地域を越えた方形台状墓を営む集団同士の連携によってなされた可能性が指摘されている（野島2002）。本遺跡における④ａの墓群と鉄剣副葬、もしくは主体的でない主軸方向と鉄剣副葬という相関が生み出された背景に、こうした指摘が関連してくる可能性も考慮される。

古墳時代への変化　このような鉄剣や銅釧といった副葬品も、弥生時代後期末～古墳時代前期（時期ⅲ）になると、円田丘陵からの出土が認められなくなる。

古墳時代になると、弥生時代のような鉄剣の地域性は認め難くなり、定型化した木製装具を備えた鉄剣（槍）や一部の鏃などといった新たな武器様式への変換が指摘されている（野島2003）。また、東日本に特徴的であった帯状銅釧や鉄釧の出土も認められなくなる。このように、地域性を帯びた金属器が認められなくなるのは、円田丘陵に限ったことではない。そこには、前方後円墳や三角縁神獣鏡などに顕著に表れる列島社会の統合化、権力の集中化といった古墳時代への社会的変革が影響していると推測される。また、他を超越する地域首長墳の出現の背景として、銅釧と鉄剣が同一者に伴わないなどといった観念も、古墳時代社会・文化の導入と同時に変質していった可能性が指摘できる。

本章の第１節で述べたとおり、この時期になると円田丘陵での墓群形成はＨＥ～Ｇ群に限られ、単数・少数の埋葬施設による周溝墓が形成されるという新たな展開を認めることができる。さらに、ＨＦ群（Ｈ３号周溝墓ｂ）では、葬送祭祀における古墳文化の影響も認めることができる。ただし、ＨＥ群や東隣の中屋敷遺跡（註２）には古墳時代前期の方形周溝墓があり、そこにＨＦ群のような葬送祭祀における変化を認めることはできない。墓群の形態や葬送祭祀においては、集団の環境・特質によって情報の入り方や受け方が異なるため、変化の仕方や進度に差異があったと想定される。一方、金属器副葬の激減は、より顕著に古墳時代への変化を示していると評価できる。古墳時代前夜には、三遠式銅鐸の文化が銅鐸埋納をもって終焉し、弥生時代の鉄剣流通の背景となっていた広域での交流も、比較的早い段階に変化したと考えられる。中遠江では、金属器の多くが対外交流の中でもたらされていたが故に、古墳時代への変化の影響がより強く副葬品に示されたと推測することができる。

以上のように、埋葬施設や供献土器・副葬品といった墓群に関わる諸属性の整理・検討をとおして、円田丘陵の弥生時代中期後葉から古墳時代前期に至る墓域の変遷について、また、墓域形成の背景となる集団の構造や特質、地域性や交流などについて示すことができたと考える。

第3節　結　語

今回の森町円田丘陵における調査をとおして、古墳時代中期以降の古墳群のほかに、古墳群が形成される前の墓域についての成果も得ることができた。とくに、広い範囲を調査することができたこと、そして多くの遺構・遺物が発見されたことによって、墓域全体の様相から営む集団の構造・性質にまでせまることができる資料として評価することができる。

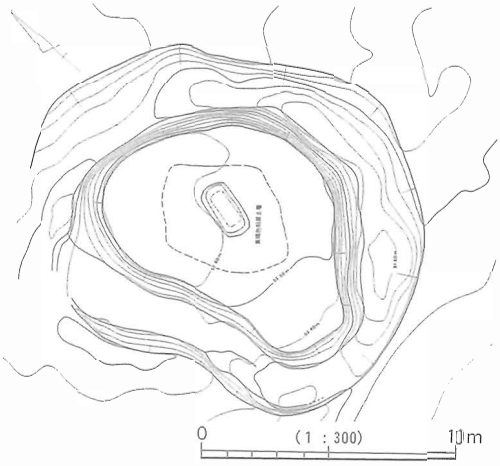
墓域形成の諸段階　この墓域は、様々な墓群によって構成されている。また、墓域全体の形成期間は弥生時代中期後葉～古墳時代前期前半にわたるが、その中でも、墓群によって該当する形成時期が異なっている。このような墓群間の差異を整理・検討すると、墓域形成には時期ⅰ・時期ⅱ・時期ⅲといった諸段階があり、それぞれに異なる墓群の展開を認めることができる。以下、この段階に沿って、多岐にわたる調査成果および課題の要点をあげておきたい。

時期ⅰにおける墓域・墓群の構成　時期ⅰにおいては、ほぼ全域に墓群の展開が認められる。しかし、土坑墓（木棺墓を含む）と土器棺墓が密集するような墓群は少ない。方形周溝墓の埋葬施設の数と配置については、中心に葬られた被葬者が造墓の契機となった者である点、単数の埋葬が基本であり、そこから派生して複数の埋葬のものが出現するといった点が指摘されている（大庭1999）。地域差・時期差もあるが、円田丘陵においても同様に、周溝墓は単数埋葬を基本としている可能性が指摘できる。

墓域における二分構造　前節では、主に土坑墓の主軸方向によって二分構造の存在とその評価を示したが、時期ⅰの墓域全体においても、方形周溝墓主体の北半部と不整円形周溝墓主体の南半部とに二分することができる。東海地方の周溝墓の圧倒的多数は方形であるが、一部に円形周溝墓の存在を認めることができる。とくに、時期ⅰに並行する浜松市瓦屋西遺跡の円形周溝墓群が注目されるが、県外では長野・群馬県や北陸地方で同様の時期の円形周溝墓がある（寺沢1990、小山1999、山下2001）。特定地域との関連性については本書では言及できず、さらなる検討を要するが、本墓域内の南北の違いについて、出自や環境・交流などにおける集団間の差異をうかがわせる様相として注目される。

時期ⅱにおける墓域の変化　時期ⅱになると、墓域の範囲が東寄りに狭くなり、周溝墓は方形に限られるようになる。また、各墓群においては多埋葬化・密集化が認められるようになる。土器棺の埋置姿勢や土坑墓における埋葬姿勢の変化、供献土器数の増加、土坑墓周辺における穿孔を伴う壺を用いた葬送祭祀の流行なども認められる可能性があるが、これらについては、時期ⅰから進行してきたものとして把握することができる。なお、鉄剣や銅釧の副葬も、多くはこの時期に該当する可能性が高い。

墓群内の集団構造　多埋葬が特徴的な時期ⅱの各墓群内において、土坑墓の主軸方向に二者があることから、集団の構造が墓群に反映している可能性を指摘した。さらに、主軸方向と副葬品（鉄剣と銅釧）との相関があることから、墓群形成や金属器流通を含む諸活動において役割・位置を異にした、半族や胞族といった集団内の二分構造を評価した。時期ⅰでは、墓域の南半部と北半部という異なるかたちで二分構造が把握されたが、この時期ⅰから時期ⅱへの変化について、二分される両者が同一地域内で混在・変質していく過程を表しているのかもしれない。



第194図　浜松市瓦屋西遺跡の円形周溝墓

鉄剣・銅釧の出土状況からは、二分構造とも関連する双方に伴う位置・役割が、同一者に与えられることがないという点を指摘した。さらに、この事象が広範囲に認められることから、中遠江を含む東日本もしくは列島の諸地域で、同様の集団構造や観念が共有されていた可能性を評価した。鉄剣・銅釧の双方に伴う異なる役割の具体的内容については、それぞれの用途・機能などから、鉄剣は活動の中で重要な役割を担って実力を発揮した者に伴い、銅釧は成人として活動する前から生涯にわたって特定の役割・位置が与えられた者に伴った可能性を指摘した。しかし、この点については推測の域を出ない。

交流の様相　銅釧と鉄剣は、ともに中部高地や関東・東海東部に分布が偏り、とくに天竜川～東京湾沿岸の太平洋側で、円田丘陵と共通した特徴を多く認めることができる。一方、双方はより広域な交流を背景としてもたらされた可能性が高いと考えられ、天竜川～東京湾沿岸の諸地域と地域性を同じくしながらも、鉄剣においては日本海側から信濃を経た流入、銅釧においては天竜川以西（西遠江など）との交流も欠かせなかったと推測した。

時期 iii の変化と古墳文化の影響　時期 iii になると、多埋葬の墓群は形成されなくなり、新たに形成される単数埋葬のＨ２号周溝墓ｂとＨ３号周溝墓ｂだけになる。Ｈ３号周溝墓ｂにおいては、焼成前底部穿孔の二重口縁壺を用いる葬送祭祀という古墳文化の影響を認めることができる。また、副葬品が認められなくなる点については、時期 ii で機能していた交流や広範囲に共有された観念などが消失・変質したことを示す事象として評価できるとした。墓群による差異も指摘できるが、いずれにしても、古墳時代への社会の変革が大きく影響していることに違いはない。

そして、この墓群（周溝墓）をもって円田丘陵における墓域形成は終焉を迎える。円田丘陵の墓域は、弥生時代中期後葉以来の地域色の強い社会と交流に基づいて形成されてきた墓域であり、それ故に、列島内に新たに広がる古墳時代社会においては継続されないものであったと評価することができる。

現地調査および本報告の作成にあたっては、以下の方々・機関に有益な御指導・御助言をいただきました。ここに記してお礼申し上げます。（敬称略、五十音順）

伊藤寿夫　伊藤美鈴　北島恵介　佐藤由紀男　柴田　稔　白澤　崇　鈴木一有　鈴木敏則
竹内直文　谷口安曇　豊島直博　西井　亨　平野吾郎　廣川達麻　松井一明　向坂鋼二
静岡市　森町教育委員会

註

1　弥生土器の時期について、本書では諸研究の成果を適用し、白岩式は中期後葉、菊川式古段階は後期前半、同中段階は後期中葉、同新段階は後期後半、同最新段階は後期末以降に概ね該当するものとして判断している。

2　中屋敷遺跡は、第二東名建設に伴って平成12年度に発掘調査されている。未報告ではあるが、調査時の所見から本文中にあるとおり方形周溝が検出され、古墳時代前期の土器が出土している（静岡県埋蔵文化財調査研究所2001・2004）。

3　本文では中橋・永井1989bを参考にして、概ね１歳以下の者を乳児、５歳程度までの者を幼児、その後の成長期にある者を子供（小児～若年）、成長期を経て一人前の集団構成員となった者を成人（成年～老年）と称することとする。

4　縄文時代後期から古墳時代前中期における埋葬姿勢については、福永伸哉によって詳細に分析されている（福永1990）。埋葬施設の長さは、主に腰と膝の屈曲度が反映されると考えられるが、とくに弥生時代においては膝の屈曲度の変遷が目立つ。本文では、縄文時代にも認められる膝屈曲度（＝膝の内角）90度以下を強い屈曲とする。

5　静岡県の土器棺墓について、一部に古い葬法を残した再葬墓が含まれている可能性も指摘されている（大林2004など）が、概ね乳幼児が埋葬されたものとして考えられている。本遺跡群において、再葬墓であると積極的に評価できる根拠はない。

6　出土鉄剣については、豊島直博氏（奈良文化財研究所）より多くのご教示をいただいた。

7　静岡市浅間神社境内遺跡の水晶製算盤玉については、伊藤寿夫氏（静岡市）よりご教示いただいた。

参考文献

池田　治　2003　「帯状円環型銅釧の形態分類と地域色について」　研究紀要『かながわの考古学』８　かながわ考古財団

磐田市教育委員会　1982　『新豊院山墳墓群』

1992　『竹之内１号墓遺跡』

2003　『県道浜松袋井線緊急地方道道路改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』

岩本　貴　1995　「菊川式土器における編年上の問題」　『財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所設立10周年記念論文集』

岩本　崇　2002　「東日本における弥生時代鉄釧の製作背景」　『古代文化』54-5

大賀克彦　2001　「弥生時代における管玉の流通」　『考古学雑誌』86-4

大庭重信　1999　「方形周溝墓制からみた畿内弥生時代中期の階層構造」　大阪大学考古学研究室10周年記念論文集『国家形成期の考古学』

大林　元　2004　「静岡県弥生時代の土器棺墓小考」　『財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所20周年論文集』

大村　直　1986　「鉄鏃」　『弥生文化の研究』９　雄山閣

掛川市史編さん委員会　1997　『掛川市史』上巻

河村好光　1986　「玉生産の展開と流通」　『岩波講座　日本考古学』３　岩波書店

北区教育委員会　1998　『七社神社前遺跡Ⅱ』

君津郡市文化財センター　1991　『年報』９

後藤　明　2000　「移民」　『用語解説　現代考古学の方法と理論Ⅱ』　同成社

小山岳夫　1999　「弥生時代の円形周溝墓－弥生時代後期に長野県千曲川流域を中心に流行した円形周溝墓出現の意味－」　『信濃』51-10

斎藤　忠　1998　『日本考古学用語辞典』　学生社

佐藤由紀男　1996　「遠江・駿河（中期）」　『ＹＡＹ！』　弥生土器を語る会

佐藤由紀男・萩野谷正宏・篠原和大　2002　「遠江・駿河地域」　『弥生土器の様式と編年　東海編』　木耳社

沢田むつ代　2005　「出土繊維の観察法」　『季刊考古学』91

2005　「出土繊維の記録法」　『季刊考古学』91

重松辰治　2005　「弥生時代後半期における墓域出土土器の性格」　都出比呂志先生退官記念『待兼山考古学論集』

静岡県考古学会　2002　『静岡県における弥生時代集落の変遷』

静岡県埋蔵文化財調査研究所　2001　『年報』17

2004　『森町睦実の遺跡』

静岡市教育委員会　1977　『駿河千代遺跡』

1992　『国指定史跡　賤機山古墳　平成３年度保存整備事業発掘調査概報』

島根県埋蔵文化財調査センター他　2002　『青銅器埋納地調査報告書Ⅰ（銅鐸編）』

鈴木一有　2002　「古墳時代前期にかんする諸問題」　『恒武西宮遺跡』　浜松市文化協会

鈴木敏則　1996　「遠江・駿河（後期）」　『ＹＡＹ！』　弥生土器を語る会

1997　「東海地方の弥生銅鏃」　伊達先生古稀記念論集『考古学論叢』

2002　「西遠江の古式土師器－堤町様式」　平野吾郎先生還暦記念論文集『東海の路』

松井一明　1995　「古墳時代前半期土器」　『坂尻遺跡－遺物・総括編－』　袋井市教育委員会

1998　「静岡県における方形周溝墓の埋葬主体部について－木棺を中心として－」　『静岡県考古学研究』30

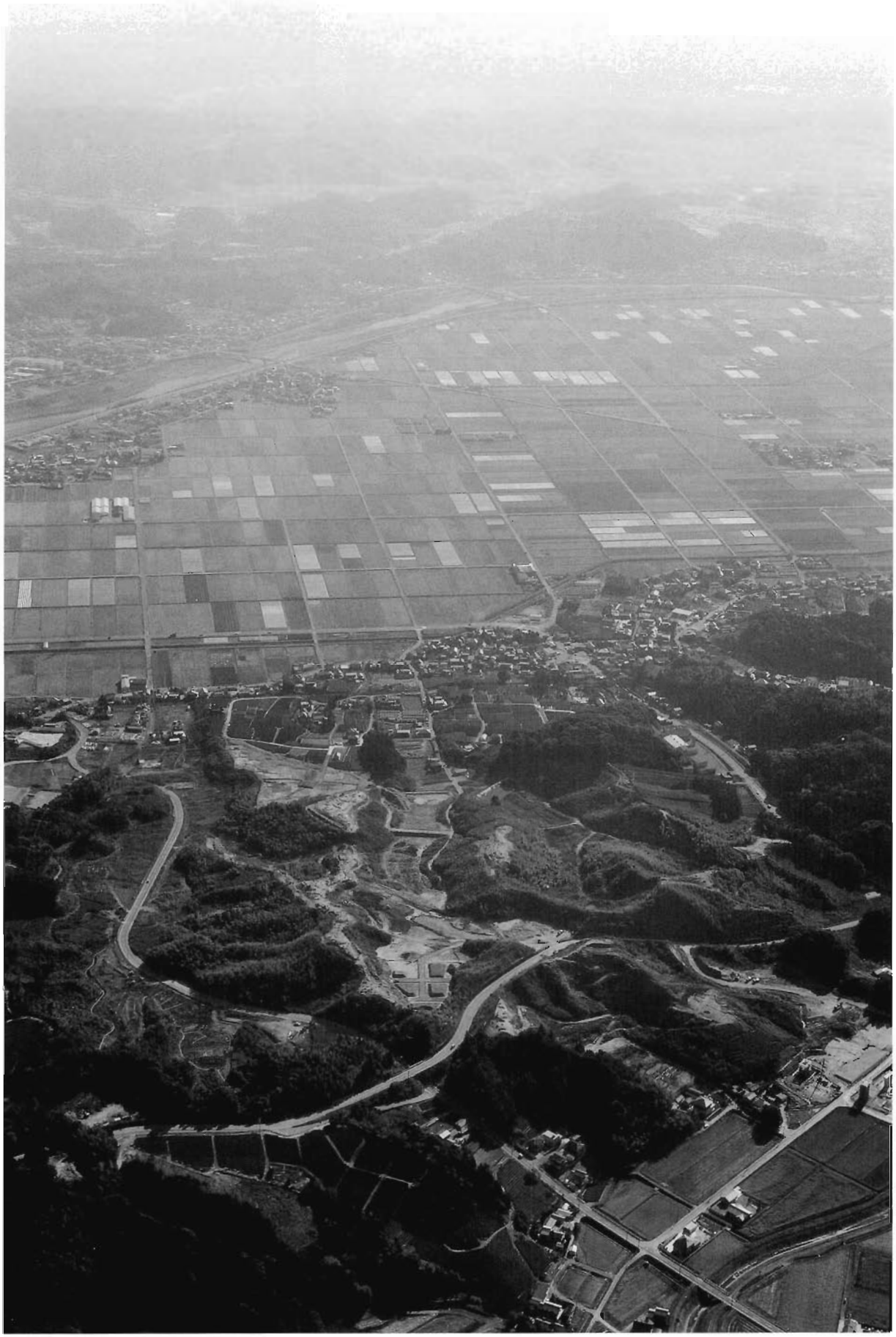
1995　「弥生時代の石鏃について（上）」　『弥生文化博物館研究報告』４

2004　「小銅鐸と銅鐸祭祀」　『季刊考古学』86

竹内直文　2003　「弥生時代の遺構と遺物」　『県道浜松袋井線緊急地方道道路改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』

磐田市教育委員会
田口一郎　2002　「金属器・玉類副葬の北関東弥生墳墓」　『考古学ジャーナル』491
田中勝弘　1986　「銅鏃」　『弥生文化の研究』9　雄山閣
田中良之　1998　「出自表示論批判」　『日本考古学』5
田村　隆　1999　「構造主義」　『用語解説　現代考古学の方法と理論Ⅰ』　同成社
田村隆太郎　2002　「敷地１・２号銅鐸埋納方法の復元」　『研究紀要』9　財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
寺沢　薫　1990　「弥生時代の円丘墓」　『古代学研究』123
十菱駿武　1997　「水晶」　『考古学による日本歴史』9　雄山閣
豊島直博　2003　「弥生時代の鹿角製鉄剣」　『東国史論』18
2004　「弥生時代における鉄剣の流通と把の地域性」　『考古学雑誌』88-2
永井善博　1998　「団子塚遺跡の土器棺－中遠地方出土の土器棺集成－」　『静岡県考古学研究』30
中嶋郁夫　1988　「いわゆる「菊川式」と「飯田式」の再検討」　『転機』2
1991　「東遠江における後期弥生土器編年と土器移動」　東海埋蔵文化財研究会『東海系土器の移動から見た東日本の後期弥生土器』
1997　「東海東部の古式土師器」　『静岡県史研究』13
長野県　1988　『長野県史』考古資料編　遺構・遺物
中橋孝博・永井昌文　1989a　「形質」　『弥生文化の研究』1　雄山閣
1989b　「寿命」　『弥生文化の研究』1　雄山閣
中村大介・秋山浩三　2004　「方形周溝墓研究と近畿弥生社会復原への展望」　『瓜生堂遺跡１』　大阪府文化財センター
西澤正晴　2000　「銅釧に関する若干の考察」　『落合西遺跡』　島田市教育委員会
野澤誠一　2002　「銅釧・鉄釧からみた東日本の弥生社会」　『研究紀要』8　長野県立歴史館
野島　永　2002　「弥生時代の鉄器副葬をめぐって」　『考古学ジャーナル』491
2003　「弥生時代後期から古墳時代初頭における鉄製武器をめぐって」　『古代武器研究』4
北條芳隆　2005　「螺旋状鉄釧と帯状銅釧」　都出比呂志先生退官記念『待兼山考古学論集』
萩野谷正宏　2000　「「白岩式土器」の再検討」　『転機』7
浜松市教育委員会　1991　『瓦屋西古墳群』
廣川達麻　2004　「フケ遺跡出土の銅釧について」　『フケ遺跡』　森町教育委員会
深澤芳樹　1996　「墓に土器を供えるという行為について（上）」　『京都府埋蔵文化財情報』61
1996　「墓に土器を供えるという行為について（下）」　『京都府埋蔵文化財情報』62
福永伸哉　1985　「弥生時代の木棺墓と社会」　『考古学研究』32-1
1990　「原始古代埋葬姿勢の研究－近畿地方を中心に－」　『日本古代葬制の考古学的研究』　大阪大学考古学研究室
袋井市教育委員会　1996　『高尾向山遺跡Ⅱ』
2004　『愛野向山Ⅱ遺跡』
向坂鋼二　1990　「静岡県下の土器棺」　『静岡県博物館協会研究紀要』13
森町史編さん委員会　1998　『森町史』資料編一　考古
森町教育委員会　1996　『森町飯田の遺跡』
森町教育委員会　1998　『奥谷田Ⅰ・Ⅱ遺跡』
森町教育委員会　1988　『善千鳥遺跡確認調査報告書』
森町教育委員会　2004　『フケ遺跡』
山下誠一　2001　「飯田盆地における周溝墓の動向－弥生時代から古墳時代における墓制の一様相－」　『研究紀要』11　飯田市美術博物館

写真図版



遺跡群遠景（北から）

図版２　文殊堂遺跡

1　遺跡群全景（南東から）

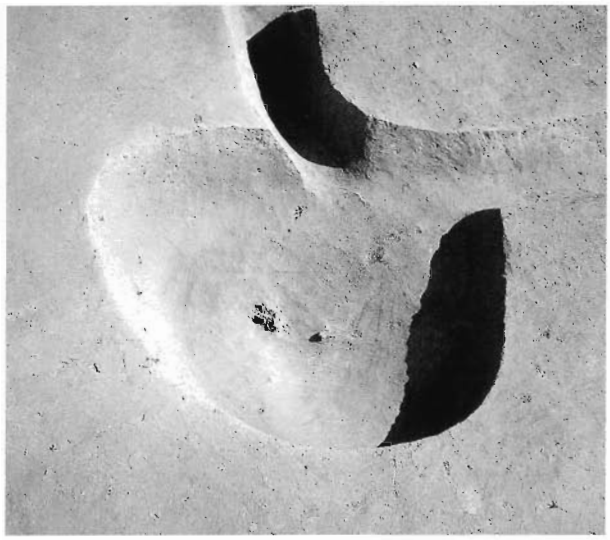
2　文殊堂遺跡全景（東から）

1　1区全景（南東から）

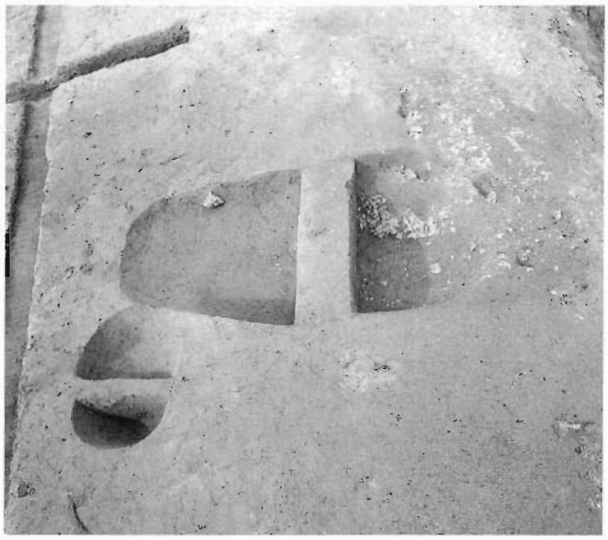
2　SF10（南から）

3　SF11（西から）

図版 4　文殊堂遺跡

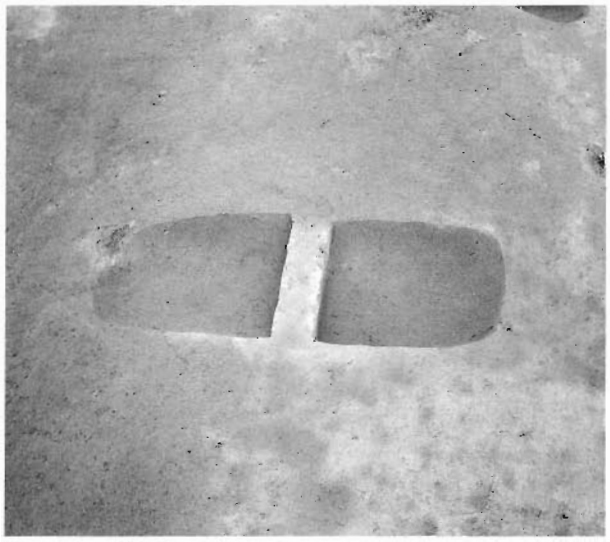


1　SF12（南西から）



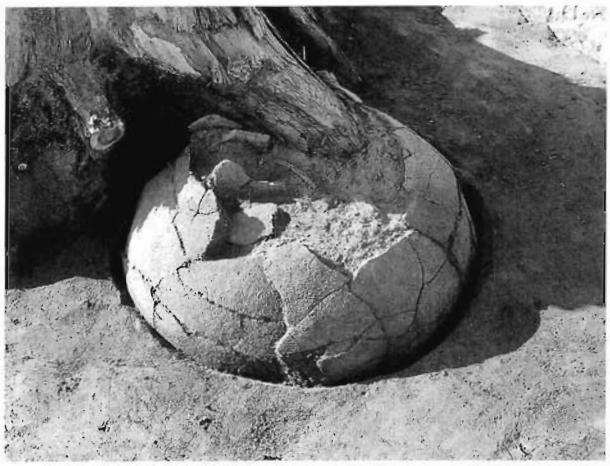
2　SF01・SF02（南東から）

3　SF04～SF06（西から）

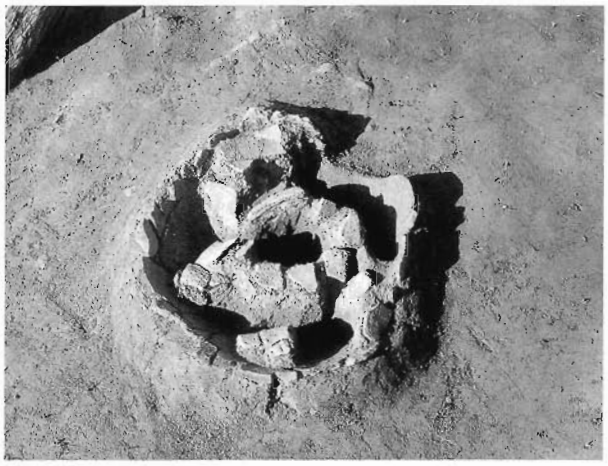


4　SF03（西から）

5　SF07（南東から）



1　SF08土器棺墓（北東から）



2　SF09土器棺墓（南東から）

3　B群：１号周溝墓（南西から）

4　SF13土器出土状況（南西から）

5　SD02土器出土状況（北から）

図版 6　文殊堂遺跡

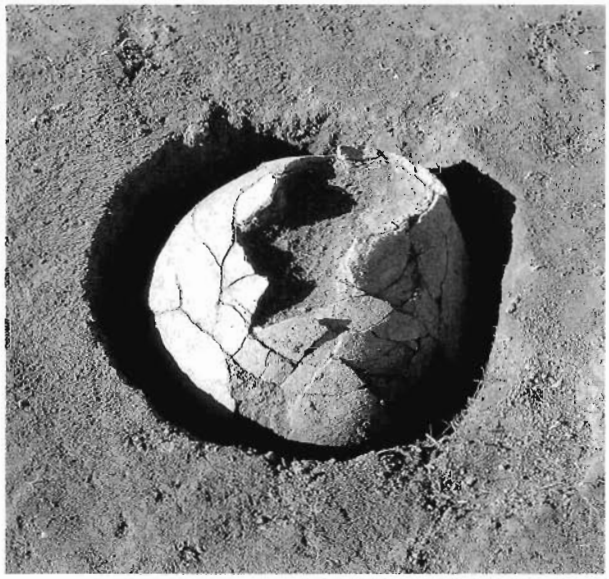
1　SF13（南から）

2　SF14（東から）

3　SF15（西から）

4　SF16（南から）

5　SF17（南西から）



6　SF18土器棺墓（東から）

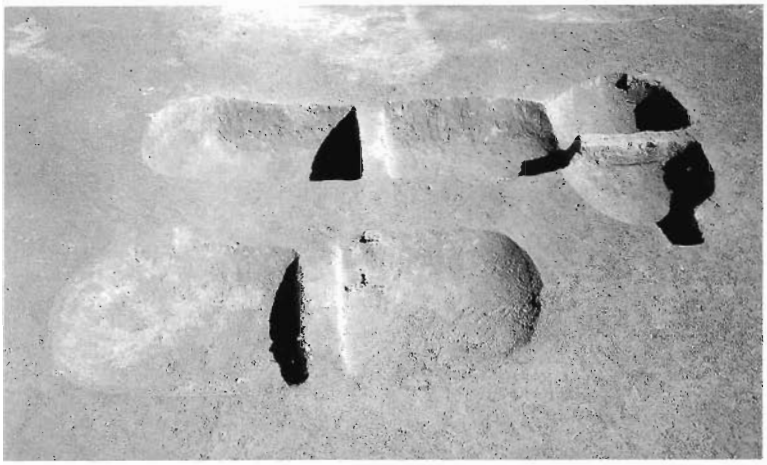
1　C群：2号周溝墓（西から）

2　SD03土器出土状況 1 （東から）

3　SD03土器出土状況 2 （南から）

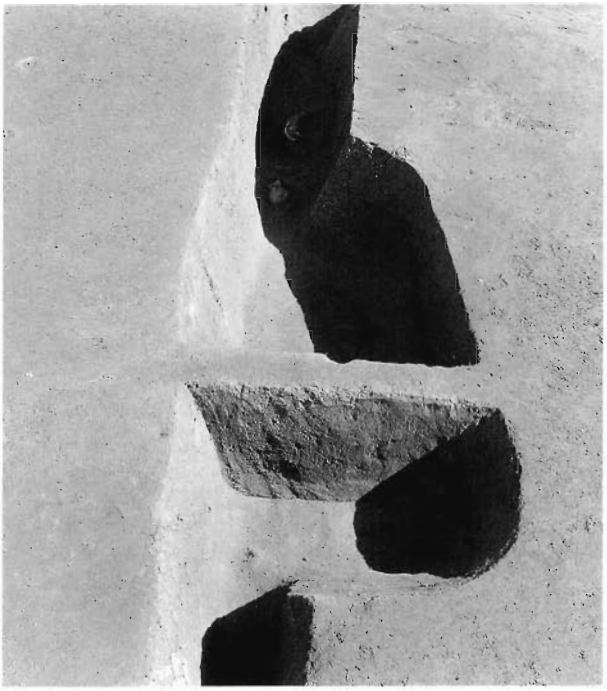
4　SF23土器出土状況（北から）

図版 8　文殊堂遺跡

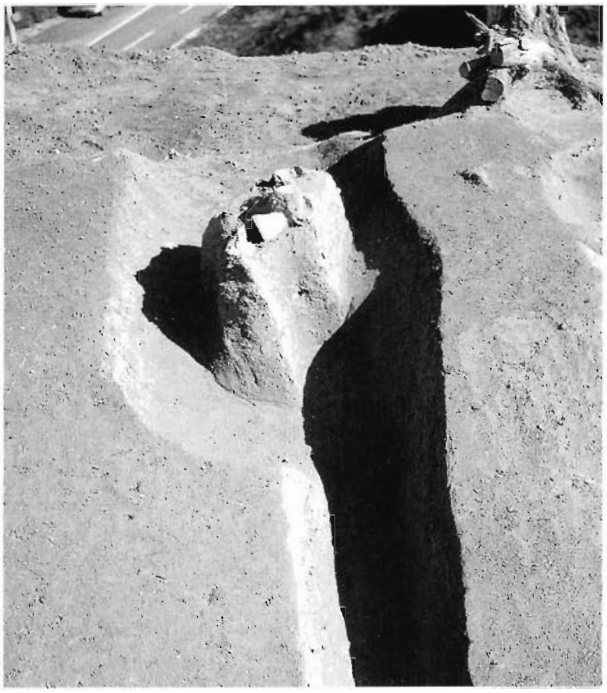


1　SF20～SF22（南西から）

2　SF23鉄剣出土状況（西から）



3　SF19（南西から）



4　SF23（南西から）

5　SF24（南西から）

6　SF25（北から）

1　1・2区全景（南から）

2　D群（南から)

3　SF26（南から）

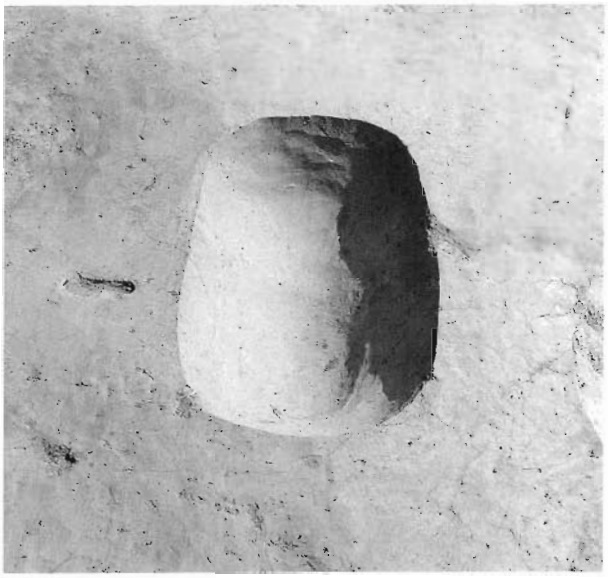
4　SF27・SF28（南から)

5　SF30（南西から）

図版10　文殊堂遺跡

1　F群（北から）

2　G群（北から）



1　SF31（北西から）

2　SF32（北西から）

3　SF33・SX01（北から）

4　SF34（南から）

5　SF35（南西から）

6　SF37～SF39（南西から）

図版12　文殊堂遺跡

1　SF40（北から）

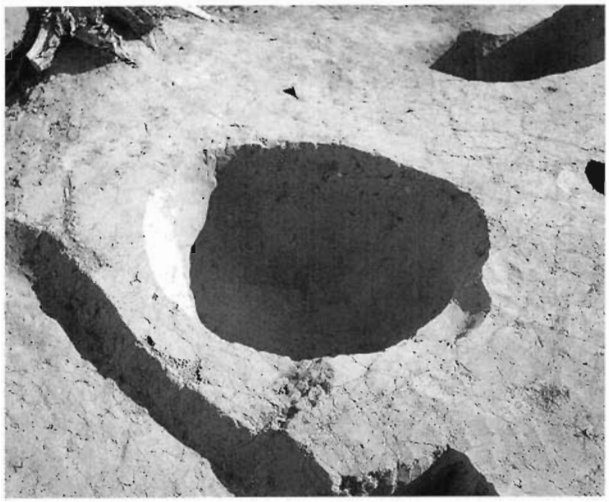
2　SF41（南西から）

3　SF43（西から）

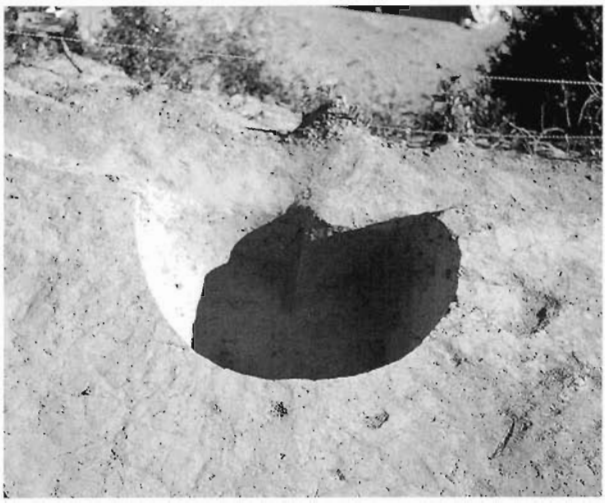
4　SF42（南西から）

5　SF44（北西から）

6　SF45・SF46（北東から）

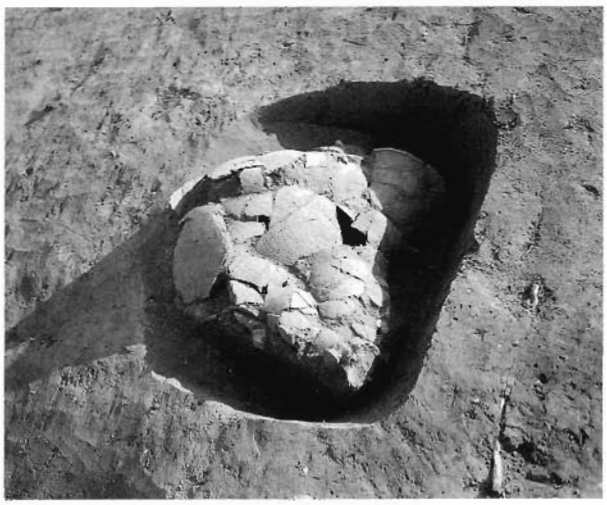


1　SF47（北西から）



2　SF48（北西から）

3　SF49土器棺墓（北西から）



4　SF50土器棺墓（北から）

5　SF51・SF52土器棺墓（北西から）

図版14　文殊堂遺跡

1　H・I・J群（南西から）

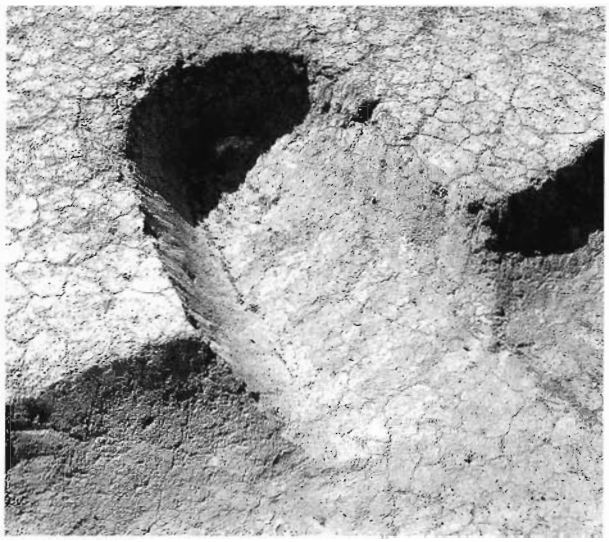
2　I群：3号周溝墓（北西から）

1　H・I・J群（北西から）

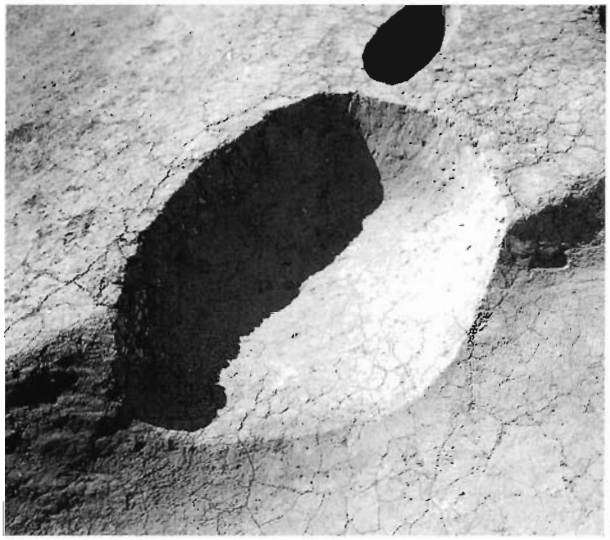
2　I群：3号周溝墓（西から）

図版16　文殊堂遺跡

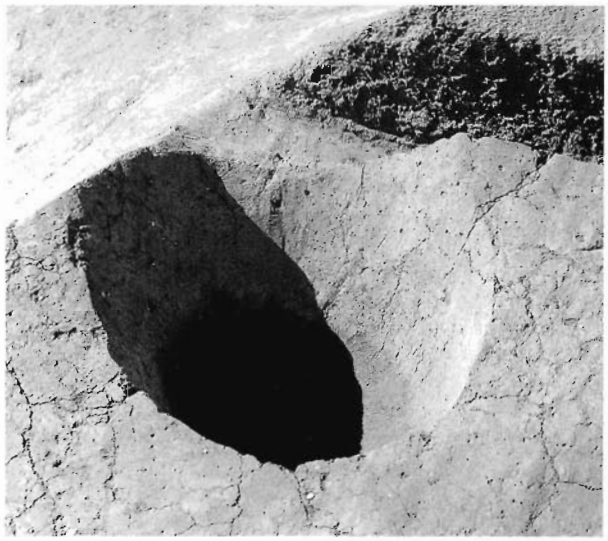
1　SF54（南東から）



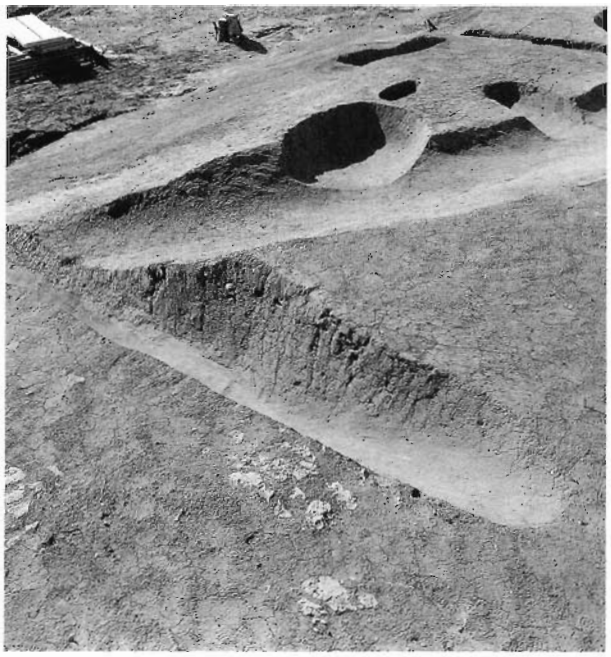
2　SF55（東から）



3　SF56（南東から）



4　SP04（南東から）



5　SD08（南東から）

6　SF57・SF58（南東から）

1　SD09（南東から）

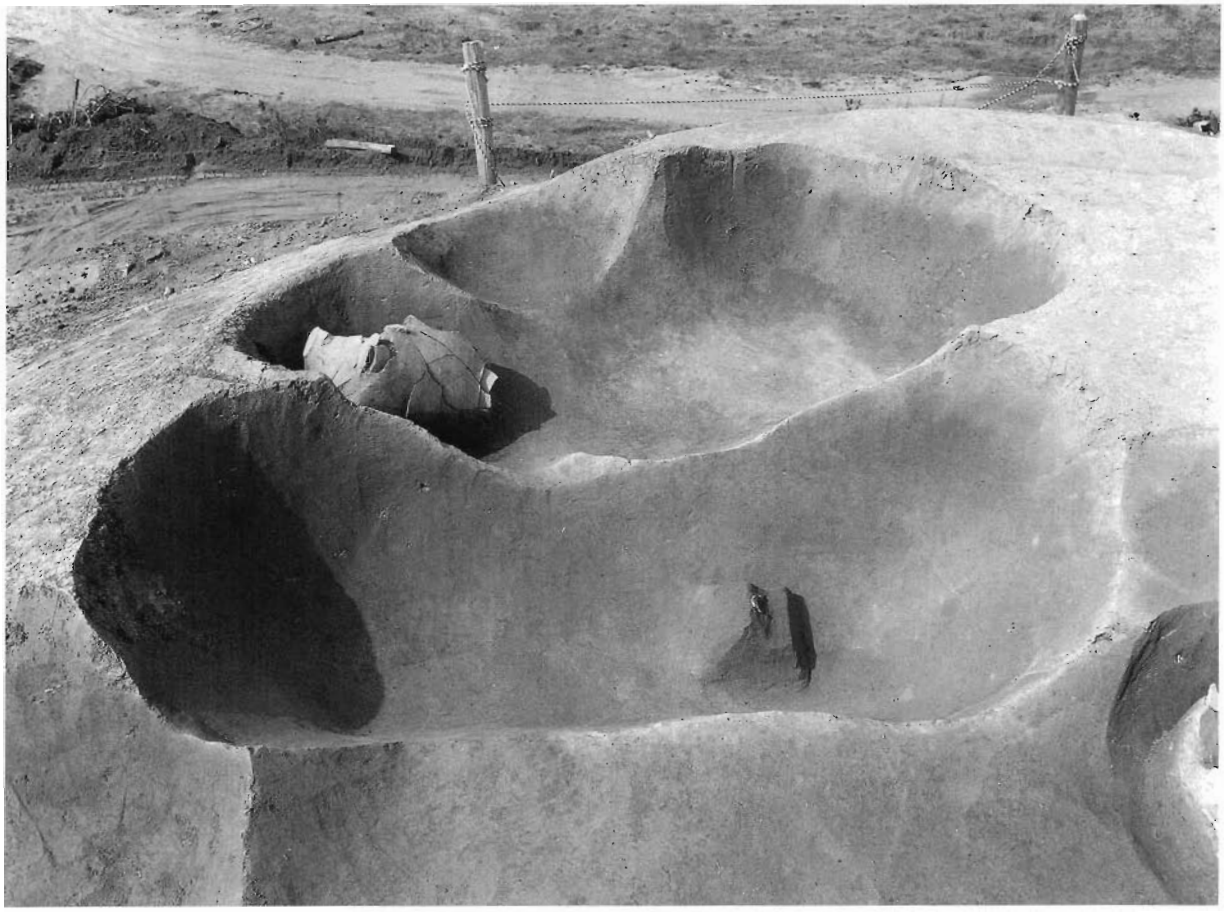
2　SD09土器出土状況（東から）

3　SF62～SF64（東から）

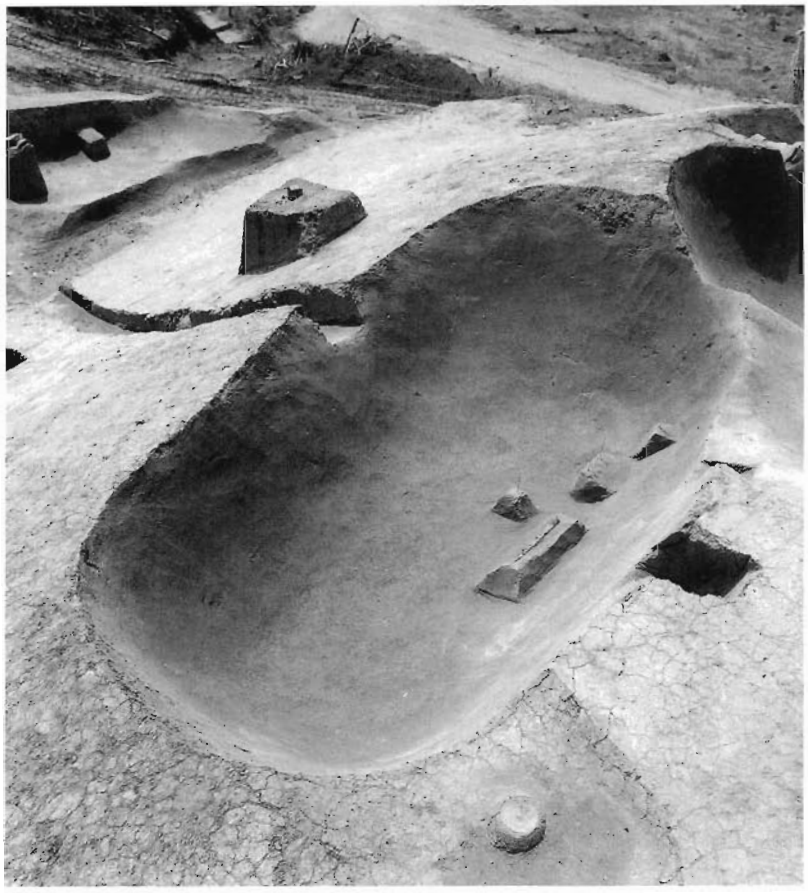
4　SF60・SF61（西から）

5　SF65（北から）

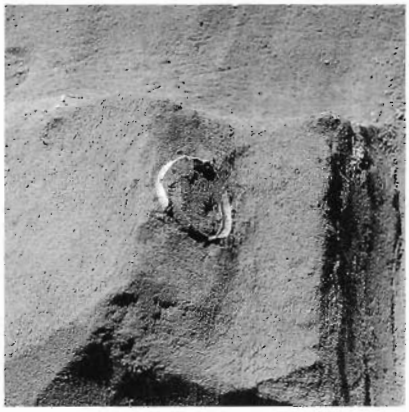
図版18　文殊堂遺跡



1　SF66・SF67（北東から）

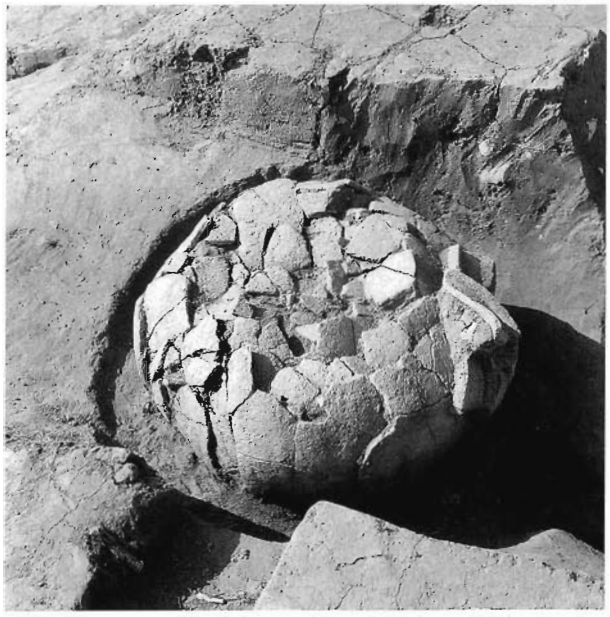


2　SF70（北東から）

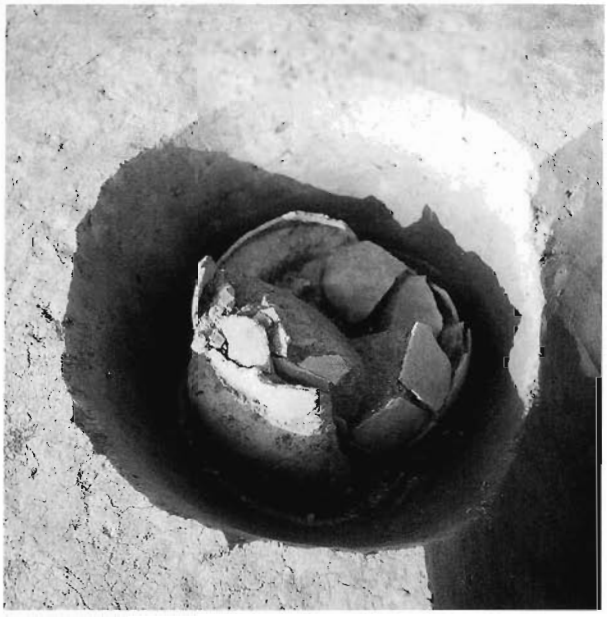


3　SF66銅釧出土状況（北東から）

4　SF70鉄剣出土状況（東から）



1　SF59土器棺墓（南東から）



2　SF71土器棺墓（南西から）

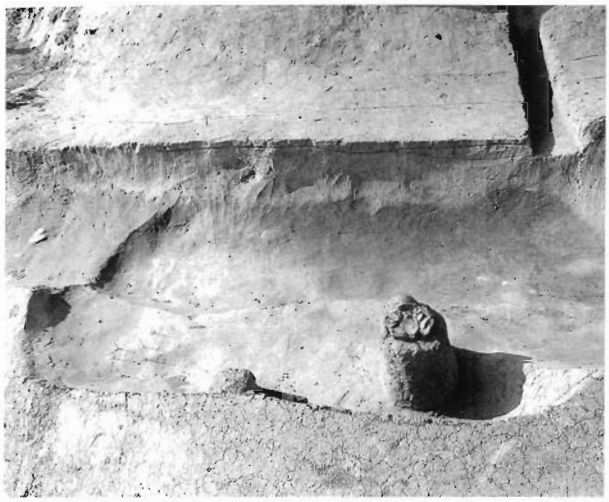
3　SF72土器棺墓（南から）

4　SF73土器棺墓（北東から）

5　SF77・SD10・SD11（北東から）

6　SF77土器出土状況（北から）

図版20　文殊堂遺跡



1 SF77（南から）

2　SF80（南から）

3 SF78（西から）

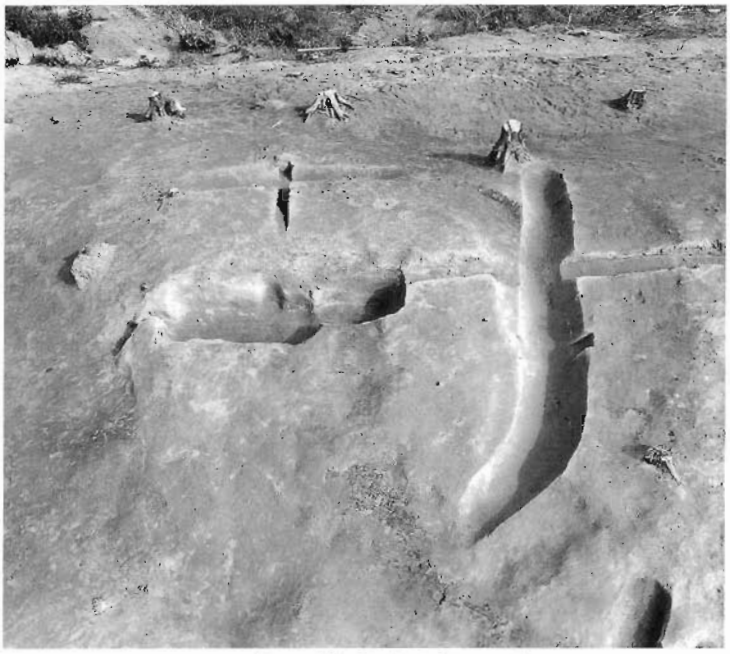
4 SF79（南から）

5　J群：4号周溝墓（南西から）

1　3区全景（北西から）

2　K・L群：5・6号周溝墓（北西から）

図版22　文殊堂遺跡



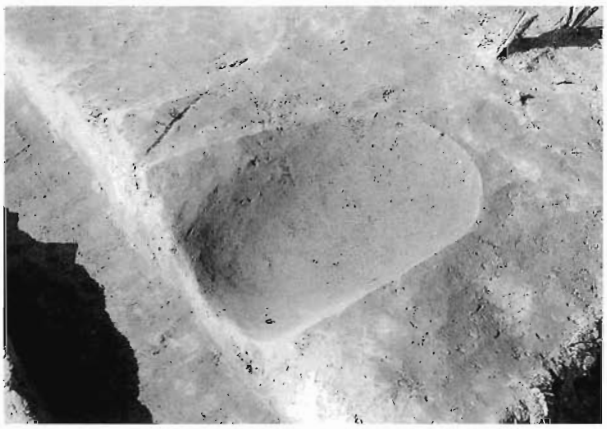
1　K群：5号周溝墓（南西から）

2　SF82・SF83（北西から）

3　L群：6号周溝墓（南西から）

4　SF84（北東から）

5　SF88（南東から）



6　SF89（南東から）

1　SF85土器棺墓（南東から）

2　SF86土器棺墓（西から）

3　SF87土器棺墓（北から）

4　SF91土器棺墓（南から）

5　SF87土器棺墓（南から）

6　SF92土器棺墓（西から）

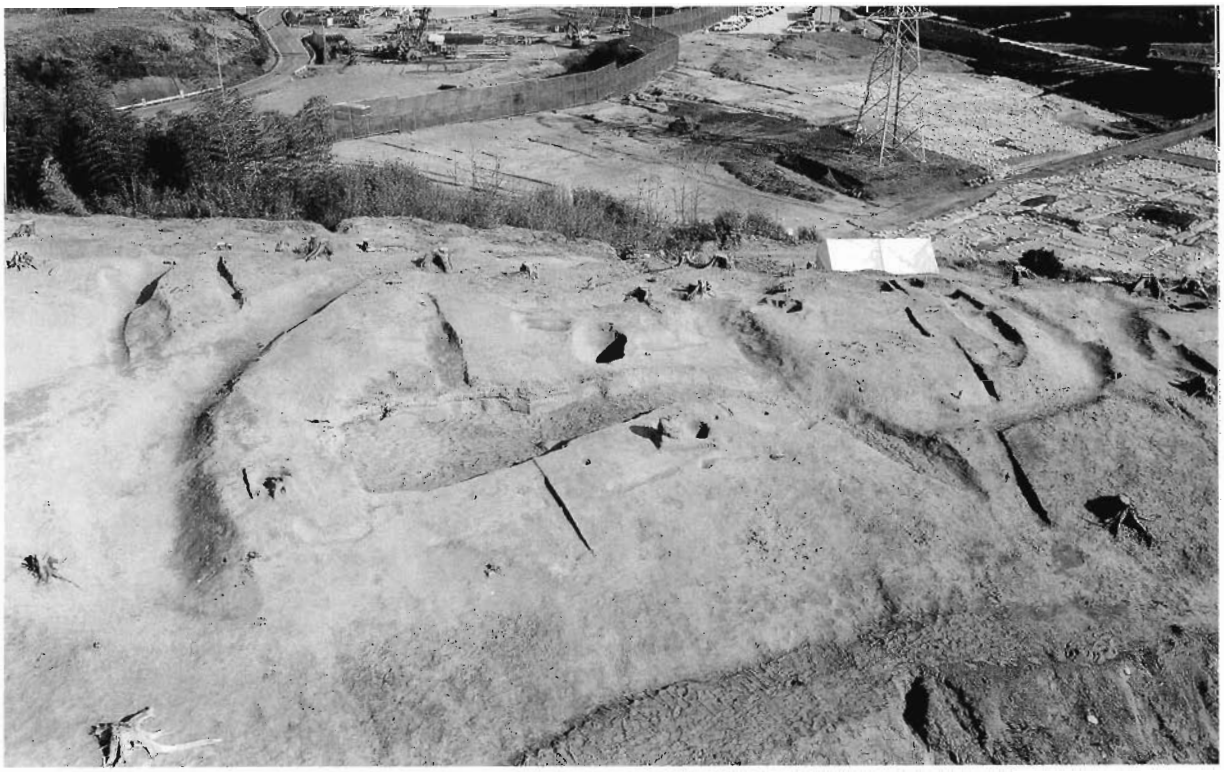
図版24　文殊堂遺跡

1　N群（西から）

2　SF97（南西から）

3　SF94（南から）

4　SF96（北西から）

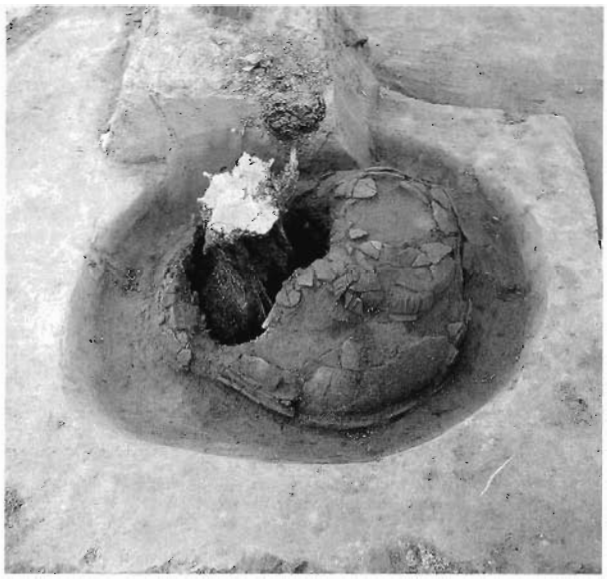


5　O群：7号周溝墓（北西から）

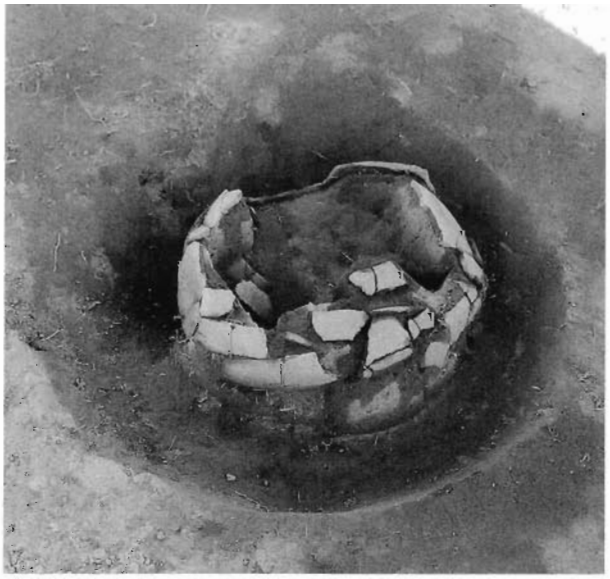
1 SF102（西から）

2　SF103（北から）

3　SF107（南西から）



4　SF104土器棺墓（東から）



5 SF105土器棺墓（北から）

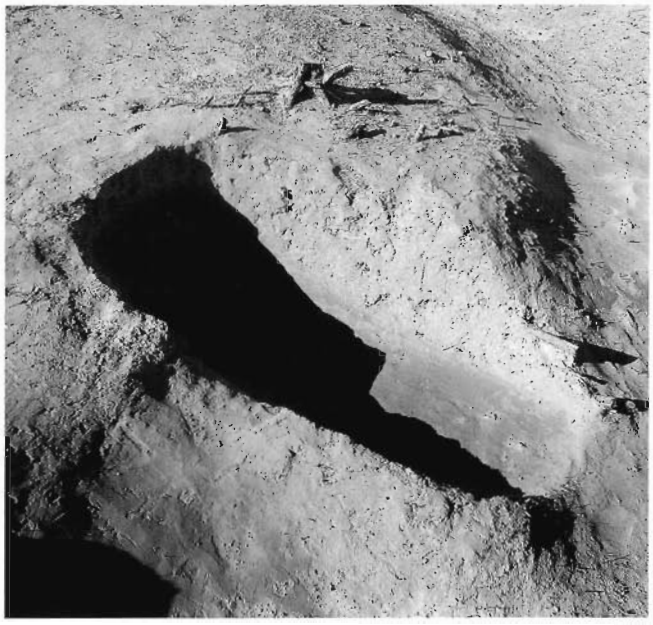
6 SF106土器棺墓（北西から）

図版26　文殊堂遺跡

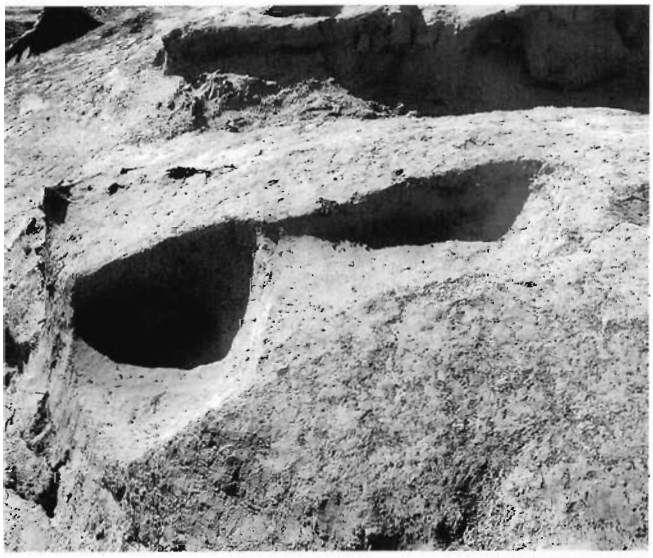
1　Q群（北西から）

2　R群：8号周溝墓（北西から）

1 SF111（西から）



2 SF112（南東から）



3 SF109・SF110（東から）

4 SF113（北西から）

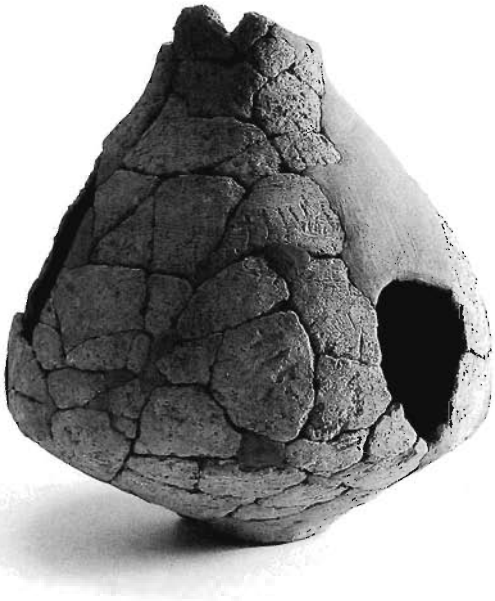
5 SF115土器棺墓（北東から）

6 SF116土器棺墓（北から）

図版28　文殊堂遺跡

1　2

4



19

9　10　5

14

20

15

23　16

出土土器1

24

25

29

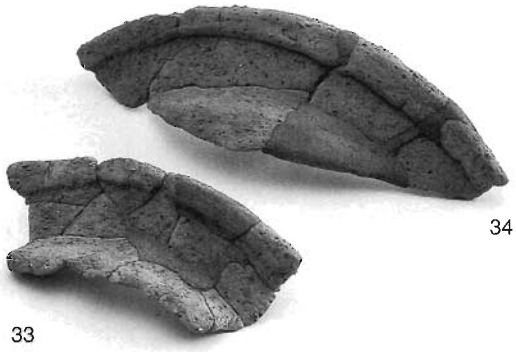
28

26

30

出土土器2

図版30　文殊堂遺跡



34

33

35

40

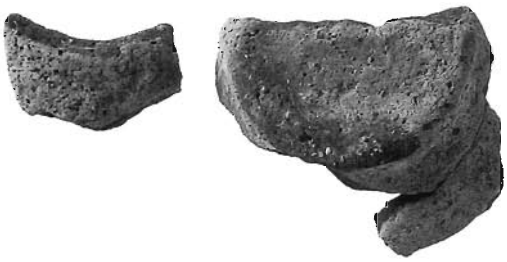
44

36

32

46

出土土器3



47

45

49

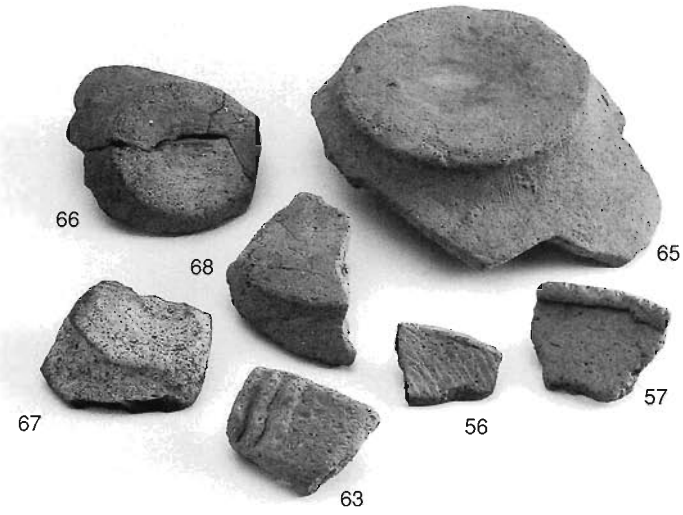
48

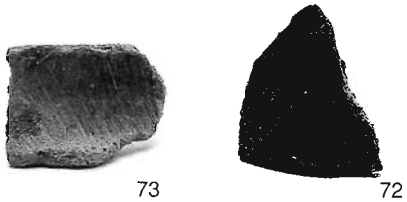
50

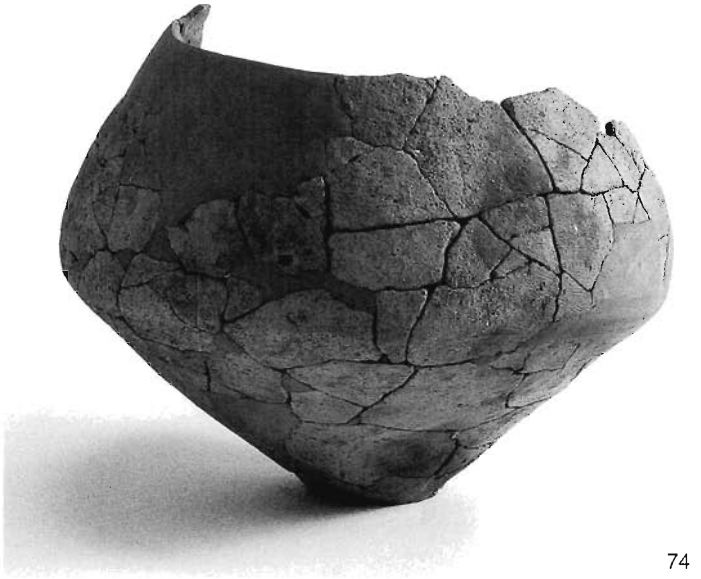
55

出土土器4

図版32　文殊堂遺跡



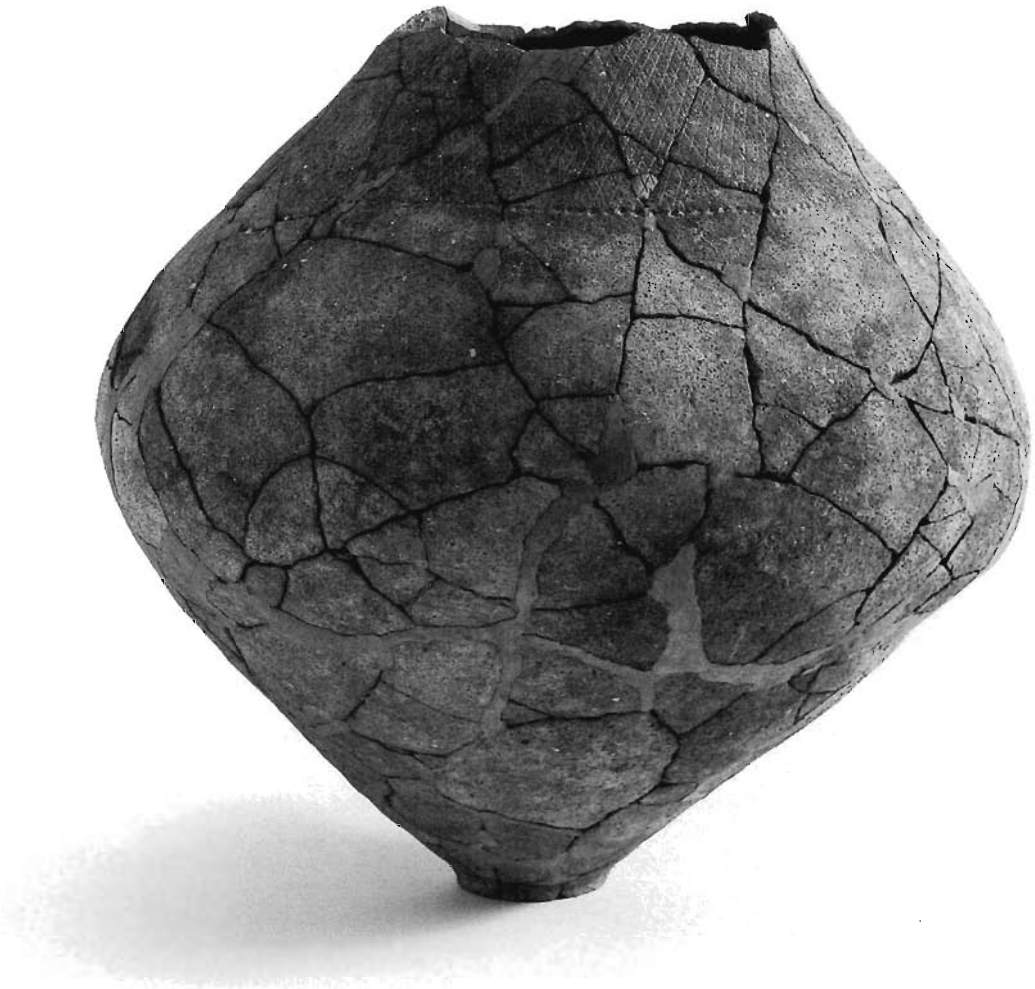




出土土器5

75

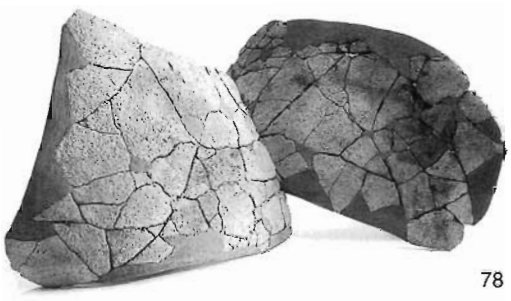
76



77

出土土器6

図版34　文殊堂遺跡



78

79

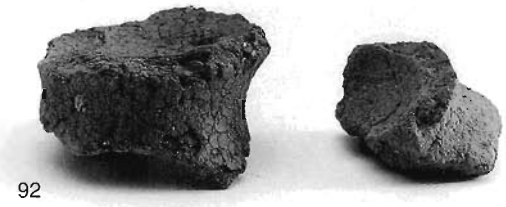
80

出土土器7

91

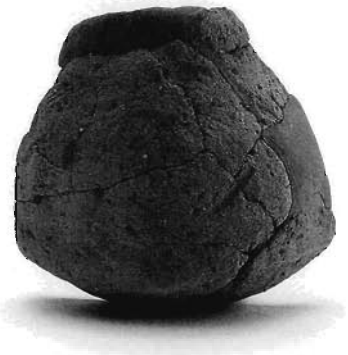
90

94



92　93

97

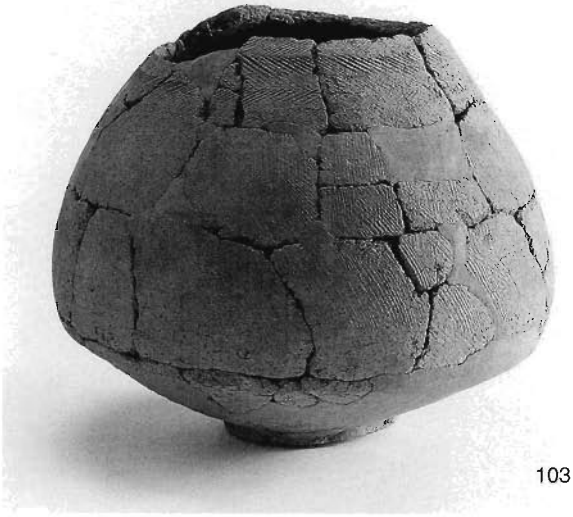


95

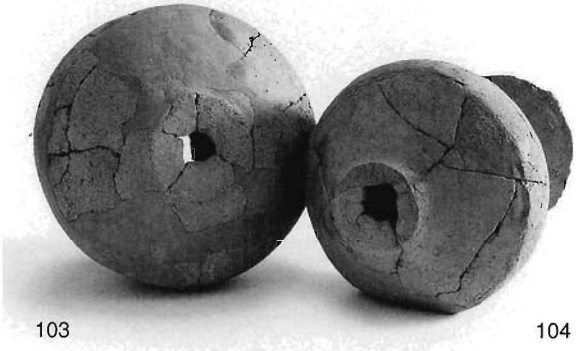
100

出土土器8

図版36　文殊堂遺跡


103

104


103　104

107

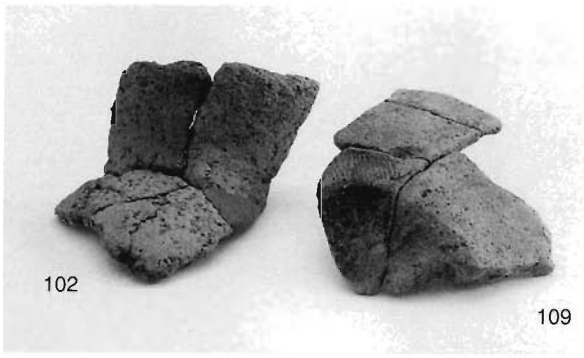
108

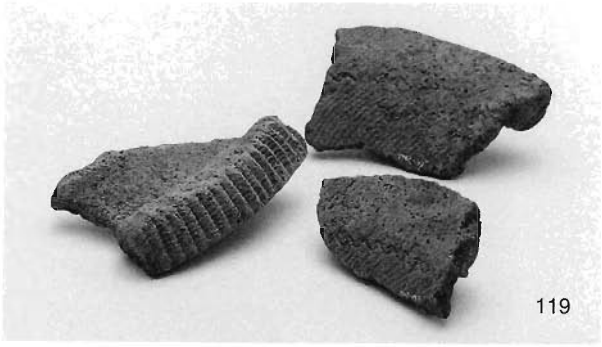
115

113

114

出土土器9

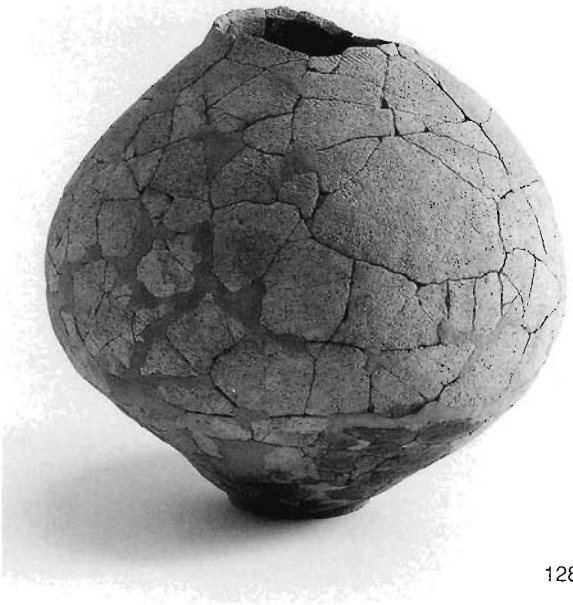




出土土器10

図版38　文殊堂遺跡

127



128

128

132

出土土器11

130

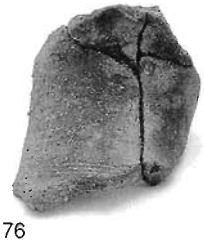
133

131

出土土器12

図版40　文殊堂遺跡

179

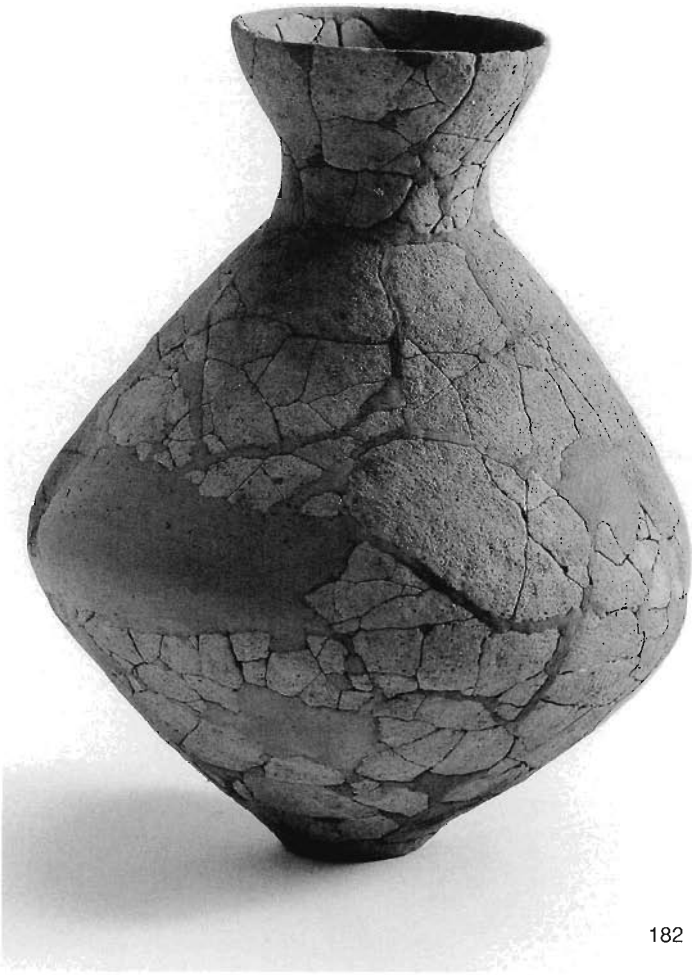


176

178

177

175

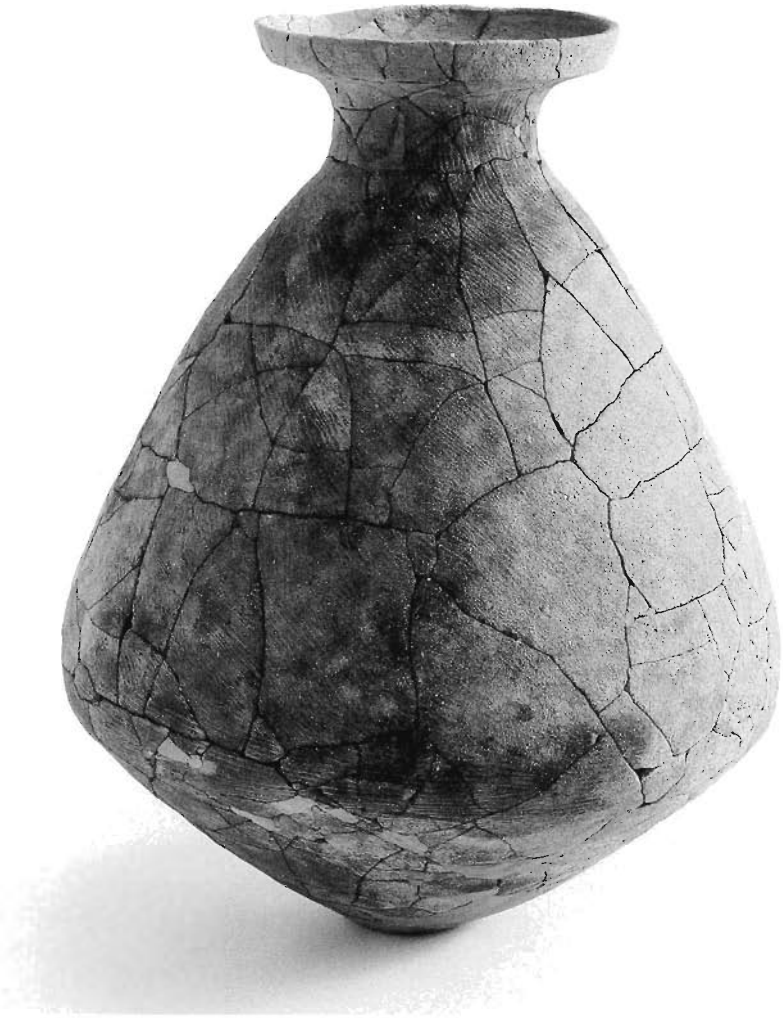


182

180

181

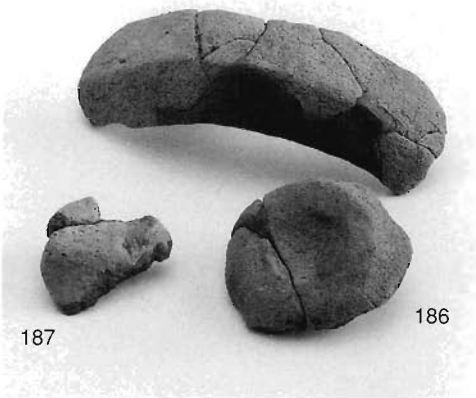
出土土器13



183

184

185



186

187

出土土器14

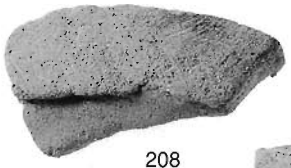
図版42　文殊堂遺跡

188

203

205

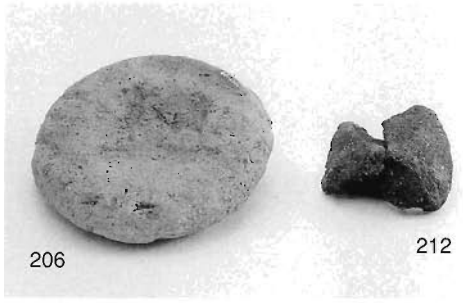
204


208

207

211

213


206

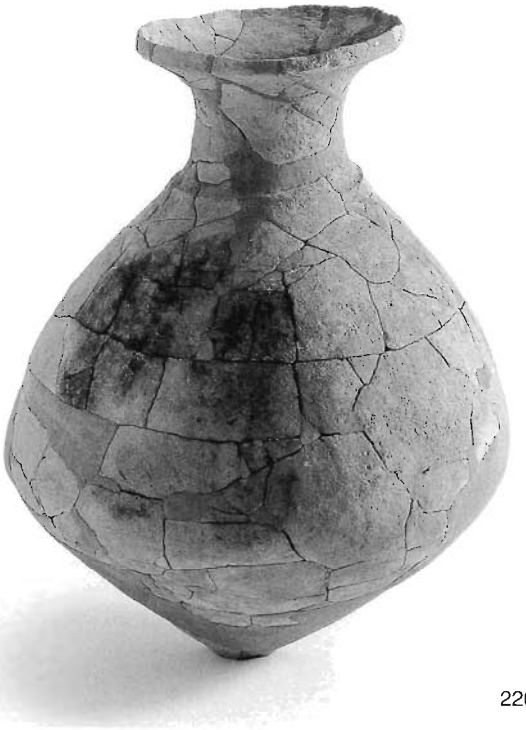
212

209

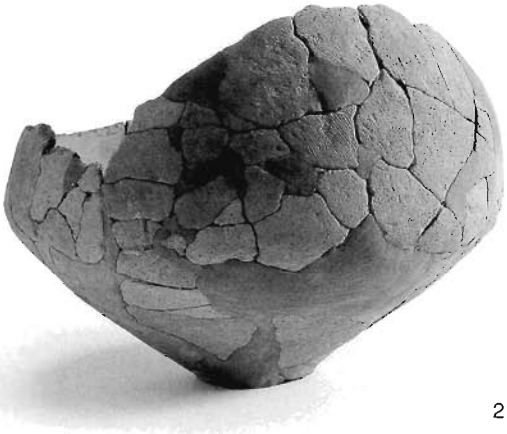
210

出土土器15

214



220



216

218

215

219

217

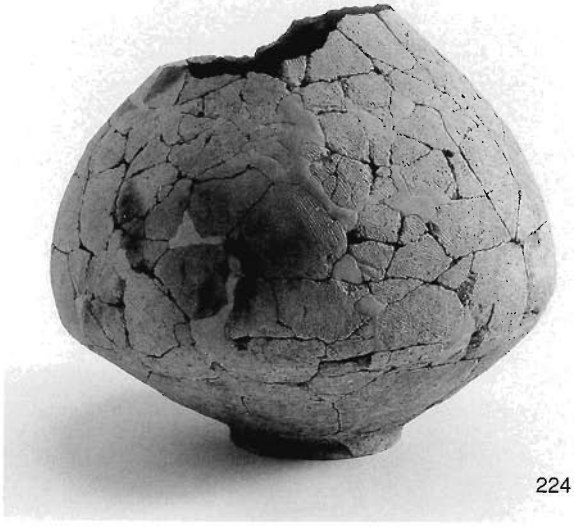
出土土器16

図版44　文殊堂遺跡

222

223

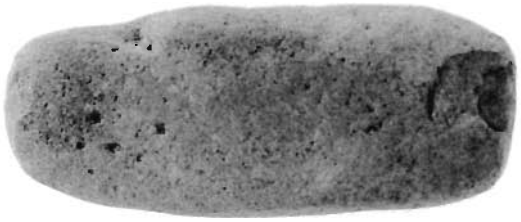
221



224

出土土器17

3

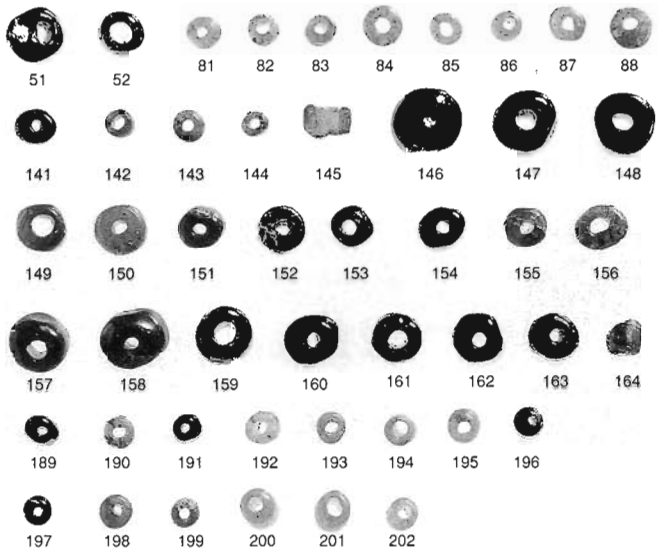


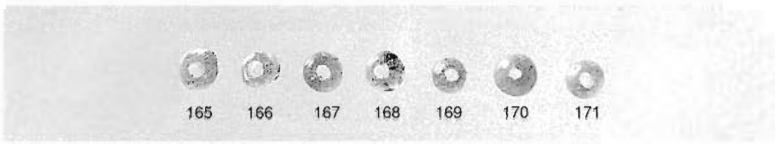
134

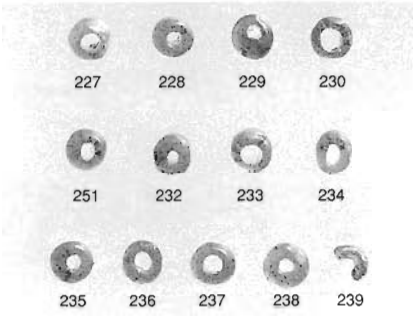
出土石器1

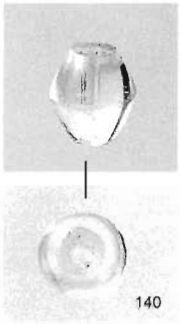
225

出土石器2

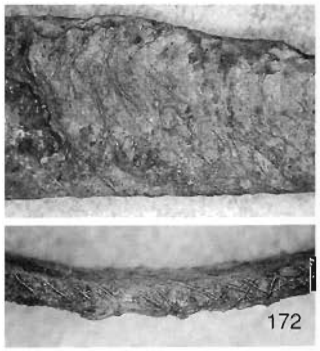






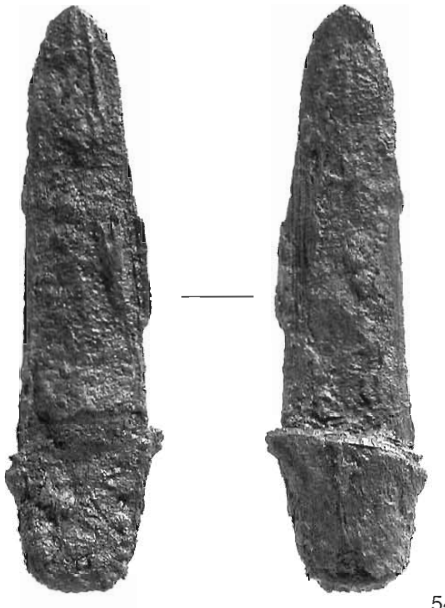


出土玉類

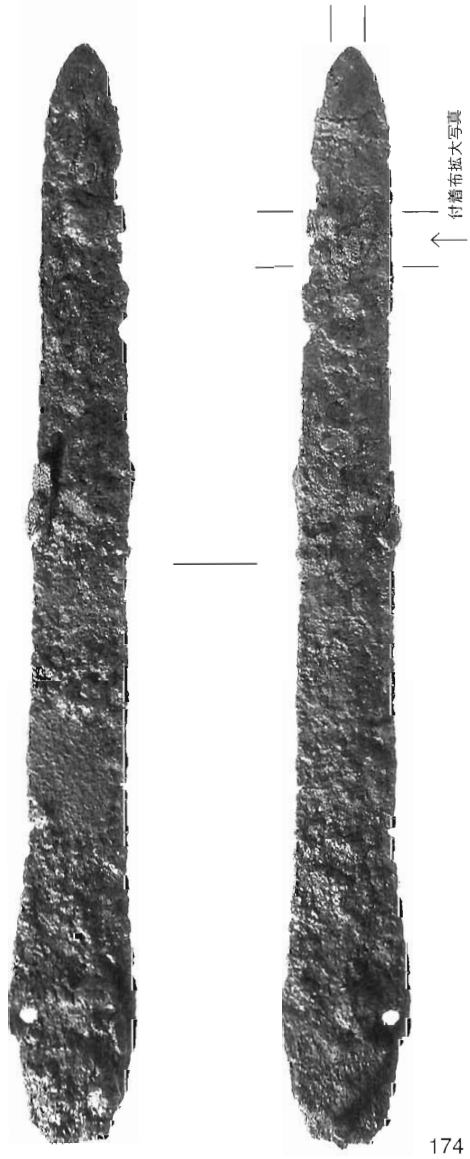


出土金属器1

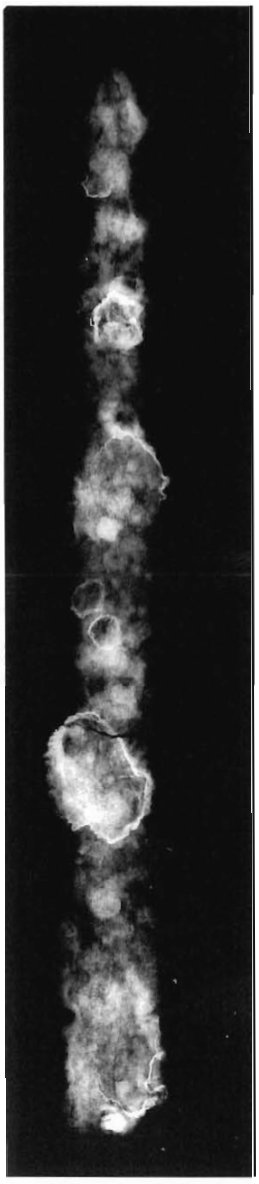
図版46　文殊堂遺跡



54



174

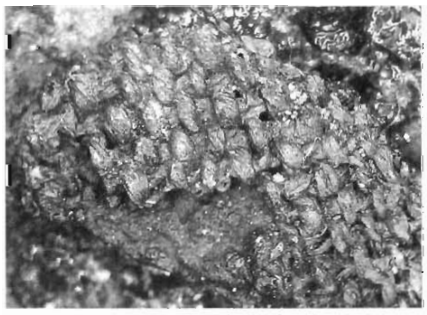


出土金属器2

226

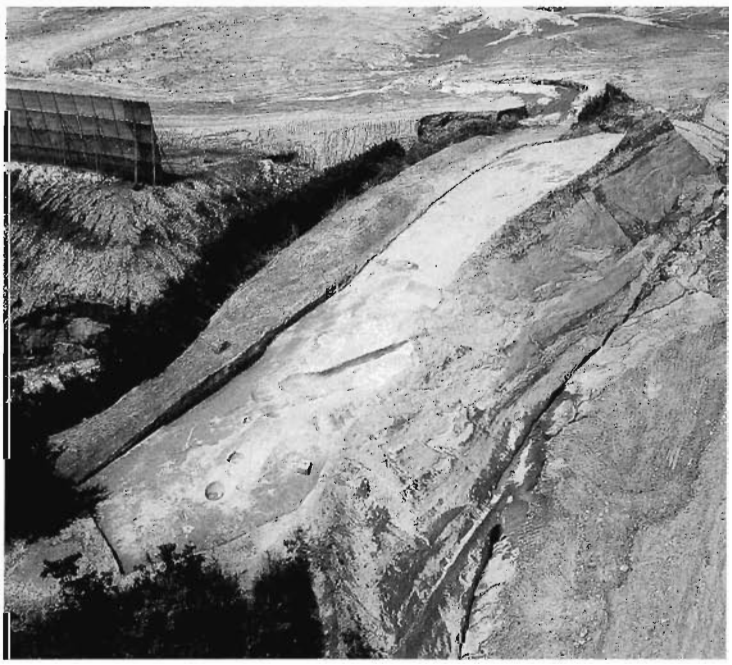
54

174

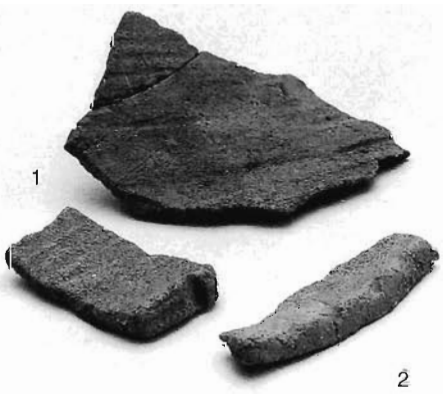


174付着布　×10

1 宇藤蓮台遺跡全景（北東から）



2　3区全景（南東から）



3　出土遺物

図版48　フケ遺跡

1 フケ遺跡全景（北から）

2 3区全景（北から）

1　H群：1号周溝墓（西から）

2　SF04土器出土状況（南から）

3　SF05土器出土状況（北から）

図版50　フケ遺跡

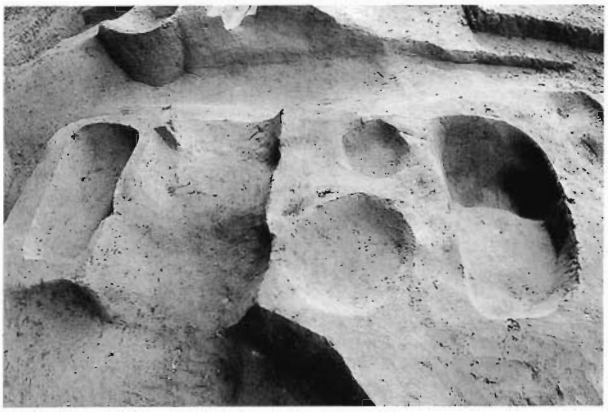
1 SD02・SD03（北から）

2 SD03土器出土状況（北から）

3 SD04土器出土状況（北から）

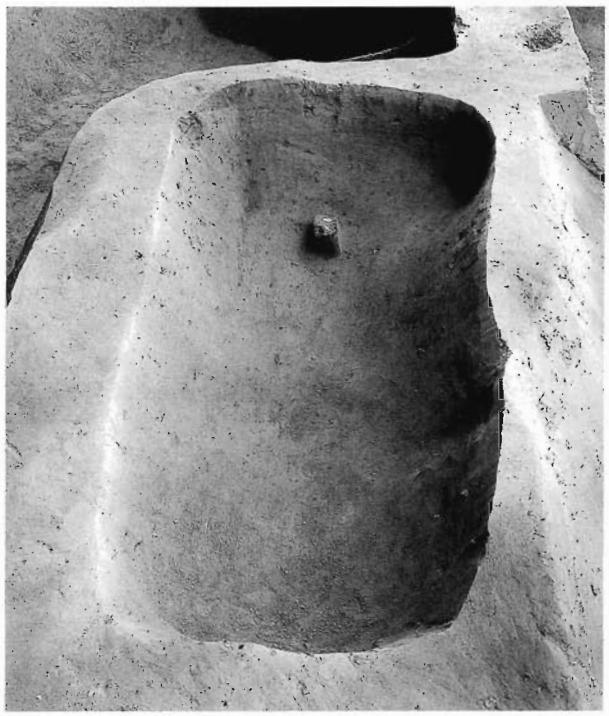
4 SF13土器出土状況（北から）

5 H群東半部（SF01～SF09）（東から）



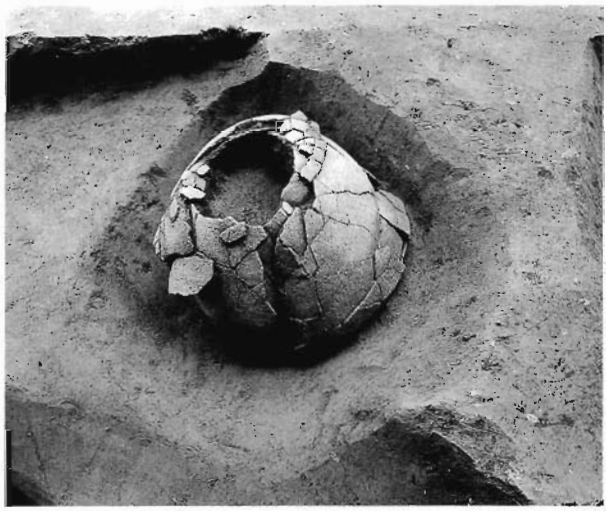
1 SF13～SF15・SF18（東から）

2 SF13銅鏃出土状況（北から）



3 SF13（東から）

4 SF18土器棺墓（北西から）



5 SF19土器棺墓（南から）

6 SF20土器棺墓（西から）

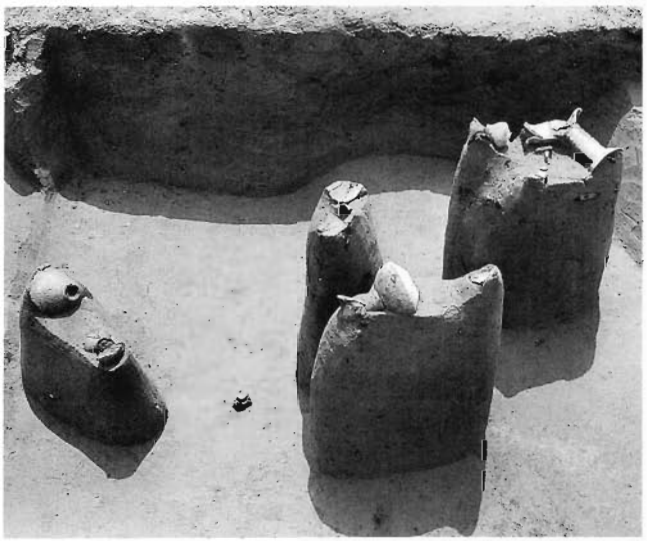
7 SF20土器棺墓（南から）

図版52　フケ遺跡

1 4区全景（北東から）

2 4区全景（南東から）

1　J群：2号周溝墓（南東から）



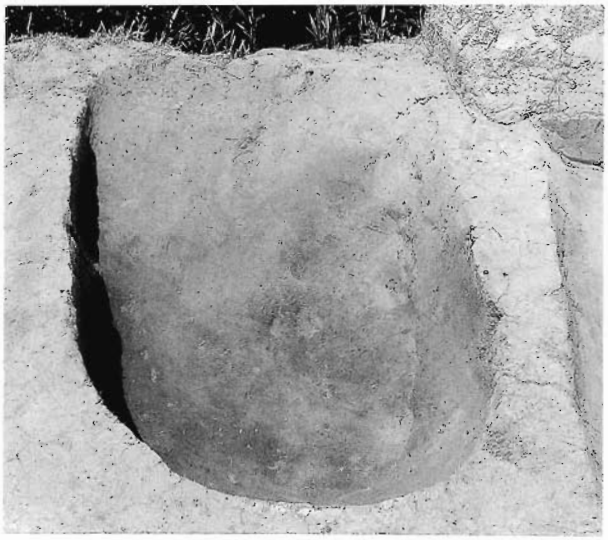
2　SF31・SD10 土器出土状況 1（北東から）

3　SF31・SD10 土器出土状況 2（北から）

図版54　フケ遺跡

1 SF30検出状況（南東から）

2 SF30完掘状況（南東から）



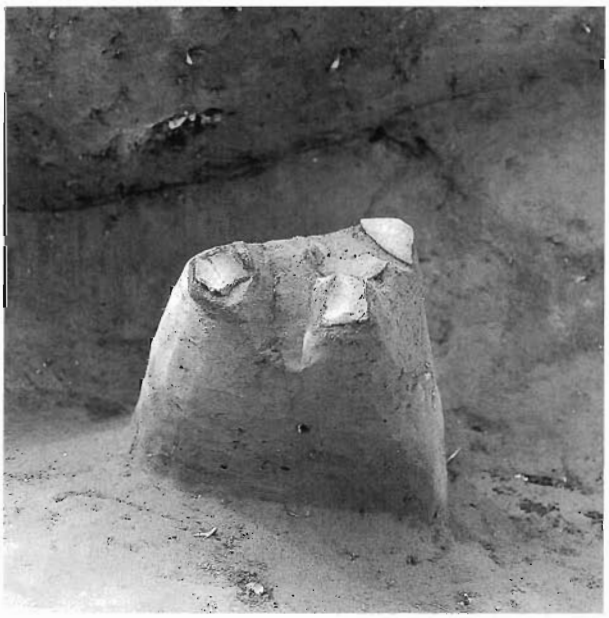
3 SF29（北東から）

4 SF31（北東から）

5 SF33土器棺墓（南東から）

6 K・L群：3・4号周溝墓（北西から）

1　K・L群：3・4号周溝墓（南東から）



2　SD13土器出土状況1（南東から）

3　SD13土器出土状況2（南東から）

図版56　フケ遺跡

1 SF35検出状況（南東から）

2 SF35完掘状況（南東から）

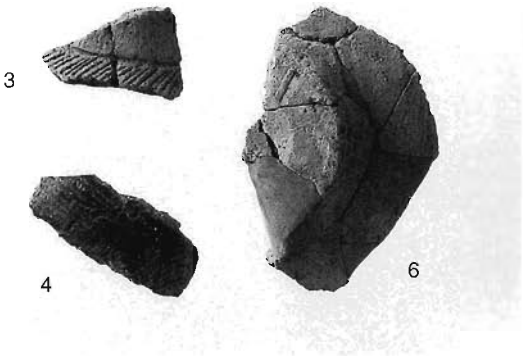
3 5区全景（北から）

1

2

9

8


3
4
6

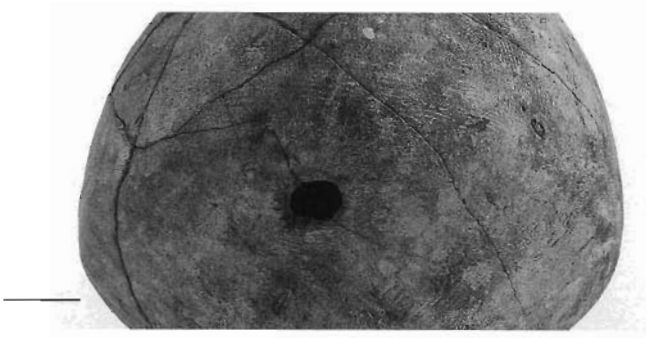
10

7

出土土器1

図版58　フケ遺跡

11



18

12

13

16

17

出土土器2

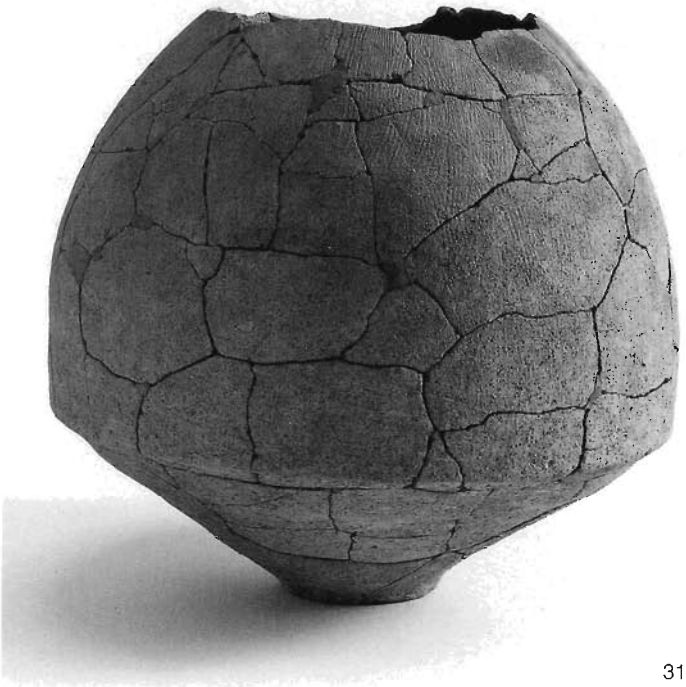
23　24

21

20

30

25



31

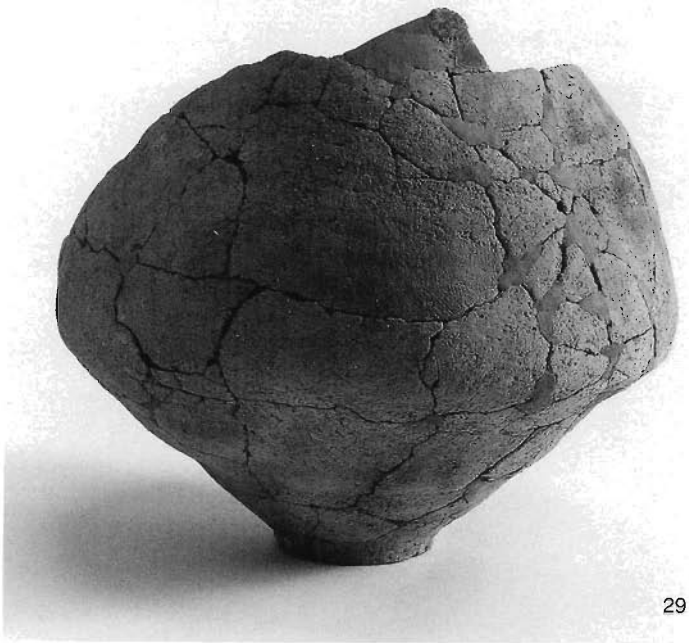
26

出土土器3

図版60　フケ遺跡

27

28



29

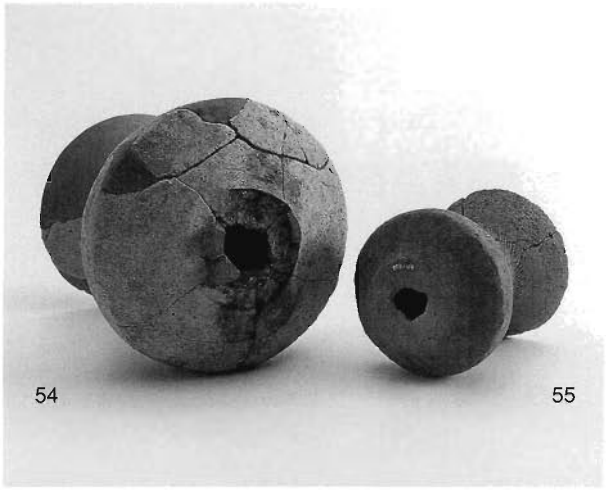
32

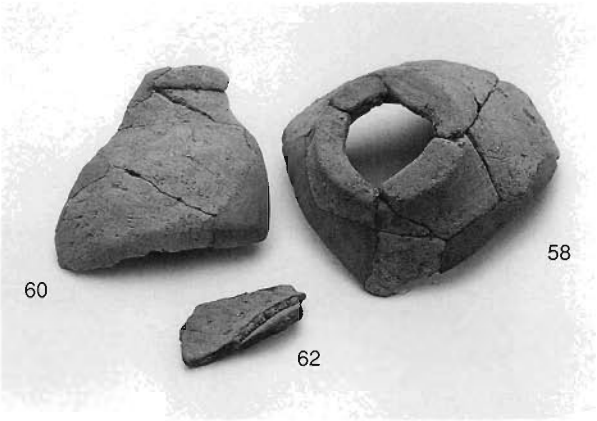
33

37

35　36

出土土器4



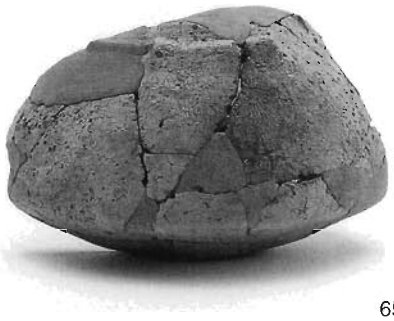


出土土器5

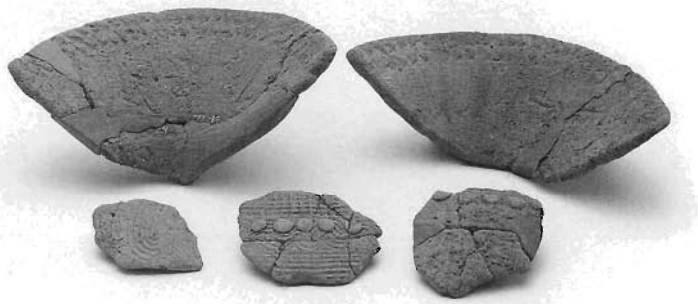
図版62　フケ遺跡

67

68



65



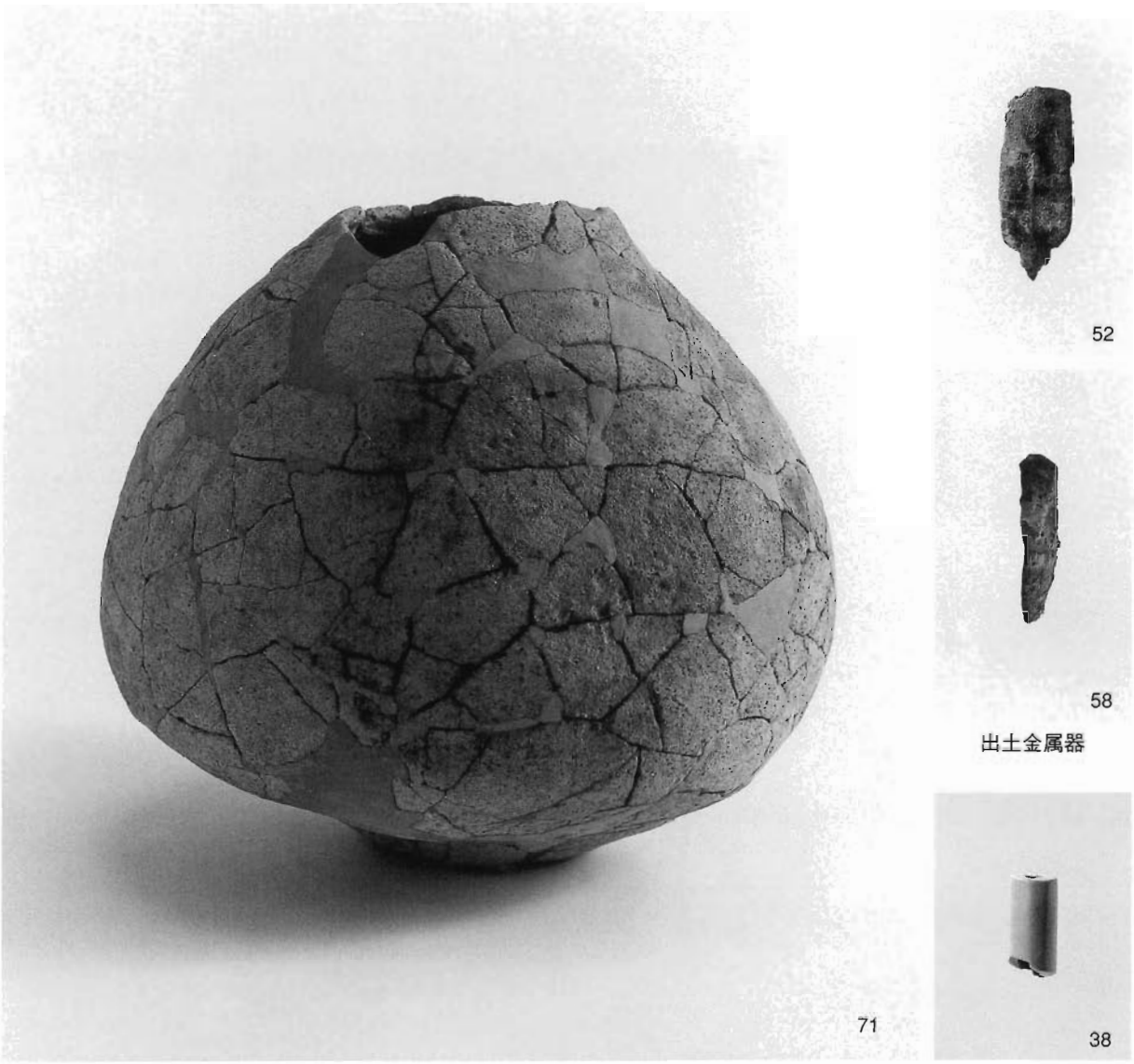
63

66

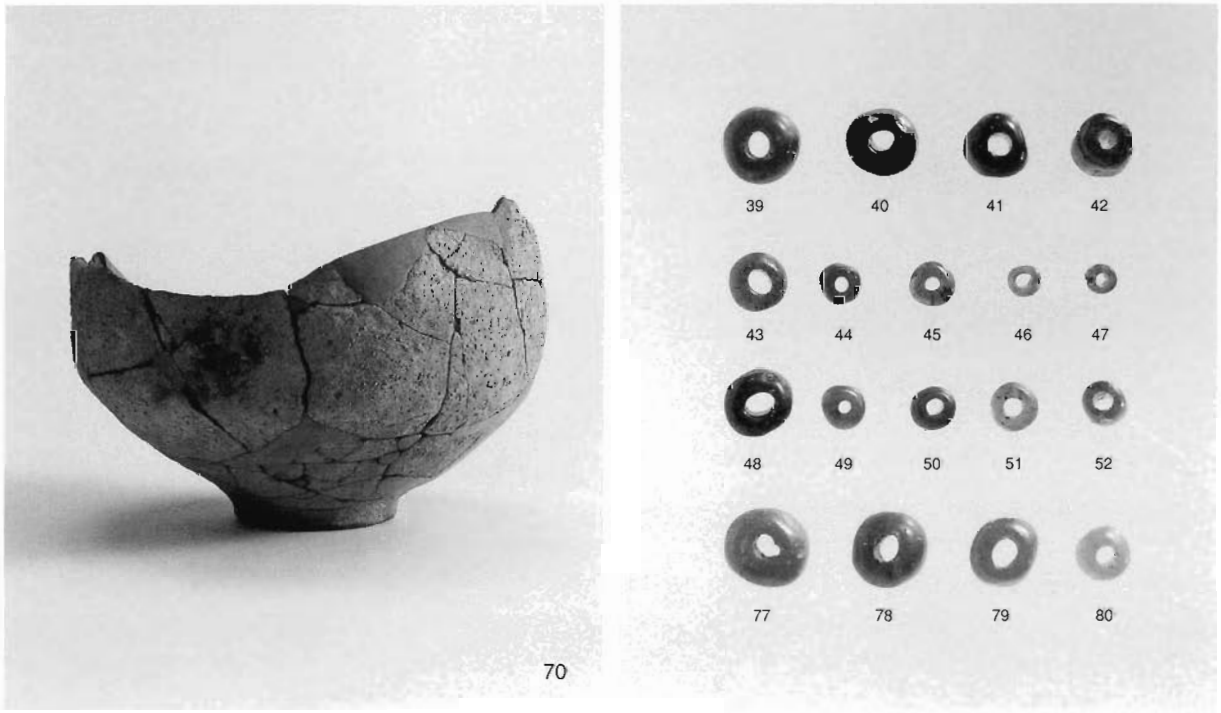
73

69

出土土器6



出土金属器



出土土器7

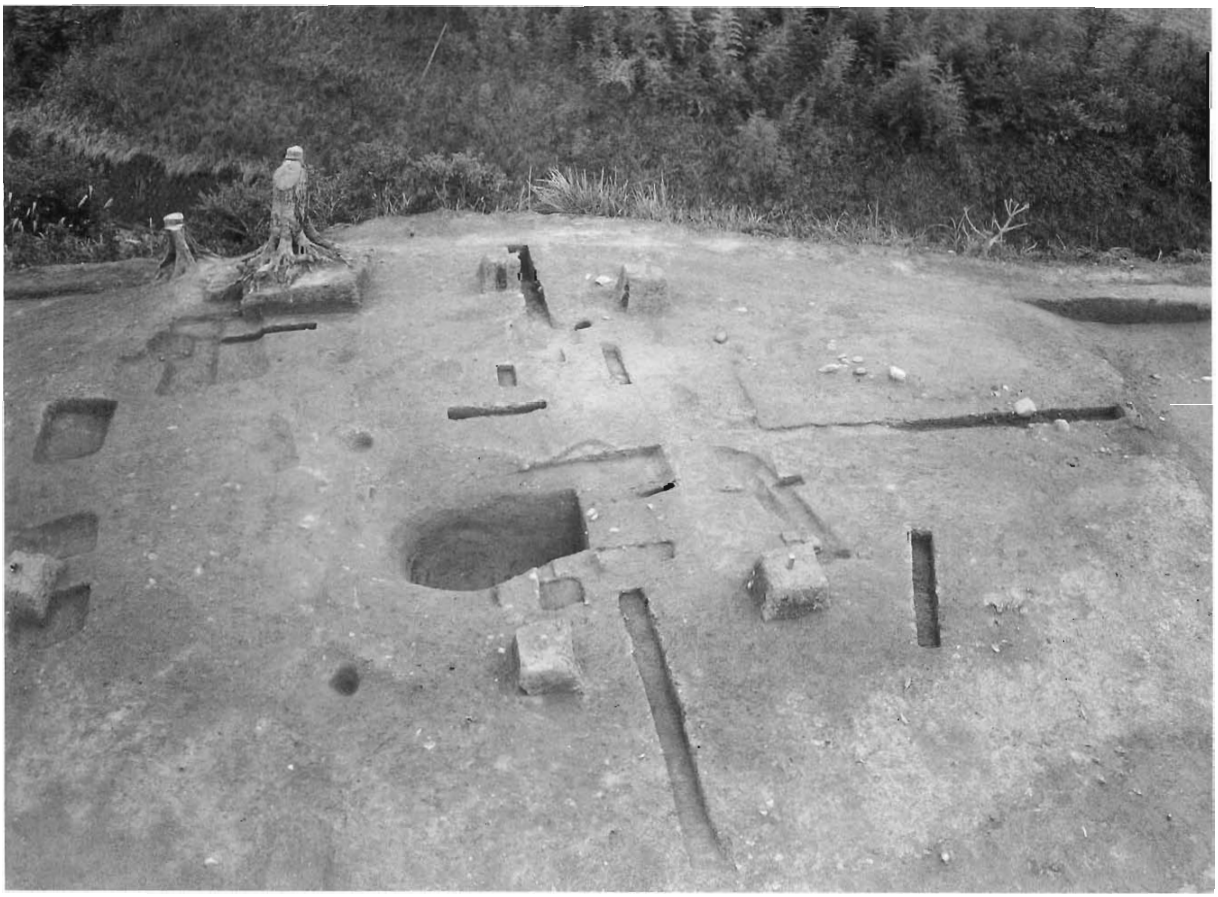
出土玉類

図版64　林遺跡

1　林遺跡全景（北から）

2　1区全景（南西から）

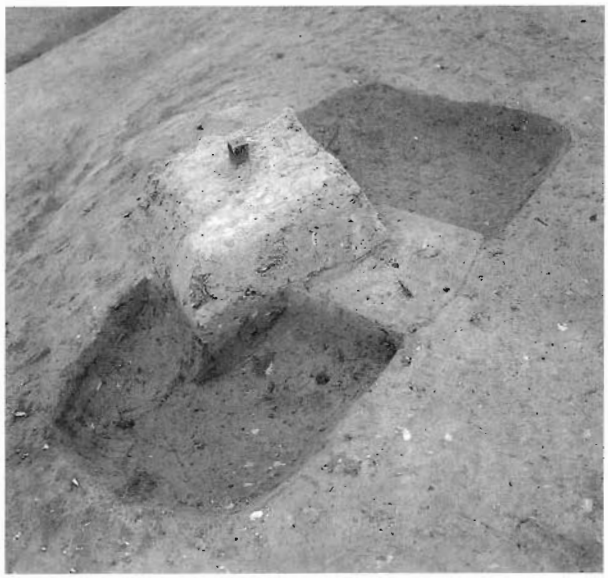
1　A群：1号周溝墓（南西から）



2　B群（西から）

図版66　林遺跡

1 SF01（南東から）



2 SF05（南西から）

3 SF06（南西から）

4　SF07～SF09（西から）

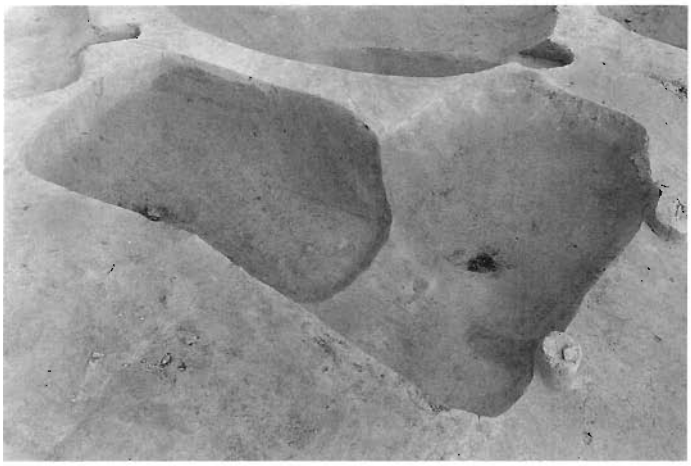
5 SF13（南から）

6 SF10・SF11（西から）

1　2区全景（北西から）

2　SF15（南西から）

3　SF17（南西から）



4　SF18・SF19（南西から）

5　SF20（南西から）

図版68　林遺跡

1　3区全景（南西から）

2　3区全景（俯瞰）

1　D・E群（俯瞰）

2　E群：2号周溝墓（俯瞰）

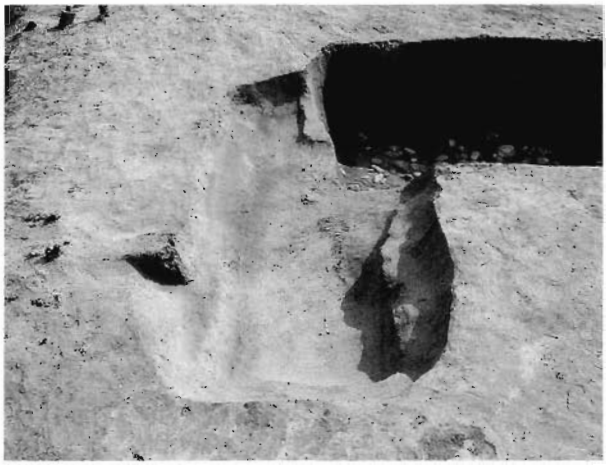
図版70　林遺跡

1　E群：2号周溝墓（北東から）

2　SD09土器出土状況（北から）

3　SF22（北西から）

4　SF24（北から）



5　SF25（東から）

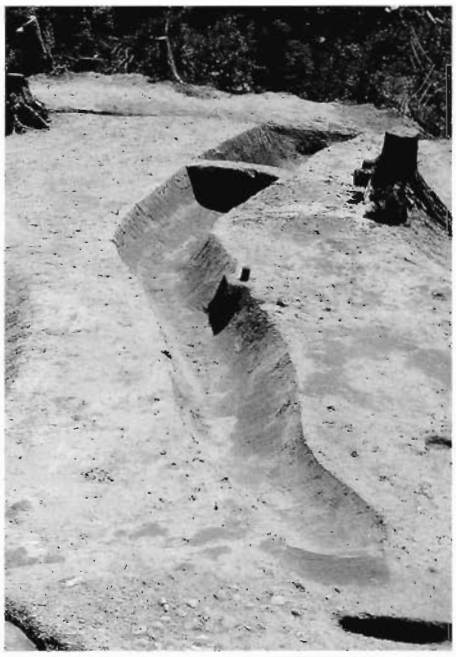
1 SD08・SD09（北東から）

2 SF23（北から）

3 SF21（東から）

4 SF28（西から）

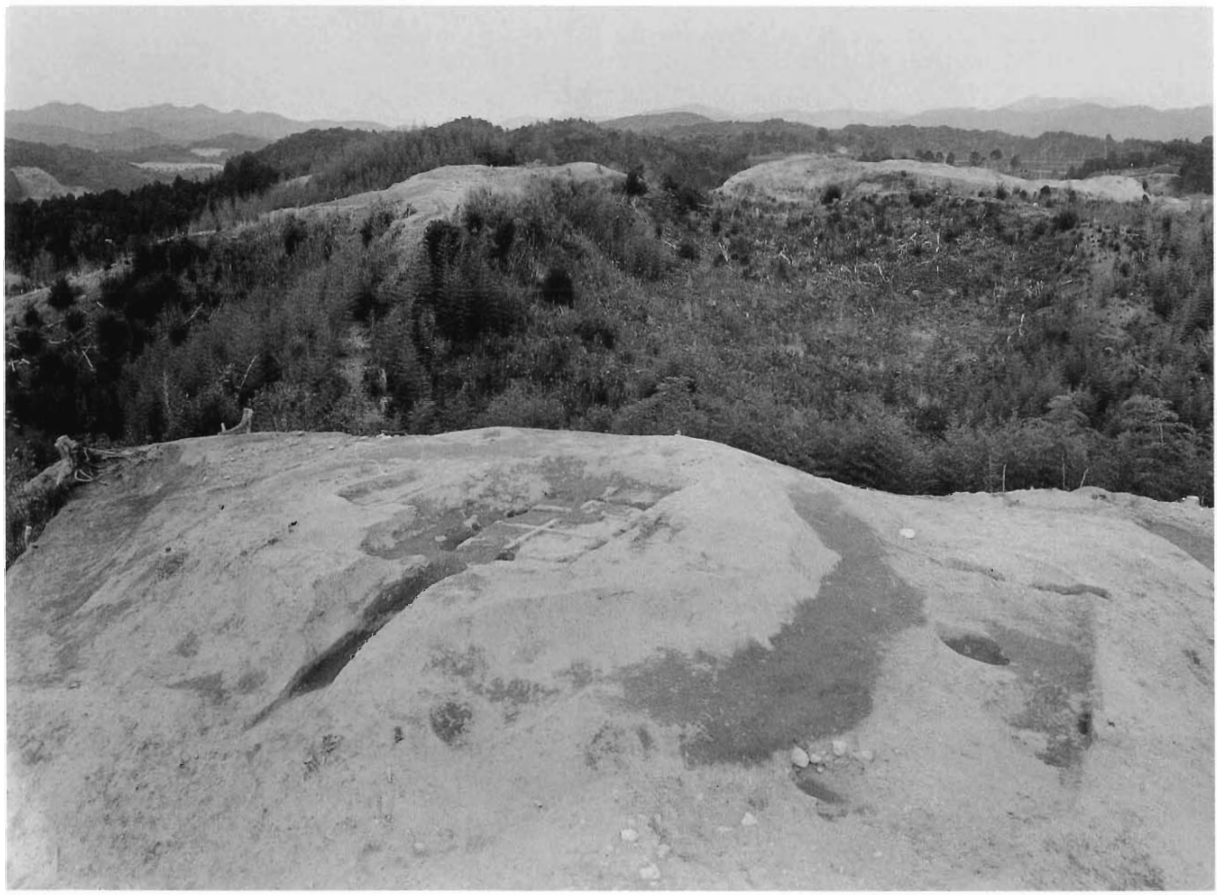
5 SF26・SF27（東から）



6 SD05（北から）

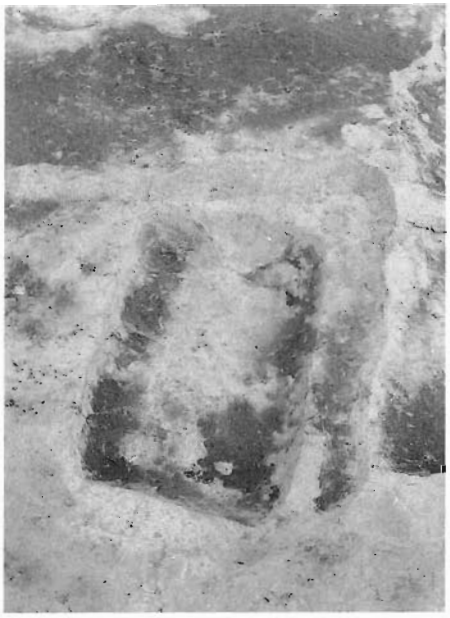
図版72　林遺跡

1　4区全景（北西から）



2　F群：3号周溝墓（南西から）

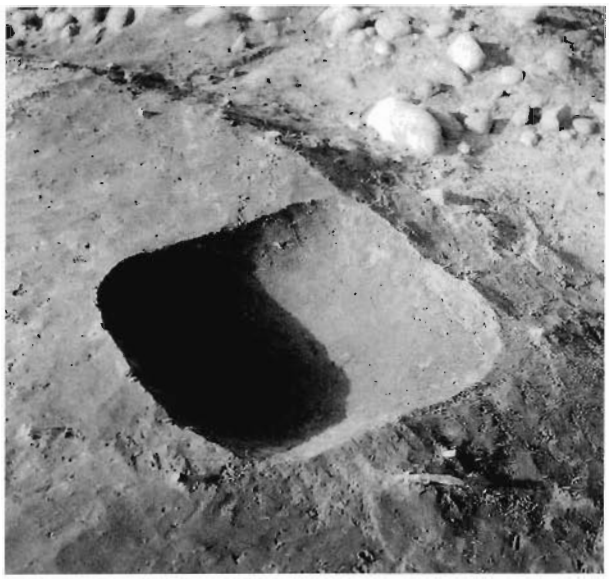
1　F群：3号周溝墓（南から）



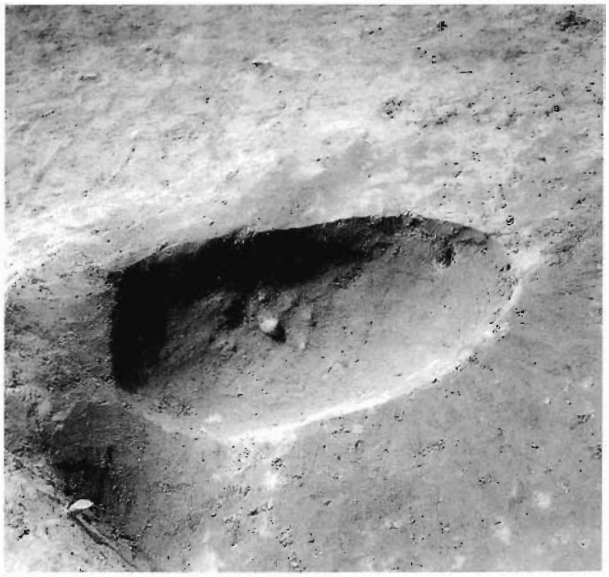
2　SF29（南西から）

3　SF33～SF35、SD15・SD17（南東から）

図版74　林遺跡



1 SF30（南東から）



2 SF32（東から）

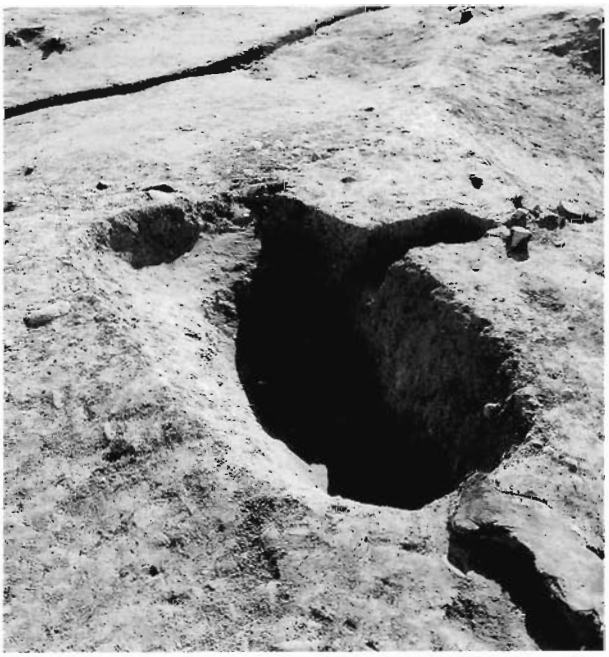
3 SF33（南東から）

4 SF34（南東から）

5 SF35（南から）

6 SF36土器棺墓（南東から）

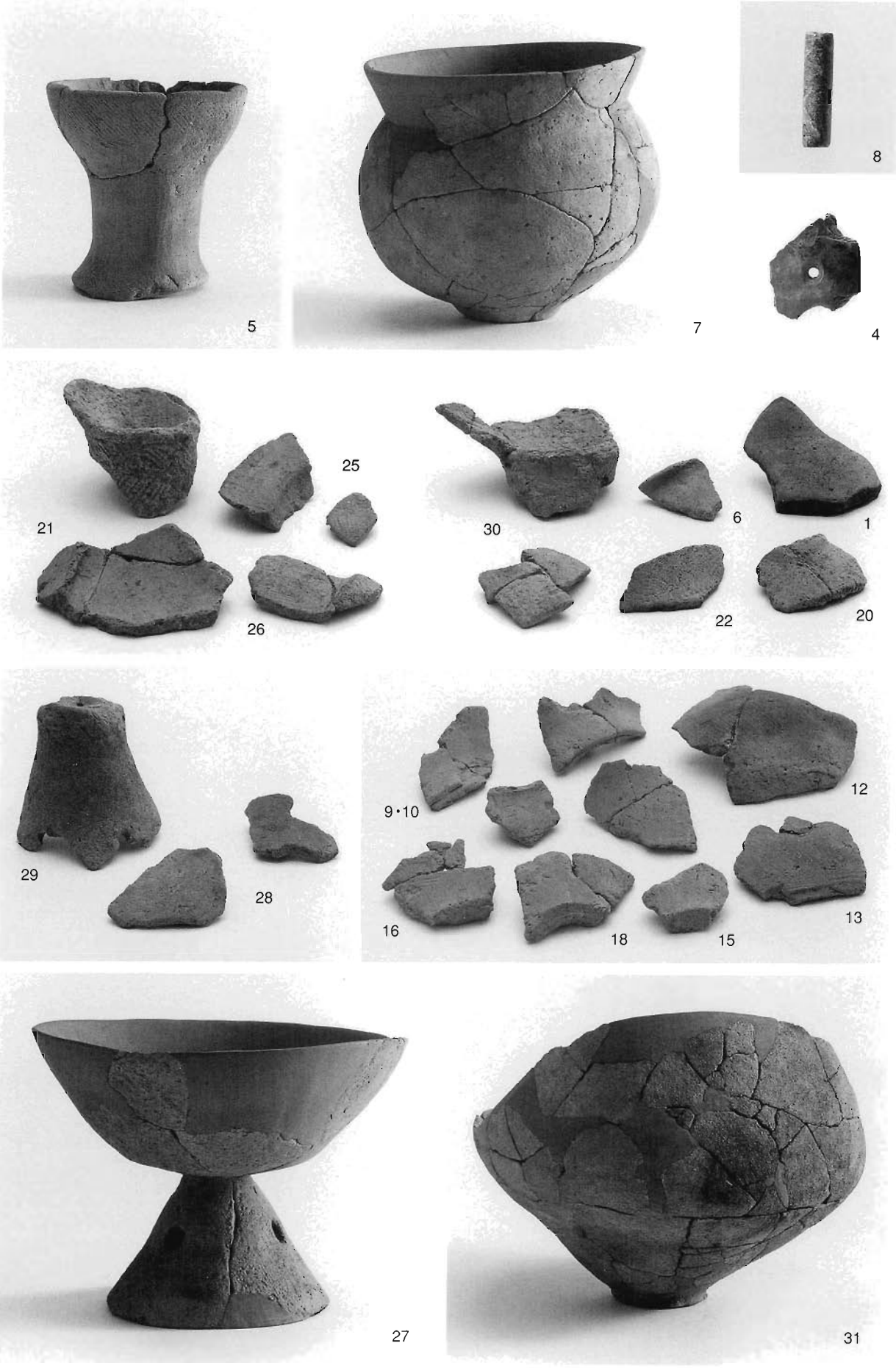
1　G群：4号周溝墓（俯瞰）



2　SF39（北西から）

3　SF40（北西から）

図版76　林遺跡



出土遺物

報告書抄録

ふりがな	もりまちえんでんきゅうりょうのいせき
書名	森町円田丘陵の遺跡
副書名	第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	森町－2
シリーズ名	静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告
シリーズ番号	第167集
編著者名	田村隆太郎
編集機関	財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
所在地	〒422-8002　静岡県静岡市駿河区谷田23-20　TEL　054-262-4261（代）
発行年月日	2006年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		経緯度 （世界測地系）		調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
もんじゅどういせき 文殊堂遺跡	しずおかけんしゅうちぐん 静岡県周智郡 もりまちえんでん 森町円田	22461	49	34° 49′ 34″	137° 54′ 26″	199904～200004 200102～200103	6,000㎡	道路建設（第二東名建設に伴う埋蔵文化財発掘調査）
うとうれんだいいせき 宇藤蓮台遺跡	同上 森町円田	22461		34° 49′ 28″	137° 54′ 22″	199910～199912 200304～200306	1,440㎡	
ふけいせき フケ遺跡	同上 森町円田	22461	252	34° 49′ 23″	137° 54′ 21″	199904～199906	1,050㎡	
はやしいせき 林遺跡	同上 もりまちいちのみや 森町一宮	22461	122	34° 49′ 38″	137° 54′ 17″	199906～199908 200002～200003 200007～200102	3,890㎡	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
文殊堂遺跡	その他	縄文中期	落し穴3	縄文土器、石鏃1、蔵石1	丘陵上の狩猟地か
	墓	弥生中期～後期	土坑116、小穴9、溝25（周溝墓8、土坑墓76、土器棺墓21）	弥生土器、石鏃1、鉄剣3、鉄鏃1、銅鏃1、銅釧2、管玉5、水晶製算盤玉1、ガラス小玉68	弥生中期後葉～古墳前期の丘陵上の墓域。鉄剣・銅釧などの副葬品の出土あり。
宇藤蓮台遺跡	散布地	弥生中期		弥生土器	
フケ遺跡	墓	弥生中期～後期	土坑37、小穴1、溝13（周溝墓4、土坑墓22、土器棺墓5）	弥生土器、銅鏃2、管玉1、ガラス小玉18	
林遺跡	墓	弥生後期～古墳前期	土坑40、小穴5、溝25（周溝墓4、土坑墓32、土器棺墓1）	弥生土器、土師器、石鏃1、管玉1、ガラス小玉1	

要約

森町円田のやせた丘陵上に立地する遺跡群である。縄文時代の遺構・遺物も少量あるが、弥生時代中期後葉～古墳時代前期前半の墓域を主とする。東海地方に多い方形周溝墓群とは様相を異にしており、方形周溝墓、不整円形の周溝墓、周溝のない土坑墓・土器棺墓群といった様々な遺構群（墓群）が各所に分かれて展開している。遺物では、多くの供献土器のほかに鉄剣・銅釧といった東日本で比較的多い副葬品の出土が認められている。

文殊堂遺跡・宇藤蓮台遺跡・林遺跡では、古墳時代中後期の古墳群や中世墓も認められている。この古墳群形成以降の調査成果については、文殊堂古墳群・宇藤蓮台古墳群・林古墳群として本書とは別に報告する。

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第167集

森町円田丘陵の遺跡

第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

森町－2

平成18年3月31日

編集・発行　財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
〒422-8002　静岡県静岡市駿河区谷田23-20
TEL　(054)262-4261（代）
FAX　(054)262-4266
印　刷　所　中部印刷株式会社
静岡県浜松市東若林町1516-2
TEL　(053)441-2431（代）